

---

# BLIND + LOVE

安部由理野

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

B L I N D + L O V E

### 【Nコード】

N 4 0 1 3 F

### 【作者名】

安部由理野

### 【あらすじ】

ヒストリカル・ロマン。19世紀ビクトリア朝の繁栄から忘れられたようなウェールズの寒村で、小学校校長の末娘サラはジェームズと出会う。目が悪いサラは、町一番の美形だがワルのジェームズに一目でのぼせてしまうが、ジェームズはサラを自分の復讐の道具に利用しようと企む。そしてジェームズは、純真なサラに次第次第に引かれ、そして思わぬ悲劇が二人を引き裂く。番外編3編あり。番外編1は約8年後の、ジェームズの妹メアリーと親友ドリュウの愛の物語。番外編2は約11年後、サラとサラとジェームズとの間

にできたボーイソプラノ歌手の息子シヨーンの物語。番外編3は、伯爵を愛してしまったサラ。出奔したが、迎えに来たのは…。

## 運命ゝ出会いは雨ゝ 1

BLIND + LOVE

運命ゝ出会いは雨ゝ

1

サラは忘れることが出来なかった、あの瞳を……。

薄紫でもの問いたげで、なおかつ意思の輝きを秘めた瞳。その瞳でじっと見つめられたとき、サラは生まれて初めて、激しく艶<sup>なまめ</sup>かしい動揺を味わった。それが初恋だと分かるまで、数日は経っていた。自室の曇りガラスに付いた露を手で拭い、じっと外を見つめつつ、今更ながらあの瞳の色、アメジストのような色を思い出し、そして自分に光が戻ったことを再び感謝した。

3

「生きているって良いことだった。神様、ありがとう！ だからもう一度あの人に会わせて下さい。これは贅沢なお願いなんですか？」  
恐らく光を再び得て見る事が出来た中でも、最も美しい“色彩”が、あの瞳の色だった。ブルーでもなく、グレーでもない、アクアマリンでもない。そうだ、ちょうどアメジストのようだったのかも……と、眼鏡をかけた小柄なサラはそう思い出す。

もしも再び会うことができたときには、確かに、もっとあの瞳を見つめることが出来るかもしれない。もっと長く、真剣に……。

カーディフから西へ馬車で三時間余りの、どうにも冴えない一つの町がドーセットである。

郊外にはローマ時代からの古い遺跡がある。何かの祭壇の跡なのだろうか？ 渦巻き文様がその遺跡の石壁に掘り込まれてあった。長い風雪にその文様も幾らか薄れてはいたが、そこはドルイド教の寺院跡の遺跡だという説が、流布されていた。それほど古い遺跡と同じように、ドーセットも古い町だった。

そのドーセットの北にある小学校の直ぐ脇の官舎に、サラとその一家が住んでいた。

サラの父は校長で、レスターからやって来た生粋のイングランド人だった。彼は普段は表向き、温厚な人柄だと知られていた人物だったが、本心は冷酷で厳しかった。けれどもサラだけは溺愛していたのだ……と少なくともその日までサラは思い込んでいた。

けれどもあの雨の日、サラがアメジスト色の瞳の若者に抱かれるようにして、家に戻って来た時、父がなぜあんなにも顔色を変えてしまったのか、サラには理解できなかった。恐らく相手が気に入らなかったのかもしれない。父はその若者を見ると、怒りを露わにしたのだ。

「お嬢さんが……」と相手もやつとの思いで言い始めた。「お嬢さんが雨の中、泥だらけになって道端に倒れこんでいたのです」

彼は連れて来た理由を述べた。その途端、サラの父オーウェル校長はその場で卒倒するのではないかと言うほど、顔面蒼白になった。その場にはオーウェル夫人も座っていた。

「校長先生。俺はジェームズです。ジェームズ・エドワーズ。お久しぶりです」

とジェームズはこの辺りでは当たり前すぎるほど、平凡な名前を告げた。年の頃は22か23くらいに見えた。この辺り特有の英語の訛り、特有の顔立ち……。けれどもどこか違っている。それが何かは分からなかったものの、サラはただシクシク泣いているだけだった。泥跳ねにまみれ、眼鏡の片方のレンズは割れており、赤毛の髪

はクシャクシャだった。

「ど、どうしたんだ、サラ!？」

珍しくうるたえた様な父の声がする。

「アン・マリーと喧嘩して、それから別れて、家を飛び出して一人で帰ろうとして……それから……」

サラが途切れ途切れに答えると、

「一人で帰ろうとしてだって!？ 何と馬鹿なことを!」と罵声に近い声が飛んだ。

「じゃ俺はこれで」とジェームズは素っ気無く言っ、戻ろうとした。

「エドワーズさん、お茶でも……」

「いえ、結構です、奥さん」とジェームズは、おずおずと申し入れたオーウェル夫人にきっぱりと断りを入れた。その時オーウェル夫人は、この若者の水滴に濡れてはいるがそれでも際立った美しさに見とれていたのだが、ハッとして何かに気付いた。

「エドワーズ……エドワーズ? 以前あなたは確か、ここ……」

「失礼、奥さん。それじゃ、お大事に」

全てを言わず、ジェームズはピシャリと言ったのけると、さつと踵を返した。一秒でもここには居たくはないといった様子だった。夫人は今やはつきりと思い出していた。

あれはもう10年近く昔のことだ。卒業式の日、ジェームズ・M・エドワーズは途中から抜け出し、とうとう式には戻って来なかったのだ!

13歳だったジェームズは印象的な生徒だった。繊細で美しく、頭も良かった。何もしないのに人目を引くといったタイプの少年だったが、言動もひどく変ってはいた。

今日の前のジェームズは、昔の面影を引きずり、成長しても相変

わらず人目を引いてはいるが、本人はそのことを毛嫌いしているような不貞腐れた趣が漂っていた。

「あの」と言いかける夫人を無視すると、ジェームズは雨の中、スタスタと荷馬車に乗り込み、後も振り返らずに去って行った。

「あの子が変わったわ」とオーウェル夫人はつぶやく。

「誰がかね？」とオーウェル氏が不愉快そうに畳み掛ける。

「エドワーズよ。以前よりも冷酷な感じがする。表情に乏セシル、無愛想で。昔はそりや可愛かったのに」

お茶を入れ、スコーンをかじりながら、オーウェル夫人が遠い昔を覗く目つきになった。

「あいつは昔頃から冷酷な奴だった。見た目とは裏腹に、ずる賢くて本当の友人を持つことも無かった。そういう奴だったんだ。見かけは天使で中身は悪魔だ」

オーウェル氏はお茶をすすりながら、吐き捨てるように言う。

「でも成績は良かったわ。“あの”不幸が無ければ！不幸は子供を駄目にしてしまうのよ」

「不幸な子供達は、この世にはもつともつと居るもんだよ。いいかい！あいつの話はもうするな！不愉快だ。お茶がまずくなる」

オーウェル氏は怒鳴り散らしたが、夫人はただ静かに首を振っただけだった。夫がそんなにも怒り狂う理由が、夫人には理解できなかったからだ。

“あの女の子がサラ・オーウェルだなんて、どうして分かる！？知っていたらもちろん助けるどころか、逆にわざと馬車を寄せて、思い切り泥を撥ねかけてやったのに！”

ジェームズは荷馬車の中で舌打ちしていた。

今の今まで、ジェームズはサラ・オーウェルこそが自分の将来を



台無しにしたのだと信じていたし、今まで会った事はなかったものの、深く恨んでいた。それなのに、よりもよって、彼女を助けてしまったとはとんだお笑い種だ。全く！ ドジばかりさ……。

ジェームズは、このまま真つ直ぐに自分の寝場所であり仕事場でも有るギルフォード農場に帰るのが嫌になり、町外れの『山猫荘』というパブに立ち寄った。ドーセットの町にはこの『山猫荘』と『グリーン・テラス』と言う二軒のパブがあったが、当然ながら『山猫荘』の方がずっと下品で、名前の通りワイルドだった。

町や周辺の村々の男達は、このどちらかのパブにたむろしており、どちらかの側にいつも居た。

ジェームズが入って行くと、如何にも下卑て痩せた老女が煙草を吹かし、ニヤニヤしながら挨拶を送ってきた。

「こんばんは、ジェームズ。今日は何にする？ 黒ビール？ それとも別の……」

「シェリー」とジェームズは素つ氣無く注文した。

「シェリー？ 珍しいこと！ 何かあったの？ ま、聞かないけどさ」

ジェームズがシェリーのコップを持って奥に進むと、案の定いつもの場所に二人の仲間達が既に来ていた。ボブと“うすのろ”ニッキーだ。

「やあ、ジェームズ」

そう呼びかけた人のよさそうな、如何にも田舎っぽいそばかすだらけの顔立ちのボブとは、数年前町の警察の牢で一緒になって以来仲良くなったのだ。そして“うすのろ”ニッキーは、ボブのダチだった。

ここにもう一人、石工のドリューが居るといつもの四人組になるのだが、ドリューは今日は来ていないらしい。

「どうした、ジェームズ？　びしょ濡れじゃないか。それにその糞面白くも無い仏頂面はよう？　せつかくの色男ぶりが台無しだぜ」

呼びかけたボブの側に、ジェームズは頭を振りながら座り込んだ。黒っぽい髪が雨に濡れ、額に張り付いていた。座り込むと、どつとけるさが押し寄せてくる。彼は苦々しく微笑むと、ぐいっとシェリーを開けた。

「今日俺、誰を拾ったと思う？　この土砂降りの雨の中、シクシク泣きながら道端にうずくまっていた女の子だぜ。年の頃は17、8」  
「すごい！」とボブは単純に叫んだ。「で？」

「ところがそいつ……あのイングリッシュマンの校長のガキの一人だったんだ」

「ええっ？」

「五人兄妹の内の一人だった」

「あの、オーウェルの？」

「そう、サラ・オーウェル」

これを聞くと、ボブは椅子から転がり落ちそうになった。

「おいおい、何してんだよ、おめえはあ！？」

「俺も馬鹿さ。助けてしまうとはね、知らなかったこととはいえ」

「サラは、確かあまりここには居なかったな。目が悪くて手術だ何だつて、ロンドンまで行ってたんだろ？」

ジェームズの頬がピクリと動いたが、鈍感な二人には気付かなかったし、パブの暗がりでは、一つ一つの細かい表情などは分からないのだ。

「皮肉だな」とボブはそれだけ言った。

「皮肉ってなんだ？」と“うすのろ”ニッキーが尋ねた。

「ま、運命の悪戯というところかな」

ボブのこの説明に、どうやらニッキーは益々分からなくなっただうだった。ジエームズとボブは目を見交わせて苦笑した。そう、この秘密は二人だけが知っていることなのだ。

ボブ・ハーシーは、最初の頃「おすましや」のジェームズが大嫌いだったし気に食わなかった。

ジェームズはドーセットの人間ではなく、大都市カーディフの出身で、そして労働者階級でもなかった。ジェームズの父親はカーディフからやって来た裕福な商人だった。その上、ジェームズは同性から見ても、とんでもなく美しかった。恐らく美形の若者としては、ドーセット一だろう。それだけでも、ボブはジェームズを恨むに値したものだ。

ボブは小学校も三年しか行っていない。それ程家が貧しく、貧民層の中でも、下の下の方だったのだ。地主の小作人の家は概して子沢山で、ボブのうちも例外ではなかった。

ほんの10マイル行けば海岸だったが、それでもボブは海を見ることが無く、海に行く時間もなかった。小学校を出て程なく、下から二番目のボブはドーセットの靴屋に奉公に出された。

その間、生意気で金持ちだったはずのジェームズは、いつの間にか両親と小綺麗な家屋敷を全て失っていた。そして兄と違って金髪で、リボンの良く似合う妹はどこかに消えていた。そういうことがあった後でも、ボブは何とはなしにジェームズが嫌いだった。

けれども転機がやって来た。ボブが16、7の時だったか、放り込まれた牢に怯えた顔つきのジェームズの姿を見た時には、本当に驚いたものだった。

最初の内二人は頑なに口をきかなかったが、署長に対する“共通の恨み”が二人を近づけた。それというのも、地方判事が近くに居なかったので、巡回判事が来るまで、二人は随分長い間同じ牢内に居なければならなかったのだ。

ボブは何かと言えば署長に殴られてばかりいた。署長は「役人が大体そうであるように」イングリッド人であり、「ウェールズ人は阿呆だ」といつも公言してはばからない残忍な人間だった。それなのに、ジェームズの方は殴られないのが不思議だった。そして一日に一度は署長に呼ばれていた。

最初の間、ボブはそういう待遇のジェームズに対して、憎しみを抱いていた。けれどもそれがボブの考えていたこととは、全く逆であるということが分かったのだ。

ある日、その謎は解けた。

その日ジェームズは牢に戻って来るなり、狂ったように自分の頭を壁に打ちつけて額から血を流したので、驚いたボブは慌ててジェームズを羽交い絞めにした。このままでは、ジェームズは頭蓋骨を割ってしまうという恐怖を感じたからだ。

始めはバタバタとあがき逆らっていたジェームズだったが、それから二人は喧嘩を始め、最後は二人とも冷たい牢の地面にへたり込むまで殴り合った。ジェームズの額の血と、ボブの鼻血がお互いのシャツに飛び散っていた。

「何でこんなことをするんだ！」と始めにボブが喋った。「おまえ、死ぬぞ！」

「死んでやる！」

「そういう奴ほど、死にやしないさ」

「違う！ もう耐えられない！」

そう叫ぶとジェームズはその場に崩れ落ちて、ワーツと泣き出し

た。その時、ボブはハツとして始めてまともにジェームズを見つめた。ボブは署長にまつわる、ある“不快な噂”を思い出していた。そうだったのか……。

見かけよりもずっと頭のいいボブは、すぐに全てを……自分の心に忌まわしく描かれた全てを悟り、それから気分が悪くなって、まだ泣き喚いているジェームズの隣に座り込んだ。

「おめえ、なにしたんだ？」とボブは聞いた。

「な、何にもしていない」

「何か悪さをしなきゃこんな所に入るわけないだろ？」

「それじゃ、お前は何をしたんだ？」

鼻から溢れる涙をすすり上げながらも、ジェームズはこちらに振り向いた。

「盗みさ」

「泥棒？」

「地主の羊を一頭盗んでおつかあにやって、それからみんなで喰ったんだ。うまかったぜ」

ジェームズはこの簡潔な答えを聞くと泣き止み、それからクスリと笑った。

ボブはこの笑顔を忘れることが出来なかった。ジェームズの笑顔は同性ながら大層印象的で、ボブの心に深く浸透していった。

「それでおめえは？」

「……」

ジェームズは黙り込んだ。

「大体分かる」とボブは短く言った。

「あの署長のことだからな。何か因縁をつけようと思えば幾らでも付けられる」

「お前は何もしらねえよ」とジェームズは、クシャクシャになった

シャツをズボンの中に入れながらポツンと呟いた。

「おぞましいことだからな」

「何も言わなくていい」とボブは答えた。初めてジエームズはまともにもボブを見つめた。そばかすだらけの小柄な痩せた身体少年。けれどもその瞳は聖人にも負けないほど、清らかに瞬いているのだ。

「おまえにや、分からねえって！」

そう言ったジエームズの瞳からは、けれどもその強がりとは別に、涙が一筋溢れ落ちた。

それからまだ数年も前のことだ。

署長は一文無しになったこの美少年を目の前にして、そのグレーの目を細めていた。彼

は妻も子供も居たが、いつも満たされない欲求を抱え、そしてこの僻地に飛ばした上司に

対する恨みを常に抱えていた。

彼は検挙した犯罪者達をいたぶることで、何とか気持ちの均衡を保っていたのだ。家に帰れば、優しい夫であり、厳格な父の仮面を被ってはいたが、犯罪者からは“サタン”と呼ばれて恐れられていた。

けれども署長は自分の中に、もっと卑しいものが潜んでいるとは思ひもなかった。そう、ジェームズ・C・エドワーズが、万引きで捕まり自分の前に引き出される前までは。

彼はずっとウェールズに来たことを後悔し、そしてウェールズ人を憎み蔑んでいた。けれども、今この目の前にいるウェールズの小僧は、ただの小僧ではなく、とてつもなく惹き付けられる美貌の持ち主だった。

ジェームズは両親を事故で失い、妹を遠くの修道院へやらされ、今や親戚も見放した一人ぼっちの孤児だった。何をされても何をしても、誰もジェームズの言うことを聞くはずがないということに気付いた途端、彼の中に今まで潜んでいた欲望が頭を擡げて来たのだ。

「こっちへ来い」と署長は言った。ジェームズは敵意のある目付きで少しだけ近寄ったが、それ以上は来なかった。



「来るんだ！」

そう命令すると、署長は今の時刻は誰も居ないのを確かめるように、辺りを見回した。そばの小部屋が開いており、そこには小さなソファがある。

「来いと言ったら、来い！」

署長はジェームズの腕を引っつかむと、小部屋に入りボタンと戸を閉じた。念入りに鍵まで廻す。

「僕を殴らないで」

怯えた表情でジェームズは懇願した。

「殴るもんか」と署長は猫なで声で言った。「ただ」

「何でしょうか？」

ほっとしながら、ジェームズが尋ねた。

「尻を出せ！」

「え！？」

「尻を叩いてお仕置きするのが、イングランド流儀だぞ」

訝しげに、けれども何事も疑わずジェームズは腰を向けると、両手でソファに踏ん張った。突然、署長がおそいかかり、片手で口を塞ぎ、もう一方の手で乱暴にジェームズのズボンを引き降ろした。

「な、なにを……するんですか……」

「黙れ！」

署長は急いで自分のものを出し、もがいている少年の中へと押し入った。そして自分のネクタイでジェームズの両手首を縛りつけた。

「嫌だ。嫌だあゝ！」

今度は所長は自分のハンカチを丸めて、ジェームズの口に押し込んだ。強姦されている少年はバタバタともがいていたが、やがて涙と共におとなしくなった。白い尻を出したまま、ジェームズは床に転がされた。そして再び、背後から犯された。署長の悪夢のような

腕がジェームズの身体に這いずり回る。

それが始まりだった……。署長の陵辱と、ジェームズの性格の急変は同時進行形だった。

牢から出された前と後とでは、ジェームズはまるで違った人格へと変貌を遂げていた。小学校での屈辱と、そして署長の仕業は、ジェームズを神を呪う人間へと変えた。

＊～＊～＊～＊～＊

それを今、ボブは直感的に感じ取ったのだ。

「分かるよ、俺、分かる」

「何もし知らねえくせによ！」

「知らなくても、分かるんだ」とボブは言った。そしてそつと首を振った。

「誤解してたよ、ごめん」と言う言葉を。ジェームズは初めて人間らしい言葉を聞いたように思った。それから、おもむろにボロボロのシャツ姿のボブを見つめた。

「謝る必要なんてないじゃないか、お前が」

「そうかな？ でも」

「謝らなくていいよ」と思いもかけなく優しくジェームズが言ったので、ボブも顔をあげた。目の前には紫色の瞳が瞬いてている。そして不思議な笑みが。

以来二人はダチになった。そしてジェームズの忌まわしい秘密を知っているのは、ボブだけだった。

ジェームズとボブは、長い間その牢で一緒だったが、結局ボブは町中の広場で皆の前で見せしめに鞭打たれた。ジェームズの罪状ははつきりせず鞭打ちは免れたものの、ぐったりとしたボブの隣に晒された。

その時の二人は薄汚れた惨めな犬コロのような有様だった。けれどもその体験は二人の絆を強固にした。以来ずっと二人の仲は続いていた。

二人はその後、町から離れた所にある古代からの遺跡の前で、義兄弟の誓いを立てた。ちょうど風が、彼らの誓いの言葉を吹き消すかのように荒れ狂っていた。

ジェームズはボブの中のしたたかさ、打たれ強さ、何があっても茶化しのめすユーモアに深い敬意を払うようになったし、ボブはジェームズの中の、隠れてはいるが実はピュアで孤独な精神を理解するようになった。

ボブの夢は海岸に行つて、一日中遊ぶことだったから、ジェームズはそのようなボブの持つ素朴で簡単な希望を、いつか叶えてあげたいと思っていた。

ジェームズが幼い頃、家族とニューポート近くの海岸に出かけて遊んだことがあった。妹のメアリーはいつもピンクかブルーのサテンのリボンをして、砂浜をよちよちと歩き回り、上品だった、と言うよりも余りにも世間知らずで上品過ぎた母は、パラソルを持って、昼ご飯のバスケットの側でニコニコと笑っていた。

父とジェームズは、裸足になって、波打ち際で走り回った。父は背の高い痩せぎすな男性で、その当時の風習として口ひげを生やしていたが、本当はまだ随分若かったに違いない。若くて健康で実直な、尊敬すべき商人だった……それも今は昔のことだ。

海岸での遊興と言うボブの夢は如何にも直ぐに叶えそうな事に見えたが、結局今まで一度も果たせないでいた。一見簡単そうな夢ほど、実は難しいものなのかもしれない。

けれども今のジェームズの夢は何も無い。あるとしたら、”復讐”ぐらいだったが、それも最近では何だか空しいことのように感じていた。

“うすのろ”ニッキーの夢は「嫁さんをもらって、家庭を持つ」ことだった。三人は暗いパブの奥で、またぞろ同じようなことを繰り返して喋り出した。空しい夢の数々と、失われた儚い思い出や、失われた人々のこと……。

「ところで、最近メアリーから手紙来る？」とボブが話題を変えた。「一月に一度は必ずね。でも読まずに捨てる。川に捨ててしまう」「なぜちゃんと読んであげないんだ？ ジェームズ、お前はいつも変だが、そこが一番理解できねえよ。たった一人の妹が可愛くないのか？」

ボブの詰問に、ジェームズはシェリー酒の残りをぐいつと飲み干した。

「読む勇気が無いんだ。多分、怖くて。メアリーは修道院の中にいて、俗世にまみれず清らかなままだが、俺は違う。身も心も汚れきっているからな。メアリーが本当の今の俺を知ったら、卒倒する。いや、多分俺を軽蔑するだろう」

ジェームズの言葉はアルコールの酔いでやや呂律が回っていないかったが、それでもまだ馬車で帰るだけの正気はあった。

「だが、メアリーはもう直ぐ18になる。そうすると、今の修道院を出なきゃならないんだろう?」

「あと半年後だな」

「どうする? 引き取るんだろ?」

「あのまま尼さんにもなってくれば……」

「おいおい、ジェームズ、マジで言っているの?」

「大マジ」

「無責任な兄だぜ、全く」

ボブは肩をすくめた。ニッキーが身を乗り出してきた。

「妹さん、綺麗なねえちゃんかい?」

「綺麗に決まっているだろうが! こいつの妹だぜ!」

ボブが気色ばんで言うつと、

「そうでもないよ。……もういいじゃないか、メアリーのことはさとジェームズがはぐらかした。その話題を彼は避けたかったのだ。」

「ねえ、あのう。もしも行くところが無かったら、俺の嫁さんにならないかな? ね、どう? どう? マジで考えてくれない?」

突拍子も無いニッキーの申し出に、その場が急に白けてしまい、ジェームズは突然農場に戻りたくなった。ボブはニッキーの頭をぶん殴った。

「おめえって奴は、本物の阿呆だな、全く」

「俺、もう帰るよ。遅くなると叱られるんだ」

ジェームズが立ち上がったので、残った二人は目を上げた。ニッキーは尚もすがりつくように言い張る。

「ねえ、考えとくんだけ。農場には来させたくないだろ? あいつら、下女を片っ端から犯しても平気な野郎だから。分かっているよな、な、ジェームズ?」

ウンウンとジェームズは頷いた。

\*　　く　　く　　く　　く　　く　　く　　\*

外に出ると、雨はまだ降り続いていた。一年の内、三分の一は雨という土地柄だ。けれども今晚の雨はとりわけ身にこたえる。冷たい秋雨だからだろうか？　いいや、それだけではない。

泥まみれの少女の大きく見開かれたハシバミ色の瞳。ハート型の顔。あの娘がサラ・オーウェルだったとは！

思わず馬車から降りて真剣に「大丈夫？　怪我は無いかい？」と相手を覗き込んだときに飛び込んだ、相手の少女の躊躇いがちなホツとした微笑み。心の中で妙に引かかる。切り捨てようとしても切り捨てられないのだ。

なぜならあの”瞳”こそが、自分の大いなる代償だったものだからだ。あの瞳こそ、ジェームズの不幸の根源だったからだ！

やがてジェームズは、川に捨ててしまった破られた手紙を思い出した。何通もの妹の手紙は、散り散りになって激しい川の流れに巻き込まれていった。

その川に何度も身を投げようとして、結局無様に今でも生きている自分。妹に合わず顔が無い、穢れた自分。

三年前に会った時、いつまでも修道院の入り口に佇んで自分を見送っていた姿が、脳裏に焼きついて離れない……。

## 前奏曲く嵐の前触れく1

前奏曲く嵐の前触れく

1

「ジェームズ！ ジェームズ！」

遠くでダニエル爺さんが呼んでいた。ジェームズは農場の端で、冬支度の為に干草を刈っていたが、その手を止め、仕方なく爺さんの所に飛んで行った。珍しく晴れた一日だ。

ダニエル爺さんの側には、ジョン・ギルフォードが立っていたので、ジェームズは分からないように、下を向いてちえっと舌打ちした。

「ジョン坊ちゃんの狩のお供をしとくれ。今日はわしの痛風がいつもより酷くてな。行きたくても行けんのじゃよ」

ダニエル爺さんは、申し訳なさそうに頼み込んだが、その実顔は安堵していたのを、ジェームズは見逃さなかった。

ジョンはのつぽでヒョロヒョロした、このギルフォード大農場の次男だった。長男は今植民地インドに行っているというので、事実上長男も同然の若者で、ほぼジェームズと同じ年のようだった。そして彼ら一家はイングランド人だった。

弟のヘンリーはまだ少年で、イングランドのさるパブリック・スクールで勉強中だ。そして、どうにも我が儘な二人の妹達がいた。

いずれにせよジェームズは、この自分の雇い主であるギルフォード一族全員を嫌っていた。ただ単に好きになれないと言うことではなく、心の底から嫌悪し憎悪していたのだ。

屋敷には召使だけで12人は常時居るし、別棟にある使用人小

屋にも、ジェームズを入れて4人の者達が居るといふ、この界限きつての大農場主だったが、貴族ではない。つまりそのことが、常にジョンを苛立たせている事実だった。

ジョンは詩が好きで詩人になりたがっていた。けれどもオスカー・ワイルドやバイロンのような大詩人にはなりたくてもなれず、それはすなわち彼には天分が無いと言う事だったのだが、ジョンはその事実を直視せずにいつもイラつき、そしてその矛先が常に使用人たちに向けられていた。

皿を割ったといつては、少年を殴り、若い下女は手当たり次第に手を付けていた。それでも誰も正面からジョンを咎める者は居なかった。母でさえ、見てみぬ振りをしていた。

ジェームズは銃を持つジョンの後ろに数歩下がって、広大な森の中に分け入った。ジョンは時折晴れ渡った空を見上げたり、手をブラさせたりしながら、それでもいい加減な調子で獲物を狙っていた。ジェームズはジョンが狩猟好きでないことを知ってはいたが、つまりは暇つぶしなのだろう。

「オイ、お前」とジョンは側の灌木に寄りかかりながら、小川の近くの岩に腰を下ろした。彼には数歩以上は近寄らず、ジェームズは立っていた。ジョンは微かに嘲笑を込めた笑いを浮かべると、ジェームズに向かって言い掛けた。

「お前は女が好きか？ それとも、女の方から近寄って来るのかい？ 村やドーセットの町の娘達が、お前目当てに涎を垂らして寄って来るんだろう？」

ジェームズはどう答えていいか分からずに黙っていた。

「質問に答えろよ！」と言う苛ついたジョンの声が飛ぶ。

「女は……嫌いじゃないです、ご主人様」



「そうか。僕も好きだよ」

ニタリとしながらジョンがジェームズを見上げたので、彼は目を伏せた。ジョンが何を言いたいのか、嫌な予感がしたのだ。

「お前の妹は別嬪だろ？ もうすぐここに来るんだろ？ 行くところが無くて」

「さあ」とジェームズは曖昧に受け流すと、ジョンは刺々しく言い放つ。

「ウェールズ人って言うのは、頭は馬鹿だし女もブスばかりだ。妙な言葉も使う。だが時にはいい女も居る。お前の妹は多分、その”いい女”の内の一人だろうな。ここへ来るんなら、下女の口ぐらい幾らでも世話してやる。そして……僕が可愛がってやるさ。とことんな」

ジェームズは今もしもこの男を殺すことが出来たとしたら、どんなに嬉しいかと感じた。そしてそのことで自分が首を吊られても、絶対に後悔はしないだろう。けれども例えジョンを殺しても、第二、第三のジョンがここにはうじゃうじゃ居るのだ。

どんなにあがいた所で、ここは彼らの土地なのだ。何百年にも渡って、彼らの支配の下でしか住めなかったのだから。

実際ジェームズの祖先が、大昔はどんな名前だったかすら、それも今となっては何一つ分からない。

その時、ふいに又しても、サラの瞳を思い出した。

「妹は多分ここには来ないと思います」とジェームズは答えた。

「じゃあどこへ行くんだい？ カーディフか？ カーディフの親類達は皆お前達兄妹を見捨てたんだろう？ 同胞愛も無いのが、お前達ウェールズ人の特徴だよな。それとも、ロンドンで淫売でもやるか？」

ジェームズの手がブルブルと小刻みに震え出すその有様を、ジヨ

ンは面白そうに見つめていた。その内にジェームズの白い肌は少しずつ赤くなり、伏せられた長い睫毛が痙攣でもしたかのようにパチパチと上下した。

けれどもジョンにはジェームズが何一つ言い返せず、手を出すことすら出来ないのを知っていた。長年にわたって、彼らはそうやってじっと耐えることを学んで来たし、それは随分地位が上のウェールズ人でさえそうだったのだ。

彼らは何一つ刃向かうことができない。もしも何か一言でも言い返せば、ジェームズは間違いなく血が滲むまで肩や背中を鞭で打たれるだろう。

「分かりません」という返事が、辛うじて彼の口から出てきた。

「ふん！ お前達ができるのは、結局妙な言葉で歌うだけか、シーナ・ラ・ギグ（注：ドルイド教のエロスの女神）のように、大勢の子供を孕むぐらいさ。孕まないと、その内に滅亡してしまうからな。それとも、いつそイングランド人の子供を宿すか」

ジェームズは初めてジョンをしっかりと見つめた。深い紫水晶のような瞳が、憎しみでキラリと光った。

「狩を始めませんか、ご主人様？」

「もうあいつの話はするな、サラ！ よく言つてあるはずだ。あいつは単なるワルだ。一度ならず何度も牢に入った。あいつに礼をするなど、馬鹿げたことは考えるなよ」

「あなた！ そう怒鳴らなくても。サラはただ……」

オロオロしながら、オーウェル夫人は夫にとりなしていた。部屋の隅でサラは下を向き、涙をポタポタと垂らしている。オーウェル氏はそういう娘の姿を見、確かに言い過ぎたと反省した。

サラは……末っ子のサラはオーウェル氏の宝だった。この目の悪い娘の為なら何だつてしてやると彼はずつとそう思いながら生きてきたのだ。そして、実際の所なんでもやった。口にするのもおぞましいこと、罪深いことまでもやって来たのだ。今更その事実を翻すことなど、もう出来ないが……。

「確かにあいつはお前を親切に送つて来てくれた。けれどもそれは偽りの姿なのだよ、サラ。あいつは、“類稀な美しい仮面を被った悪魔”なのだ。わたしが彼を教えていたのだから、本当だ。頭は良かったがな」

オーウェル氏はサラの肩にそつと手をやった。もしや世間知らずのサラが、あんな男に妙な気でも、例えば恋心を抱くとかだとしたら大変なことだ。その前に何とかしなくてはならない！

けれどもオーウェル氏は間違っていた。サラは“既に”ジエームズ・C・エドワーズに恋していたのだ。

サラはこの歳まで、ほとんど家から出ずに過してきた、世間知らずのネンネの娘だった。ハンディを背負っているということ、家

族も腫れ物を触るようにして生きてきたせいか、何一つ疑うことのできない温室育ちの娘になった。

そういう育て方が間違っていたのだろうか。けれどもこれは運命の悪戯としか思えない。それとも何かの呪いなのだろうか……。

「とにかく、サラ。お父様もああ仰っているし、お茶に誘うのはやめましようね。わたしが何かの機会にお会いして、何がしかの金銭を包めば済むことでしょ？」

とオーウェル夫人は、ジエームズに対する良からぬ噂のせいで、声を震わしながら言い聞かせようとした。

オーウェル夫人は、何かと言うと因縁を付け回って金銭をせびるジエームズの悪しき噂を、あちこちでしょっちゅう耳にしていたのだ。

けれどもサラには通用しなかった。

「お母様達は結局、全てがお金で支払われれば済むことだと思っていらっしやるのね。あの人がウェールズ人だから？ 下層階級だから？ それとももっと他に理由があるの？」

サラは窓際から振り返り、叫んだ。

「そうじゃないのよ！ サラ、あの人は……」

オーウェル夫人が何か言おうとしたが、「もういいわ！」とサラは遮り、自室へと戻って行った。やがてボタンと扉の閉まる音がした。

＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊

ドーセットの町はずれで馬と牛の市が開かれた。

ジエームズはギルフォード農場の者達と、買い付けに来ていた。もう一人の仲間である石工の弟子の赤毛のドリューが近寄ると、ジエームズにそつと耳打ちした。それを聞くとジエームズは激しく動揺

した。ほとんどショックに近いほど。

「ボブは病気なんだ。あいつは隠しているけど、俺は知ってる」

「病気！？ そうは見えなかったが」

「ひと月まえ、奉公先の靴屋で喀血したんだ」

「そんな……」

ジェームズの声が消えた。

「ニッキーには言うなよ。あいつに言うと、直ぐに何でもベラベラ喋りまわるからな」

ドリュウは噛んで含めるように言った。ドリュウはジェームズとは正反対の、むっくりした精悍な面構えの大男で、見た目も寡黙そうに見えたが、実はまだかなり若かった。

二人は黙って柵に頭を載せた。牛や馬が埃を上げて走り回り、家畜の臭いがし、喧騒で騒がしかった。その中で冷たい沈黙が二人を覆っていた。

「なあ、ドリュウ」とやがてジェームズが口を開いた。

「ん？」

「人生って、なぜこんなだろう？ どうしてこう上手く行かないんだろう？ どうして？」

「さあな」と重々しくドリュウは肩をすくめる。

「難しいことは分からないが、つまり人間ってというのは、何かを喰って、女と寝て、子供を作って、それから死ぬ。そういうことだろうな」

ジェームズは暫くドリュウを見つめていた。その物悲しげな視線の中には、諦めとそして憤怒の両方があったが、知らず内に承諾している自分が居る。

「でもなぜ、親しい奴らが次々と……」

「悲しいのは俺だって…… おめえだけじゃねえぜ。去年インフルエ

ンザでお袋を亡くしたからな」

「ああ、そうだったね。御免よ、ドリユー」

その日、ギルフォード家は仔馬二頭と牝牛を一頭買った。

『親愛なる妹、メアリー

久しぶりですが、元気ですか？

今まで書いてこなかったが、実は言いたいことがあって書きます。兄さんはお前のことを心配している。だからここには来て欲しくないということを告げたくて……』

ここまで書くと、ジェームズは手紙を破り捨てた。

一体何て書くんだった！？ このドラ息子に女たらしだから来るな、と言うのか？ そして、そのままにでもなれと命じるのか。

ああ！ どうすればいい？

ジェームズは暗く狭く侘しい自室で、煩悶していた。ボブのことも気になった。この間はあるなにかに元氣そうにパブで酒を飲んでいてはなかったか。けれどもジェームズは知っていた。ボブの中の恐ろしいほどの忍耐強さを。彼は決して誰かに弱音を吐くような奴じゃない。そして他人に弱みを見せることすらしない人間なのだ……。例えば親友にでも。

金があれば、ボブを医者に見せたいと思っていた。けれども仲間内、誰一人として金のある者は居ないのだ。

ジェームズ自身も酷い有様だった。彼の財布にはほとんど金はなく、蓄えも無かった。毎月のお給金は、只のようなものだったからだ。ニッキーだけが長男で、細々と農業を営む親と住み、幾らかあるかもしれないが、それだって最近の飢饉で底についているはずだ。それなのに、サラは莫大な大金を使ってロンドンに行き、目の手

術を受けた。その大金が一体どうやって出来たか、本当のことをあのバカな小娘に知らせてやりたいものだ！ 多分彼女は何も信じないだろうが……。

ジェームズは黒い髪を掻き耑り懊悩していたが、やがて目が塞がり始め、昼間の疲れで寝入ってしまった。

＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊

スウオンシーは西に行った所にある古い街だが、そこから更に西に海岸線を辿って行くところに、寂しげな女子修道会が建っていた。北側はヒースが生い茂る何も無い大地、そして南は崖になっていて、荒々しい大西洋の波がいつも岬に押し寄せている。

そのような場所に妹のメアリーを預けていることに、ジェームズはいつも深い罪悪感を抱いていた。が、自分の置かれている立場もどっこいどっこいなのだ。

罪の意識を必要以上に抱かない方がいいと、ボブはいつも言い聞かせていた。

「俺達を見ろよ！ 俺達だって、他にどこへ行けばいいと言っただい！？」 どこにも逃げる所なんかないんだぜ」と。

セント・マグダレーナ修道会は、もちろん男子禁制だったので、ジェームズは入り口の直ぐ脇にある古びたアルコールの側の椅子に座り、長い間妹が来るのを待っていた。それは今からもう3年も前のことだ。

目の前に駆け足で一人の美少女が近付いた時、ジェームズは正直言っただけが妹だとはには信じられなかった。

メアリーが修道会に入るとき、ドーセットの町外れで泣きながら別れて以来だから、もう6年の年月が経っているわけだ。それだからだろうか？ いや違う。少女の成長は見違えるようだった。ジェ



ームズは「兄さん？」と躊躇いがちに呼ばれて初めて、その美少女がメアリーだと悟ったのだった。

「兄さんなの？」

椅子に座ったまま帽子をいじっていたジェームズは、不思議そうにメアリーを見上げた。

「メアリー？」

「そうよ。やっぱり兄さんね！」

満面の笑みが、そのうら若き修道女見習いの少女の顔に広がった。メアリーは立ち上がった兄の首に腕を廻すと、抱きついた。

「嬉しい！ この日を待っていたのよ！」

それから彼女はやっと腕を放すと、一步下がった。頬がポツと赤らんでいる。誰であろうと、ここは若い男性はほとんどお目にかからない場所なのだ。

「でも、どうして……どうしてそんな哀しそうな顔をするの？ 嬉しくないの？」

「そりゃ嬉しいさ、もちろん」

ジェームズは複雑な感情にとらわれて、曖昧に口ごもった。そしてやっとニツコリと微笑んだ。

「それにしても、大きくなったね。背も伸びたし、背が高い方じゃないかい？ 元気そうだし、それに何より綺麗になった。すっかり見違えたよ、本当だ」

「本当？ ……兄さんだって、最初呼びかけるのを躊躇ったわ。そのうえ、戸惑ったし。だってもうすっかり大人なんですもの。お母様に似てきたわね。その目とか……その紫色の独特の瞳の色よ。そしてその表情とか。変ね、兄さんを見て、お母様を思い出すなんて」「僕はお前を見て、父さんを思い出した。だから……」

ジェームズは胸がつまり、声が出なくなった。ほろ苦い涙が、滅

多に出ないと思われていた涙が、悔しいが目のにじみ、彼は下を向いたままだった。

ジェームズは妹メアリーの成長振りを見て、あとが続かなかった。あの小さかった9歳の少女がこんなにも大きくなった。ここの生活がどうであれ、今の妹の快活そうな表情を見ると、彼女がここで如何に愛されて育ったのかは、おのずと分かるというものだ。けれどもジェームズの涙はなぜか止まらない。

「兄さん……泣かないで……本当に泣かないで。わたしは嬉しいの。笑いましょう？　ね？」

メアリーは心配そうに兄を見上げる。

「笑いたいけど、でも出来ない。だってこの6年間、僕はお前を放ったらかしにしていたんだから」

「6年間、どんなことが起こったかと言う事は、お互いに言うのはやめましょうね。わたしも兄さんがこの間にどんな目に合ったか、知っているつもりなのよ。色々、色々あったってこと……」

ジェームズは下を向いたままやがて嗚咽をやめたが、まだ鼻をすすっていた。

二人は、許されている時間内に連れ立って外に出た。崖から遠い水平線をじつと見つめ、あれこれ話し合った。メアリーの頭の白い被り物が、強風にはためく。

「海はね、静かなときもあるの。いつもこうじゃないのよ」

とメアリーは波立つ時化した海を見下ろした。

「来たくても来られなかった」

何も聞いていないかのように、ジェームズはつぶやいた。

「もういいのよ、兄さん」

メアリーは兄には振り返らずに答えた。「分かっているの」

「今度来るときは、お前を迎えに来るよ。又二人で一緒に暮らすんだ。それまでには何とかしなくちゃならないが」

「何とかなればいいわね」

メアリーは漠然とした不安に駆られて言った。メアリーは自分は勘が鋭いこと、そして何とはなしに他人の未来が見えるという自分の能力に、怖れを抱いていたのだ。それは誰でもが持っている資質ではなかったが、メアリーはなぜかよく当たった。

メアリーは今兄が述べたことは嘘ではないが、けれども、それが不可能であるということも、何となく感じていた。

「そうするんだよ！」とジェームズは意思的に言い張る。

「ねえ、兄さん」とメアリーはやつと兄の方を向いた。妹でなければ、どこかときめいたかも知れない容姿を持つ、自分の兄に。

「お祈りしましょう。わたしに出来ることは祈ることだけなの。わたしは兄さんにとっては何の力になることも出来ないから」

「お前が健康で幸せならば、僕は何も言うことはない。愛しているよ、メアリー」

ジェームズはその捕らえどころの無い色彩の瞳で、愛しそうに妹を見下ろした。メアリーは俯き、そして微笑んだ。

例え兄妹でも、ジェームズはやはり大人の男だ。そしてスウォンシーでもカーディフでも、こんなに見目麗しい若者はまずほとんど居ないだろう。

メアリーは秘かに兄のことを誇りに思った。自慢したい気になった。“世界一素晴らしいお兄さんを持つているのよ！”と世間の人間に叫びたくなった。

けれどもそれが不可能なことぐらい、彼女はもう分かっているほど成熟していた。もしも言えるとしたら、ここの風と海にだけだろ

う……。

「もう時間だわ。戻りましょう」とメアリーは囁くように告げた。

あの日から、もう3年になる。ジエームズは大人になった。けれども魂と肉体は、更に墜ちて行った。そしてメアリーは益々世の汚れを知らぬまま成長していった。

この大きなギャップを、一体どのようにして埋めればいいのだろう。

## サラの過ち／嵐の予感

1

サラの過ち／嵐の予感

1

ジェームズはさつきから金を盗むことを考えていたので、絡みつくセシルの手を払いのけた。

「何よつ！ 今日冷たいじゃないのさ！」

セシルは素っ裸にストッキングだけを付けたまま、シーツの下にもぐったままの全裸のジェームズから渋々離れた。

『フロレンス娼館』の日曜日はいつもこんなもので、娼婦には日曜も祭日も無いのだ。

けれども、ジェームズに指名されたい、例え只だと言われても、と願っている娼婦は残念ながらセシルだけではないのだから、彼に邪険に扱われても文句は言えない。むしろ、今朝自分に指名してくれたジェームズに感謝しなければならないほどだ。

いつもは下卑た大酒飲みや、荒くれた男達、しょぼたれた爺さんなど様々な客が来るが、ジェームズの中では、飛び切りの上客だった。

愛が無くとも、彼に抱かれるだけで女達はひと時幸せになる。ジェームズの愛撫を受け、そしてジェームズを愛撫するとき、それは商売ではない無上の悦びを感じるのだ。そしてジェームズのもが入って来たときには、身体が震えてしまう。

今朝もまたセシルは、ジェームズが要求する以上のサービスを提供してやった。ジェームズのことを嘗め尽くし、彼が悦楽に呻くのを聞き、そして自分も萌えた。彼がはいつて来ると、一時的にでも彼を自分の者にしたという悦びが溢れて行くのだ。セシルは彼の身

体をしっかりと抱き締め、決して離したくないと思った。けれども果てると直ぐに彼はそっぽを向き、裸のまま腕組みして顎を載せ、長い間考え込んでいるのだ。

「ねえ、ジェームズ、もう一度やらない？」

「もう一度？ もういいよ、お前とは」

とジェームズは薄情な言い方をするが、セシルは仕方ないと思った。自分は所詮ただの娼婦、それも誰かが身請けするとは思えないブスなのだ。そして年季奉公はまだ二年も残っている……。

女主人のフロレンスは、最初店の女の子達が口々にジェームズのことを噂しあっているのを聞いて、ただバカバカしいとは思わなかった。

「信じられないほど、綺麗なんだって」

「天使のような可愛い顔をしているんだってよ」

「あの瞳……まるで宝石のようだって。サファイアかアメジストみたいな色だと言っわ！」

娼婦達が喋っていることを聞いてはいたが、長年の経験でそういう噂のある男に限って、実物を拝見したら「なぐんだよ、これ」という人物が多いのだ。

「ねえねえ。ロンドンにだってあんなに綺麗な子は居ないと思うわよ」

と一人、どこかでジェームズ・C・エドワーズを街で見かけたと言っ娼婦が囁いた。

「大体イングリッシュマンって、威張りかえっているけれど、不細工なのが多いのよさあ。あのギルフォードの次男だって、えばっではいるけれど、醜男だしつまらない男のくせにさ」

こう言った口さがないお喋りも、フロレンスは黙殺した。

ある日靴屋の見習いの冴えない若者、ボブ・ハーシーが実際にジエームズを連れて来た時には、自分の憶測が完全に間違っていたことに気付いた。

ジエームズはまだ17か8ぐらいで、心なしかオドオドとしていた。ウェールズ人特有の少し丸みがかった卵型の顔立ちで、店の女の子達が騒いでいた通りの、いやそれ以上の容姿なので、この仕事を何年も取り仕切っているフロレンスでさえ、驚きを隠すのに苦労したほどだ。

フロレンスはこの仕事をもう25年もしているが、やはりジエームズのような少年を見たのは初めてだった。

「ほら、約束通り連れて来てやったぜ」と、キヤーキヤー騒ぐ娼婦達に向かって、ボブは得意げに言っていた。

「俺のダチのジエームズ・エドワーズだ。見かけほどヤワじゃないんだぜ。だがしかし、女はまだ初体験なんで、優しく教えてくれる奴がいいな。だろ、ジエームズ？」

問われたジエームズの白い肌がポツと赤くなった。この頃、今は違ってジエームズは本当に初心な少年といった風情だった。

今も相変わらず、美しいとありきたりな形容詞を言うしかない容姿は健在だったが、昔の純真なところは全く見られなくなった。大胆で横柄でずる賢くふてぶてしい。けれどもニツコリと微笑まれると、大抵のことは許してしまうのだ。

「教会の鐘が鳴っている」

「だから？」と物憂げにジエームズは答えた。

「礼拝が終わったらしいよ」

「あいつらがすまし顔で祈っている間、こちらは別口で天上にまで登り詰めたってわけさ」

ジエームズの言い方に、セシルは笑い出した。



「でも、今朝は心ここにあらずって感じだったくせに」

「いつだって、心ここにあらずだよ、俺は」

「随分な言い方ね！」

セシルの抗議も知らぬふりで、ジェームズは上向きになり、天井を仰いだ。彼の左の乳首の上から肩に掛けて、残酷な火傷の痕があるのを、セシルはもう何度も見てきた。そしてそれが何を意味しているのかももうすす知っていた。いや、知っているつもりだった。

セシルにとって、ジェームズはほとんど謎以外の何物でもなかった。ジェームズは決して本心は見せない。時々、彼が天使なのかサタンなのか分からなくなる時もある。本来は善良な人間なのか、心底のワルなのか全く掴めないのだ。

いや、彼は両方共に持っているのかもしれない。いつか司祭様が言うには、サタンは墮落した天使の親玉である、というようなことを言っていたから、結局根っこは一緒なのだ。

とにかくセシルにとっては、そんな小難しいことはどうでも良かった。ジェームズと寝ただけで、他の女の子達から羨ましがられているだけは確かだったからだ。

ジェームズは天井の薄汚れた染みを見上げながら、考え込んでいた。

（どうせ盗るなら、あの粉屋がいいかもしれない。あいつら、散々俺をこき使いやがって、そのくせ給金はほとんどくれなかったし残り物ばかり食わせやがったからな。それとも、あのオーウェル校長の家から？ あるいはいつそのこと、この娼館からは？ ハハハ！ まあ、無理だな、あのフロレンスからは。……あの忌々しいギルフォード邸には、俺は勝手に入ってはいけないことになっているし、何しろ人目に付き過ぎる。全く盗れそうできて、いざとなると難しいものだ）

小銭ぐらいだと、どこからでもちよるまかすことは出来るだろうが、今回はある程度の金銭が必要だった。ジェームズはため息をついた。

服を着て、階下のしけたロビーで、安物のお茶を飲んでいると、遅しい体躯のドリュウがやっと2階から現れた。ドリュウは精悍な面構えの石工なのだ。ハンサムではないが、どこことなく女心を引き付ける若者だった。

ジェームズは小柄なボブとドリュウの中間に当たる体格で、中肉中背だ。ドリュウも所詮はボブのダチの一人で、それで知り合った仲なのだ。

二人は目配せして店を出た。ドリュウは表に出ると、大欠伸をした。

「ああ、すくっとしたぜ。何しろ女は久しぶりだからなあ」

ジェームズは小声で、ドリユーの肘を突いた。

「女もいいが、それよりもあの話は？」

「いいか、ジェームズ」と、途端にドリユーは欠伸の顔を引き締め、静かな声になった。

「今回のことはちよつと無理だぜ。気持ちには分かるけどさ。少しくらいなら間抜けな奴らからくすねられるけど、大金となるとさあ。

銀行の警備は堅いからなあ」

「ちえっ！ この計画から下りたいってか？」

「いや、そうじゃないよ！ つまり……今回失敗したら、お前だつてどうなるか分かるだろう？ 下手すると鞭で打たれるだけじゃすまねえ。オーストラリアに流刑になるかも……」

ジェームズは軽蔑したようにドリユーに一瞥を与えると、ポーンと石を蹴った。

「怖いんだな、ドリユー」

「いや、怖いって言うてんじゃねえぞ。だがヤバいつて気がする。

……ほんとうだぜ、ジェームズ。怖くて言うてんじゃねえぜ。怖かったら、ずっと前、あの粉屋の粉にガラスの破片なんぞを混ぜたりはしなかったし、校長のこの窓ガラスだって、割らなかった。でも、今回は違う。盗みだぜ。大金の」

「だが、俺はその大金が必要なんだよ！」

ドリユーは少し立ち止まり、とがめるような視線をジェームズに送った。

「それに……ボブだつて、このこと知つて喜ぶかよ？」

ジェームズはさつと振り返り、この上なく冷淡な視線をドリユーに浴びせた。こんな時のジェームズは、墮天使ルシファアの化身のように見える。

「お前、まさかボブには……」

「と、とんでもない。言つてないよ！ 口が裂けても言わないぜ。」

だってボブが聞いたら悲しむよ、あいつ、きっと、悲しむ……。自分の為に、そんなことして欲しくないって」

「自分の為に……か。あいつはそんな奴だ」

ジェームズの声は自暴自棄に響く。そして彼は今度はドリユーの首根っこの襟を掴んだ。

「じゃあ、あのサラ・オーウェルの場合は？ あいつのオヤジがやったことは、所詮盗みじゃないか。いやいや、盗みよりも酷いぜ。あいつは人間を売ったんだよ。俺を売ったんだ！俺の人生を目茶目茶にした！でも何の罰も受けては居ない。あのサラは今、ピンピンしている。あの醜い丸い眼鏡を掛けるとな、目もかなり良くなったそうだ。そして俺に、サラの母親は『お茶はどうですか？』なんて、暢気な事を言うんだ。何てことだよ！」

ジェームズはもう一度、道端の石を今度はもつと強く蹴った。

「お前が辛いことは分かるけど……でももう済んだことじゃないか。もちろん、心の中じゃ、一生許せないとは思っけど、あのサラには何の罪もないよ。オヤジさんだって、そのことで苦しんでいるかもしれないし」

「何だって！？お前、本気でそう思ってるのか？ドリユー、お前は本当にお人よしだな！俺はそうは思えない！」

ジェームズは怒気を含んだ大声を激烈に上げた。

「あんな奴がその事で後悔したり苦しんでいるなんて、笑わせるなよ！」

サラ・オーウェルは、キティ・ギルフォードの16歳の誕生会に行くことにした。毎年誕生会に招いてもいつもは断るサラが、今回はやって来るといので、キティは驚いてその返事を穴の開くほど見つめた。

サラはキティが嫌いで、二人は今まで大した口をきいた事が無い。ただし、共通点は唯一つ。それは郷土階級のイングラント人であるということぐらいだった。

ドーセットにはイングラント人は一割ほどしか居なかったが、全て田舎の上流階級を形作っていた。けれどもサラの家はその中でも最も低い階級の方だった。

キティは高慢ちきでお喋りで、サラとは気が合うはずがない。それでもサラは今まで一度だって訪問したことはないギルフォード家に出向くことに決めた。サラは、ジェームズがギルフォード家の庭番兼下男のような仕事をしているのを知っていたからだ。実際に、ギルフォード家には大勢の下男下女達が住んでいた。

オーウェル夫人には、サラがギルフォード家に初めて行く理由を、うすうす感づいていた。けれども運のいいことに、その日夫はカーディフに泊まりで出かける予定になっていた。

サラにとっても、広大なギルフォード家の館や庭で、ジェームズに偶然会えるとは思っていなかったが、少しでも彼の近くに行きたいという願望を止めることは出来なかった。あの時のジェームズの瞳は忘れがたく、そしてその声音が嘘を付いているようには思えなかったのだ。

少なくとも、ジェームズは、自分が誰か分らない内は親切だったし、心から心配していたのだ。けれどもサラが名前を名乗った途端に、ジェームズの表情はガラリと変わった。ちょうど天使がくると振り返ると、恐ろしいサタンへと変化したように。

そういう事実を目の当たりにしても、初心なサラの願望は衰えるどころか、日増しに募っていったのだ。

けれどもジェームズに関する噂の数々は確かに悪く、父の言った通り、彼が善人であるといった類の事柄はほとんど無かった。

町のくずもとの付き合い、娼館に出入りし、大酒飲みで、女たらしで、ギルフォード邸の下女達に見境無く手を付けているというけれども逆に、女達がジェームズのお尻を追っ駆けまわしているのだという噂もあった。

もつと酷いのは、6年前にはギルフォード家の納屋に火を付けて、牢にぶち込まれたこともあると言うのだ。粉屋の粉にガラス片が混じっていたのも、多分ジェームズの仕業だろうと喧伝されていた。証拠は無いが彼以外には考えられないと言うし、自分がロンドンの病院に居たときにこの校長の屋敷の一階の窓ガラスを割ったのも、多分彼だろうと言われていた。

時にはこっそりと博打も打ち、たった一人の妹は辺鄙な修道院に放りっぱなしだと言う。

よくもこれだけ悪評があるとは、サラにも驚きだった。そして一様に、

「あの一見天使の様な顔をしていながら……」と言うのが、皆の一致した意見だった。

「見かけと中身が違ういい例だ。腹の中は腐っている」とも……。

「でも、昔はあんなに酷くは無かったわ」

オーウェル夫人だけが、彼を弁護した。お茶の時間がゆつたりと

流れているときだった。

「そうなの？」とサラはさり気なく聞く。

「小学校ではね、まるで女の子のようだったの。見かけだけは、少なくとも……類稀な可愛い天使の様だった。毎日きちんと出席していたし、どこか変わった所があったけれどごく普通の子で、それに頭も良かったのよ。卒業したときには、“銀賞”をもらったわ。でもあの子はそのメダルを川に捨てたのよ！」

サラの紅茶のソーサーを持つ手が少し震えた。

「どうして……そんなことを」

「さあ、なぜでしょうね」

「でも、それが今みたいになっただのはどうしてかしら？」

「多分」とオーウェル夫人は遠い所を見る目付きになった。

「それは、一度に両親を亡くしたせいでしょうね。ジェームズが1歳の時だったかしら？ カーディフに商用で出かけていた両親の馬車が、嵐の中、川に転落……。数日後、両親の遺体が随分下流で見つかり、引き上げられた遺体がドーセットに運ばれたその日……あの子は呆然とまるで幽霊のように岸边に突っ立ったままで。

それからあの子の顔から天使のような微笑が消えてしまったの」

「何て悲惨な出来事なのかしら！？」

とサラは手を口元に当てた。

「そうね、確かに悲惨だったわ、特に小さい子供にとっては。でもそれだけじゃあなかったのよ」

オーウェル夫人は、ソーサーをテーブルに置いた。

「両親は実は新しい事業の為に、膨大な負債を負っていて、遠くの親戚達がわざわざやって来ては、家や家具などを全て競売にふしたの。それでも幾らかの借金が残ってしまい、親戚達は二人を置いて逃げ出したのよ。誰一人、二人を引き取る人は居なかったわ。今か

ら考えるとひどいものね。ウェールズ人は、ここぞと言うときには、  
弱虫なのよ！ あの時、妹のメアリーはまだ5、6歳だったと思う  
わ」

何も知らなかった……。サラは丸い度の強い眼鏡の奥の目を伏せ  
た。



暫く沈黙が続いた。

「借金はどうしたの？ そんな小さな子が借金を負うなんて」とサラもまたソーサーを置きながら言った。声が微かに震えている。「ユダヤ人の、金貸しシユタールさんが代わりに全額支払ってくれたのよ。多分、何かを担保にしたのか、それとも誰かが代理人になったのかそれは分からないけど。ジェームズは奉公に出され、毎月返済することにはなっていたけど、今でも払い続けているのか、完済したのかそこまでは、ね。」

とにかく、あなたの手術などでわたしもロンドンに滞在していたことが多かったし、他人どころではなかったのも事実だけど」

オーウェル夫人は寂しげに微笑み返した。サラは泣きたくなくなるのを堪えながら、頷き返した。確かに母はいつもサラの側に居てくれたのだ。ロンドンでも、手術の日にも……。

「そうだったの……。でも例えどんな人であつたとしても、お茶に招いてはいけないって事はないでしょう？ 少なくとも、あの方はキリスト教徒なのだし、父はもつと酷い人達をお茶に招いた事だつてあるじゃない。それが教育者の務めだつて、常日頃から言っているのに。……それにここは」

サラは暫く黙っていたが、思い切つて切り出した。「もともとあの人達の土地なのよ」

「でも、難しいわね」とオーウェル夫人はため息をついた。

「ジェームズ・エドワースは特別なのよ。お父様はいつだってジェームズを嫌っているの。例え他の卒業生は許せても。」

ずっと前だけど、うちの窓ガラスをほとんど割られたことがあった。主人はそれをジェームズの仕業だと言い張った。それで署長が調べたけど、彼には数人のアリバイがあった。その日はギルフォード家の者の何かのお祝いで、全ての人達がジェームズがその時お屋敷で忙しく立ち働いていたのを見ていたのよ！」

「じゃあ……」とサラは身を乗り出した。

「犯人は別の卒業生だったわ」

婦人は静かに答えると目を伏せた。

「でも、主人はジェームズだと信じているのよ、今でも。けれども一旦は捕まりかかったジェームズは、今でもそのことを恨んでいるはずよ。一時が万事。他にも色々あったけど、あの目は憎しみの目だわ。そう告げている。彼は綺麗だから、尚更そう感じるのかもしれないけれど」

「お父様が居ないときにお誘いしてはだめ？」

とサラは尚も食い下がった。婦人は微かに笑った。皮肉な笑みだ。

「彼がYESと言うかしら？」

「そうね。言わないかも……。でももしもYESと答えたら？」

オーウェル夫人は複雑な眼差しで、我が娘を見つめた。

「サラ、あなたの熱意には負けそうよ。でも、彼はあなたの善意に値するような人間なのかしらね？」

＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊

ギルフォード家に行く途中、サラはずっと母の言葉を反芻していた。「天使と悪魔」……この二つの相反するものが、ジェームズの中にあると人は言うけれど、“本当”の彼の姿は一体どうなのだろうか？ それを突き止めてみたいような気持ちが動くのは、一体なぜ？

秋の日差しが馬車に斜めに入って来て、キティの誕生日は珍しく良い日だった。

ちょうど馬車がギルフォード邸内に差し掛かったとき、生垣に一人の若者が下女の腰に手を廻して何か笑いながらじゃれ合っているのが見えた。馬車はその直ぐ横を素通りし、若者はパツと顔を上げて見慣れぬ馬車を見上げた。

キツとした目付きのその顔は怖いぐらいだったが、誰もが振り返りたくなるような非凡な美しさに満ちている。けれども相手の下女は、どちらかと言うと醜女だった。

サラはさつと顔を背けると、馬車の中に身体を沈めた。見てはいけないものを見てしまったような苛立ちを覚えたからだだったが。

ジェームズは下女の額に軽くキスをすると、又何か耳元に囁いている。全ては一瞬の出来事だった。

サラには、ジェームズが自分を見つけたかどうか定かではなかったが、心臓が激しく打ち、全身の血がカツと頭に上った。彼女は下を向いたまま、玄関口に横付けされるまで顔を上げることすら出来なかった。後悔と、そして妙な艶かしさの両方を感じて、ひどく狼狽してしまったのだ。

ジェームズは、忘れもしないサラの丸い眼鏡を見た瞬間、腹立たしい思いで全身を硬直させた。けれどもそ知らぬふりをする芝居はお手の物だった。

（ふん！ 何てことだ！ サラ・オーウェルがやって来たとは！ 今までここには来なかったはずなのに。あのバカ娘のキティの誕生会に呼ばれたのか）

ジェームズは思わせぶりに下女にキスをしたあと、直ぐに離れた。「ああ、マーガレット。俺、仕事があるんだ。じゃーね」

不服そうな下女に振り返りもせず、ジェームズは森の中に消えた。

キティはゴテゴテと着飾っていたが、小太りの彼女には全然似合っていないかった。集まったのはこの周辺に住む郷土階級ジェントリの5人の女の子達で、町長の娘のノーラ一人だけが、ウェールズ人で、あとは全て少数派のイングランド人だった。

「このレースは全てパリから取り寄せたの。それからこの絹の肩掛けは日本製よ。このスリッパはインドのだし、このブローチは新大陸アメリカから」

招かれた5人は、キティのまくし立てる自慢話を、口をポカーンと開けて聞いていた。

「ウェールズなんて、何も無いんですもの。あるのは石炭と魚くらいでさ。文化と言ったって、何も無いし。支那（＝中国の蔑視的呼び方）や日本の方が、地球の裏側だけどもだましくらいだわ」とキティが肩をすくめると、

「でも、キティ。支那人から見たら、わたし達が地球の裏側って事になるわよ」

と聡明なローリーがキティをやり込めた。

「あら、そう？ そう言えばローリー、あなたのお兄様は今商売で上海に居るんですってね」

「いいえ、香港よ」

「商売の為とは言え、随分奇特な人なのね」

キティの悪意ある冗談に、残りの4人は仕方なく笑って見せた。ローリーが悔しさに唇を噛んだのを、サラは眼鏡の奥から素早く一瞥した。

やがて5人はキティの下手なピアノを聴いて辟易したあと、中庭に出た。下女達が丸テーブルに刺繍の付いたテーブルセンターを広げて、お茶の用意をしていた。

最初しゃちほこばっていた少女達も、段々と興が乗ってくると口々に男の子達の話を始め、あちこちでクスクス笑いが漏れた。

「ねえ、キティ。さっきここに来る道すがら、ちょっと会ったあの男の子は誰なのよ？」

「誰ですって？ アネット？」

キティにそうあからさまに聞かれ、ししっ鼻でソバカスだらけのアネットは口をすばめて見せた。

「知らないけど……すごいイケメンでステキで……でも多分あの服装では……」

「ジェームズでしょう、きっと」とキティは嘲笑を込めて言った。

「あいつはこの庭番よ」

キティは無感動につまらなげに答えたが、今までほとんど無口だったサラはドキッとした。

（やっぱり、あの時の柵の側に居たのは……）

「庭番！？ でも信じられないほどノブルだったけど」

「ほんと！ あんたって、面食いね。容貌が良ければ誰だっていいって言うわけ、アネット？ あいつはウェールズ人としちゃ上出来の方だけど、ああ見えてとんでもないワルだから気をつけるのよ！」

「ま、わたしはあんなタイプ、好みじゃないわ」

とローリーがマフィンを摘みながら言った。

「もっと遅しくて、背が高くて、ジェントルマンでなきゃ」

「ローリーは支那人でなきゃ、誰でもいいんじゃない？」

とキティはさっきのお返しをした。

「でも、綺麗な男の子だったんだもん！」

アネットはあくまでも言い張った。

「もちろん、結婚とかそんなことは馬鹿げているけど、でもあんな子とヒースの茂みの中を歩くのって、すごいロマンチックじゃない！？」

「あんだ、それ以上何を期待しているのよ？ そうでしょうね、きつとキスも上手いのよ。あいつ、女たらしだっていう評判だから。あんだもその軽薄な女の内ってわけ？」

ローリーが不愉快そうに、アネットをからかった。

「でも……わたし、あの人に……助けて頂いたの」

突如今まで黙っていたサラが口を開いたので、皆一斉にサラの方を向いた。

「助けた！？ ですって？ あいつが他人を助けたなんて話、今まで一度だって聞いたことが無いわ！」

キティが肩をそびやかしながら叫んだ。

「何か魂胆があるのよ、きつと」

サラは何か言い返したくなった。今まで感じたことの無い“怒り”が、サラの小さな胸を痛ませた。サラは身を乗り出した。

「でも、わたし今まであの方のこと知らなかったし……向こうもわたしは誰か、知らなかったのよ」

「金をせびられなかった？」

ローリーが今度はビスケットを口に咥えながら、意地悪げに問う。

「そんな！ ……あの方はお茶も飲まずに帰ったの」

珍しくサラがむきになったので、キティとローリーは顔を見合わせた。

「あなたもアネットと同じく、面食いなだね。バツカみたい！ あんな奴が気に入るなんて、二人ともどうかしているわよ！ 第一、

あいつはウェールズ人よ。全く釣り合いも取れやしないじゃない！」  
「わたしもウェールズ人なだけど」

と今まで黙っていた、町長の娘のノラ・バロウズが突然口を挟んだ。  
「あら、ごめん」とキティはさり気なく言いつくろった。「でもあなたは別よ。大英帝国に忠実なお家柄だもの」

「それはどうかしら……」とノラはお茶を濁した。

「だって、あなたのお兄さんはケンブリッジに行っているじゃないの！ きつと紳士になって帰って来るわ。でも、あいつは……」

「彼をお茶に招きたいの！」

このサラの一言は、全員を驚愕させるには充分だった。アネットですら、あやうくソーサーを落としそうになったほどだ。けれどもサラはもう一度、今度はキツパリと言った。

「お茶に招いて、御礼を言いたいよ。父は反対だけれど、わたしと母は賛成しているし」

どこにこんな大胆さが自分の中にあっただのか、とサラ自身が一番驚いていた。

「あいつ、付け上がるわよ」

キティよりもさらに太って背の高い大柄のローリーが、ビスケットの屑を自分のスカートから払いのけながら、そう言った。まるでその屑が卑しいもののように。

「ちゃんとした家の者なら、あんな奴、お茶になんか招くものですか！」

「まあまあ、いいじゃないの、ローリー。面白くなってきたわね。ね、そうじゃないこと？ あなたが誘いにくいのなら、わたしが代わりに言って上げるわよ、サラ。彼をここに呼びつけましょ」

サラは慌てて、何か言おうとしたがキティの冷淡な視線を感じて黙り込んだ。



「言い出したのはあなたじゃないの、サラ」

キティは、サラだけではなく何か言いたそうな全員の口元を手で制すると、侍女を呼ぶ為の呼び鈴を鳴らした。キティは急いでやって来た侍女に、何か耳打ちをしていた。

「直ぐにやって来るわよ、あいつが。見ものだわね」

アネットは両手を握り締め、そしてサラは息を詰めながらその僅かな時間の間、後悔に苛まれて座っていた。

ジェームズは、納屋での仕事をサボって、干草の上でゴロンと寝転がっていた。干草からはいい臭いがする。こうやって秋の空気を感じ取りながらウトウトとしている時間は、ジェームズにとってはかけがえの無いゆったりとした時間だった。

このギルフォード家に雇われてもう何年だろう……。随分昔のことのようだが、実はそれほど遙か昔でもないのだ。

けれども思わぬ命令で、最初ジェームズは我が耳を疑った。侍女が慌ててジェームズを探し出して、納屋で寝転がっている彼をたたくき起こし、ギルフォード家のキティが自分を呼んでいるというのだ。それも、パーティの席上、招かれた少女達の集まっている中庭に至急来い、というものだった。

ジェームズはキティとは面と向かって話したこともない。時折キティがジェームズに言う言葉は、単なる短い命令文でしかなかった。その上、兄のジョンは、ジェームズが妹達に3フィート以上近寄ることを禁じていた。

それなのに……。けれども命令は命令だ。彼は舌打ちしながら身を起こすと、慌てて身支度を整え、帽子を取り、クシャクシャになった髪をかき上げた。

ジェームズは緊張の面持ちで、少女達がテーブルに付いている中庭に歩み込んだ。六対の好奇と侮蔑の瞳が、自分を凝視し、上から下までジロジロと遠慮なく見つめている。彼は規定通り、3フィート以上は近寄らないようにして立ち尽くした。

けれどもジェームズは、端っこにサラが座っているのを見ると、嫌

な気分になされた。彼女に対する嫌悪感が、頭をもたげてくる。今日のサラは、似合わないピンクの服に、白いレースのショールを羽織っている。むしろサラには地味目のおとなしい色合いの方が合いそうだとジェームズはぼんやりと思っていた。なぜかそう考えている自分自身に、彼は腹をたてた。

サラはこの間の事件を思い出してドキドキし、そしてアネットは呆けたようにうつとりとジェームズを見つめていた。

「ジェームズ、遅かったわね。あんた昼寝でもしてたのかい？」とキティはぞんざいに尋ねた。

「いいえ、お嬢様」

「でも、髪の毛に干草が付いているわよ」

どこかからクスクスという忍び笑いがした。ジェームズは頬を真っ赤にすると、右手で色付いた木の葉を取り払った。その仕草が優美なのに気付いたのは、サラだけだったのだろうか。

「それとも、下女とでも戯れていたの？」

キティのこの毒を含んだ質問のために、ジェームズは自然に目を伏せた。

兄のジョンとキティは本当に良く似ている。こうした意地の悪い質問をわざとするとところなど、そっくりだ。

「ここに居る、サラ・オーウェルは知っているわね？」

ジェームズは黙ったまま頷いた。

（またぞろ、サラか！ この疫病神はいつまでまとわり付くんのだ！）

「サラがねえ……あんたをお茶に誘いたいんですってよ。この間あんたがサラにしたという、“人助け”の礼をね。どう？ 承知しなさいよ！」

余りの思いがけない言葉に、ジェームズは心底驚いた。地面がグラグラ揺れたようでもあり、大地が色を失ったようにも感じた。素

早くサラを一瞥すると、サラの丸いハシバミ色の瞳が分厚い眼鏡越しに自分をじっと見つめているのが分かったが、それはジェームズにとつては耐え難い苦痛だった。

一体サラは何を思つて、こういう提案をしたのだろう？ ジェームズはしばし言葉を失っていた。

「答えなさい、ジェームズ！」

キティは苛々しながら言いつける。

「何と言うか……突然のことです……」

ジェームズは全員の視線を痛いほど感じながら、モゴモゴと口ごもった。

「そ、そういうことは……俺には……」

この窮地に立ったジェームズの言い訳する表情を、アネットはそれでも両手に顎を載せながら、うつとりと見つめていた。

「ジェームズ！ あんた、自分が何物なのか承知しているのっ！」  
遂にキティの怒りが爆発した。

「イングランド人がお茶に招こうつてのに、もしや断るつもり？  
サラに恥をかかすの！？」

サラの胸は張り裂けそうだった。そんなつもりではなかったのに……今のこの状況では、ジェームズに無理強いしている事にしかないではないか！

「ですが、お嬢様……」

なおもジェームズははっきりしない態度を取ったままだ。

「分かつてて！？ NOと言うことは、お前には出来ないのよ！  
もしもお前が断りでもしたら、わたしは早速ジョージに言いつけてお前を鞭打つか、それとも丸一日食事を抜くかするから！」

ジョージと言うのは、忠実な下働きの作男で、図体のでかい男だった。キティはやると言ったら必ずやる、使用人達にとつては情け

容赦の無い主人であり、一度小間使いが自分のネックレスを首に当  
てているのを見て怒り狂い、そのまだいたいけな小間使いの少女を、  
窓一つ無い地下の暗黒の小部屋に一昼夜閉じ込めたこともあるのだ。  
小間使いの少女は、悲惨な悲鳴をその地下室からあげていたが、  
誰一人助けることは出来なかった。

ジェームズは明らかに狼狽し、又困惑していた。彼がこぶしで自  
分の帽子を握り締めている有様を見て取って、サラは深い後悔の念  
に苛まれていた。自分の大胆な思い付きが、如何にジェームズを苦  
境に立たせたか、ここに来て良く分かったのだ。ここでは、使用人  
達の立場が違うのだ。自分達とは……。

サラの家には、しがない校長の家と言うこともあり、使用人達は  
たった3人しか居なかったし、又彼らにとって、父も母も何ら過酷  
なことを強いることは無かった。だから時には、使用人達は怠ける  
だけ怠けるようなこともあった。

けれどもここギルフォード家では、一族は絶対的な権力、及び施  
行力を有していたのだ。キティはここでは、まるで女王陛下のよう  
に振舞うことが出来、そしてそれが当然であるかのように享受して  
いた。

辺りには不穏な空気が漂い始めていた。ジェームズは黙りこくつたままで、俯いている。年下の生意気娘のキティに無理難題を吹っかけられても、断れない自分が居るその上に、少女達の前でこの上ない恥を晒していると言った苦痛が押し寄せた。それもこれも、全てこの丸い醜い眼鏡をかけた世間知らずの少女、サラ・オーウエルのせいなのだ！

伏せられたジェームズの長い睫毛が微かに震え、形の良い鼻筋に汗が浮かんでいるのを見て、サラは遂に『やめて！ もういいのよ！ わたしが浅はかだったわ！』と叫ぼうとしたその直前に、ジェームズは顔をキツと上げると口を開いた。

「光栄です」

そう答えたジェームズの声は、サラには分かるぐらいの震えがあった。

「ありがたくお受けします。ですが、オーウエル校長は、多分俺が訪問するのを断るでしょうけどね」

「それは大丈夫です。父が居ない日を選ぶわ、わたし！」

思わず、自分の自制心とは別に、サラは興奮して言った。そういうサラにジェームズはチラと一瞥した。凍れるようなゾツとする視線を。

「承知してくれたのね、ジェームズ。あなたも頑固者なこと！ それじゃ、日取りが決まったら、この男にはちゃんとした正式のヒマを与えてあげるわよ、サラ」

キティは勝ち誇ったように叫んだ。

「お前はもうあっちへお行き、ジェームズ」

ジェームズは一礼すると、後も見ずに去って行った。そのどこか華奢な背中を、アネットはぼんやりと見送っていた。

「キティ、何もあそこまで言わなくても……。断ることぐらい自由にさせなさいよ。あの人、行きたくない素振りだったわよ。酷すぎるわ!」

キティはそう庇うアネットをジロリと睨み付けた。

「使用人にはあれ位きつく言っておかないと、示しが付かないのよ。いい、アネット? そして、サラも。うちには本当に大勢の使用人が居るんだから、甘い顔はしていられないわ」

「でも、キティ」とアネットは尚も、小さくなったジェームズの後姿をチラチラと名残惜しげに見ながら、つぶやいた。

「もしも彼が断ったら、どうするつもりだったの? まさか本当に鞭打ったり、丸一日絶食させたりするわけ?」

「そうねえ、どうしようかな?」

キティは、底意地の悪い表情で顔を傾げた。

「でも、少なくともあの生意気なあいつにはいいクスリにはなったでしょうね」

「かわいそう……」

とアネットは、既に豆粒大になったジェームズの背を目で追いながら小声で言った。

「かわいそう、ですって!? アネット、あんた本物のバカね。顔で判断しないで! あいつは心底ワルなんだから」

キティは不愉快そうに言い放った。

(そう。彼が良い人が悪い奴なのか、それを見極めてやるわ!)  
サラは心の中でそう決心した。そして胸の奥がポツと暖かくなるのは何故だろうか。

けれども、先程のジェームズのあのゾツとする目付き……あれは一体何なのだろう？ 自分を泥水から抱き起こしてくれたときの、あの天使のような澄んだ瞳を持つ人間と同一人物とは、到底信じることが出来ない……。

＊＼＊＼＊＼＊＼＊＼＊

10月の冷たい風が吹き渡る夕方間直になって、やっとパーティはお開きになった。

キティが友人達の持ってきた、ダサイ贈り物に散々悪態を付いている頃、サラはノラに誘われて、ノラの持つ立派な馬車に乗り込んでいた。バロウズ町長の娘が家まで送ってあげるから、馬車は差し向けなくていいという使いがオーウエル家に既に送ってあったのだ。ノラは気が効く娘だった。

馬車はノラ自身のものだったし、ノラはウエルズ人だったがサラよりもずっと金持ちだったのだ。もとの土地の名士出身だった。

そしてノラ自身は聡明でいつも控えめだった。ノラの軽薄だと言われている兄達とは、全然違って。

「疲れたでしょう、サラ？」とノラは親しみを込めた声を掛けた。

「ええ、そうね、幾分」

身体は疲れているが、ジェームズに再び会えるという喜びで、サラの体内は燃えていた。

「慣れていないからよ。それにキティと上手くやって行くには大変なもの」

馬車が大きく揺れ、ノラはケルト語で何か御者に注意しているようだった。がノラはハッと気付くと、サラの方を向いた。

「ごめん。あなたが居るの、忘れてた。今のこのこと、大目に見て



よね」

「もちろんよ！ でも父だったら、もしも授業中にケルト語を使ったら、きつと木の鞭で掌を叩いたでしょうね」

サラが呟くと、気まずい空気が少しだけ流れ、二人は暫く黙っていた。

「差し出がましいようだけど……サラ、あんな突飛な事していいのかしら？」

最初に口を開いたのはノラだった。

「あんなことって？ ジェームズをお茶に招いたこと？」

「そう。あいつはね、ウェールズ人から見ても、屑中の屑なのよ。恥ずかしいわ、わたし。きつとあいつ、将来は絞首台で首を吊るされるわ。そういう奴なの。腐っているもの」

サラの心臓は今にも止まるかと思われた。絞首台……！

「お茶に誘うだけのことが、そんなにまずかったのかしら。それには値いしない人なの？」

「サラ、あなたは長い間目を患っていて世間を知らないから、人を見る目が無いのよ。あいつはね……でも、ま、少なくとも成績は良かったの。兄のシドニーと同じ学年だったけど、兄よりはずっとテストの出来は良かったのよね。それなのに、兄が金賞でジェームズが銀賞だったなんて、ちよつと意外だったわ」

「父が……」

「まあ！ 校長先生は、とても公平な人だから」

ノラはどこかきこちなく微笑んで見せた。

「でも、シドニーさんは今ケンブリッジなんでしょう？」

「確かに行っているけど……」

ノラの言葉が消えかった。

「ここだけの話よ、いい？ 兄さんは毎年落第点スレスレでね、卒

業できるかどうかも怪しいのよね。皆には黙っていてくれる？」

「ええ、分かったわ」

サラはニツコリと笑った。何だかノラとは気が合いそうだった。

例えノラがウェールズ人であろうと無かるうと、相性が合うことはあるのだ。人種は関係ない、とお人よしのサラは確信した。

## 惑いゝヒースの丘で 1

惑いゝヒースの丘で

1

心から嫌悪するサラからのお茶の招待……。それも、キティの強制的、屈辱的な命令を受けたジェームズは、自分の持つて行き場の無い苛立ちを何かにぶつけずにはいられなくなった。

明らかにサラは自分に惚れたようだ。不愉快だが、それも仕方がない。けれどもある時ふと、悪魔の囁きがジェームズの心の奥に入り込むと、彼はニタリと微笑んだ。

（そうだ！ この機会を利用して、あのサラの心を目茶目茶にしてやろう！ そして、あの一家の平安を破壊してしまうんだ。ことによったら、お金だつて盗む必要はないかもしれない。このぞつとする招待は、ひよつとしたら何かの贈り物かもしれないではないか。腹を立てる暇があったら、あのサラ・オーウェルを復讐に利用するんだ！）

そう考えると、ジェームズはむしろお茶の日を楽しみに待つようになった。そしてその日がやって来た。ジェームズは欠けた鏡の前で、念入りにネクタイを結びなおし、そしてその豊かな黒髪を幾分キチンと撫で付けた。

雨のそば降る日の午後、ジェームズはオーウェル家のお茶に招かれた。その日はオーウェル氏は再び外出しており、夜更けまで帰宅しない日だったし、オーウェル家にはサラとオーウェル夫人と、二人の下女しか居なかった。サラの上の4人の兄弟達は既に嫁いでいたり、家を離れたりしていたのだ。

用心深いオーウェル夫人は下女達に緘口令を引いていて、何がし

かの金子まで渡していたのだ。

ジェームズはたった一着しかない一張羅の上下揃いの背広を着てきた。けれどもそれは中古品で、余りサイズも合っているとは言いがたかったのだが、それでも仕事着や普段着のジェームズしか見ていないサラにとっては、一応きちんとした身なりのジェームズは“紳士”に映った。

こちらの二人の案に相違して、氣後れすることもなく玄関から堂々と中に入ったジェームズは意外と愛想の良い笑みを浮かべており、サラはホツとした。その上、挨拶も丁寧で、単なる作男にはとても見えなかった。もともとが、ある程度の良家の出だと今更ながら思わせる立ち居振る舞いは、オーウェル夫人をも少し安心させた。

けれどもサラは愚かだったのだ。ジェームズの心の中を、もしも覗くことが出来たとしたら、そのおぞましさにその場で嘔吐を覚えただかも知れない。

ジェームズは巧く立ち回っていた。逆光気味に当たっている僅かな光の中に座っているジェームズは、如何にも邪氣の無い純情そのものの青年に見える。テーブル・マナーも立派だった。オーウェル夫人はそういうジェームズの態度に、すっかり騙されてしまっていた。

オーウェル夫人は、いつもよりも多弁に喋り始めた。

「サラは本当に世間知らずなんです。それで、アン・マリーの所に行った時も、眼鏡のことであれ程までにからかわれるとは想像もしなかったんでしょうね。アン・マリーとそのヤンチャな弟達の格好の標的になり、嘲笑されてパニックになり、訳も分らず土砂降りの雨の中を走り出して……そして、躓いて……。あなたが通り掛つて助けて頂けなかったら、もう少して肺炎にでもなる所でしたわ。本当に助かりました。あの時には何も出来ませんでした。今日は

ささやかな御礼のつもりですよ」

「お嬢さんは、気持ちの優しい方ですね」

とジエームズは愛想を述べて、ニツコリと微笑んで見せた。

（そして、とんでもない阿呆さ！）

けれどもサラとオーウェル夫人は互いに顔を見合わせ、サラは恥ら  
いながらうつむく。

「いいえ、あなたの方こそとても優しく親切な方ですわ」

恥ずかしげにサラはチラツと顔を上げると、ジエームズを見上げ  
た。ジエームズはサラの方に振り返ると、会釈を返した。

「いや、それはどうでしょうか？」

（バカなサラ・オーウェル。自分が一体誰の力モになろうとしてい  
るか、気付いていないと見える）

それから和やかな談笑が続いたが、もっぱら喋るのは夫人の方で、  
サラは時折ジエームズを盗み見ながら、微笑んだり相槌を打ったり  
するだけだった。

暫くしてオーウェル夫人は下女に呼ばれて、台所の方に去ったの  
で、ジエームズとサラは居間に二人きりになってしまった。残され  
た二人は、じつと押し黙ったままだった。

夫人がなかなか戻って来ない間、サラはその気まずさを何とかし  
ようと窓際のガラス窓に近寄り、外を覗いた。直ぐ後ろにジエーム  
ズの気配を感じると、サラは硬直したが、努めて平静を装った。

「まだ雨が降っているわ」

ジエームズの吐息がサラの首に掛かった。今日のサラは、ごく地  
味な生成りのブラウスに、淡いベージュのベストを羽織っていたが、  
そちらの方がサラには良く似合っている。

「そう……散歩にはちょっと無理な日和ですね」

「散歩？ そうね……」

サラはジェームズの声を間近に聞くだけで息苦しくなり、その肩は小刻みに震えていた。

サラは話題を変えるために、古い本棚の方に移動した。ジェームズの方をあえて見ようとせずに。

「エドワースさん、本は好き？」

「今は忙しくて読む暇がないな」  
又ちよつと会話が途切れた。

「では、絵は？」

「つまらない」

「わたし、シスレーの絵が好きなの。彼のエッチング集ならここにあるわ。変でしょ？ 目が悪いのに絵画に興味があるなんて」

サラはシスレーのエッチング集を取り出し、自分の胸にその本をしっかりと抱いた。そしてやっとジェームズに面と向かう勇氣が出てきたことを覚えると、くるりと振り返った。

「この世に光があると言うことは知ってはいたの。けれども以前のわたしには、物の輪郭すらも分からなかったわ。微かにぼんやりと映る、もやもやした何か……それをはつきりと認識できるまでに一体何度手術を繰り返したのかしら」

手術の話になると、ジェームズの胃の辺りが重く苦しくなり、思わず彼は深い苦しい吐息をもらした。それは微かなものだったが、耳のいいサラにはその遠くから吹き抜けるような息遣いを捕らえることが出来た。

「エドワースさん、あの……」

「ジェームズと呼んで下さい。ジェームズ、あるいはジムと」

「ジェームズ……」

サラはこの甘味な響きを、舌の上で転がした。平凡な名前だが、このうえない響き、“ジェームズ”と……。

「え？」とジェームズは、問いかけた。「何でしょうか、お嬢さん」  
 「ロンドンの病院でやった手術はとても怖かったけれど、でも今は感謝しているのです。わたしに光を与えてくれたお医者様や父や母に。シスレーの絵の素晴らしさも分かせてくれたし、もう杖も無くどこへでも一人で行くことが出来るようになって」

ジェームズは段々気分が悪くなって、近くのソファに沈み込むように腰をおろした。サラの目に不安がよぎる。

「どうしたの、ジェームズ？ お顔色が悪いみたいね。それとも、お疲れになった？」

「そ、そうかな……」

ジェームズは制しきれない狼狽振りを悟らせない為に、横を向いた。黒髪が額にかかり、彼はそれを無意識にかき上げた。キティの所でもそうだが、その所作は彼の癖らしい。

「御免なさい、こんな個人的なことばかり言ってしまうて。自分の苦労をひけらかすなんてそんな気は無かったけれど、でもとても悪い癖ね、わたしって。気を悪くなさったんでしょう？」

「い、いや、別に」

「いいえ、そうなのよ。わたし、自分のことばかり話していたわ」

サラは反省し、シスレーのエッチング集を棚に戻した。

「キティの所でああなたをお見かけしたけれど、わたし、キティのやり方は好きではないの。強制的にあなたをお呼びするなんて、最低なやり方だったわ！ わたしなら、あんなに無理強いはしなかった。いつもあのような扱いをされるって、さぞお辛いでしょうね。本当

に御免なさい。わたし、自分勝手に」

突然ジェームズは立ち上がりサラの掌を取ると、さっとキスをした。それは余りにも自然で、そして一瞬のことだったので、サラが手を引っ込める暇さえ与えなかった。けれどもすぐに、瞬間的にサラは手を引いた。ジェームズの突然のキスは、サラでさえ狼狽させたのだ。けれども掌は焼けるように熱く感じられる。

サラが恥じたように俯いたのを見て取ると、ジェームズは言いかけた。

「済みません。俺はお礼の気持ちを巧く伝えることが出来ないから、こうやって……お嬢さんに対して、不躰なことを」

「いいんです。わたし、驚いたけど嬉しいんです」

とサラは正直に答えた。このように優美に掌にキスをされたことがないサラにとっては、その一瞬は掛け替えの無いものだったのだ。

「お嬢さん……」

「サラと呼んで下さい」

サラが目を見ると、ジェームズは安堵したような決まり悪げな笑みを投げかけた。それが全て作弄的なものだということは、サラには到底見抜けるはずがない。

サラは勇気を出すと、大胆にもこう切り出した。

「散歩は好き？ さっき散歩のことを仰っていたわね」

「大好きです！」

（そろそろ、乗ってきたな……このおぼこ娘も）

「もしもあなたに休日があったら」

「無いけれど、サボることは出来ますよ。そうでなきゃ、あそこは牢獄と同じですからね」

「今度どこかに」とサラは、目を伏せながら、けれども奥から突き動かされる情念のままに尋ねた。「わたしをどこかに……散歩に連れて行ってくださる？」



ジェームズは深い吐息をもらすと、手を否定的に振った。

「いいですが、でもあなたのご両親がそのことを知ったら、何と仰るか！」

「いいえ。小間使いのエレーンを連れて行きますから、それは大丈夫よ！」

（上手くいったぞ！　だが、小間使い付か。それは最初だから仕方が無いかもしれないな）

「本当に？」

疑わしげにジェームズは問いかけた。

「ええ！　エレーンは口が堅いんです。それに信用できるわ。昔から居る使用人ですもの」

「でも……」

ジェームズはじらすように言うと、ふいと横を向いた。サラの心が焦りに満ちるように。

「ジェームズ。わたし何か無理な事言っているかしら？　教えて、

ジェームズ！　わたし、本当に散歩とかハイキングとか行ったことが無いんです。8才の時に最初の手術を受けてからも、毎年のようにロンドンに行って手術や治療に専念していたし、父母の先祖のレスターの親戚の家で静養ばかりしていたの。やっと去年ここに帰って来られたのよ。でも学校にも行けず、そして長い不在で友人も知人も居なかったし、兄弟達もわたしに気兼ねしているのか腫れ物を触るように接してきたんです。ここで生まれたのに、わたしはまるで異邦人。このこと何にも知らないんです！」

サラは誰に向かってるか自分でも気付かないほど、思わず自分の今までの心情を吐露していた。相手が他人なので、逆に何でも言えたのかもしれない。決して両親にも告げられなかったことを、赤の他人のジェームズになら、なぜかスラスラと口から出て来るのだった。

「御免なさい。又言い過ぎちゃったわね、わたし。自分のことばかり喋って……」

「いいえ、サラ、それは気の毒に！ 辛かっただろうな」

（何が気の毒なんだ！ そうだよ、君は自分のことばかり言っているんだ！ 僕や妹のメアリーが、君のせいでどれだけ苦しんだか、どんなに過酷な運命を被ったか、まるで分かつちやいない！ 君と少しだけ年上のメアリーにはどんな気晴らしや娯楽があったと言うんだ！）

「だけど、お父上に知れたら」

「父は決して許してくれないでしょうね。でも、母は理解があるのよ。母ならきっとOKして下さるわ。エレーンと一緒にですもの。それに母は、今日あなたと会って、とても心象が良くなったみたい」「では、どこかいい場所を探しておきましょう。冬になる前に、いい散歩の場所を。けれども、くれぐれもお父さんには見つからないようにして下さい」

「じゃ、計画を練っておくわ、わたし！」

ちょうどその時、オーウェル夫人が暖かいマフィンの皿を持って入って来た。

「お母様！ 今度、この方がわたしをどこかお散歩、いえハイキングに連れて行ってくださるって！ もちろん、エレーンも一緒だけど。いいでしょ、お母様！」

夫人はサラの紅潮した頬と、輝くような笑みに気圧されて啞然としていたが、無理やりに笑顔を作った。

「ええ……エレーンと一緒になら、いいかもしれない」

「ありがとう、お母様！ ありがとう！！」

サラは思わずオーウェル夫人の首に腕を廻して、まるで少女のようにはしゃぎながら叫んだ。その様子を、ジエームズはにこやかに、そしてその実醒めた目付きで眺めていた。

こうしてジェームズは、サラとオーウェル夫人をまんまと信用させることに成功したのだ！

「つまりこういうことなのさ。ちよろいもんだぜ、全く！ あいつら、徹底的にお人よしなんだ」

パブ『山猫荘』の奥のいつもの席で、黒ビールを飲みながら、ジェームズは勝ち誇ったように叫んだ。ただし、小声で。

「それで？ サラをレイプでもするのかい？」

どリユーが半ば呆れながら問いかけると、ジェームズはフンとせせら笑った。

「何言つてんだ！ お前はアホかよ。そんな下らないことしか考え付かないのか？ レイプ！？ そんなことしたら、俺は直ぐに捕まる。あんなブスの子の為に、絞首台になんか上りたくないぜ。それに……あいつを犯すことすら、おぞましいよ！ もっともっと引つ掻き回してやるのさ。あの小娘の心をズタズタにし、家庭を目茶目茶にし、そしてあの糞ジジイを卒倒させてやる！ あの子をことん墮落させてやるんだ！ それが狙いだよ」

「それで、あのサラって子が、身も心もボロボロになっていいって言うのかい？」

ボブが咎める様に、そして元氣なくボソリと言った。

「そうだよ、平気さ。あんな娘のどこに同情する所があるって言うんだ」

「お前の持って生まれた“美”は、そんな風にしか利用できないって訳か」

このボブの一言はジェームズの体内を毒々しく駆け巡り、そして一番奥に眠っていた何かを、制しきれない怒りを持って呼び覚ました。

「何が言いたいんだよ、ボブ!?」

ジェームズは気色ばんで怒鳴りつけた。ボブはゆっくりとジェームズを見た。限らない同情を込めて。

「ちつくしょう!」とジェームズは拳でテーブルを叩いた。「俺のこの顔が何の役にもたたなかったことは知っているだろう!? それどころか、このように産んでくれた母さんを憎んでいるくらいさ! 署長からどんな扱いを受けたか、どんなに弄ばれたか知っているくせに!」

警察署長から受けた性的な虐待のことを、ジェームズもボブも面と向かって言ったことは無かったが、柄にも無く聡明なドリューには何となく分かっていた。ドリューは激昂しているジェームズを止めに入ったが、ジェームズは怒りに駆られてドリューの手を振りほどいた。

「俺は禿でもデブでも良かったんだ! 幸せになれるんならな! 近寄ってくる女ときたらろくでもない奴らばかりだし、他の男達からは羨望やら嫉妬やら妬みやらで喧嘩を吹っかけられる。良いことなんて一つもなかったよ!」

「お前の気持ちは分かる」とボブは静かに言った。「だけど、サラ・オーウェルに復讐しようってのは、何だか……」

急にボブは激しく咳き込み始め、息苦しそうにゼイゼイ言った。木枯らしのようなヒューヒューという音がボブの肺からもれ、倒れ掛かった。ジェームズはやっと自制心を取り戻し、自分の心を鎮めた。

ボブは自分の病気については未だに何も言わない。けれどもボブの、まだ若いのに老け込んだ顔、落ち窪んだ力の失せた黒い瞳、こけた頬……。彼が少しずつ悪くなっているのは、一目瞭然だった。ジェームズはボブの背中をさすった。全てを失ってもいいが、この親友のボブを失うことは耐えられない。けれども地元の医者はい

ングランド人唯一人で、貧乏なウェールズ人を診てくれるとはとても思えなかった。例え診て貰ったにしても、高い薬は買えないのだ。ジェームズがお金が入用になったのも、一つはボブの為だった。

ウェールズ人は無学なまま放って置かれること……。これが自分達の宿命だった。名前と信仰と言葉を奪われ、更に無知なまま炭鉱などで搾取される。そして遥かに下等な人種だと罵られる。そういう事が一体いつまで続くのだろう。

自分達自身の国を持つことは、まあ無理にしても、せめて自治を獲得できたら！ アイルランドですらまだ無理な自治権を！

多分そんなことは、夢のまた夢なのだ。

「もう飲むのはよせよ、ボブ。……俺、今晚はお前んちに送って行くよ。よく寝て、仕事も暫く休んだ方がいい」

「いや、大丈夫だ」とボブは咳にむせながらも、強気に答えた。

「お前は本当はいい奴なのに、なぜ他人には残酷になれるんだろう……」

「俺はいい奴なんかじゃない！俺は善人でもないし、ただお前が心配なだけだ」

ジェームズは、背中をさする手をそつと離れた。

警察署長に無慈悲に犯された16歳の日以来、ジェームズの心のなかの時刻は止まったままで、そして何かが欠落してしまっただった。恐怖の余り、狂ったように泣いて懇願したのに、署長はあざ笑いながら事は終わり、犯されたジェームズはボロ屑のようになった。

もしもあの時ボブが居なかったら、ジェームズは今頃どうなっていたらだろうか。

ボブはジェームズにとっては、友人以上の者だった。兄弟であり、

愚痴を言い合う相手であり、一緒に飲んだくれる相手であり、そしてジェームズに、いささか頭が弱いがお人よしのニッキーとか、大男で力持ちのドリューなどのダチを紹介してくれたのも彼である。

それまで、ジェームズは誰彼構わず、喧嘩を吹っかけられてはそれに応じて傷だらけになっていたが、なぜならば自分の味方と言うものが一人も居なかったからだ。けれどもボブと友達になつてからは、少なくとも3人の味方が出来、ドーセットのたった一つしかない通りを、大きな顔で闊歩することが出来るようになったのだ。人生に絶望してやけっぱちになっていたジェームズに、生きる楽しみと、笑いと、仲間達を与えてくれたのがボブだった。だからこそ、もしボブを失えば、ジェームズは再び生きる力を失うことになるのだ。

ジェームズはボブを抱きかかえるように冷たい外に連れ出すと、町外れの靴屋まで送って行った。木枯らしはボブとジェームズの髪を乱し、そしてジェームズの心の中まで吹き抜けて行く……。

11月始めのある日、サラと中年に差し掛かっている小間使いのエレーンが昼ご飯用のバスケットを持ってドーセットの北のはずれの示し合わせた橋の下に立っていると、ジェームズの荷馬車がやって来た。二人は周囲を注意深く見渡すと、素早くそのガタピシする狭い荷馬車に乗り込んだ。

エレーンの大きなお尻が何かのずだ袋に当たり、彼女は顔をしかめた。

「狭くて済みませんが、荷物があるんです。町の雑貨屋に用事があると行って来たから。事実用事があつたんですけどね」

とジェームズが使用人のよく被るハンチング帽子を目深に下げて、そう言い掛けると、

「お嬢様。わたしはこんなことに片棒を担ぐのは、本当は嫌だったんですけどね」

エレーンが肩をそびやかし、ジェームズの背中を見ながらそつとサラに耳打ちした。けれどもサラの方は楽しくてたまらないかのように、一笑に付した。

サラはこの日を待ち望んでいたのだ。そして不遜にも、昨晚寝る前には、

「どうか、明日が雨になりませんように」と神に祈っていたのだった。

サラの願いが通じたのか、朝方の雨が上がり、今は久しぶりに雲間から日の光が漏れてきていた。

「でも、わたし、何だか冒険しているようでワクワクしているのよ！ こんな興奮は久しぶりなの」



「そうですかあ。わたしは何か心配だし、心に引つかかるんですけどねえ。悪事に加担しているようで」

「悪事、ですって!？」

「いや、そのう」とエレーンはいい過ぎたと感じた。「つまりです、お父様に知れたらとか思っちゃって」

「大丈夫よ、エレーン。あなたさえ黙っていたらね」とサラは幾分皮肉交じりに答えた。

「どこに行きます?」

とジェームズが振り返ったので、エレーンはプイと横を向いた。エレーンもちろんウェールズ人だし、ここドーセット近郊の小作農家の出なのだったが、それでもジェームズ・エドワーズは気に入らなかった。

「どこでもいいわ。でも、美しい所。沼とか池とか……ヒースの茂みとか」

(アネットは確かそう言っていたわね……)

「それじゃあ」

ジェームズは又正面を向き、手綱をしっかりと握り締めた。二人には分らない、邪みな笑みが漏れた。

(ネンネのお嬢様にはお誂えの場所があるんだよな……)

荷馬車はこの辺り特有の丘と丘が連なる不毛の大地のせいで、時々上下に飛び跳ねた。ゴツゴツした岩肌と小さな林を幾つか過ぎて行くと、遂にジェームズが意図する場所に着いた。

そこは思わずサラが歓声をあげたほどの素晴らしい景色を有した神秘的な沼のほとりで、遠くまでヒースの丘が連なっていた。サラはすっかり夢見心地になり、ジェームズに手を取られて危なっかしく地面に降り立った。

ちょうど雲が晴れて、日の光が差し込み始め、沼の表で反射した。

「如何でしょうか、お嬢様？」

「ステキ！」とサラは簡潔に一言だけ述べた。

「昔、コンステーブルの油絵をどこかで見たとき、こんな風景画があったわ。わたしはその絵の前で、母に促されるまで何分間も立ち止まったままだったみたい。でも、実際にそういう風景がこんな身近にあったなんて……知らなかった」

サラは手を目の上にかざした。ボンネットのピンク色のリボンが、微かに揺れている。

「コンステーブルの絵がある家なんて、きっと大邸宅でしょうね」とジェームズがつぶやいた。サラはハツとして振り返った。

「コンステーブルの絵、ご存知なの？」

「以前、カーディフに居た頃見たことがあります。ギルフォード邸では、趣味の悪い絵ばかりだし、それに俺は滅多にお屋敷には入らせてもらえないけど」

そう述べるジェームズの横顔は、どこか寂しそうだった。

ジェームズは、サラが自分を穴の開くほど覗いていることには気付かなかった。今の彼は芝居ではなく、本当に遠くを見るような目付きだったのだ。そしてどこか寂しい虚ろな目付きで。

（昔、俺んちにも、コンステーブルの風景画があったな。確か、母がその絵を好きだった）

「ジェームズ」

「え？」とジェームズは我に返った。

「行きましょ」

サラは小さく頷くと、ジェームズを促した。

エレーンが沼から少し離れたとある一本の大木の下に、敷物を広げ、ランチの用意をしていた。サンドイッチやジャガイモのチップス、クッキー、それに果物の数々を。

そして準備しながらも、エレーンは時折チラチラと仲良さそうに

二人が喋っているのを、複雑な眼差しで見つめていた。と言うか、監視していたのだ。それはオーウェル夫人に言い付かったのだったが、今は彼女自身もジェームズとサラの有様を興味深げに見ていたのだ。

エレーンはそんなに賢い女ではなかったが、それでもサラがジェームズに夢中になっていることぐらいは悟っていた。受け答えるジェームズには、この間のような取り澄ました所はなく、世間で言うウルとは程遠い雰囲気を漂わしている無邪気な若者に見える。粗末なホームスパンのシャツも、茶色のベストも、何気ない服なのに、何を着ても彼には似合う。

いつも外での仕事なのに、抜けるような陶磁器のような白い肌とコントラストを成す黒い漆黒の髪がハンティングからはみ出していたが、けれどもそれは無造作であるようでいて、そのくせ一幅の絵のようだった。

時々何かで笑う時の白い歯が印象的だ。サラが夢中になるのも無理は無いかもしれないと、それが癢でもあったが妙に納得出来る。けれども、エレーンはドーセットでの数々の嫌な噂話を逐一知り尽くしていたので、どうしても、ジェームズを信じきることは出来ないのだ。

「やれやれ、お嬢様のような知的な方が、あんなウエールズのゴロツキをお好きだとは。世も末だわね」

二人が何か笑いながらやって来ると、エレーンの用意した敷物に座り込み、そしてさも楽しげに食事をした。絵の話、音楽の話、童話、本、歴史、風景……話は尽きなかった。何を問いかけてもジェームズは話し上手で、話題には事欠かない。成績が良く勉強家だったという噂はどうやらほんとうだったらしい。

サラは絶えず何か話し、笑い、エレーンが鼻屑目に見ても幸福そうだった。

「さ、もう食べきれないぐらい食べたわ」

「ほんに、少食のお嬢様にしては、よく食べられましたね」

「そうよ、エレーン。こんなに空気の綺麗な場所では、何もかもが美味しく感じられるわ」

エレーンは肩をすくめながら、片付けた。

「それじゃ、お嬢様……」

「ちょっと待って！ 少しでも、あのヒースの丘に登りたいわ。ね、いいでしょ？ 決して遠くには行かないから。お前の見える範囲にしか行かないから」

エレーンは反対出切る立場には無かった。エレーンがため息をつくと、サラは立ち上がり、スカートのパン屑を払った。

「ジエームズ。散歩に行きましょう」

「え？ ああ、いいですよ。でも気をつけて下さい。転ばないように」

二人は顔を見合わせると、エレーン一人をその場に残して、ヒースの丘に登って行った。

アネットが夢見ていた『ロマンチックなヒースの丘を歩く』と言うことが、サラに取っては現実になった。確かに、秋の日が差すヒースの丘を分け入りながら歩くのは素晴らしいという事実を証明したものの、時折ジェームズはふつと黙り込み、サラには見向きもせず自分でさつと登って行く。

それでもサラは、ハアハア息を弾ませながらジェームズを追い駆けるのが楽しくてたまらなかった。ジェームズの背中を遥か頭上に見上げながら、彼女はスカートをたくし上げて息せき切って登りきった。

そしてサラは息を切らして、とうとうその場にへたり込んだ。ジェームズはやつとこちらを振り返り、自分を追って来たサラに呆れながら近寄って来た。

「大丈夫ですか、お嬢さん……いや、サラ？」

サラはゼーゼー言いながらも、眼鏡の奥の目だけは輝かし、

「大丈夫。コルセットがきついのだよ。それにスカートが邪魔だし」と、胸を上下させながら楽しげに答える。ジェームズももう登るのに飽きて、サラの側に座った。下ではエレーンが遠く豆粒大にしか見えないが、ジェームズはあえてサラとの距離を1フィートは空けていた。けれども、この静けさでは囁き声でも聞こえる距離だ。

「君はいくつ？」

「16。でも来年の1月には17になるわ」

「あと、2ヶ月ほどで17か。じゃあ、またあのようなパーティをするつもり？」

「多分ね」

そう答えると、サラは横向きになったままのジェームズを覗き込んだ。

「でも、あなたをお呼びするのは無理ね。父が許すはずがないもの。それでなくとも、男の方だし。あの……」

暫くサラはためらった後に、思い切って切り出した。

「何だかわたしのことばかり喋っていたようだね。わたし、あなたのこと、余り知らないのに」

「知らなくっていいよ」

「いいえ！ いいえ……知りたいのよ。知らなくてはならないわ。わたしだけじゃなく、あなたのことを知りたい」

「つまらない話だよ」

ジェームズは側のヒースを引つ張ると、ポイと投げた。その葉は微かな風に乗って、僅かに右へと漂い、すぐに下に落ちた。

「父はなぜあんなにもあなたを毛嫌いしているのかしら？ 他の教え子には道端で出会ったりすると、必ず『どう、元気かね？』と声を掛ける人なのに」

「俺に会ったら、オーウェル校長は顔を背けてしまう」

「なぜなの？ ジェームズ、なぜ？ ただの変な噂だけじゃ答えは見つからなくて。だって、父はかなりの評判の悪い子とか乱暴な子にも、同じように接するのに。皆、ウェールズ人の生徒だし。何か二人の間にあつた？」

「別に」とジェームズは、サラの詮索好きに苛々しながら答えた。けれども、表面的には何気なさを装っていた。

ふと見ると、心から心配そうなサラの瞳が、真っ直ぐ自分に注がれている。好奇心溢れた瞳と、少しおでこの額、卵形の顔立ち。そしてすばめた小さな口元……。校長には余りにも似ていない。その顔には邪心というものが全く無かった。

ジェームズは少しだけ微笑んだ。

「俺と先生は……ウマが合わなかったんだ。俺はしょっちゅう授業中に生意気な発言を吹っかけたりして、先生を怒らせ、先生はよく俺の尻を鞭で引つ叩いたものだ。先生も俺を好きじゃなかったし、俺も……先生が嫌いだった。大嫌いだったよ！」

ジェームズの述べていることは、半分は本当であり半分は嘘だったが、暫く気まずい雰囲気が二人を包んでいた。

「そう……」とサラは何だかとてもなく哀しくなりながら、両手で膝を抱えた。自分の父が少年のジェームズに鞭を振るっている姿を想像すると、何故だか知らないが二人とも哀れに感じてきて自然に涙が滲んでくる。

今日のサラは地味なベージュの服だった。それに白いレースで縁取られた、装飾用のエプロンを身に着けている。

「ごめんよ、サラ」とジェームズは思わず本音を喋った。「でも、相性ってあるだろう？ 君は先生には全然似ていない。だから君がああ厳格な校長先生の末娘だったこと知らなかったし……だから、あの時は、ただ」

「いえ、いいのよ、ジェームズ」

サラは出し抜けに制した。「感謝しているの。あんなに男の方に優しくされたの、初めてだったから。わたしのような、ハンデのある女に、あんなに……」

サラの瞳は涙で潤んでいた。「本当に……ありがとう、ジェームズ」

ジェームズは再び横を向いたが、妙な気分が自分に押し寄せているのに気付いて、狼狽していた。

「君は先生とは違って、とても優しい女の子だし、親切だし。だから俺のような者を誘うなんて……どうかしている」

ジェームズは再びヒースを千切ると、自分の口元に当てた。幼い頃作った、草笛のように。

「わたしは母に似ているの。多分、外見も中身も。母は誰に対しても悪く取れない人なのよ。例えば殺人犯が処刑される朝でも、その人の為にスープを作つてあげると思う。そんな人なの。例えば悪いけど」

「俺も、俺も犯罪者かもしれないよ、サラ！」

本音を喋るなんて、何てバカなんだ！ けれどもサラは真面目にジェームズを見つめると、ぷつと吹き出した。

「まさか！ あなたは犯罪者になんか絶対になれないわよ！」

「どうして分かるんだい？」

「だって……分かるんだもの。わたしが保証するわ」

（君は本当に阿呆だ！ そんな確信なんて、糞くらえさ！）

サラはそんなジェームズの下心も何も知らぬまま、恥ずかしげに微笑んだ。

「さ、もう戻らなきゃあ。あの侍女がこっちを胡散臭そうに見ているからね」

「ねえ……あの……ジェームズ」

「なに？」

「又、会えないかしら？」

ジェームズはそこまでサラが大胆だとは正直思っていなかった。

渡りに船だが、けれどもどこか気が引けるのは……。振り返るとサラの頬は紅潮していた。

「でも」

「もつと話したいの。あなたの事知りたいの」

「それは無理じゃないかな……」

むしろジェームズの方が及び腰だった。「だって……」



「それじゃ、こつそり。二人だけで」

「!?」

ジェームズは言葉さえ失った。

「そうよね。わたし、何を言っているのかしら？　こんなはしたない事を言うなんて。あなたが今日わたしに新しい世界を見せて下さっただけでも、素晴らしいことだったのに、これ以上要求するなんて！　わたしって……」

「いいよ、サラ。俺でいいなら、いい場所があるんだけど。だけど、これは秘密だよ。誰かに知られちゃまずい事になるから」

「いいわ！　絶対に秘密にするから」

とサラは情熱的に答えた。結局ジェームズは今日の目的を完璧に達したのだ。いや、達し過ぎたのかもしれない。純情無垢なサラに激しい恋心を吹き込んだ。これ以上ないというほどの“恋情”を。

二人はヒースの丘を降りながら、せわしく囁きあった。サラをじらしてゆつくり楽しむかのように、ジェームズは手すら握らなかつたが、サラにはそれで良かった。次に会うというワクワクする楽しみが出来たのだから。これで終わりではなかつたのだ。始まりだったのだ。けれどもそれは、“悲劇の始まり”だったということには、二人はまだ気付いていない。

「町外れのドーセット川に掛かる石橋を知ってる？」

「ええ。あそこは知っているわ。少し寂れた場所ね」

「その橋げたに立つ一本の栗の大木。その北側には小さなほこらがある」

「ほこらね」

「そこに手紙を書いておくよ。時々覗いてみて欲しい」

「分かつたわ」

「ギルフォード家のボート・ハウスは、町から一番近い場所にあるけど、そのボート・ハウスは大概庭番の俺しか居ないんだ。その日

を知らせるから」

「分かったわ」とサラは小声で、けれども嬉しそうに答えた。

「お嬢様方！ 一体いつまでこんな場所にいらっしやるおつもりですか？」

と言うエレーンのガミガミ声にも、二人は知らん振りをしていた。サラはこのような口うるさい監視者であるエレーンの居ない、二人だけという響きに酔っていた。そのような密約を知る者は誰も居ないのだ。

こうしてこの日は大成功に終わった……つもりだった。

けれどもジェームズは作男用の狭く汚れた自室に戻ると、ぼーっとしたまま、暫くベッドに座り込んでしまった。何かが変わろうとしているような妙な気がした。そして、サラのあの無邪気な瞳が脳裏から離れない。

ジェームズは気を取り直して、昨日来た妹のメアリーからの手紙をもう一度取り出した。手紙はいつものように封も切らずに、放置してある。ジェームズは数秒間だけ躊躇ったが、結局粉々に破り捨てた。今夜は少し冷え込むようだった。冷たい青い月が、小さな窓から見えていた。

俺は、これから一体何をしようとしているんだ……。

## 幻影〜海辺で〜 1

幻影〜海辺で〜

1

あの日以来、サラは一日でもジエームズと離れていることが、耐え難い苦痛になった。もちろんオーウェル夫人も、一緒に付いていたハイエナのようなエレーンも、よもやサラが再び、それもたった一人だけでジエームズに会おうと考えていることなど、夢にも思っていないかったのだ。

サラはいつも控えめで、そして口数も多くはないもの静かな娘だった。目の病いのせい、自分から進んで誰かを訪問したり、誰かに向かつて積極的に友達になろうとした事もない。その上、田舎の社交界では大体15、6になるとパーティやその他の社交的な席にお披露目するものだが、サラは去年やっとクリスマスパーティにバロウズ町長のパーティに出かけたものの、けれどもその醜い眼鏡姿ゆえに、誰もサラをダンスに誘うような奇特な若者は居なかった。辛うじて彼女は壁際に居り、それから強いシェリー酒を飲んでむせ返ったという失態まで演じてしまったのだ。

そのような末娘の外見は、両親にとつては不安の材料だった。目が見えるようになって、それでもかなり弱視であり、完全に矯正出来る物ではなかった。その上サラの内気さとパツとしない容姿では、サラを伴侶として近づく若い男性は居ないだろう、というのが両親の一致した意見だった。

両親は一生サラの面倒を見なければならぬのだ。その責任は重く彼らにのしかかっていた。

そのようなサラが激しい恋情を誰かに持つなど、両親には想像す

らできるはずがない。けれども、サラはやはり女性、そしてまだ若い花も恥らう乙女なのだ。その事実を両親は忘れていた。唯一人、エレインだけはサラの持つ積極的で意外な面を少しだけ垣間見ていたが、それでもまさかサラが町一番評判の悪いジエームズと再び会おうとしていることなど、絶対に考えられなかった。

そのような周囲の思い込みは、サラにとっては逆に吉になった。彼女は自分の持つ大胆不敵な欲求に、自分でも驚きながらも、反面ジエームズがヒースの丘で囁いた事は実は自分をからかう為の行為ではないか、と疑っては悶々とした日々を過ごしていたのだった。家族を騙しているのは辛かったが、けれどもそれは甘い“苦痛”だった。

それでも、時折散歩と称して町中に行き、例の石橋の脇にある栗の木の下にそと手を伸ばしては、そこに何も無いのを確かめたときほどの失望感、いまだかつて味わったことがなかった。（わたしはジエームズに騙されたか、からかわれたんだわ。あの人がわたしのような障害のある娘と会ってくれるはずがないもの。それに彼はギルフォード家の使用人で、自由になる時間もさほど無いのだし）

サラはそう自分に言い聞かせながらも、帰り道には涙がこぼれ落ちる。

このような半ば諦めかけた気持ちで何日も経った後、ほこらを探っていたサラの手に何かガサガサしたものが触れたとき、サラの心臓は止まりそうになった。彼女はさり気なくそれを自分のポケットに突っ込むと、自室に入りボタンと扉を閉じて、息を弾ませながらその粗悪な質の手紙を読んだ。

11月15日の午後、3時から一時間だけ、例の場所で待つ。返事請う。

「」

文面は素っ気無かったが、それはわざとであるとサラは信じた。事実、それは半ば真実だった。もしも誰かがそれを読んでも、何の意味だか分からないように、その文はまるで暗号のように書かれてあった。

けれども、その字は美しく、洗練された字体だった。サラは息を飲むと、その場に卒倒するのではないかと言うほどの喜びに満たされた。もしも彼女が上手く踊れるのなら、その場でクルクルとワルツを踊ったかもしれない……。

けれども次の瞬間、サラは抜け目なくその手紙を灯火の火で燃やした。そして、夜皆が寝静まるまで待つと、蝋燭の光の下で素早く書きつらねた。

「」へ

承知しました。参ります。S

「」

11月15日は4日後だった。次の日、サラはリボンを買うために何気なくそこを通り掛る振りをして、誰も居ないのを確かめると、さつとその手紙をほこらに入れ込んだ。掌が燃えるような気がした。4日後までに、ジエームズはこの返事を受け取ることが出来るのだろうか？

けれどもそんなことよりも、サラは遠出をする口実を見つけなければならぬ。考えあぐねた挙句、以前からサラをお茶に呼んでいたアネットの所を訪問する事にした。家族はやや驚いたが、この間

のパーティで知り合つて仲良くなつたと信じ込んだ家族は、誰も反對をしなかつた。少なくともアネットは、あの馬鹿馬鹿しい娘達の中でも、ノラの次に信用が置けそうな人物のような気がしたからだ。

「アネット・ハットフィールドは、まあまあ土地を持った地主の出だわ」

とオーウェル夫人は、何一つ娘の企てを疑わずに言った。この目の前の地味な娘が、こんな大胆な企めをしているとは、母であるオーウェル夫人でさえ想像だにできない。

「行つてらっしゃいよ。でも、早く歸つてね」

「多分、5時頃までには戻れると思うわ」

とサラは邪気もなくニツコリと微笑んだ。そして疑われないように、わざと冴えないグレーの毛織物の服を選んだ。

こんなことをしている自分が、自分でも信じられなかつた。一体、本当の自分は何なのだろう？　今まで、おとなしい娘を演じていた自分は、あれは実は仮の姿だつたのだろうか？

一方、ジェームズはサラの返事を発見したとき、なぜか身内に震えるような衝撃を覚えた。サラがそこまで危険を冒すとは、実は少しだけ疑つていたからだ。

（あの子は何を考えているのだろうか？　盲目的な何かに突つ走つているのを知らないのだろうか？　それとも、彼女の真の姿は、本当は……）

ジェームズは自分を追い求めているサラの本心を計りかねて、一瞬躊躇したものの、すぐにニタリと嗤い出した。

（いいだろう、サラ。待つているよ、君を！）

その返事もまたすぐに暖炉の炎にくべられ、その手紙は拭れる様に燃え果てると、やがて瞬く内に灰になった。

待ちに待った日は、小雨がそぼ降る日だったが、サラはキッチンと昼食を食べてから、フードを被り、地味なグレーの毛織モスリン（\*もともとは綿織物だが、イギリスのモスリンは羊毛100%の単糸で織った薄手の柔らかい生地。今はほとんど使われていない）の訪問用のワンピースを着ると、歩いてでも行ける範囲のアネットの家に出かけた。

ししつ鼻とそばかすの多いアネットのうちは農園主だったが、けれどもそれほど豪華な家ではなかった。彼女には兄や小さな弟が居るが、母親は後妻だった。

サラはアネットと小一時間ほど喋りお茶を早々に済ませると、「急用があるから」と言って呆れ顔のアネットと別れ、急ぎ足で泥道を歩いた。アネットの家からギルフォード邸までは裏道がある。細かい雨の為に空気は冷たいが、急ぎ足のせいかもしれない。サラの心が燃えているせいか、体内は暑いぐらいだった。

ジェームズが待っていると書いていたギルフォード家所有のボート・ハウスは、ドーセットの町の縁<sup>へり</sup>にあった。深い池があり、毎年春から夏にかけて一族はそこでボート遊びや水泳、そして夏のガーデン・パーティーなどをするが、秋から冬にかけては時折の狩の時以外には使われない場所だった。

特に池の側のボート・ハウスは、使用人以外はほとんど使うことがない。

サラは息せき切って駆け足で歩くと、ほとんど30分は遅れてしまったと思われるボート・ハウスの扉に辿り着いた。その中に果た

してジェームズが居るのか、それとも待っていたとしても、サラが遅いので既に作男用の小屋に戻ってしまったのか計りかね、そして不安で扉をノックすることが出来なかった。

息を静めていると、ふいに扉が開き、ジェームズのやや不愉快そうな顔が現れた。

「あ、君来ていたの？ 足音がしたので、誰かと思った」

「ジェームズ……」

サラは慌てて言葉を発したが、しどろもどろだった。

「ごめんなさい……わたし……どこにあるのか、とまどってしまった」

「いいから、早く中に入って！」とジェームズはサラを促した。サラが急いで中に入ると、ジェームズは抜かりなく辺りを見回し、薄暗い木陰に誰も居ないのを動物的な勘で確かめてパタンと扉を閉じた。

「ジェームズ、あの」

「誰かに見られなかった？」

ジェームズはオロオロしているサラを無視して、命令的な口調で問うた。

「いいえ、誰にも！」とサラはジェームズの態度が以前のように優しくない事を知りつつも、自分が遅れてきたことでジェームズが怒っていると感じ込んで、しおれていた。

「御免なさい、ジェームズ」

「まあいいさ」とジェームズは素っ気無く言った。「ここは分かりにくいんだ」

サラはボンネットとフードを被ったままだった。水滴が眼鏡のレンズにも幾滴か付いている。頼りなさそうに突っ立ったままのサラを見ると、ジェームズは怒りとそして相反する哀れさを感じた。



「こつちに来て、暖炉に当たりなよ。ボンネットも取って」  
「ええ」

サラは自分がとんでもなく大胆な事をしてしまったと、初めて感じた。見知っているとは言え、若い男しか居ないうら寂れたボート・ハウスに両親に黙って、そして友達を欺いて来てしまうと言う自分が信じられない。

けれども暖かそうな暖炉の側に膝を抱え、粗末なラグの上に座っているジェームズを見てみると、その罪悪感や危惧も瞬く間に消え果てて行く。どんな場所に居ても、ジェームズは美しい。

サラはボンネットとフードを脱ぎ、そろそろ暖炉の側に近寄った。

「おいで」とジェームズは例によって、甘い声を掛けた。「怖がなくていいよ。俺は何もしないから。外は寒かっただろう？」

「ええ」と言いつつ、けれどもサラは湧き起こった微かな後悔に浸されながら小声で答えた。サラは自分が何をしているか、何をしようとしているのかさえ分からなかった。

ただ分かっているのは、目の前にジェームズのアメジスト色の瞳がある事なのだ。

「ここが俺の城」とジェームズは無理やり微笑みながら言ったが、さすがにサラはその微笑が偽者である事を見抜いた。

「暖かいわ。居心地良さそうね、でも」

「なに？」

「城、だなんて。あなた、嘘付いているわね」

ジェームズはギクツとして振り返った。

「そうかな」

「だって、侘しいし、それに……狭くて、すえた臭いがする単なる粗末な小屋よ」

「だね」とジェームズはサラの率直さに、やや驚きながら言った。

「だから言っただじゃないか。ここは大した場所じゃないって。お譲様には物足りない所なのさ」

ジェームズは不貞腐れたように、腕を枕にして仰向きに寝そべった。

「ごめんなさい……そういうつもりじゃ」

「じゃ、何さ」とジェームズは立ったままのサラを見上げながら、邪険に言い放った。

「あなただって昔はお金持ちの商人の出だったんでしょ？　だから、こんな……こんな場所には居たくないだろうと思って」

「誰だって、こんな所には居たくないさ！」とジェームズは思わず声を荒げた。サラは自分が思ったよりも聡明だが、やはり何の想像力もないネンネの女だ……。

「哀れと思うのなら、もうここに来るのはやめることだよな」

「違うのよ」とサラもむきになって言った。サラは母から聞かされた、ジェームズの負ったという莫大な負債のことが頭にあったのだ。「違うの……。ただ本来ならあなたはこんな所に居る人じゃないって、そう思ったの」

「俺のこと知ってたのか。両親の事とか」

「ええ、少しだけ」とサラは言いながら、ジェームズの隣に座った。少し離れて。

「この間会って感じたけど、あなたは頭がいい人だし、話題も豊富だった。だけど、何か背負うものが多すぎるような気がしたの、あなたには」

ジェームズは横を向いて黙り込んだ。サラの着るグレーのモスリンの服が柔らかく匂う。今日のサラはどこか違った。今までの大人しくて幼い少女の姿ではなく、どこか成熟しかかった意思的な女性の匂いがする。

「あなたには妹さんが居たのね」

「居るよ。君よりも一つ上の」

「お寂しいでしょうね、あなたも妹さんも」

「メアリーだ」

「彼女を、つまりメアリーさんを今どこかの修道院に預けているって聞いたけど」

「そう」とジェームズは虚ろな視線を彷徨わせた。妹に会いたい！けれども、会いたくない。複雑な感情が渦を巻き、ジェームズは目を瞑った。

「何だか分かるわ、わたし」とサラはジェームズをチラと見ながら、小さくつぶやいた。「妹さんの事が、気がかりなのでしょう？」

ジェームズは黙っていた。当初の目的が、いつの間にかどこか別の方向に行こうとしているような気がするの、一体何故だろう？

『セント・マグダレーナ修道院』の総院長はシスター・ルースで、彼女は温厚な丸顔に老眼鏡をかけている。折りしもシスター・ルースが午後のあれやこれやの用事をこなして自分の事務室に座っていた時、控えめなノックと共に、年若い修道女見習いのメアリー・エドワーズが心持顔を俯けて入って来た。

シスター・ルースはその時ふと、9年前にやって来た痩せこけて目ばかり大きかった、哀れで小さな姿のメアリーを思い出していた。9歳のメアリーはたった一人の兄からも引き離され、全く孤独でほとんど口も効けないような女の子だったのだが、今のメアリーはやや打ち沈んでいるとは言え、18歳も間近の花も恥らう乙女になっていた。

メアリーは背が高くなり、やや丸顔で色白の頬、紅も差していないのに紅い唇をし、房々した金髪を白い被り物で覆っておくのは本当にもつたいないと思わせる。

数年前に会いに来た兄に似てはいるが、兄よりもっと意思的な顔立ちだ。院長にとっては兄のジエームズ・エドワーズも妹に負けず劣らず美しく感じられたが、心から好感の持てる青年とは言い難かった。

兄のジエームズはどこかイジケて見えたが、良く取れば、それは世俗の垢にまみれてしまった故なのかも知れない。

ともあれ兄妹そろって美しいのは確かだが、どうも運命と言うものは、その“美”そのものも悪い方向へと向かわせているらしいのだ。残念なことだが……。

「何かご用ですか、メアリー？」

「そうです。お忙しいとは思いましたが、ご相談があつて参りました、修道院長様」

メアリーは上目遣いにシスター・ルースを見上げると、足を曲げてお辞儀をした。

「お兄様のことがしら？」

ズバリ図星だったので、この若い修道女見習いはドキツとして立ち止まった。

「ええ……あの」

「まあお座りなさい」

言われるまま、メアリーはまるで夢遊病者のように側の木のベンチに座り込んだ。濃い茶色の大きな瞳は見開かれ、窓の外を向いている。けれども多分何も見えてはいないのだろう。

「相談とは？」

「院長様は何もかもお見通しですね。確かに兄のことです。兄が一体ドーセットでどう暮らしているのか、わたしには全然分からないのです。今となつては兄の気持ちすら、ほとんど想像できません」

シスター・ルースは身を乗り出した。

「返事が来ないの？ 手紙はちゃんと書いていますか？」

「ええ。シスターの言われたように、毎月一度色々書いています。

春に迫った請願式のことや、わたしの迷いなども。でも、兄からは何一つ言つてきません」

「何も！？」

「え、ええ、何も」

シスターは背を元に戻した。

「最近来た手紙は何時の事ですか？」

「さあ、何時だったでしょう？ いいえ、今年来た事なんかあつたかしら？ 去年のクリスマスの時の短いメッセージをもらったわ。

それ以来、何の音沙汰もありません」

「おやまあ！」とシスターは両手をあげた。「早く言えば宜しいのに！」

けれどもメアリーは上目遣いに院長の方を向いた。その目の中には、どこか不信感が漂っていた。それは兄のジェームズにも、そしてシスターにも……。

「そうかも知れません。多分わたしは事実を正視するのが、そしてそれを誰かに知られるのが怖かったんでしょうね。兄はわたしをもう嫌いになったと。そしてわたしのことを厄介者だと思っているんだと。もうすぐわたしがこの修道会を出なくてはならないのは知っているはずなのに、きつともうわたしとは暮らしたくないんですね」メアリーの見開かれた茶色の瞳から、大粒の涙がこぼれ落ちた。

「それとも、サタンがわたし達を引き裂こうとしているでしょうか」  
「まあお待ちなさい！ お兄さんは、そのような薄情な人には見えなかったのですが。それにあなただって本当にそう信じているのですか？ 嘘でしょ？」

けれどもメアリーは堰を切ったように、肩を震わせて泣いていた。長年聖職に付いているシスター・ルースはこのような場面には、もう何度も遭遇していた。そしてその涙が嘘か偽りかも、見抜けるだけの度量も有していたが、目の前のメアリーは明らかに本当に不安に駆られているようだった。

「あなたの手紙が確實にお兄さんの手に届いているかも、疑問でしょうね。お兄さんはあちこち転々としたし、今の所も使用人にちゃんと手紙を渡しているのかどうか。それに、お兄さんにはご返事が書けない理由があるのかもしれないわ。なぜ、そんなに決め付けたりするの？ そりゃ、あなたが淋しいし心配だし、疎外感があるのは分かっていますよ」

「違うんです……」とメアリーはしゃくり上げながらも、意外なこ

とを口走った。

「違うって。何が？」

「それは」とメアリーは一段落を付いた後に、深呼吸をしてから言い出した。

「わたし、そりや不安で淋しい……それは本当です。でも、怖くはなかったし兄を信じていました、昨晚夢を見るまでは」

「夢？」

「ええ、そうです。院長様。それも怖い夢です！ 悪夢でしたわ！わたし思わず大声で叫んで明け方に飛び起きました。同室の人に聞こえたかもしれません」

「良かったら、お話なさい」

「でも、それは……」

メアリーのその夢を思い出したのか真っ青になると、再び肩をガタガタと振るわせ始めた。シスター・ルースは驚いて机を離れるとメアリーの近くに寄り、心配そうにしゃがみこむとメアリーの震える冷たい手を取った。

「誰か呼びましょうか」

「いいえ！ 誰にも！ 誰にも知られたくないんです」

「分かりました。大丈夫よ、メアリー。わたしが居ます」

メアリーはシスターの腕をゆつくりと解くと、その手を自分の膝の上にキチンと置いた。けれども、その瞳は伏せられ、真っ直ぐとシスターを見上げることさえ出来ないような有様だった。著しい怯えの表情が、メアリー全体を覆っていた。

「わたし、夢の中で、何か、ブラブラとぶら下がっているものを、見ていました」

メアリーはやがてほとんど聞こえないほどの小声で途切れ途切れ言い出した。

「薄い靄の中に、それは、下がっていて、カラスが……多分カラス

だと思っわ、2、3羽それを突っついていて、わたし、それをもつと見ようと、少しずつ近寄って行きました。凍れるような風が吹いて、それは絞首台だと、分かり、そこにぶら下がった人物らしきものは、もうピクリとも動かず、ただ風にだけは、ブラブラと揺れて……」

突如メアリーはパツと顔を上げシスターをはたと見つめると、それから又下を向いて言った。

「わたし、見たんです！ それは、兄さんでした！」



「ああ、メアリー!!」

思わずシスター・ルースは叫ぶと、手を口に持っていた。

「兄は、カッと目を見開いて、わたしを凝視していました! カラスが気味の悪い声で鳴いて……。余りの恐ろしさに、わたしは大声を上げてしまい……。院長様! これは、これは一体何の意味なんですか? 何かを予見しているのでしょうか? だったらわたし、わたしは……」

シスターは思わずその痛々しい娘を胸にしっかりと抱いた。そしてこういう場合、どういう言葉を掛けるべきか、さすがの経験在るシスターにも判断しかねた。けれども言うことはただ一つだ。

「メアリー。それはあなたの心の不安から出た幻影に過ぎないのよ! サタンがそうやってあなたを試しているのだわ、きつと」

「でも、わたしは兄を失うような気がして、もう怖くて不安でどうにかなくてしまいそうなんです!」

メアリーは声を絞り出すと、再びワツと泣き崩れた。シスター・ルースはそのようなメアリーの背中をゆっくりと撫でていた。出来ることと言ったら、こういうことしかないのだ。今まで何人ともなく不幸な子供達を育て教育してきたけれども、ただこうやって哀しみと不安を共有することしか手はないということを、彼女は知っていた。

やがてメアリーは泣きながらも少しずつ落ち着き始めた。メアリーの嗚咽は段々と小さくなっていき、雛鳥のように安心感に浸されていく。

「大丈夫よ、メアリー！ よく分かりました。あなたの心の哀しみや不安定さの元が何かを。早速兄さんの消息を尋ねてみましょう。多分何か事情があつて、あなたの思い違いかもしれないから。そうすればあなたの迷い……修道女として生涯を送るか、それとも大変だけど、自立してここを出て行くかということも、自ずと解決できるでしょう。例え、お兄さんが引き取らなくても」

「引き取らない……」とメアリーは淋しく言った。「そうですね、わたし、兄に頼り過ぎていたんだわ」

「それも仕方のないことですが、たった一人のあなたのお兄さんですからね」

メアリーから離れたシスターはニツコリと微笑んだ。

（綺麗な娘だこと！ あなたが兄に見放されたら、どう自立できるか。例え頭の良いあなただから、どこかの家庭教師になれたとしても、あなたの純潔が果たして世間で通用するのかしら！ だってあなたは綺麗過ぎるもの、メアリー）

シスター・ルースは自分の勘が外れたことがないという事実をよく認識していた。けれども彼女はいつ如何なる時にも、冷静さと言うものを失わない人物だった。だからこそ、このオンボロ修道院を経営していく手腕も持っていたし、ここに居る50人近くの修道女や身寄りのない見捨てられた孤児の女の子達から絶大なる信頼を勝ち得ていたのだ。

けれども今のこの告白は何かしらこの老獪なシスターをもゾツとさせ、凍れるような気持ちにさせた。

メアリーが礼をして出てからも、シスターは長い間部屋の中を右往左往していた。メアリーが明け方見たと言う幻影は、そっくりそのまま彼女にも想像できたのだ。それが何故だかは分からないが……。

やがてシスター・ルースは、ドーセットと隣町のリトルウッドの

この二つの町を受け持つサイモン司祭に手紙を書き出した。

『……お暇な折、ここのメアリー・エドワーズの兄、ジェームズ・C・エドワーズについてご一報下されば幸いに存じます……』

＊＼＊＼＊＼＊＼＊

「メアリー！」

その時ジェームズは、突如湧き起こった不吉な気分襲われて叫ぶと、寝そべっていた場所から飛び起きた。

「妹さんが？」と、ボート・ハウスの中の暖炉に当たっていたサラが驚いて首を巡らした。

ハーツというジェームズのため息が聞こえた。

「妹が僕を呼んでいる声が聞こえた。何か叫んでいるような声が……」

「えっ!？」

「い、いや、なんでもないさ。多分、何かの錯覚だろう。外の木枯らしかも」

けれども外からは何も聞こえてこない。小屋の中は、薪の火がちらちらと燃え、少々煙たい。

「さっきお金が要るって言うてたのは……妹さんの為？」

サラは少し前にジェームズが、自分はお金が要るんだ、と言うていたことを思い出していた。

「お金？ ああ、その話か」とジェームズは我に返って続けた。「そう。妹の為だ」と彼は嘘をついた。先程ジェームズは、妹を迎える為には多大なお金が必要のだと言っていたのだ。それをサラは何一つ疑わずに信じた。

確かにどこから盗むという危ないことをするよりも、サラを騙して貢がせる方がいいかもしれない。そちらの方が、ずっと楽だし、

犯罪からも遠い。

ただサラにそんな度胸があるとは、とても思えなかったが、けれどもサラにはジエームズも伺え知らない様な、ある種の大胆さを持っているのかも知れなかった。

「妹さんのことをもつと話して下さる？」

というサラの求めに、ジエームズはポツリポツリと話し始めた。最初は、虚実取り混ぜて話すつもりだったのだが、なぜかジエームズは自分の気持ちを吐露せずには居られなくなった。

「俺は兄としては最低な奴でさ……。9年前に妹を修道院に、まあ孤児院と同じようなものなだけども、そこに放り込んでそれっきりなんだ。半年後には、妹はあそこを出なくちゃならない。そこに居続けるには、誓願を立て尼僧になる他無い。それが嫌なら、さあ、どうするか……。でも俺はメアリーを引き受けることが出来ないんだ」「でもそれはあなたの意思ではないんでしょう？　本当は妹さんを引き取りたいのよね」

「そう。でも、それは出来ない！」

「なぜ？」

「それは、あの……」

ジエームズには、この目の前のおぼこ娘が、主人であるジョン・ギルフォードがどんな人間なのか到底理解できないのだと言う事を知っていた。何と説明してよいか分からなくなったジエームズは俯いた。

「俺と一緒に住んでも、妹は幸福にはならないからさ。ここの使用人にしかねないし、頭のいい器量よしの妹には、下女の生活は無理だよ。お金さえあれば、どこか別の場所に一緒に住めるかもしれないが……」

「お金……」

サラは、つぶやいた。

「お金が要るのね」

ジェームズはそこまで言うのとサラの顔を伺った。確実にサラは自分の手の内にある。

「そう。例えば、お金さえあれば、俺は今まで何度でもメアリーに会いに行けただろうし、送金出来たかもしれない。そのお金で妹は何がしかの物や服を買うことが出来たはずだ。けれども俺は自分のことで精一杯だった。給金はお話にならないほど少ないし、今だつて何の蓄えもない。それなのに妹が俺を頼りにやって来ても、一体どうしてあげられるのか分からないよ」

ジェームズは、その言葉の中に自分の本音が一部入っているのに気付くと、顔を背けた。

「ジェームズ……何てお辛いのでしょう！ たった一人の妹さんとも一緒に住めないなんて！」

サラは案の定ジェームズの話にのつて来た。いやそればかりか、サラの瞳には涙さえ浮かんでいるのだ。

「わたしは昔、自分がこの世の中で一番不幸なんだと思っていたことがあったわ。でも、浅はかだった。わたしが見えなかったのは、ただ物質だけじゃなくて、世間一般の物事に対しても、わたしは盲目だったのね！」

（そうだよ、サラ。今頃気付いたのかい！？）

ジェームズはそつとサラの手を取った。びくつとしたサラの感触が伝わったが、サラはそれを解こうとはしなかった。

「自分を責めるなよ、サラ」

（そうさ！ 君はもっともつと、自分を責めるんだ。そして、苦悶

するがいい。現実を見据えて、悶えるがいい！)

相反する怒りがジェームズの心を燃え立たせたが、けれども彼は表面上は小波すら立たない水の表のように静かに、サラを見つめた。  
「君の心は嬉しい」

それからジェームズはサラの腕を引っ張るようにして、暖炉の側のラグのひいてある床に寝転がった。サラも共に寝転がった。

暖炉の火が心地良かった。遅い午後の薄暗い室内が、そこだけ明るい。そして炎の陰が、二人の姿を照らしている。ジェームズはサラを引き寄せて、それからサラの眼鏡を外し、そのハシバミ色の瞳……自分達を不幸のどん底に陥れた瞳、けれどもどこか綺麗な澄んだ瞳を覗いた。

それからジェームズはゆっくりとサラの唇を奪った。サラは硬直したままじつと寝ていた。ジェームズの唇はふんわりとした真綿のようで、温かい。初めて味わう、若い男性のドキドキするキスの味だった。そしてジェームズの深い暗い紫色の瞳に吸い込まれるように、目を閉じた。サラは夢中でそのキスに応じるように、深く長く自分の唇を重ねた。

「永遠にこうしていたいわ……」

やっと唇を離すと、サラは我を忘れてつぶやいていた。

なぜだろう？ ジェームズにとって、サラは憎い相手であるのに……けれども目を閉じ、ふさふさした赤毛に包まれている今のサラの卵形の顔を、思わず可愛いと感じてしまったのは！ 騙されているとも知らず、健気に恥ずかしげに俯いたその横顔を……。

恋の炎が、小娘だったサラを少しずつ“女”に変えつつあり、そしてその炎が彼女を美しくしていくのだろうか？

「サラ……君は可愛いね」

そのお世辞の言葉は、けれども半分は本心で、ジェームズは己れの心に対して猛烈に腹立たしくなった。

「でも、もう帰らなきゃならない時間だよ。もしも誰かに見つかったらヤバイし。永遠なんて、この世には無いんだ。俺ももう仕事に戻らないと、叱られてしまう」

サラは無言でジエームズの胸の中にすっぽりと入り込み、彼の心臓の鼓動を確かめると、それからそつとはなれた。

「なぜあなたはウェールズ人で、わたしはイングランド人なの？  
なぜあなたはここの使用者で、わたしは校長の娘なの？　なぜだか分からない。それが何なの……とそう言いたいけれど、ここでは、この世では許されないのね。わたしには神様が意地悪をしているとしか思えないの。どうすればいいの！？　わたし、どうしていいの分からないわ！」

「そして、どうなるかも……」

とジエームズは微かな胸騒ぎを覚えながら囁いた。一体自分は何をしているんだ、と彼は自問自答をした。

「あなたをこれ以上不幸にしたくないわ、ジエームズ。わたし今度、お金を持つてくる。待っててね、少しだと思っけれど」

「いけない！」と思わずジエームズは叫んでいた。なぜだか自分でも分からなかったが、鋭い罪の意識が彼を襲ったからだだった。「君は両親を裏切るのか」

「それは裏切りとは違うわ。わたし自身の意志なのよ、ジエームズ。わたしあなたを助けたい。少しでもいいから、役に立ちたいの」

とサラは意外なことを言った。サラは立ち上がるとボンネットを被り、ケープを羽織りながら更に言い続ける。

「今まで自分の意思で行動したって事は、わたしには何一つなかった。全てが誰かから与えられ指示されるものだったわ。盲目だったときもそうだったし、手術が成功して光を得てからも、わたしは常に受身だったの。」



でも今は違う。誰かに何かをしてあげることが出来る……それが今のわたしの喜びなのよ！ 少なくともうちはあなたよりも貧しくはないわ。もちろん、このギルフォードのキティに比べれば大したことはないと思うけれど、でも3ペニーの黒ビールを飲むのさえ大変なあなたとは違う。わたしの手術の時にも、両親は多大な治療費を払ってくれたもの」

ジェームズは黙っていた。今サラが最後に言った言葉が鋭く棘のように刺さり、さっきまでサラに抱いていた微かな罪の意識も吹っ飛んだ。

（目的は達した！ サラはもっと身を堕とすだろう。けれども、俺の満足感はほとんどないし、虚しいのはなぜなんだ？）

サラは無口のジェームズの両手を嬉しそうに取った。明らかにサラは勘違いしたのだ。ジェームズの沈黙を、承諾だと……。

「大丈夫よ、ジェームズ。わたし、うまくやるから」

「う、うん」

「いいわね、ジェームズ。待ってて。ねえ、こんどいつ会える？」

「来週は駄目なんだ。多分、ダチと一緒に海岸に行くはずだから」

「まあ、この寒いのにピクニック！？」

サラは若い男の考えに付いていけなくて、けれどもどこか微笑ましい思いを抱いて問うた。

「そう。ダチはボブ・ハーシーと言うんだけど、是非とも海岸に行きたいって言い張るんだ。生まれてまだ一度も海を見たことすらないからね。多分一日中かかったらうだろうな。又仕事をサボってしまうけどね」

「お友達って大切よね」とサラはノラ・バロウズやアネットを頭に浮かべながら言った。

「じゃあ、連絡はいつもの所へ。きつとよ、ジェームズ。約束して！ 又会ってくれると」

「うん、いいよ。そのあとにでも、又手紙を入れておくから」

ジェームズはそう無理やり微笑むと、さっとサラを引き寄せ、再びこんどはもつと深い口付けをした。そして右手ではサラの臀部からその下の太ももを、スカートの上から撫でた。案外ほっそりとして形のいい臀部と、少し堅い若々しい肉体だった。けれどもサラは身をひかず、されるままになっている。

ジェームズがさっと手を離すと、サラは扉を開け油断なく辺りを確かめた。サラは自分が確実に変わって行っていることを感じていた。幾分強くなったし、大胆になったし、男の味を知ったし、人生は張りに満ちていた。

けれどもジェームズはサラを追いもせず、その場に立ち尽くしたまま、「さよなら、サラ」とだけしわがれた声で言っただけだった。サラはさっと振り返ると、直ぐに既に薄い闇に包まれた屋外に飛び出し、家路を急いだ。日暮れまでに何としてでも家に戻らないと、両親や使用人達が心配したり不信に思うのを知っていたからだ。

けれどもサラの身体は道々火照り、少しも寒さを感じなかった。ジェームズのキスと抱擁、そして彼の自分を触る感触だけが未だにサラに纏わり付いていた。

一週間後の日曜日、ジェームズ、ボブ、うすのろ“ニッキー”とドリユーの4人の若者達は、ジェームズの荷馬車ーと言っても正確にはギルフォード家のものだがーで、約10マイル先の海岸へと、晩秋のピクニックに出かけた。天気は生憎だったが、時折薄日が差して、ドーセットとしてはまああの天気だった。

今まで4人一緒に、掛け値なしにどこかに出かけるということはまず無かったので、皆一様に大はしゃぎだった。例によってこのピクニックを計画したのは、仕切りやのジェームズだったが、ドリユーにはジェームズの意図を悟っていた。

ジェームズはかなり綺麗な英語を喋れるのだが、あとの3人と来たら酷い英語で、よって4人はいつもケルト語で話したり、騒いだりしていた。ジェームズとドリユーは歌が上手く、道々2人は民謡を声高らかに歌っていた。

それは『オーウェン・グリンドルの夢』と言う、昔々のウェールズの英雄の歌で、失われたウェールズの栄光とそして祖国の復活を祈るような内容の歌だった。これは絶対にイングランド人の前では歌ってはいけない禁断の歌でもあった。

ドリユーはこれを見学の子供の頃、大声で歌って、小学校の教師から尻を鞭で打たれたことがあった。それは苦い経験だった。

ボブは友人達のはしゃぎように微笑んではいたが、やはり元氣は無かった。それでも精一杯皆に付いて行こうとしていた。そしてこのピクニックの意図をうすうす感付いてもいたのだ。そしていつかは、自分の正直な気持ちやこの病いのことなどを話さなければなら

ないと……。

昼前にはプーンと海岸独特の匂い……潮の香りが南からしてきた。ボブは荷馬車に横たえていた身体を持ち上げ、手をかざした。

「妙な匂いだ」

「海の香りなんだよ、ボブ！ ほら、波の音が聞こえるだろう？」

「何の音だろう？ 耳の奥でザーザーという声がある」

「それが海なのさ！」

ジェームズは思いつきり馬を駆けさせた。

そして地面が唐突に終わり、鉛色の空と、同じく鉛色の海が断崖の真下に見えてきた。ボブを除いた3人は「やったー！ 来たぜ！」と歓声をあげた。

けれどもボブ一人は息を飲み、何も無い果ても無いようなただっ広い海をじっと見つめたままだった。はしゃぐ3人に比べ、何の感動もわからないのが不思議だった。こんなにも近くに海がありながら、狭い土地に縛られほとんど無知に過した日々もまた不思議だった。

それは自分自身の23年間の人生のようだった。狭く、逃げ場の無い世界……。

ジェームズだけはそういうボブに近寄ると、茫然自失状態のボブの肩を叩いた。

「着いたよ！ 何時間もかかったなあ。疲れたから、ランチにしようぜ」

ボブは振り返った。その顔には、何故だか分からないが妙な虚無感が漂っていたのだ。

「ボブ……どうした？ 変だよ」

「ジェームズ。海ってこんなに広くて、そして何も無いんだね」

「そう。見事に大きくて広いだろう？ まるで果てが無いかのようさ。だけどあの先にだって島があり、海の下には魚達が泳いでい

る。こうして上から見るだけじゃ信じられないけれど。でも、目をかざしてごらん。小さな舟が見えるかもしれないよ」

ボブはおとなしく手をかざした。

「何も見えない。ただ、海は平らじゃないんだね。まあるく曲がっている、微かに」

遠くでふざけまわっているドリユーと“薄のろ”ニッキーが居たが、ここでは今はジェームズとボブだけだった。

「ジェームズ……俺、話さなきゃならない事が……」

かざしていた手を下ろすと、ボブは静かに言い出した。ジェームズは唾を飲み込んだ。彼の薄紫色の瞳が、辺りと溶け合って、ぼんやりと見える。

「俺、病気なんだよ。それもさあ……もう治らないと思うんだ」

暫くの沈黙のあと、ジェームズがぼそつとつぶやいた。

「知ってた……ドリユーから聞いた。あいつも知っているんだ。気付いていないのは、ニッキーぐらいさ」

「ジェームズ！俺さ、毎日毎日が愛おしくて、そして無性に淋しくて。今まで突っ張っていたけど、もう限界だよ。俺、死にたくないんだよ。お前達とずっと居たかった。本当にずっと……」

ボブの声が消えた。ジェームズはボブの頭をそつと抱き寄せた。

「俺が何とかする。きっと」

「怖いんだ。分かっていても、でもやっぱり怖い！それでいて、このまんま生きていても同じ事だって言う気もするんだよ。3年前、俺の下の子が肺炎で死んだ時もその怖れを感じたんだ。なぜ俺達はこうやって生きているんだって！何一ついいことも無いのに、ただ生まれて、そして直ぐに死んで行く。生きていることに、一体何の意味があるんだって!？」

「ボブ！」

「俺って往生際が悪いんだな、多分。臆病なんだよ、きつと」

「大丈夫だよ、ボブ！ どうしてそんなに弱気になるんだ？ どっちが先とか後とか、そんなこと関係ないじゃないか！ もしかしたらさ、俺の方が先かも知れないし。いいや！ 俺達もあの偉そうなイングラント人も同じことだ」

「平等だね。人間は、いや、生き物はみんなそうなんだね」  
初めてボブはちよつと泣き笑いをした。

「ジェームズ、お前に喋って少しだけど勇気が出て来たよ。ほら、俺ってさっきは女々しくて御免な」

ボブは幾らか心の重荷を取り除いたように見えた。そしてボブは再び、海を見つめた。

「お前のように天使のような奴が、なぜ悪魔のように言われるのか、俺には分からない。そいつらは皆、お前の苦悩や哀しみを知らない。そしてお前の心の中を覗こうともしない。何があつたか尋ねようともしない。」

本来ならお前はこんなド田舎に居るはずじゃなかったんだ。あの時……小学校卒業テストでは一番だったんだから、誰が見てもお前が金賞だった。そして奨学金をもらって、ここからオサラバしてスウォンシーかカーディフの上級学校に行けたんだ！ そうなっていたら、今頃は少なくともウェールズ人の中では、まあ良い方に立てただろう。教師か、さもなくば商人にでもなつてたと思うよ。

あの校長が小細工さえしなければ！ あの卑劣漢め！ シドニー・バロウズとお前の成績表を取り替えたりしなければ！！……そうしなければ、お前はあの糞忌々しい署長に犯されることも無かつたんだ！ あんなおぞましいこと！ 誰が想像できるんだ！ 俺だつたら狂っていたよ」

ボブは悔しそくに、拳で荷馬車の淵を叩いた。

「もういいよ」とジェームズは小声で制した。「さあ、ボブ。ラン



## 裏切りゝ哀しみのキャロル 1

裏切りゝ哀しみのキャロルゝ

1

「ジェームズ、奥様がお呼びよ」

下働きの中年女で、そして力持ちジョージの妻でもあるフィオーナが、遅い昼飯を下男小屋の食堂で食べていたジェームズにそつと囁いた。ジェームズの手が止まった。

「ギルフォード奥様が？ なぜ？」

「知るもんですか！ あの方達の命令は何時だつて突然なんだからとにかく早く来てくれつてだけ。母屋の外にある、東側の白い東屋に」

ジェームズは食べかけのドロドロした豆のシチューのスプーンを置くと、急いで上着を羽織り、仕方なく館の方に出向いた。何だか嫌な予感がしてきた。

ギルフォード夫人は夫であるギルフォード氏が亡くなったあと、ここの館や小作人達一切を切り盛りしている、なかなかやり手の未亡人だった。むしろ今は亡きギルフォード氏よりも、夫人の方が頭が切れ、かつ冷酷であるとも言われていて、小作人達や使用人達からも恐れられていたのだ。

ここでは“白の東屋”と呼ばれている、ガラス張りの小さな東屋に行くと、夫人と隣町のリトルウッドに住むサイモン司祭が何やらヒソヒソと話し込んでいる。益々嫌な予感が募ったが、ジェームズは帽子を取って、入り口で声を掛けた。

「奥様、お呼びで？」



ジェームズの声に、夫人は痩せこけた鶏のような顔をこちらに向けた。痩せているジョンは彼女に良く似ており、反対にキティの見た目は、恰幅の良かったギルフォード氏に似ている。

サイモン司祭はこの、場違いとでも言える美しい若者を見つめた。会うのは二度目。もう9年も前のことだ。

哀しみをたたえた瞳で、妹を乗せた馬車を見送ったあの少年とはとても思えない。もうすっかり大人になってしまったが、どこか卑屈な所を持ってしまったように見える。

「いらつしゃい、ジェームズ。司祭様がお前にお話があるそうですよ。お前のような人間をも気に掛けて下さっているのですから、よく御礼を申し上げるのね」

そう嫌味っぽく言うのと、ギルフォード夫人は「では」とサイモン司祭に挨拶してから、直ぐに退出した。ジェームズは夫人の姿が見えなくなるとホツとしたが、けれどもサイモン司祭の灰色の瞳の視線を感じると、何の為にここまでやって来たかを悟った。妹のメアリーのこと以外にあるはずは無い。

無慈悲に馬車に乗せた司祭。泣き喚く幼いメアリーを、あの修道院に入れるべきだと主張したのは、誰あろうこの目の前の謹厳実直そうな司祭だったのだ。

「さあ、誰も居なくなつた。若者よ、二人きりになつたのだから、遠慮せずにわたしに話さない。ところで……神にはいつも祈っているかね？」

「全然」とジェームズは素っ気無く答えた。けれども、濃いこげ茶色の髪の毛の下で瞳は、落ち着かなげに、動く。

「俺は、英国国教会でもないし、あんたのようなカトリックでもないんだから。神様なんか、俺にとっては何の意味も無いんだ」

この冒瀆的な言葉をも、司祭はじつと我慢して聞いていた。

「けれども、君の妹のメアリーは君とは全く違うと思うがね、わたしは。彼女は信仰心の厚い、穏やかで綺麗な娘さんになったそうだよ。素晴らしいことだ！」

「それは良かった」と言いつつ、ジェームズは大げさな身振りで妹を賞賛する司祭に対して、嫌悪感を抱き肩をそびやかしたものの、内心では少々びくついていた。サイモン司祭の灰色の目の奥の何かが、常にジェームズを落ち着かなくさせるからだった。

「実はね、ジェームズ。話と言うのは、妹さんのことなんだよ」

（ほら、来たぞ！）と構えながらも、ジェームズは少なくとも外見上は何食わぬ顔を決め込んでいた。

「何かあったんでしょうか、妹に？」

「メアリーは、兄である君からの便りがほとんど無いことを、非常に病んでいるのだ。何しろ彼女は、君だけが頼りだ。たった一人の兄、つまり肉親なのだから。ま、カーディフに居る親類達は、もう何のコンタクトも無いのだから……」

司祭は、深いため息をついた。不幸な兄妹を支える親族が一人も居ないとは！

「知っているように、メアリーは君のように世間での楽しみも何も無い、修道院の中だし、一人っきりの肉親である君からの手紙をいつも待ち暮らし、そして君の事を心配している。もしや手紙が届いていないのではと、思いつめているらしい。」

で、手紙は君の手元にちゃんと届いているのかね？ ギルフォード夫人は、使用人達の手紙を捨てたりすることは一度も無い、とさつき誓って下さったよ。良い方だ、あのご夫人は。君はメアリーからの手紙を受け取っているのだろう？」

身を乗り出してきた司祭の鋭い視線をかわすかのように、ジェー

ムズは顔を背けた。白の東屋の分厚いガラス窓越しに、秋色の林が目に入り、東屋の周りには、落ち葉が濃淡のある茶色の絨毯のように敷き詰められている。

「受け取ってはいます」とジェームズは無感動に答えた。「けれど、最近それを読んだ事はないな」

他人事のようなジェームズの答えに、司祭はやや驚いた。

「なに！？ 読んでいない？　じゃあ封も切っていないのかね」

「違います」とジェームズは妙にキツパリと言った。口元には、皮肉な笑いが浮かんでいる。「俺はあいつからの手紙、みんな破って川に捨てているんですよ」

ジェームズは改めて司祭の方に向き直ると、じつと司祭に目を据え、からかうかのように言った。司祭は少しの間、絶句していた。そして並の人間なら激怒したい所を、辛うじて彼の持ち前の忍耐力で押さえると、震え声で問うた。「なぜ？」と。

「読みたくないからです」

ジェームズは簡潔に答えた。けれども心の中に、棘のようなものが鋭く刺さった。

東屋の中には不穏な空気が漂っていた。サイモン司祭は、深呼吸する為に深い吐息をついた。

「ジエームズ……君が神を信じようと信じまいと、その事はここでは論じないようにしよう。けれども、君のやっていることは、たった一人の哀れな妹に対して、申し訳ないとは思わないのかね？ 例え君がどんなに筆不精であったとしても、下手な字であったとしても、そして色々と忙しかろうと、一言ぐらい書いて寄越すことは出来ないのかね？ メアリーはあと半年後、来年春にはあそこを出なくてはならない。もう充分大きくなったからね。」

けれども、彼女は迷っている。独り立ちしてあそこを出て行くか、それとも誓願式をたてて、本物の修道女になるか、と。知つてのとおり、今のこの世の中では孤児の若い女が一人で生きて行くのは難しい世の中だ。まあ、教師か織物の工女ぐらいかな……。

どちらにせよ、今の彼女には君の助言なり援助が必要で……」

「断っておきますが」と突如ジエームズが司祭の言葉を遮った。「司祭様、メアリーが半年後のことで大変なのはよく知っています。ですが、俺としては妹には何も助言できないし、かといって何がしかの援助金を渡すことも出来ない。俺はすっからかんなんですから。それにもっと嫌なのは、俺を頼ってここに来られるのが一番嫌なんですよ！ 妹は妹なりに、自分で一つの道を探してくれるように言ったださい。もしも妹に会って下さるなら……。いや、サイモン司祭、あなたがわざわざあそこまで行くはずはないな。きつと、あちらの方から頼まれたんでしょう」

これが図星だったので、司祭は少なからず狼狽した。

「とにかくこう告げて下さい。俺のことは、忘れてくれ」と  
サイモン司祭は、最近これほどまでに驚愕したことがあったのだ  
ろうか、と自分に問いかけるほど、心底落ち込んだ。

目の前の、一見美しい若者は“悪魔”なのだろうか？ それとも  
“堕天使ルシファー”の化身なのだろうか？ いいや、単に精神の  
卑しい、エゴイステイックな人間に違いない。たった一人の妹を見  
捨てても何の心も痛まないであろうとは、何とも考えにくい。

司祭は怒りを堪える為に、非常な努力をした。

「驚いた……。これは君の本心なのかね？」

「もちろんそうです。このことは早く何らかの形で、メアリーに知  
らせておくべきでした。そうしたら、メアリーも無駄な時間を手紙  
を書くことに割くことは無かったのに」

司祭は啞然として口をあんぐりと開けたままだった。

「全く、君と言う人間は……とても人間とは思えない。たった一人  
のうら若い妹を路頭に彷徨わせて平気だとは！」

「とにかく、ここには来させないで下さい。それだけは嫌だ」

ジェームズは帽子を無意識にくしゃくしゃにしながら、下を向い  
た。

（これ以上、妹を不幸にしたくない。メアリー、お前なら独立して  
やっていけるよ。お前は、独立心のある父さんに似ているからな。  
こんな所で、下女にはさせたくないんだ！）

「君は……妹さんを、愛してはいないのか」

「愛していない！？ そんなバカなことが……」

突然襲ってきた深い怒りと悲しみに、ジェームズは黙り込んだ。

ジェームズの脳裏に、管財人達が両親の死後、借金のカタに自分  
の家の家財道具一式を全て持ち運び去って行った悪夢のような光景  
が浮かんだ。その中には、母が気に入っていたコンステーションの小

さな古い風景画もあった。

時ならぬ騒ぎに、幼いメアリーは泣き出し、兄である自分にしがみついていた。その時ジェームズは、何があっても、メアリーだけは誰にも渡さないと亡き両親に誓ったのだ。それなのに……。

又もう一つの幻が浮かんで来た。9才のメアリーを、このサイモン司祭が自分から引き離し、馬車に乗せた光景だった。その時もメアリーは泣き喚いていた。

奉公に出ていたジェームズから、手のかかる一銭にもならない妹を引き離し、『セント・マグダレーナ修道院』に引き取ってもらったように粉屋の主人から頼まれて交渉したのは、サイモン司祭その人だったのだ。

ジェームズもまた、泣きながら重い馬車のドアにしがみついた。誰かがジェームズを引きずり落とし、彼は雨の中、泥水に両手から落ちて行った。そして走り去る馬車のあとを、見えなくなるまで追いかけた。

そしてその晩、ジェームズは寒さと悲しみの両方で、熱を出してしまったのだ……。

忘れようとしても忘れられない光景だったが、ジェームズはそれをわざと自分の心の奥底に封印していた。

「愛していないなんて。なぜそんなことが、あなたに言えるんです！？ 俺がどれだけ泣いて頼んだか知っているくせに！ それなのに、俺からメアリーを引き離したのはあなた自身じゃないですか！ それを、18になったからと言って、又無一文で、今更世の荒波に放り出そうというなんて！ この狼達が一杯いる世の中に？ 俺はここではメアリーを護つてあげられない。護れないんだ！ あいつを、あいつを……狼達の群れからは！」

ジェームズは我を忘れて怒鳴り散らした。もはや目の前に司祭が居ようと、悪魔が居ようと、そんなことはどうでもいいかのように。

狭い東屋が、彼の声でブルブルと振動した。

「メアリーを愛してはいないなんて！ 愛しているからこそ、俺は彼女にここに来て欲しくない！」

ジェームズはそう叫ぶと、東屋から飛び出した。苦く悲しい思い出の数々が、ジェームズを押しつぶさんとしていた。

随分走り、生垣にぶつかりそうになってやっと止まると、その葉の落ちた生垣に両手と頭を埋めた。忌々しいことに、すすり泣きが漏れないように、ジェームズは暫くそういう体形のままだった。そして彼は自分の心を鎮めるまで、そうしていた。

自分がこうまで惨めに暮らしていなければ、メアリーと一緒にどこかで慎ましく住んだだろう。けれども、今の状況ではそれは叶わぬ夢だ。ここにメアリーが来れば、自分よりももっと惨めに堕ちて行くだろう。男達に利用され弄ばれ、そして破滅が待っていることだろう。そうはさせたくなかった。

ここではジェームズは何の力も持っていなかったからだ。彼はとことん無力な存在でしかない。

「ここで何しているんだ？」

ジョン・ギルフォードのぞつとする声で、ジェームズは我に返りギクリとして振り返った。もうどれ位時間が経ったのだろうか？

ジョンは乗馬用の短く細い鞭を片手に持っていた。これから乗馬に行くか、それとも戻って来たのかもしれない。そう言えば既に近い場所だった。

「お袋がカンカンに怒っていたぞ。司祭様に何か失礼なことをしたようだな、ジェームズ」

ジョンはにやにや笑いながらジェームズに近寄った。ジェームズはジョンの視線を避け、どうやってこの場をしのごうかと思い巡らしていた。

「仕事をさぼってここで油を売っていたのか？」

「いいえ、これから……直ぐに行きます」

「そうはいかないよ」

ジョンはいきなり持っていた鞭を振り上げると、突然のことで防ぐ暇もなかったジェームズの肩や背中、そして顔を打ちのめした。ジェームズは悲鳴をあげ、両腕で顔を覆ってのけ反り、それから又生垣にぶつかった。

それでやっとジョンは気が済んだらしくジェームズから数歩離れ、晒い声を上げた。

「お前のような奴はな、ジェームズ。誰かがお仕置きをしなくちゃならないんだよ。このところ、お前は仕事をサボってばかりだろ？ この間の日曜日も、朝早くから夕方まで荷馬車もろともどこかへ



行つて居なくなつたし、仕事は手を抜くし、ボート小屋の鍵は掛け忘れるし、そして今度は司祭様に暴言を吐く始末だ。

最近お前は付け上がっているんじゃないのかい？ 色男でちよつとぐらい読み書きが出来るからつて、いい氣になるなよ！ 生意氣な使用人はこうなるのさ」

打たれた頬を押さえてしゃがみ込んでいるジェームズの直ぐ上から、ジョンは小氣味良く説教すると、わざとヒュツと鞭を鳴らして見せた。鞭には血の跡が付いている。

「ほら、ジェームズ。顔をあげる？ そう、そうだよ。ウェールズ人は従順であるべきなんだ。フン、傷が出来たな。かわいそうに！ 多分他の怠け者の使用人達にも、いい見せしめになるだろうな。母にもそう言つておこう」

睨まれたカエルのように、おとなしく身を起こしたジェームズの頬に一直線に入った傷口。ジョンはジェームズの顔に唾を吐きかけた。

それからジョンは晒いながら去つて行つた。

手で塞いでも落ちて来る血潮を、ハンカチで押さえながら、ジェームズはメアリーに「ここに来て欲しくない」と述べた自分の考えが正しかったことを、改めて認識した。それから鋭い痛みがやって来た。

使用人小屋に戻ると、誰もがその傷口に息を飲んだ。ジェームズは何も言わなかったが、既に噂は屋敷中に駆け巡っていた。

妹であるメアリーを拒んだ、情に欠ける兄であり、司祭様に暴言を吐いた使用人。そして、その卑劣な使用人を、一刀両断に成敗したと思ひ込んでいるジョン。鞭打たれているジェームズを遠くから見ていた下女のマーガレットが、震え声でフィオーナに言いに行つた直後に、ジェームズは俯き加減に現れた。

恐れおののく二人の前で、ジェームズは真つ赤な血に染まったハンカチを拭った。

「なんだい!?」とジェームズは、勝気そうに言い返した。「何だよ。たかだかこんな傷!」

「そんなことないわ、ジェームズ」

とマーガレットは答えると、ジェームズの傷を見ようと近寄った。

「よせ!」とジェームズはその手を払い除けた。「大丈夫だって!」

「虚勢は張らない方がいいわ」と年かさのフィオーナは言った。「それって、傷が残るかもしれないわよ。早く治療しましょう。せつかくの顔が台無し!」

「どうでもいいよ!」とジェームズはムカついて怒鳴った。「もうどうでもいいって」

「駄目よ!」とマーガレットが悲鳴をあげてしがみついた。

「自分を大切にして、ジェームズ!」

「うざいな」  
とジェームズはマーガレットの腕を解こうと努力したが、後から後から吹き出てくる血潮の為に、気分が悪くなって来てフラフラしだした。

「横になって、ジェームズ!」とフィオーナはお湯の入った洗面器を持って来ながら命令した。

「シャツも裂けてる……」

震え声でフィオーナは言うつと、血潮を拭き取り、包帯を額から頬にかけてきつちりと巻き始めた。

「酷い傷……。本当は縫ってもらった方がいいかもしれない。でも、無理ね。ここでは、誰も只では何もしてくれないから」

ジェームズは固いソファに横になりながら、空しく天井を見上げていた。

「クリスマスまでには、傷が治らないかもしれないよ」

「どうでもいいよ」とジェームズは力無く言った。

＊＼＊＼＊＼＊＼＊

それから数日後、ジェームズは『黒猫荘』でボブやドリユー達と落ち合った。

けれども、ボブ、ドリユー、“うすのろ”ニッキーの3人は、いやその場に居る者達全て、ジェームズの頬に張ってある大きな絆創膏に目をやると、息を飲んだ。

「どうした、皆黙り込んで？」

ジェームズはそう言い、なぜ皆が沈黙しているかを知っていても、わざと歪んだ笑いを見せ、どっかと座り込んだ。

3人はジェームズが薄暗がりのパブに入って来た時、まずジェームズの顔にある絆創膏よりも、もっと深く刻まれた虚無感に驚いたのだ。ジェームズはまるで亡霊のようだった。

ジェームズがここまで飲むのは珍しかった。3人は何とかして止めさせようとしたが、ジェームズは頑として聞き入れなかった。彼はウィスキー、シェリー酒、そして黒ビールと、在るだけのアルコールをただ黙って飲み続けた。

ジェームズはただただ飲み続けていたが、遂にボブがジェームズの腕からボトルを奪い取った。あとの3人には、何が起こったのか大体察していたのだが、さすがにボブはジェームズの壊れように怒りに駆られていた。

「何するんだ!？」とジェームズは怒鳴ってボトルを取り返そうとしたが、すでに酩酊状態だった彼からは力が失われていた。

「ジェームズ! もういい!」

「くっそ〜!」そう叫んで腕を回した拍子に、頬の絆創膏が取れ、傷が露わになった。左頬のその傷は、ジェームズの陶磁器のような青白い肌に、まるで烙印のように深く深く刻まれ、既に出血は止まっていたものの、腫れた周辺の肉が引きつり、あとに傷口が残るかもしれないと言う危惧を彼らにも感じさせた。

右手の甲にも白い包帯が巻かれているところを見ると、服の下にはまだ他の傷口があるらしかった。

「ジェームズ……誰が……」

ボブは自分の病いすら忘れて、ジェームズの肩を抱いた。ジェームズはぐにやりとした身体を、ボブに預けながら、呂律の回らぬ舌で、ブツブツと言いだした。

「ジョン……そうさ、俺って結局、奴らには何一つ頭が上がらないんだ。ただ、ぼんやりして阿呆の振りして……そして打たれるだけ……」

ジェームズがはつきり喋れたのはこれくらいで、あとは取りとめの無い独り言が続いた。

「俺はさあ、メアリーを愛している……あいつの為なら、どんなことでも耐えられるし、命を捨ててもいい……でも、あいつらは……俺のことを……多分メアリーは俺を憎む……それでもいいんだ……司祭は今頃、おべつか顔で……こう告げている……。ああ！ お金欲しい！ 全てを失うなんて、妹を……全てを失くすなんて……メアリー……お金が……」

あとの不幸な3人は黙り込んだ。彼らとて、ジェームズと同じような境遇なのだ。深酒で憂さを晴らすのはとても感心出来ないが、けれどもジェームズを責められるだろうか？

元々余り気分の優れなかったボブは、先に帰ろうと立ち上がった。ジェームズは机に突っ伏して、傷口のない右頬を下にして、朦朧としている。ジェームズが一人で帰るのは無理で、ドリュールは彼をギルフォード家まで送ることにした。

その時入り口が開いて、一人の中年男が入って来た。ここに来る常連ではない証拠に、中に居る者達は皆一斉にシーンと黙り込んだ。

男は警察の制服を着込み、値踏みするように一人一人睨みつけながら、ゆつくりと歩を進めて行く。途中知った顔を見つけると、近寄っては何か一言二言囁く。すると相手の顔色がサーツと蒼くなるのだ。それを男は面白がっているようだった。

「よう、ロバート。このところ、商売は順調かね？」

「エド……最近では真面目に仕事しているかい？」

「もう喧嘩は懲りただろう、クリス？」と言った具合だ。

署長はたむろしているこちら側の4人に近寄った。冷酷で卑しい瞳が、奥で瞬いた。

「ボブ、もうお帰りか？ お前、顔色悪いようだな」

ボブは顔がひくつき、その場に突っ立ったままで動けない。次に署長は、寝込んでいるジェームズを見下ろした。

「おやおや、これはこれは！ あのジェームズが酔い崩れているなんぞは珍しい。どうしたんだね、その傷は？　せつかくの可愛い顔が台無しじゃないか」

ボブはジェームズが酔い潰れていて幸いだと思った。そうでなければ、ジェームズは署長を見て、吐き気と震えで、更におかしくなっていたに違いない。ジェームズはこの署長の卑しい欲望の餌食になった悪夢に、未だに苦しんでいるのだから。

店主のヴィヴィアンが、遂に堪りかねて、

「ちよいと、署長さん、なんの様？」と横槍を入れた。

「そうさな。先程、町外れで、さるレディにちよっかいを出しそうな奴が居たのよ。そいつがここに逃げ込んではいないか、と思つてね」

ヴィヴィアンはフンと鼻を鳴らした。

「ここにいる連中は、全員小一時間前からここですつとたむろしているわ。な、みんな！？　誰も来やしないわよね？」

「そうだ、そうだ！」と言う声が、あちこちで上がった。

「犯人を庇つたらどうなるか分かってるな！？」と署長は凄んだが、

「そんな奴、庇うもんか！　こう見えても、わたしは一本筋が通つた女なのさ、旦那」

ヴィヴィアンは女だてらにシガーを吹かせながら、しゃべくつた。署長はもう一度全員を見回すと、舌打ちして外に出て行つた。

署長が出て行くと、『山猫荘』には、ホツとした空気が漂い始めた。ジェームズだけが何も知らず、眠りこけている。

＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊

『……つまりこういう次第なのです。』

甚だ申し上げにくいのですが、ジェームズ・C・エドワーズに関しては、これ以上は如何ともしがたい状況にあります。

メアリー・エドワーズにおきましては、残念ながらご自身一人で決断の程、宜しくお願いいたします。わたし自身の考えも、あのような無頼の兄を当てにされぬほうが宜しいかと、思われます。

メアリーの希望次第では、当方にも女学校教師や家庭教師の口ぐらいは探すあてがありまして……』

シスター・ルースはサイモン司祭からの手紙をそつと元に戻した。さて、メアリーにこのことを何と告げるべきか、彼女は頭を抱え込んだ。メアリーの絶望を払拭することはとても無理のようだが、少なくとも、将来に何がしかの希望の光を与えなければならぬだろう。それには、シスターでさえ、荷が重過ぎた。

遠くから、練習中のクリスマス・キャロルが聴こえて来る……。

## 金と魂と―新年の前に― 1

金と魂と―新年の前に―

1

サラ・オーウェルは、生まれて初めて“犯罪”と呼ぶべきものをやってしまった……。彼女は母親の財布から目立たない額の札を数ポンド抜き取り、それを数回やってから自分の貯めていた幾ばくかの額を足した。それでも、僅か10ポンドに満たない額でしかない。それでも、ジェームズの数か月分の給料と同じ額である。

サラはジェームズと話している内に、彼の給金の額の少なさに驚いたが、けれどもそれはジェームズだけではなく、ギルフォード家の全ての下男女達、そしてオーウェル家の3人の使用人達も似たような額なので、更にびっくりする羽目になった。

ここに住むイングランド人社会の中では、貧しく慎ましい方に属す父親でさえ、ジェームズの30倍近くはもらっているのだ。ジェームズはギルフォード家に居る限り、食は保障されても、一生うだつの上がない同じような額のまま、飼育殺しになるのが目に見えていた。

サラは今までお金や経済的な問題などを考えた事もなく、そういう場所からは別世界で生きてきた。けれどもジェームズと付き合うようになり、話して行く内に、彼らや彼らの大多数の層には、“金銭問題”が不可欠であるということに、遅ればせながら気付き出したのだ。

サラは例の栗の木のほくらに、短い手紙を入れた。



「Jへ

12月19日 午後1時 如何？

Sより」

その紙片は無くなっていたが、けれども返事の手紙はいつまで経っても、入っていないかった。サラはその日が近付くまで不安に陥っていたが、けれども一ヶ月以上ジエームズとは会っていないという寂しさの方が上回った。

もしかしたらボートハウスには居ないかもしれないという危惧を抱きながらも、サラは目的を決行することにした。例え居ても居なくても、サラはそこに自分が盗んだ金を全て置いておくつもりだった。

英国国教会のサラの家族は、毎年教会の聖歌隊に歌い手を送るのが慣わしだったが、今年はロンドンから戻って来たサラが始めて聖歌隊として歌うことになっていた。彼女は毎日練習に出かけ、そして帰りには教会でお喋りしたり、司祭夫婦とお茶をごちそうになったり、ブラブラと大通りの店を覗いたり出来たのだ。だから、帰り時間は決まっていなかった。サラはそれを上手く利用した。誰からも疑われない時間を。

その日、サラは僅かな盗金を胸に抱いて、聖歌隊からの道から外れた脇道を真っ直ぐギルフォード邸のボートハウスに歩を進めた。一人で歩けるという事がどんなに素晴らしいか、今更ながら彼女は発見した。

けれども道々、ジエームズが居ないのではないかという不安とそして寂寥感で、足取りは重かった。サラはジエームズと一ヶ月以上会っていない。もう発狂しそうだった。自分が罪を犯しているという意識もなく、何をしようとしているのかも分からず、サラは道を

急いだ。女性用の懐中時計は、1時を少し過ぎている。

サラはかなりガタが来ているボートハウスの木の扉を、そつと開けると中を覗きこんだ。赤く燃えている暖炉の側に、ジェームズが寝転がっていた。物音で彼は振り返ると、

「やあ、サラ。来たの？」と気だるげに声を掛けた。懐かしい声、房々した髪に青白い肌のジェームズ。

「ジェームズ！ 来たわよ。わたし、来たわ！ でもあなたが来ているなんて、正直疑っていたの。あの手紙読んでくれた？」

「うん、読んだ」

「じゃ、なぜ返事をくれなかったの？」

「君が本当に来るのかどうか、俺にも自信がなかったからだ」

とジェームズは本心を言った。「だって、危険な行為だもんな」身を起こしながらジェームズは答えた。

「そんなことないわよ。だってわたし……」

目の悪いサラは、もっとジェームズの顔や瞳を見たいと思い直ぐ近くまで寄って来た。がそこに居るジェームズの変化に、サラの心は凍りついた。

「ジェームズ！？ どうしたの？ この傷……なぜ？ これはどうしてなの？」

「醜いだろ？」

「いいえ、そんな事じゃないわ！ なんでこんな……」

サラは無意識に自分の手をジェームズの頬の傷口に触れて、それをなぞった。それはサラの盲目だった時からの癖なのだ。見えていても、その癖は抜けきれない。

「転んだんだ」

ジェームズの答えの中にある嘘に、サラは直ぐに気付いた。

「いいえ、嘘！ この傷は変だわ。転んだ傷じゃない。少し古いけ

れど、でも治っていない。新しいのよ！ それに、この傷口は普通じゃないわ。わたしは病院に居たから分かるの。本当のことを言つて、ジェームズ！ この傷は……一体？」

ジェームズは、サラに嘘を突き通すことなど出来ないという事を知った。

「この傷は……」

ジョンの憎々しげな顔が目には浮かぶ。鋭い痛みが、心を襲った。

「鞭でやられたんだ……だけど、何でもないんだよ、サラ」

「何でもない、ですって！？ こんな野蛮なことを誰がしたのよ！？」

「ジョン……ここのお屋敷のジョン・ギルフォード。でも俺が……」

傷をなぞるサラの手がピタツと止まった。サラは過酷な現実を始めて直視したのだ。愛する人に対する、辛い現実を。

「言わないで！ 何であろうと、酷いわ！ 酷い！」

サラは叫んだ。

「信じられない！ 鞭であなたを打つなんて！ 家畜のように、まるで奴隷のように」

「これが真実だよ、サラ」とジェームズは小声で答えた。サラに対する憎しみよりも、今は惨めさの方が勝っていた。

「かわいそうに！ ジェームズ、辛かったでしょう？ 痛いでしょう？ わたし、わたしは何て世間知らずで無力なの？」

サラはジェームズの首に腕を回すと、ボンネットを跳ね除け自分の頭をジェームズの胸に押し付けた。ポロポロと悔し涙がサラの頬にこぼれ落ちるのを見たジェームズは、微かな後悔を覚えて顔を背けた。

サラはジェームズが置かれている状況を直視しなければならなかった。キティ達が脅しで言っていたのは、それは単なる脅しではなく、実行されうるものだという事を。そしてジェームズは、常に彼らの支配下にあり、その犠牲者として存在しているのだ、という事を。

ジェームズは絡みつくサラの腕を振りほどこうと身体をよじった。

「よしてくれ！ 辛くはないよ。これが俺の真実の姿なんだから。辛いとか痛いとか、そんなことはどうでもいいんだ。だけど、悔しい。ただ悔しいだけ……」

ジェームズの鼻の奥がツンとした。彼は出て来そうになった涙を、辛うじて押しとどめた。けれども、サラはジェームズのこの言葉には、ある種の嘘が見え隠れしていることを感覚的に悟っていた。サラはその相手の声音だけで、その人物の感情を推し量ることが出来るという、盲目だった人間ならではの、特殊な感覚を身に付けていたからだ。

ジェームズは必死になって突っ張っている、とサラは傷の無いほうのジェームズの横顔を見ながら感じた。

ジェームズは嗚咽をあげ続けるサラを見つめた。

「どうしたの、サラ。いつまでも泣いていないで。寒かったらどう？ ここまで来るのは？」

「いいえ……寒くなんか……」

そう言いつつ、サラは手の甲で涙を拭いた。

「こうまでして俺にこっそり会いに来るのは……もう止めるべきかもしれない」

とジェームズは、相反する気持ちを述べた。

「俺はね、サラ、君が思っている以上のワルなんだ」

「ワルだなんて。そんなこと無い！」

「いや、そうなんだ」

ジェームズはなぜかサラをこれ以上騙し続けることに、重荷を感じ始めていた。

「だからもう会うのはよう……」

「言わないで、ジェームズ！」

サラは怯えたように叫んだ。

「いやよ！ そんなこと。もう会えないなんて！」

サラはジェームズを救いたいと願うよりも、もっと利己的にジェームズからは離れられない自分を発見した。ジェームズに会うのは、自分の為なのだ。彼の為というのは言い訳に過ぎず、本当は自分の心のままに行っているだけなのだ。

これはひょっとしたら、人間には操作できない、“運命”とか“宿命”と言われている物なのかも知れない、と……。

ジェームズはサラの腕をなおも振りほどこうとするのを止めた。そして彼女の豊かな赤毛の髪の毛を撫でた。それからサラのその髪に自分の顎を載せると、なぜか平安な気持ちが押し寄せ、二人は暫くそのままの姿勢で居た。

サラはジェームズから撫でられている感触に、うつとりと目を閉じ、されるままになっていた。やっと穏やかな気持ちがサラにもたらされると、サラは腕を振りほどいた。

「ジェームズ……わたし、持っ来たわ」

「なに？」

「お金。この間約束したでしょう？」

「あ……」とジェームズは小さく叫んだ。いつの間にかお金のこと

を忘れていた自分を発見し、狼狽したのだ。「そんなこと、約束したっけ」

「ええ、そうよ。8ポンド65しか無いけど」

ジェームズは驚いて身を離れた。喜びはなぜか少しだけで、嫌な気分がほとんどであり、それは彼をキリキリと蝕んだ。

「なぜそんな大金を!？」

サラは頷いた。涙に濡れた目が、キラリとまたたく。

「まさか……」

「そうよ、盗んだの。母の財布から少しずつ抜き取って。でも母は何一つ気付いていないわ」

ジェームズは複雑な気分を抱いてサラを見つめた。今の彼には手放して喜べるものではなかった。けれども一方では、これでボブを医者に診せることが出来るとも思う。この相反する気持ちの内、どちらが本当の自分なのかもう分からなくなった。

「でも、それって……犯罪を犯しているんでは……。そうさせたのは俺か……」

「いいえ、これはわたしの意志です。あなたがそそのかしたんじゃない」

「でもこの事がバレれば、君が責められる」

「バレないわよ」とサラは妙に強気になって言い張った。「もしバレても、あなたのせいじゃない」

「いいや、俺は共犯者だ」

ジェームズはサラの墮落が結局は己れ自身の首を絞め始めていることを知った。人を呪わば穴二つなのだ……。

「それに、“共犯者”としてしか見てくれないよ、結局のところ。

俺は既に一度ならず牢に入ったことがある。さらし者にもなった。

ボブは俺の横で鞭打たれていた。彼のか細い体から絶叫が響き渡り、

俺の身体も震えた。見物人達は、半ば面白がり、半ば恐ろしそうに俺達を見上げていた。その光景は忘れられない」

サラは声が出ず、座り込んだ。

「今度俺が捕まったら、もう俺は多分……オーストラリアか、それとも」

「オーストラリアですって！？ あんなに遠い所に……」

「14歳以上は行かされてもいいところだ。おまけに若い罪人達を寄越せと言っている」

「オーストラリア……」

遙か大海原の果てにある不毛の大地へと囚人達が行かされる様を、サラは見たことがあった。何日にも渡る過酷な航海の果て、地の果てのような大陸に行けば、例え刑期が終わっても戻ってくる者は少ない。ほとんどが、その地で生涯を終えるという場所だ。

「そこにやらされるか、それとも、刑罰用の太い皮鞭で、それも先が二つに割れている奴でぶたれるだろう、ボブのように。それはジョンが俺の顔を打った、乗馬用の細い鞭ではなく、罪人用の特別製だ。」

昔ボブがそれでやられていたのを、俺は直ぐ隣で見っていた。ボブは聞くに耐えない悲鳴を上げ、奴の血潮が俺のシャツにまで飛んできたんだ」

「ジェームズ……」とサラは息を飲んでつぶやいた。

暖炉の火は、沈黙した二人を照らしていた。ジェームズとサラは互いに見ず、別の方向に顔を向けていた。

「俺はこう思う。ボブは我慢強いが、でも俺は耐えられないだろうと。いつか夢を見たが……みんなが俺の方を見ている夢で、俺は何かの台に乗っていた。絞首台かそれとも鞭打ち台かに。何百年にも渡って俺達を支配して来た奴らの前で、そんな風にね。」

そうと分かっているながら、俺はメアリーののような清らかな人間になり損ねた。だからいつかは、多分そうなるかもしれないと……」

「やめて！ ジェームズ、やめて！」

サラは振り向き、恐怖に震えながら叫んだ。

「あなたは何もしていないわ！ だから何も起こるはずが無いじゃないの。それは幻影なのよ、ジェームズ」

ジェームズも頑なにサラに背を向けていた。

「君が何を言おうと、何をしようと、関係ない。君はイングランド人、支配者側だ。誰もが支配者の言うことしか聞かない。誰もが少数派は無視する。それが世間だ。」

俺は無力だよ、サラ。俺は分かっているながら、羊のようにおとなしくは生きられない。一生逆らわずに生きて行くぐらいなら、いっそ反抗して、そして死んで行くかも……」

「もう何も言わないで、ジェームズ！」

サラの顔が歪んだ。彼女はワツと泣き出した。

サラはジェームズの将来の暗い予感に圧倒され、そして絶望した。彼女の掌から、硬貨や紙幣がこぼれ落ち、それらが床に転がって侘



しい音を立てた。

自分が愛する人間は、ここでは人間として扱われないのだろうか？ この運命から逃れる為にはどうすればいいのだろうか？

サラはジェームズを愛したことによって、今まで困いの中で何も知らずに居た自分を顧みて身震いした。光は全てを照らしてくれたが、同時に醜いもの、おぞましい現実をも見せてくれた。それはパンドラの箱のようだった。

けれども最後には、そこには僅かばかり過ぎないが、“希望”と言うものが残されていたはずだ。

ロンドンに逃げようか……。少なくともあそこは、このような閉ざされた狭い社会ではないことだけは確かだった。けれどもそこではどうやって暮らしていけるというのだ？ お金は？ 住む場所は？

ジェームズが職に就けるかどうかも疑問だった。それでは、新大陸アメリカへまで行かなければならないのだろうか？ アイルランドでは、飢餓の為毎年大勢の人々がアメリカへと渡っているというけれども未知なる土地には、必ずや未知の危険が潜んでいるのだ。けれども、確かに自由だけはあるだろう……。誰にも束縛されない自由が。だからといって、全てを捨ててまでそのような暴挙が出来るほど彼女はまだ勇敢ではなかった。

ジェームズはやっとサラに向き直った。そしてサラの両手を静かに取った。

「サラ、暫く会うのはよそう。これからは寒くなるし、それにこうちよくちよく君が会いに来ることは、危険極まりないことだ。お母さんにもエレーンにも気付かれるかもしれない。君が責められたら、そしたら俺だって危ない」

「わたしは決して白状しないから！ 信じて、ジェームズ」

「聞いてくれ。俺、イングランド人の女の子と付き合っていること

がバレたら、まじにやばいんだよ。分かるだろう？ 俺、この前司祭様に向かつて暴言を吐いて、それでこんな有様になっちまった。まして君とここで会っていることがバレたらどうなるか……。さっき、話したよね」

ジェームズは正直サラとは別れたかった。それはサラから金を取ったからもうお終いと言ったものではなく 事実金を取りはしたものの、はした金でしかない 、このまま行くと自分が危なくなると言う事でもなく、サラを本気で愛し始めているらしい自分がおぞましくなったからだ。

怖かった。一生涯憎んでも憎み足りないオーウェル校長の娘を愛することなど、自分で自分が許さない！ こんなことはあつてはならないのだ。これ以上自分がサラに深入りする前に、今の内におさらばしなくてはならない。

「会っているだけでも、危ないということなのね」

「当たり前だよ。こんなこと……ここじゃ、れっきとした大スキヤンダルさ。だから」

ジェームズは心ならずも横を向くと、サラの腕を放した。それでいて、サラの手を離す気は無かったのだ。

サラは床に散らばっている紙幣や硬貨をかき集めると、そつとジェームズに手渡した。

「いや、これは……」

「いいの、これ、何に使ってもいいのよ。妹さんの為じゃなくてもあなたの為じゃなくても。例え穢れた金でも、何かきつと役に立つわ。わたし何一つ後悔していないんだから」

サラはこのお金でジェームズが幸福になるとは、もう信じていなかった。ジェームズがこのお金を酒に使おうと卑劣なことに使おうと、そんなことはもうどうでも良かったのだ。

それよりも、“もう会うのはよそう”と言うジェームズの言葉の方が、重く心にのしかかっていた。

「わたし達、ただ会っているだけで何の罪も犯していないのに、それなのに会えないのね？」

ジェームズは黙ったまま頷く。「そう、もう会うのはよそう」

「こんなに、あなたを愛しているのに……」とサラは呟いた。

「俺を愛してくれる必要はないよ、サラ。もう忘れてくれ」

「でも、たとえ離れていようと、愛することを止めることはできないわ」

そう言うと、サラは立ち上がった。

「あなたが愛してくれなくても、わたしは愛しているわ。わたしは……自分がカタワ者でそしてブスだと言うことも、もうよく知っているの。でも、魂だけは自由よ。何者も妨げることは出来ない。あなたを憎むことなんて、絶対に出来ないわ、誰にも」

「君はブスなんかじゃないし、自分の事をカタワ者などと言うなよ！ けれども……やっぱり……」

ジェームズは顔を上げた。そして言いたくない言葉を無理やり告げた。

「さようなら、サラ。有難う、このお金。そしてそれだけじゃなく」

「さようならは言いたくないの、ジェームズ」

サラはキツパリと言った。

外は粉雪が降り始め、ジェームズはポケットに両手をつっ込んだまま、サラが去って行くのを見送った。

サラの姿が粉雪の中に溶け行った時、彼は抜かりなく辺りを見回していたが、それでも彼の虚ろな放心状態の視線を逃れた者が居た。その人物は、じっとサラとジェームズを木陰から覗いていたのだ。

そして粉雪がジェームズの頬の傷を隠すかのように激しく降り続いている中を、そーっと後退りしつつ、足音もなく立ち去った。



サラと会った翌日、ジェームズはサラからせしめた金を握り締め、ボブの奉公している靴屋に行き、ボブをリトルウツドの医者に診せに連れ出した。そして何がしかの診察料を払い、高価な薬を買った。

始め医者は、軽蔑の眼差しで、「それで？　　うちはツケにはしない主義でね」と言っただが、無言で差し出された何ポンドを見ると、医者は肩をすくめながら招き入れた。ウェールズ人が来ることは珍しかったのだ。

けれども、医者の見立てでは、この目の前の若者は既に手遅れだった。医者はジェームズを廊下に呼ぶと、さり気なく告げた。

「残念ながら、現代の医術ではもう、あと数ヶ月かな……」

ジェームズはその場に倒れそうになった。けれども彼は頷くと、そ知らぬ顔に戻り、ボブの待つ荷馬車に近付くとヒラリと飛び乗ったのだった。

ボブは、この金が何か汚いことでせしめられた金であることを見通していたのだが、ジェームズに面と向かつては何も言い出せない。幸いなことに帰り道の馬車の上で、ジェームズは平然として何もかも、ただし自らの心の内だけは除いて、ボブに全てを打ち明けた。ボブは黙り込んだまま、暫く馬車に揺られていた。

「で、ジェームズ、これで良かったのかい？」

「何がさ？」

「お前の心は痛まなかったのかってことだよ」

「全然」とジェームズは親友の前で嘘を突き通した。

「オーウェル校長は本当は俺が貰うべき奨学金を、あの町長のバカ息子、シドニー・バロウズにやっちまったんだぜ。その何百分の1かを、娘から返却してもらったまでだよ。当然のことだ」

「あの奨学金か。町長は金持ちなのに、なぜ奨学金なんかを欲しがったんだろう？ あいつにとってははした金なのに」

「取引したんだ。奨学金じゃない。『首席』という名誉が欲しかったんだよ」

「取引に大金をか？ 多分な。そうかもしれない。サラの目を治すには、かなりの費用が要ったはずだ。あの田舎校長ではとても出せないぐらいに」

「あいつは卑劣な奴だ。金に目がくらんで、自分の教育者としての自尊心を売ったんだ。それも、あの小娘の目の為に」

手綱を握るジェームズの声が湿った。

「理屈ではそうだけれど、何だか気が引ける。嫌な気分だ」

「何言ってるんだ！？ そのお金でお前は良くなる。こんな素晴らしいことはないじゃないか！ それに俺はサラを脅したわけじゃない」

「口八丁手八丁だからな、お前は。どんな娘もお前に掛かっちゃイチコロだよ。特にあんな世間知らずの小娘なんぞは」

ボブは振り返り、ジェームズの横顔を見つめた。頬の傷は大分良くなったが、それでも歴然としており、リトルウッズの医者是最初ジェームズの傷のことで来たのだと勘違いしていたほどだった。

「ああ、その傷は痕が……裂傷の場合は……」

「俺じゃない。横の友達のことだよ」とジェームズはムカついた顔で言ったものだ。

「だが、お前さんの方の手当ても」

「俺はいいから！」

「分かった、お若いの」

けれどもその医者はいいつとジェームズの傷を見つめていたつけ。

「だがジェームズ、結局俺はもう助からないんだよ」

「え？ 何言ってるんだよ、ボブ。医者は……」

「いいんだよ、無理しなくても。もう俺なんかのために、その貴重なお金を使って欲しくないんだ。それにもうそんな危険なことはよしてくれ」

「お前は助かるよ。弱気を言っくな！」

ジェームズは怒鳴りつけた。

「それにもうサラとは会わない」

そう答えた途端、胸が掻き毟られる程の哀しみが押し寄せてきた。

「そうしてくれるか。ありがとう」

ボブはホッとして言った。

「ジェームズ、お前サラと会い続けていると、いつかとんでもないことになっちまうぜ。お前が何もなくても、お前はイングリッド娘を誘惑した下司な男で、下手したらレイプ犯にさせられちまうかもしれないんだ。お前にはあの鞭は到底耐えられそうにない。何しろ、なんてったってお前は元お坊ちゃんだ。俺だって一ヶ月は苦しんだ。たった15回だよ。」

あれは処刑と一緒に。緩慢な処刑、というやつ。そしてみんなの慰み者だよ。レジャーさ。何しろここには滅多に娯楽って物がないからな」

馬車が揺れ出し、ボブは激しく急き込んだ。その咳はなかなか止まらず、ジェームズは馬車を止めると、ボブの背中をさすった。そして苦しむ親友を自分の懷に抱いた。決して失いたくない者が、遠くへ離れて行く悔しさが訪れていたが、ジェームズは顔には決して出ずまいと自分に誓った。

ボブをさすっていると、サラの赤毛の頭を抱いた時のような柔らかな感触が訪れた。シェームズの目は、いつの間にかボブではなく、サラを見ていたのだ。

やがてボブの咳は幾らか収まった。

「ジェー・ー・ム・ズ？」

「ん？」

「この間のピクニックってやつ……楽しかったな」

「ふん、嘘付くなよ」

「嘘なんかじゃねえよ。海を見ておいて、ほんと、良かった」

「じゃあ、今度又春に行こう」

ボブは淋しく微笑んだ。「いや、どうだかな」

ボブは曖昧にもごもご言うと、そつと血の付いたハンカチをポケットにしまいこんだ。



シスター・ルースは、メアリーがやって来るまでの間、絶えず机を指でコツコツ叩いていた。シスターの古ぼけた机の上には、かなり前に来たサイモン司祭の返事が置かれてあった。シスターはそれをクリスマス・ミサが終わるまでは、メアリーに真実を告げるのを躊躇っていたのだ。なぜなら、その手紙の内容がメアリーにとって余りにも過酷な事実だったので、大事なクリスマス前にそれを告げることは、全てにとって良い事ではなかったのだ。

けれども今はもうクリスマスも終わり、あとは新年を静かに待つだけである。全てを告げる時がやって来たし、もうこれ以上引き伸ばせるものでもなかった。

メアリーには知るべき時期だった。真実を、である。少なくとも司祭の語った上での“真実”だったが。実際の所は分らない。シスター・ルースは、この内容の奥に、何かが秘められているかもしれない、という気持ちは持っていた。サイモン司祭の書いたことをそのまま鵜呑みにするほど、シスターはバカではない。けれども、確かにそれはある意味では真実であり、そしてその奥にある者は、誰にも分らないのだ。

シスター・ルースはため息をついた。

メアリーがいつものように控えめな態度でシスターの部屋の扉をノックして入って来た時、やはりシスターは緊張し身構えた。メアリーは伏目がちに、目の前の木の椅子に腰掛けた。

「メアリー……」とシスターは極めて堅い声で呼びかけ、それから自身もホッと一息ついた。こんなに言い辛い内容は、何年経験を経

たシスターであつても、言い難いものだ。

「つまり……サイモン司祭様からお手紙が来ましたよ、お兄さんの教区のね。覚えてるでしょう？」

メアリーはおずおずと上目遣いでシスターを見上げた。

「兄が、何か……」

「兄さんは極めて元気にしています。病気なんかではありません」

メアリーの口元が少しだけほころび、目が輝いた。

「良かった！」

メアリーは胸の前で両手を組んだ。

「けれども……」とシスターが咳払いをすると、メアリーの身体が途端に強張った。メアリーの微笑は崩れ、心配そうな瞳が真っ直ぐにシスターに注がれていた。シスターはもう一度咳払いをした。言わなければならぬのだ！

「兄さんは、あなたの……つまり……あなたの引取りを拒絶致しました。メアリー、あの……あなたに独立して欲しいと、一人で。そして自分のことは忘れて欲しいと、そう司祭様に告げたそうです」

メアリーは最初ポカンと口を開けていたが、直ぐに全てを悟ると、今にも立ち上がるかのように身を傾けた。

「そ、そんな！ 嘘だわ……そんなことを兄さんが言うなんて、嘘よ。そんな兄じゃない、そんな人では……なかったわ」

「嘘ではないんですよ、メアリー。わたしは嘘を付いてはいないし、あなたも司祭様を疑うの？ 実はね、司祭様でさえ驚いていらつしやるような文面です。まともな人間の言う事ではない、とまで……」

「嘘よ、嘘……」

メアリーは組んだ両手を揉み合わせ、捻り、それからそれを解くと膝の上で黒い色のスカートをギュッと掴んだ。メアリーの、ジェームズよりも更に碧ががった大きな瞳から、大粒の涙があふれ出た。

シスター・ルースは痛々しい眼差しで、この見捨てられた美しい娘のメアリーを見つめると、

「あなたの気持ちはよく分かります」とだけ言いかけた。それ以外、どんな言葉を掛ければいいというのだろうか！？」

「兄さんはわたしが重荷なのね」と絞り出すような声で、メアリーは呻いた。

「そんなことは……」

「いいえ！ それとも、もうわたしのこと、嫌いになったのよ」

「メアリー！」とシスターは幾分声を荒げた。それはシスターにとつてはとても珍しいことだったのだが。

「例えどうであれ、人を恨むものではありませんよ。兄さんがどんな方であろうと、彼を赦しなさい。兄さんにも色々なご事情がおりなのかも知れないわ」

「院長様。今のわたしにはそんなこと、出来やしない！ わたしにはたった一人の兄です！ 兄が迎えに来るのを、その日を夢見て待つて、一日一日を生きてきたんですから！」

「分かりますよ、メアリー……」

シスターは己れの感情を少しだけ後悔すると、立ち上がりメアリーのもとに行つた。そして彼女の背中を抱いた。

「わたしはどうしたらいいのですか、院長様？」

とメアリーはこぼれ落ちる涙を拭いもせずに、シスターにわずかばかり身体を預けた。

「兄を快く赦し、そして自分の力で何とかしろとでも？ けれどもわたしのような女が世間で出来ることは限られていますわ」

メアリーはとうとう肩を震わせながら、泣き出した。ひっきりなしに嗚咽が漏れ、シスターは暫くメアリーの感情が収まるまで、その背中をさすっていた。

「とりあえず……あなたの身の振り方を考えてみましょうね。こういう結果になったのはわたしもとても残念です。あなたが生涯を身も心も神に捧げるのなら話は別ですが、そうでなければ道は極めて限られています。」

幸いあなたは若く美しく、健康で、そして頭もいいわ。ここでの成績はいつもトップでしたからね。数学もラテン語も、その他の科目も。これらは他の人には簡単には与えられないものなのです。いわば、神からの賜物なのです。あなたはこういう恵まれた才能や賜物を持っているのです。悲観すべきではありません。」

あなたが望めば貴族の方の子弟の家庭教師や、女学校の教師の口の一つや二つは必ずあるはずですよ。それを探してみましょう」

メアリーは片手の甲で、ぐしゃぐしゃに台無しになった顔から涙を拭い、やっと頷いた。

「ええ……院長様。それがわたしの定めでしたら」

シスター・ルースは目の前の雄々しいくらいの娘をじつと見つめた。メアリーの中には、強固な意志があつた。それこそ、何者にも冒されない彼女のもつとも大切な“徳”なのだろうと……。

「メアリー、悲しいけれどこれが運命と言うものです。人の心は移ろいやすいわ。誰を責めても仕方無いこと。前向きに生きなければね。あなたなら大丈夫！」

この説得力に満ちたシスター・ルースの言葉に促されるように、メアリーはつい先程の激しいショックからようやく脱し、立ち上がって扉の方に向かった。

けれども扉を開ける前にメアリーはふと立ち止まり。シスターの方に振り向いた。

「わたしにはどうしても信じられないんです、院長様。兄さんが、もうわたしを愛してくれてはいないなんて……。あの心優しかった兄さんがあそこまで変わるものでしょうか？」

きつと何かあつたんだわ！　そうよ！　シスター！　一度兄さんに会わせて下さい！　面と向かつて聞いてみたいんです。今の事柄が全部本当がどうかって」

詰め寄られたシスターは、やや引きながらも毅然として言った。

「あなたがドーセットまで、一人で外出することは許されてはいません！　会いに出かけることは無理なのよ。少なくとも、あちらから会いに来ない限り。でもあと数ヶ月したら、ここを出る時には兄さんに会いに行けますよ。その時にお聞きなさいな。ね、メアリー？」

シスターはゆっくりと、けれどもキツパリと言ったので、メアリ

―は何も答えることが出来なかった。

「ええ、そうですね。そうしますわ」

メアリーは扉を静かに開けると、そつと表廊下に出た。

メアリーが去った後、シスターは崩れるように自席に戻ると、深い溜息と共に手で自分の額を押さえた。どつと疲れが押し寄せる。

メアリーが心から納得していないのは明白だった。けれどもこれ以上、自分は何が出来ると言うのだ。人間は無力なのだから。

あの無垢な娘が世間に出てどんな目に合うか、それは見なくともよく分かつていた。けれども、シスターにはこれ以上のことは出来ない。出来ることは最善を尽くして、メアリーの仕事をみつけること。それ以外に何もないのだ。

けれどもシスターは一抹の不安はあるが、メアリーの持つ強靱な精神力と、無垢のように見えて、それでいてどこか諦めず投げ出さない性格を見抜いていた。彼女なら、どんな辛いことが待ち受けていたとしても、墮落することはないだろうと思われたし、又そう信じたい。

シスターは両手を組み合わせて祈った。

あの娘この未来を、どうか主が支えて下さい。そしていい出会いを与えて、幸せにして下さい、と……。

＊＼＊＼＊＼＊＼＊＼＊＼＊＼＊＼＊＼＊＼＊＼＊＼＊＼＊＼＊＼＊＼＊＼

メアリーは深い悲しみを抱いて、小礼拝堂に赴いていた。そこは悲しみ嘆く人間にとってはうってつけの場所だった。誰も居ず、淋しく暗く古く荒れ果てていて、そして深々と冷え渡っている場所なのだ。

僅かばかりの古いステンドグラスからは淡い光が差し込み、そして正面には木製のマリア像が両手を広げて、メアリーを迎えているかのように置かれてある。

メアリーはそのマリア像の前に崩れ折れて、目茶目茶に泣き出した衝動を辛うじて胸の内に押さえ込んだ。

メアリーは跪くと祈り出した。祈りは時として何か邪推に遮られたが、けれどもやがて平安が少しずつ訪れた。

兄さんには他人には言えない、何らかの問題を抱えているのだわ。そしてそれがわたしを引き取れない理由なのかもしれない。わたしも不幸だと感じるけれど、でも兄さんはもつと不幸なのかも……？

あの時、金賞さえ貰えば、そして奨学金さえ得ていれば、兄さんの生きかたも随分変っていたでしょうね。小さかったわたしには何も理解できなかったけれど、でも何か裏でカラクリがあったんだわきつと……。あれ以来、兄さんは人格が変わってしまったんだもの。オーウェル校長先生は、なぜ兄さんに金賞を与えてくれなかったの！？ 誰が見ても、兄さんは一等だった。首席だった。優等生だったのに！ 他の先生達もみんな認めていたわ。なのに、賞に関しては誰もが口を閉ざしていた。兄さんは何も信用出来なくなっただわ、そして誰をも！

目を瞑ったメアリーの脳裏には、優しく美しかったジェームズの微笑みが浮かんだ。春の野原で共に手を繋いで歩いていたとき、ジェームズは傍らの野の花を眺めると、こう呟いたものだっただ。

「メアリー、僕の可愛い妹、まるでメアリーのような花だね。小さくて、でも可愛くて、そして名も無いけれど強い。そんな感じがする。メアリー、何が起ころうとも、この花のように強く可憐に咲いて生きて欲しいんだ。たとえ僕が居なくなっても……」

あれは何時のことだったのだろうか？ 確か両親が亡くなり、ジームズは粉屋から学校に行かせて貰っていた。ジームズの才能を惜しんで、小学校の他の先生達が授業料を免除していた、とあとで聞いた。

兄は知っていたのだろう。自分達が別れ別れになることを。賢い兄のことだから、何か自分に伝えたかったんだろうか……。

兄さんを責めるなんて、何てわたしはバカなエゴイストなの！？ 真実を知りもしないで、ああだこうだとばかり。

淋しいけれど、でも恨むのはよそう。これからは一人で生きて行くのよ。別れ別れだけれど、いつかはきっと、きつと会えるわよね、笑って会えるわよね……。その時にわたしはあの花のように、名も無いけれど可憐に強く咲いていたい。負けない、負けないわ……。

マリア様、わたしに力を貸して下さいませ。アーメン……

聡明なメアリーは、少しずつ己れを取り戻していった。



## 餌食ゝ冬の魔女ゝ 1

餌食ゝ冬の魔女ゝ

1

ギルフォード家は、毎年新年になるとハンティングをする習わしだった。

この一族はこの界限きつての裕福な地主であり、貴族の称号こそ無いものの、エドワード一世陛下以来の郷土ジェントリーの血筋を誇っていた。そういうわけで新年には近辺の郷土や富豪や地主達、そして役人達と、イングランド人ウエールズ人問わず招いては、派手にハンティングを開催するのだ。

したがって集まってくるのは皆大金持ちばかりか、下っ端ながらも貴族の称号を持つ者達ばかりだった。一番迷惑なのは召使い達や従僕下僕達であり、狩りに来る10人以上の客人達のもてなしや料理や馬車や馬の世話や支度に明け暮れた。

それから馬鹿馬鹿しいほど大掛かりな狩りの支度や猟犬達の世話、拳句の果てに客人達の夜の集いの相手にすっかり疲れ果ててしまうのだった。

400年の歴史を誇る古い母屋の台所では、料理女達が朝から晩まで料理をし、クッキー、マフィンやパイなどのお菓子を作り、他の下女達はやってくる客人の奥方や姉妹達の衣服の洗濯や繕い物、そしてアイロンに駆けずり回っていた。

そしてジェームズはと言えば、一日中ハンティングの一行に付き従っていた。

白い雪を真っ赤な血に染めて倒れるウサギや鹿や狐達……。ジェームズはそういう動物達を見るのが大嫌いだった。

自分には二面性があると、ジェームズは思った。ある時にはワンワン吠え立てる犬達や残酷な狩人であり、そして又ある時には、犬に追い立てられ雪の中に倒れる哀れな小動物であると。

ジェームズは一行の一番後ろに従いながら、血に染まった野ウサギを麻袋に入れ、じつと押し黙って全てを見つめていた。

「銃！」と言われればよく磨いた銃をサッと主人や客人達に渡すのもその仕事のひとつだった。

そのジェームズをじいつと見つめている女性が居た。

「毎年思っただけけど、お宅の庭番は綺麗ね。白い景色の中、絵になっているわ」

「絵心が湧いてきたの、フランシス？」

ギルフォード夫人が友人のフランシス・ハウエルを振り返った。フランシスはジェームズに見とれているのか、直ぐには返事はしなかった。

「絵心？ 本当！ 一度絵に描いてみたいものだわ」

「下男を描くですって！？」

ギルフォード夫人はそのギスギスした顔を露骨にしかめた。

「あなた、どうかしているわ。おまけにあいつは小汚くて小賢しくて怠け者で、どうしようもないウェールズ人なのよ！ 一度ジョンがあゝの庭番にお仕置きをしたの。鞭で叩いたわ。かなり長い間頬に傷跡が残って……いえ、今でもうつすら残っているけれど、おかげで他の召使い達にも示しが付いて従順になったわよ。何しろあいつはたった一人の妹の引き受けも拒否した奴なの。うちでは幾らでも下女を引き受ける、と司祭様にも言っておいたのに、その恩をあだで返して。下劣な根性だわ！」

フランシスは聞いていなかった。彼女はカーディフからこの辺りに嫁いできたイングランド人だったが、地元民に対しては理解があ

るほうだった。そして彼女自身、画家でもあった。

「一度イタリアに滞在していた時は」とフランシスは、まるで関係の無い受け答えをした。

「あそこの絵や彫刻は“素晴らしい！”のひと言だったわよ。モデルも良いのでしょう。イギリスの絵は凡庸で退屈でつまらない。生き生きした躍動感に乏しく、モデルにも表情が無くて。良いのは狩りの絵ぐらいね」

フランシスは屈託なく笑い転げる。

「フラ・アンジェリコの天使は、本当に可愛らしいのよ！　そしてミケランジェロのダビデ像はセクシーで、ダ・ビンチの……」

「フランシス！　こっちに野ウサギが来るわよ！」

まるで聞いていなかったギルフォード夫人の叫び声で、馬上の二人はウサギを追い詰め始めた。

「あなたの絵の講釈はもういいわ！」とギルフォード夫人が叫びかけると、

「あの庭番の目の色は何？」と関係ないことを、フランシスが尋ね、夫人は途端に苛々し始めた。

「知らないわよ！　じつと見たことすらないんですもの。多分……ブルーかグレーかじゃないかしら？　それがどうしたのよ。ねえ、フランシス！　あなた、その歳で摘み食いはよしなさい！　特にあのジェームズだけは……」

フランシスは聞いていない振りをして、我先にと哀れな野ウサギの後を追った。ギルフォード夫人は、苦々しい顔をしたまま、慌ててフランシスを追いかけた。

かなり離れていたジェームズは、彼ら二人の会話も知らず、二頭の猟犬の紐を握り締めていた。猟犬達は合図があれば直ぐにでも飛び出しそうに、ワンワン吠えまくっている。

「ジェームズ！　放せ！」と言う誰かの大声で、犬達は飛び出した。

白い雪の中、野ウサギは忽ちの内に追い詰められ、そして猟犬の牙に掛かってぐったりした。

ジェームズは手をかざしながら、その有様を無感動にじっと見つめていた。ジェームズは愚かだった。

最近、ジェームズは毎晩のように悪夢を見ては目が覚めるのだ。それはとてつもなく恐ろしい夢であり、又悲しい夢でもあった。

醜い爺さんの手が伸びたと思ったら、それはサラの腕へと変化する。又、メアリーの叫び、犬の悲鳴、下手な詩を吟じるジョン・ギルフォード、そして刑場に引かれる自分の姿……。そういったものが、毎晩取りとめもなく出て来るのだ。どれ一つとして幸せな夢は無かったし、そして現実も又同じだった。

親友のボブは新年に大量の血を吐き、以来ずっと寝込んだままだったのだ！

サラからせしめた8ポンド何がかのお金は、ボブの薬に消え果て、もう少しで空になりつつあった。それだけでもジェームズの気持ちを沈ませるには十分だったが、もつと怖ろしいことを彼は悟ったのだ。もはやボブを救うことは不可能なのだという事を！

ジェームズは『黒猫荘』で飲み明かし、残った小銭の全てを使い果たした。もうお金では何一つ解決できない絶望の淵に、ジェームズは立たされたのだ。サラが心を裂き、罪を犯してまで盗んだお金は、全て泡のよう<sup>あぶく</sup>に無駄に消え果てた。

ジェームズは絶えずイラついて、ドリューやニッキーに当り散らしていた。顔の傷は一生残るだろうと思われたし、ジェームズを取り巻く状況は何一つ良くならないばかりか、少しずつ袋小路に追い詰められて行くようだった。

そしてもつと恐ろしい思いもかけないことが起きた。つまりジェームズは心の底からサラを求めている自分を発見したのだ。その衝撃は大きかった。

激しく憎むと誓ったのにも関わらず、なぜ自分がサラを求めているのか理解できず、ジェームズは苦しんでいた。ぼんやりしている時には、必ずサラの面影が現れる。純な瞳を持ち、心持ち首を傾げたサラの微笑を浮かべてしまう。ジェームズはそういう自分を嫌悪し、再び悪夢の中に漂う日々を送っていたのだ。

そして獵犬に噛み付かれて死に絶えた野ウサギが、まるで自分の未来のように感じて身震いした。自分はどう考えても……獵犬の方じゃない……。

〕 〕 〕 〕 〕 〕 〕

ようやく狩りが終わり、客人達が午後のお茶の為に屋敷の中に入  
っていった後、ジェームズは疲れ果てた足取りで、馬達を厩の方に  
引っ張っていった。

そして一通りの仕事が付くと、どつと疲れが出てその場に座り  
込んだ。けれども安寧の時間は訪れそうも無かった。下女のマーガ  
レットが、突然納屋に飛び込んできたと見るや、ジェームズの首に  
抱きついたからだ。

「ジェームズ！ 今は誰も居ないわ。ね、あたしとやろうよ！ あ  
たし、あんたの為なら何でもするから」

マーガレットはがっしとジェームズの首根っこにしがみついたま  
ま、どつと干草に倒れ込んだ。そして素早く自分のスカートを上ま  
でたくし上げ、何もはいていない自分の陰部を露出させた。

「ね、早く！ 早くしようよ！ この間のように。最近もうあたし  
とはしてくれないの、ジェームズ？」

納屋の暗がり、マーガレットの下腹部と陰毛がうつすらと見え  
た。マーガレットはこれ見よがしに、自分の下肢を広げ、ジェーム  
ズを放そうとはしない。

「よせ！ 疲れているんだ。今はその気なんてないよ！」

「ジェームズ……」

マーガレットは哀れっぽい甘え声を発した。「じゃあたしがその  
気にさせてあげるよ」

そう言うとマーガレットは、ジェームズのシャツを脱がそうとあ  
がいた。ジェームズはほとんど張り倒すような勢いで立ち上がると、  
髪の毛の干草を払い、冷淡な目でマーガレットを見下ろしていた。

〕 〕 〕 〕 〕 〕 〕

台所付きの料理女でもなく、その下の下女に過ぎないマーガレットは、女の使用人の中でも最低の地位にあった。彼女は母屋ではなく、ジェームズと同じ使用人小屋で寝泊りしていたのだ。

マーガレットは極貧の子沢山の農家に生まれ、もちろん学校にも行かせて貰えず、幼い時から子守などをして両親を助けていたが、両親は口減らしにマーガレットをギルフォード家に預けたのだった。以来マーガレットは両親とは会ってもいないし、両親も会いにも来なかった。見捨てられたに等しいのだが、マーガレットは娼婦として売られたわけではない自分の身を、それほど不幸だとは思わなかった。少なくとも、ここは自分の家よりも食料があり、食うには事欠かなかったからだ。

そして何よりもマーガレットにとって幸いなのは、自分の住んで居た村では絶対にお目にかかることの無かった、美しいジェームズに会えたことだった。

幸運と言うか不運と言うか、かなり不細工でずんぐりした容姿のせいで、ジョンの目に留まって犯されることもなく、マーガレットはひたすら下女として働いていた。

他の下女や小間使い達が、ジェームズを心の中では賛美しつつも外見上は小馬鹿にして無頓着に振舞っている中で、唯一人露骨にあからさまに、そして正直にジェームズに恋焦がれている自分を隠そうとはしなかった。

ジェームズはそれを知っていながら、何度かマーガレットと愛のない情交を重ねていた。マーガレットは決して拒まず、むしろジェームズに弄ばれることを無上の喜びとしていたのだ。

マーガレットは、ジェームズが自分の事を性のはけ口としかみな

していないことを、重々承知の上だった。ジェームズは気まぐれで、自分に対する扱いは邪険で、そして心は残酷だった。

けれどもマーガレットは、ジェームズの浮世離れした美貌の虜になり、精神的にはどんなに傷ついていても、彼を追い掛け回すのを止めようとはしなかった。それは貧しい一人の若い平凡な娘の、唯一つの拠り所だったからだ。

「どうしたの、ジェームズ？ なぜ？」

マーガレットは更に自分の下肢を広げてみせたが、ジェームズは無言でスカートを被せた。

「もうやめろよ、マーガレット」

「なんでよお？」

「疲れているし……寒い」

「あたしが暖めてあげるからさあ」

「嫌だと言っているだろう。俺だってやりたくないときぐらいあるさ。種馬じゃないんだからな！」

「最近、あんたって変よ」

屈辱感に襲われながら、マーガレットはつぶやいた。その目に涙がじんわりと滲み、ジェームズの顔が二重に見える。

「変じゃないよ。なに言ってるんだ！」

「あたしがブスだから？ それとも、あの淫売女達の方が上手いって事なの！？」

「違うよ。何も分かつちやいないな」

ジェームズは舌打ちした。戯れに抱いたマーガレットは、今や罪の代償としての棘になりつつあることを、ジェームズは悟り愕然とした。



マーガレットは、隙のあったジェームズの上着の裾を引っ張ったので、再び彼はよろけて干草の山に倒れこんでしまった。

「よせつたら！ 仕事中だろ！？」

「仕事中ですって？ そりやそうよ。あたし達には、年がら年中仕事に縛られていて、自由な時間すらないわ。でも……アレが嫌だったら、せめて話だけでもしようよ。あたし、あんたをこのまま行かせたくない。側に居てほしいの、例えちよつとでも」

「ちえっ！ 話なんかつまらない」

ジェームズはやや諦めてそのまま横たわると、けれどもつまらないそうに干草の屑を投げていた。

「忙しいのは知ってるだろう？」

「ジェームズ、あんたはあたしのことを下卑てつまらない女だと思ってるのね。ええ、わたしには分かっている。あんたの聖域はポート・ハウス。でもあんたはあたしをあそこに呼ぼうともしない。

あそこならそこその広さに暖炉もあり、誰の気兼ねなく愛し合えるのに……」

「愛し合う？ あれは愛情なんかじゃない。ただの欲望だけの交わりだ」

ジェームズはポート・ハウスの話が出るとドキツとしたが、何食わぬ顔を決め込んでいた。それよりも、愛しても居ないマーガレットから、愛だの恋だのを言われる方が、ムカつくのだ。それは自分の軽はずみで自暴自棄な行為のせいでもあったのだが。もしもマーガレットが妊娠でもしたら大変だ。

ジェームズは、マーガレットときっぱりと手を切ろうと決心した。

けれどもマーガレットはジェームズの腕にしがみついたまま、取りとめも無く喋り始めた。

「ねえ……あたしって毎朝お屋敷の人達の便器の中身を捨てて、中を綺麗に洗う仕事をしてんのよ。するとね、あの威張り返っているあいつらだって、小便も大便も所詮あたし達と同じだなんて思うと、反吐が出そうになるわ。汚くってさ、臭くって……」。

あいつらも一度自分で自分の糞を掃除すればいいのよ！ そしたらあたし、その横で笑ってやる！ ……でもこれって所詮夢なのよね。そんなことはあり得ないんだもの。あいつら、結局一生そういうことはしないで済む人生なんだから。本当に、理不尽だわ」

ジェームズは肯定もせず否定もしなかった。マーガレットは横を向いたままのジェームズの頬の傷跡を指でなぞったので、ジェームズは煩そうに手で払った。

「あんたのこの傷だって、一生消えることはないのよ。あの肩の火傷のように」

「火事が……」

ジェームズのアメジスト色の瞳が翳った。「あれは俺じゃない……」

……

「あたしが来る一年前のことなんでしょう？」

とマーガレットが尋ねた。

「そうかもしれない。でも、忘れてくてもあの紅蓮の炎はとても忘れられないんだ。俺が寝ている時に、突然火の手が上がった。燃え盛る梁が俺の上に落っこちた。それなのに、命からがら出てきた俺を、皆がしょつ引いた……」

「あたしは信じるよ、あんたじゃないって」

「でも、結局俺って事になったんだ、証拠は無かったけど」

「単なる納屋じゃないの。あんなもの、焼けたってこの人達は屁とも思っちゃ居ないよ」

マーガレットはきつくジェームズの腕を締め付け、そして自分の頭を押し付けた。

「ジョン様は、あんたを傷つけたのに何とも思っちゃいない。火事にしたって……。ねえ、もう過去はいいのよ。それよりもジェームズ、あたしと一緒ににならない？　一緒に暮らそうよ！」

「何だって！」とジェームズは飛び上がった。「何言ってるんだよ！　馬鹿馬鹿しい！」

「馬鹿げてなんかいない。あたし、本気なんだから！」  
ジェームズを掴んでいるマーガレットの腕は、あたかも万力のようだった。

「ねえ、ジェームズ！」

「くだらねえ！　誰がお前なんかと！！！」

ジェームズは鬼のような形相になると、ありったけの力でマーガレットの腕を振りほどいた。マーガレットは尚も膝にすがりつき、かきくどく。

「ジェームズ！　あたし、あんたと一緒になれるんなら、どんな苦労したって構わないんだよ。あんたの為なら、何でもやるわ！　そして、あんたの妹も呼んで、一緒に暮らそうよ。みんなはあんたのこと冷たい兄貴だって言っているけれど、本当はあんたの真意が何か知ってるのよ、あたしは。あんたの大事な綺麗な妹を、あのジョン様に犯されたくないんでしょ？　そうよね」

ジェームズは、そのものズバリだったので、ドキリと胸を騒がせたが、黙ったままだった。この田舎のダサイ娘だが、マーガレットは意外に小賢しい所があるようだ。

「ここを出て、西の方、炭鉱に行こうよ。そこで何とか慎ましく暮らそうよ。三人でも構わないじゃない。炭鉱はそれなりに大変だけれど、でもここに居るよりはましよ。ね、ね、ジェームズ！」

ジェームズはやっとのことで、脛に絡みつくマーガレットの腕を解くと、さっと立ち上がった。

「俺はお前なんかとは、絶対に所帯を持つ気は無いぜ！　じゃあ、行くよ」

「ジェームズ、あんたは……」

マーガレットの化粧つきの無いひび割れた唇が震えていた。

「あんた、誰か好きな人が居るんだね！　そうなんですよ！？」

飛び去るように去って行くジェームズの後姿に向かって、マーガレットが喚き散らした。けれどもジェームズはマーガレットの悪態を無視して走り去った。

外は既に夕暮れで、再び雪がチラホラと降ってきていた。

使用人小屋に息せき切って入って来たジェームズに、ふくれっ面のフィオーナが立ち塞がった。

「ジェームズ、今までどこで油を売ってたんだい？ 又、お屋敷の奥様がお呼びだよ。今度は司祭様じゃないらしいけどね」  
えっ、とジェームズは凍りついた。

ここに駆け込むまで、マーガレットの馬鹿馬鹿しいと思われる申し出に対して猛烈に不快感を覚えていたのだが、それは全てジェームズの心を占領している人物が別に居ると言うマーガレットの言葉に対して、苛立っていたのだ。

なぜなら、それは真実だったからだ。ジェームズはいつの間にか、サラと共に住むという夢のような生活を思い描いていたのだ。決して叶えられそうも無い、はかない夢だというのに……。

サラの目となり、サラの力となり、そうして二人で暮らすと言う生活は、到底手の届きそうに無い遙か彼方の夢に過ぎないが、けれどもジェームズはそうしたかった。もはや自分を偽ることなど出来そうも無い。それを悟ったのだ。

けれどもフィオーナにはジェームズの心の内は分からない。

「もてる男は辛いもんさ。又マーガレットなんだろう？ 全く性のない娘さ、あのいかれた小娘は。まあ、いいわよ。さあさあ、早く行つといいで！ これ以上待たせたら後が怖いだろう？ 晚餐までには来いと言っていらしたから」

「母屋へ？」

「そ、母屋の応接間。ピアノのある部屋だよ。服装、ちゃんとして

おくんだよ。髪に藁屑が付いているじゃないか。ネクタイもしてよね」

「ネクタイ？」

「何だか、奥様だけじゃなく、お客人も居るんだってよ」

「客人……」

ジェームズには想像も出来なかった。けれども彼は逆らわずに、一つだけしかない一張羅を着て行った。

\*ゝ\*ゝ\*ゝ\*ゝ\*ゝ\*ゝ\*ゝ\*ゝ\*ゝ\*

おずおずと、一階の応接室に入ってきたジェームズを見て、フランシスは自分の目には

狂いがないと直感した。ジェームズは、フィレンツェで出会った数々のモデル達とは明らかに違っていたものの、辺境には稀な逸材としての容姿と雰囲気を持っていた。片側の頬の傷さえなければ、完璧だと思われる。それだけが難点だったが、絵を描く時にはどうとでもなるものだ。

ジェームズは、イギリス風の羊飼いか、牧神、それとも妖精の居る牧場で遊ぶ神話の神、アポロでもいいだろう、と素早くフランシスは値踏みをしていた。

晚餐の少し前、フランシスはその時ピアノを弾き、ギルフォード夫人と末娘のシンシアは、長椅子でゆったりと寛いでいた。

「失礼致します」と言うジェームズに、「お入り」とギルフォード夫人がもったいぶって命じた。シンシアはまだ12歳になったばかりの小娘だったが、ジェームズのことは良く知っているらしく、クスクス笑っていた。彼の貧しいが精一杯の身なりを見て、おかしくなったのかも知れない。

「奥様、何か御用とか？」

「そう。でもわたしではなく、客人のフランシス・ハウエル夫人が、ですけどね」

「フランシス？」

ジェームズはフランシスのことは、その時まで気付いていなかった。言われて初めて、ピアノを弾いている、悪戯っぽい目付きの中年夫人をチラッと見つめた。

フランシスは目が合うと瞬き、そして微笑み返した。けれどもその微笑は「舌なめずり」と言う表現がピッタリくるような代物で、彼は胸騒ぎがした。これから、何かが起こりそうな嫌な予感までしてくる……。

フランシスはやっとピアノを弾く手を止め、立ち上がるとツカツカと臆することなくジェームズの方に歩み寄った。ジェームズは卑屈な態度でお辞儀をする。

「それで？ あなたが妹の引取りを拒否した、“無慈悲な兄”というわけ？」

このフランシスの、かなり毒のある言葉で、ジェームズは外界と同じような寒さに凍りつき、上目使いに目の前の背の高い女性を見上げた。ジェームズの明らかなるうろたえ振りに、フランシスは嗤った。

「まあ、冗談よ！ 本気にしたの！」

ギルフォード夫人は、フランシスのこの冗談を、非常に悪趣味だと思つて顔をしかめた。今では、この事件はそこら中に喧伝されてはいるものの、あからさまに社交の場で言すべきものではない、という考えだったのだ。

けれどもシンシアとフランシスは根がよく似ているのか、人をからかうのが好きな性質らしく、二人とも目を見交わしてクスクス笑い合っている。

ジェームズは明らかに狼狽し気分を害していたが、それを隠そう

として、益々頬は火のように火照った。

「マダム……あの……それは……」

「気にしないでいいのよ」

「俺は、あの……」

「ジェームズ・エドワーズでしょう？ 知っています」

「ハウエル夫人は画家なのよ。ただし、そんなに売れてはいないけれどね」

ギルフォード夫人が珍しく助け舟を出した。

「画家……？」

「あら！ スウォンシーでは一枚売れたのよ！」

フランススはギルフォード夫人に向かって、ウインクをして見せた。

「今、良いモデルを探していたの。今度、春にサロンで展示会をするものだから。でもプロのモデルは嫌だったの。みんなスレてて、新鮮さが無かったし。もしもこのギルフォード夫人が許可を与えてくれるなら、昼前の2時間お前にモデルになって欲しいんだけど。ここに逗留している間だから、デッサンしか出来ないけれどね。アン、いいでしょ？ そしてあなたは、ジェームズ？」

ジェームズは声もなく、ただぼんやりと立ち尽くしていた。この高い身分の女性の申し出を否定することなど出来るだろうか？ いや、できそうもない。けれどもジェームズは出来ることなら、きっぱりと「No！」と言いたかったのだ。なぜか定かではないが、フランススはどこか危険な香りがした。



何も答えずに佇んでいるジェームズに、ギルフォード夫人はたたみかけた。

「返事は、ジェームズ？ ハウエル夫人は北の広大な領地の領主で、サーの称号を持つ、サー・アーサー・ハウエル氏のご令室様なのよ。悔しいけれど、わたし達よりもっと格が高く、そしてお金持ち。そうは見えないでしょうけどね。そして母方の祖先は、コーンウォール公に繋がっている由緒ある……」

「もういいじゃないの、アン」とフランシスは古くからの友達のギルフォード夫人に親しげに遮った。「彼、こういう初々しい所がいんだから」

「でも、黙っているなんて失礼ですよ」

ギルフォード夫人は、どちらにも棘のある言葉を容赦なく浴びせた。けれどもフランシスだけは、ニヤニヤ笑っている。

「どうなの、ジェームズ？」

「もちろん……身に余る光栄です。けれども、モデルと言うのは……その……」

「なに？ まさか裸になれとは言っていないじゃない」

このフランシスの不躰な言葉に、謹厳実直なギルフォード夫人は顔をしかめ、そして心の中で舌打ちをした。

「ジェームズ、わたしが許可を与えますよ」

「ええ、では」

仕方なくジェームズは承諾した。

「それじゃ、ジェームズ。明日の午前10時に来てちょうだい。わ

たしの部屋の隣の部屋をアトリ工代わりに使わせて頂くわ。あそこはステキなお部屋ね。ちよっと古風だけれど」

「ブルーの間」？」

「そう、その“ブルーの間”」

「いいわ。鍵を与えますよ。それじゃ、ジェームズ、下がって」

結局何の否定的発言を発することもままならず、いつものように一方的に承諾させられてしまったのだ。ジェームズは屋敷から無言で退出しながら、何一つ抵抗できない自分に対して、自己嫌悪が益々募ってきていた。

＊～＊～＊～＊～＊～＊

ウェールズ人でドーセットの町長の娘、ノラ・バロウズは、その日ちょうどイングランド人のサラ・オーウェルを家に招いた。

ノラは兄のシドニーとは違って利発な娘だった。多分成績ではシドニーを明らかに凌駕していたが、この時代には娘が大学に行くことは出来ず、彼女はそれを断念せねばならなかった。

町長のアンソニー・バロウズ氏は、少なくとも由緒正しいウェールズの貴族の血を引いており、サーの称号こそ無いものの、自分達は高貴な身分であるといつも自身に言い聞かせ、家の中ではケルト語しか使わず、それでいて公の場所では、完璧で正しい、美しい響きを持った　と本人が信じている　キングズイングリッシュを話した。彼は巧みにそれを使い分けていた。

バロウズ氏自身頭がよく、血筋もよく、上の階層とも下の階層とも上手くやっていける為、町長には最適の人物だったのだ。けれどもその反面極めて狡猾な面も持ち合わせており、すなわち……彼は政治家としても大した人物だった。

そして最大の彼の長所は……秘かに莫大な金銭を貯めている人物だったのだ。持っていないのは、ロンドンに通じる人脈と名誉だけだった。それだけはウェールズ人であるバロウズ氏にも、なかなか手に入り難いものだったのだ。

けれどもとりあえず長男のシドニーは、ケンブリッジに入れた。ただし、その後の息子の不品行な行状や低迷する成績については、人知れず頭を悩ませていたのだが。

そういう町長だから、娘のノラがイングランド人のお金持ちと付き合うのを好んだ。けれどもそのノラが、小学校校長の末娘で目が不自由なサラ・オーウェルを家に呼びたいと申し出た時には、持っていた新聞を取り落としそうになった。彼は内心の動揺を何とかして愛する娘に悟られまいと、何食わぬ顔を試みた。

そういう父親の気も知らず、ノラはギルフォード家でサラに会って意気投合したこと、今まで2度程サラの家にお茶に呼ばれていたこと、そしてサラの聡明さと純粋さを賞賛し、一月末のサラの誕生パーティにも呼ばれていることなどを絶え間なく喋り続けた。

「サラと言うのは、あの目が見えなかったという子かね？」

「そうよ。手術が成功した後、今でも分厚いレンズの眼鏡を掛けていて、ひどくオドオドした不細工で小柄な女の子。でも、はにかんで笑うところは妙に可愛くて、芯が強い人。イングランド人にはあいうタイプ、珍しいわ。今日の昼、ここに来るの。ね、お父様もお会いになったら？」

「いや、やめておくよ」とバロウズ氏はよそよそしく答えた。

「アベリストウィスで暴動があったんだ。どうせ社会主義者の独立運動家の仕業だろう。はねっかえりの下層ウェールズ人の間で広まっている。今までわたしが中央の政府と色々交渉して来たと言うのに、そんな反乱が起きては元の木阿弥だ。直ぐにリトルウッドまで

出かけてくる。やれやれ、アベリストウイスまで汽車は無いからな。船か……それとも馬車で山越えでもするか」

「そうなの？ 大変ね、お父様も」

「町長ともなれば、様々な事件に係りを持たなくてはならんのだよ。それじゃ」

バロウズ氏はボソボソとぼやきながら、逃げるようにその場を去った。もちろん、暴動は実際にあったものの、彼が直ぐに行く必要性は無かったのだが……。

バロウズ氏は自室へ戻ると、「まずい！」と舌打ちした。もちろんそれは、暴動の事もあるが、それだけではなく、ノラとサラの付き合いのことが主だった。かと言って、「サラ・オーウェルとは付き合うな」と申し付ければ、頭の良いノラは、何かあるのでは、と嗅ぎ付けるかも知れない。寝た子を起こしてはならないのだ。

かくして今はそつとしておくべきなのだ、という結論にバロウズ氏は達した。おぞましい秘密は絶対に護らなくてはならない。そうでない、遠からず家名が汚されてしまうだろうから。

『イングランド人なのに、とっても感じがいい人、偉ぶらないし』  
とノラが吹聴していたように、確かにサラ・オーウェルはバロウズ家でかなり良い印象を与えたようだった。キティ・ギルフォードのような高慢で押し付けがましい所もなく、他のキャーキャー騒ぎ立てるのが取りえのような軽薄な女の子でもないサラは、サラの部屋よりもっと素晴らしい調度品の置いてあるノラの飾り立てられた部屋で、お喋りに興じていた。

ノラには父が勝手に決めた婚約者が既に居た。結婚式は、来年の夏の終わり頃だと言う。相手はリトルウッド近郊に住む、ウェールズ人の大地主で、中央政界にも通じているという大金持ちだ。  
「それでノラ……その人のこと好きなの？」とサラは椅子にじっと座りながら、けれども興味深そうに尋ねた。

「別に。だって、2度ほどしか会っていないんだもの。歳もずっと上だし、15歳は違うわね。もう30過ぎて、痩せてて背は高いけれど、頭はほとんど剥けているのよ！ この間のパーティーでは一緒に踊ったけれど、彼、わたしの足を踏んでしまったわ！」

ノラは思い出したのか、くくくつと笑い出した。

「で……その……何も疑問に感じないの？」

とサラの方は、真面目な目付きだ。

「何が？ つまり、親が勝手に決めたことが？」

「そう、ええ、そのこと。他に、好きな人が居ないの？」

「まあね、居ないってことも無いけれど……でもそんなこと無理じゃないの。両親が、わたしにはもっとハンサムで若い男を選んでく

ればよかったのに、とは思わよ。でも、彼は実直そんな人だし、それに、わたしが自分で相手を選べるとでも思う？　もしもそんなことしたら、わたし、父に勘当されちゃうわ！　不幸な未来が待っていると思わない？　それは嫌だもの」

「そうね」

サラは淋しげに答えたものの、脳裏にはジェームズの顔を思い浮かべていた。あれ以来、二人は一度も会ってはいなかった。

一度ならず、サラは例の栗の木の前ほくらに手を差し入れ、探し回ったのだが、案の定ジェームズからの手紙などは入っていなかったし、自分自身もその中に手紙を入れたことは無かったのだ。

これで終わり、とは思いたくなかったが、今の状況下ではどうしようもないのも事実だった。

「マフィンがなかなか来ないわね。何してるのかしら！」

ノラはややイラついて、そわそわしていたが、やおらサラの方を向き直った。

「あなたはどうかなの、サラ？　イングランド人もそういうもの？」

「相手を親が決めるってこと？　ええ、そうね……でも、どうかのかしら？　うちではそんな話すら出てこない。二人の姉達は決められた人のところに嫁いで行ったけど、わたしには結婚話すらないのよ。そりゃそうよね、わたしって、目も悪いしブスだもの。とても結婚なんて……」

「そんなことないわよ、サラ！　あなたにもいい人が出てくるから！　でも、どっちの世界も似たようなものなのね。自分の想う人とは結婚できないのは！　それが出来るのは、逆に下層階級の連中だけなのよ。わたし達は無理」

ノラはキツパリと宣言した。

「そうかもしれない……」

サラがぼんやりとつぶやいた時、やっとドアがノックされ、背の低いまるで子供のような小間使いが、マフィンを盛った皿をおっかなびつくりで掲げて入って来た。ノラはかなりきつい言い方でこの小間使いを叱っている。二人ともウェールズ語を喋っているので、余り良く知らないサラには細かいことは分からないものの、内容ぐらいいは何となく分かった。小間使いはうなだれて、今にも泣き出しそうになりながら去った。

「ごめんなさいね、ウェールズ語で喋って。でもあの子ったら、英語が全然駄目でさ、その上カンブリア山脈の中のだ田舎から奉公に出て来たものだから、時間の概念が全く無いの」

「いえ……いいのよ。ちよつとぐらい遅れてきたからって」

サラはやや気まずい思いを抱きながら、そう言った。どの世界の中にも、差別はあるものなのだ。虐げられているウェールズ人の中にも、更に上層部から馬鹿にされている人々は、ただ黙っているしかないと……。

とにかく二人は熱々のマフィンを食べながら、サラは思い直し、あちこちを見回しては溜息をついていた。

「ノラ、この家って、どこもかしこも素晴らしいのね。壁紙は新しいし、家具も立派。あなたの持っている人形だって、ロンドンにも余り無いような代物だわ。それに、この、この茶器、可愛いわ。高価そう！でも当たり前よね、町長様のおうちなんだもの」

「ただ、古いものや新しいものを大切にしているだけよ。先祖代々の物もあるしね。ここにある調度品やお人形は、大体贈り物だし」

「でも、それって、すごい事じゃない？」

「え？でも、サラ、あなたのところだって、お金持ちなんでしょ？」

「どうして？うちはいたって質素な生活よ。こんなに立派な家具とかソファとかは無いわ。ソファには継ぎが当たっているし」

「そうかしら？」

ノラは訝しげに、手を止めた。

「なぜ？」

「だって、巷じゃあ、あなたの目の治療に物凄くお金が掛かったんだろうつて噂しているじゃないの。ロンドンでも有数の医者に診て貰って手術もしたし、その後の療養とか何とかで、ちつとやそつとのお金じゃないぐらい、あなただって知っているでしょう？」

ノラの問いかけに、サラは心臓がドキンと波打った。サラは暫くノラの言葉を反芻していた。

物凄い金額のお金……。そんなこと、今まで考えもしなかったのだ。何と言う愚かな自分なのだろう！？

サラは突如として明るみに出された事実、激しく動揺した。



「あら？ あなた、何も知らなかったの？ まさかそうじゃないわよね？ それとも、ご両親から何も聞かされていなかった？」

「あの……わたし……」

サラはしどろもどろに答えるしかなかった。持っていたマフィンの皿は小刻みに膝の上で震えていた。確かにサラは自分の事だと言うのに想像したことも無かったし、又両親も兄弟達もそのようなことを話題にもしなかった。わざと避けていたのだろうか？ 意図的に？

それよりも、そのような重大な事柄にこの歳まで気付かなかった自分が、とんでもなく浅はかだったのかもしれない。

「やっぱり、知らないんじゃないの！？ まあ、大体想像は付く額だけれど」

「さ、300ポンドぐらいかしら？」

「何言っているのよ、サラ！ そんなはした金じゃないわよ！ うちの母が言っていたけれど、最低でも2万ポンドは掛かっただろうって」

「そんな！ 2万ポンドも！？ そんなお金……」

サラは心底驚いて口をポカンと開けたままだった。そういう世間知らずな友人に、ノラは半分は意地悪く、半分は同情しながら言った。

「ほんとに何にも知らないのね、あなたって。ま、仕方ないかもね。だって、今まで世間様とのお付き合いも無く、療養所や家の中にじっと居て、何も知らずにここまで来たんだもの。あなたは、ただ自

分の目のことさえ考えていたら良かったんだから。16年間なんて、あつという間なんだから」

サラはマフィンをテーブルに置くと、すぐるような目付きでノラを見上げた。

「あなたの言う通りかもしれない。本当なの、わたし、何も知らなかったわ！　だってそんなお金がうちにあるなんて思えないもの。うちは質素でいつも儉約していて、母だって新しい服などここ数年買ったこともない人なのよ。父も好きな葉巻でさえ、安物で我慢しているわ。お茶の時にも、一番最低の茶葉しか使っていないの。だから、そんなお金は……うちに有るとは思えない」

「まあね。でも、どこかにあったのよ、きつと。例えばさ、誰かからの遺産が入ったとか、宝くじが当たったとか」

「誰かからお金を借りたのかも……」

サラの声は消え入りそうだった。

「どっちにせよ、ご両親はあなたの目を良くしたかったのよ。どこかにあったんだわよ、だってあなた達ってイングランド人なんだから。さっきの小間使いの給金は年間たったの20ポンドなのよ。それも、お情けでうちに置いているの。恐らく実家の食べ物よりは、うちの方がずっとマシなはずだから。でも、校長先生の所はまだ良い方でしょ？」

サラは聞いていなかった。

「わたし、馬鹿だった……」

ノラは自分が何気なく言ったことで、サラが非常に驚き、又動揺しているのを見て、不思議な気がした。サラはやはり何も知らないし、知らされていないようだ。村人達が、校長が一体どこから、サラの目の治療費を工面していたか、陰でこそこそと噂していたのだが、このイングランド人の娘は何一つ気付いてはいない。いや、校

長一家がサラに気付かれまいと、並々ならぬ努力をしていたに違いない。

それにしても、サラの世間知らずには、ノラも開いた口が塞がらなかった。

「まあ、サラ！ ごめんなさいね、こんなにも驚かせちゃって！

でも、見えるようになったんだもの。良かったじゃないの。お金のことよりも、そっちの方が大切でしょ？ 親なんて、子供の為には何だってやるものよ。ありがたいと思わなくちゃ」

けれどもサラはノラの言葉にも上の空で頷いただけだった。サラは気付いたのだ。そのお金はどこから湧いてきたのでもない。かなり無理をしたお金なのだという事を。

\* ~\*~\*~\*~\*~\*~\*

帰り道、サラは沈み込んだ心を抱きながら、ドーセットのはずれをトボトボと歩いていった。急に自分が“大人”になったような気がした。そして今までが如何に“ネンネの子供”で、そして両親達に護られていたのか、痛切に感じたのだ。

その反面、自分が何か良くない秘密で覆われているような気がした。今始めてジェームズの複雑な眼差しの意味を悟った。ジェームズは明らかに何かを知っている！ そして、父親のオーウェル氏も同じ事を共有しているのだ。だから二人は仲が悪い。

そしてもっと恐るべきことには、その“秘密の源”が自分自身なのだという事を、サラは今発見したのだった。

世の中は綺麗ごとではない。金銭の問題と、人間との係りは絶対に存在している。

その反面、爪に火を灯しているような質素な生活を余儀なくされている母親から、小額とは言え盗み取った自分の罪深さにも、サラは愕然としていた。

ジェームズを愛すること、そのことは別物だと以前はそう思っていた。けれども今、それは同一のものなのだ。

何か関係がある……そうに違いない。そう思うと同時に、サラの心は再びジェームズを追い求めていた。

サラは少し回り道をする、石橋の側の栗の木のほこらに手を突っ込んだ。けれども、その冷たい手は何も掴まなかった。空しい思いがサラを包む。サラはジェームズに会いたいと言う思いを、今更ながら痛切に感じた。

ああ、ジェームズ！ あなたに会って、聞きたいの。あなたはきつと何かを知っているんだわ。わたしの知らない、何かを……。

\* ~~~~~ \*

けれどもそのジェームズは、畏に掛かるとも知らず、翌朝ギルフォード邸の中の“ブルーの間”に向かって、重苦しい気持ちを抱いたまま歩を進めていた。

## 生け贄ゝ冬の女王 1

生け贄ゝ冬の女王

1

午前10時の“ブルーの間”は暖炉が赤々と炊かれていたものの、それでも幾分肌寒かった。ジェームズは4、5分遅れてくると、慌ててドアを閉めた。目の前の長椅子に、フランシスがゆったりと尊大に座っており、白いキャンバスが既に立てかけてある。

「遅れてすみません、奥様」

ひたすら謝っている若い男を、フランシスは何とも奇妙な笑みで迎えた。

「明日から気をつけるように」

「はい……奥様」

こう応えたものの、もじもじしながらジェームズは突っ立ったまままだ。

「一体どうすれば」

「まず上着を取りなさい。それからこつちを向いて。顔を上げる！」  
ぎこちない動作でジェームズは言われるままに従った。フランシスはクロッキーを持つと、真剣な顔でキャンバスの紙に向かった。

暫くは白く分厚い紙に黒い線が素早く描かれていく、ザツザツという音だけがしていた。

「ジェームズ、あなは今何を考えているの？」

含み笑いをしながらフランシスが聞く。

「何も考えてはおりません、奥様」

「嘘でしょ？ あなたは何か今遙か彼方を見ているわ。その先には何が見えているの？」

サラのことを想っていたジェームズの頬がほんのりと赤らんだが、

それでも彼は黙っていた。

「まあ、いいわ」

フランスは勘の鋭い女性だった。それは彼女が富豪の妻であるだけではなく、芸術家だからかもしれない。彼女はジェームズの嘘を直ぐに見抜いた。

画家はモデルの中に、内面的な何かを感じ取り、そして容赦なく覗き込む。フランスも一人の画家として、いやそれ以上の興味を持ちつつ、ジェームズの中にドカドカと無遠慮に入り込もうとしていた。

この目の前の粗末なホームスパンのシャツを着た若者は、フランスの中の何かを突き動かして行く。長い間忘れ去っていた“何か”を……。若さや初々しさ、残酷さ、痛々しさ、無邪気さ、そしてエロスを！ もはや中年の女性であるフランスが、とうの昔に失ったものばかりだ。

フランスはデッサンの筆をとめると、クロツキーを持ったままジェームズに近寄った。匂うような若々しい肌の中に、醜い傷跡がある。けれどもそれは、美の中の痛々しさを更に強調するものでしかない。世の中には完璧な美など無いのだ。

フランスはジェームズの直ぐ側まで歩み寄ると、クロツキーを持っていない方の片手で、ジェームズの胸の辺りをシャツの上から突いた。ジェームズは筋肉質ではなく痩せぎすなのだが、けれどもそのシャツの下の弾力のある筋肉は推し量られた。

「ジェームズ、シャツを脱いで肌を見せて。寒いでしょうけど」

ジェームズの心臓が波打ち、全身に悪寒が走った。彼はやや躊躇った。

「シャツ……だけでしょうか？」

「もちろん、シャツと肌着も脱いで」

「上半身裸になれと？」

「ま、そういうこと」

ジェームズの表情には抵抗の色がチラツと見え隠れした。フランシスは笑い出した。

「まあ！ 何もズボンまで脱げなんて言っていないでしょう？」

ジェームズの瞳が見開かれ、驚いたような怯えた獲物のような影が浮かんだ。

彼の瞳はアメジスト色なんだわ……。この色は、わたしにでも出せないかも。

けれどもジェームズはフランスの言う通りに従う他はなかった。  
「はい、奥様。今しばらく」

まごつきビクついているジェームズの横顔は美しい。暖炉の炎の動きにつれて、白い肌にその陰影がゆらゆらと襞のように纏わりつき、捕われの動物のようなしなやかさと危うさがあった。

ジェームズはシャツと継ぎ当てだらけの肌着を脱ぐと、そばの椅子にそつと置いた。

「ジェームズ、あなた女の人を泣かせているわね、そうでしょ？」  
余りにも的を得た問いに、ジェームズはパツと目を伏せ、それからおずおずとフランススを見つめた。何かが自分に警鐘を鳴らす。  
“逃げる！”と。けれども、自分は今ここで逃げられるのだろうか？

ジェームズは自分がまるで古代ローマの奴隷のような気がした。

“奴隷”……自由人ジェームズが一番嫌う言葉だ。

「どういう意味でしょうか、奥様？」

「まあ、シラを切るのが上手いのね。隅に置けないこと！」

「シラを切る？」

「あなたを追いかける女が誰も居ないとも思っているの？ わたしには分かるわ。あなたは様々な女を誑かし、そして女を弄ぼうとしたわね。それを知っていても、女達はあなたを追いかけるのを辞めようとはしなかったはずよ。答えなさい！」

図星だったが、ジエームズはただ一人だけは、自分の心の奥にそっと仕舞って置きたかった。

「俺は、今はただ一人だけを……」

「ほら、やっぱり。だけど、その女への操は捨て去ることね、ジエームズ」

「え？」

フランスはクロツキーをテーブルに無造作に置くと、雌猫のように伸びをした。そしてドアに近寄ると錠を掛け、再び石の様に動かないジエームズの側まで臆せずに来て。ジエームズの心臓は早鐘のように打ち続けていた。



フランス・ハウエルは背の高い堂々とした女性だ。ジェームズの隣に立っても、背の高さは殆ど変わりがなく、威圧感はかなりのもだった。そして、何の心の準備もしていないジェームズの唇を突如としてフランスは奪った。

唇を離すと、フランスは木偶人形のようなジェームズに向かって言い放つ。

「お前はただの下層階級の人間とは違うわね。話し方も振舞いも、全てが違っている。どんなに下卑た真似をしようと、それはただ自分を欺いているだけのことよ。お前は本心を隠すのが呆れるほど上手いわ」

「奥様……俺は」

「黙って！」

フランスは右手をジェームズの顎に添えて、じつとその目を覗き込んだ。その瞳はフランスを狂わせ、情欲を湧き起こさせる。

「わたしは20年間、あちこち旅をして来たわ。フランスやイタリア、ギリシャ……果ては遠くバルカン半島にまで行ってきたし、イスタンブール、エジプト……。イギリス中也旅してまわったのよ。何かから逃れ何かを求めて。その間数え切れないぐらいの男に出会ったわ。その中には、お前よりもっと歳若い少年や、美しい男達、逞しい船乗り、そして紳士達も……。一杯見て会って喋って……。そして何人かとは寝たこともあるわ」

ジェームズは、夫人の心の中の、ある底知れぬ“怖さ”に身震いした。けれどもそれは、単に寒さのせいだったのだろうか？

「でも、こんな田舎に、それもわたしの足元に、お前のような男が居たなんて！ 皮肉なこと！ お前はわたしが今まで会った男の全とは違っているし、そして一方では、その全てすらも超えているのよ。分かる？ お前は女を惹きつける魔力を持っているのね、生まれつき。でも、気をお付け！ それはとても危険な印なの。お前を滅ぼしかねないほどにね」

語りながらも、フランスの手が顎から少しずつ下りて行き、ジエームズのむき出しの胸に触れた。ジエームズはその間、まるで神話のメデューサに睨まれた彫像にでもなったかのように、じっと立ち尽くし言葉一つ出てこなかった。

「ジエームズ」とフランスの口元が、ほとんどジエームズの口元の側で微かに動いた。

「さあ……ズボンを下ろして」

フランスはジエームズの耳元で囁いた。

「奥様。俺は……」

ほとんど息を詰まらせながら、ジエームズは何とかして抗おうと身構えた。

「俺は単なるモデルとして、ここへやって来たんです……」

「だからな？ ジエームズ、分かっているはずでしょ。お前ももう大人なのだし、経験も豊富なはず。お前はもうどこへも行けないわ。何かあったら、わたしはお前から強姦されかけたと言っただって出来る。みんなわたしの言うことしか信じないわよ。それとも、言葉ではっきり言わなければならないほど、お前は大馬鹿者なの？」

「奥様……」

「お黙り！ ジエームズ、お前は利口な坊やのはずよ」

ジエームズはフランスの目をじっと見つめた。彼女が本気であるのは明らかで、彼は全てを観念した。ジエームズは深い吐息をつ

いた。

「奥様が、それをお望みならば……」

フランススの顔が歪んだように笑った。その厚化粧の顔は、若い頃は確かに美人だったかもしれない。

フランススはジェームズのズボンの紐をさつと解いた。解きながらも、ジェームズに口づけすることは忘れない。ジェームズは未だに両手をダラリと下げたまま、フランススの成すがままになっている。

フランススはジェームズの下半身から、全てを取り去った。そしてむしゃぶりつく様に、その若い肉体に口付けをし続けた。彼女もまた、着ていたローブの胸をはだけた。

「隣室は、わたしの寝室なの」

フランススのいざないによって、ジェームズは“ブルーの間”から、隣室へのドアを通じて、フランススの部屋へと入っていった。大きい古風なベッドが見え、天蓋からは白いレースが垂れている。絹製の羽根布団が柔らかい。

フランススはそこで全裸になり、荒い息をつきながらジェームズをベッドに倒した。眩しいほどの若い男の肉体が、彼女をくらくらさせた。

「わたしを悦ばせて、抱いて……ジェームズ」

「奥様、一つだけ条件が……」

あくまでも冷静なままジェームズが言った。

「条件！？ 下男が条件とは！」

「欲しいんです……つまり……」

「肉体だけでは物足りないの？」

「ええ」

「なに？」

「お金です」

途端にフランスはジェームズから身を起こすと、嗤い出した。笑いながら腹を押さえ、涙まで拭く。その涙はおかしさと、そして悔しさ。そして、自分の愚かさを認識した腹立たしさを隠すためでもあった。

「お金！ はっ、呆れたわね！ わたしはお前をもつと初心だとはかり勘違いしていたわ！ いいでしょ、幾ら欲しいの！」

フランスの顔は、森に住む魔法使いの女のような形相になった。

「奥様のお望みのままに」

「分かったわ！ これで取引終了ね。でもいいこと、ジェームズ！ これでお前は“哀れな生け贄の子羊”なんかじゃなく、自分自身の身も魂も売った、淫売に成り下がったって事なのよ！ わたし達の間も、ビジネスに成り下がったものだわ！ お金を出すからには、お前はわたしに徹底的にサービスしなくちゃならないって事！ わたしを快楽に導き、悦ばすの。分かったわね！」

そう言うや否や、フランスはありったけの力で、ジェームズを平手打ちした。ジェームズの怯えたような、それでいて妙にふてぶてしい目付きがあった。

「さあ、ジェームズ。これでビジネスの交渉は済んだわ。わたしはこれからサウス・ウェールズ一の美形の男を抱くというわけ！」

それからフランスは飽くことなき欲情のままに、ジェームズをかき抱き、そしてジェームズは金で買われた男娼のように、女主人に徹底的に奉仕し始めた。フランスはジェームズの手練手管に酔いしれ、久しく味わなかった底知れない愛欲の中に埋もれていった……。



昼過ぎ、ジェームズはポケットにフランシスから貰った1ポンドを忍ばせて、使用人小屋に戻った。フィオーナはちょうどスープをかき混ぜていたが、ジェームズは台所のテーブルの側に腰を下ろすと、ずっと下を向いてそのままの姿勢で動かない。その内に、座ったまま肩を震わせながらジェームズが泣いているのにフィオーナは気づくと、スープを混ぜる手を止め、びっくり仰天してジェームズを見つめた。

フィオーナは、こんなに打ちのめされたジェームズを見たのは初めてだった。屋敷で何が起こったのかは見当も付かなかったが、何かとてつもないことがジェームズの心をバラバラにしたのだけは確かのようなだ。

「明日も又、お屋敷へ行くの？」

とフィオーナは、ジェームズに少し近寄りながら小声で恐る恐る言いかけた。けれども、ジェームズは聞いているのかいないのか、ずっと肩を振るわせて下を向いているばかりだった。

「ジェームズ、大丈夫かい？」

ジェームズはこの素朴な問いに、わずかながら頷く。

「ならいいけど、でも……」

「明日も行く……明日もあさっても！ 俺はもう断れない。人間じゃない、物」なんて！」

フランシスは何一つ言葉を掛けられなかった。

ジェームズは握り締めた拳で、自らの膝を叩いていたが、その拳にジェームズの涙がポタポタと落ちた。

自尊心……もしもそんな物が残っているのなら、ジェームズはあの時フランスを殺していたかもしれない。けれども今のジェームズには、何も無かった。自尊心も、反抗心も。全てが抑圧されていた。そして今彼は限りなく空虚だった。

\*　　\*　　\*　　\*　　\*　　\*

誰も居なくなつた部屋で、フランスはぼんやりとベッドに座り込んでいた。

フランス・ハウエルは、2年間もの間、男つ気もなく過していた。3人の子供達は成長し、嫁いだり嫁を貰っていたし、一人は植民地インドに行っていた。

夫のハウエル氏とは上手く行っていない、1年の内大半夫婦は別居生活をしていた。夫には若い踊り子の愛人が居たし、フランス自身は旅から旅へと気ままな日々を過していた。

そして今、久し振りに一人の若い、それも飛びつきり美形の男を抱いたのだ。相手は、フランスの気に食わない友人の下男だったが、そんなことはどうでも良かった。2年振りに、もはや忘れかけていた快樂と悅樂に酔いしれたのだから。

相手が自分に全く好意を抱いていないことは確かだったが、だからと言って“女慣れ”している男らしく、彼女を充分に楽しませた。そしてそれ以上に、彼の若さ、すべらかな肌、信じられないほどの憂いをおびた顔立ち、透き通ったアメジストのような瞳、そして耳元で喘ぐ吐息、間近の生々しい肉体……。その全てにフランスは完敗した。

フランスは女主人のように振舞っていたものの、実は悔しいことに、一介の下男に過ぎない若者、ジェームズ・エドワーズと言う、

平凡な名前の若者に完全に征服されていたのだ。

けれども、情事が終わると、ジェームズは伏目のまま1ポンドを受け取ると、敗者のように悄然と立ち去ったのだった。

そして後に残ったのは、抜け殻のような自分自身だった。大きな姿見を見つめ、疲れ果てた40過ぎの中年女を見つめる。そして髪を整え、ランチの為の服を着だした。数分後にはフランスは元通りの、ちゃんとした女となって、ランチを取る為に階下に降りていった。

\*　　\*　　\*　　\*　　\*　　\*

フランスは翌日もジェームズが来るかどうかに対しては、懐疑的だった。けれども一歩では、彼女はジェームズが自分からは逃げられないこと、蜘蛛の糸に掛かった蝶のように、自分の獲物として、決して抗わないことを知っていたのだ。

案の定、翌日10時きっかりにジェームズが入ってくるや否や、フランスは素早くドアの鍵を掛け、もう待ちきれないかのようにジェームズに強引に口付けした。そして彼の服をすぐさま脱がせにかかった。その間、ジェームズはされるままになっている。石の様に硬直し、そして魂までもが“石”にでもなったかのように。

フランスは、その日以来毎日のようにジェームズを呼びつけ、そして飽くことなき欲望のままに、貪るように逢瀬を重ねた。情事後、いつものようにジェームズは一言も発せず一礼して帰ってしまふと、放心状態に陥り、直ぐに鏡に向かうのだった。

そこには、幾らか若さと美貌の残り香を残しているばかりの、中年の女が写っており、じつと鏡の向こう側から自分自身を見つめ返していた。昔のビロードのような肌は、今はカサカサで、顔には小皺が寄り、どんな高級な化粧品でも隠すことがもはや不可能な中年女……。ブルーの繻子のガウンを羽織ってはいるが、その下には弛



んだしまりの無い肢体があるばかりだ。

フランススは、自分自身に問いかける……。

フランスス、あなたはなぜ今でも男を求めるの？ このまま、老いて行くのが嫌だから？ もう一花咲かせたいの？ だったら、もっと自分に相応しい身分の高い、年上の腹の出っ張った頭の禿げ上がった男を選ぶことね！ ……でも出来ないんでしょう？ 彼の若さが眩しく、嫉妬しているんだわ。そして、彼から離れることがもはや出来なくなった！ 馬鹿……大馬鹿よ、あなたは！

フランススは慌てて髪を梳かし始めた。けれどもすぐにその手を止め、再び自分に詰問し出す。

彼を愛し始めたの？ それとも、あの眩しい肉体が欲しいだけ？

毎日が同じように過ぎて行つた。

ジェームズは10時にやって来て、そして正午前には去って行く。そういう淡々とした日々が。

けれどもある日、二人は情事のあと暫く、深々と降るばたん雪を窓越しに眺めながら、暫くぐったりと横たわっていた。日々が二人を曲がりなりにも近づけ、偽りの愛人であるジェームズも、どこか懐かしいものをフランスに感じ始めていた。それは愛ではないが、けれども馴れ合いとか、親しみのようなものだったのだろうか。

フランスはジェームズの頬の傷跡を指でなぞり、それから左肩近くにある火傷の痕もなぞっていった。この二つの秘密も、フランスは既に知っていた。

「永久に残るかもしれないわね、この傷跡は」

なぞられ、少々くすぐったい思いを抱きながらも、珍しくジェームズは物憂げに答えた。

「奥様。“永久”なんてこの世には無いです。傷跡なんか、どうでもいい」

と、裸のまま、手をベッドの端からブラブラと垂らしながらジェームズはぼんやりと言った。

「でも、もったいないでしょ？　せつかくの造化の神様からの賜物の肉体を」

「あなたが誉める肉体が？　それとも俺自身が呪う肉体が、ですか？」

「呪うなんて、いけないわ、ジェームズ」

「いいえ！ どうせ自分で売った肉体です。どっちも同じことだ」  
ジェームズは自嘲気味に小さく叫んだ。

「奥様にだけじゃないんです、この身体を売ったのは……」  
苦い思い出が、ジェームズを縛り付けていた。

「俺はずっと自分の肉体や魂を、何かに売ってきたし、騙しに使ったりもしたし、そして逆にこっぴどくやられもした。奥様一人にだけじゃなく、色々な人間から弄ばれ、そして弄んだ。

俺の魂は、ある時、ある何者かに犯されて以来、何の価値も無くなったんです！ それ以来、俺は自分を向上させることもなく、“どう生きたいのか”を探すことも無く、鬱々とただ生きているだけだった。

けれどもメアリーには……つまり、妹には、こんな自堕落な生活を送って欲しくはなかった。どこかで男に弄ばれ、利用され、そして買われて拳句の果ては捨てられるといったどうしようもない生き方は、見習って欲しくはない。惨めだから……」

ジェームズはふっと黙り込むと、余計なことを言ってしまったと感じ、散らばった服を着始めた。フランスは自分の息子ほどの年齢の若い愛人を、じっと見つめていた。

「今は何時なの？ そして何曜日？ そんなことも忘れ果ててしまったわ。絵は一つも描いてはいないけど、わたしももうそんなにここには居られない。あと数日で自分の領地に戻らなくては。その時には、お前を買い取って行きたいくらいよ」  
フランスはカラカラと晒った。

「でも、それは無理ね。お前は奴隷と同じ事になってしまいうでしよう？」

「そうじゃないんです。俺は縛られているんです。ここに居なくちゃならなかった」

「なぜ？」とフランスは、暗褐色のジェームズの巻き毛をいじり

ながら尋ねた。

「僕は両親の借金のカタに、奉公しなくちゃならなかったんです。それは契約でした。けれども、それももうすぐ終わる。あと数ヶ月で、完済します。そしたら、俺は……ここを出て行くつもりです」

「誰に返済しているの？」

身を起こしながらフランシスは、初めて聞く秘密に驚きながら言

った。

「言えません」

「誰かが、お前の保証人にでもなっているの？」

無言の返事が戻って来た。

「そう……もうすぐお前は、名実共に自由になるのね。でも、わたしのようなオバアサンの所有になっではいけないわね」

「奥様！ オバアサンだなんて！ あなたはいつだって情熱的な女性です」

「いいえ、オバアサンなのよ」とフランシスは静かに反復した。「こんなに思い知ったことは無かった。お前の横に居ると、自分がどんなに醜い肉体をしているか感じてしまう。もう若くは無いつて悟らされたわ」

そう呟いたフランシスの唇に、半裸のジェームズの唇が強引に重なった。今始めて、ジェームズはフランシスに、情欲に似たものを感じたのだ。

「醜いなんて！ そんなことは無いんです。俺はあなたの肉体に対して嫌悪を覚えたことはありません。そうでなければ、こうして毎日やって来たりはしない」

「ああ、ジェームズ！」とフランシスは再び狂おしくかき抱いた。

「でも、分かっているの。それは愛とは違うものなのでしょ？ ただ、年上の女に情が移っただけなのよ」

ジェームズは無言のまま、フランシス下肢を開かせた。脳裏には愛らしいサラが居る。けれども目の前の成熟した肉体もまた、今のジェームズにとっては捨てがたい魅力があった事に、今始めて気づいたのだ。

「もう一度……奥様」

フランシスは初めて心からの歓喜を味わいながら、夢中でジェームズに応えた。とろけるような悦楽の波が押し寄せてくると、彼女はしどけなく腰を動かし、両手と両足をジェームズの胴に回した。

「もつとやつて……もつと……」

フランシスは、あと数日しか抱くことが出来ないジェームズに対しての深い喪失感を払い除けるように、執拗に抱きつき、そして再び絶頂の渦の中に巻き込まれていった。

ああ、離れられないわ、ジェームズ！ でも、それは無理なのね、無理……。あなたの心には、別の人の面影が漂っているんですもの……。

「ところで、フランシス。絵は進んだの？」

いつものように謹厳実直な顔つきのまま、ギルフォード夫人はこの気まぐれで贅沢好きな“友人”であるフランシスに尋ねた。この問いはいつもしたくてウズウズしていたのだ。毎日ジェームズは判で押したように10時に来て、12時前に屋敷から去って行くが、けれども友からは何の絵も見せられたことは無い。

不道德なことは何一つ想像も出来ないギルフォード夫人だったが、さすがにフランシスが何日も滞在しているのを訝しく思い始めていた。

フランシスは欠伸をかみ殺しながら、待つてましたとばかり応える。

「もちろんよ！ 今見せてあげましょうか？」

頷くギルフォード夫人の元に、フランシスは自室から分厚いデッサン帳を運んで来た。夫人と息子のジョン、そしてキティともう一人の客の老紳士がそれを覗き込んだ。

「一枚目は、杖を持った羊飼いです」

「なるほど！ これは凄い！」と客は鼻眼鏡を掛けなおしながら嘆息した。「今にも動き出しそうな絵柄ですな」

「ま、綺麗な若者ではあるわ。ちよつと綺麗過ぎるけど」

とギルフォード夫人は、背をシャンとしたままそう誉めた。

「二枚目は、英国風の牧神。来たるべき春をバックに」

フランシスのやや得意そうな説明を待つまでも無く、そこには華やぐ春の花々の間に立つ、若々しい牧神の姿があった。若いのにど

こか老成して物憂げな顔は、確かに幾分ジェームズに似ている。けれどもその中には、はつきりと分かる痛々しさがあつた。

そして紛れも無いエロチックなアーモンド形の大きな瞳……。

「ほんと！ ジェームズに似ているわ。それにこの景色つたら、夢の中のようね。天国のよう、とても言うのかしら？ 天国は知らないけれど」

キティが感心したような上ずった声をあげた。「おば様ってやっぱり絵がお上手なのね」

「何言ってるのよ、キティ。こう見えても、フランスは画家なのですよ！」

「まあ！ こう見えても、だなんて、アンったら！」

フランスは、不敵に微笑んだ。けれども事實は、この絵やデッサンは実際のジェームズを見ながら描いたわけではない。夜、一人で薄暗い灯火の下で、ジェームズの面影を慕って描いたまでのこと。窓から暗い夜を眺めながら、フランスはじつと瞑目し、そしてジェームズを描き続けていたのだ。画家である彼女には、例えモデルが側に居なくても、脳裏に焼き付けたその姿だけで全てを把握することが出来るのだ。そして本物の居ない絵の前で、深い吐息をつくのだつた。

あと何日かしら、彼と居られるのは？ もうわたしも去らなければならぬ時が来たのね……。

\* ~\*~\*~\*~\*~\*~\*

ジェームズは、フランスとの契約された情事で得たお金で薬を買うと、日曜の午後ボブの奉公している靴屋にやって来た。

けれども中に入るや否や、靴屋のお上さんのドロシーがジェームズを呼び止めると、意味ありげに手招きした。

「ちよつと話があるのよ、ジェームズ」

訝しげなジェームズを部屋の隅に引っ張って行くと、彼女はヒソヒソと耳打ちした。

「あんた、字が書けるでしょう？」

「ええ」

「じゃあ、ボブのこと、あたし達の代筆でこう書いてくれない？」

『ボブ・ハーシーはもうここには置いておく事は出来ません。直ぐにでも引き取って下さい』とね。あて先はボブの実家」

ジェームズは暫く返事をしなかった。頭が空っぽにでもなった気がしたからだ。

「つまり」とやつのことで彼にしては珍しく、たどたどしい口調でジェームズは問いかけた。「ボブを見捨てるんですね」

「見捨てる”って、そりやどういう意味さ？ こちとらはお情けで、病気でろくろく働けない奉公人を置いているんだよ。それにさ、ここだけの話……あいつはもう助からないって言うじゃない？ そんな人間をこれ以上ここに泊めて置く事はできないさ。こっちだつて、慈善事業をしているんじゃないからね」

「お、親方は？」

「もちろん、承知よ。そしてね、ボブ自身も承知しているんだよ」

「薬を買って来たのに……」とジェームズは小声で俯き加減につぶやいた。

「またかい？ でも、それって、効いているの？ 無駄にお金を使うんじゃないよ、ジェームズ」

最初の剣呑な勢いを少し削がれて、ドロシーはやや諦め気味に言いかけた。

「そんなお金があつたら、あんたの妹の所にでも送りなさいよ。あんた、妹を引き取らないって言うじゃないか！ 本当にあんたって何を考えているんだか、あたしにや分らないね、全く！」



「……」

「いいよ、好きにおし」

本来は気のいいドロシーは、ブツブツつぶやきながら、又入り口近くの靴の並んでいる店先に陣取ったので、その隙にジェームズは階段を駆け上がり、靴屋の屋根裏部屋に上がりこんだ。

小さな窓が一つしかない暗くて寒い部屋。それがボブの部屋だった。

ジェームズが静かにドアを開けると、ボブは微かな寢息を立てて眠っていた。ジェームズはベッドの直ぐ側の小さな木製の背もたれの無い椅子に腰掛けると、じっとボブの寝顔を見つめていたが、その内に急に悲しみと無念さ、そして情けなさが押し寄せ、やがて周囲が何処かへ消え去っていくような空間に入り込んでいた。

この上、親友のボブまで失ってしまふ。耐えがたいことだ。ジェームズは、腰をかがめると、眠っているボブに向かって囁いた。

「ボブ……俺を置いて逝かないでくれ！」

ややあつて、ボブはうつすらと目を開け、「ジエームズ……」と弱々しく呼びかけた。ジエームズはボブに頷いて見せた。

「ボブ、薬を持って来たよ」

「なぜ？」

「なぜって！？ そりゃ、早く治って欲しいからに決まっているじゃないか！」

ボブは不可解な微笑を浮かべた。

「だって、俺、もう治らないんだぜ。お金の無駄遣いだよ、それって」

「いいから！ どうせ汚いお金なんだけど、どのみち俺には使い様がないしさ」

そう言うつと、ジエームズは上着のポケットから、薬の入った紙袋を取り出した。けれども、ボブの反応は凄まじかった。

「“汚い” お金って何だよ、それ！ 又サラから巻き上げたのか！？」

「落ち着け、おい、落ち着けよ」とジエームズは、ボブの真上から彼の瘦せた肩を少しだけ、押さえつけた。

「あの子からはあれ以来ビター文取っちゃいないし、第一会った事もないよ」

「じゃあ、何だよ、これは！」

ボブは明らかに怒り、ジエームズの手を病人とは思えぬ力で払い除けた。ボブの青白い痩せこけた顔に、幾分血の気が登っている。

ジエームズはボブの勢いに薬袋を取り落とししたが、黙ってそれを拾うと自分の膝の上に置いて目を伏せた。それから、自分の全てが

この親友の前ではまるで裸でさらけ出されたかのように思い、吐き気のようなものが猛烈に襲ってきた。

ジェームズは突如泣き出した。これ以上は我慢できない激情のはけ口を、もう止めることは出来ず、一番初めに牢でボブに出会って泣いた少年の時のように声を上げて泣き、絶えずしゃくりあげながら。

ボブの前ではどんな虚勢も見栄も突っ張りも通じないのだ。本当の自分の姿を、唯一現せる人物が彼だった。ボブの前では、ジェームズはまるで赤子同然になるのだ。

ボブは少し身を起こすと、美しい親友がその顔を歪めながら泣いている有様を呆然と眺めていた。今日のジェームズは明らかに違っている。何がどうという訳ではないが、多分自分の知らない“何か”があつたに違いない。けれどもそれを聞く気は無かった。

ややあつて、ボブはジェームズの気持ちが落ち着くと、柔らかく言いかけた。

「なぜだよ、ジェームズ？ どうしてもつと自分を大切にしないんだ？ どうして、どうして、そんなに惨めな、泥だらけの犬つころのように泣くんだよ？」

ボブは相手の心に強引に割り込むような人間ではない。けれども何となく察しはついた。なぜなら、ジェームズは時折、“自尊心”というものを投げ売りするような所があつたからだ。突っ張つても所詮は弱い所を持つ人間、それがジェームズの真の姿だという事を知っているのは、ボブだけだった。

「もう泣くなよ。俺も言いすぎたよ。“汚い”金であろうとなかろうと、お前の気持ちはちつとも汚くはないんだ。もう俺はどうでもいい。けど、お前の気持ちは嬉しい。その薬、受け取るから」

そう言つとボブはジェームズの頭全体を両手で抱き、そしてジェ

ームズの髪の毛を愛しそうに撫でた。

もうすぐ、お前との別れがやって来るんだ……。

暫く経って、ようやくジェームズは涙でクシャクシャに濡れた顔を上げた。自分が遣っていることは、このうえなく恥ずべき事でそして奴隷のようなことだ。セシルのような娼婦もまた、こういう思いを抱いているのだろうか？ それとも割り切って、というか割り切らざるを得ずに日々を過しているのかもしれない……。

ボブには分かっていた。警察署長に犯されて以来、ジェームズは時々訳も分からなく混乱してパニック状態になることを。そしてそれを知っているのは自分だけだということも。

美は残酷な仮面だ。美はそれで他人を幸福にもし、又ある時はそれで深く傷つくこともある。美は諸刃の剣なのだ。

「ジェームズ……何かおばさんから言われたらろう？ 代筆してくれって」

「う、うん」とジェームズは涙を拭きながら頷く。「でも、そんなこと、俺にはできねえよ」

「ねえ、助からないような人間をいつまでも置いておくような奴が、この世のどこに居るといふんだ？ おばさんの言うことは正しいんだよ。俺は家へ戻る。だから代筆してくれよ。俺はサインだけするから」

ジェームズはじつとボブを見た。ボブはもう覚悟を決めている。けれども、本当はどこにもやりたくなかった。ボブが自分の村に戻ると、もう二度と会えなくなるからだ。

「本当にいいのか？」

「そうだよ」

その声には、諦観と決心とがない交ぜになっていた。ボブは微か

に微笑むと、頷いた。

「俺……ちつとも悲しくなんかないから。ただ、お前に会えなくなるのが淋しいけどな」

「その内に、天国で会えるさ」

そう言ったジェームズは、本当にもう直ぐ天国でボブと再会する様な気がした。二人とも、二人ともきつと天国で会える……。それも近い内に。それは多分、浮世の方が辛いからだと、そんな気がするのだ。

ジェームズは暫く小窓の外を見ていたが、振り返らずにやっと思いで答えた。

「いいよ」

サラの1月30日の、17歳の誕生パーティーは、一応滞りなく済んだ。4人の女の子達　その中には意地の悪いアン・マリーも居たが、キティ・ギルフォードは風邪気味で来なかった　が、キヤアキヤアと騒ぎ立てながら帰って行った後、サラはなぜかぐったりと疲れ果てて、髪を解く為に鏡に向かっていた。

一つ歳をとったからと言って、特別自分が大人になったわけではないが、この辺りでは17歳と言うと、もう大人扱いを受けるのだ。そしてその頃から、一人又一人と婚約したり結婚したりする。けれどもまだサラには、そのような話は全く無かった。それがいいのか、悪いのか、サラには良く判らなかったが……。

「ねえ、お母様。今日はこのお茶会にどれくらいお金を使ったのかしら？」

とサラは、使用人と一緒に食器や食べ残しを片付けているオーウェル夫人に向かって問いかけた。けれども、不可思議なことに、オーウェル夫人の手がピタリと止まった。夫人はサラの髪を梳ろうと、やって来た。

「どうして……そんなことを聞くの？」

「だって、わたし、もう17歳になったんだし、それぐらいのことは知っておかなければ」

夫人の口元から溜息が漏れたような、微かな音がした。

「心配しなくていいのよ。まあ、5ポンドぐらいで済んだし」

「5ポンド……」とサラはやや驚きを持って、つぶやいた。「そんなに要ったの？」

「ええ、まあ色々だね」

「じゃあ、わたしの手術代とかは、もつと要ったんでしょう？　一体どれ位掛かったの？」

オーウェル夫人の顔色がサツと変った。櫛を持とうとしたその手が、幾分震えているようだ。

「何で今更そんな事を。もう、ずっと前の話でしょう？」

「でも、聞きたいの」

夫人は暫く黙り込んでいたが、わざとらしい明るさで答えた。

「いくら掛かったか、忘れてしまったわ。もうわたしも歳ね」

けれどもサラは食い下がった。なぜならそれはサラにとつても、以前から聞きたいことだったからだ。ノラから言われて初めて、自分がこの家族にどんなに負担をかけていたかを知ったのだ。このまま何も知らないでいる訳にはいかない。

「ねえ、お母様、誤魔化さないで。まさか300ポンドぐらいだなんて仰らないでね。それ以上だってことは、わたしにも分かっているのよ。」

わたしだって、計算ぐらい出来るわ。子供の頃には、そういうお金の事なんか何も考えもしなかったけれど、今はもう違う。わたしはもう大人なのよ、お母様。ここで色々な友達が出来、そして喋ったり噂話を聞いたり、そうしてこの世間を垣間見てみると、そりゃもうとんでも無くお金が要るってこと……よく分かったわ。何事もお金無しでは動かないですものね。だから」

クルリとサラは振り返った。そのそばが少し浮き出ているリソングのような顔は、眼鏡を取っている今は途方も無く幼い雰囲気がしていた。純真無垢で、悪く言えば世の中の垢にまみれたことがない。けれどもそれは、“今までは”と言う但し書きが付いている。

今のサラは、現実を幾分知り、少しませた表情の娘だ。いい加減

な説明ではもう誤魔化されはしない、立派な一人の“成熟した”娘になったのだ。だからこの日が来るのが怖かった。けれども、オーウェル夫人はその現実に向き合わなければならぬ時が来たと覚悟を決めた。

夫人は櫛を置くと、きちんとサラに向き合った。サラの、弱視ゆえにどこかさまよっているようなハシバミ色のつぶらな瞳が潤み、瞬きもせずに母親を見つめている。

「サラ……あなたの手術代は1500ポンド掛かったわ。でもその前後の療養の費用や、看護師の給金などを入れると、恐らく2500ポンド以上でしょうね。それにその後のケア、その他諸々を含わせると、多分……3000ポンドでは済まないと思う……。はつきりしたことは、お父様をご存知よ。お父様が全てを工面なさったのですから」

サラは予想していたこととは言え、静かなオーウェル夫人の告白を、身を縮めるような思いで聞いた。

やはりそうだったのだ！ ノラの言った事は真実だった！ 自分は目だけが盲目だったのではなく、全てのことに盲目だったのだ！  
！ 今まで何一つ気づかなかった愚かな自分が、情けない。

「3000ポンド！ そんなお金、うちには無いはずでしょ？ お父様は田舎のしがない小学校の校長でしかないし」

「借金なのよ」と夫人は淡々と答えた。「借金なの……」

「あのユダヤ人の金貸しシユタルさんから？」

そう尋ねるサラの声は微かに震えていた。

「恐らくそうでしょうね。けれど、お父様は口が堅くて、わたしにも金策のことは何も仰らなかつたわ」

「なぜそんなに借金してまで、わたしの為に」

「それはね、サラ。親なら誰だって最善のことを尽くそうとするも



のよ。自分の子供には、幸せになつて欲しいの。例えかなり無理をしても。ロンドンの医師は、手術さえすれば、かなり視力は回復すると仰つたの。わたし達はすぐさま決心したのよ！」

「でも……」

「いいえ、サラ。あなたも親になつてみれば分かるわ。今は分からなくても、いつかは……」

「だからと言って、高利貸から大金を借りてまで……わたしの為に……」

遂にサラは泣き出した。膝の上にポタポタと苦い涙がこぼれ落ちる。

「サラ……泣かないで」

オーウェル夫人は、サラの赤毛を愛しそうに撫でた。

「わたし達は全然後悔していないわ。だって、お前の目が良くなつたんですもの！　一か八かだったけれど、今はやっぱり手術させて良かったとはつきり言える。わたし達は幸せよ、サラ。あなたが一人で歩き、どこへでも行けるし絵を見ることができて出来る、普通の娘になつてくれたんですもの！　だからあなたも、その幸運を受け入れるべきなのよ」

サラはすすり泣きながらも、小さく頷いた。

けれども一方では、サラはこの母の話の半分は信じたものの、どういふ訳かあとの半分は信じ切れない自分が居ることに気づき、ハッとしたのだ。

この話の中には、もっと込み入った“何か”がある。恐らくそれは、愛するジェームズに関することだろう。勘の鋭いサラは、その引つかかる“何か”を探り当て、そしてジェームズの持つ秘密を知りたいと切に願つた。

そして再びジェームズの腕の中で、安らぎたいと言う気持ちを抑えることが出来なかった。

やっぱり、あなたに会いたいの、ジェームズ！ 秘密を解き、  
そしてあなたを縛る呪縛を解いてあげたい。なぜならわたし、あな  
たを愛しているんですもの！ あなたを愛することだけは、決して  
やめる事はできないのよ！

愛と死ゝジェームズとサラゝ

1

2月始め、シンシア・ギルフォードが死んだ。

今年のインフルエンザはかなりの猛威を古い、そしてタチが悪かった。ドーセットのみならず、隣町のリトル・ウッドも、そして近隣の村々にもインフルエンザは人々に襲い掛かった。ロンドンでは、かなりの数の患者が亡くなったと言う。

シンシアはインフルエンザから肺炎になり、町の名医が手当てをしたが助からなかった。この、ケタケタとよく笑っていたシンシアは、まだほんの12歳だった。

このショッキングな出来事は、ギルフォード夫人を恐慌に落し、夫人は毎日泣き喚いていたので、家に戻るはずだったフランシスは急遽屋敷に留まり続け、しばらく鬱状態のギルフォード夫人に変わって、あれこれと指図をする派目になった。

フランシスも又、このような時に旅行するのははばかれたのだ。屋敷中が静まり返り、キティやジョンでさえ、深く落ち込み嘆き続けていた。

ジェームズは、この末娘に付いては、この間居間でフランシスと一緒にシンシアに会ったときぐらいで、余りよく知らなかったが、それでも小さな少女の死はいたいけで衝撃的な出来事だった。

ジェームズがメアリーとサラのことを心配していた折も折り、ドリュウから、どうやら校長の娘、サラ・オーウェルもインフルエンザに倒れたらしいという情報を得た時には、心臓が止まるのではないかというほどの、暗澹たる気持ちになった。

「で、サラの様子は？」

「さあ、どうだかな？ 俺はあその使用人からちよつと聞いただけなんださ、校長夫婦はピンピンしているそうだぜ。なにせサラ・オーウェルは小柄だし、どこかひ弱そうだからな。箱入り娘だし」

「サラではなく、校長がなれば良かったんだ！」

「ま、そうだが……運命は皮肉なものだぜ」

その晩、ジェームズは長い間神に祈ったことすらなかったが、久しぶりに寝る前にベッドに跪いた。

「ああ、神様！ サラの命を奪わないで下さい！ どうしても奪うのなら、俺の命を彼女の変わりに！ 俺は、俺はサラ無しには居られないんです。サラを絶対に治して下さい！」

ジェームズの祈りが通じたかどうかは分からない。けれども、妹のメアリーは元気である証拠に、修道院からは何も言っていない。た。

フランシスは悲しみに沈むギルフォード家にあつて、夫人を慰めたり助けたりしていたが、一方では気晴らしと称して、時折ジェームズを呼びつけることがあった。彼女をここへと留めたのは、ただ単に友人のアン・ギルフォード夫人の為ではなく、ジェームズへの情欲のせいでもあった。

けれども、それももう終わりに近づいてきたようだ。

フランシスは2月の末になって、遂に自分の領地へ帰ると宣言した。と言うのは嫁いでいた実の娘が妊娠し、出産の為に実家へ戻る事になったからだ。医者の手紙によると、娘の容態はそれ程良いとは言えない、と言うことだった。フランシスはその手紙を読むと、胸騒ぎに襲われて、思わず眩暈を覚えた程だった。

帰らなければならない。そして、もうジェームズとは二度と会うべきではない、と。

家へ戻る前日、フランススはジェームズを呼びつけた。最後の情交の後、フランススは髪を整えながら、なぜか徒然に話しはじめた。「とうとうわたしも“おばあちゃん”になるのね。孫が出来るんですもの。わたしは19歳であの娘を出産し、娘は22歳でもう直ぐ出産。時間の経つのは早いわ」

ジェームズはただ無言で、服を着替えていた。けれどもフランススはもう、ジェームズが聞いていてもいなくてもどうでも良かった。「ジェームズ、お前は男だから、いいわね。お産をせずに済むんだもの。お産って大変なの。インフルエンザと同じぐらいか、それ以上に。それにしても、シンシアは可哀想な事をしたわ。あつと言う間だったんですもの。一緒に一ヶ月暮らしていたから、情が湧いたし。アンの子供達の中では、一番可愛くて純真だったのに」

フランススは珍しくしんみりしていた。

「人生って儚いわね。ここに訪ねて来た時には、シンシアはとても元気で跳ね回っていたわ。未来の夫のことや、色々無邪気に喋ってくれたの。それが……わたしやアンの方がずっと年上だし、順序が逆よね。神様は何て残酷なのかしら？ 今はもう、シンシアは冷たい土の中に横たわっている……」

ジェームズは、インフルエンザに倒れたと言うサラのことを想っていた。けれども、いつになく正直でしおれた様子のフランススに、なぜか親しみを覚えて言った。

「俺だって……分からないです。先のことは」

シャツを着たまま、ジェームズは暖炉に当たりながらつぶやいた。暖炉の炎が揺らめき、ジェームズの頬を染めている。

「何を言うの？ あなたはまだ若いのに！」

「けれども若さは脆い。今そうあなたは言っただじゃないですか」

「ジェームズ！」とフランシスは叫んだ。「あなた、生きなきや駄目よ！ これからもずっと」

「誰の為に？ 俺にはもう何も残っていないんですよ。若さだって直ぐに消えてなくなる。まして、あなたから頂いた微々たるお金も、そして友情も信頼も……いつかは消え果ててしまいかもしれない」ジェームズは胸を掻き毟られる思いに、我を忘れて本心を吐露してしまった。

「でも、愛は消えないわ。そうでしょ？」

「愛なんて……」

「嘘！ あなたには好きな人が居るんでしょう？ わたしには分かっていたのよ」

部屋中に沈黙が訪れた。

「そうでしょ、ジェームズ？ 愛している人が居るのね？」

長い沈黙の後、ジェームズはやっと答えた。

「居ます。けれども、彼女を愛することは、彼女を不幸にしまふ。だから不可能なことなんです……」

搾り出すようなジェームズの声に、思わずフランシスはジェームズの背後から、彼を真綿のように抱き締めた。それはもはや女としての情欲からではなく、どこか“母性”に近い物だったかもしれない。

「ジェームズ、お前を長い間縛りつけ、隷属させて悪かったと思っています、今は……。でも不可能なんて言わないで！これから“その人”と愛し合い、そして暖かい家庭を持つよ。お前はその中でこそ、きつと幸せになれるような気がするわ」

「それは出来ない！無理だ」とジェームズは背後から抱かれたまま、そう叫んだ。

「無理じゃないわよ、例えば様々な障害があつたにしても」

「無理だ……」ともう一度ジェームズは念を押すようにそう言うと、静かにフランシスの呪縛を解いた。

「お前が意中の人居るって事は、実は前から分かつていたの。わたしと“やっている”時でも、お前の心はわたしではなく、別な人の面影を抱いていたのだと。でもそれでも良かったのよ、わたしにとつては。お前の心まで縛ることなんて、わたしには出来ないんだもの。だからこれからは、お前は自由なの」

「自由は虚しいだけ」

ジェームズはきっぱりと答えた。「絶対に！」

「なぜ？」

「運命が……まず許さない」

「運命なんて、自分で切り開かれるわ」

「それは甘いです、奥様。俺の心もそうですが、制度も、その他全てが俺達の敵です。奥様には告げていないが、でもある秘密があって、俺はそれに縛られてしまっている。俺は抱いてはいけない気持ちを抱いてしまったんです。とても不可能なことなのに！でも、それを俺から取り払おうと思えば思うほど、俺の心は益々“彼女”を慕うようになり……でも、ただじっとしているだけしか出来ない。この矛盾ほど俺を苦しめるものはありません」

「ジェームズ」と呼びかけたフランススの視線はどこか哀しげだった。「行動するのよ。それでも、行動するの。自分の心のままに」「行動、ですか？」

ジェームズは振り返ると、初めて自嘲気味に笑った。

「多分、俺は破滅するだろうな。いや、それだけじゃない、彼女をも破滅させてしまうだろう。俺は……」

ジェームズはじつとフランススの瞳を、初めてまともに見つめた。「俺は……多分殺されます。分かっているんです。その上、彼女もまた、今あの魔のインフルエンザに掛かっているんですよ。それなのに、俺は手をこまねいているだけで、何一つ助けることすら出来ない！俺達は多分、何かに呪われているんです！それは多分、俺がまず彼女を呪ってしまったからなんでしょうね。その報いが来るんですよ、必ず！」

フランススは黙り込んだ。彼女はジェームズの薄紫に翳る瞳の中に、とてつもない暗い影とそして情念が渦巻いているのを発見した。彼女は勘の鋭い女性だった。今、若い愛人の将来が絶望的なまでに閉ざされているのを感じることが出来たのだ。

けれどもフランススにはこれからジェームズに対して、何をしても出来はしない。皮肉なことに、ジェームズの運命を違の意味で残酷に扱ったのも彼女自身なのだ。



フランススは静かに離れた。

「もう時間ね、ジェームズ。あたなのことは忘れない。いいえ、忘れられっこ無いじゃない！　だってあなたは……わたしの永遠の、美のモデルなんだもの」

それからフランススは幾ばくかの金子を渡すと、横を向いた。  
「それじゃ、もう行つて」

＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊

フランススが与えた金額はかなりのものだった。ジェームズはその袋を貰つてフランススと目を見交わさずに別れ、そしてほんやりと階下に降りて行つた。足は宙を浮いているように感じ、妙なことに淋しくも感じ、又ホツとしたような複雑な心境でもあつた。

そしてジェームズは運悪く階段を下りた大広間で、バツタリとジョンに出くわしてしまつたのだ。彼は友人二人と一緒にゐたが、未だに喪服姿だった。変質狂的な彼は、一旦着た喪服を脱ごうとはせず、ここ数日はかなり奇妙な行動を取つていたので、心配した郷土<sup>ジェントリ</sup>クラスの友人達が、ジョンを慰めにやつて来ていたのだ。

ジェームズは瞬時に、目礼して通り過ぎるだけでは済まないな、という気配と殺気を感じ取り、すぐさま出て行こうとした。

「よお、色男！　今お戻りか！？」　あの少々色キチガイのマダムに重宝がられているんだって？」

このやや下品な言い回しに、友人達は驚愕してジョンをなだめようとしたが、すでにジョンはジェームズの目の前に立ちばかり、座らない目付きで見据えていた。

「ジョン様……何でしょうか？」

「馬鹿にへりくだりやがつて！」とジョンは罵声を浴びせた。

「妹のシンシアは死んだというのに、お前のようなクズはピンピンしてやがるぜ。全く！　何て酷い世の中だ！　神は本当に居るのか

い？ え？」

「まあまあ」と一人の友人がジョンの側に寄って来た。「たかが、使用人じゃないか。おい、しっかりしろ。相手になんかするなよ。」

……それから、お前もサッサと消え去れ！」

「はい」とジェームズは慌てて去ろうとしたが、ジョンはジェームズの胸倉をグイと掴んだ。側の友人はオロオロし始める。

「おい、ジョン！ やめろよ」

「うるさい！ 黙れ！ こいつは虫が好かねんだ」とジョンは友人のアドバイスを跳ね除けた。「お前はきつと陰じゃあ喜んでいるんだろ？ 根性が腐っているからな、お前達使用人は。その中でも特にお前はな、ジェームズ」

「いいえ。心から……心からお悔やみ申し上げます」

ジェームズはしどろもどろに言いつくろった。けれどもその口調は、どこかよそよそしい響きが無かったとは言えない。案の定、ジョンはカツとなった。

「お前の口からそんな心にもない言葉を聞くとはな！ こうなればいいと願っていたんだろ？ 僕と僕の家族の不幸を」

「い、いいえ……」

「お前のような奴から、お悔やみなど言われたくはないんだよ！」  
ジョンは荒れていた。そして彼はジェームズを思い切り殴りつけた。ジェームズは床に倒れ、そして彼の内ポケットにある金子の袋が肋骨に当たり、鋭い痛みが走った。

ジョンの怒りと悔しさは、今まで内包していた“悲しみ”を、凄まじい暴力に変えてしまった。彼の元々持っている残忍でそして我が儘な性格そのままに、床に転んだジェームズを更に痛みつけることで、自分のストレスを発散させたのだ。

ジョンはジェームズを、友人達と気が付いた召使い達が必死で取り押さえるまで、蹴りつけた。その間、ジェームズは無抵抗だった。「おいっ、ジョン！ もういい加減にしろ！」

ジョンを羽交い絞めにしながら、一人の友人が耳元でかなりつけた。

「見苦しいぞ、ジョン！」

「ジョン様！ それぐらいで……」

召使いも懇願したので、やっとジョンの凄まじい怒りは収まったかに見えたが、けれども次の瞬間には、嘆きと慟哭がやって来た。

「シンシア！ ああ、シンシア！」

ジョンは視線を宙に彷徨わせながら、空中に呻き声を発し、それから堅く握り締めた両手を突き出すと、失った妹を抱き締めるかのように腕をかき抱いた。友人が痛ましげに叫んだ。

「ジョン！ 使用人を殴ったからって、お前の妹はもう返って来ないんだよ！ 落ち着けよ、ジョン！」

髪を振り乱したジョンは、ハツとして床に倒れているままのジェームズを見下ろした。床の一部は、ジェームズの鼻血だろうか、所々が血塗られている。

「そつだよな……こんな奴、殴る価値も無いんだ。この野郎！ 薄

汚いウェールズの下等動物が！ マダムのご機嫌取りに、裸でモデルをやっていたんだろ？　いくら貰ったんだい？　え？　お前のような奴は、まっとうな労働で稼ぐんじゃなく、その“麗しい”カラダで稼ぐんだろ？　汚らしい奴め！」

ジョンは床に倒れて動かないジェームズに、ペツと唾を吐きかけた。その時、朦朧となったジェームズの脳裏には、熱に浮かされているサラの姿がチラツと浮かんだように思った。

サラ……君が死ねば、俺も狂ってしまうかも……。

ジェームズの心は、ジョンへの憎しみよりも、悲しみの方が勝っていた。

\*　　\*　　\*　　\*　　\*　　\*　　\*

フィオーナは、運ばれて来たジェームズの傷の手当を、使用人小屋で施していた。ジェームズは運ばれて来た時にはぐったりしており、鼻血のせいか血みどろで、そしてあちこちに打撲があった。特に、肋骨の打撲は酷く、一部はもしかしたらヒビが入っているかもしれない、とうすうす感じていた。

けれどもジェームズは頑なに黙り込み、目を伏せたままで、フィオーナが荒っぽい手当てをしている間も、目を上げようとせず一言も発しなかった。

この間の鞭の傷すらもまだ跡が残っているというのに、今度はこれだ。

「ジェームズ、この肋骨痛くない？」

とフィオーナが胸にグルグルと包帯を巻きながら尋ねても、ジェームズは黙りこくっていた。本当はキリキリと痛んだのだが、それが金子の袋のせいだったのか、それともジョンの蹴りのせいだったのかすら分らない。

けれどもジエームズにとってはどっちでも良かったのだ。痛みは鋭いが、心の痛みの方がもっとジエームズを蝕んでいたからだ。

「終わったわよ、ジエームズ」

フィオーナが静かに言い終わるや否や、ジエームズは「ありがとう」と一事言つてシャツを着込むと、さつさと自室に戻つて行つた。

包帯やら軟膏やら薬の瓶を片付けながら、フィオーナは様々な使用人達の怪我の手当てを無数にしてきた自分を顧みていた。ジエームズだけではなく、他の使用人達も、主人の虫の居所が悪いときには、簡単に殴られたりしてきたのだ。重篤な大怪我もあった。けれども彼らはただ黙つてされるままになつていくほか無かつたのだ。それは悲しいが、事実だつた。

ジエームズに対しても、彼がこのお屋敷に始めて奉公にやつて来た15歳の時からずっとである。ジエームズはいつも生傷が絶えなかつた。それはある面で、ジエームズが気性が激しく喧嘩っ早いと言つ、まるで手負いの狼のような所があつただけではなく、逆にあらゆる面で抵抗出来ないせいでもあつた。

ジエームズは外見上は荒れていたが、けれども実際は無抵抗だつたし、又無抵抗にならざるを得なかつたのだ。そしてその矛盾により、彼はいつも苦しんでいるように見えた。

\* ~\*~\*~\*~\*~\*~\*

町外れの粉屋から追い出されたも同然のジエームズを、先代のギルフォード氏が請け負つたのだ。この亡くなつた篤志家は、貧しく“劣等な”ウェールズ人を助けるのが、自分の役割だと信じていた。たとえその人物がどんな性格の人間であれ。

けれども息子のジヨンは、猛烈に反対していたらしいという噂がある。ジヨンはジエームズと同じ年だつたし、又小学校では同じク

ラスだった。ジョンは劣等性だったし、ジェームズは優秀だった。少なくともその頃まで、ジェームズの家は豊かだったのだが、その後ジェームズの両親が亡くなるや否や、ジョンは遠慮なくジェームズを苛めることに快感を覚えていた。

そしてイングランド人である自分に刃向かう者は、クラスでは誰も居なかった。それがジョンを益々いい気にさせた。そして、オーウェル校長も見えて見ぬ振りをしていた。

けれども例えどんな境遇であつても、ジェームズがクラス一の成績である、という事実だけは覆すことが出来なかったのだ。

そしてジェームズがギルフォード邸にやってきた時、ジョンは待っていましたとばかり、自己のあらゆる不満と我がままのはけ口を、無抵抗で無力なジェームズに向けた。

ジェームズがギルフォード邸に奉公にやってきて以来、ジョンの容赦ない殴打と暴言という苛めに晒されていた折も折り、納屋から火の手が上がり、全焼したという事件が発生した。

ジェームズは放火を否定したが、皆はジェームズが納屋に積んであった干草に火を付けたのは、ジョンへの腹いせだったのだと解釈した。ジェームズはその納屋から飛び出した時に、左肩に木の梁が命中して酷い火傷を負ってしまい、もう少しでその造化の神が作り給った美しい容姿を台無しにする所だった。けれども梁は辛うじて顔面に落ちては来なかったのだ。

フィオーナはその時もジェームズの手当てをしたものだった。

けれども16歳の少年は、その火傷が幾らか治りかかった頃、有無を言わず、ドーセットの警察署長に引き立てられて行ったのだ。「俺、何もしていないよ！ 本当だよ！ 俺、何もしていないって！！！」

と絶叫するジェームズを、署長とその部下達は容赦なく鉄格子の嵌った馬車に乗せた。その時、告げ口をしたと思われるジョンは、薄ら笑いを浮かべながらその様子を逐一見つめていたのを、フィオーナは目撃している。

フィオーナはどこか不審に感じていた。なぜなら、ギルフォード氏自身は、この事件を穏便に済まそうとしていたらしいのだ。

「まあ、たかが納屋だし、誰もが無事で良かったよ」

と、この紳士は使用人達にも言っていたからだ。彼は少なくとも、そついう“領主”だった。心の底ではウェールズ人を馬鹿にしてい

たものの、誇り高い人物だったので、えげつない告げ口などをするはずが無かったのだ。けれども、この主人も数年前に亡くなった。ジョンを妨げる者は、もう誰も居ない。

フィオーナは今でも思う。本当にジェームズが火を付けたとしても、多分真つ先に逃げ出すはずだ。あのようにもう少しで自分が焼け死ぬ瀬戸際まで、放火した場所に居るはずがない、と……。

けれども、ジェームズは長い間警察署に留置され、そして窃盗罪のボブ・ハーシーと共に、広場で曝された。

その間何があったのか、フィオーナは知らない。けれどもそこから戻って来た時には、ジェームズはもう以前のジェームズではなかった。

ジェームズの態度や口ぶりは、悪い方へと劇的に変化を遂げた。

町のならず者達と付き合うようになり、仕事は真面目にはせず、服装もだらしくなった。

まだ少年だというのに酒を飲み、僅かな稼ぎもギャンブルや娼館につぎ込んで、泡銭と消え果てた。変らなかったのは、彼の美しさだけだったが、それすらも荒んだ風情に消されがちになった。ジェームズは完全に、下卑た若者へと転落して行ったのだ……。

けれども、今回のジェームズの瞳には、もつと違ったものが宿っていた。それはあえて言えば“哀しみ”に近いもので、どこか清楚な雰囲気漂わせていた。怪我の中の苦痛にあっても、その清楚さは消えず、ジェームズの横顔には、昔垣間見られた品のよさが再び姿を現してきたのだ。

けれどもそれがどうしてなのか、フィオーナには分からなかった。

＊＼＊＼＊＼＊＼＊＼＊



インフルエンザにかかっていたサラは、峠を越えた。

高熱にうかされながらも、サラはこんなにも自分の“死”を恐れたことが無いような気がした。あの手術の前にも思ったことの無い恐怖が、サラを襲っていたのだ。

息が出来ない苦しさの中で、サラは途切れ途切れに神に祈っていた。自分の恐怖の正体を知っていたサラは、それが“二度とジェームズに会えないかもしれない”という怖れであるのを悟ったのだ。

神様……ジェームズに会わせて下さい……再びジェームズに会わせて！ だから、わたしに力を与えて下さい！ わたし、頑張るわ。頑張ります。だから……。

「サラ、熱が引いてきたようよ！」

優しい母の声が近くでして来たとき、スーッと澱の様なものが取れて行った心地良さが訪れていた。身体全体が、治って行くというエネルギーで満ち溢れていた。

「ああ、感謝します、主よ！ もう大丈夫よ、サラ」

オーウェル夫人の、暖かい抱擁がサラを包んでいた。

実はサラは、シンシアの葬儀に一度だけギルフォード邸に向いていたのだ。両親は、そこでインフルエンザをうつされたのだ、と主張したが、因果関係は分からない。ドーセット中がパニックに襲われている時に、どこでうつったのか、うつされたのかという事を論じるだけ馬鹿げている。

けれども、サラを溺愛するオーウェル氏は常にサラの側に居て、珍しくサラの赤毛を撫でたりしていた。ある時には、氏は両手を合わせて祈っている風にも見えたものだ。

サラはシンシアの死によって寡黙になったキティや、そして自身自身の病いにより、圧倒的な死というものの逃れられない巨大さを

感じていたのだ。自分の目の手術の為に父親が負ったと思われる借金や、逃れられぬ病いや、死や、そしてジェームズと自分の未来のことなど、深く思索する娘へと変わって行った。サラはもはや少女ではなく、既に女として成長していた。

完全に治つたと医者が告げたその晩、サラはジェームズへの手紙を書いた。絶対にジェームズの手には渡らないだろうと思われたが、けれどもそれでも良かったのだ。書かずには居られない。自分の本当の気持ちを、これ以上封じ込めていることは出来ない。死がいずれ訪れる前に、これだけは書いておきたかった。

「ジェームズ、あなたを愛しているわ。あなたに会いたいの。会いたいの……」と。

そしてサラはその手紙を、例の栗の木の前ほこらにそっと入れ込んだ。

「」へ

もう一度、会いたい。連絡、下さい。 Sより

そしてその頃、ドリューから、サラの病いが完治したと聞いたジェームズは、飛び上がらんばかりの歡喜に満たされていた。肋骨の痛みも、魂の痛みも、全てが氷解するような大いなる幸福によって、彼の顔から久しぶりの、太陽のような笑みがこぼれた。

それはドリューから見ても、美しい微笑だった。

ジェームズは心の中で、決心した。

何と言つ喜びだ！ 神よ、感謝します！ サラに又会えるのなら、俺はどんな危険な目に合ってもいい！



ジェームズの心は既に決まっていた。けれども、彼にはまだ勇気が足りなかった。その上、なぜ彼女に惹かれるのかその理由が分からなかったのだ。

悶々とした日々のもと、やっとジェームズは気付いた。あらゆる者に裏切られたジェームズは、唯一人自分を裏切らない人間を知ってしまったという事が。それがサラ……イングラント人で、目の悪い、小柄な女の子、そして憎きオーウェル校長の末娘……だったのだ！

けれども今はそれが一体何の妨げになるのだろうか？ 愛することの、何の妨げに……？

インフルエンザの流行もほぼ終結し、ドーセットに再び平穏な生活が訪れ始めた二月の末、ジェームズは例の栗の木近くを通り掛った。そしてジェームズは、勇気を出し、栗の木のほこらに手を差し伸べた。

指が何かに触れ、ジェームズは動揺しながらその紙切れをそっと開いた。

「サラ！」

サラも又自分と同じ考えであることを知って、ジェームズは真から驚きそして歓喜した。どうしたのだろうか？ この“絆”は！？ 一体……。

それからジェームズは、その小さな紙切れを自分の胸のポケットに大事そうに入れた。その部分だけが、ポツと暖かく感じる。久しく味あわなかった幸福感が押し寄せ、今までの辛い体験が氷解して

行くのに気付いた。

その晩、暗い灯火の元で、ジェームズは早速返事を書いた。

『 S へ

君が元気になって、嬉しい。 3・4・2：00

例の場所で待つ

Jより

』

それからジェームズは、少しの躊躇いの後、素早く書き足した。

『 君を愛している

J

』

愛している……。その言葉を書いた時、ジェームズは至福に満ち満ちた。暗い狭い屋根裏部屋が、突如宮殿と化し、光に満ちた暖かい部屋になったような気さえした。そしてサラの息吹を身近に感じた。

サラと一緒に居ることこそが自分の幸せな生活なのだ、と確信したのはその時だった。もはや何の迷いがあるだろうか？ 彼女と一緒にになること、それこそが自分の希望であり、そして光なのだ！

翌日の昼過ぎ、サラは聖歌隊の練習帰りに、栗の木のはこらに寄ってみた。もはやジェームズからの返事など期待していなかったサラは、ほこらの奥に紙切れがあるのに気付いたが、それは自分が書いたものだと感じていた。

やっぱり……。まだあるって事は、彼はわたしの手紙を受け取っていないんだわ……。

サラは涙を堪えながらも、ふとそれを引きずり出した。手に当たる感触や折り方がどこか違う。なぜ？ もしや！？

周囲を見回し、サラは恐る恐るその紙切れを手にとった。ザラザラした粗悪な紙質。サラの胸は高鳴った。けれども一方では、それが断りの手紙であるような恐れも抱いた。

さっと見たサラは、今にも喜びの余り心臓が止まるのではないかと思つた程だつた。その中にある、言わずと知れた綺麗な文字……暗号のような日付と、そして『君を愛している』という、確かな文章！

サラはこの紙片を胸に当てると、「愛している……君を愛している……」と何度も繰り返し返した。長かつたサラの、苦難に満ちた冬の日々は終わりに近付き、再び日の光が自分を照らしてくれるような明るさに、心が満ち溢れた。

帰宅途上にも、周囲が不安と愛情で輝いているように感じられる。例え『愛している』というジエームズの言葉が嘘だとしても、それはどんなに一人の心細い、淋しい少女を慰め、そして人生を美しくしたことだろう！

まして、サラはジエームズのこの言葉を信じていた。今ではサラはネンネのお嬢様ではなく、思慮深い、人間の複雑さを解する乙女へと変つていたからだ。

ジエームズ！ 絶対に会いに行くわ！ どんなことをしても、嘘を付いてでも、わたしはあなたに会いに行く！ その為には何だつて出来るの、わたし、今は。罪の意識も、その他のことも何も考えられやしない！ だって、わたしもあなたのこと、愛しているんだもの！

そしてサラは早速次の日、買い物に行くといつて、例のほくらに手紙を入れた。

『  
』へ

必ず会いに行きます。そして、わたしもあなたを愛しています

Sより  
□

この二人の秘密の通信は、幸いにも誰にもばれなかった。

サラの返事を受け取ったジェームズは、その真つ白い便箋に踊るサラの可愛い文字を、微笑みながらじつと飽きもせず見つめた。

そして、お互いに思っていたことが一つであったことに、神に感謝を捧げたのだ。今ではジェームズは、あらゆることに謙虚になっていた。今までの愛は、全て情欲だけであったことを悟ったジェームズにとって、サラを欺くことなど到底出来はしない。そして、単なる情欲だけではサラを抱けないことも知っていた。

サラ、待っている！ この数ヶ月、君を忘れようとしたけれど、それは無駄だった。かえって、君を待ち望む自分が居ることに気付いただけだったんだから。

フランスとの情交も、そして君のインフルエンザも、全て俺達の愛情を証しするただけにあつたのだと思えば、それはそれで良かったんだ！ サラ、早く来てくれ！ 俺の腕に！ 早く……。

3月4日は、微かにみぞれ交じりの陰気な天気だった。

ジェームズは早くからボート・ハウスに出かけ、薪を炊いて部屋が寒くないようにすると、一時間も前からずっと扉近くの外で立ち尽くしていた。そして微かでも人の気配を逃すまいと、ジェームズは耳をそばだてて待ち続けた。

2時を15分、30分と過ぎて行き、さすがにジェームズの胸が張り裂けそうになった頃、突然ガサガサという人の気配と軽やかな足音がした。

組んでいた腕をほどくジェームズに、夢かとばかりサラが飛び込んで来た。

「ジェームズ！」

「サラ！」

二人は扉の側で、ひしと抱き合った。二人とも無言で、みぞれがかかっても平気だった。それから二人は中に入り、扉を閉じるや否や、激しい口付けを交した。それは何度も何度も続き、遂にジェームズはサラの方をやっとゆっくり見つめることが出来た。

サラは紅潮した頬に、ボンネットをほとんど後ろに跳ね除けながら、明るい眼差しで泣き笑いをしていた。たった一冬経つ間に、サラはいつの間にかおぼこい少女から、微かな色香を漂わせている娘へと変貌を遂げている。

「ああ、サラ！　サラ、とうとう来てくれたんだね」

「ええ、来たわ。何があっても、来たかったし会いたかったのよ、ジェームズ！」



サラもまた、ジェームズが単なる軽薄な若者から、どこか成熟した大人の男性へと殻が剥けた様になっているのを発見した。

「サラ……もう君とは会わないと誓ったのに、でも俺はもう耐えられなくて……」

「それ以上言わないで、ジェームズ。今わたしがどんなに至福に満ちているか、あなたには分かっているかしら？」

「分かっているとも！ それは俺の心と同じなんだから」

それから二人は、どちらともなくラグの引いてある床に倒れ伏した。ジェームズはサラの眼鏡をそつと外し、それからサラの頬を両手で挟んだ。サラはサラで、間近にジェームズのアメジストのような瞳を覗きこんだ。最初に出会った時のように……。

「可愛いサラ……俺のサラ……」

「わたしのジェームズ……」

「この冬がどんなに辛かったか……。君に言えないようなことや、色々どつと押し寄せた。それに君のインフルエンザも心配だった。こつちのお嬢さんが亡くなったので、君のことで不安に苛まれていたんだ。いつだったか、小学校の官舎の前を荷馬車で通り掛った時、俺はよつぽど君の家の玄関の呼び鈴を鳴らそうか、と思ったほどだったんだ。馬鹿げた考えだったけど、それだけ俺の頭は真っ白になっっていたから……」

「いいえ」とサラは静かに否定した。「わたしのことよりも、あなたの事が心配だったわ。誰かから、あなたがジョン・ギルフォードから散々痛めつけられたと聞いたの。何があつたかは分からないけれど、あなたはいつも、傷だらけなのね。一つ一つの傷があなたを物語っているわ。あなたの苦難を、そして痛手を」

「肉体の苦痛は慣れている」

この言葉にサラは首を振り、それから涙に潤んだ目を上げた。

「いいえ、苦痛に慣れる人間なんていないもの。わたし自身、手術や何かで痛い目に合って、知っているつもりだった。でも、あなたに比べれば、わたしの苦痛は大したことではないわね」

「魂の苦悩よりはましだ、ということさ、サラ」

それからジエームズはサラからそつと手を離れた。怪訝そうであるが、幾分不満そうにも見えるサラに向かって、ジエームズは横になったまま言いかけた。

「俺がこんなにも身も心も穢れていなければ、君を抱くことが出来る。でも今は出来ないんだ。君はまだ清らかなままで居て欲しいから」

「ええ。でもこれだけは言うわ。わたしはあなただけの者だって」

「ああ！ 俺は何故、サラ・オーウェルを愛してしまったんだろう！」

この叫びは本物だった。理性では推し量ることが出来ない感情が、復讐心を凌駕してしまったからだ。

「そして、わたしは何故ジエームズ・エドワーズを愛するようになったのかしら？ 困難なことは分かっているのに！ 先行きが不安で仕方ないのに、でもあなたを愛することを止めることは、もう誰にも出来はしないの。例えば神様でも……そしてサタンでも！」

二人は再び、寝転がりながら口付けを交した。そしてジエームズは愛するサラの髪を愛しそうに撫でた。彼女の柔らかで女性的な肉体の感触を服の上から感じ、激しい欲望を抱いたが、あえて彼はそれを封印した。

今は忍耐すること……それが真の愛だと確信したからだ。

「君を傷つけない。指一本でも、傷つけたくはないんだよ、サラ。今まで俺の経験してきた“愛”と言うものが、余りにも欺瞞に満ちていたから……それらはみんな嘘つ八だったんだ！ 俺の転落した人生そのものも、今まで嘘と偽りで彩られてきていた。そして、

抱いているのは、激しい復讐心と妬みだけだった。けれども今は違う。君を見ていると、俺の気持ちが変化して行った事に気付かされる。

俺は分かった。あの時、ジョン様に殴られた時に。奇妙なようだけれど……。でも、世間では俺達は許されない。俺達の抱いている感情ですら、決して許されることがないだろう」

サラは、身を起こしたジェームズの懐深く入り込むと、目を瞑った。ジェームズの体温が、服の上からでも感じ取れる暖かい懐に……。

「ジェームズ……少なくとも今は、世間のことを忘れましょう。いい？」

二人は暖炉の側で、互いにひしと抱き合ったまま、無言で揺れる炎を見つめていた。それは自分達の命の炎でもあり、又情熱の炎のようでもあった。このうえなく幸福で平安な時が訪れて二人を包み込み、そしてそれは過ぎ去りつつあった。このひと時が、惜しい！この純真な娘、サラを身も心もボロボロにしてやる、と誓ったのは一体誰だろう、他ならぬ自分ではないか！けれども今はその誓いそのものが、空虚で馬鹿げていることのように思われた。オーウエル氏に対する憎しみは消えてはいないが、少なくともジェームズは本物の愛に出会ったことだけは確かだったのだ、皮肉なことに。

「サラ、俺はね、君を絶対に不幸にしたいわけではないんだ。けどこうやって会っていると、いずれは君を不幸にしてしまうような気がして……怖いんだよ。うまく言えないんだけど、幸福なのにすごく不安なんだ。分かる？」

暖炉の炎が揺らいで、二人の頬に影を落した。けれどもサラはうつとりと、頭をジェームズの肩に置いたままで、そしてジェームズはそんなサラの頭の上に自分の額の一部を載せて、そして手はしっかりと握り、絡み合わせていた。

時だけが無情に流れて行くばかりの遅い午後の日。

やがて、ジェームズとサラは寄り添いながらも、互いの心情や状況を語り合った。どうしようもない事態の中で、何とかして上手く行く方法はないかと模索しながら。

「君をこれ以上辛い目に合わせたくない。目だけ取ってみても、他人よりもハンディがあるのに、これ以上のハンディはもう負わせたくないんだ。でも何だか怖い。俺、本当は怖くて怖くてたまらないんだよ、サラ！」

「わたしも怖いよ、ジェームズ。あなたの事が心配で……。寝ても醒めても心配だったの。現実なんか見たくない！でも見ないでいることは出来ないのね。現実から離れられるのは、この小さな空間だけなのね……。」

だから永遠にこうしていたい。果てしなく漂って、こうして幸せに包まれていたい。だって、あなたがどこか遠くへ行っちゃうんじゃないかという気がするんだもの！」

ジェームズは思わず両手でサラを引き寄せた。外は次第に暗くなっ  
って行く。

「俺達は……一緒ににはなれないんだろうか？それとも、いつか別れなければならぬのかな？」

「別れるなんていやっ！」

サラは駄々っ子のように叫んで、両腕をジェームズの首に回した。「君のお父さんは、永久に俺の事を許すことはない。分かっているんだ。その上、ここではウェールズ人とイングランド人が一緒になることは叶わないんだ。ごく少数の例外……貴族同士の政略結婚とか、そういうの以外はさ。俺達庶民は、まず無理だな」

「ああ、ジェームズ！ わたし達、どうすればいい！？」  
ジェームズは首を横に振った。

「分からないんだ、サラ。一体どうすればいいのか、何一つ。分かっているのはこれだけだ。いい？ よく聞くんだよ、サラ。もしも俺達の事がばれてしまったら、俺達は必ず引き裂かれてしまうって事。そして俺が君を誘惑して、貞操を奪ったと言ったことになってしまっだろう。か弱い君を騙して……。もう誰も俺の事を相手にはしなくなる。イングラント人も、ウェームズの仲間達も、全てが敵になってしまう。君だって、厳しい視線や卑しい噂の的になる。ウェールズ人を好きになった、軽蔑すべき女性とみなされちまうよ。そしてもう俺は君には二度と会えない！」

「未来が無いって事なの！？」

「ここではね」とジェームズは、何か考え込みながら答えた。「ここでは駄目だ」

「どこかへ行けばいいのね、ジェームズ！」

「逃げることなど、出来るだろうか。それに……」とジェームズは言葉を濁した。「君のことが心配だ。君が耐えられるかどうか……貧乏で酷い逃亡生活には、君は無理だよ」

「わたし、案外強いだよ」とサラは言葉を継いだ。「今日だって、聖歌隊を抜け出してきたの。そして一人でここまでやって来たのよ。時々、誰かが後を付けて来ないかと、後ろを振り返りながら。親への言い訳もちゃんと考えているし」

ジェームズは少しだけ微笑んだ。

「悪い子だね、サラ。でも……世間はそんなに甘くは無いよ。けれども、もうその道しか残って居ないかもしれない。なぜなら、ここに居たままだと、下手をすると俺は牢獄にぶち込まれるか……あるいは殺される」

「いやっ！ そんなこと言わないで！」

サラは泣き出した。「そんな惨いことなど、あつてはならないわ！」

「だったらサラ、我慢しなくちゃ。他人には絶対に知られないように注意するんだ、分かったね？ これは俺達だけの秘密なんだよ。誰にも知られてはならないんだ！」

サラは深く頷いた。

遠くで鐘が鳴った。夕刻の鐘　そして二人を引き裂く鐘の音だ。ジェームズとサラはもう一度激しく口付けを交わした。

「サラ、君はもう戻らなくちゃ」

「今度、いつ会える？」

「さあ……分からない。けれども暖かくなったら、二人でどこかへ出かけよう。誰も居ない所へ。ここじゃなく、別世界へ。ここは危険な臭いがする」

「それじゃ、例の栗の木のはこらに、手紙を入れておいてね」

「君もね、サラ」

ジェームズはサラの唇に、最後の口付けをそつと返した。

「ねえ、ジェームズ。実はお金を持ってきたの！　今度は2ポンドだけだ……」

サラは慌てて手提げ袋をまさぐった。その手首を、ジェームズは驚くほどの強い力で押し留めた。

「サラ！　いけないよ、こんなこと！」

少し怒りを含んだジェームズの、頑とした厳しい口調に、サラは手を引っ込めた。

「俺はもうビター文だって欲しくはないんだよ！　君との間に取引のようなことはしたくないんだ！」

「取引？　違うわ、そんなこと。これは、わたしの……」

「もうやめよう」とジェームズは優しく言って、サラの肩を抱いた。「ごめん、言い過ぎた。だけど、もうお金は要らないんだ。二人の

間には、“心”以外、何物をも存在させたくないんだよ。分かって欲しいんだ、サラ」

かつて無いほど真剣なジェームズの眼差しに、聡明なサラは、自分の行いが如何に恥ずべきことを悟った。

「あなたの言う通りよ、ジェームズ。わたしが愚かだったわ」

「愚かなのは俺の方だった。許して欲しい」

二人はもう一度、もう二度と離れたくないかのように抱き合った。けれども時が来て、サラは来た時と同じように、密やかな歩みで去って行く。サラの紺色のケープが、林の中に大気と一緒に吸い込まれるように消えて行くのを、ジェームズは胸が張り裂けそうな思いでじっと見送った。



## 疑惑―秘密の陰に― 1

疑惑―秘密の陰に―

1

靴屋の親方から「直ぐ来て欲しい」と言う短い伝言があり、ジェームズは二日前のサラとの、身を切られるようなそしてこの上なく甘い密会の思い出を断ち切るかのように、靴屋に急いだ。もしか、という嫌な予感がし胸騒ぎを抑えることが出来なかった。

親方はいつも無口な男だったので、案の定ドロシーおばさんがいつもの白い頭巾を被ったまま、入り口で待ちかねていた。そしてジェームズを迎え入れると、何か手紙のようなものをヒラヒラさせながら、闇雲に喋り始めた。

「ボブの具合が……」

「そうじゃないわよ。どうもこうもありやしない。これを見て！ わたしや学が無いからよく分からないんだけど、意味だけはおぼろげに分かったわ。」

『ボブはうちには引き取れません……』 みたいに、そう書いてあるんでしょ？ 全部ちゃんと読んでみて」

ドロシーの物凄い剣幕に、もう一人の弟子で12、3歳くらいの小僧が隅のほうで、怯えた目付きでこちらをチラチラと伺っていた。ジェームズはサツとその金釘流の文字の手紙を読んだ。内容は酷いものだった。彼はドロシーと親方に読んで聞かせた。

「じゃあ、ボブを死ぬまでうちに置いとけって言っのっ！？ そりゃあないでしょ！ 貧乏なのはお互い様。死に掛けている息子を引き取るのは、家族として当然のことじゃないさ！ そうでしょう！

？ 何て薄情で恥知らずな家族だろうね、全く」

憤るドロシー小母さんに、ジェームズは食い下がった。

「彼らはボブを介護できないんです。寝かせるベッドもないし、食べさせるものも無い。それに……葬式を出す費用も……」

「何だかんだ言って！ あいつらはケチなだけよ！」とドロシーは吠えた。「全部厄介なことはわたし達に押し付けといて！ わたしらだって慈善をやる暇なんかないんだからね。わたしらは……」

「まあまあ落ち着いて下さい、おばさん」

ジェームズは怒れるドロシーを制し、溜息をついた。親方は側で苦虫を噛み潰した顔で、黙ったままだ。

「俺が何とかします。もしもどうしてもここに置いておけないのなら、俺、ボブの宿賃としてお金を出しますから」

ドロシーはジェームズの顔をじつと見上げ、それから首を振った。ジェームズがいつもこうして上ずった声で頼み込むと、ドロシーは不思議なことにもうこれ以上がなくなるのだ。ジェームズの何かを内包した淋しげな顔に、長い睫毛が陰を落とし、その表情が益々儚げになっていくのを見ると……。

いわゆる“母性本能”をくすぐられるとでも言うのだろうか？

子供の居ないドロシーは、ジェームズの懇願には弱いのだ。

「あんたがどうやって、そのお金をこしらえたのか、わたしや聞かないけれど、それならなれでもっと大切なものに使ったらどうかい？ もったいないとは思わないの？ 死んで行く友人に使うなんて、思わず説教口調になった。ジェームズは言いくそくに口ごもる。「それはいいんです、それは。ボブの為に使うのは。けれども俺……あの……妹にも送金するつもりです。ここに来て欲しくはないけれど、せめて新しい服でも買って欲しいと思って。いつか必ず妹を迎えに行くからと……でも、今はまだ」

ドロシーは説教を諦めて、手を振った。

「勝手にしなよ、全くあんたって人は！ でも奥のボブったら、この冬の流感にも掛からず、ただ寝てるだけでさ。村の人達がチラホラと亡くなっているというのに、あいつはまだ死にやしないじゃない！」

「そんな……ボブは外へ出ないから、うつらなかつただけです」

「まあね、衰弱していても働かないし若いから、まだ体力があるのね。でも色々な人に迷惑を掛けっ放しで……」

「お願いです！ あいつの生をここで全うさせて下さい。あいつは家族にも見放された。けれども、お上さんたちはそうではないという事を、あいつに知らしめてあげたいんです。俺がこんな事言うの、変だけど」

ドロシーはじつとジェームズの顔を見つめた。

「ジェームズ……最近のあんた、ちょっと変ったわね。以前のあんたとは少し違ってきているような気がするけど。いいわよ、仕方ないわね。ただし、一ヶ月1ポンドは頂くわよ」

「ありがとう！ お上さん！」

そう叫ぶと、ジェームズは奥の階段を素早く上っていった。

「ほんと……あの子は変ったわ」とドロシーはつぶやいた。

\*~\*~\*~\*~\*~\*~\*~\*~\*~\*

「俺を外に放り出すって言ってただろ？」

ジェームズが暗い部屋に入るや否や、ボブは挨拶代わりにジェームズにそう言い掛けた。

「まさか！ ドロシーおばさんは口ではいつもああやってがなっているけど、根は優しい人だ。そんなことしやしないし、親方だって許さないさ。それに費用のことは心配するな。俺が払う。いや、俺には払えるんだ。今の俺には……お金はあるんだから」

そう息せき切つて言うと、ジェームズはボブのベッドの枕もとの側の椅子に座った。

ボブは随分長い間親友の顔を見上げ、それから顔を背けた。クシヤクシヤにもつれた髪、無精髭、やつれて生気の無い虚ろな瞳……。それでもボブはまだ生きていた。

「ジェームズ、済まない」とボブは長い沈黙を破ってポツリと言った。

「なにがさ？」

「でも、もうすぐそのお金、要らなくなるよ。もうすぐ……」

「そんなことないさ！ 窓の外を見ろよ。もう3月だ。春がやって来るんだよ。『ボブはもうこの冬持たない』ってみんなが言っていたけど、でもざまー見ろさ。お前はまだ元気じゃないか。それに以前よりも顔色いいよ」

ジェームズは片手をボブの額に乗せようとした。がボブは激しくその手を払い除けた。

「嘘つくなよ、ジェームズ！ 俺がこの冬生きられたのは奇跡か、それとも神様が俺にもっと辛いしうちをする為に生き長らえさせたのさ。そうに決まっている！」

「ボ、ボブ……それは……」

「そうなんだ！ この冬、多くの子供達が亡くなったのに、俺の様な者がまだ生きているぜって、みんなそう噂しているんだ。それに、家族は俺を葬ることさえ出来ない有様だし」

「家族の言い分は悲しいよ。あれは……」

「分かつてるって！」

ボブは空中に今にも叫ぶが如く、毒づいた。

「俺なんか、もう家族にとっちゃ死んだも同然なんだ！ 病いがうつるのを心配してやがる。家族なんて、家族なんて……」

ボブの瞳から苦い涙があふれ落ちる。ジェームズはただ突き出し

たボブの手を握ってやることしか出来なかった。

ジェームズが握り締めたその瘦せた手を離さないまま、ボブは続けた。

「俺だって家族の今の状況ぐらい分かっているさ。お前やドリユーやニッキーが想像している以上に俺のうちは貧しいんだ。この町だって、俺にとつては天国みたいなものだった。だから今まで頑張ろうと思ってきたんだし。でももう限界だな……。俺、もう誰が見ても40過ぎのオジサンにしか見えないだろ？」

「ボブ、神様がお前を生かして下さっているのは、生きて俺を力づける為だと思うよ。俺を一人つきりにしないために……」

ボブは握られた手で拳を作った。そしてその手を離すと、自分の額に当てた。

「悔しいよ。俺、お前と一緒に歳を取りたかったのに！」

「出来るよ！ 春が来たら、又海に行こう！」

「気休めはやめてくれ！ 無駄な励ましも要らない！ それが不可能なことぐらい知っているくせに！」

握り締めた拳で顔を被い、食いしばったボブの口から嗚咽が漏れた。ジェームズは成すすべもなく、暫くそのままにさせておいた。けれども内心では、自分も直ぐにボブの後を追うような気がしていたのだ。

「少なくとも……お前は、健康だし……友人も居るし……妹も。それにお前は男前だから、これから誰か可愛い娘と所帯だつて持てるし」

ボブは泣きながら途切れ途切れに喋っていたが、“所帯”という

言葉を聞くと、ジェームズの胸がえぐれる様に痛んだ。

「ボブ……俺は」

俺はサラ以外の娘と結婚する気は無いんだよ……でもそれは不可能に近いことだと言うのに、俺はそれにしがみついているんだ……。

「ボブ、俺に近寄って来た女どもって言うのは、そんなんじゃないかな。みんな俺の何に惹かれたのかな？ 少なくとも俺の心に惹かれた女なんて誰も居なかった。今までは……。俺に取りつき、利用し、自分の楽しみの道具に過ぎなかったんだ。そのくせ、心の中じやあ、俺を軽蔑していた。それぐらい、俺にだって分かっていらあ。今まではずっとそうだった。でも……」

「でも……？」

まだ涙の跡が残っていたが、ボブはふとジェームズに視線を向けた。その時までボブは自分のことで頭が一杯だったのだが、ジェームズは顔を伏せ、どうしようもない絶望と苦悩に苛まれているような表情をしていることに気付いたのだ。

ボブはジェームズの苦しみを瞬間的に悟った。

「何かあったな？」

「いや……」

「嘘付くな！ 俺はお前の嘘を見抜くことが出来るんだぜ。お前は俺の一番のダチだろ？」

「俺は……」

ジェームズは指を組んだり解いたりしていたが、その内に一気にまくし立てた。

「俺……愛しているんだ、本気でサラ・オーウェルを」

「……！」

ボブは絶句した。

「サラもまた、俺を愛している。そして俺達……時々会っている、

こっそりと」

「お前!？」

「そうじゃない。サラは清らかなままだ。俺達、会って別に何をすりって訳じゃないけど、ただ側に居たい……それだけなんだよ。いつも一緒に居られたら……って……」

ボブは賢い人間だった。そしてジェームズ達二人の立場も一瞬の内に理解したのだ。

「それって……まずい」

「うん」

「まずいじゃないか!」

ボブは我が身の儂さも忘れて、小さく叫んだ。まずい! こんなにまずいことはないぞ!

「お前、自分達は何をしているか分かっているのか!? そんなことが、ここで許されるとでも思っているのか」

「許されるはずが無い、と思っっているんだね」とジェームズは静かに言った。「それは俺達自身が一番良く分かっている。サラの父親の為に、俺はこの土地に縛られたし、金賞を逃して学問の機会を奪われた。今でも恨み足りないぐらいに恨んでいる。けれども、サラとあの父親とは違う人格なんだ。たとえ、あの糞野郎の娘でも。」

サラは、何と言うか……俺、彼女の側に居るとホッと寛ぐんだ。凄く幸福で平安な気持ちになるし、それに、それに今までの女達と違って純粹でそして強い。そして、あのはにかんだような微笑が例えようも無く可愛いくて……」

ボブはジェームズの、どこかうっとりとした夢見心地の視線にたじろいだ。

「例えそうだとしても……なぜ? なぜ、サラなんかを愛するようになった!？」

「それが俺にも分からない。理性ではコントロール出来ないものが、



俺を支配しているようなそんな感じだ」

「だってお前達、危険じゃないか！　もしも誰かに知られたらどうするんだ！？」

「さあ」とだけジェームズは答えた。「ウェールズ人と結婚するイングリッシュの娘は、少ないけれど居る」

「だけど、あの両親や親戚が許すはずが無いじゃないか」

「そうだな……確かに。けれども俺は、サラと一緒にいるのだから、炭鉱にでも鉄工所にでも仕事を見つけて働いて働いて、出来る限り彼女を幸せにしてあげたいんだ。例えそんなにお金は無くても」

「夢物語だな、ジェームズ」とボブは鼻で嗤った。

「けれども、サラも俺に付いて来ると言ってくれた」

「何で分らないんだよ！」

ボブは癩癩を起こしながら、叫んだ。もしもボブに力があつたら、ジェームズの頬を引つ叩き、そのような夢物語から目を覚まさせてあげたいと願っただろう。けれども、今のボブにはそんな力も無い。多分ジェームズの耳には届かないだろう、脆いアドバイスしか出来ないのだ。

「サラはイングリッシュだ！　そしてお前は金の無いウェールズ人。お前のやっている行為は、我々から見たら“裏切り者”だし、もっと悪いことにはイングランド人からは、とんでもない身の程知らずの野郎としか見えないぜ。それにサラだって、幸福にはなれないよ。あの父親からどんな仕打ちを受けるか……友人からも見放され、サラもお前も苦しむことになるぞ！」

「どこか別の場所に行く。だれも俺達のことを知らない場所に」

「それこそ、大うつけ者だよ、お前は。馬鹿だ！　世間知らずの馬鹿者だ」

「俺達を受け入れてくれる場所だってあるさ」とジェームズも少しだけ意地になって言い返した。

「アイリツシュ達の鋤夫を、俺達が受け入れたように」

「そんなに上手く行くもんか！」

ボブはそう言ったが、すぐに咳込み始めた。ジェームズがボブの背中を摩ろうとすると、ボブは苦しい息の下から言い放った。

「ジェームズ、考えろ！ 今の……今の幸福と、将来の不幸と、そのどちらを取るかを。諦めろ……ジェームズ……」

「出来ない。諦めることなんて……俺には出来ない」  
ジェームズはつぶやいた。

ボブは激しく咳込み始め、苦しげにゼイゼイと息をしだした。

「ジエームズ……俺は……」

「もう言うな、ボブ。ゆっくり休め」

「いやだ！ これだけは言っておくぞ。もしもお前が何か不祥事をしでかしたら、あの署長が何をするかお前だって知っているだろうに！ あの時の屈辱を忘れたのか！？ し、署長は、いつもお前に目を付けている。もうお前は少年じゃないが、でも今でもお前はハンサムだし、あいつの嗜好をそそるんだという事をな！」

言われたジエームズの顔色が、ボブと同じぐらいに蒼白になった。

「あ、あいつがお前を捕らえた後に何をするか……分かってるだろう？ 卑劣な奴は、いつになっても卑劣なもんだ。だから俺、お前が苦しむを見たくはないんだよ、ジエームズ。」

それにサラの方も、多分イングランドのど田舎の厳格な精神病院かどこかやらされるかもしれない。鉄格子の付いた修道院とかの……一生、自由と言うものが無い世界に」

「言うな！」とジエームズは真っ青になりながら、遮った。「言うなったら、この野郎！」

ジエームズは片手で自分の顔を被った。

「もう言うな……」

ジエームズの瞳には、涙が滲み、そして顔は苦悩に歪んでいた。「どうしていいか、もう俺には分からない！」

「だから、今別れるんだよ。いずれ別れなければならないのなら、今の内に、間違いの無い間に、蓄の内に完璧に別れてしまおうんだ。俺の家族が、今俺にしている様に！ サヨウナラを告げるんだよ」

ジェームズは嗚咽をあげながら、首を振った。けれどもその時に、突然ボブは不気味な呻き声と共に、ゲホゲホと血を吐いた。口を押さえているボブの掌から鮮血が滴り落ち、シミだらけの汚いシーツを更に汚して行く。

「ボーブ！」

ジェームズはボブのもう片方の手を握ると、ボブを抱き起こした。ボブの瞳は虚ろだったが、それでもジェームズに何かを伝えたように口を動かしていた。

「俺の……最後の願いなんだよ……。ジェームズ、どうかサラとは……別れて……」

ジェームズは答えなかった。

「お前を……これ以上不幸にしたいはないんだ……」

ジェームズの腕の中でボブは疲れきり、まるでシーツのような血の気のない真っ白い顔を枕に埋めた。

「約束して……約束してくれ……別れるって……サラと……」

つぶやきながらボブはまどろみに入っていたが、とうとうジェームズは何も答えなかった。

\*~\*~\*~\*~\*~\*~\*~\*

サラは3月のある暖かい午後、アネット・ハットフィールドのお茶からの帰り、勇気を奮い起こしながら、かねてからの計画に従って、ユダヤ人の金貸しシュタールの家に寄った。けれども中に入っていくには、大変な勇気が必要だった。

シュタールの玄関口で、サラはこうまでして自分を突き動かすものが何かを考えてみた。

最近の自分は変わって行っている。以前の自分はひ弱く、世間知らずで、両親の庇護のもとに大事に大事に育てられ、ハンディに押しつぶされそうな一人の小娘に過ぎなかった。

それがある日、あの薄紫色の瞳に出会って以来、自分を閉じ込めていた何かが急速に溶けていったような気がするのだ。そしてその日以来、坂道を転がるように加速度をつけて、己れ自身が変貌を遂げて行つたのだ。一羽の雛鳥が大人の白鳥へと成り、そしてその巢から離れて行くように。

サラは暫くためらつたあと、意を決して重々しい厚いドアをノックした。

「どうぞ」というしわがれ声と共に、一人の男がドアを開けた。それはサラにとっては未知の扉でもあり、秘密の入り口でもあり、そして悲劇の幕開けであつたのかも知れない……。

薄暗い室内にサラは足を踏み入れた。

「おや、お嬢さん？ どなたですか？」

尋ねた中年男は頭に平べったい小さな帽子を載せ、鋭い視線で小柄な客を上から下までさつと一瞥した。男は窓際の重厚な古いデスクに座つた。

「あの……シユタールさん？」

「そう。わたしがマックス・シユタールです。あなたは？」

「わたしはサラ・オーウェル。小学校の校長の娘です」

「ほう！？」とシユタールは怪訝な顔つきになった。このユダヤ人は金貸しだが、決して揉め事を起こしたくないのだ。彼も彼の祖先もそうやって生きてきたように。

シユタール氏は大きな平机に座って困惑したような顔をこちらに向け、両手を神経質そうに合わせたり閉じたりしていた。

「お嬢さん。ここがどういう所かお分かりでわざわざ来たのでしょうか？」

「あの……わたしがここに不釣合いなのは承知しています。でもお願いがあつて参りました」

「お金は未成年にはお貸しできませんが」

「いえ、そうじゃなく」

「では何でしょうか、お嬢さん。いや、ミス・オーウェル」

「実は」とサラは言いかけ、まごついた様に視線をあちこちにさ迷わせたあと、椅子を見つけると急いで座って姿勢を正した。

「実はわたしの父のことなんです。父がお宅に伺いました時のことを知りたくて」

「オーウェル氏が、ここへ来たのではということですか？」

「ええ！ お金を借りに来たのでしょうか？」

シユタールは椅子に深く腰掛けると、目の前の丸い眼鏡をかけた娘を見つめた。

「あなたのお父さんは、こんな所に来るような人でないことぐらいご存知でしょう。お嬢さん？」

「嘘を仰つても駄目ですわ！ わたし……わたし、ちゃんとした確信があつて来たのですから」

「では、あなたの確信とやらはてんで当てにはならないようですね」

「どういう意味？」

「オーウェル氏は、わたしからはびた一文も金を借りてはいないからですよ」

「え！？」

サラは絶句すると、その丸い瞳を見開いた。

サラは俯いた。そして自分の持つ確信が、グラグラと音を立てて崩れ落ちて行くのを感じていた。それでは、大金はどこから？

「オーウェル氏はわたしから借金をしたことは金輪際ありませんよ、お嬢さん。何ならヤハウエーの神に誓ってもいいでしょう。あなたは何か勘違いされているようですね」

「借金を……したことがないですって？ それは本当なんですか？ それとも父に口止めでもされたの？」

「口止め！？ ああ、お嬢さん！ 何てことを言うんです！」  
シュタール氏は大袈裟に頭を振った。

「あなたのお父さん、オーウェル氏は一度たりとも、うちからお金を借りてはいないんです。あなたが何を心配しているのか知らないが、お父さんが借金はした事はないんです！ ですからどうかご安心なさって、お帰り下さい」

「神に誓って？」

「そうです。何ならあなたとわたしの両方の神に誓いましょう。わたしはまっとうな金貸しなんですからね」

「そうですか……」

急に力が抜けたサラは、今にもその場に崩れ折れそうな虚脱感に襲われた。それでは父の借金とは一体何なのだろう？ どこから借りたのだ！？

「全くあなたは見かけによらず大胆な方ですな」

「済みません……不躰なことを申し上げてしまって……」

サラは納得が行かないながらも、ゆっくりと立ち上がった。けれ

ども目の前のシュタールが嘘を付いているとは思えないし、嘘をつく理由もないのだ。

「どうか、この失礼はお許し下さい」

「いいえ、いいえ！ それじゃあ〜」とシュタール氏もホッとしたような顔で、この場違いな場所にやって来た娘に向かって、やっとなこやかな顔を向けた。

けれども一瞬ハツとして、言いかけた。思い出したのだ。

「ちょっとお待ち下さい。実はあなたのお父様は一度だけですが、ここに来たことはございますよ。もう大分前のことですがね」

「えー？ だつて、あなたはさつき……」

「いいいえ」とシュタール氏は手を振った。「それは借金の為ではありません。借金をしたのは、未成年の、と言うよりもまだほんの少年でしてね、その保証人としてやって来られたのです。相手がまだほんの子供で……仕方がなかったのでしょうか。その子には身内がいなかったのですね」

「……！？」

サラの身体は硬直状態になった。もしや……。

「それは誰？」

「ええと、ジェームズ・C・エドワーズです。オーウェル氏は自分の教え子だと言っていました。その頃、少年はまだ11か12歳くらいの華奢な青白い男の子で、歳よりはませていましたね。人目を引くような可愛い少年でしたが、両親の負った負債の残高を払う能力がないので、やむなく借金をしに、ここへ」

サラの頭は空っぽになった。父親がジェームズの負った借金の保証人とは！？ 初めて知った事実だったのだ。ジェームズはこのことをサラには内緒にしていたとは！

「それで……借金は返済出来たのですか？」



「ちょうど三日前でしたな、彼がやってきたのは。三ヶ月分の借金を前倒しで返済致しましたよ。それで完了でした。もう彼には負うべき借金もなく、自由になったというわけです。そしてお父様も、保証人としての役目を終えたわけですよ。ヤレヤレでしょうな」

「三日前……」

サラの心は混乱の極みにあつた。

「エドワーズは、小学校を卒業後、粉屋に住み込んでいましたから、毎月少しずつキチンと返済していました。それからギルフォード家に行ってから、約8年は返済に掛かりましたが、一応ケリを付けてくれましたよ。エドワーズはオーウェル氏には恩義を感じているはずです」

シユタール氏はニツコリと微笑んだ。

恩を感じている！？ ジェームズの態度や気持ちには、全くそんなものは無かった！

「ああ！ わたし……どうしよう……」

「何か？」

「い、いえ。何でもありません」

「けれども、お顔色が悪いですよ」

「い、いいえ……」

サラはグラツと来て、眩暈に襲われた。

「その証文は、あるんですか？」

「いいえ、3日前にすでに燃やしました。エドワーズの目の前でね。あつ、言い忘れましたよ。保証人となったお父さんは、エドワーズが逃げ出さないように、警察署長やギルフォード家、そしてバロウズ村長に頼み込んでいましたね。確かにエドワーズが逃げ出すと、残債はお父様が払わなければならぬわけです。それでなくとも、お父様は余り裕福とは言いかねていましたのでね。」

逆を言えば、エドワーズはこの土地からは決して出られなかった。ずっとここに縛られていたんです。預けられた妹さんにも、会いに

は行けなかったと言いますよ。けれども彼は何度も諍いや揉め事を起こしていました。喧嘩や放火などもね。

あの彼の容姿には誰でも騙されてしまうでしょうな。けれども、天使の面立ちの下には、したたかな悪魔の顔があったというわけです。

それとも……それは、彼のこの村や、呪われた運命や、お父様に対する嫌がらせだったのかもしれませんが。そういう所がありましたよ、エドワーズには」

「そ、それじゃ、おいとまを」とサラは慌てて手を挙げると、シュタール氏の長話を制した。というよりも、それ以上聞きたくなかったのだ。心臓は飛び出しそうに動悸を打ち、これ以上聞かされれば、サラはその場に倒れたかもしれないかった。

父とジェームズの隠された“秘密”の一端は暴露された。それは、恩義と言うよりも、ジェームズにとっては、重い枷に過ぎなかったのかもしれないし、父にとっては、それは賭けだったのだ。二人の心は歪んだまま、決して交わることが無かったに違いない。

父がシュタールから金を借りていないのは確かになったが、けれどももつと大事なことを暴いてしまった。

何か言いかけたシュタールの言葉を振り切るように、サラは外に飛び出した。幸い外の通りには誰も居なかった。サラは泥だらけの道を、まるで酔っ払いのようにフラフラと歩みを進めた。張り裂けそうな心を抱いて。

## 偽りの絆　春の初めに　1

偽りの絆　春の初めに

1

金貸しのユダヤ人シュタールのところに行つてからと言うもの、サラの心は千々に乱れ、家族の前では普通の素振りだったが、一人になると打ち沈み混乱していた。

ジェームズの借金は知っていたが、父が保証人になっているとは一言も言つてくれなかった。本当に自分を信頼して愛しているのかどうか……本当はまだ騙されているのではないかという疑惑が、彼女を苦しめていた。

サラは自分をどう御していいか分からず、全ての食べ物の味が無くなり、せつかくの春の気配も何も感じられなくなった。涙で枕を濡らす時もある、ジェームズが自分を騙しているはずが無い、あのことをいう機会が無かったただだと樂觀的に思おうとしたこともあった。

けれどもそういう自分を家族や他者に気付かれまいと気を使ひすぎて、クタクタになつていたことも事実だったのだ。確かに父とジェームズの接点の一つ見えてきたが、それもまだまだ曖昧模糊としていた。

二人の間にはまだまだ謎や秘密の部分が多過ぎる。何とか糸口は見つけたが、逆にそれは纏れた糸巻きのように、益々サラを混乱に落すだけだった。

それでもサラは、ジェームズを愛することをやめる事はできそうも無いのだ。諦めよう、忘れようとしても、ジェームズの面影、感触、彼の存在全てがもはやサラにとっては奪うことの出来ないもの

だつたからだ。

けれども、サラは例の栗の木の側に行く勇氣は出なかった。サラは近寄ろうとする度に吐き気を感じてしまったため、わざと栗の木の側を通るのを避けていた。

\*ゝ\*ゝ\*ゝ\*ゝ\*ゝ\*ゝ\*ゝ\*ゝ\*ゝ\*ゝ\*ゝ\*ゝ\*

何かがサラにあつたのだ……とジェームズは感じ取っていた。ジェームズはあの日から何度も栗の木のほくらに手を差し伸べたが、サラからの手紙は入っていなかった。虚しい思いを抱きながら、鬱々とした日々を送り、一方ではボブには、何の返事も出来ないままだった。ボブはあの日以来、次第に衰弱して行くばかりだ……。

ジェームズが寡黙になつて行くのを、ボブのせいだとドリューは単純に思い込んでいた。サラとの密会の秘密はドリューには内緒にしてあり、もちろんボブはそんなことを他人に漏らすはずが無い。

そうしたある日のこと、昼間つからパブ『山猫荘』にたむろしていたジェームズとドリューは、外での騒がしさに興味本位で気をそられ、外に出ようとした。

「今は出ないほうがいいよ、あんた達。アベリストウイスでの扇動者の仲間らしいから。どうせ青臭い学生達に決まっている」

酒場の女主人のヴィヴィアンは向こう見ずで世間知らずの若者達を制したが、誰も聞く耳を持たなかった。

「あいつらは“愛国者”ぶっているけれど、単なる社会主義者か独立派のアジテーターに過ぎないのさ！ ウェールズは今のままで充分幸せなんだよ。だから……」

「いや、奴らはアジテーターではなく、勇氣ある奴らだよ、ヴィヴィアン」

「奴らは、プリーチャー（説教者）さ」

若者達は口々に言い合いながら、ゾロゾロと外に出て行った。ジエームズとドリュウも面白半分で付いて行った。これが将来に致命的な結果になるとも知らず……。

「ふん！ 馬鹿な連中！」

ヴィヴィアンは若者達に向かって唾を吐いた。「あとで後悔しても知らないよ」

酒場から少し外れた大通りに沿って、20人以上の男達や数人の女や子供達が囲んでいる真ん中には、木箱の上に乗った若い男と、その側には眼鏡を掛けた貧弱な男が立っていた。

木箱の上の若い男は、どこか洗練された物腰で洒落た服を着、大声で何か演説している。

「皆さん！ 僕はアベリストウイスのウェールズ大学の学生です！」

大胆にも彼はケルト語で話していた。

「アベリストウイスであった事件はご存知でしょうか！？ 官憲の奴らは、僕の仲間達を逮捕しました。我がウェールズの主権を守るために戦った仲間達を！ ウェールズは今、炭鉱や鉄工所で、大英帝国の繁栄を支えているのです。けれどもその富はイングランドとウェールズの一部富裕層にしか回っていません！」

皆さん！ 周りを見回して下さい！ 潤っているのは一体誰か？ 本来なら鉱夫達、労働者達がその恩恵を受けて然るべきなのです。それなのに、ウェールズの富裕層達は、大英帝国とつるみ、我々を搾取している！ 自分達の固有の財産、名前、文化をイングランドに売ってまで。奴らこそ、売国奴なのです！」

大学生はそこで息をついだ。まだジエームズと同じくらいの年齢で、そしてどこか幼さを残しているなかなかハンサムな若者だった。けれどもどこか痛々しい風情があった。ジエームズは彼の中に潜む“危うさ”を感じ取った。

けれども他の聞いている者達は、シーンと静まり返っている。

「皆さん……ドウイラルの炭鉱の事件についてご存知でしょうか？」

あそこでは、鉱夫達だけではなく、女子供も迫害され、牢にぶち込まれた。そして我々の仲間達は官憲によって拷問され、そして殺され、路肩に放って置かれた。惨い傷だらけの身体で……。

大英帝国に魂を売ったウェールズの面汚し達は、未曾有の繁栄の中にあるのに、我々にはそのおぼれすらも回って来ない！女王は……いや、イングランドの女王は（＝ビクトリア女王）は、我々のことなど何にも考えちゃいない。植民地のアフリカやインドと同じか、それ以下とみなして平然としている。

いや、逆に彼らは固有の名前を持つこと、言語を使うことを許されているが、我々は違う。我々ウェールズ人は、イングランドの“寄生虫”としてしか生きられない！何より、あなた方は先祖の名前を覚えているのだろうか？先祖の文化をないがしろにしてはいないだろうか！？

大昔、ハリー五世はウェールズ人だった。けれども今は、ウェールズ大公（＝プリンス・オブ・ウェールズ）の支配下でしかない有様なのだ！我々は彼らの奴隷だ！

諸君、目を覚ませ！一緒に立ち上がろうではないか……！」

大学生は、拳を握った片手を宙に突き出した。

若い大学生の演説は、20数人の溜息とまばらな拍手を誘っただけだった。けれども唯一人、ドリュールが「いいぞっ！」と手をラッパのように口に当てながら叫んだ。横に居たジエームズはドリュールの袖を引っ張った。

「やめろよ、ドリュール！」

「何でだ！？ あいつの言っていることは正しいぜ！」

ジエームズは微かに肩をそびやかした。

「あいつは頭でっかちの大学生さ。どうせ金持ちの出だろう。言っていることだって、現実離れしていて、支離滅裂だ。社会主義者が愛国派の連中だよ」

ジエームズはこう耳打ちしながらも、心の奥では理知的な大学生に嫉妬に近い感情を抱いていた。彼の言っていることは確かに正しいとは分かっていたのだが、ドリュールのように素直には賛同しかねたのだ。

けれども木箱の上の大学生は、反応が少ないのにもめげずに、ドリュールの方を向くと、

「ありがとう！ ありがとう、君！」と何度も謝辞を繰り返した。

ドリュールはきまりが悪くなったが、渋々頷いて見せた。何人かの村人がドリュールの方を冷淡な目付きで眺めたので、さすがのドリュールも自分の危うい立場を認識したようだ。

本当はドリュールはもっと強く叫び返したかったのだが、ただモゴモゴと口ごもっただけだった。

「ありがとう！ 皆さん、ありがとう！」と大学生は、我が意を得

たりとばかりに再びまくし立て始めた。

「例え今すぐには理解できなくても、今に学校がケルト語で教えられ、我々の名前がイングリッシュではなく、我々固有の名前になる日が来るでしょう！ 我々は、我々の“本当の”名前を取り戻すのです。いつの日か……」

けれども演説はそこまでだった。突如として、示し合わせたかのように、バラバラと4、5人の屈強な警官達が、木箱の上の大学生と横に立つ風采の上がない眼鏡の男に飛び掛ったのだ！

と同時に、若い男は手に持っていたビラを全て、立ち止まっていた人々にばら撒いた。悲鳴と共に、取り巻いていた人々は蜘蛛の子を散らすように、あっという間にあちらこちらに逃げ出した。

「やばい！」

ジェームズとドリューも、又大急ぎでその場を走って離れた。チラと後ろを振り返ったジェームズの目に、殴られその上に太い縄でぐるぐる巻きに縛りあげられた二人が、署長の指図で引きずられて行く姿が飛び込んで来た。

「ちえっ！ あいつら、馬鹿な奴らだ！」

ジェームズとドリューは走って走って、町の外れまで逃げて来た。そこでやっと二人はゼイゼイと息を切らせながら、立ち止まった。

「かわいそうに！ あいつら二人、署長達に散々やられっちまうぜ」とドリューがまだむせながら、吐き捨てるように言った。

「けれども所詮……あいつらの言っていることは……理想主義に過ぎないんだよ」

ジェームズも途切れ途切れに喋る。

「今現在の状況を少しでも把握しているんなら……ウェールズ人はこれ以上は何も望まないって事が分かるはずだ。あいつらは、労働者階級のことを少しも分かっちゃいないぜ」

とジェームズが毒づくと、ドリューは珍しくジェームズに対する敵



意をむき出しにして、突っかった。

「何だよ、ジエームズ！ おめえだって、子供の頃まで上流階級の仲間入りしてたじゃねえか！ 小奇麗な邸宅に住んで。それなのに、今の言い草は何だ！ へっ、笑わせるね」

「俺は、上流ではなく、中流だ。まあ、そんなことはどうでもいい。過去のことじゃないか！？ 今の俺はな、ドリユー、お前よりもずっと酷い状況なんだぜ」

ドリユーはジエームズの方を向くと、彼の胸をドンと突いた。

「何だよ！ 自分の保身のことばかり考えてやがらあ、おめえって奴は！ 猫みたいにおとなしく暮らすっていうのか！」

「保身じゃないぜ！ 現実にはロマンチックじゃないってことだけさ。ただ味気ない日々があるだけじゃないか。俺達に一体何ができるって言うんだ！？ この体勢や政治を変えることが出来ると、本気で信じているのか！」

「い、いや……それは……」

二人は今にも掴みかかりそうに睨みあっていたが、そのうちどちらともなく折れて出た。

「やめようや、おい、ドリユー。俺達二人とも馬鹿みたいだぜ。下らない理論に振り回されてさ。今更先祖の名前を名乗る！？ バカバカしい！ 埃の被った記録をほじくり返すのか？」

「少なくとも炭鉱がある限り、女王はこの土地をウェールズ大公（＝プリンス・オブ・ウェールズ＝皇太子の意味）の土地として統治して行くだろうさ。どうぼざこうと仕方のないことなのに。考えたら、あいつら正論は言っているが、なんだかアホだよな」

「あいつら、あの野蛮で残忍な署長にどんな目に合わせられるのか、分かっているのかな？ 哀れなもんだ。特にあの若い方の……」

「結構、イケメンな奴だからな。多分……」

「想像するだけで反吐が出そうだ」とジエームズは暗い声でつぶや

いた。

けれどもジエームズはふとドリユーが手に握っているも半分は破れ果てたビラの破片に目を移すと、猛烈な勢いでもぎ取るうとした。

「馬鹿野郎！ そんなもの、捨ててくればいいのに！」

「だけど、これは後で読もうと思って……」

「よせつたら！ これは不吉だ！」

ジエームズはビラの破片を奪い取った。その紙切れには、『今こそ立ち上がれ！ 我が同胞よ！』とあった。

「何て陳腐な文章だ！ 笑わせるよ、本当に！」

ジエームズは首を振り、せせら笑ったものの、なぜかそれを自分の上着のポケットに突っ込んだ。

「今捨てるのも、まずいな。どこかで燃やすさ」

「それじゃ、又パブに戻るかい？」とドリユーが言いかけると、ジエームズは片手を振り、「いや、やめとくよ。今日は早く帰らなきゃな」と答えて、踵を返そうとした。

けれどもジエームズは何を思ったのかふと立ち止まり、大男のドリユーを見上げた。その瞳が余りにも真摯で真剣だったので、ドリユーは身構えたものだ。

「何だい？」

「頼み事があるんだ」とジエームズは簡潔に答えた。「聞いてくれないか」

ドリューはジェームズの、誰もが魅了されてしまう宝石のような瞳を見つめた。けれども今その瞳は、どこか虚ろに潤んでいる。

「実は……」とジェームズは言いかけ、少しの間遠くの彼方を見つめていた。

「何だよ!？」

「いや……何でもない。忘れてくれ。それじゃ……」

「何だよ、途中でやめるなんて! だったら最初から言わなきゃいいのにさ。それって、ボブのことかい？」

「いや、違う」

そこでジェームズは深い息をついた。

「妹のことだ」

「メアリーの!？」

「そう。何て言うか、今までメアリーをほったらかしていたけど、今度勇気を出して、ちゃんと手紙を書くよ。『ここに来るな』ってで……それから……」

ジェームズは訳もなく狼狽し、唇を噛んだ。

「もしもそれでも、妹がここに来たら……来て欲しくはないんだが……」

「何が言いたいんだよ、ジェームズ! 妹を愛しているのか、それともうざいのか？」

ドリューは苛々し、うんざりとした顔つきになった。

「うざい訳はないじゃないか! けれども俺はメアリーをここで護る事は出来ないんだ。ギルフォードのお屋敷に奉公に出たら、もう

お終いさ。だからと言って、今二人で他所に行つたつて、仕事もなければ住む所もないし……」

「オイオイっ！ 一体何が言いたいんだ！ はつきり言えよ！」

ジェームズは姿勢を正すと、意を決したように真つ直ぐにドリユーの瞳を見つめた。その口から、信じられない言葉が出た。

「メアリーと結婚して欲しいんだ」

「な、何だつて！？」とドリユーは驚愕の余り、その大きな目を剥いた。

「もしも俺に何かあつたら……特にメアリーのことが心配なんだよ」「何言つてるんだ！？ それに“もしも何かあつたら”つて、何のことだよ！」

余りにも唐突で意外な申し出に、ドリユーの頭は空っぽに成り、いかつい身体を硬直させ、口をあぐりと開けたままだつた。ジェームズは尚も真剣な目つきで、友を見上げた。ボブに次に信賴する“男”を……。

「嫌か？ それとも……お前、もう心に決めた娘でも居るのかい？」  
ドリユーが何か言おうとした時、冷たい春の雨が通りに降つてきたので、二人は慌ててどこかの家の軒先に隠れた。どんよりとした空に、鉛色の雲がかかっている。

「嫌だとか、そんなんじゃない。それに俺を好いてくれる娘も、今は居ない。けれど……何かおかしいよ。俺、お前の妹に会つたこともないんだぜ。その上、メアリーの意向を無視して、一方的に兄であるお前が、こんな重大なことを押し付けるなんて！ 信じられねえ」

「俺を“独裁者”だと言いたいんだろ？ けれどもこれしか方法はないんだ、メアリーが幸せになる為には。お前は良い奴だし、それに石工としての腕前ももう一人前だ。そりゃ、昔は俺達一緒に無茶ばかりやつたさ。俺達は札付きだつたからな。だが、それももう終

わりだ。俺達は大人になった。責任を持たなきゃならない“大人”に。

だからこそ、妹をあんな所に奉公に出すぐらいなら、石工のお上さんになってくれる方が良いんだよ！」

ドリューは暫く俯き、雨に叩かれる地面を見下ろしていた。

「メアリーって……会ったことはないけれど、美人なんだろう？」

そんな娘が、俺のような無骨者のお上さんになんかなるもんかよ……

……

「メアリーは分かってくれるよ。あいつは聡明な娘なんだ。それとも、ドリュー。妹がジョンのような卑劣な奴に手籠めにされて、弄ばれた方がいいと言うのかい？ どちらが妹にとって幸福な生活なんだよ？ 誠実で実直な石工の親方の上さんか、それとも……？」

「でも、愛は無いだろうな」

「愛情を持つかどうかは、会って見ないと分からないさ。最初から決め付けるな。それにこれは、俺の一生涯の頼みなんだ！」

「考えとく」とドリューはボソツとつぶやいた。彼の赤褐色の巻き毛が雨に濡れて震えていた。

「そうか！ 考えておいてくれよな。頼むから！ 俺はどっちみち、先行きの希望なんて無いんだ。けれども俺には何となく見えている。不思議な感覚だが、お前達がきつとそうなるだろうという事が。そして、それがメアリーとお前にとっては、幸せになる近道だって事がさ」

「うん……それじゃーな」

ドリューは納得できないながらも、どこか心の隅でポツと明るい灯火が灯ったような気持ちになった。今まで余り幸せとは言えなかった、両親も居ない孤児の若者であるドリューにとって、結婚して家族を持つということは、実は最大の“夢”だったのだ。

けれどもジエームズの頼みは実現できそうもないことも、知って

いたのもドリユーだった。彼は見かけによらず、頭のいい若者だったからだ。そういう夢にしがみつくほど、ロマンチストではないという事を……。

帰途、ジェームズは例の栗の木の太木の下に手を差し伸ばし、やはり何も無いことを確かめると、そつと昨夜書いた手紙を入れた。

『 S へ

君に会いたい。連絡が無いのはなぜ？ 切に返事を請う。

君を愛する J より

』

けれどもジェームズは、サラからの返事を期待していなかった。暗澹たる黒雲が、まるで今の天気のように、ジェームズの胸を覆っていた。

サラは最近、ウェールズ人の中でも金持ちの村長の娘、ノラ・バロウズと仲良くなっていた。二人は人種が違っていたが、ものの価値観と言うものが妙に一致しており、ノラがサラの家に訪問することもあったのだ。

どちらの家族もそれなりに躊躇いはあったものの、ウェールズ人とイングランド人が仲良くなることは、時折あったことだった。けれどもノラの父親のバロウズ村長は、娘がサラと付き合うことを好ましく思っていなかったが、それをあからさまに言うことはなかった。

その日もまた、サラはノラの家に行っていた。ノラはリトルウツドの大地主の婚約者との、味気ないデートのことなどをサラに喋っていたが、それ程苦にしている様子は無く、サラはノラの有様を見ている内に、不可解な気持ちに陥っていた。

「サラ、あなたこそ、どこかに“いい人”が居るんじゃないの？それとも、婚約者が」

「い、いいえ……わたしにはそんな話はないわ」

とサラは、首をすくめながら小声で答えた。

「でも、サラ。あなただって、もう１７歳なのよ。そろそろ年頃じゃないの？」

ふふふとノラは含み笑いを浮かべる。

「わたしのような不細工でチビで、目の悪い女なんかを嫁に貰いたいなどと言う人は、この村には居ないわよ。それに、我が家にはお金も余り無いし……」

「じゃあ、一生独身を貫くの？」

「え？ ああ、それは……」

サラは一瞬たじろいだ。一生涯、誰とも結婚せず、男も知らず、子供も持てず、両親の庇護のもとに暮らす、という事を想像しただけで、暗澹たる気持ちになったからだ。

もしも両親が亡くなったら……貰える財産も小額で、多分姉達や兄の厄介者として、淋しく暮らすのだろうか？

「そうね……独身は、やっぱり」

「嫌でしょ？」

「でも、わたしには何も無いし……」

「何か手に職でも無いの？」

「この目では……」

何て意地の悪い質問なのだろう、とサラはふと思った。そしてノラを見つめた。ノラはウェールズ人だが、ここウェールズでは金持ちで何不自由ないのだ。自分よりもずっと恵まれている存在だ……。

「手に職……」

今まで考えもしなかったが、確かにそれは必要な気がした。結婚も出来ない女は、この時代には親戚の家でお手伝いか子守でもするほかは無い存在なのだから。

「もしも出来たら……盲学校の先生になりたいわ。それには勉強して、学校に行かなくてはね。でも、そんなお金も無いし、歳も取り過ぎてる。単なる“夢”よ」

「そんなこと無いわよ！ サラ、あなただったら出来るわ。だって、あなたって聡明なもの。お話していたら分かるわ。他の友達とは違うの。いえ、これはあなたがイングランド人だと言うからじゃないのよ！ やっぱり校長先生の娘さんだけあるわね、博識だし」

「ありがとう、そう言って下さるなんて。こんな事言ってくれるのは、あなただけよ、ノラ」



ノラは目をパチパチさせ、ニツコリと微笑んだだけだった。確かにノラは頼りになる友達だ。人種の違いなんて、関係ない。

「あつ、今日は早く帰らなくちゃ」

「え？　なぜ？」

「一番上のバスお姉様がいらっしやっているの。隣町の教師にお嫁に行った……。久しぶりで」

サラは自分の浮かない顔を何とかして誤魔化そうとしながら、そう答えた。なぜならサラはこのエリザベス、愛称ベス姉さんが苦手なだった。彼女の側に居ると、なぜか緊張する。ベス姉さんは、どちらかと言うと父に似ているのだ。物静かだが厳格で、誰も反論出来ない正論を言う人間だったからでもあるだろう。

「あら、それじゃお茶はお姉さんとするのね。でもサラ……何か楽しそうじゃないわね？」

勘の鋭いノラの声でした。

「え、ええ。あの……余り好きじゃないのよ、ベス姉さんは」

「例え兄弟姉妹でも、相性と言うものはあるものよね」とノラは物分りの良さそうな返答をした。

「その下のトレイシー姉さんは大好きだったのよ。レスターの子持ちの男寡婦<sup>やもめ</sup>にお嫁に行っただけだ。とても優しい姉さんだったわ。ロンドンに入院している時に、何度か来てくれたし。ご主人は嫌がっていたというのに、わたしの為に」

それじゃーと言って、サラは立ち上がった。そして大急ぎで支度をする、ノラの館を後にした。余り気が進まなかったせいか、それともふとした気の迷いか、サラは小川の側の栗の木の大木に近付いた。

恐る恐るその大木を見上げると、木の葉がそよぎ、サラを手招いているような気がした。サラは数秒の躊躇いの後、さっと近寄ると

そのほくらに手を差し伸べた。何かが指の先に当たり、サラの心臓はピクリと波打った。

サラは紙片をさつとコートのポケットに入れると、誰も居ないのを確かめ一瞥した。心臓は早鐘のように打ち始める。懐かしいジエームズの綺麗な筆跡、そして自分を微かに責めているような文面。けれども何よりもサラは、恩讐を超えた愛情を余りにも切なく感じすぎた。ジエームズに会わないでいることが、これ以上耐えられるだろうか？

サラはけれどもまだ迷いの内にあった。勝手にシユタールの言う事を信じ込むことは危険だ。けれども、さりとて会う勇氣も無い。

自分は不細工でチビで、イングランド人で、そして……。サラは流れ落ちそうになった涙を堪えながら歩み始め、そして官舎へと入って行った。

その日サラは台所からこっそり入り、ベス姉さんを驚かそうとした。その前に何か食べたいという気もあったのだ。ノラの館からここまでは少し遠すぎた。エレーンが買い物に出かけているのを確かめると、棚の上に置いてあった昨日の残りのプディングをさつと口の中に入れる。

それからサラは少しでも姉の心象を良くしようと、ボンネットを取り髪を整え、身支度してから台所から居間の方へと足を踏み入れようとした。けれども扉を少しだけ開けた途端、ベスの甲高い声に身を強張らせてその場に突っ立ってしまった。

「馬鹿なこと言わないで！ サラを結婚させるですって！？ どこにそんな奇特定の人が居るって言うの！？」

ベスのこのヒステリックな声は、サラを凍らせ奈落の底に引き落とした。

「無理無理！ 目が悪く、世間知らずで、おまけに不細工な小娘を

誰が嫁に貰うって言うのよ!？」

サラは自分の立場を、これ以上に無いほどはっきりと認識したのだ。先程飲み込んだ涙が、どっと溢れ落ち、サラの頬を伝い落ちて行く……。

サラの長姉であるベスのヒステリックな言い方は、それが本心であると思わせた。けれども母であるオーウェル夫人は、少なくとも娘達全てが可愛い我が子なのだ。

「でも、あの子ももう17になったし……近所の娘さん達には大抵い許婚なすけがいらつしやるのよ」

「だから、何よ!？」

腹の虫が収まらないかのように、気の強いベスの声がした。

「あなたには分からないのよ。例えハンディある子供であっても、親とすればちゃんとした誰かと結婚して欲しい、と思うものなの」

「あんなベスを好きになる男が、この世に居ると思う!？」

「ベスだなんて! ベス、口を慎みなさい! 何て酷いことを!」

珍しく母親の叱責が聞こえた。ベスも、さすがに言いすぎたと思つたのか、暫く沈黙があつた。けれども扉の陰で聞いているサラは、息苦しいほどの苦惱で倒れそうになっていた。

「確かに、言い過ぎたわ。あの子は優しい心根を持っているもの。それにああいう容姿を好きな奇特な男も居ないわけじゃない。でも、サラは目が不自由なのよ。一般的なことは出来ても、細かい作業は出来ないわ。

考えてもみてよ、お母様。わたし達兄妹はあの子の為に、そりや色々我慢したのよ。お母様は手術だ何だって、一年の内半分も家に居なかった。おかげで妹のトレイシーは母親代わりになって家事を切り盛りし、我が家では一番綺麗だったのに、危うく行かず後家になる所だったじゃないの。

でもやつと25歳で、20歳も年上のレスターの子持ちの男のところへ嫁ぐことが出来たけれど、先妻の子三人と自分の幼子二人で、いまでもそりゃあ苦勞しているのよ。まだ28歳なのに、髪には白髪が目立つほどだわ。

分かる、お母様？ もつとあるわよ！」

「やめて！ やめて頂戴！」と母親の悲痛な叫び声がした。「もういいの、分かっているから。すまないと思っっているのよ……」

「そうかしら？」とベスは、意地の悪そうな声音を發した。「別にお母様を賣めているんじゃないわ。ああいう妹を持った宿命だと、優しいトレイシーはいつもそう言っていたものね。

でも、言わせて！ わたし達、あの子の莫大な手術代のおかげで、いつも酷い服を着ていたのよ。でも、サラには新品ばかりだった……」

ベスの声には、悔しさと哀しみが宿っていた。けれどもベスは言い続けるのをやめなかった。

「それに……サラはいつもお母様を独占していた！ 少し歳が離れて産んだ末っ子だったせいかな、それともお母様がサラを不憫に思っていたからか、いつもいつもサラの世話ばかり。そしてお父様もそうよ！ 我が家には大したお金は無かったというのに、サラの為に随分無理をなさって、頭を下げて……」

「もう、いいのよっ！」とオーウェル夫人は絶叫した。「やめなさい、ベス！」

「もういいのかも知れない……過去のことはね。わたし達、ただ我慢するしかなかった少女時代は、遙か昔のことだもの。

でも、今度は結婚相手を探してくれ、ですって！？ 呆れるわ！ そんなことまでしなくちゃならないの、わたし達？ もうわたし達に犠牲を強くないでちょうだいな、お母様。あの子には、ウェー

ルズ人がお似合いよ。彼らなら、甘ったれた不具の娘をちやほやしてくれるでしょうからね！」

オーウェル夫人のすすり泣きが聞こえた。サラは虚脱状態になり、扉の側にズルズルと腰を落すと、じつと床の木の年輪を見つめていた。

「ごめんなさい……」と言う、ベスの今にも泣きそうな振るえ声が出てくる。「でも、わたしは知っているの……知っているのよ！」

「知っている？」とオーウェル夫人の絶望的な問いかけ。

「ええ、お母様。お父様はウェールズ人からお金を借りたのでしょうか？ バロウズ村長よ。あの卑しい高飛車なウェールズ人の金持ちから……」

サラは今にも自分が発狂して、大声を出すのではないかと言う恐怖から、両手で自分の口を塞いだ。けれども声無き嗚咽が漏れてくるのを防ぐことは出来なかった。

そうだったのか！ 父は、バロウズ氏からお金を借りていたんだわ！

「もちろん、なぜあのバロウズがお父様にあんな大金を貸したのか、よく分からないんだけど予測は出来るわ。きつと、何かの……取引でもあったんでしょね。ともかく、あの村長に借金を返済する為に、わたし達はずっと忍耐し続けてきた。」

わたしのウェディング・ドレスは中古でボロボロだったし、持つて行くものがほとんど無くて、今でも夫や姑はわたしを責めるの。お母様だけじゃない、わたしだって泣きたいのよ」

事実、ベスの声は段々涙声になってきていた。

「妹にはもう充分すぎるくらいしてやったじゃないの。目が見えるように、あらゆる努力をしてきたわ。妹はそりや可愛くないと言ったら嘘になるけど、わたしはもうそれ位でいいと思う。結婚の話は、

だから……」

サラはそつと扉を閉めた。

サラはシユタールのところでも受けなかった、激しい衝撃を今受けていた。今知ったのだ！ 家族中のあらゆる人々が、自分に対して“秘密”と苛立ちを抱いていたという事を！

サラは台所に戻ると、今食べたプディングを吐きそうになりながらも、声を押し殺して泣いた。自分の今の幸せが、あらゆる人間の犠牲の上に成り立っていたという事を、今悟ったのだ。

いや、本当は既にうすうす感付いていたのかも知れない。それなのに、その問題と疑問に直視しなかったただけなのかも……。

「ジェームズ……」とサラは呼びかけた。「今分かったわ。わたしがなぜあなたに惹かれてしまったか。わたしもあなたも、本当に愛されたことはなく、そして居場所が無かったからなのね。目には見えないけれど、互いの共通の“絆”が、わたし達を結び付けていたのだわ。あなたを疑っていたわたしは、やっぱり本当の大馬鹿者だわね……。

あなたが父に対して、真実の感謝を持つはずが無いもの。だって、父はあなたを愛していなかった。憎んでいたのよ！ でも、見栄であなたの保証人にならざるを得なかった。ただそれだけだった。父の憎しみはあなたには分かっていたはず。だから……。

ああ、ジェームズ！ あなたに会いたい！ 会って、お互いに何もかも告白しよう！ そしてお互いに理解しあうのよ……心から」

サラは決心すると、やっと気持ちが平安に満たされるのを感じた。そしてボンネットを被りなおして一旦外に出ると、表玄関のチャイムを鳴らした。

「あら、サラ、帰ったの？ 楽しかった？」

中に入るとオーウェル夫人は何事もなかったかのように、ニッコリと笑いかける。

「ベス姉さんが来ているわ」

「そう？」

ベスはカウチから身を起こすと、急いで妹の所に行き、両手を取った。そしてしげしげとサラを見つめながら言いかけた。

「まあ、すっかり大きくなって！ それに、女らしく可愛くなったわね！」

そしてサラは、ベスの頬に冷たいキスを返した。

その晩、サラはジエームズへの返事を書いた。

『Jへ

是非又会いたい。どこかへ連れて行って、わたしを。切に連絡請う。

あなたを永遠に愛する

Sより  
』



## 愛の嵐く遺跡にて 1

愛の嵐く遺跡にて

1

ジェームズはサラからの返事を読んだ。

『どこかへ連れて行って』と言う言葉が、甘い棘のように自分の胸に刺さっていた。同じように、ジェームズもまた、この忌まわしい場所から逃れようとしていたからだ。二人の思いは全く一致している！ この不思議な絆は、もう誰にも邪魔されないだろう。

二人にとっては長い月日だったが、会えたのはたった数回……けれどもそれで充分だ。もう過去の憎悪や恨みを後ろに置いて、二人で新たな出発をするべき時がやって来たのかもしれない。

ジェームズは、シュタールから借りていた両親の負債の全てを返済した。オーウェル校長からの“借り”は返した。もうこの場所に縛られることもなくなったのだ。あとは、ギルフォード家にサヨナラを告げれば良いだけの身になった。

けれども、三つの懸念がジェームズを未だに、このドーセットに縛り付けている。妹のメアリー、親友のボブ、そして誰よりも愛しいサラ……。

サラの気持ちがかかった以上、もうサラとは離れられない自分を感じていた。自分を一番理解してくれ、そして無償の愛で包んでくれる存在……それが、あのチビで丸い眼鏡を掛けた、イングリッシュのサラだ。

けれども彼女の存在は、まるで暗い一筋の道のたった一つの灯りのようだった。サラが笑うとき、ジェームズの心は幸福に満たされ、サラが泣く時、世界で最も抱き締めたいと思う。サラの不自由な目

も、今では自分だけを見てくれるのならば、それはもうそれだけで充分なのだった。

後はサラとどこでどのようにして暮らすのか、という事だけだった。

ジェームズは新聞を読みながら、どこかで良い仕事がないかを探した。ドーセットやリトルウッドから遠く離れている場所なら、何処でも良かったのだ。けれども、そんなに良い話はなかなかこの時代には無い。

何よりもジェームズは小学校しか出ていなかったし、親類達は既に縁を切っていた。読み書きは出来るものの、あとは手に何の職も無い。力はあるが、それほど頑健でもない。サラを一生守り通す自信が、まだジェームズには無かった。

だからと言って、このまま手を拱いている内に、二人の間がばれては、元も子も無くなる。ジェームズはサラを失うということだけは耐えられなかった。生きてはいけないほどに。

どうしよう……と思う内に日々は過ぎて行った。ジェームズは何とかしてサラともう一度会って、二人で将来を決めなければならない。二人はそつと、そして何度か短い手紙を交わしていた。

そして全てが整った時、ジェームズは妹メアリーからの衝撃的な手紙を受け取ったのだ。

☐

A p r

i l 8 , 1 8 8 9

親愛なるお兄様

お元気でしょうか？

もう1年以上もお兄様からの便りはありません。けれども折に触れ、風の便りに元気にしていらっしゃるとのこと、安心致しております。もう4月に入り、すっかり春めいてきましたが、時折春の嵐が雹と

共にやってきます。そしてわたしの修道院での生活も、あと2ヵ月余りとなりました。

わたしは決心しました。長い間眠れぬ夜を過し、昼は昼で塾考し、自問自答を繰り返し、何がわたしにとって最善の道なのかを考え、そしてやっと結論に達したのです。

わたしは尼僧になります。けれどもこれは決してお兄様の足手まといになることを嫌った訳でも、自分を犠牲にすることに決めた訳でもありません。

わたしは子供が好きで、孤児達を世話することはわたしの希望ですし、修道院に自分が合っていると思ったからに他なりません。2、3あった家庭教師の口はずっと北の方の淋しい地域が、或いはコーンウォールでしたし、あとは小間使いでしか道はありませんでした。

ですから、わたしは決心したのです。5月に誓願式を行って、アベリストウイスの聖ペテロ修道院付属の孤児院に赴くことになりました。そしていつの日か、立派な尼僧となってお兄様に会いに行くつもりです。

例えこの手紙をお兄様が読まれなくても構いません。けれどもわたしに対するお兄様の愛情だけは枯れていないと信じ、又お祈り申し上げます。

いずれにせよ、わたし達兄妹にはこういう道しか残っては居なかったのですね。お兄様は、ある事によって学問の道を閉ざされ、断念せざるを得なかったし、又わたしも世俗の幸福を捨てざるを得ないということは。不条理ですが、これも運命なのでしょう。

お兄様のお幸せと健康を、いつも聖母様にお祈りしております。

心を込めて

メアリー

ジェームズは愕然とした。自分が長い間放っておいた妹は、絶望の余り、尼僧になろうとしている……そうであるとしか考えられなかった。

川に流してしまった妹からの多くの手紙、その紙片が今ではジェームズの最大の後悔となつて行く。

けれども決して真実を語つてはならないのだ、例え愛しい妹に対しても。妹を置き去りにして自分達だけ逃げ出すことは出来ない。さりとてドリューが本当にメアリーと結婚するかどうか、又メアリーが素直に兄である自分の意見を聞くと云う保証も無かった。

けれどもジェームズは、逃げる前にメアリーの行く末だけには責任があつたのだ。

すぐに逃避できる運命ならば、こんなにた易いものは無い。けれども得てして、運命は自分に足枷を掛けるものなのだろう。

ジェームズは決心すると、重いペンを取った……。

1889年4

月12日

親愛なるメアリー

この手紙を書きながら、僕の手は震えています、心と同じように。どうか汚い字を許して欲しい、僕の妹よ。字だけではなく、長い沈黙もまた許して欲しい。

僕はお前のことをひと時も忘れた事は無かった。けれども、自分の中にある穢れや醜さが、清らかなお前に届き、又見透かされることを恐れたのだ。端からこんな妙なことを書く兄を、許して欲しい。

この年月口には言い表すことの出来ない程のおぞましさの中に僕は居て、そしてお前の便りを拒んだのだ。けれども、言い訳のようだが、お前と一緒に暮らすことが僕の夢だった。けれども……けれども……」

そこでジェームズのペンのはたと止まった。苦い涙がじんわりと浮かんだが、気を取り直したジェームズは静かにそのあとを続けた。

「ここに住んで分かったことは、ここがお前にとって如何に過酷な場所であるかという事だったよ、妹よ。つまりお前はここに居るべきではないのだ。

お前は清らかで初心で、そして美しい。そのような娘がここでのように扱われているか、僕は何年にも渡って垣間見てきた。ある娘は病気になって捨てられ、ある娘は当主の子供を宿してやはり捨てられた。今はどこをどうさ迷っているのかさえ、分からない。

けれども彼女達には少なくとも戻る実家があったが、お前にはもう帰る所は無い。そして一番問題なのは、僕はお前を守ることが出来ないという事なのだ。僕はいつも外におり、お屋敷には許可がないと入れないのだ。

そして何よりも辛いのは、僕はここでは取るに足らない弱い存在でしかなく、ただ罰として黙って殴られるか、食事を抜かれるかしかないのだから。僕には何一つ抵抗も出来なければ、何者をも守れないのだ。

その上、僕は更にもっと危ないことをしようとしている……。それはお前にすら話せないことなのだが、信じてくれ。僕がやろうとしていることは、犯罪ではなく、それは愛から出ているのだという事を。

いや、そのことは……そのことは、お前とは何の関係も無いことなのだろう。

けれども一つだけ最も良いと思われる提案があるのだ。尼僧になって一生を神に捧げるのもいいが、けれども別の生き方として、僕の信頼する友人の一人と結婚する気は無いだろうか？ 彼はドーセツトの石工で、健康で誠実で力持ちだ。そして何よりも“全うな”人間なのだ。

これを読むお前が不快になるだろうということも、僕は理解している。お前が見ず知らずの若者と結婚するのを躊躇うだろうとは想像できるが、けれどもこれがお前の兄としての精一杯の願いなのだ。そしてこれこそ、お前が幸せになる唯一の道だと思っているし、そう確信している。

もう僕にはこれだけしか言えない……。

同封してあるお金は、お前の好きなものを買うか、何かの準備金にして欲しい。それがどのような報酬のお金であれ、お前によって

清められるだろう。

最後に、今まで育ててくれたシスター・ルースに宜しく。そして僕を許してくれ。

いつまでも、そして今もお前の幸福を祈っている。

敬具

ジェームズ

ㇿ

けれどもメアリーからは、何の返事も来なかった。

「おい、ジェームズ……ボブがいよいよ危なくなっただぜ。もう危篤状態だそうだ。あと数日つてところらしい。明日俺ニッキーと、ボブのところに行き付いているけど、お前どうする？」

パブ『黒猫荘』で、ドリユーがジェームズに耳打ちした。

「えー？ それは……」

ジェームズは絶句した。いよいよ来るものが来たか、という悲痛な思いが胸をふさいだ。が、一瞬のちには別のことをワクワクと思う自分が居る。

「明日？ 26日だったか……25日？」

「明日は25日の木曜日（＊正確に1889年4月25日は木曜日です・日本では明治22年になります）じゃないか！ もうっ！ お前最近心ここに非ずって感じたぜ。メアリーから返事が来ないからだろ？」

ドリユーはわざと豪快に黒ビールを飲み干すと、ジェームズの背中を叩いた。

「彼女には彼女の考えつてものがあるのさ。所詮俺のような石工の相手にはなりたくないんだろ。ま、俺達、身勝手だもんな、こんなご都合主義はさ」

ドリューは淋しそうに微笑みかけた。

「で、どうする？」

「メアリーのことはもういいんだ。俺が悪かったよ、ドリュー。考えたら、俺のような兄の言うことなんか、信用するはずがないよな。けれども明日のことは……それはメアリーとは関係が無いんだ。明日は俺、仕事が忙しくてさあ。夕方遅くなら何とか行けそうだけど……」

ジェームズは心ならずも大嘘をついた。

「ん、じゃあ、待つてるからな。仕事終わったらすぐ来いよ！」

ドリューの視線に送られて『山猫荘』から出た途端、暗い夜道を歩きながらジェームズの心は複雑に揺れていた。

明日はサラと会う日なのだ。それもサラが用意周到に考え出した計画で、この日しか会えるチャンスはなかった。ジェームズは、恋人と親友を秤にかけている自分の姿にゾツとしたが、それでいてサラと会うことだけを念頭においている。それは彼の希望であり、そして命だった。

ボブには最後まで、嘘を突き通そう。それがせめてもの、親友ボブに対する友情だと思った。ボブはジェームズがサラと別れたと信じているのだ。ジェームズはメアリーに手紙を書き、それが例え失敗したとしても、妙にすつきりとした気持ちになっていた。

明日サラに会える！ それだけがジェームズの胸を暖かくした。

春の風がジェームズの暗褐色の髪を優しく撫でた。



サラは自分で自分が分からなくなった。ジェームズに会うためなら嘘を平気で付き、抜け目無くやって行く自分である。今はもうサラの中には、家族よりもジェームズしかなかった。愛はサラを盲目にしてしまうのだ。

猜疑心の強いエレインが暫く実家に戻っており、料理番のお婆さんと母を誤魔化すことは簡単だった。

実は毎週出席しているリトルウッドの教会の『婦人の為の聖書講座』は、牧師の都合で駄目になったのだ。けれども知っている者は、ここドーセットには誰も居ないはずだ。

その日の朝、サラは秘かにランチを二人分詰め込んだバスケットを持つと、下働きの聾啞の下男のチャーリーに、いつものようにドーセットの外れの、乗合馬車の駅まで送ってもらった。そしてチャーリーが居なくなると、サラはリトルウッドとは反対の方向に向かって林の中に入り、向こう側の街道に出た。まだ幾分肌寒かったものの、この日は珍しく良いお天気だった。

サラは街道に突っ立つと、ジェームズが言えなくても出奔出来る心の準備をしていた。そして何がしかのお金も持って来ていた。サラは本気だったのだ。例え今日ジェームズが「俺と行こう！」と言ったとしても、決して慌てたり躊躇しないように。

やがて人っ子一人居ない田舎の街道に、一台の荷馬車が疾風のようにやって来て、あっという間にサラを乗せて走り去った。

御者席の荷台の上で、二人は素早く一瞬キスを交わした。ジェームズが真剣に手綱を握っていなければ、サラは彼に抱きつく所だった。

た。けれどもそれは、もっと先に行つてからだ。

「この日が来るまで、長くて長くて仕方なかった。眠れなかったの！　もっと早く会いたかったわ、ジェームズ！」

荷馬車の音がうるさくて、サラは大声を張り上げなければならなかった。

「でも良く来たね、サラ！　君は大胆な女性だな！」とジェームズも負けじと、がなる。

「手紙、もう来ないかと思った！　でも、君は書いてくれた。嬉しかったよ！　天にも昇るようだった！」

「ごめんなさい。もっと早く書くべきだったわ！　でも色々あったの……」

最後のほうの声が小さくなり、ジェームズは振り返った。

「え？」

「いいえ、あとで何もかも話すわ。だから」

「俺も話すことがあるんだ」

そして再び二人は今度はもっと深いキスをした。

「愛してるわ、ジェームズ！」

「手紙の言葉、信用していいんだね」

「もちろんよ！」

「俺も君を愛している。一生、離したくないんだ！」

サラはこの言葉には一切偽りが無いことを、完璧に悟った。そして幸福感に包まれて、そっと腕をジェームズの腰に回した。彼に抱かれない！　その思いは、益々強くなっていくのだ。サラはもうネンネのお嬢様でもなく、初心なだけの娘でもなかった。そして恋心は、サラを綺麗な娘へと変化させていた。

「どこに行くの？」

「とても良い所。そして誰も居ない場所。俺達だけの所なのさ」

「まるで天国のような所？」

「そう！ でも、花園はないよ」

「今はラッパ水仙が咲いているわね、きっとそこは」

「さあね」

「ランチを持ってきたのよ。時間は一杯あるわ！」

サラの顔は喜びに輝いていた。今までの白日のもとにさらけ出された秘密を知った今でも、ジェームズに対するサラの心は変わらないばかりか、彼と居るとその全てを忘れ去ることが出来るのだ。

けれどもふと『あんなブスを好きになる男が居るの！？』と叫んだベス姉さんの言葉が頭をよぎった。

「ジェームズ！ わたしって醜い？」

「何だって！？ 何？」と騒音で聞き取れないジェームズは叫んだ。

「わたし・醜い・女の子・なんでしょ！？」

サラがジェームズの耳元で、単語を叫びかけると、ジェームズは馬に鞭入れながら答えた。

「何言っているんだい！？ 馬鹿なことを！」

「でも、ベス姉さんはそう言っていたわ、わたしのことを！」

ジェームはかなり遠くまで来たことを確かめると、少し荷馬車の速度を緩めた。そして直ぐ隣のサラを愛しそうに見つめながら、言いかけた。

「君の姉さんはまるで分かつちやいないね。君の中の素晴らしさ、可愛らしさ、純真さ、そういうことが見えてはいないらしい。君がそうでなければ、なぜ俺が君を好きになったのか、その姉さんに言いたいよ」

「でも……」

「自分で、醜いなんてそんな言い方はやめたほうがいいよ。むしろ俺の方がもっと醜いんだ」

「あなたの頬の傷は、でも大分良くなっているわ」

「頬の傷じゃない。それに、まだ見せてはいないが、肉体に烙印を押されたような火傷の痕の事でもない。俺の心が一番醜かったんだと思う。今となればね」

「あなたがどんな姿であろうと、わたしにとってはあなたは一番ステキなのよ」

ジェームズはただ苦笑しただけだった。彼は早く目的地に着こうと、焦っていたのだ。そこはドーセットからは、かなり遠いローマ時代の遺跡のある場所だった。

ジェームズが、以前からサラを連れて行きたいと願っていたローマ時代の遺跡に着いたのは、ドーセットから馬車で90分は経っていた。切り立った海岸線の断崖絶壁の側にある、崩れかけた遺跡の周りには、サラを出迎えるかのように黄色のラッパ水仙が咲き乱れていた。

長い年月、風雨にさらされた遺跡は、ほとんど原型を留めていず、何かの要塞か、もしかすると城壁かも知れない。どちらにせよ、遺跡の石はいかにも古く、苔むしていた。

「ここだよ、サラ」とジェームズは、海からの風に髪をなびかせながら、サラに振り返ると優しく言った。

「まあ、ステキ！……月並みな言い方だけど、そう言うほかないわね。水仙も綺麗！　ありがとう、ジェームズ。こんなに静かで美しい場所があったなんて！」

「少し侘しいけどね」

「そんなことないわ。わたし達に相応しい場所よ」

ジェームズは、先に降りると、サラを両手で抱き寄せて降ろした。サラは軽い。そしてしなやかな肢体だ。

「サラ……」

そう言い掛けると、ジェームズは長い間待っていた口付けを、サラの唇に重ねた。サラもそれに応えるように、情熱的な口付けを返した。二人は飽きることなく、口付けを続ける。

やっと離すと、サラはジェームズの胸に顔を埋めた。

「この日を待っていたのよ、ジェームズ。この日を。誰も居ない、

二人だけのこの日を」

「俺も……俺も待っていた。君と俺しかない世界を」

ジェームズは荷馬車を止め、手綱を遺跡の中の大石にくくりつけると、サラの手を引いて中に入った。ほとんど崩れかけた遺跡には、少しばかりの屋根しかなく、片方の壁は無かった。そこからは、遠くの水平線が見渡せた。

「ここは風が強いんだよ。海からの風が。先祖達が建てたんだろうな、ここを」

「要塞みたいね。わたしたちの先祖が来る前に作ったのね」

「そうだね」と言いながら、ジェームズは近くの石に腰掛けた。

「イングリッド人は多分ほとんど知らないし、考古学者以外は知ろうともしないだろ？ けれどもそれが俺達には都合なんだ。俺達二人だけになれる場所だから。誰も俺達を見ていないし、邪魔もしない。一度は君をここに連れて来たかったんだ」

サラはぐるりと好奇心一杯に見回すと、それからやっとジェームズの隣に座った。

「良い場所だわ」

サラがそうつぶやくと、ジェームズは己れの情熱を抑えきれずに、サラを抱き締めた。

「君に会いたかった。君から手紙が無い日々は、まさに地獄だったんだ。不安に苛まれ、愛しているのに、でも疑うっていう、そんな日々で……。矛盾しているだろ？」

「矛盾だなんて！ わたしもそうだったのよ。今だってとても幸福なのに、でもとても不安なの。将来を考えるたびに、いつも自分が分からなくなってしまう。全てが……こういう平安に包まれているといいのに。今のうちに」

二人はじつと見つめ合った。サラはジェームズのアメジストのよ

うな瞳を。そしてジェームズは愛と純真さに真摯に輝く、サラの瞳を。

ジェームズは邪魔なサラのボンネットと眼鏡を取り、そっと石の上に置いた。そしてジェームズはサラの身体をそっと持ち上げると、直ぐ下の草の褥に横たえた。

サラの直ぐ上に近づくジェームズの髪が、風にそよいで行く。至福のひと時が訪れ、サラの瞳には涙が宿った。

「サラ……」

ジェームズはそう呼びかけながら、サラの頬や髪を撫で、それから首筋に口付けをし続けた。身体の奥底からの官能の嵐が、サラを覆い尽くす。

「わたしを奪って、ジェームズ……」とサラも小声で言いかける。

「わたし、あなたに……」

「サラ、いいの？」

うん、とサラは頷いた。そして声にならない声で答えた。「いいわ」

ジェームズは慎重に、そして限らない優しさを持って、サラのブラウスのボタンを外した。一つ一つ外すたびに、サラの肌が紅潮し、そして待ちきれないほどの官能の嵐が押し寄せる。

遂にサラの上半身が露わになっても、サラは何の羞恥心も感じなかった。愛する人に抱かれるというのは、こういう感覚なのだ、とサラは今知った。

ジェームズはサラの乳首を優しく吸い、それからコルセットを外すと、サラから長いスカートを外した。ホックが取れると、サラのまだ男を知らない下半身が露わになった。サラの裸体は、重い衣装で隠されているよりも、もっと綺麗でほっそりとしている。

「美しい……」とジェームズは囁いた。「いいの？ 本当に？」

「ええ、ジェームズ。わたし、あなたが欲しいの。あなただけの者

になりたい……」

こういう世間的には淫らな言い方をして、思わずサラは顔を赤らめたが、けれども裸体を全て晒していると言うのに、何の恥辱も感じないのだ。むしろ、愛するジェームズに見られているという意識は、震えが来るほどの幸福感に満たされる。

「愛するって、こういうことなのね」とサラは誰にともなく言った。ふと見上げると、ジェームズ自身もシャツを脱ぎ、そしてズボンを下している。彼の肉体の中でも、肩の醜い火傷の痕が見えてハツとしたが、次にはもう情熱の嵐の中で、自分が自分で無くなって行く感覚と、理性をかなぐり捨てた“女”としての、己れの姿しかなかった。

やがてジェームズが自分の下肢を広げて中に入っていく時、少しの痛みを感じたが、けれどもそれはジェームズの愛撫と、息使いでかき消された。肌寒いというのに、二人は汗だった。

「俺に全てを捧げてくれるなんて……ああ、サラ！」

二人は抱き締め合い、じゃれ合い、そして肌と肌を重ねる悦びに浸されていた。長い間の苦悩は全て消え去り、世界には二人だけが存在しないかのように……。

「ああっ、ジェームズ！ ジェームズ……」

「サラ、愛している。これからずっと俺の側に……」

ジェームズは最後まで言えなかった。例えようもない悦楽と至福の中で、遂にジェームズとサラは一体となったのだ。



互いに裸の身体をもつれ合いながら、至福の時間を過した後、半分ほど衣服で裸体を隠したままの乱れた姿で、なおも二人は二度と離れないかのように抱き合っていた。けれども海岸からの風は、情熱の残り香も吹き飛ばし、幾分寒さを感じてやっとな人は起き上がった。

「ジェームズ……わたし、幸福だわ」

「でも、いつか別れが来るんじゃないかと……」

「なぜそれを今言うの？ わたしを一人にして、どこかへ行ってしまうの、ジェームズ？」

「君を一人残して行くことなんて、絶対に出来るはずがないじゃないか！ けれども……」

ジェームズは言いよどむ。

「どこへ行けばいいのだろうか？ 君は少なくとも、今の境遇では食うには困らない生活だ。俺とどこかへ逃げたとしても、生活はきつと楽ではないよ。それに住み慣れた故郷や両親を捨てられる？ 俺の為に」

「出来るわ。ジェームズ、わたしをどこかへ連れて行ってちょうだい！ ここにはもう居たくないの！ 居たくない！ 居ることが出来ないのよ！」

サラは哀しみと激情に駆られて叫んだ。ジェームズはそういうサラをしつかりと抱きとめ、それから優しく背中を撫でた。

「なぜ、そんなことを？ そうまでする何かが君に起こったの？」  
サラは涙ぐみながら頷くと、ベスが母親と言いつ争っていた顛末を、

途切れ途切れに話し出した。そして父のオーウェル氏がバロウズ町長から借りていたという膨大な借金のことも語った。

その間ジェームズは口を差し挟まずに黙って聞いていたが、もしもサラの目が良かったとしたら、ジェームズの顔に苦渋の表情が浮かんだのに気付いたことだろう。けれども幸か不幸か、眼鏡を外したサラには、ジェームズの顔がおぼろげにしか見えないのだ。その上迂闊にも、サラは今自分のことしか念頭に無かった。

「そうか……君は知ってしまったんだね」と初めてジェームズがポツリと言った。

「ええ、そう。秘密はそれだけじゃないのかもしれないけれど、少なくともわたしの存在価値があそこでは全く無く、そして家族全員に重荷を負わせていたのだという事が分かったわ。馬鹿ね、わたし今までそのことに気づかなかつただなんて」

「でも彼らは心の底では君を愛し、許していると思うよ」

「例えそうでも、もうわたしはあそこには居られないの。厄介者なんだわ。それにもう家族の秘密と真実の状況を垣間見たわたしにとって、あそこは居心地の悪い息の詰まるような場所ではない。いいえ、そうではなく……いい加減、両親に頼り切っている自分に嫌気がさしたのかもしれないわ。世の荒波にもまれることも無く、世間を知らない自分に対して」

サラは自分の乱れた頭をジェームズの肩に載せた。

「もう、あそこを飛び出すときが来たのだと思う。誰かと……独立すべきだと。結婚しましょう、ジェームズ！」

「もしも出来れば……」とジェームズは急に現実を見据えながら、控えめに言った。「出来ればそうしたい！　だが、誰が俺達の結婚を許すというんだ！？　誰も許すはずが無い！　俺が出来ることと言ったら、君を連れてどこかへ逃げ出すだけだ。でもそつだとすると、君は限りなく不幸になってしまふよ」

「でもわたしはあなたを愛してるのよ。全てを捧げてもいいの。何も後悔しないわ」

「愛だけで、物事が上手く行くといいんだが」

「なぜ、躊躇うの？ 世界は広くて、ここだけじゃないのよ。ロンドンを知っている？」

「ロンドン……？」とジェームズは鸚鵡返しに言った。「ロンドンか……考えもなかったな。行った事もないし」

「そう、ロンドン。あそこは広くて、そして色々な人達が居たわ。街を歩くと、アフリカから来た黒い人達、そして白人だけど訳の分からない言葉を喋る北国の人達、植民地インドの人達、そして小柄なアジア人や辮髪のシナ人達、その他一杯……。本当に様々な人種が住んでいたわ。」

そんな街では、あなたのことをどこから来たなどと問う人も、ウエルズ人だからと排斥する人も居ないし、何ら卑下する必要はないのよ。仕事だって探せばあると思うの。何しろ大都会なんだから！ 見せてあげたいくらいよ、ジェームズ！

わたしは何も贅沢は言わない。二人でひっそりとロンドンの片隅で暮らせばいいだけ。あなたと一緒に居ることだけが、わたしの“幸せ”なのよ。食べられるだけでいい。わたしも働くわ。それが、それが許されないことなのかしら、ジェームズ？」

ジェームズは応えなかった。又しても様々な不安が渦を巻き、サラのように単純に思考する事など不可能だったからだ。けれどもただ甘い一つのヴィジョンだけが、ジェームズを明るくした。そしてこの小さな狭い世界を捨てて、広い大都会に行く自分を想像してみた。

「……あり得ない」

「なぜ？」

「そんなこと、不可能だよ、サラ」

「不可能じゃないわ！ カーデイフから汽車に飛び乗れば、もう終着駅はロンドンなのよ！」

「きつと誰かが追って来る！ いや、そうじゃなく……俺には信じられないんだ。自由とそして君の両方が手に入るなんて事がさ！ そんな幸福が簡単に手に入るはずが無い……無いんだ……」

ジェームズの声は沈みこんだ。暫く風の音だけがし、遺跡の中には沈黙が漂った。ジェームズはシャツを着込み、そして自分のジャケットをサラの肩に掛けた。

「じゃあ、ここで一生慄いて暮らすの！？ いつまでもわたし達のこと、秘密にしておくの？ そんなの無理よ！ いつかはばれるわ」

「君は……全てを捨て去ることが出来る？ サラ」

「出来るわ！ あなたが側に居るのなら」

サラはキツパリと宣言した。ジェームズは驚きの眼差しで、サラを見つめた。一体この小柄なサラの中の何が、こんなにも彼女を突き動かしているのだろうか？

「君のように、勇気のある女の子は初めてだ」とジェームズは微笑んだ。

「あなたと別れることだけは絶対に嫌なの。勇気があるわけじゃない。もう“別れ”のことなど、口に出すのも嫌なのよ。ロンドンではきつと食べるだけで必死で、別れのことなど口にも出来ないはずよ。けれどもそれは楽しい労苦であり、報われない今の日々とは違うはず。そして、それは、ジェームズ、あなたを数々の呪縛から開放してくれるわ！」

ジェームズは振り返り、サラをじつと見つめた。そして答えた。

「ロンドンに行こう！」



二人は危険な賭けに出た。

服を着込み、ランチを食べながら、様々なことを話し合った。サラは今までの経緯を、そしてジェームズは胸に潜めていた数々の辛い出来事を。唯一つを除いては……。そしてこれだけは一致した。二人してロンドンに出奔しよう！

「けれどもそれはとても危険な賭けだね」

ジェームズはサンドイッチを食べる手を止め、じつと水平線の向こうを見つめた。そしてまだ見ぬ未知の場所と未来を。  
「だけど、それは魅力的な賭けでもあるな」

ジェームズの眼差しがふと和み、サラを見下ろした。サラもその目を見上げて、微笑んだ。先程のジェームズとの甘い陶酔が甦ってくるようだった。

「二人して、ロンドンに行こう！」

「ええ、行きましょう！」

「そこで全ての過去を消し去り、そして出発しよう！」

「全てを忘れましょう。ね？」

二人は未知の冒険に身を震わせた。

「ここで、この遺跡で古代の神々の前で、誓いを立てよう。俺達は結婚すると」

「ええ、いいわ！」

サラは立ち上がった。そして厳かに、身を堅くした。ジェームズも立ち上がり、サラのスカートに付いている泥を叩くと、自分もしやんとした。そしてジェームズはサラの両手を取った。

「俺は、ジェームズ・C・エドワーズは誓います。サラ・オーウェルと結婚し、そして病める時も健やかなる時も、彼女を永遠に愛し慈しむと」

「わたし、サラ・オーウェルは誓います。病める時も健やかなる時も、永遠にジェームズ・C・エドワーズの妻として夫を支えることを」

午後の温かい風がそよぎ、二人の髪を撫でた。静寂だけがあったが、けれども二人は何かを聞いたような気がした。二人はしっかりと手を繋いだまま、唇を重ねた。情欲ではなく、霊的な愛によって、そして二人は霊的にも、結ばれたのだ。

「俺達は誓った」

「もう離れ離れにはならないわね」

「俺の愛しい花嫁……」とジェームズは言い掛けたが、急に胸苦しさにと襲われた。暗澹たる黒雲が、空を覆っているような気分になったのだ。けれども外は限りなく良い天気だというのに。この胸騒ぎを、ジェームズはサラには言わないでおこうと思った。

「もう、帰らないと……」

「ええ」

そう互いに言いながらも、再び彼らはどちらともなく遺跡の中に横たわり、貪るように愛し合った。サラは反り返り、ジェームズを受け入れながら、二度と会えないのではないかという不安を払拭することが出来なかった。

お互いに暗雲を抱えたまま、けれども陶醉の中に漂い愛し合っているときだけは、世界には二人しか存在していなかった。

「ああ、離れたくない！」

「わたしもよ、ジェームズ！」

「けれども、もう時間だ。無慈悲な時が過ぎ去って行く」

二人はやつとはなれると、渋々帰り支度を始めた。けれども二人は遺跡の石の上を飛び移り、互いに笑い合った。未来が少しだけ薔薇色になった。けれどもそれは、神が二人にくれた、最後の贈りものに過ぎなかったのだ……。

幸福な時は瞬く間に過ぎ去り、荷馬車の上でも二人はひっきりなしに喋りあった。駆け落ちは、一週間後の木曜日、5月1日と決めた。ジェームズはその日までに、朝一番のカーディフ行き乗合い馬車の予約を取ることにしていた。そして一時間後、サラもまたジェームズの後を追って、カーディフ駅に到着する予定だった。

用意は周到にしなければならず、今日の逢引の余韻を誰にも知られてはならない。

「俺は数々のワルをやったが、今回が一番緊張するよ」

とジェームズはニヤリと笑いながら言う。「粉屋にガラス片を入れたのも、俺とドリユーだったんだ。けれども、ギルフォード家の納屋の火事だけは、俺がやったんじゃない。俺があそこで居眠りしている間に、パチパチと火の粉が上がった。誰が火を付けたか、まだ分からないが大体の見当は付いているよ」

「危なかったわね。でも、その火傷だけで良かったわ。ジェームズ……どうか気を付けてね」「ああ、うまくするよ。俺と君との生活か！　なんて素晴らしいんだろうな！　想像するだけで、幸福感に浸される！」

やがて別れの時がやって来た。例の街道で、サラは降りかかったが、その直前ジェームズと長い口付けを交した。まるで永遠のように……。言葉と言う言葉が全て虚しいものとなり、最後は彼らは黙り込んだ。

ジェームズはサラを荷馬車から、ゆっくりと降ろした。頼り無さそうな、けれども先程まで別人のように激しく愛し合った一人の娘



が、じつとこちらを見上げている。愛しいサラ……。

「じゃ、行くよ。来週……駅で。サラ、愛している！」

ジェームズは自分に全てを捧げようとしている娘にそう言つと、馬に鞭を当てた。荷馬車はやがて疾風のように消え去った。

そしてサラは暫くぼんやりとした後、ドーセットの乗合馬車の駅まで歩き出した。

＊～＊～＊～＊～＊

その日の午前中に、二通の手紙がオーウェル家とギルフォード家に届いていた。字は乱雑で、間違いだらけだったが、意味だけははっきりと読み取れた。

『ジェームズ・エドワーズとサラ・オーエルは 秘かに逢引している  
嘘だと思ったら 問い詰めればいい  
今日 二人が 一緒に どこへ行ったかを』

喪失〜無慈悲な春〜 1

喪失〜無慈悲な春〜

1

「遅かったよ」

ボブの部屋に駆け込むなり、ベッド脇のドリューがさつと振り返り、ジェームズに告げた。その声は、考えられないほど冷淡な響きを有している。夕暮れの朱い光が、小さなベッドの上にある白い布で覆われた顔を照らしていた。

直ぐ側には、“うすのろ”ニッキーとドロシーおばさんがぼんやりと突っ立っている。ジェームズの心臓は凍りつきそうになった。

まさか……まさか、こんなに早く逝ってしまうとは……。

「ボブ……そんな、そんなことって……」

「ボブは俺の手の中で、冷たくなっていった。どんどんどんどん冷たくなっていった……。お前が来るのを朝から待っていたんだ。それなのに、お前はギルフォード邸にも居なかったじゃないか！仕事だなんて、よくぞ言ってくれたよな、ジェームズ！」

お前、お前は……サ、サラ・オーウェルと一緒にだったんだろ？

ボブが身罷りそうな時に、乳繰り合っていたんだろ！？」

ジェームズの足元がグラグラ揺れ、それから世界が一瞬別次元になったような気がした。その場で死んでもおかしくないほど、ジェームズは衝撃を受けていた。

「何か言えよ！ 黙っているって事は、そうだったんだろ、おい！」  
ドリューの怒鳴り声にも、ジェームズは一言も弁解できなかった。  
なぜ今頃ばれてしまったか、ということと、ボブが自分が居ない間

にあっけなく死んでしまったことの両方が、ジェームズを完璧に打ちのめしていたからだ。

自分とサラが、遺跡で愛し合っていた頃、ボブは亡くなってしまった！ これは怖ろしい罰なのだろうか！？ そんなはずはない、そんなはずは……。

けれどもボブ・ハーシーは既に冷たくなっており、その薄幸の24歳の短い生涯を終えたのだけは確かだった。

「ボ、ボブ……赦してくれ……」

「今更何言ってんだよ、お前は！ ボブは赦しても、俺はおめえを許さないからな！」

「ジェームズ、あんた、サラとのことは本当なのっ！？」

とドロシーおばさんも厳しい声音で問い詰めた。ニッキーだけがどうしていいか分からず、オロオロしていた。

「そのことは……あとで話します」

それまでが限度だった。ジェームズはボブの遺骸に向かって、号泣し始めた。けれどもドリュウの怒りは収まらず、ジェームズの腕を乱暴に取ると、その怪力でボブから引き離れた。

「お前のような破廉恥な奴は、こいつの為に泣くのもおぞましいや！ とつとと出て行きやがれ！ そして葬式にも来るなよ！ こいつの墓石はな、俺が彫ってやる！ お前みたいな卑怯な奴には葬式にも出て欲しくないよ！」

例え何を言っても、今は言い訳にしか聞こえないだろう。なぜサラとの逢瀬がばれてしまったのか、その時にはジェームズは知らなかったが、ドリュウの怒りが本気であるのだけは分かった。

「出て行け！ 俺はお前を殴りたくない。今までは確かに友達だったからさ。だが、今この時から違う。お前とはもう友達でも仲間

でも何でもないや！ 出て行け！ もうお前の顔なんか、二度と見たくない！ 見たくない……」

拳骨を振り上げているドリユーも又、涙で顔をぐしょぐしょにしていた。

「今は出て行った方がいいよ、ジェームズ」とドロシーも言う。「あたし達で、ボブをちゃんと葬ってあげるから。あんたは必要ないさ」

ジェームズは語るべき全ての言葉を失った。そしてボブも失った。何よりも怖ろしいことに、サラをも失うかもしれないという衝撃の為に、何一つ抗う言葉さえなかった。

「済みません……」

そう静かに言うのと、ジェームズは階段を下りた。背後でドリユーの号泣が聞こえた。それはボブを失った悲しみだけではなく、ジェームズをも失った憤りの為だったことに、ジェームズ自身は気付かなかった。それ程彼は打ちのめされていたのだ。

自制心を保とうと無駄な努力をした為に、ジェームズは暗い大通りに出た途端、あらゆる感情がワツと湧き出でて、足元がおぼつかなくなり、それから猛烈な吐き気に見舞われ、その場にしゃがみ込んだ。

冷たい石畳に両手を突くと、ポタポタと涙を落としながら、ジェームズは声を上げずに泣き出した。

済まない、ボブ。ゴメンな、ボブ。何よりも大切な友だったのに、俺はあの時サラを選んでしまったんだ。けれどもそれももう終わりなのかもしれない。俺はお前だけではなく、サラをも失うかもしれないんだ！

けれどもジェームズは甘かった。失うものはそれだけでは無かったのだ。ジェームズはいずれ全てを失うだろう……。

＊　　＊　　＊　　＊　　＊

どこをどう歩いたのか分からないまま、ギルフォード邸の使用人小屋に辿り着くと、フィオーナが素っ気無く告げた。

「お屋敷に行つといで。奥様とジョン様がお待ちよ」

「え、ええ」

「ジェームズ……あんた、本当に大それた事をしちゃったわね。校長先生のお譲様にまで手を掛けるとは」

ジェームズは答えなかった。自分とサラの二人のことなど、誰にも理解してもらえないはずが無いのだ。何を言っても、誰も何も信じないだろう。

ジェームズが空腹のままギルフォード邸に出向くと、一階の居間ではギルフォード夫人とジョンが待ち受けていた。

夫人は無言で、ヒラリと手紙を投げた。ジェームズが拾うと、乱れた字の文章があつた。男だか女だかも分からないが、確かに二人の行動を知り尽くしている人物が告発したらしい。

「それで？　何か言うことはないの？　弁解はしないのね！」

とギルフォード夫人は、感情を全く表さずに尋ねた。

「お前、今日仕事をさぼつて、サラ・オーウェル嬢と会つていたんだな？」

とジョンも畳み掛ける。「なかなかやるじゃないか。だが、あのブスとはね、趣味が悪いな、お前も」

「サラとは会っていました」とジェームズは短く言った。けれども次には、激しい口調が出た。「サラはブスじゃない。彼女に対して、そんなことを言うな！」

ジョンの拳骨が飛んで来て、ジェームズは倒れた。そして倒れながら、今頃サラはどうしているか、不安で胸が締め付けられていた。

更なる殴打の痛みすら感じず、ただひたすらサラの身を案じているうちに、ジェームズは次第に奈落の底に落ちて行く……。

「ただいま！」

幸福の衣をまとい、甘い悦びに包まれながら、サラは玄関から中に入った。すると、父と母がクルリと振り返り、彼女を見据えた。ゾツとする程の怒りと憎しみをたたえた、二対の目と目。少なくともサラにはそう感じた。瞬間的に、サラはその場に凍りついた。

「どうなさったの？」

その声はかすれていた。

「サラ！　こちらにいらつしゃい！」

滅多にないほどのヒステリックな怒りを抑えようと努力して、ブルブル振るえているオーウェル夫人が、冷たく命令した。オーウェル氏はもつと悲しげで、苦渋に満ちた顔をしていた。

ひよつとしたら……？　そんなことって……？　でも、なぜ？  
なぜなの？

サラは思わず持っていた空のバスケットをぎゅっと握り締めると、一歩近付いた。すると信じられないことが起こったのだ。今まで静かにソファに座っていたオーウェル氏が立ち上がると、あつと言う間も無く、サラを激しく平手打ちにした。

生まれて始めて味わう痛みとショックで、彼女の小柄な身体はすつ飛び、眼鏡が床に落ちてそして割れた。

「あなた！　やめてよ！　サラから聞いてからでも遅くは無いわ！　それが真実かどうか」

「わたしは“売女”を育てた覚えは無いぞ！」  
オーウェル氏は興奮して怒鳴り散らした。

「分かっているわ！ でも、サラを殴るなんて！ ね、サラ。今日はどこに行ったの？ 誰と？ あなたがリトルウッドに行かなかったことは知っているのよ！ 今日『聖書講座』が無かったことも、先程リトルウッドまで馬車で行って来て確かめたわ。」

チャーリーに聞くと、彼は手で教えてくれた。あなたが違う方向へと歩いていったと！ どうなの、サラ！ 返事をして！ 答えて！ どこで誰と会っていたかを？ どうして、親にそんな大嘘を付いたのよ！」

サラは完璧に理解した。全てが明るみになってしまったのだ。そして全てが……終わった、と。

「なぜそんなことを聞くの？ 知っていたのね……」  
とサラはつぶやいた。

「ジエームズと一緒にだったのね！？」

サラは頷いた。苦い涙が頬を伝って、流れ落ちる。

「あいつは悪魔だ！ 復讐したのだ、このわたしに！ 今頃高笑いしているだろう！ ああ、娘を墮落させてしまったとは！」

「黙っててよ、あなた！」とオーウェル夫人は毅然として叫んだ。

「サラに罪はありませんわ！ サラは騙されたの。そうよ、無垢な魂が汚されただけ。全てはわたしが無用心だったからなのね。もつと気をつければ良かった」

サラは堪らず泣き出し、顔を片手で被った。

「わたし……騙されてはいません。わたしの意志だったんです」

「あなたの意志？ そんなこと……」

「いいえ！ わたし達、愛し合っているんです」

「何と言う愚かしいことを言うの！？ 愛し合っている、ですって！？ “わたし達”？」

オーウェル夫人は絶句した。

「お前はあいつに利用され、弄ばれたただけなんだぞ！ あいつは復



讐を遂げたんだ！ 初心なお前を騙して、復讐を、我々に！ あいつにとつてみれば、世間知らずの小娘のお前を手玉に取るくらい、訳はない。何しろ、淫売と遊び、火を付ける様な奴だからな！」

勘の鋭いサラはなぜかハツとし、勝ち誇つたような父親を、ぼんやりとしか見えない瞳で凝視した。

「復讐？ 復讐って何なの？ お父様が彼の借金の保証人になつたつて事だけじゃないのね！ 何か、もつとあるんだわ！ そうよ！ 何か恨みを買つていたのね！」

今度は両親が驚愕する番だつた。まだほんのネンネと思つていた娘が、恐れることも無くそう吐いたのだ。

オーウェル氏の納まりかけていた憤怒にメラメラと火が付き、再び彼は愛娘の顔面に激しい平手を加えたので、今度こそサラは床に倒れ伏した。

「サ、サラ！ 大丈夫なの！？ ああ、神様！ 何とかして下さいませ！ あなたも、もういい加減やめて頂戴！ サラはただ騙されていただけなのに、なぜそんなに殴るのよ！？ 娘を殴り殺す気なのっ！？」

オーウェル夫人は慌てて、サラを抱き起こした。サラはぐったりしながらも、尚もつぶやいた。

「わたし達……愛し合っているの。ただ……それだけなのに……」  
両親の前に倒れている娘は、既に親のコントロールから離れた独立した魂を持つ、大人の娘へと変貌を遂げていた。その上、激しい情熱を秘めた娘へと。

がつくりと首を垂れたサラをかき抱きながら、夫人は絶叫した。

「サラ！ サラー！ 大丈夫なの？ ああ、神様！ い、医者を医者を呼んで来て頂戴！」

オーウェル夫人は狂つたようにサラを揺さぶつた。

オーウェル氏の手元から、手紙の紙片が舞い落ちた。汚い字で、単語だけ並べた、卑屈な字面を持つ手紙が……。

「娘を、娘を殴るなんて……わたしは何てことをしてしまったんだ？ 全て、全てはあいつが悪い……一生呪ってやる。あいつの為にしてやったことは、全て無駄になった……」

医師が飛んできたものの、サラはその日以来、殴られたショックと腰の打ち所が悪く、寝込んだままだった。

そしてジェームズとサラの“事件”は、この淀んだような田舎町のドーセット中の噂になり、広まっていた。小さく狭い社会に住む人々にとって、このスキャンダルは格好の種になった。

町中の人々が、寄るとさわると、ジェームズとサラの、この顛末を、尾ひれを付けながら囁き合っていた。真実はもはや分からなくなり、虚偽と疑いと憎しみと、何よりも二人に対する軽蔑だけが圧倒的に支配していた。二人には味方は誰も居なかった。

“イングランド人の生娘に手を付けた”ジェームズに近寄る者は居らず、サラは“疵物”として、又“淫らな尻軽女”として、あちこちで喧伝された。オーウェル夫人は毎日泣き暮らしているのみだった。

ボブの葬儀は少人数だけで執り行われた。けれどもドリユーは、ジェームズが葬儀に出席するのを拒んだし、納棺の時に絶えず目を光らせて、ジェームズが居たら殴り倒すほどの気構えで居た。

けれどもドリユーの思惑は外れ、ジェームズの姿はどこにも無かった。ボブは淋しい墓地の、更にもっと端っこの方に埋められた。ドリユーは誓った。

「おい、ボブ。俺がいつか立派な墓標を彫ってやるからな……」

その頃、ジェームズは外出すらはばかられるほどの好奇の視線に曝されていたのだ。

ギルフォード家の使用人達も、ジェームズを見かけるとサツとお喋りを止め、急に声を落すと冷たい視線を投げかける。

ジョンに殴られて腫れた顔のまま町に行くと、大人達は勿論のこと、小さな子供達までもがジェームズを甲高い声で罵るか、それとも小石を投げつけるかするのだ。

パブに入ると、ヴィヴィアンは無言のまま、酒を出すだけで、ジェームズに語りかけたり同席をする者は誰も居なかった。

まるで見えないシールドが二重三重に張り巡らされたように、ジェームズの周りには誰一人寄って来なかった。寄って来る者が居たとすれば、それは町のチンピラともぐらいで、彼らはジェームズの近くによると、ペツと唾を吐きかける。そしてこう罵倒するのだ。

「よう、ジェームズ。あの小娘のお味はどうだったかい？」

「イングランド娘と寝た感想は？ ウェールズの女よりも、良かったか？」

それらを聞いたびに、ジェームズは逆上し、彼らに突つかかつては、散々にやられてしまふのだった。ジェームズは、一時の穏やかな表情を取り戻した好青年ではなく、昔のジェームズに逆戻りしたかのように、野良犬のように暴れまわった。

泥だらけ、傷だらけにならながらも、それでも彼は一体どうやって過しているのか自分でも分からないほど、日々を空虚にやり過ごしていた。もはや逃げる所は無く、あるとしたら、天国かそれとも、遠い場所にある暗い炭鉱に行くことぐらいだった。

ジェームズがそうしなかったのには訳がある。

彼は少しでもサラを忘れることが出来ないからだった。サラとはあの遺跡で契つたのだ。そして、互いに神々に誓った。結婚する、と。

けれども聞こえて来るサラの噂もまた、酷いものだった。人格を否定するような悪口雑言の数々、尻軽女、ウェールズ人と情を通じた売女、その他色々……。

「あのサラって子は、もう誰も相手にしないわね」と言う雑談が、ギルフォード邸でも聞こえてきていた。「何しろ、あのジェームズにころつと参つたつて言うじゃない。馬鹿な娘<sup>こ</sup>だわ」

ジェームズはそれを聞くと、木陰に走って行って、猛烈な悔し涙にくれながら木の幹を殴りつけた。サラと自分の関係など、だれが理解出来ると言うのだ！

そしてボブの葬儀の鐘の音を聞きながら、ボブのことを思い、そしてサラを想った。それから誰も居ない冷たいボート・ハウスに突っ伏すと、髪をクシャクシャにしながら、後悔の念に苛まれる。

あの時、躊躇などせずに、そのままカーデイフに馬車で乗り付け、サラの持っていたお金でロンドン行きの汽車に乗れば良かったのだ。無謀そんな計画だったが、今となってはその勢いで出奔した方が良

かった。自分に勇気がなかったばかりに、サラを苦しめ、そして自分も苦しんでいる。

友人とサラを秤にかけた結果、どちらも失った。そしてやっと築き上げてきた、町の人々の信頼も、少しだけ残った友人も失った。多分、噂を聞いて居るはずのメアリーも、もう二度と兄に会う気持ちなど、失せてしまっただろう。

ジェームズは全てを失いつつあった。それでもまだドーセットに留まっているのは、サラにもう一度会いたいため、そして何とかして正式に結婚したためだった。

けれどもサラは父親のオーウェル氏に手酷く殴られて傷を負い、シヨックの余り寝込んでいるというし、噂に寄ると鍵の掛かった一室に閉じ込められているらしい。サラのことを考えると、自分の惨めさも消え、ひたすらサラの身を案じている自分が居るのだった。けれども二人は別々の見えない檻に閉じ込められ、身動き出来ない。そして二人とも一人ぼっちで孤独でそして絶望し、誰も助けてくれる者は居なかった。

ジェームズもサラも、ここではもう“異邦人”であり、安住の地は他所にあったのだ。気付くのが遅すぎた。もう何もかも……。

\* ~ \* ~ \* ~ \* ~ \* ~ \*

春の雨が上がったどんよりとした正午、この間捕まった若い社会主義者達二人の処刑があった。刑場は町外れの墓地の手前で、ジェームズは処刑を見物するということとはとても耐えられずに見に行かなかったが、午後から町に用事があったので、嫌でもそこを通らざるを得なかった。

二人の身柄はカーデイツに送られ、そこで裁判があるはずだと思い込んでいた町の人々は、素早く行われた処刑に一樣に驚いていたが、それでも大勢人々が見物しに来たらしい。人々が思った以上に裁判はあっという間に終わり、拷問されていたらしい二人は、あつけない全てを認めてしまったのだ。けれども二人が本当の意味での“社会主義者”であつたかどうかは分からずじまいだった。とにかく当局は、早く二人を消し去りたかつたのだ。

ジェームズが処刑場に通りがかつた時には、もう2、3人の見物人しか居らず、カラスが数羽、意味も無くブラブラとぶら下がっている処刑者達の肩に止まって、不吉な声で鳴いていた。

あの時は澆刺としていたハンサムな若者の顔は紫色に鬱血し、魂の無いただの死骸と成り果てていた。その姿を見た途端、ジェームズは余りのおぞましさに、荷馬車のその上で吐いた。

数人が振り返った。

「おや、あの女たらしの、愚か者が居るぜ。その内にお前もこういう姿になるぞ。早くどこかへ、行きやがれ！」

「ウェールズの女は、例え淫売でももう相手にはしてくれないぜ、色男さんよ」

ジェームズは黙ったままそこを離れ、刑場のあの囚人達の姿を忘れようと『山猫荘』に入ってしまった。そしてそこでジェームズは前後不覚になるほど、浴びるようにアルコールを流し込んだ。

「サラ……君に……もう一度会いたい……」

ジェームズは、誰一人寄って来ないテーブルの上に突っ伏すと、そうつぶやいていた。



「ジェームズ……」と呼びかける弱々しい声がしたので、ジェームズは半分以上酩酊状態だったが、首をおぼつかなく巡らせた。一体何日間、親しげに自分の名前を呼ばれたことが無かったのだろうか？ 町の人達も、全ての人々が貝になっていたのだ。

「だ、誰……？」

「ジェームズ、お、俺さ、俺。ニッキー」

煙たい淀んだ空気の中に、“うすのろ”ニッキーがボソツと突っ立っていた。ニッキーは、勉強がほとんど出来ず、辛うじて読み書きが出来る程度といったハンディを持つ若者だったが、友人達の中では最も優しい心を持っている純な若者でもあった。

「あ、ニッキーか。何か用？」

「別に、用があるわけじゃないけど。でもなんでそんな口の効き方をするのさ？」

「ああ、ごめんごめん」とジェームズは、ニッキーに向かって、微かに微笑んだ。

「もう友人じゃないかなと、思ってた……」

「そんなことは無いよ、俺は、俺はただ……」

「馬鹿なことを聞いてごめんよ、ニッキー。みんな、何か命令する時しか口を効かないからさ、最近ほ。だから」

「ジェームズ……横に座っていい？」

「ああ、いいとも！ もちろんさ！」

ニッキーはそつとジェームズの横に座った。ジェームズはどつと押し寄せた感情を制御することが出来ずに、片手で口元を覆いなが



ら、泣き出した。

「ジェームズ、何で泣くのさ？　なんか、痩せたみたいだね」

ジェームズは頷くばかりで言葉すら出ず、漏れてくるのはただ嗚咽だけだった。

「泣くなよ、もう。俺……悪かったよ。けど、俺、お前と口効くといけないって親父に止められてて。そんですーっと黙ってたけど、今お前を見ているとき、何か話したくなって」

ニッキーは無邪気に話すと、その太った腕を小刻みに震えているジェームズの肩に置いた。

「ねえ、ジェームズ、聞いていいかい？」

「うん、何でも」

「ジェームズ、あの娘が好きだった？　それとも、今までのようにただ遊んだだけ？　皆はそう言うけど」

「好きだ」とジェームズは涙で濡れた顔をずっと上げて言った。きっぱりと。

「愛している。今もこれからも、ずっと！」

「じゃあ、なぜ最初はあの娘の悪口を言ってたのさ？」

この問いは、辛らつだった。目の前のニッキーに邪氣が無いだけに、尚更ジェームズには堪えた。

「昔は確かに憎んでいた。それはサラのせいではなく、あの糞親父のせいだったんだけど。その上、あの時は俺にとつてサラはただの目の悪い、不細工な女の子にしか見えなかった。彼女の本当の姿を知らなかったからだ。」

けれども、それが……なぜだろう？　とジェームズはふと遠い所を見つめるような目をした。「サラと一緒に居ると心が和み、平安が訪れる。何も怖くなくなり、憎しみすら感じなくなった。俺のくそつたれ人生が輝き始め、初めて周囲が薔薇色に染まって行った」「ふーん」とニッキーは顎に手をやってつぶやいた。二人とも、そ

れが「人を愛していること」に由来するのに気付かなかったのだが。

「それにサラは不細工じゃない。あの眼鏡のせいで、そう見えただけだった。サラの可愛らしさ、純粹さ、大胆さが俺の頑なな心を溶かし、生きていく勇気を与えてくれたんだ」

「でもさ、サラを犯したというのは、本当なんだろう？ サラも、はしたない女だと皆噂しているよ」

「嘘だよ、そんなのは！」

ジエームズはテーブルをドンと叩いた。それから、「嘘だ！ 嘘だ！ 嘘だ！」と叩きつけながら喚き出したので、周囲の酔客は不快そうにチラツと振り返った。

「ジエームズ、もういいよ。分ったから」

「犯したんじゃない……俺達は愛し合った。ただそれだけなんだ。サラは今でも穢れてはいない。俺達二人はまるで子供に返ったかのように、あそこではしゃいでいた。サラを犯すなんて、俺には出来ない。出来るはずなんてないだろ！？ 俺はサラを愛していたんだ。愛する者に対して、無理強いすることなんて出来はしないよ。傷つけたくは無かったんだ。だから、正式に結婚を誓ったんだよ！」

「それ、マジで？」とニッキーは目を丸くしながら尋ねた。

「うん、マジでだよ。古代の神々の前で誓った。俺達は誓いのキスをしたんだ。これが罪だというのかい？」

ニッキーは暫く答えられなかった。彼の単純な思考能力では、ジエームズとサラの二人の複雑な関係など、到底理解ではなかったからだ。けれどもこれだけはニッキーにも分かった。

「お前達、本当に好き同士なんだな。だけど、ここでは無理だよ、結婚なんて」

「だから、二人でロンドンへ行こうとしていたんだ」

「ロンドンへ！？」

再びニッキーは仰天したが、けれども今度はさほど理解できない事ではなかったようだ。

「あそこは、色々な人達や仕事があるというからな。こことは違い、別天地だとも……」

「そうだよ。でも、それももう終わりだ。俺はサラを失った。そしてボブも、それから友人達も……。もうすぐおヒマを出されるだろう。そうすると、仕事も失う。そうなったらここを永久に出て、どこか奥地の炭鉱の底にでも行くさ。俺には暗闇こそが相応しいんだろっな」

二人は黙り込んだ。けれども、ニッキーは訳が分からないものの、ジェームズに微笑み返した。

“薄のろ”ニッキーは、そのハンディゆえに、社会での偏見を一番持つていないのかもしれない。自分自身が偏見に満ちた視線にさらされてきたせい、それともそういう偏見を感じないで生きていけるという、ある種の有利な境遇で居るせい、一般の人よりもずっと寛大だった。

ジェームズは久しぶりに、ポツと心が和み、胸の奥が暖かくなった。今までニッキーに対して、友達ではあるがどこか馬鹿にしていたところがあつたのは事実だった。けれども今は、その最も弱い存在に、自分は慰められているのだ。

ニッキー自身には分からないだろう。事実ニッキーは長く話し過ぎたと思つたのか、「それじゃ」と言つて、慌てて去つて行つた。

再びジェームズの周りにはポツカリと空白が在つた。そしてドリーユの怒りはまだ続いており、妹のメアリーからは何の便りも無い……。

ジェームズはドーセットから出て行く決心をし始めた。



ノラ・バロウズは、さり気なくオーウェル家の玄関の呼び鈴を鳴らした。上辺とは逆に、心臓はドキドキと波打っている。

あの事件以来、この官舎の周りにはひっそりとしていた。そこを通る誰もがヒソヒソと声を潜めて喋り、チラツとかがうのだ。家の中の人達は、外に出るのもはばかられるような雰囲気が周囲を覆っていた。

その中を、ノラは大胆にもサラに見舞いに、と言うより会いに来たのだ。

中からエレーンが驚いた様子で出て来た。エレーンは多少うるたえたものの、オーウェル夫人に取り継いだ。現れたオーウェル夫人の髪の毛は以前に比べて白くなり、その上品な面立ちには明らかにやつれが見えたが、けれども夫が居ないのを確かめた夫人は、ノラをサラに会わせることに決めた。

ノラが室内に入ると、居間には長姉のベスの姿がチラと見えた。嫁ぎ先からやって来たらしい。ガツクリと落した肩が、ベスの胸のうちを現しているようだ。

けれどもノラはさつさと自分の成すべきことに集中した。いつもはへりくだっているウェールズ人のノラだが、今回ばかりはまるで王女か何かのように扱われたからだ。

ノラがエレーンに案内されたのは、何と二階のサラの私室ではなく、三階の小部屋であり、悪く言うともまるで屋根裏部屋のような陰気臭い暗い狭い部屋で、そこにはベッドと小さな箆笥と机しかなかった。恐らく小間使いの為の部屋だったのだらう。

たった一つしかない窓も小さく、そして曇りガラスだった。

「それじゃ、ごゆっくり」とエレインは行って出て行くなり、ガチャンという蝶番の音がした。

まるで牢獄だわ、とノラは幾分狼狽していた。

その中を、サラは長椅子代わりのベッドに腰掛けていた。あの日から約3週間は経っているというにも拘らず、眼鏡は壊れたままなのかサラは素顔で、髪も結い上げずに一つに束ねただけで、その赤毛が背中に垂れていた。

ノラが何よりも驚いたのは、サラの無表情でやつれきった顔にも拘らず、その顔は大人の女の顔であり、そして何よりも以前考えていた以上に、儂い美しさをたたえていたからだ。

サラは誰かの気配にほんやりとノラの方を向いたが、誰だかは分からないようだった。

「サラ……何と言っていいか……わたし……」

「その声はノラなのね」

妙に乾いた魂の抜けたような声がサラから出た。

「ええ！ 分かった？」

「ノラ……来てくれただなんて」

ノラは友情の為に来たのではない。けれどもサラの前では、思わず自分の心の卑しさにドキリとさせられた。

ノラはサラのすぐ隣に腰掛けた。古いベッドのスプリングがギィーという不気味な音を立てる中、暫く沈黙が続いたがやがてノラは口を開けた。

「どうしたの、その顔は！？」

「自分の顔は見えないし、見ようとも思わないわ」

「でも……口元の辺りが紫色の痣になっている」

「父に殴られたの。あるいはその時にどこかにぶつけたのかも知れ

ない……多分」

サラの言葉は他人事のように響いた。

「ね、あれからもうかなり経つと言うのに、まだこんな所に閉じ込められているの？ 酷いわね！」

「何日経った？」

「3週間。もう5月半ばじゃないの」

「わたしにとって、時は止まっているようなものなのよ。でも、ノラ。あなたが始めて来てくれた人なの。感謝しているわ」

空虚な言葉、感謝……。けれどもノラにはその言葉が嘘であるのを見抜いていた。

「だからあれ程忠告していたのに。ジェームズには注意しなさいって！」

ノラの叱責に再びサラは黙り込んだが、けれども直ぐに反論した。「みんな、わたし達のこと、誤解している。信じていないのよ、何も。でも、いいの。みんなが信じるはずは無いわね。わたしはオーウェル家一族の“恥”ですもの。伯父も叔母もそう言った。それ以外に言う言葉が無いに違いないわ。」

わたしはいいのよ、それでも。でも、ジェームズは一体どうしているのかを考えると……」

「目を覚ましなさいよ、サラ！ ジェームズはあなたを愛してなんかいない。それを証拠に、彼はどこかへ行こうとしているようだわ。これは全て彼の企てだったのよ。あなたを傷つけて去ることが、彼の望みだった。」

あなたの純情さにつけ込み、そして自分の復讐を果たした。ただそれだけのこと。未だにジェームズのことを想っているなんて！ あなたは馬鹿だわ」

目の前のサラはぎゅっとシーツの端を握り締めた。

「復讐、復讐ってみんなが言うけれど、何の事なの？ 何も教えてくれる人は居ないわ。でもあなたは違うようね。知っているんですよ？ だから来たのね」

図星だ！ とノラはドキリとした。

「あなたのお父様から借りた借金と関係があるの？ ジエームズですら、何も言ってくれなかったわ。恐らく……逃げた後で言うつもりだったのかもしれないけど」

「皮肉なものだわ」とノラは深い吐息を付きながら言った。「これは全て、あなたから発したことなのに！ 結局あなたへと返って行くなんて……」

「わたしから……？」

「そうよ、サラ。これは全てあなたから発したことなの。それがただ戻っただけ」

「教えて！ 教えて、ノラ……」

ノラの心に残酷な心象が浮かんだ。

「いいけど。わたしはあいつがなぜあなたを翻弄したのか、みんな知っているのよ。そしてそれを話せば、あなたも納得するわ。彼を愛すのではなく、憎むようになるでしょうね」

サラは全ての謎がここで解けるのだという事実を知った。



サラは身を乗り出すと、ノラの手を探ったが、それは虚しい動作に終わった。ノラがすつくと立ち上がったからだ。勝ち誇ったような声が、上方から響いてくる。それは友人の声ではなく、悪魔の声のようだった。

「わたしの家は昔はジェームズ・エドワーズの隣だったの。ジェームズの父親のエドワーズ氏は高級家具の販売をしていたわ。わたしが幼い頃、兄のシドニーに連れられて何かのパーティーに呼ばれたことがあった。6歳上の兄とジェームズは同じ学年だったの。まだ3年生位だったかしら？ わたしは幼くて、メアリーと一緒に遊んだものよ。あの時がエドワーズ家の一番良い時だったわね。あのあと、仕事に躓いて両親は馬車の事故で川に落ちたけど……でもそれは、事故ではなく、“自殺”だったのでは、ということだった」

「自殺！？」

「嵌められたのよ、店を任せていた店長に。店長は店の金を全額盗んで夜逃げしたの、愛人とロンドンに」

サラの両手はわなわなと震えていた。

「なぜ、それを……」

「それを知ったのはわたしも最近のことなの。知り合いに新聞社の記者がいて、その記事を見せてくれた。ちょうど一年前のことだけだね」

「ジェームズは……？」

「知らないと思うわ」とノラは素っ気無く言った。「でもそれでジェームズは借金を負ったのよ。そしてここからは逃げられなかった。

最近まではね。でもやつと全額を返したと言うことよ。金貸しシュ  
タールがそう言っていたもの」

知っているわ……。ああ、ジェームズ……。

俯いたサラの見えない瞳から、涙が一滴流れ落ちる。もう出るも  
のではないと言うほど涙を流したのに、悲しみは際限なく涙を流させ  
るものらしい。

「あなたのお父様がうちから膨大な借金をしたのは知っているわね」  
「それはわたしの目を治すため……」

「その通り」

「でも、それは……」

「黙って聞いていて頂戴！ でも、それには取引が必要だったのよ。  
うちの父だって何の担保も無しに、他人に、しかもイングランド人  
の校長先生様に大金を貸すほど大馬鹿じゃないわ！ ジェームズだ  
って、借金の担保に、自分自身の身を縛られたのだから」

「担保に縛られた……父が縛ったんだわ」

サラの見えない瞳から、再び涙が溢れ落ちる。

「ジェームズが復讐した理由はそれだけじゃなかったのよ！ よく  
聞いて。」

その頃、兄のシドニーは成績はぱつとしなかったの。ま、今でも  
ぱつとしないけどね。要するに、元々大した才能は無いのよ。反対  
にジェームズは必死で勉強していた。それは卒業時に金賞を射止め  
て奨学金を得て、カーディフの上級学校に行くつもりだったからよ。  
事実彼はいつもクラスで一番だったわ。

ところが蓋を開けてみると、卒業時には兄が金賞で、ジェームズ  
は次席の銀賞。ジェームズは銀のメダルを、ドーセット川に投げ捨  
てたそうよ。皆が変だと思ったと言うわ。でも、結局兄のシドニー  
が奨学金を貰った。

分かる？ 父は兄の成績を買い取ったのよ！ オーウェル校長がらね。父の夢は、自分の息子をケンブリッジにやることだった！  
そしてそれをお金で買った……」

サラはそれと分かるほどの衝撃を必死で隠そうとしていたが、それはむなしい努力でしかなかった。

「あなたのお父様は、教育者としての誇りをどぶに捨てたわ。自らの公平さを売ってしまった。そしてその直後、あなたはお母様とロンドンの名医の所に旅立ったというわけ。どう？ これで全てが飲み込めたでしょ？ ネンネのあなたにも」

ノラはサラを冷厳に見下ろした。サラは握り潰した拳を額に当てると、石のように身動きもせず、そしてその目は瞬きもしなかった。聡明なサラには何もかも分かったのだ。今まで縛れに縛れていた糸が、突如としてパツと解け、そして自分の首に巻きついたかのように息が出来なくなった。

「わたしは目ではなく、心が盲目だったんだわ……」

「そしてあなたの愛も、盲目だった」

「そうじゃないわ！ それは違う！ わたし達の愛は……愛は……」

サラの肩や身体がガクガクと震え始め、そういうサラの有様をノラは小気味良げに眺めていた。

「じゃ、何なの？ あいつは、あなたとあなたの家族に復讐する機会を狙っていたのよ！ そしてそれをいとも易々とやってのけた。彼を縛るものはもう何も無い。いずれ彼はここを永久に出て行くでしょうね。混乱し評判を落したオーウェル家と、そして校長としての長年の尊敬の念を失墜したオーウェル氏、それからあなた自身を残して」

「もう言わないで！ あなたには分からない！ 分からないのよ、わたし達の……。あつ！」

突如サラは顔を上げると、見えない目でノラを見上げた。暁の光のように、もう一つの真実が分かったのだ。

「一体、あなたは何をしに来たの、ノラ？」

「あなたのお見舞いじゃないの。そして苦しむあなたを助ける為によ。真相を全て話してあげたじゃない」

「そうじゃないでしょう。一番喜んでるのは、あなただったのね！」

「喜ぶ？ わたしが？ なぜ？」

「ノラ？」

「なに？」

「あなたはジェームズが好きだったんだわ！」

ノラはその場に凍りついた。無意識だった、何もかも無意識だったのだ。けれども今それが電撃のように分かった。なぜ、サラを心底憎いと思ったのか。単にイングランド人だったということだけではなく……。ジェームズがサラを愛したことが、自分には許せなかったのだと。

「わたしには分かる。見えない分、あなたの声音に潜むジェームズへの思慕を。憎々しげに喋っても、声は嘘を付かないわ。あなたは真実を喋ってくれた。そしてジェームズがわたしを愛していることを知って、それでこれを言いに来たのね。わたしが更に苦しむと思つて。そうかもしれない。ジェームズの一生を台無しにしたのはわたしだって、言いに来たのね。わたしのこの目の為に、ジェームズは苦しんだ。けれどもわたしも又同じ苦しみを味わうわ。例えば彼が赦してくれなくても、喜んで！」

ノラは自分が完璧に負けたことを悟った。

サラは良くは見えない瞳で、たった一つしかない濁った曇りガラスがきつちりと嵌ってある小さな窓を見上げた。既にノラが存在もこの牢獄のような小部屋も、何もかも目に入らなかった。

今聞いた“真実”に比べれば、周囲のことなど全てが虚しい事象に過ぎない。

「結局、ジェームズの将来を台無しにしたのは、わたしだったのね。わたしのこの目が、どれだけ犠牲の上に開いたのか、それが分かっただけでも良かったわ。でも、他ならぬわたしが原因で、彼を不幸のどん底に突き落としたとは！ 彼はその事を決してわたしには告げなかったけれど。きっとそれはジェームズの愛情からだったんだわ」

驚愕と嘆きが、サラの心を完璧に塞いでいた。

一方では、突っ立ったままのノラもまた、自らの行為の虚しさに気付いていた。全てをサラにぶつけ、侮辱し嘲笑しようとしたのに、結局は自分自身の奥底の秘密を明らかにしてしまったのだ。

ノラは小さな頃から、そしてジェームズが大人になってからも、上辺では無視している振りをしながらも、実はずっと慕っていたのだ。プライドだけが彼女の支えであり、そして人を愛することの障害になっていたことにも気付かないほど、愚かだった自分……。もう直ぐ、ずっと年上の愛してもいない男の妻に収まる自分の気持ちには、恐らくこれからもサラ以外の人物には封印していかなくてはならないのだ。

結局二人は同じ穴のムジナだった。立場は全く違うが、そうだったのだ。

ノラは改めてサラの横に座り込んだ。脱力感がノラを襲い、復讐に来たはずが、自分の方へとその矢は刺さってしまったのだ。二人とも疲れ、うなだれていた。

「兄は馬鹿だったの。父もそうよ。そんなものをお金で買うなんて！ 自分の努力で得たものではないのは、結局は虚しいわ。今じゃ兄はケンブリッジでは最劣等生！ 大学にも馴染めず、落ちこぼれ寸前。ひたすら我が身の不幸を嘆き、ウェールズ人の誇りを捨て去り、劣等感に陥った哀れな飲んだくれの若者でしかない。

その上、休暇で家に戻ると、父や母に食って掛かる、本当にろくでもない人間に成り下がってしまった。ある日、わたしが外から家に入ったときのことよ。シドニーが父に叫んでいたの。何もかもよ。だからわたしには分かったの、この秘密がね。

『僕を台無しにしたのは、父さん、お前だ！』って。そんな兄の姿は、卑しい人間そのものだったわ。

ま、当たり前よね。ジェームズが得るはずだったものを横取りしたんだから。もしもジェームズがあの時、金賞の栄誉を与えられていたら、彼はカーディフの大学で修士号を取り、良い仕事について妹さんを引き取って、幸せに暮らせたかもしれない……」

と、ノラは力なく言った。

「それをわたしは、何も知らずに彼を追いやった……」

「それでも、ジェームズはあなたを愛していると思う？」

「それはもうどうでもいいわ」とサラはあっさりと答えた。「大事ななのは、わたしが彼を愛したということ。それに偽りは無かったのだから」

ノラがサラを覗き見ると、サラはどこかストイックな眼差しの中に、微かなエロチックな幸福感を漂わせていた。

「あの人を愛せて、わたしは幸せだった。例えもう彼がわたしを嫌いでいいの。わたし達、ロンドンに逃げるつもりだった。今となつては、どうでもいいけど」

「ロンドンへ!？」

「わたし達、古代の名も無き神々の前で結婚を誓つたのよ。そしてわたしはもう彼の者だわ。彼に抱かれたんだもの。でもわたしは全然後悔なんかしていない!」

「抱かれた……」

ノラは非常なショックを受けていた。そしてその事實は、まるで錐のように心に突き刺さる。

その瞬間、町の人達や自分はひよつとしたら、大きな間違いを犯していたのではないか、という疑問がノラの頭にもたげてきていた。ジエームズは復讐を遂げたのだ、という不純な動機しか思い浮かばなかったが、もしかするとジエームズとサラは本当に愛し合っているのかもしれない……。ノラは、この目の前の傷心しきって身も心もボロボロのサラに対して、妙な嫉妬を痛烈に感じた。

サラはノラのことなどほとんど無視しながら、言い続けた。

「でも、ジエームズの抱えていた不安通、わたし達はもうそれが出来なくなった。誰の告発が知らないけれど、あの手紙によって、全てが明るみに出されて」

「わたしじゃないわよ! 言つとくけど」とノラは強調した。「わたしはそこまで卑怯じゃないもの! それに何も知らなかったんだから!」

「それは分かっているわ、ノラ。あなたは誇り高い女性だもの。そんなことをするような人じゃない。だからわたし達……以前は友達だったのよね」

「と・も・だ・ち……」

「家族は近々わたしを、父の故郷のレスターに住む、独り者の厳格な伯母の元に預けるつもりなの。その為に、下の姉のトレイシーがやって来るそうよ。長姉のベスは、わたしが結婚と言う夢を持ってはいけないうと、つまり言い換えれば、もう誰からも愛されず求められることもない生涯を送るべきだと言っていた。

今となつては全てが終わつたのよ。もう二度と彼に会うことが叶わないのだつたら、目が見えても見えなくても同じこと。やっぱり報いが来たのね」

「それじゃ、わたしはもう行くわね」とノラはサラを遮つて立ち上がった。これ以上、サラの、あくまでもジエームズに対する信頼と愛に満ちた言葉を聞くのが耐えられなかったからだ。

「ノラ！ もしもジエームズに会うことがあつたら、こう伝えて頂戴！ お願いよ！ わたしは何も気付かなかった大馬鹿者だったけれど、どうか赦して欲しいと。そして今でも深く、心の底から愛していると！」

「それを言うのなら、あなた自身で彼に言うことね！」

とノラは冷たく言い放つた。ノラの心には嫉妬を超えた妬みがわきあがつていたので。サラの頼みを非情に突っぱね、知らん顔をすることが今のノラの精一杯の復讐だったのだ。

「さようなら、サラ。あなたもジエームズももっと苦しめばいいのに！」

この言葉はウェールズ語で語られた。けれども“苦しむ”というウェールズ語を知っていたサラには、その言葉の中身がおぼろに分かったのだ。

けれども今はもうどうでもいい。ジエームズが居ないこの世界は、何の意味があるだろうか！？

背後でボタンという、力任せに扉を閉めた音がした。扉の向こうでは、ノラは嗚咽を堪えようと片手で口元を押さえながら、急いで



急な階段を駆け下りて行った。

## 疎外されてゝ泥の道 1

疎外されてゝ泥の道

1

ひと月後、オーウェル校長は辞任を提出し、カーディフの教育委員会から受理された。そしてその学期が終わる六月末には、オーウェル一家は、レスターへと引っ越さなければならなくなった。その少し前に、サラは次姉のトレイシーと共に、一足先にレスターへと行かされる予定になっていた。

ジェームズの方もまた、この町を去るつもりでいた。彼を縛る法的なものは何もなかったし、サラのこと以外にはこの町にも何の未練も無い。彼は少しずつ身の回りの整理をしていた。

ギルフォード家に、辞職を願い出ると、夫人はただ一言、「当然でしょう」と冷徹に述べたのだ。

「どこへ行くんだい、色男？」とのジョンの問いには、「北部の炭鉱へ」とだけ答えただけだった。

「それじゃ、2週間後までには出て行けよ」とジョンは命じた。「分かりました」

そう答えるジェームズの声もまた、無機的だった。

気に掛かるのはもう一つ、メアリーだった。妹はあれ以来何の手紙も寄越さなかった。もう直ぐ請願式が来るというのに、何一つ言ってこないばかりか、修道院からの連絡も途絶えていた。メアリーの処に行くべきか、それともそつと離れるべきか、まだ彼は躊躇していた。

今はもう全ての者から、ジェームズは疎外され、居るのに居ない者として扱われているようだった。彼の周りには、冷たい沈黙だけが常に支配していた。

＊＼＊＼＊＼＊＼＊＼＊

暖かくなると野ウサギが罾にかかり、それを夕方集めて母屋の台所へと、そして残りの

一羽を自分達使用人の為に小屋のフィオーナに持って行くのが、習わしだった。敷地は広大で、一つ一つの罾を見に行きそしてそこから強いバネを外していくのは、結構骨の折れる仕事だった。

ジエームズの立場は、もはや追い立てる猟犬ではなく、追い立てられ或いは草むらに潜まれた鉄製の棘の在る罾にガツチリと絡め取られた野ウサギのほうだ。そして死んだ野ウサギを、一羽一羽布袋に入れながら、今までの自分の生き方の後悔の念が強くなっていくのだ。

自分の将来の望みを捨てさせたのは、勝手に“未来が無い”と決め付けた自分のほうだったのではないのか、と言う気持ちが強くなってくる。

長年に渡って、教育者としての公正さを捨てたオーウェル校長を憎み続け、復讐する機会を狙っていたものの、結局そのような醜い考えが自らの魂を苛み、一人の愛する娘を深く傷つけてしまったではないか！ “恨み”は決して幸福には到らなかった。

けれども今では、自分の“未来の夢”をサラの見えるようになって瞳が証ししている。

憎しみを捨てて、オーウェル家に向き、はっきりと言うべきだろうか？ 「彼女を愛している」と、正々堂々と。「自分達は、神々の前で誓ったのだ、結婚するつもりだ」と。例え校長本人でなくとも、オーウェル夫人でもいい。黙ったままここを去るのは卑怯なこと、嘘偽りが闊歩している中では本当のことを言うべきなのかもしれない。

けれどもそこで、ハタとジェームズの思考は停止した。もしも何もかも巧く行かなかった場合、やはり自分はサラを諦めて去るべきなのだろうか、と。

野ウサギ達を運び終え、一羽を今夜のおかずにしようと待ち構えているだろ、フイオーナの待つ使用人小屋への細い道を辿っていた時、雑草だらけの生垣からマーガレットがパツと不意に現れた。待ち構えていたのだろうか？ マーガレットは夕刻の薄暗がりの中でも、明らかに目を光らせ、野生的な雌猫のようだった。

ジェームズは顔を背けたが、マーガレットは直ぐに彼の鼻先に近寄った。

「ジェームズ！」

「何の用だい？」

「ねえ、あたしと出て行こうよ。あんたがもう直ぐここをオサラバしようとしているのは知っているんだから。あのイングランドの小娘への復讐も果たせし、もうこんな所にいつまでも居てもしょうがないだろ？ 親友だったボブ・ハーシーもこの世には居ない。そして何より、もうあんたはこれ以上ここには居られないよ。あたし知ってたんだ。町のヤクザな連中が、あんたをどこかに連れて行って、半死半生の目にあわせようと企んでいるのさ。あいつら、舌なめずりしてる。それ、知ってんの、ジェームズったら？」

「何言ってるんだよ」とジェームズはあざ笑うように言った。「あんな連中が何をしようと、俺は全然怖くなんかねえや。ギルフォードの奥様にもちゃんと言ったし、2週間中には一人でここを出て行くさ」

「一人で？ いやだよ、そんなの。その時には、あたしを連れて行ってよ！ あたし、あんたとなら何処へでも行くわ。地の果てでもかまやしない。あんたと一緒に居て、あんたに一生尽くすから、ほ

んどだよ」

ジェームズは右手を上げ、迫って来るマーガレットを阻止した。マーガレットを見下ろすジェームズの眼差しは、声と同じように冷たかった。

「俺はお前なんか大嫌いさ！ 嫌いな女を連れて行くバカは居ないよ」

「じゃ、誰とならいいの？ 妹さん？ それとも、あの哀れな女？ ボート・ハウスでいちゃついていた、あの小娘がいいの？ ヘン！ 笑わせるじゃないのさ。あんた、本気であのイングランド女にのぼせちまったのかい？」

ぞつとするような鋭い痛みが、ジェームズの心臓に突き刺さった。

「ボート・ハウス？ なんてそんな事を知っているんだよ？ ボート・ハウスなんて、誰一人……知るはずが……」

ジェームズの暗い瞳がキラリと光った。

「そうか！ オーウエル家とギルフォード家に送った謎の告発の手紙と言うのは、お前が書いたんだな！ 汚い字で、綴りが間違いだらけのあの下品な字。あれは、お前だったんだ！ 誰かが分からないようにわざと醜く細工した字じゃなかったんだ！」

「そうよ、あたしよ」とマーガレットは居直ったように叫んだ。「みんな、バカな奴らばかりさ。どうせ、わたしの字は汚いわよ、品がないわよ！ だって、ろくろく教育も受けられなかったんだもの。でも伝えたいことは分かったはずよ。あたしはね、あんたがあの女の為に破滅してしまう前に、あいつらに告げてやっただけ。感謝して欲しいくらいさ！」

「俺の感謝は、こうだ！」

と言うなり、ジェームズは、マーガレットにペツと唾を吐きかけた。



マーガレットはジエームズからの手酷い侮辱を受けても、ひるまなかった。彼女は我武者羅になってジエームズにむしゃぶりついた。けれども、若い男の腕力には叶うことができずに、草地に倒れこんだ。

マーガレットは泣いていた。けれどもジエームズの心を変えることなど絶対に出来ないことを、マーガレットは思い知ることになる。  
「泣くがいいさ。けれども俺は、誰かの言いなりになんてならないからな！」

「あたしを軽蔑しているのね」

鼻水をすすり上げながら、マーガレットは悔しげに問う。

「そうさ！ 軽蔑してやる！ とことんな！ 俺達の未来を引き裂いたお前なんか、絶対に許すもんか！ 逃げるなら俺はサラと逃げる。俺はサラのこと、お前が想像している以上に好きなんだ。愛している」

この時、マーガレットはジエームズの揺ぎ無い本心を悟った。マーガレットはこれ以上かきくどいても無駄だと知った。けれどもそれは彼女には受け入れがたい真実でしかない。

「愛している？ そんなことが……そんなことって……」

「俺達は結婚の誓いをしたんだ」

その言葉は、醜女の幸薄い哀れな下女には衝撃的だった。

「結婚だって！？ お生憎様だね！ あの女は、一室に閉じ込められていて、外には出られないというじゃないさ。あいつ、親父さんに酷く殴られて食事も通らず、痩せ衰えているというわよ。その上に、眼鏡も無く、今のあの女には何の力も自由も無いわ。もう直ぐ、

レスターに行かされるそうだよ」

マーガレットはありったけの愛憎を込めて、そう毒づいた。握り締めた拳には、雑草だけが絡んでいる。

「あたし……あんた達を呪ってやる！ あの子だけじゃなく、あんたもね、ジェームズ！ あらゆる人達が、あんた達の不幸を笑っているのさ。あんた達には味方も居なければ、これからずっと一人ぼっちなんだ！」

ジェームズはマーガレットを見下ろし、それから野ウサギの耳を持って、走り去った。

『呪ってやる』という言葉が、ジェームズを追いかけて、内心では慄いていたのだが。

\*ゝ\*ゝ\*ゝ\*ゝ\*ゝ\*ゝ\*

使用人小屋に戻って、野ウサギをフィオーナに渡すと、フィオーナは無言でジェームズに手紙を手渡した。

ジェームズがその差出人を見ると、そこには何も書かれて居なかった。けれども嗅ぎ覚えの有る強烈な香水の匂いが、それが忘れようと努めていたフランス・ハウエルからのものである事を告げていた。

ジェームズは暖炉の炎の明かりで、それを読み出した。

☐

18

89年5月26日

愛するジェームズ

長らく御無沙汰しています。私は実はある人からの便りで、あなたの驚くべきスキャンダルを知りました。今、あの田舎の保守的なドーセットでは大変な騒ぎなのでしょうね。でも私から見れば、そ



れは取るに足りないこと。情熱的なラテンの人々なら、あなた達の色恋沙汰など、平気で受け入れることでしょう。でも、ここは大英帝国。そしてウェールズ、なのですよ。

ちょうど私の絵の個展の時期で、あなたがモデルとなつた「牧神の午後」と「物憂い昼下がり」の二つを出展していました。人々は私の二つの絵の中のモデルに対して、賞賛をしています。私の絵のタッチではなく、あの絵のモデルは誰？ということばかり。皮肉なものです。

でも私はそれでもいいのです。この二つの作品は、二つとも売れたんですもの。凄いことだわ！でも、反面私は売れない方がいいとも願っていたんです。あなたの姿を、絵を通して身近に置いておきたかったから……。

『モデルは想像ではなく、実在の人物ですか？』と言う問いには、私は即座に『はい』と答えています。けれども、それが何処の誰だかはお教えできないとも告げています。『そうでなければ、皆さんは彼の所に行きたがるでしょう。自分のモデルにしたくて。でも彼の存在は私しか知らないのです。これは私の秘密なのだから』と。人々や批評家は、『この世の中に、こんなに清纯で初々しい牧神と、そして痛々しい若者が同時に存在しているとは！』と口々に驚いていましたわ。

そう！わたしはあなたの中に、その二つをいつも見ていましたから。そしてそれこそが、あなたのスキャンダル元なのでしょうね。

ブラボー、ジェームズ！私はあなたが真実、人を愛したことを尊敬します。そしてあなたの勇氣にも。

目の悪いイングランド人の娘さん？そしてその父の厳格な校長先生？とてもあなたらしいわ。私はあなたの心に、誰かが巣食っ

ているのを知っていましたが、まさかそういう人だったとは！ あなたは彼女に全てを捧げていた。その直感は悔しいけれど当たっていたのですね。

例えその娘と、肉体的に契つていようといまいと、あなたの真剣さは分かっています。

ジェームズ、その娘とお逃げなさい！ 何があっても、共に逃げるのです！ そうでないと、あなた達はとんでもなく不幸になることでしょう！ 私には分かる。無理やりにも、追いかけても、必死で逃げるのよ、ジェームズ！

行くところが無ければ、私の処にいらっしゃい。今更私の処に来るのは嫌なのは分かっています。けれども私はスウォンシーのどこかで、何かの職ぐらい見つけてあげられます。それがどうしても嫌ならば、ロンドンに行きなさい！ あそこでなら、あなた達は貧しいけれど、あの霧に紛れて身を隠し、きっと幸せを見つけ出せるでしょう。

ついでですが……私は娘を失いました。娘のお産は悲しい結末に終わりました。孫を産んだ娘は、直後に亡くなったのです。この孫娘を誰が引き取るのか……と言った騒動の後、私が引き取って育てることにしたのです。相手側は、女の子と言うことで、跡継ぎに出来ないと思ったのでしょう。

今書いている側で、孫のシドニーは無心に眠っています。まるで天使！ けれども、生きることとは何と残酷なのでしょう。娘はもう居ない。愛しい子供を抱くことも無く、22歳の若さで逝きました。その悲しみは、何事にも換えられないほどでした。

私はこれからは、シドニーを描き続けるでしょう、もはやあなたではなく。あなたの美しさも、シドニーの前では形無しですからね。

それではジェームズ。決心したのなら、返事を下さい。全ては神

様のお考えだったのでしょうか……。けれども私はあなたを今では  
息子のように愛しています。あなたの助けになりたい！ あなたの  
幸せを祈っております。

愛を込めて

フランシス  
『

ジェームズは燃え盛る暖炉に、フランシスの手紙を投げ入れ、それが完全に燃えて無くなるまでじっと見つめていた。フィオーナはそのようなジェームズの挙動を不審に感じ、そっとジェームズの横顔を覗き見た。

差出人不明の手紙は、フィオーナにとって、余り感じのいいものではなかったが、それを読んでいたジェームズの表情も又不可解だったのだ。ジェームズは笑っているようでもあり、悲しんでいるようでもあり、そして怒っているようでもあったからだ。

「誰から？」と不用意にもフィオーナは口を出した。全ての人々がジェームズを無視するという陰険な茶番に、最初の方こそ加担していたものの、フィオーナは次第に我慢がなくなってきたのだ。

もっとも、この二人の間には何年経つても事務的な会話しかなかったし、少なくとも夫が居ない時に限られていた。

ジェームズは振り返らず、じっと炎を見つめながら、「別に」と短く答えた。

「でも……」

「俺を愛していると錯覚している御仁からさ。俺を助けたいだって！ 笑わせるね。ある意味、俺を弄んだ奴だよ、それが……娘が死んだからって！ 俺は信じないし、助けを求めようとも思わない。とにかく、もう過去のことだ」

フィオーナには大体察しがついていた。けれども賢い彼女は、そっとジェームズの近くに寄り添った。

「ジェームズ……聞いていい？」

「なに？」

「サラ・オーウェルの事だけどさ。今更こんな事言うなんて、あたしもバカだね。けど聞いていい？ ジェームズ、本気だったの？」

それとも……」

「ああ！ 本気だったさ！ 相手が誰か、それは関係なかった。皮肉なもんだな、神様って言うのはさ。俺が憎もうと思っていた相手を、お選びになっただなんて」

ジェームズが本心で恋をした！？ 最初は疑っていたが、ここに来てフィオーナは完璧に悟った。

「単なる遊びじゃなかったのね？」

「ああ、俺達は結婚を約束した。誓ったんだ」

「恋してポイと捨てる相手じゃなく、一生添い遂げたいのかい？」

「そうだ」とジェームズはキツパリと答えた。「一生、サラの目になつてあげたい」

「憎しみは捨てたんだね」

「捨てたよ。俺の願いは、ただサラと結婚したいだけだ」

「だったら、思い切つて、正式にプロポーズに行くのよ、ジェームズ！」

「そんなこと、不可能だよ」

「及び腰ね、あんたつて。そんな弱虫だったの！？ 何もしないで、これからもウジウジと生き続け、恋人を捨て去った自分を抱えて生きるってわけ？」

フィオーナの言い方は辛らつだった。

「何もせずに、もうすぐここを出て行くの？ 何の意思表示もせずにな？ 町の口さがない連中の思うままじゃないか！ 勇気を出すのよ、ジェームズ！ ここを出て行く前に、オーウェル家へ出向くのよ！ そして、サラを欲しい、と申し出るの。サラは、ハンディが

あり、他の男達は妻にするには重荷と感じている娘なの。彼女を救えるのは、あんたしか居ないわ。もしもあんたが本気でサラを愛しているならね！」

ジェームズは何か言いかけたが、ボタンと扉の開く音がして、先刻降り出した雨と共にフィオーナの夫が戻って来たので、二人は何食わぬ顔で沈黙し、話はそれでお終いになった。

フィオーナは黙々と野ウサギを捌き、ジェームズは自室へと向かった。けれども自室の扉を閉めたジェームズは、ガランとした部屋の中で立ち尽くした。フィオーナの言葉が、彼の胸を鋭く突く。何もせずして、ここを去って行くのか……。サラを残して？

ジェームズはベッドに座り込むと、自分の髪を掻き毟った。

\*ゝ\*ゝ\*ゝ\*ゝ\*ゝ\*

ジェームズは翌日、よく眠れなかった腫れぼったい目のまま、二人の秘密の連絡場所であった、ドーセット川の側の栗の太木にやって来た。そして裏側に隠されたほくらに手を伸ばし、探したが、もとより何も有るはずが無かった。

あの時のピクニックでの出来事が、ありありと思い出される。サラは自分の裸体を惜しげもなく晒し、自分に身を捧げてくれた。その時の行為は、単なる愛欲だけではなく、このうえなく尊い行為だったし、至福の悦びだった。

そして結婚を誓った、厳かで神聖な静かなキス……。あの時の情景を忘れる事など出来るだろうか？ もう時間も限られている。何かをしなければ、一生後悔して過すだろう。一か八かやるしかないのだ。

そこから見回せば、遠くに小学校の屋根が見え、その向こう側にはサラが監禁されている官舎があった。サラはどのような思いを抱

いて、過しているのだろうか？ あれ以来サラの動向は、ましてサラの思いは分からなかった。信じたいが、サラは既に自分との関係を後悔し、諦めたのではないだろうか？ そう思うと居ても立ってもいられない。

サラ！ 君はまさか、自分を恥じているのではないだろうね？ 君のやった事が正しい事ではなく、罪深いと思い込んでいるのは？ そうして俺の本心を知らぬまま、レスターのような遠い所へ行ってしまっただけではないだろうね……。

ジェームズの胸は締め付けられるようだった。思いは募るばかりだ。

自分自身がサラの何に感化されたのか、今でははっきりと言える。それはサラの“無償の愛”だ。それに応えられない自分は、卑怯者ではない。

ジェームズは決心した。そして雨上がりのどんよりした空の下、官舎を目指してぬかるみの道を歩み出した。

サラに会いたい！ だからこそ、サラの両親に会って、真実を告げ、結婚を申し込むんだ！

けれどもジエームズは、このことが如何に限りなく不可能に近いかを思い、慄かざるを得なかった。

けれどもジエームズの痛々しいが若い心は、それが非情な困難を伴う事に気付いていなかった。

ジエームズは泥んこの道を、官舎に向かつてひたすら歩んだ。昼前だろうか。人通りも無く、静かだ。乗って来た荷馬車は、小川の向こうに置いてきていた。真っ直ぐに躊躇もせず、進んで来ると、ジエームズは官舎のオーウェル家の厳しい古い玄関に立ち、数秒の深呼吸の後ドアをノックした。心臓が早鐘のように打ち始め、帽子を握っている左手が震えだした。

暫くしてドアは何の用心も無しに開き、エレーンが顔を出したが、彼女はまるで堕天使ルシファアの化身でも見たかのように、両手を口に当て、慄きながら慌ててドアを閉めようとした。けれどもジエームズの右足はドアの隙間に入り込み、それを邪魔した。エレーンはまさかジエームズがここに来るとは、想像だにできなかったらしい。

「か、帰って！ 汚らわしい！ 何て厚かましいの！」

「奥様に用があるんだ。是非会わせて欲しい！」

ジエームズは無理やりにドアをこじ開けると、一步中に入った。

「キヤ〜！ お、奥様〜〜！ 早く、早くいらして！」

無駄に押し問答をしながらも、エレーンは大声で叫んだ。エレー



ンもかなりの強力だった。

「中へは入れませんよ！ 絶対に！」

時ならぬエレーンの悲鳴に、奥からバタバタとオーウェル夫人と、校長によく似た背の高い若い男が飛んで来た。

「エ、エドワーズがやって来たんですよ！ お早く！」

オーウェル夫人は乱暴にエレーンをどけると、自分が前に出た。直ぐ横には、多分サラの兄らしき青年が控えている。まずいな、とジェームズは分らないように舌打ちした。

「何か御用ですの、エドワーズさん？」

毅然とし、怒りを秘めたオーウェル夫人の声がした。

「奥様！ 僕は……僕は誤解を解きに参りました。どうか聞いて下さい！ 決して乱暴はしません。どうか、中へ入れて下さい！」

「お前がエドワーズというゴロツキか！ 妹を傷物にした奴だな！」

「黙って、ロバート！」と夫人がキツと兄を睨んだ。「今は話すだけなのでしょ？ エドワーズさん」

「そうです」

ジェームズはすがりつくような目付きで必死で言い掛けた。

「どうかお話を聞いて下さい！」

「中へは駄目です。外でなら」

そう言つと、夫人一人が外に出て、ドアを後ろ手にピシヤリと閉じた。

オーウェル夫人はジェームズの厚かましさにかなり動揺していたものの、ジェームズの目の中にある真剣さに少し圧倒されてもいた。そのキラキラと輝く宝石のような瞳は、今は偽りを語っているのではない、と告げていたからだ。

「お話とは、何でしょう？」

「有難うございます、奥様」とジェームズは、少なくともオーウェ

ル夫人に尊敬の念を抱きながら謝意を述べた。

「俺は……俺はサラを真剣に真心を持って愛しているんです！ それを言いに来ました。巷で流れている噂は真つ赤な嘘八百だと。お願いです、俺がこれから言う事を信じて下さい。」

巷の人々はただ面白がつて、ああだこうだと言いつ合っているけれど、でもそれは全部違います。尾ひれを付けて喜んでいるだけです。けれどもそれは殆どが真実じゃない。真実とは、サラと俺だけが知っている。それと、神様も……」

神を信じていないはずのジェームズから、思わず“神”と言つ言葉がポロリと出てしまった。ジェームズは一瞬声を詰まらせたが、構わず早口で続けた。早く喋らないと、全てが彼の元から逃げて行くような気がしたのだ。

「俺はサラの事が心配なんです！ サラはどうして居ますか？ 今は大丈夫なんですか？ 傷ついていないだろうか……そう考えると俺は身が縮む思いがする。けれども、もしもあなたまでサラの事を誤解しているならば、それは間違いなんです。彼女は何もしていない……ただ俺を愛しただけ。それが罪なんですか？ 彼女は穢れていない。むしろ……無垢なんです。」

俺は本気でサラを愛してしまった。だから、結婚したいと思つたし、二人でそう誓つた。そう、ただ二人でだけです。でもそれには何の疚しい所もないんです！ 俺達は二人で居るだけで幸福だった。だから、これからも二人で居たいと思つた。ただそれだけなんですよ！

オーウェル夫人、どうかサラを許してあげてください。彼女は罪なんか犯していない。俺の事は許さなくてもいいんです。けれどもオーウェル夫人、どうかサラの味方になってあげてください。これ以上サラを孤立させて苦しませないで欲しいんです！ 彼女を責めないで下さい。サラは潔白です！」

「ちょっと待つて！ さつき、あなたは二人で結婚がどうか、そう仰ったわね！？」

オーウェル夫人は多少まごつき、ジェームズを苦々しく思ったものの、“結婚”と言う言葉にだけは、激しい衝撃を受けていた。

「ええ！ 俺達は結婚したい！ ただそれだけです！ 今日俺が不躰にもここに來たのは、その申し込みのためなんです！」

「け・つ・こ・ん？」と夫人は強張った口調のまま、鸚鵡返しに言った。

「あなた達、婚約したつて言うの？」

「そうです。俺達は永久とわの愛を誓いました。だからこそ、俺達は正式に結婚したい、ただそれだけです！ どうか……」

「待つて頂戴！ そんなこと……おかしいじゃない？ 勝手に婚約したなんて！ わたし達親の了解も得ずに！ そんなこと、許せるはずが無いわ！」

思いもかけない夫人の激昂した口調に、ジェームズは口を閉ざした。目の前の夫人の中には、受け入れる事よりも拒絶する事、新しい挑戦よりも保身が明らかに見え隠れしていたのだ。

オーウェル夫人を信用しようとしていた自分が愚かだった……。その時ジェームズは絶望的なまでに打ちのめされたのだった。

味方になつてくれると思ひ込んでいた自分が愚かしい。誰も……誰一人、自分達の味方に成つてくれる者など、ここには居ないのだ。そう悟つた時、ジエームズの心には荒々しい粗暴な感情が渦巻いた。けれどもジエームズは、必死で耐えようと拳を握り締めて、うな垂れたままだつた。

「あなたはもう大人だけど……もう24歳でしょ？ でも、うちのサラはやつと17歳になつたばかりよ」

このオーウエル夫人の言葉はいい訳臭かつた。なぜなら、この時代、結婚は男女間の年の差は当たり前だつたからだ。

「それに、目も悪いし……それは知っているでしょう？」

「もちろんです。でも、それでもいいんです。俺は彼女の目になります。一生、彼女を支える事ができる。信じて下さい」

「でも……」

「いいえ、聞いて下さい！」

ジエームズはやつと顔を挙げた。

「そんなハンディはどうでもいいんです。俺はサラを好きになつた。愛しているんだつたら、相手のハンディなどどうでもいい。サラだつて、俺がウエルズ人であることを受け入れています」

「まるで、絵空事。夢物語ね。あなた達、どうやって生きて行くつもりなの？ あの子は貧乏には慣れていないのよ。今でこそこうだけれど、いずれ何年か経てば、若気の至りだと気付くでしょう。わたしには信じられないの。愛は永遠ではないわ。それは幻なのよ！ 結婚生活が続けば、愛も醒めてしまうわよ。それは……わたしも

経験しているからよく分かるの」

「俺達の間柄は、そんなんじゃない！」とジェームズは叫んだ。「俺は一生サラを愛するし、必死で働きます。慎ましいけれど、温かい家庭を作る！ 約束します！」

「いいえ」

オーウェル夫人の冷たい声が響いた。静かである分、尚更不気味に響く声音で。

「あなた達は、甘いわ。こんなことは言いたくないけれど。あなた達の結婚は、不幸な結果しか生まないわ。夫も、絶対に反対でしょうし。諦めてちょうだい」

「俺は……諦めない……そんなこと、出来ない。出来ないんです！ お願いですから、サラに会わせて下さい！ 俺達がどんな気持ちなのか、確かめて下さい！ お願いです！ 後生です！ サラに会わせて……」

「いいえ！」とオーウェル夫人は妥協を許さない毅然とした態度で言った。「悪いけど、あなたもサラも悪い夢を見たと思って、全てを忘れ去ってちょうだい。サラももう直ぐレスターへ行くわ。あなたも、もうここから出るのでしょうか？ 今は辛いだろうけれど、でも直ぐに時の彼方へと忘れ去ってしまうわよ。二人の新しい出発が待っているのよ。お帰り下さい！」

「奥様！ それは違う！ 俺達には新しい未来なんてないんだ！」

ジェームズは藁をも掴むような思いで、夫人に詰め寄った。彼の手が思わず夫人の二の腕を掴んだ。そうでもしないと、彼女が今にも中に入りそうだったからだ。夫人自身はジェームズの鬼気迫る表情に怯えていた。

ジェームズの美しい容貌が、今にも豹変して自分に掴みかかって来そうな気がしたのだ。

「サラに会わせて下さい！　せめて一分だけでも！　彼女が無事なのか、それだけ確かめればいい！」

「わたしの答えは、“ノー”ですわ。何度言われても同じこと！」

「奥様！　このお〜」

ジェームズの目が釣りあがった。その拍子に手がスルリと抜け、オーウェル夫人は慌てて、ドアに滑り込み、門を掛けた。夫人の顔は蒼白で、今にもその場に崩れ折れそうだった。

ドンドンという、ジェームズが乱暴にドアを叩く音が響いた。

「ちつくしょう！　会わせろ！　サラに、サラに会わせてくれ〜〜！」

何と甘かったんだろう、俺の考えは！　簡単に会わせてくれるなどと、馬鹿なことを信じ込んでいた俺は、何と言うお人よしの大間抜けだったのだろう！

ジェームズの心は憤りに燃えていた。彼はドアを狂ったように叩き、そして足でドアを蹴った。けれどもそれは虚しい行為だった……。

深い絶望感は、ジェームズの心に血を流させた。彼は空を仰ぎ、官舎に向かって「サラ〜！」と呼びかけた。この目の前の古風だが大きな官舎のどこかにサラはまだ居て、身動き取れないに違いない。もしも自分の声が聞こえたなら、必ず飛んで来てくれる筈だ。そうでなければ、無数にあるどこかの窓に現れるだろう。

けれどもサラからの反応は何も無かった。サラは監禁されている。怯えて出てこないのではない。そう信じたかった。

ジェームズは全ての窓に向かって叫んだ。

「サラ〜〜！　顔を見せてくれ！　俺はここに居る！　俺は君を騙したりはしていない。今でも……今でも君を愛しているんだ。愛しているんだよ！　サ〜ラ〜！！！」

通り掛かりの人々が立ち止まって、半狂乱のジェームズを遠巻きに見て行く。

「何て野郎だ、あいつ！」

家の中では、兄のロバートが苛々しながら、ガックリとしたオーウェル夫人を支えてソファまで運んでいた。

「ギャーギャー喚きやがって！　もつと我が家に恥をかかす気だろうか」

「いいのよ、ロブ。もう自分の家庭に戻りなさい……」

絶え絶えになった夫人が、息子に諭した。

けれどもロバートはチャーリーを呼び出すと、外に飛び出した途端、仰向いて隙のあったジェームズに猛烈な勢いで殴りかかった。チャーリーは無言のままジェームズを羽交い絞めにし、ロバートは思う存分ジェームズを殴りつけた。ジェームズの鼻血がロバートのシャツを赤く斑に染める。

ぐったりとしたジェームズを、二人は泥の水溜りに投げつけた。

全身を泥だらけにしたジェームズは、拳に黒い泥土を握りしめる事しかできなかった。サラを愛しながらも、オーウェル家に対する憎しみが再び沸き起こって行く。

「チンピラはさつと出て行け！」

背の高いロバートは、ジェームズを見下ろした。

「妹には二度と近寄るな！　このウェールズのろくでなし！」

＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊

サラは屋根裏部屋に伏していたが、微かに「サラ～」と呼びかける懐かしい声を聞いた。彼女は幽霊のようにフラフラと、たった一つしかない曇りガラスの小窓に近寄った。何も見えないが、確かにその声はジェームズだった。今度はもつと鮮明に。『今でも君を愛しているんだ！』と。

サラは狂ったように窓枠を叩いて叫んだ。

「わたしはここよ！ここに居るのよー！」

けれども下の声は聞こえるが、上からの、それも屋根裏部屋からの声は聞こえるはずが無い。やがて誰かとの言い争いの声がしてジェームズの声は掻き消え、それから暫くして下は静かになった。

「ジェームズ……」

サラは窓の側でしゃがみ込んだ。けれども確かにジェームズは自分を呼びに来てくれた。そして「愛している」と叫んでくれていた。サラの顔に微かながらも、喜びの笑みが浮かんできた。サラはジェームズの愛を、確かに確信できたのだ！けれどももう2度と会えないという別離の涙もまた……。

「わたしも、今でもあなたを愛しているのよ、ジェームズ」



## 悲劇―捕らえられて― 1

悲劇―捕えられて―

1

ジェームズがドーセットを去る日まで、あと3日しかなくなった。サラを信じてはいたが、自分の申し出を手痛く断られたジェームズは、既にあらかた誠実な好青年ではなくなり、ただ自暴自棄に残った日を送るただの凡庸な青年でしかなかった。

ジェームズは『フロレンス娼館』にフラリと出かけていた。以前はよく通っていた娼館だったが、彼が入って行くと、女衒のフロレンスは忌々しそうな顔をして出迎えただけだった。

「あら？ お珍しい事！ 町一番の色男がここを去ると言うけれど、今あなたの相手をしてあげる暇な娼婦は誰も居やしないよ、ここにはね」

ジェームズは特別にショックを受けた風でもなかった。もうショックは受けすぎるほど受けていたので、彼の感受性は完全に麻痺していたのだ。

「ああ、そうかい。それじゃ、お前さんたちにも、もうサヨナラだね。じゃ」

ジェームズは、どう考えても暇そうな何人かの娼婦に向かって、微かに手を振った。

「待つて！」とただ一人、フロレンスの手を振り切って、しどけないガウン姿のセシルが近寄った。

「あたしなら、今空いてるけど」

「セシル！」とフロレンスはがなったが、セシルは構わずジェーム

ズの腕を取った。「じゃ、あたしの部屋へ行こうよ、ジェームズ」  
「前払いするよ！」

そう言い放つと、ジェームズは昨日貰った給金のかなりの額を、フロレンスの顔にぶちまけた。そして後も見ずに階段を駆け上がった。

自室に入るとセシルはガウンを取った。中は全裸だ。そしてジェームズの腕を取ると、ベッドに誘った。

「今日で最後なら、何でも好きなことしていいよ、ジェームズ」  
「俺にはそんなシユミはねえよ」

そう言いながらも、ジェームズは急いで服を脱いでいた。そして身体をセシルに重ねる。

「もうあの娘このことは忘れたの？」

「お前には関係のない事じゃないか」

「でも……もう諦めたから、ここに来たんでしょ？」

「サラとは肉欲が全てじゃなかったからな……」

「でも、関係はあったんでしょ？」

「どうでもいいじゃないか、そんなこと！」

ジェームズはお喋りなセシルの唇を塞いだ。

「お前はやることをやればいいんだ」

「そうね。あんたに抱かれるのも、今日が最後なんだもの。サービスするわよ」

「そんなこと、必要ない」

ジェームズはセシルの中に入って行く。けれどもセシルの肉体を貪りながらも、自分の下のセシルが、いつしかサラの姿へと変っていつてしまうことに、恐ろしさを覚えた。セシルの熟れきった身体がサラの初々しい肢体へと、セシルの反っ歯がサラの半開きの少し分厚いが蓄のような唇へと変って行くような気がするのだ。

肉体の悦びはあっても、魂の至福は無かった。

ややあつて、ジェームズはセシルから離れた。そして枕を抱くと、背を向けた。

「ジェームズ……もういいの？ さっきのお金だったら、今晚泊ま  
っていつでも文句は言えない額だよ」

セシルは愛しそうにジェームズの背中と肩の火傷の痕を撫でたが、  
ジェームズは疲れたように吐息をついているだけだった。

「ただ、お前に別れの挨拶に來ただけさ。他意はないよ。もうそろ  
そろ戻らなくちゃ。旅の準備もしなくちゃならないしね」

ジェームズは気だるそうに起き上がった。

「ジェームズ、どこへ行くの？」

「カーマーゼン」と彼は短く答えた。「あそこなら、何か仕事があ  
るだろうからな」

カーマーゼンは昔から毛織物や鉱山の町として知られていた。ジ  
ームズは事が終わるとさっさと身支度を整えている。セシルは惜  
別の思いで、その背中を見つめていた。

「あたし、淋しいわ」

「寂しいかないさ。俺は単なる客じゃないか。だが色々親切にしてく  
らって有難うよ」

セシルは初めてジェームズから、人間的な言葉を掛けてもらった  
ような気がした。

「お別れだもの……あんたに言わなくちゃならない事があるんだ」

「何だよ、改まって」

既にジェームズは帽子に手を掛けている。

「あの……7年前の火事のことだけど」

「ああ、あれか」

「あれ、あんたがやったんじゃないって、あたしは知っているんだ」  
「じゃ、誰だい？ どうせ察しはついている」

「ギルフォード……」

「ちえっ！ やっぱりあいつか！ ジョンなんだな！」

ジェームズは毒づいた。

「だが、もういいよ。済んだことだ」

「違うの……！」とセシルはびっくりするほどの大声で叫んだ。「ジョンじゃないのよ！」

「え……？」

突然時が止まったような気がした。ジェームズは石になったようにそのままの姿で、微かに問いかけた。

「じゃあ……」

「黙っていてごめん！ でも、もう時効なんだ。言ってもいいと思う。当人も死んでるし」

「……」

強張った口元は何一つ動かず、ジェームズは次の言葉を待った。

「あれは……あれは、ギルフォードの旦那が火を付けたんだよ！」

「なぜ……」

ジェームズはこれ以上ないほどの衝撃を受けて、呟いた。「なぜ？」

「旦那はああ見えていても、偽善者だったわ。ウェールズ人を憎んでいた。校長から、あんたを押し付けられた時、あんたを憎んだのだから、何かの罪を擦り付けたかったし、あわよくばあんたを焼き殺しても良いとまで思ったのよ！」

「信じられない」

このジェームズの呟き声は、最後は消え果てた。

「そんな……そんなことが……」

「ごめんね、ジェームズ。ギルフォードの旦那は、よくあたしの所で睦みながら、それもサディスティックにあたしを弄びながら、そ

う言っていたわ。『あんな奴、早くくたばればいい』って。でも、先に逝ったのはあいつの方だったんだけどさ、皮肉な事に」

セシルは苦笑いを浮かべようとした。けれども一瞬の後には、既にジェームズの姿は無かった。あらゆる感情を抱きながら、ジェームズが走り去ったのは明らかだ。これを告白して良かったのかどうかセシルは反省したが、すぐに居直ったのだ。

「いいのさ。どうせ、あたし達には関係の無いことだもの……」

けれども、もはやジェームズの暴走を止めるものは何も無くなったのをセシルは知らなかった。

ジェームズはボブの墓に行くと、その側の土を拳骨で叩きながら、野獣のように喚きそして泣いた。

ジェームズが官舎にやって来て以来、オーウェル夫人の時は止まったままだった。息子のロバートはやはり教師をしているが、既に近くに住む家族のもとに帰っていた。入れ替わりに、カーディフから辞職手続きを終えた夫のオーウェル氏が戻って来たが、夫人の心は晴れず、逆に日に日に鬱々とした状態が続いていた。

あの時は意気がってジェームズに言い放ったものの、夜になってベッドに入ると、ジェームズが懇願した言葉を反芻していたのだ。あの瞳は嘘を付いてはいなかった。大勢の生徒達を長年見てきたから、彼女にもそれぐらいは分かる。

ジェームズの言っていたことは正論だった。確かにサラは、今のままでは多分一生独身を通さなければならぬだろう。その上時折、少数ながらイングランド人もウェールズ人と正式に結婚する事は聞いている。

幸いにも、ウェールズ人の殆どはメソジストであり、カトリックを厳格に信仰するアイルランド人とは違う。そしてウェールズは卑しくも大英帝国には無くてはならない地方だし、その上産業革命時のイギリスにおいては、ウェールズから産出される石炭や鉱石は大層重宝がられていた。

あの時は感情的になって反対したものの、サラの幸せは案外ジェームズと共にあることなのかもしれない。そう思うと、オーウェル夫人は夜中も目を開けたまま、もう少し冷静にジェームズの話の聞けばよかったのではないか、と後悔に苛まれていた。

心優しい夫人は、どうしたらサラが幸せになれるのか、それを熟

考していた。ジェームズの仕事にしても、何とか探し出して、慎ましい家でも借りてあげればよかった……。今更遅いが、夫人はあれこれ考えをめぐらしていた。

けれども最も障害になるのは、やはり夫の事だった。こんな馬鹿げた事を提案でもしようものなら、夫はカンカンになって怒り出すだろう。けれどももう夫も、この校長ではない。もう直ぐ、一家はレスターへと行くのだ。

レスター近郊に行けば、人々はここでの噂は何も知らない。そしてジェームズはまともな職に付けば、見違えるようになるだろうし、元々彼が有している好ましそうな印象は、周りの人々には邪気が無く写るだろう。そして何よりも、目の悪い半人前でしかないサラを、大切に扱ってくれるだろう……。

わたし、バカだったのかしら？ もう少し、頭を働かせれば……そして偏見を打ち破ればよかったのかも……。

あと三日でジェームズは出て行くはずだ。多分大した荷物も無く、カバン一つぐらいだろう。焦燥感はその。ジェームズが来たあの日以来、再びサラは激しく動揺し、何一つ口にしなかった。多分ジェームズの声が聞こえたのかもしれない。サラを救えるとしたら、やはりジェームズしか居ないのだろうか？

オーウェル夫人には分からなかった。けれども、幾分決心は付いた。

次の日の朝、本の整理をしていた夫のオーウェル氏に向かって、オーウェル夫人は勇気を出して近寄った。

「あの、あなた」

「何だね？」

オーウェル氏はめっきり白くなった頭髪と、そして老眼鏡を外し

ながら糟糠の妻を見つめた。夫人はそわそわと落ち着き無く、目をキョロキョロさせながら何か言いたそうに口元を動かしている。

「何だ？ 今忙しいんだよ」

「あのう、ちよつとお話が……」

「うん？」

「サラの事なんですけど」

「ああ、サラなら、姉のトレイシーを呼ぶよ。わたしも少しきつ過ぎたのかもしれないからな」

「いえ、あの、エドワーズとの事で」

「なに！？ エドワーズ！？」

この一言だけで、夫人は縮み上がった。少しどもりながらも、夫人は勇気を振り絞って言った。

「あなた！ サラとジェームズとのこと、考えて下さらないかしら？」

「な、何だつて！？ お前、正気なのか！？」

オーウェル氏は持っていた本を取り落とししたが、それは本が重く分厚かったからではない。

「ええ」と揉み手をしながら、夫人は答えた。「わたし、よく考えたんです。確かに、サラはあんな男を好きになってしまいましたわ。もしかしたら、身体の関係もあつたかも知れません。けれども、あの……二日前ですけど、ジェームズがここに来ましたの！ 彼は本気でしたよ、あなた！ 正式にサラと結婚したい、そう言っていましたわ！」

「な、な、なんと……」

オーウェル氏はそれ以上の言葉が出てこなかった。

「あなた！」と夫人は詰め寄った。「あなたのお気持ちは分かります。あんなウェールズ人に、可愛いサラをやるなんて、とお思いで



しょう？ でも、考えたら、目にハンディを持つサラには、もう誰一人寄って来ませんわ。ジエームズとサラを結婚させて、イングランドのどこかで慎ましく暮らさせてもいいのでは……」

「馬鹿者――！！」

と罵声が飛び、本が投げつけられた。オーウェル夫人は危うくその本に当たる所だったが、素早く身を翻した。

「お前は一体何を考えているのだ！？ 可愛いサラをあの悪魔にくれてやると言うのか？ あいつは、善人ぶっているが、悪魔なんだぞ！ お前は騙されているんだ！ さも、結婚を申し込みに来たよくな振りをして、結局ここを出て行く前に、我が家にもっと恥をかそつと言う魂胆だ。決まっている！」

「えっええ、ああ、わたしは……わたしは、ただ……」

「お前がサラをしつかりと教育しないから、あんなふしだらな娘になつたんだぞ！」

オーウェル夫人の瞳から涙が一筋こぼれ落ちた。

「ふしだらだなんて……酷すぎます」

「とにかく、こんな馬鹿げた話はもうやめろ！ 引越しの為の荷造りをさつさとやる事だな。分かったな！ もう二度と言うなよ！」

夫人は答えなかった。彼女はその場にしゃがみ込むと、スタスタと早足で歩み去る夫の背中を見つめていた。落ちている本を拾おうとして手を伸ばした時初めて、夫人は自分の夫を軽蔑したのだ。

「なあ、ボブ……もう俺には生きる目的なんか無くなっちまったよ」  
片手にウィスキーのボトル、もう片手には野の花をボブの墓標に置きながら、半分酩酊状態のジエームズは言いかけた。それはもう独り言の样でもある。

「もうさよならだよ、ボブ。お前を救えなくってごめんな、ボブ。あの時も、お前が死に掛かっていた時にも、側に居てあげられなかった。あの時、サラと一緒にだったんだ。だけど、お前は赦してくれだろうか？ 誰も赦してくれなくてもいい。お前だけでも赦してくれたら……」

けれども墓場には、ただ春の強い風が吹き抜けているだけだった。  
「それじゃ、もう行くぜ、相棒！」

そう言い掛けるとジエームズは、ウィスキーのボトルを持ったまま、立ち上がった。もうあらかた飲んでいたのだが、まだ少し底に残っている安物のウィスキーを。

\*~\*~\*~\*~\*~\*~\*

そのままフラフラと通りを歩いていると、向こうから杖を持った俯き加減の人物がこちらに向かって早足でやって来て、すれ違いそうになった。

「よう！ オーウエルのジジイ！」とジエームズは怒鳴った。嫌な奴に出会ったと感付いていたオーウエル氏は、通り過ぎようとしたが、ジエームズはもう一度喚き散らす。

「くそつたれのバカ野郎め！ 卑怯者の、エセ教育者！」

明らかに酔っ払っているジェームズの、やつれて棘棘しい表情は、その美貌をかなり損ねており、ただのチンピラにしか見えなかった。服装もかなり乱れている。

こんな男に、サラは弄ばれたのか……。

オーウェル氏の身内に戦慄がよぎった。けれどもこのまま通り過ぎようとしたが、その時オーウェル氏の中に、今まで出せなかった憎しみが押し寄せてきたのだ。もう直ぐに居なくなる男に向かって、そしてもう直ぐ居なくなる自分が居る。

「馬鹿野郎はお前だ！」

とオーウェル氏は怒鳴り返した。夕暮れが迫る、薄暗い道だ。夕餉へと向かう人々がチラホラ居り、一斉に二人を見つめた。

「何だよ、くそジジイ！ 俺の将来を台無しにしてくれたくそつたれが、よく言うぜ！」

「自分の将来を駄目にしたのは、お前自身の生き方だよ、ジェームズ！」

「何だと！ もうお前のお説教は沢山だ！ もう俺はお前の生徒なんかじゃないし、お前だつて俺の両親の借金の後見人でもない。いつまでも、俺を思い通りにしようとするな！」

ジェームズの怒鳴っている意味は、周囲の人々には全く理解できなかった。けれども、オーウェル氏にだけは、その意味がよく分かっていた。彼もまた怒りに燃えて、立ち止まった。

「お前は、復讐を果たしたのだな。恨みでうちの目の悪い娘を惑わしたのだ！ その悪魔のような微笑で」

「サラのことは言うな！」

ジェームズは本気の怒りで身を震わせた。

「サラはお前とは正反対の清らかな娘だ。お前には似つかわしくないぜ！ お前の娘とも思えねえや！ お前は腐り切った野郎さ！ 善人の教育者面しやがって、やっていることはどうなんだよ！？」

オーウェル氏の怒りは頂点に達していた。彼の杖を持つ手がブルブルと小刻みに震えているのを見たジェームズは、残りのウィスキーを飲み干すと陰険に笑って見せた。

「おい、先公よお！ お前の不幸を見てみたかったぜ。だが、その必要はもうないみたいだな」

ジェームズの嘲笑の笑いが辺りに響き渡る。そしてジェームズはペツと唾を吐くと、空のボトルをオーウェル氏に向かって投げつけた。

悲劇が起こった。肩に当たってしまったオーウェル氏は、自分の持つ杖でジェームズに打ちかかったのだ。避けようとして、ジェームズの側頭部にそれは命中し、二人はもみ合った。怒号飛び交う中、若いジェームズはオーウェル氏からその杖をもぎ取ると、今度は攻勢に出て、氏に打ちかかった。誰かの甲高い悲鳴が聞こえた。

ほとんど“殺意”とまで見える懇親の力を込めて、ジェームズは倒れたオーウェル氏の上に容赦なく何度も何度も打ち付けた。一打すること、ジェームズは今までの積年の恨みを晴らしているかのような、爽快な気分になっていた。けれどもそれは結局は幻でしかない。

程なくして、近くに居た男達がジェームズの手から杖をもぎ取り、誰かがジェームズを蹴りつけ、そしてもう一人の誰かがジェームズを背後で縛り上げた。オーウェル氏は縛られたジェームズの足元で、口や鼻から血を流しながら、横たわっている。

「い、医者、医者に運ばなければ……」

近くの老人の震え声がした。女達はみな声も失くしている様だ。

けれどもそんな惨状にも、

「うっふ、ふふふふっ」とジェームズの口から笑いが漏れた。既にジェームズの酔いは完全に醒めていた。

「オーウェル先生……これが俺の復讐さ」

けれども誰かに口元を殴られ、ジェームズは驚愕している人々の中を警察署に引き立てられていった。

もう終わりだよ、サラ……ごめんよ、サラ。だけど、もうこれでいいんだ……。

けれどもその心に反して、本物の犯罪者になったジェームズの瞳からは、希望の光が完全に消滅して行った。

☐ シスター・ルース様

……ついながら、あなたが以前申しましたメアリー・A・エドワーズの兄であるジェームズ・C・エドワーズは、傷害の罪で今はドーセットの警察に身柄を拘束されております。被害者は、C・M・オーウェル氏、57歳で、ただ今瀕死の状態で生死をさ迷っているような状況です。

もしもオーウェル氏が亡くなりでもしたら、ジェームズ・エドワーズの罪は殺人罪と言うことになるでしょう。彼は7年前の放火もあり、他にも様々な余罪があると言う以上、ジェームズの処罰はかなり厳しいものになると思われます。ことによったら、処刑という最悪の事体になるかもしれません。

メアリー・エドワーズに真実を告げるべきかどうかは、あなた様の裁量にお任せ致します。メアリーのような賢く清らかでかつ美しい女性に、かくもあのような邪な兄が居ると言う事は、まことに残念に思います。

それでは、神のご加護を！

モン  
☐

リトル・ウッド司祭 J・サイ

シスター・ルースは、憤りと哀しみのあまり、机の上でその手紙を握り潰した。

＊＼＊＼＊＼＊＼＊＼＊＼＊

「お嬢様……さあ、下に降りて下さいまし」

エレーンの声がし、扉を全開にした音がした。

「どうして……」

「もう、ここに居られる理由はなくなりましたし……それにお父様にお会いしなければ」

と言い難そうに、エレーンは告げた。

「ベス様もロバート様もおいでです。もう直ぐトレイシー様もお着きになるでしょう」

「どうしたの！？ 下で何か騒がしい音がしたけど」

エレーンはそれには答えず、ほとんど何も見えないサラの手を取った。痩せ細ったその小さな手は、けれども頼りなくエレーンの分厚い腕を掴んだ。

「教えて、何かあったのね」

ハアハアと言ったただならぬ興奮したエレーンの息遣いで、サラは直感した。

「お父様が！」

「仕方ございませんね。いつかは分かる事ですからね」

エレーンは覚悟を決めた。

「お父様は、重症を負って、ただ今臥せております。意識はございません」

「え？」

「やったのは、エドワーズです、お嬢様」

「やった？」

「彼は」とそこまで言うと、エレーンは激しい怒りで声が詰まった。  
「彼は、オーウェルの旦那様を殺そうとなさいました！」

ただでさえ弱っていたサラは、身内を雷で貫かれたような衝撃を受けて、倒れ掛かった。けれども、何の言葉も出て来ない。

「さ、お父様のお部屋に参りましょう」

久しく使わなかった足は、まるで萎えたように感じ、そして更なるシヨックの余り、ほとんどエレーンにしがみつくようにしながら、サラは急な階段をよろよろと下りた。

二階ではわざわざわという声と、そして不思議な静寂とが入り混じっていた。

「あ、サラ！」と呼びかけるオーウェル夫人の涙声が響いた。

「済みません、あたし、言っちゃいましたわ」とエレーンは夫人に向かって、謝りの言葉を述べたが、誰も聞いては居なかった。

「いつかは、分かる事よ！」と叫ぶベスのヒステリックで耳障りな声が響き渡る。

「あんたが付き合っていたあの悪魔によって、お父様はご重体になられているのよっ！　少しは目が覚めた、サラ！？」

サラはよく見えない目でベスの方を向いたが、両手で口元を覆っているだけで、何一つ言葉が出ないのだ。

「何か言つてよ、サラ！　あいつは今頃、警察署に捕えられているわ。数人が目撃していたし、自分が全てやったって白状したのよ。そして何も後悔していないとも言ったって！　あいつがあんたを自分の復讐の道具に使っていたことが、分かったでしょう！！　あんな犯罪者を愛するなんて、あんたって何て馬鹿なの！？」

「もういいのよ、ベス」とオーウェル夫人が止めに入った。「もういいの。サラも今度こそ、分かったでしょうし、わたし自身も騙されていたのよ。だからもう……サラ……いらっしやい。お父様の寝室に行きましょうね」

サラは少しずつ後退りしていた。そして、ぼんやりとした光のほ



うへ、微かに見える開け放たれた二階の窓の方へとジリッジリッと近寄った。既にサラ自身は抜け殻だったが、自分が何を欲しているか、今この時分かっただのだ。

サラは窓にクルリと振り向くと、窓枠に手を掛けた。下は見えない。それだけが幸いだ。もう何も欲しくないし、ここから逃れる事だけを考えていた。

「あゝっ！ サラー！」

最初に気付いたのは夫人だった。けれどもサラはもう半分は身を乗り出していた。サラは宙に飛び出した……と思った瞬間、何者かがサラを背後からしっかりと抱き締めた。

「サラ！ 早まらないで！ わたしよ！」

姉のトレイシーの優しい声が耳元でした。しっかりと自分を繋ぎとめる暖かくがっしりとし、決して離さないと誓ったような、その力強い腕……。

「もう大丈夫よ、サラ。わたしが居るから」

サラは抱き締めたトレイシーの胸のブラウスのレースにつかまると、声にもならない声で号泣し出した。

「サラを責めるのはもうやめて」とトレイシーは穏やかに、けれども毅然として言った。「サラもまた犠牲者なのよ！」

ベスも黙り込んだ。サラはトレイシーの豊満な胸の中で泣き続けたが、もう言葉を発する事はできなくなった。言葉は、既に何の意味も持つてはいない……。あるのはただ、全てを失うと言う事実だけ。

ジェームズの罪状は「殺人未遂罪」だった。

ジェームズは直ぐに自分の罪を認めたが、それからダンマリを決め込んだのか、何一つ言葉を発しなかった。彼への取調べは次第に過酷を極め始めた。

警察署長は、ジェームズが連れてこられた時、「やっぱりな」と一言言っただけだった。

「いつかはこうなると思っていたよ、ジェームズ。お前はいつか犯罪者になるだろうと、わたしは睨んでいたが、やはりそうだったな」ジェームズは署長の顔にペツと唾を吐きかけた。署長はゆつくりとそれをハンカチで拭くと、短い棍棒を掌に当てて近寄り、それから突然ジェームズの脛を打って床に転がすと、苦痛で呻く彼に向かって執拗にその棍棒を振り下ろした。署長はわざと表には出ないふくらはぎや臀部や背中などを狙った。

そして溜飲が下がると、牢番に短く命じた。

「この下司野郎を放り込め！」と。

署長は頑固な犯罪者に情けを掛けるほど甘くは無い。そのようにして、先頃の社会主義者（と思われる）大学生二人を、処刑してしまったのだ。自分に逆らう者は、全てが憎き犯罪者だった。まして、ジェームズは以前から目を付けていた札付きだ。

大通りで、衆人の目の前で、前校長を滅多打ちにしたのだ。何か口論していたというが、それは言い訳にはならない。

「ま、お前もこれで最後だな」

署長は、苦痛に身をよじっているジェームズを見下ろしながら、冷厳に言った。

牢番のサムは、ウェールズ人だったが、最初にジェームズの様子の変に気付いた。7年前の放火でつかまった時のような初々しさは消え果ていたが、薄紫色のアメジストのような独特な色の瞳も、形のいい鼻も昔のままだった。けれども、その瞳にはもはや輝きが無く、何処を見ているか定まらないぼんやりとした視線を宙にさ迷わせている。

鎖に繋ぐ時も、ジェームズには誰が何をしているかほとんど分からないようだった。持ってきた粗末なスープとパンにもほとんど手を付けた様子は無い。

「あいつはもう、諦めきつているらしいぜ、リック」  
とサムはもう一人の相棒に言った。

「確信犯、と言う奴だろう。この間の、学生達は最後は見苦しく命乞いしていたが、あいつはやらないだろうな」

「最後まで、ふてぶてしく終わるつもりだろうか」

「どうせ、又処刑されるか、よくてオーストラリアへ流刑だぜ」

「どっちに転んでも、良くは無いさ。あの若さなのに、哀れなものだ」

サムは呟くと、安い葉巻を加えた。

「イングリッド女にさえ狂わなきゃ、あいつも普通に生活できたらうに」

「所詮高嶺の花だよ。例えブスで、目が悪くたって、あいつらはあいつら。俺達に抱かれる女など、軽蔑に値いするらしいぜ」

二人は少しだけ笑いあった。

「馬鹿だよな、あいつ。もう少しまともになりやあ、そこそこの生活が出来たのに。あの容姿、あの頭のよさ……けれどももうお終いかね？」

サムは牢を振り返り、二回目の尋問の後に放り込んだきり動かないジエームズをチラと見つめた。ジエームズの脚はどちらも裸足で、片方には破れた黒い靴下、もう片方は靴下もどこかへ行ったらしく本当の素足だった。

両足の裏とも、ゴム・ホースで殴られて赤く腫れていた。恐らく一人ではとても歩けないし、靴も履けないだろう。

「全く、哀れだ」

「哀れだ哀れだって、おめえらしくもないぜ、サム」

「だってそうだろうが！」とサムは煙を吐きながら言った。「あいつはこの町では一番と言われるほどの容姿端麗な若者だったし、将来だってもっと幸福になるべきだったんだぜ。それがこうなったのには、何か因縁があるんだろうな。」

町の者達はいいつがオーウエル of 旦那の小娘を誘惑したと言っているが、俺に言わせりゃ、逆だね。あの娘の方が、入れあげていたんじゃないか、と俺は思っている。あいつ、正式にプロポーズまでしてやがったって言うぜ。種を撒いたのは、あの小娘の方かもな」

「誰が信じるよ!？」

「信じなくても、いいぜ。真実は闇の中だもんな」

「だから、慌てて引越すってか？ 案外それが事実なのかもしれないな」

リックも頷いた。

「どちらにせよ、運命は過酷だったってことさ。もう逃れようが無い。裁判なんかは、あつて無きが如しさ。ま、巡回判事が来るまでの間だろうぜ」

「若者が立て続けに吊るされるのを見るのは、何だか辛えな」

「ある意味、自業自得だけだな」

暫く沈黙があった。

「少なくとも、署長は明日から親戚の結婚式で、数日は留守をするから、取調べはひとまず小休止つてとこだ。今はグッタリのジェームズだが、若いから巡回判事が到着する頃には、幾らか回復しているだろう」

「だろうか、リック？」とサムは疑い深く言った。「今晚辺り、署長はあいつを呼び出すんじゃないか？ 署長の良くない噂は知っているだろう？ 本来なら、大英帝国では犯罪だぜ、あれは。この間の大学生の一人だって、遣られたらしいっていうからな」

「署長のシユミだろ。それには文句は言えねえよ。何しろ、相手は犯罪者なんだ、誰も耳を傾けないし、それはある種の特権だし。ジームズには、以前から署長が目を付けていたらしいから」

「おぞましい！ それを止める事はできないのかい？」

「できるわきゃねえだろ」とリックは吐き捨てるように言った。「署長は、犯罪者でも、美人と色男には目が無い。何人もの女が、レイプされていたのを、俺達は黙って見ていたじゃないか！ こんなこと、誰にも言ってはなんねえぞ。俺達が責任を取らされるのは嫌だからな。家族もいるしよ」

再び沈黙が訪れ、サムはひたすら葉巻を加えていた。

サムが煙で輪っかを作っていた時、署長が現れた。二人は素早く目配せすると、「へい」と卑屈に挨拶した。

「何か御用で？」

「あいつを、俺の取調室に入れろ」

「今ですか？ 夕飯は？」とリック。サムは黙って下を向いていた。

「小一時間したら、放免するからその後でいい。もう少し、あいつを調べたい」

「けれど、もうかなり弱っていますぜ、旦那」

「それは好都合だな、サム」と署長はニンマリ嗤った。「さ、早くしろ！」

サムとリックは、ジェームズの鎖を外すと、彼を引きずるようにして署長の待つ取調室に入れた。

「俺達は何も知らない。見ない、聞かない、言わないだな、サム」  
リックがそう言い掛けると、サムはペツと唾を床に吐いた。

「そうさ！ 俺達も結局は共犯者なんだよ」

ジェームズは己れの罪を自覚していた。結局、サラから父親までも奪ってしまった。或いは奪おうとしている。彼女の恥は雪がれな  
いばかりか、もうサラから何もかも奪い去ったのだった。愛するサラは、石を持って追われるが如く、このドーセットを去ることだろう。憎しみは結局何物をも生まず、幸せを剥ぎ取っていった。今では、肉体的苦痛も仕方ないと受け止める事ができる。最悪の結末も、もうジェームズには分かっていた。

けれども署長の隠れた悪行を知り尽くしているジェームズにとって、今この部屋で署長が何をしようとしているかに気付くと、自然と身体が拒絶反応の為に震え出していた。

「さて、麗しいジェームズ…… やつと二人になれたな」

署長は暗い夜空を窓際から覗いた。薄暗い灯火だけが、取調室を照らしているだけだ。後ろ手に手錠を掛けられているジェームズは、ほとんど腰を下したままだったが、少し後退りをした。けれども、狭い部屋では直ぐに壁にぶつかる。

背中に当たる堅い壁がジェームズを恐怖に陥れた。

署長は振り返ると、両手を後ろで組み、しげしげとジェームズを見下ろした。

「昔のお前はまだ少年だった。だが、今でも、このような有様でもお前はそそらせるな。どうせ、あの小娘を誑かすのは訳は無かっただろう？」

「寄るな……」とジェームズは乾いた声で言った。けれどももう一つの恐怖が、ジェームズを襲ったのだ。

卑しい署長の顔が、はつきりとは見えない。二重三重になって、自分に向かつて来る！

ジェームズは頭を振った。

「嫌なのか？ だろうな」と署長は小さく嗤った。けれどもジェームズが頭を振ったのは、ただ拒絶の意味だけではない事に、署長は気付かなかつた。驚愕に半開きにしたジェームズの唇に、署長は自分の唇を寄せた。

「またお前を抱けるとは！ けれどもわたしを恨むなよ。恨むなら、自らの罪を恨め」

署長はジェームズをうつ伏せに転がすと、ズボンを下に引き下した。荒々しい欲望が小役人の彼を吞みつくして行く。

「罪人のお前が、他人の罪をとにかく言う資格は無いことを知るんだな」

そう言うのと、署長はフツと灯火を消した。

ジェームズは二重の恐怖と痛みと、そして全身を襲うおぞましさで吐き気を覚えた。行為の間中、ジェームズはこのまま自分が消滅すればいいとだけ願っていた。

＊～＊～＊～＊～＊

署長は自分の欲望を思い切り満たすとサムを呼びつけ、既にほとんど何の力も無くしている囚人を牢に戻せと命令した。

「わたしは明日から暫く居ないが、その間こいつには甘えさせるなよ。一日に豆のスープとジャガイモだけだ。誰とも会わせるな！」「へい」とサムは卑屈に答えた。

既にジェームズの顔は蒼白で抜け殻のようであり、そして髪はクシャクシャでそしてシャツはみつともなくはみだしたままだった。



署長が何をしたか一目瞭然だったが、サムはおとなしく命令どおりにやればいいだけなのだ。

今晩はリックは自宅に戻り、牢番は自分だけだ。サムは一人チェスをし始めると、時折鉄の格子越しに、囚人をチラチラと見つめていた。

ジェームズは壁に寄りかかり、じつと一点を見つめているだけだった。その瞳には何も宿らず、何も見えない。ジェームズは運命の皮肉に、少しだけ微笑んだ。

サラ……俺、もう何も見えないよ。君と同じになった。あの時、校長が俺の頭をぶっ叩いたせいだろうか？ それとも、署長が俺の目の辺りを殴ったせいだろうか？ もうその原因はどうでもいいけど……ただ暗闇と吐き気の中で、君だけが鮮明に浮かび上がるのは何故だろうか？

損得や駆け引きや騙し合いの無い世界で君と愛し合ったことだけが、今の俺に残っている唯一の持ち物、財産だ。ただ、思い出だけが俺のもの。君と所帯を持つという儚い夢は永遠に消え去ってしまったが……俺はいつだって君を間近に感じる。そして”見えるんだ”！

あの静寂な世界で、古代の石の上をポンポンと飛び跳ねたね。楽しかった！ それから、夕暮れ近いポート・ハウスで、君とただ何もしないでじつとしていたあの至福のひと時。あのユラユラと揺らめいていた、炎の色……。

俺が見えなくなっただけで、今でも唯一君と結びついている証しなんだ。ねえ……君は幸せになるべきだ。今まで散々苦しいことや辛い事、悲しい事があつたんだから。

もう世間の事は見たくないし、見る事もできないさ。ただ一つ望む事があるとしたら、俺の意識のある間に、もう一度君に会いたい

！　それだけかな……。

ボブ！　ほら、もう直ぐ俺達一緒に会えるよ、と言っただろう？  
そうだよ、又会おうな！　直ぐに会えるから、天上のどこかで待  
っていてくれよ……。

サムは、晩飯を持って行ったとき、ジェームズの視線と自分の視  
線が合わないのに気付いた。

「もしや……」

サムはジェームズの目の前で手をヒラヒラさせたが、ジェームズ  
は何の感覚も無いようだった。

サムはずっと昔、こういう囚人を知っていた。そしてその囚人は、  
処刑までもたずに死んだのだ。冷たい牢の中で……。

サムは慄然とし、けれども何事もないかのように振舞った。遠く  
から、署長の馬車の音が遠ざかって行った。

トレイシーは何年ぶりかで実家に一事帰宅したが、そこはもはや以前の実家とは程遠いものだった。その上、その実家ももう直ぐ無くなってしまうのだ。たった数年の間に、かくも全てが変化してしまつとはとても信じがたいことだ。けれどもそれが現実なのだ。

きちんと整っていた家の中は、今や雑然としていたし、家中に漂う暗いムードたるや、最悪だった。母親のオーウェル夫人はもうほとんど白髪となり（それも最近急激に増えたと言う）、父親は未だ薄暗い寝室で昏睡状態のまま。

長姉のベスはヒステリックに喚き散らしていたし、ロバートはむつつり、そして末の弟のピーターは大学のあるロンドンにさっさと戻って行った。

けれどもトレイシーが何よりも驚いたのは、自分に預けられた末の妹のサラのその姿だった。トレイシーが嫁ぐ前のサラは、分厚いレンズの眼鏡を掛けた、おとなしい小さな少女でしかなかったが、今ここに居るサラは、やつれ果ててはいるものの、立派な成熟しきった娘であり、眼鏡がないので虚ろに瞬く瞳を持つ、色香漂う“女”だった。

けれどもサラの状態は芳しくなく、明らかに窓から身を投げようとしていたのを抱き止めてからは、トレイシーはサラの側に付ききりだった。

このような悲惨な状態にありながらも、トレイシーはどこか楽天的で暖かった。ベスから、サラをレスターの伯母の元に送り届けたい、と頼まれた時はちょうど久しぶりに、かなり年上の夫か

らも子供達からも遠ざかって自由な空気を吸いたいと言う思いが、ほとんど渴望に近くなっていたからだ。

トレイシーは家庭の中で窒息しそうになっていた。けれども揉め事を起こしたり、ベスのように言いたいことを言う事も出来ないような性格のトレイシーにとっては、嫁ぎ先はまさに牢獄のようだったのだ。

トレイシーは実家に戻る前に、妹サラのスカンダルを聞かされては居たものの、実際にこの目で見えるまでは何もかも信じられなかった。けれども包帯だらけの蒼白な顔で横たわっている父親や、著しく成長はしたが、ほとんど廃人のようなサラを見て以来、心境は変化した。

まずトレイシーはからくも助けたサラを自室へ戻してやり、心を閉ざし何も喋れなくなった妹の側に出来るだけ寄り添ってあげることにした。汚れた服を脱がせ、風呂に入れてやり、綺麗な色のブラウスを着せ、その豊かな赤毛を解かしつけて、ピンクのリボンで留めた。

その間も、サラはただぼんやりとした目付きのまま、一言も喋らなかった。家族もサラをトレイシーに預けてホッとしたのか、少し落ち着きを取り戻していた。トレイシーは居るだけで誰をも安堵させる……そういう得がたい資質を生まれつき持っていたのだ。

けれどもサラは重荷を背負って打ちひしがれ、何をされても魂のない人形のように力や意志を無くして、されるままになっているだけだった。

トレイシーはこのおとなしかった妹のどこに、ウェールズ人の若者と情を通じる情熱が潜んでいたのかと疑ってみた。そしてこのような妹サラと付き合っていたと言う例のウェールズ人の教え子とはどういう若者だったのかも、ずっと思い巡らせていた。

「6、7年前に納屋に放火して捕まったこともある、チンピラよ」とベスは簡単に説明したが、トレイシーには別に思い当たる節があった。

大昔、母やサラがロンドンに長期に滞在していた折、父親のオーウェル校長が家に連れてきた貧しい3人の生徒の一人だ！ その中でも、特に目だって綺麗な、オドオドとした素振りの茶褐色の髪の毛の子だった。かなり年上の娘だったトレイシーには、男の子というよりも女の子にも見えたが、トレイシーが「名前は？」と尋ねた時、その子はチラツと目だけを上げ、「ジェームズ・エドワーズです」と小声で答えただけだった。けれどもその時の印象は強烈だった。

嫁いで以来、青年になったジェームズに会った事はなかったものの、サラが彼に弾かれた理由は何となく理解できた。サラは目が見え始めてから、見える全ての物や人が美しいと、かねがね言っていたからだ。サラはジェームズの持つ魔性の美貌に参ってしまったのかもしれない。少女特有の感傷がそれに輪をかけたのだろうか？ それとも、もつと他の理由が……？

トレイシーが来て二日後、父親のオーウェル氏は意識を取り戻し、家の中が幾分明るくなった。ただし医師は家族に対して、オーウェル氏の下半身の麻痺が残るかもしれない、と告げる事は忘れなかった。

これでジェームズは殺人犯ではなく、殺人未遂犯と言うよりも単なる障害犯となり、もしかすると刑も減刑されるかもしれないと言った憶測も流れて始めた。ここの町のウェールズ人の人々は、立て続けに起こるだろう処刑に対しては敏感になっていたからだ。

たとえ極悪非道な人間であつたとしても、連続してウェールズ人の若者を吊るす事は難しい状況だったし、何よりも一方的ではなく、杖を最初に振り上げたのはオーウェル氏だと、目撃者は語っていた

からだ。

「何てことなの！ 父は傷害が残るかもしれないと言うのに、妹を虜にして駄目にしたあいつには、この間の社会主義者の学生のような罰は下りないかもしれないなんて！ 何と言つても、あいつは邪悪な犯罪者じゃないの！ 妹の一生も、父の残りの老後も全てを目茶目茶にしまった。あいつには死刑がお似合いなのに！」

ベスは噂を聞くと怒り狂った。けれどもトレイシーは複雑な感情を抱きつつ、「そうね」とだけ言うのが精一杯だったのだ。

「もう直ぐあいつの公判が始まるのだけれど、わたしは家族の元に帰らなければ。夫も子供達も待っているし。ひとまず父は助かったし、サラはあなたが見てくれるだろうし。それじゃあ、頼んだわね、トレイシー！」

分かった？ 妹を甘えさせないでね。こうなったのも、障害があるからと、母さんがサラを甘やかしすぎたのよ。そしてあいつの処罰が決まったら、出来たら直ぐにわたしに知らせるのよ。いいわね！？」

ベスがこう言い置いて帰った後は、官舎には奇妙な静寂が訪れた。残った家族の全てが疲れ果て、やつれ切っていた。

トレイシーがサラの髪を優しく梳っていた時、サラのか細い声でした。

「ありがとう……トレイシー姉さん……」

サラが身投げしようとしてから、もう一週間は経っていた。突然のサラの言葉に、トレイシーは驚き、次に大喜びで妹を抱き締めた。「サラ！ やつと口がきける様になったのね！」

トレイシーの決して押し付けがましくない暖かい態度がサラに良い影響を与えたのかもしれない。と言うよりも、サラはやっと自分を取り戻しつつあるのかもしれないかった。

「まだ……だめよ……混乱していて」

「大丈夫よ。ショックの余り言葉が出なくなった人は幾らでも知っているけど、その内に皆良くなっていったわよ。それにお父様も、少しずつ回復してきたし」

トレイシーはサラのおでこにキスをした。

「あなたも少しずつ焦らずに行きましょうね」

「ええ」と答えたサラの言葉は、やはり力なく響いた。

「裁判は？」

「裁判？ えっ？ あの男のこと？」

サラは頷いた。まだ忘れられないんだわ、とトレイシーは痛切に感じたが、努めて明るく言った。

「巡回判事が、なかなか回って来ないのよ。でも、近い内には開かれるでしょうね。外はどこか不穏な空気なんだけど……町の人々は、エドワーズには同情的ではないけれど、それよりもっと署長を憎

んでいるらしいし」

サラは俯いた。再びジェームズの事が頭に浮かぶ。片時も忘れた事はないし、忘れられるはずがない。

「少なくとも、死刑はないわよね」とサラは突如顔を上げると、すっかりとした声で聞いた。

「死刑！？ そうね……別に殺したわけじゃないし」

けれどもトレイシーはジェームズが牢の中で日に日に衰弱している事を耳にしていたものの、それは伏せる事にした。

「ねえ、サラ……今更こんなこと聞いて気を悪くしないでね。あの男、つまりエドワーズとの間柄は本当の所、どうだったの？」

「弄ばれた、と言わせたいの？ それなら、“ノー”よ！」

サラの返事は激烈だった。

「でも神様はなぜわたしに光をくれたのかしら？ あの人を愛し、そして罪を犯させ、もしかすると死んで行くのをわたしに見せるために、わざわざ光をくれたのかしら？」

「そんなことを言っちゃだめよ！」とトレイシーは叫んだ。「何てことを言うの、サラ！」

「いいえ、そうなのよ。わたしが、光を欲しかったから。何としてでも、光が欲しかった。見えるようになったかった。」

子供の頃、わたしは利己的な願を掛けたの。『神様、見えるようになったら、その後はどうなっても構いません』と。確かにそれは聞き入れられたわ……でも、報いもやって来た。神様は正直なのよ」

「でも、エドワーズはあなたを騙して……」

「わたし達、愛し合っていたわ」とサラはキツパリと言った。「何があっても、彼が犯罪者になった今でも、わたしは彼を愛している。それだけは、はっきりしているの。自分を偽る事なんて出来ない！

例えもう彼に会えなくても……これだけは言いたかった」



サラの言葉は、トレイシーの心の奥に秘めた何かを激しく突き動かした。

「サラ……」

「わたし達、神様に騙されたの。幸せになるんだとばかり思っていた。でも物事は反対に動いてしまつて……もうわたしは……わたしは……」

サラは再び黙り込んだ。サラを抱き締めながら、トレイシーは“ある事”を思い出していた。

「わたしはエドワーズを憎んでいるのよ。父を殺そうとした男ですもの。でも、どこかで憎みきれない……なぜかしら？」

「姉さん？」とサラは小声で尋ねた。「姉さん、震えているわね」「そんな事ないわよ」とトレイシーは明るく言う、腕を離れた。

けれども敏感なサラには、姉が何かを隠しているらしい事は直ぐに悟ったのだ。あえて聞かなかったのは、それは姉の気持ちを踏みにじるだろうと言う事に気付いていたからだ。

「例えほとんど見えなくても、ジエームズに会って一言言いたい事があるの。でもこれは無理なお願いね」

「難しいわね。でも、奇跡が起こるかもしれないわよ」

トレイシーは春の光が降り注ぐ窓辺に目を転じた。

\*~\*~\*~\*~\*~\*

昔、毎日牛乳を配達してくれていた一人の若者が居た。留守がちの母親に代わって家事一切を切り盛りしていたトレイシーはその若者に毎朝会っている内に、少しずつ好ましいものを感じ始め、そして段々とそれは恋心に変って行ったのだ。

若者の方も、少しずつトレイシーの気持ちを知り始め、裏口で二

人は喋りあうようになった。何気ない一言、何気ない素振り、そしてトレイシーを見つめる真摯な瞳。そばかすがあったが、ブルーの綺麗な瞳の若者だった。

けれどもある日、彼は淡々とこう告げたのだ。

「トレイシーさん……明日、俺はここを発ちます。それでお別れを」「えー？」

トレイシーの全身から血の気が引いた。

「なぜ？」

「解雇されました」

若者はそう言つと黙り込んだ。

「もう今日までです。黙つて去ろうと思っていたけれど、できなくて。トレイシーさんには良くして頂いたから。どうもありがとう」「シヨーン！」と初めてトレイシーは若者の名前を呼んだ。「行かないで！」

「でも……」

「行かないで……」

そう懇願するトレイシーの瞳には見る見るうちに涙が浮かんた。その時まで、これが愛だとは気付かなかった自分が口惜しかった。「俺も残念です。でもひと時、夢を見させてくれました。毎朝、とても楽しかった。それじゃ……お元気で。いい人と結婚して幸せになつて下さい。俺の願いと言つたら、それだけです」

シヨーンは自分の気持ちをぐつと抑えると、微かに微笑んだ。

瞬間二人は激しい口付けを交していた。長い口付けのあと、シヨーンはやつと離れると、もう既に言葉もなく立ち尽くしていたトレイシーに向かって、わざと健気に言った。

「じゃ……」

「さよ……うな……ら……」

ショーンの姿が見えなくなると、トレイシーは台所の片隅で声を押し殺して激しく泣いた。ショーンもまたウェールズ人だったのだ。

トレイシーは自分が持つ情熱の遺伝子が、サラにもあるのだと知った。自分にはサラほどの勇気もなかったし、情熱も足りなかった。だからこそ、彼女はサラの願いを遂げる決心をしたのだった。

## 約束ゝ別れ、そして再び 1

約束ゝ別れ、そして再び

1

警察署長は、確かに約一週間近くは留守にしていた。

けれども春のうらかな日が続いた後に、何日か冷たい雨がやって来た。もともと寒い半地下の牢獄は更に冷え冷えとしていた。犯罪者達の悲鳴や呻き声が無い日が続くという事は、サムにとっては“良い日より”なのだった。

常々サムもサムの上さんも、牢番の仕事をやめたい、と思つてゐるのだが、炭鋤で足を悪くしたサムにとっては、これ以上の仕事は見つからなかった。

ジエームズは雨の日日には毛布を引つかぶったまま、ベッドもない石の壁にへばりつくようにしてしゃがんでじつとしていた。いつまで経つても腫れ上がった両足には靴は入らず、相変わらずの素足のままで、背中の傷は痛み、シャツはともかくも、上着を着ることも出来なかった。

着ている服は誰からも差し入れが無い為、捕えられた時からずっと同じもので汚れきっていたし、豊かな髪はクシャクシャで、そしてうつすらと無精髭が生えていた。

肉体の傷よりももっと、ジエームズは署長に陵辱された屈辱感と、既にほとんど盲目になってしまった視力の為、心が麻痺しそして暗黒の中にあつた。

ところで署長の居ない間、異変に気付いたサムは、リックにも内緒で知り合いの医者を隣町から呼んで来た。この医者は老人で、そ

して炭鋤夫達の怪我などを診ていた医師だったが、彼は注意深くジエームズを診察すると、別室に入り黙ったままぶら下げた聴診器を外してカバンに入れ込んだ。

「先生！」とサムは、恐る恐る言いかけた。「どうなんです？ 料金は僅かしかないんですがね」

医師は首を振っただけだった。

「公判はいつ？」

「さあ、巡回判事が来てからは直ぐでしょうが」

「どうだかな……もつかどうか、だね」

「それはどう言う意味です？」

「この若者の目はもう見えないよ。脳を損傷しているんだな。酷い頭痛もあるはずだ。食欲は？」

「時々吐きますが」

「だろうね」

「先生！」とサムは煮え切らない医師に向かって叫んだ。「どうなんです？」

「現代の医学では無理だよ」と医師はぶっきら棒に答えた。「この若者は相手にも傷害を負わせたが、相手もかなりの憎しみを持って杖を振り下ろしたらしい」

「それじゃ、おあいこだ！ だから、無罪でしょうが！」

「例えそうでも……もう彼はもたない。今はまだ若いから何とかもつてはいるが、段々衰弱して行つて、もう立てなくなるだろう。公判も開かれるかどうか分からね。医療刑務所に護送されるかもしれない。が、ウェールズ人だから無理だろうな」

「それじゃあ……」

サムは愕然とした。医師はサムの肩をポンポンと優しく叩いた。

「せめて、あんたのような人が牢番で、この若者は幸せだよ。医療

費は、いつでもいい」

「せんせ……い」とサムは呟いた。「ありがとうございます」

「いいよ。炭鉱では、もつと酷い労働者達を見てきたからな。お国の為とは言え、哀れな若者達ばかりだったよ」

「え、ええ」

サムは年取った医師の背中を呆然として見つめていた。サムができる事と言ったら、この程度だった。が、少なくともジェームズは、この陰気な場所にしては最後の穏やかな時間を持つ事が出来たのだ。

ジェームズは既に悟っていた。命の残り火が、あと少しだという事を。

サムは昼食を持って来て、ジェームズの隣に座った。高い窓から容赦なく雨が振り込んでくるが、ジェームズは横向きで壁にグツタリともたれているだけだ。

けれども人の気配で少しだけ顔を上げた。

「昼食だ。食べないと身体が持たないぞ」

沈黙がそれに答える。ジェームズがもうほとんど食べ物を口にしていけないのを、サムは知っていたのだが。

「オーウェルの旦那が助かったそうだが。これでひよつとしたら、お前の罪も減刑になるかも知れんな。何てったって、二ヶ月続いて若いウエルズ人の男を吊るすのは、こちらとも嫌だからな。なあ、お前、ホツとしたらどう？ 何とか言えよ」

ジェームズの沈黙に辟易したサムは思わず、ジェームズの肩を持つてゆすった。

「うつつ」 とジェームズは顔を歪めた。

「痛いのか？」

「頭……」

「だが、お前の命は助かるだろうよ」

「嘘だよ、そんなの」と初めてジェームズはまともに答えた。

「ただその前に、サラに会いたいが……もう何も見えねえや」  
ジェームズは盲いた目を宙にさ迷わせた。

「あいつを殴った事は後悔していない。けれど、あの娘を破滅させてしまった。それだけが、心残りだな。妹は一人で何とかやって行くだろうが……」

ジェームズは誰かを探るように手を伸ばした。その当ての無い腕をサムはしっかりと握り返した。痛ましさは胸を突く。

「ジェームズ……何か食いたいのものは無いか？ 上さんに言って料理してもらうさ。今はイチゴが美味しい時期だ。イチゴのマフィンや、煙草はどうだい？」

「あんたは不思議な人だね」とジェームズは言った。「俺の為に何かをしてくれるなんて」

サムがジェームズの腕を離すと、その腕はストンと石畳の床に落ちた。藁クズがジェームズの髪に散っている。

「希望を持たなきゃ駄目だぜ」

とサムは言い掛けたが、ジェームズはただ微かに穏やかに笑っただけだった。

「希望？ そんなもの……もういい。雨の音がするな……」

6月の雨が降り続く。

オーウェル氏の回復は一日一日と著しかった。町の人々は、ジェームズの刑が思ったよりも軽くなりそうなので、なぜか安堵していた。

けれどもそれは大きな大間違いだったのだ。戻って来た署長には奥の手があつた。それはジェームズの上着の内ポケットにクシャクシャになって入っていた、例のアジビラの半分で、署長はこれを証拠にして、ジェームズを社会主義者にし立てようと企てた。

署長は刑罰用の太い皮鞭を使ってみたが、ジェームズのほとんど半開きの口元からは何一つ言葉が出てこなかった。ジェームズが既にはほとんど盲目なのは知っていたが、署長は囚人には一切情けを掛けなかった。同じように、ジェームズはあくまで頑固に否定した。

「これは、お前のかい？ それとも誰かのものか？」  
友人のドリューを売ることは、もうジェームズには考えられなかった。どちらにせよ一緒なのだ。残っている友達には、自分達の分、幸せになつて欲しいと。

ぐったりとしたジェームズを牢に戻した後、サムはリックに言いかけた。

「こいつ、もう公判までもちそうに無いな」  
「あの校長の娘のサrahは、あさつて姉と共にレスターに向かうそう  
だ。ロンドン行きの切符を買ったそうだけ」

ロンドン……自分達が暮らすはずだった、華やかな霧の都。1  
9世紀末の大英帝国の繁栄の街。そして自分達の未来の希望だった、



大都会。それももう、今は儚い……。

サラももう直ぐここを出て行く。サラは幸せになるだろうか……？  
神様、サラの将来に幸があるように！

「あのサラって娘は、本気であいつを愛していたんだろうかな？  
それとも今は憎んでいるのだろうか？」

「リック……詮索は止めようぜ。俺達にはどうでもいいことだ」  
二人は顔を見交わすと、泥人形のように動かないジェームズをじつと鉄格子越しに見つめた。

署長は最後の手段に出た。かねてからドリュウ・シーモアに目を付けていた彼は、ドリュウをその晩に呼び出したのだ。

ドリュウは内心では恐れ慄きながら、恐る恐るやって来た。そして策略とは知らず、牢に一番近い暗い部屋で、小さくて硬い椅子にその巨体をチョコンとのつけた。我ながら可笑しな光景だろうとは思ったが、目の前の署長の蛇のような陰湿で執念深い目付きと、人を人とも思わぬ愚弄したような口振りに、胸糞の悪さを覚えた。こんな男にジェームズは捕まってしまうていたのか！ 奴がジェームズをどのように扱ったか、想像できると言うもんだ！

けれどもドリュウの思考は、目の前のボロい机の上にある、自分が取って来ていたアジビラの破片を見て、心臓が凍りつきそうになった。やばい……。汗が吹き出てくる。

『今こそ立ち上がれ！ 同胞よ！』

「君はこれを見たことがあるかね？」

この上なく横柄な人を圧する声が耳元でした。

「あ……え、ええ」

「これはジェームズが持っていたものだ。君はジェームズがこれを何処で手に入れたか、知つとるだろう？」

ドリュウはごくりと唾を飲み込んだ。

「ええっと、これは……その……この間の……あの、あいつらの……演説の時、確か……ええっと……」

ドリューは緊張の余りしどろもどろになり、思わずケルト語で喋っていた。

「ちゃんとイングリッシュを使いたまえ！」

「あ、はい、はい……」

ドリューは机の下で両手を握り締めた。

「あの時……あ、あいつが拾って、それでポケットに入れていました」

「ジェームズ・エドワーズが拾ったと言うのかね？」

署長の目が細くなり、獲物を前にした狼のようにキラリと光った。

「あ、はい」

「ほう！？ それじゃ、エドワーズはあの社会主義者達の仲間だったのかい？」

「いいえ、俺、俺、何も知らないんで……」

「奴らの仲間だったのか、と聞いているんだ！」

署長はドンと机を叩いた。わざと隣のジェームズに聞こえるが如く。

「いや……分かりません」

「それじゃ、なぜこんな物を持っているんだ？」

ドリューはシミだらけの古い机の板の年輪をじつと見つめているだけだった。けれども、つと顔を上げると、何かを言わなくてはならないという明証しがたい発作に襲われつつ、言い出した。

「お、俺、あいつに……つまり、それ捨てるようにって忠告したんですよ。けれど、あいつは、あ、あのう、あのう……あいつは、でもこれをまだ持っているって……それで……」

ドリューはこれ以上の嘘を付くのに耐えかねて、言葉を切った。胸には錐が刺さったように感じ、そして冷や汗が流れ出た。

けれども署長は満足しきった勝ち誇った目付きでドリューを見下ろすと、煙草の煙をふーっとドリューに吹きかけ、「それで？」と顎で促した。

「あ、あいつはなぜか奴らに同情的だったし、賛同しているような所があったから……それでピラを持っていたのかも……知れませんが」  
「なるほどな。なあ、ドリュー・シーモア、そういうのを“仲間”と言っんだ。よく覚えておけ」

「仲間だとは、言っていない！」

「それじゃ？」

ドリューは黙り込んだ。息苦しかった。

ほどなくしてやっとドリューは放免されたが、小雨の中、どこをどう歩いて鍛冶屋へ辿り着いたのか、全く覚えていなかった。

人を裏切る事がこんなに辛いとは！

俺は3回否定したペトロと同じ（＊ キリスト受難の折、友人ペトロは3回『彼を知らない』と否認した事をさす）じゃないかいざとなると保身に走り、三重にジエームズを裏切ったんだ！

偽証をした、彼に罪を押し付けた、そして浅ましくも逃げちゃった！

ドリューの顔は涙と雨でくしゃくしゃに濡れていた。

「散歩に出かけないこと？ サラ？」

ボンネットを二つ手にしたトレイシーは、テーブルに座っていたサラの元にやって来た。旅の荷造りもすっかり終わり、お茶の時間も終わった。まだ後発の父親のオーウェル氏はもっと回復してから出立する事になっており、新任の校長が来るぎりぎりまで官舎に留まる予定だった。

「散歩するですって！？ そんなこと、耐えられない」

「そうね、無理はしない方が」とオーウェル夫人は言いかけたが、トレイシーはキツパリと遮った。

「でも明日の早朝、ここを発つよ。ここへはもう二度と戻れないわ。自分の脳裏にドーセットを焼き付けておかなくてはならないとは思わない？ 後悔しない為に」

「ここにはもう悲しみしか存在しないの！ もうわたしにはドーセットなんて、どうでもいい」

「そうかしらね、サラ？」とトレイシーは意味ありげに囁いた。そして小声で誰にも分からないように、耳打ちしたのだ。

「散歩コースの途中に、警察署があるのよ。もしもあなたが本心から望むのなら、そしてそこまでの勇気があるのなら……」

あとは言わなくともサラには分かった。姉はあえて大胆で危険な賭けをしようとしているのだ。それもこれも、自分の為に！ この眼鏡なしの視力の弱った瞳で何が見えるかは疑問だったが、少なくともジエームズが捕らえられているという牢の側を通れるかもしれない。

巷の噂では、3日後に控えた公判では、ジェームズは傷害罪と国家転覆罪で、もしかすると極刑が言い渡されるかもしれないと事だったし、又他の噂に寄ると、かなり手酷く扱われていて病いに冒されているとも聞いていた。

「ええ、わたし」とサラはドキドキした胸をさり気なく隠しながら、姉の手を取った。

「連れて行って、お姉様。行きます。心から望んでいるの。いいえ、この事しか望んでいないのかもしれない……」

最後の言葉はオーウェル夫人には聞こえなかったが、彼女は最近では幾分明るさと分別を取り戻していた。もうすぐここを去れば、厄介な事は全て終わってしまう……そういう楽観的な気分は、夫人の心を広くしていた。

「行つていらつしやいよ、サラ。色々あったけれど、でもここは第二の故郷なんだから。わたし達も、レスターからウェールズに来て、違った土地で苦勞をしたけれど、今となつては懐かしくも感じられるわね」

「ええ、それじゃお母様。わたし、サラを連れて行きますわ」

トレイシーは虫も食わない無邪気そうな微笑を向けると、サラの手を取った。

「大丈夫よ、わたしが付いてるから」

\*ゝ\*ゝ\*ゝ\*ゝ\*ゝ\*ゝ\*

外は雨上がりの泥だらけの道だった。町を行きかう人々は、このかなり歳の離れた女性二人が姉妹だとは誰も思わなかったし、ましてふつくらした女性の隣の小柄で青白い内向き加減の娘が、サラ・オーウェルだとは気付きもしなかった。

町の人々はサラをほとんど知らなかったし、又知っていたとしても分厚いレンズの眼鏡を掛けた小さな“少女”としてしか覚えていなかったのだ。

けれども皮肉な事にここ一ヶ月以上、人の噂に乗らない事はないほど“有名”になっていたのだ。“下司で卑劣”な若者と情を通じた尻軽な娘として、そしてその若者に殺されかけた元校長の末娘として、監禁されていたが、いずれどこかへ去って行くイングリッシュの娘として……。

久しぶりに外出し、歩くサラの足取りは、ぬかるみに足を取られてもつとおぼつかなかったが、彼女はトレイシーの太い腕にしがみつくようにしながら、やつとのことで歩いていた。

例の栗の大木や川、ドーセットの古びた町並みがぼんやりとだが視界に入っては消えた。

サラの身体を突き動かしているのは唯一つしかなかったのを、トレイシーは知っていたのか、黙して、か細い妹を支えていた。

「ここよ、サラ」

「……？」

「あそこ。牢獄の側」

そこは暗い陰気な建物で、窓らしい窓もほとんど無い。窓は中庭に向かっているのだろうか？　サラの足は震え出し、身体はピクリとも動かなくなった。

「姉さん！　わたし……わたし、だめ……」

「じゃこのまま通り過ぎましょう」とトレイシーはわざとらしい口調で言った。「あなたがそれでいいのなら」

「いやっ！　それはいや！」

「でしょ？　それじゃちょっとここで待っててくれる？　いいわね」

トレイシーはサラを一人で残すと、中に入って行った。トレイシ

「自身も事が巧く運ぶとは到底信じていなかった。けれどもサムを見た時に、なぜか安堵感が押し寄せてきたのだ。」

「あの、わたし……トレイシー・ハドソン。オーウエルの次女です」「トレイシー・ハドソン？ ……ああ、あの小さかった可愛いお嬢さんのトレイシー？」

「ええ、あの」とトレイシーは赤くなつて下を向いた。

「それがなぜこんな所へ？」

「無理だとは思いますが、是非聞いて頂きたいの」

「何でしょう？」

「わたし、妹のサラ・オーウエルを連れてきていますの」

サムは持っていた葉巻を一瞬落しそうになった。トレイシーは臆せず真つ直ぐに、牢番の自分を見つめている。その目の中の意志の強さを、サムは感じ取った。

「サラをジェームズに……その、囚人に会わせて頂きたいのです」「えー？」

「面会は許されているんでしょう？」とトレイシーは畳み掛けた。「お金ならありますわ」

「今署長は外出中でね」とサムも再び葉巻を加えながら答えた。「いいでしょう。けれども五分だけです。それに側には俺が張り付いていますからね」

「いいわ。取引は終わったわね」

そう言うのとトレイシーは持っていた巾着から数ポンドをサムに手渡した。そして大急ぎで、そとにポツンと佇むサラの元に駆け寄ると、素早く耳打ちした。

「さ、早く！ サラ、会えるのよ！」

サラは顔を上げて、ぼんやりとしか見えない姉の顔を見上げた。

「ジェームズに？ まさか、そんなこと無いわね」

「それが、あるの。さあ、さっさと行きましょー！」





サムはサラと姉のトレイシーを奥へと導いた。湿度の高い、この上なく陰気な室内だ。そして更に階段を何段か下りた。サラはトレイシーにしがみつきながらも、待ち遠しいような怖いような息苦しさを覚えつつ、けれども先へと進んで行く。

間もなく3人はやっと、天井近くからしか光源が無い部屋に着いた。そこは牢番の待合所らしく、サムは黙ってその奥を指差した。サラには何も見えなかったが、トレイシーには牢の奥に誰かが半分横たわっている姿が見え、思わず顔を背けた。

けれどもサラは姉の手を離すと、何かに導かれるように先へと進んだ。

「わたしはここに居るわね」と呼びかけるトレイシーの声にも何の反応もしなかった。

\*ゝ\*ゝ\*ゝ\*ゝ\*ゝ\*ゝ\*ゝ\*

牢番のサムはこの日の光景を、多分一生忘れないだろう。

サムが牢の扉をそつと開けると、サラはスルリと中に入った。太い鉄格子越しに二人の姿はあったものの、サムはなるだけそちらの方を凝視しないようにした。

「サラ？」と横たわっていたジェームズが、言葉を発した。懐かしい息遣いと、そしてサラの香りが微かにしたような気がしたからだが、それはあり得ないと思ったものの、そう聞かずにはいられなかったからだ。「サラなの？」

サラはその声を頼りに近寄ると、黙ったままジェームズの首に両

手をまわして抱き締めた。ボンネットは後ろに飛び、サラの髪の毛の匂いがした。

「そうよ、ジェームズ」

サラはそう答えたものの、泣き出すのを堪えるのに必死だった。目の前のジェームズは以前澁刺とし、そしてどこかふてぶてしかった若者ではもうない。痩せて蒼白で、明らかに病んでいる人間のそれ、だった。自分が苦しんでいる間、ジェームズはもっと苦しんでいたのだ。それを悟りもせず、死のうとしていた自分は馬鹿だ……。

けれども再び会えたという奇跡だけは、本物だった。ジェームズもまた抱き返したが、その抱き締めたジェームズの感触が優しく感じられた。

ジェームズは手をサラの額や頬に当てた。

「本当にサラだ。夢を見ているようだ。死ぬ前に一度は会いたかったんだ。会って、赦しを請いたかった。ずっと……だから……」

サラはジェームズの態度を妙に感じ、その瞳をじっと覗いた。その視線はサラを通り越して、彼方を眺めていた。最初に出会った時のままの、アメジストのような色は同じ。けれども、その瞳には既に輝きが失せ、空洞だった。

「ジェームズ？ あなた、見えないの？ わたしが見えないの？ 嘘でしょ！？」

ジェームズはおぼつかないように、空に向かって微笑んだだけだった。

「嘘！？ 見えない！？ あなたが盲目！？ 嘘 ……！！」

絶望と衝撃がサラを襲う。これほどの衝撃はいまだかつて感じたこともない。サラは全てを悟り、我を忘れた。

「あなたが、盲目だなんて！！ これは悪い夢よね！？ あなたが！ わたしではなく、あなたが！？」

ああ〜！という悲痛な叫び声がしたので、トレイシーは振り返った。サムもまた。けれども二人は目を見交わすと、黙したまま再び視線を背けた。

「なぜ？ なぜ、こんな事になるの！？ 神様は何て意地悪なの！？ どうして？」

「サラ、もういいんだ」とジェームズは搾り出すように言いかけた。「もう、俺はいいんだ。これでいいから。復讐の虜になった俺の報いが来たただだから」

「いいえ！」とサラは叫んだ。「報いが来たのは、わたしの方になるのよ！ おお、神様！ わたしたち、どうしたらいいの？」

「だから、もういいんだ。俺には見えるものがある。君との思い出だけが、脳裏に残っていて、それは今でも鮮明に浮かんでくる。それに、もうあと少しの時間だよ。君の中では、ジェームズ・エドワーズは、一人の幸福な男として、覚えておいて欲しいんだ」

サラはジェームズにしがみつくと、ワツと泣き出した。けれどもこれが最後の慟哭であることを、サラは気付いていなかった。

「サラ。君を不幸にして悪かった。赦してくれ。ただそれだけが言いたかった」

「赦すなんて！？ わたしが不幸だなんて！ わたしは幸福よ。あなたにこうして抱かれているわたしは、限りなく幸福なの。ジェームズ、あなたが死ぬ時はわたしも死ぬのよ」

「死ぬな」とジェームズは声を振り絞って、そう言った。「死ぬな。君には生きていて欲しい」

「だって、あなたが居ない世界は、もうわたしにとっては生きて行く価値のない世界なのよ！」

サラはキツパリと言った。そして微笑んだ。その微笑みは既にジェームズには見えていないのだらう。けれども、ジェームズは黙ったまま、恐れの中にあっても、何かを信じたいと思った。

「価値がないことはない。俺の為にも生きてくれ」

「嫌よ。あなたの居ない世界なんて！……でもわたし……」

サラは俯き、流れ落ちる涙を拭いもせず、何かをジェームズの耳元で囁いた。ジェームズの顔がほんのりと赤らんだ。

「約束して欲しい、サラ」

「何でも約束するわ」

「そうか。だったら、もう俺は何も怖くない。全てを恐れていたけど、もう怖くなくなった。だから俺の約束を守って欲しいんだ」  
「なに？」

二人の会話は、こちらのトレイシーとサムには聞こえなかった。それでなくとも、二人の声は小声で、ただサラが涙をすすする音ぐらいしか聞こえてこなかったのだ。けれども、サラの顔はどこか毅然とし始め、愛しそうに埃まみれのジェームズの顔を触っていた。それから二人はじっとして手を握り締めた。そこでは言葉は不要で、  
“見えなくても見える” 幸福に浸っているだけだった。

「最後のプレゼントだね。ありがとう、サラ」

ジェームズがそうサラにささやくと、サラはそっとジェームズのひび割れた唇に口付けした。

サムの時計は、既に5分を過ぎていた。

サムは、鉄格子の向こうの恋人達を引き裂く事に対して、罪悪感すら覚えていた。けれども、いつまでも放っておくことは出来ないし、そのうえ署長がもどりでもしたら厄介な事になるだろう。それにこの二人はどのみち、別れなければならぬ運命なのだ。それなら、早い方がいい。彼は立ち上がると、牢の鍵を壁から取り出した。

サムは、町の人々の噂の全てが間違っていた事を、この目で確かめた。

明らかにジェームズとサラは愛し合っており、それも今までサムが見たこともないほど、深く激しく愛し合っていたのだ。二人の愛情に偽りは無かった。それが分かっただけでも、サムはどこか得心した。

そこには、肉体的に結ばれたのかどうかなどと言った論議が虚しく感じられた。明らかに、ジェームズにとっては命を賭けた愛だったし、このイングリッシュのサラにとっては、偏見を拒む強い愛だったのだ。

けれども牢番のサムには、しなければいけない仕事がある。

「時間だよ」

サムは牢の扉をガチャンと開けながら、わざと無愛想に言った。

「さ、早く帰った帰った」

ジェームズとサラの手は、ややあつて離れた。

「さよなら……サラ」

ジェームズがぐくもった声で小さく告げた。

「いいえ、又会いましょう。ジェームズ、約束するわ」

「そうだね。又会うんだったね」

その時サラの顔は輝いていた。二人とも不思議な光と美に満ちた表情をしていた。サムは心の中に強く何かを感じ取ったものの、サラの手を引つ張らねばならなかった。もしもサムがサラの心の中を覗く事ができたなら、なぜ二人がこうまでも輝いていたか分かっただろうが……。

サラが居なくなっても、ジェームズの見えない視線はサラの居た場所をずっと彷徨っていた。

「ありがとう、姉さん」とサラは、立ち上がったトレイシーに述べた。「わたしの一生を捧げて、感謝しますわ」

トレイシーはただ涙をこぼすまいと努力しているばかりで、頷いただけだった。

「さあ、もう行きましょう」

トレイシーは妹にそっと囁いた。

\*ゝ\*ゝ\*ゝ\*ゝ\*ゝ\*ゝ\*ゝ\*ゝ\*

一歩一歩愛するジェームズから離れながら、サラは考えていた。

あの瞳を見た時から、自分達の運命は決まっていたのだらうと。

それは残酷な運命だ。けれどもサラはそれを甘んじて受けるつもりはなかった。

彼女は表向き運命に従順であり、忠実であるように振舞った。けれども今、サラはもとよりジェームズも共々、運命に少しばかり反抗する姿勢を見せたのだ。

ジェームズは気付いてくれただらうか？ サラの意志の固さを疑いはしなかっただらうか？ ジェームズは黙っていたが、けれども

手を強く握り返したではないか！ 二人はあの遺跡で、古の神々の  
前に婚約し、そして牢の中では約束したのだ。

全ては、運命が仕組んだ“罠”だったかもしれない。運命は二人  
を出会わせたが、それは別れさせる為の絶好の口実に過ぎなかった  
！ 幸せが不幸になり、闇が光に勝ち、喜びが絶望になった。

けれども、それは間違っている。サラは負けては居ない。そして  
ジェームズも、負けたように打ち克ったのだ。闇の中では、愛が光  
となる。例えそれが、盲目であったとしても、心の中の光は、そし  
て愛は永遠に消えない。消えるはずがない。少なくとも、二人の間  
では、それは“約束”だった。

わたしは惨い運命に勝って見せるわ！ 見ていて、ジェームズ。  
どうか、見ていて。わたしの側に永遠に居て、支えてちょうだいね  
……。

サラは光をもらったが、それは忌むべき光だった。ジェームズを  
復讐の虜にし、教職者としての父の正義を奪い、町長としてのバロ  
ウズ氏の誇りを奪った。そして今、ジェームズから、光が奪い去つ  
たもの……それは盲目。けれども、その中であって、サラは決心が  
付いていた。

もう何者をも恐れない。ジェームズは分かってくれる。そして待  
つてくれる……。

サラの心はやっと落ち着いた。平安が、再び光となって、心の中  
に満ち溢れた。

## 処刑へ赦し 1

処刑へ赦し

1

サラをドーセットの駅まで迎えに来る馬車がやって来て、官舎の入口に止まった。

サラはそれに乗り込む前に、オーウェル氏にしばしの別れの挨拶に行った。オーウェル氏はカーテンが半分引かれた薄暗い寝室で、車椅子に座っていた。横にはオーウェル夫人が甲斐甲斐しく世話を焼いている。

サラと父親が会うのは、奇妙な事にジエームズが重症を負わせて以来、初めてだった。お互いに心に拭いようのないわだかまりが残り、どうしても会うことが出来なくなっていたのだ。

気まずい雰囲気父子の間に漂っていたが、けれどもあえてサラは会いに行った。そして父親の車椅子の側に座った。

オーウェル氏は青白い無表情な顔つきで、額には白い包帯がぐるぐるに巻かれてあった。彼はぼんやりとした不可解な目付きで、目の前の“愛娘”を見つめ返した。いや、それはもはや“愛娘だった”という表現の方が、より適切かもしれない。

二人はもう絶対に乗り越えられない壁を隔てて、右と左に分かれてしまったようだった。サラはもう遙か彼方、自分の手の届かない所に行ってしまったのだ。子供はいつかは離れて行くが、こんなに哀しい離れ方はない……。

「お父様。それではお先に行つてまいります」



それでもあえて赦しを求めようとせず、サラは言った。オーウェル氏は無言だった。サラは、ジエームズと父との確執を生み、二人の運命を狂わせた張本人だという罪の意識から、未だに逃れずに居た。いや、それは生涯消える事はない心に刺さった棘だったのだ。「サラ、お父様にキスを」とオーウェル夫人が静かに、けれども一切の感情を交えずに促した。夫人の髪の毛は、ほぼ真っ白になってしまっている。かつて信じようとした教え子に、徹底的に裏切られたのだという思いは、彼女を冷酷に打ちのめしていたからだ。

あさつての判決は、当然極刑であるべきだと夫人は念じていた。あの若者のせいで、夫も娘も人生を狂わされてしまったのだから、当然の報いを受けるべきなのだ、と。

三者三様の思いを抱いて、サラは促されるままに父の頬に冷たいキスをした。心から愛する事ができなかった父、けれども今は魂の抜け殻のような身を、車椅子に頼っている。

「さようなら。お元気で」

やっとサラはそれだけ告げると、ドアの方へ行こうとした。けれども、何かが彼女を押し留めた。

「お父様。わたしの視力を、“汚れた”お金で買ったのね」

「何を言いたい、サラ!？」

驚いてオーウェル夫人が問い詰めた。

「今更、何を……」

「わたし、全てを知っているんです。町長さんの事も、優秀賞のすり替えも！それを彼は気付いていた。でも、ここからは逃れる事ができなかった。親の借金のカタになってしまつて。でも、もうそういう縛られた運命から逃れる事ができるわ、やつと……」

「サラ!」と夫人は怒鳴った。

「分かっています。それは全てわたしの為だったんでしょう？だからわたしが苦しむのは当たり前なんです。報いが来たのは、当然

なんです！ わたしはだから、それを甘受しますわ」

両親は声もなく黙っていた。決してサラ本人には告げまいとして、守りに守っていた秘密だったのに……それを、娘はとうの昔に知っていたのだという衝撃……。

「そして、彼もまた視力を失ってしまった。全ての人が罰を受けたのね。わたしもいずれ……」

「サラ！ もうやめて！」

夫人の金切り声でサラは口を閉ざした。

言うてはいけなかった筈なのに、サラはとうとうこの事を言わずにはいられなかったのだ。それは、両親との決別と言う覚悟が要った。けれども今のサラは、ジェームズとの“約束”のせいで、もう何も怖いものはない。

サラはもう二度と両親の顔も見ず、外に出た。

「サラ……」

それ以上は何も言わずに、トレイシーはサラの小さな肩を抱いた。サラはまだ青白くやつれ果てていてはいるが、けれども妙にさばけた大人っぽい顔つきをしていた。

「トレイシー姉さん……さあ、行きましょう」

レストランでは、サラは姉のトレイシーの近くで暮らす事になっていた。

やがて馬車は駅に向かって、走り出した。デコボコの道を揺られながら、サラは真っ直ぐ前方を向き、二度と過去は振り返るまいと誓った。サラにはもう涙は無い。

ジェームズ……さようなら……永遠に愛してる……。

公判の日には巡回判事がやって来るといので、町の小さな裁判所は超満員だった。朝から、季節はずれの冷たい雨が降り続いてたが、ドーセットとその近辺の人々は、この滅多にない“事件”のことを、耳にタコが出来る程噂をしていたので、どんな仕事を放り出しても、この日の公判に詰め掛けたからだ。

ドリューはやや遅れて入り、ニッキーと二人並んで後ろの方の左側に陣取った。ドリューは見物人達が、しじゅうザワザワとお喋りに夢中になっているのを垣間見て、落ち着かない嫌な気分には陥っていた。

ニッキーとむつつりとしたドリューの方に、時々視線をチラチラと投げかけた。そしてニッキーは、自分が酒場で最後にジエームズに会ったときのことを喋った。それからニッキーは、こう言い張った。

「あいつは絶対に（と力を込めて）、あの娘を弄んだんじゃない！本気だったんだよ、あいつは。本気だったんだから……」

ドリューはしつこいニッキーのお喋りに一々頷きながらも、自分の犯した罪の方により気を取られていた。

「それに、あいつは絶対に（と又力をもっと込めた）、社会主義者なんかじゃないんだ！」

とニッキーの耳元で叫んでいた。けれども今となってみれば、そんなことをがなった所で、何の役にもたちはしないのだ。

意気地なしの自分達……。二人とも己れにすっかり愛想が尽きて、黙り込んだ。救えなかったし、救う努力すらしなかった自分達……

卑怯な自分達。ドリューはうな垂れた。

ざわついていた場内も、17世紀の鬘をつけた判事と書記の入廷でシーンと静まり返った。

「あの立派な鬘の下は、きつとハゲだぜ」

背後からそういうケルト語の囁きが聞こえた。皆が一部再びざわざわし始めたその時、端の思ひ扉が開くと、被告が引き立てられてきたので、ホーッという溜息に近いざわめきが場内に過ぎった。

ジェームズは青白いシーツのような肌に無精ひげ、そしてボサボサになった髪の毛、すっかり汚れ切った服装と言う風体で、フラフラと揺れながら視線を床に落していたが、何よりそこに居る人々を驚かせたのは、そのやつれ果てた別人のような有様と虚ろな表情だった。

魂はもう遙かにどこかを彷徨い、辛うじて肉体に幾ばくか留まっているというような状態……。ドリューもニッキーも呆然として言葉も出ない。

「あいつら、ジェームズを白痴にしたのよ」

「殴りつけ、脅かし、拷問して、勇気の全てを最期の一滴まで搾り取ったんだわ」

背後で女二人がヒソヒソと会話を交している声が聞こえた。

「あの顔を見て。以前の彼じゃない。病人そのものよ!」

「何一つ抵抗出来なかったのね、あの署長には」

ジェームズは自席に上がる時に蹴躓きそうになった。

「変だ……」とドリューは呟いた。ニッキーも同じように感じたのかもしれない。ニッキーは半ば口をポカーンと開けたまま、ジェームズを見つめているばかりだ。

その場に居る他の人々も同じような感想を抱いたのか、ざわめき

はどんどん大きくなつ行つた。

ジェームズは俯き、というよりもグラグラした首を垂れ、被告席の椅子に座っていた。こちらからは、表情は全く見えない。直ぐ隣にはピンとした髭の署長が座り、そしてジェームズを縛っているロープはサムが持っていた。

嫌な役目だ、とサムは思った。

「被告人、立ちなさい」

判事の声でジェームズはヨロヨロと立ち上がった。やつとの思いで立っているといった有様だ。

「まるで別人ね」。きつと食事もろくろく与えていないのよ」

「酷いことをされたに決まっているわ」

と後ろの席の女達が、ドリュウとそっくり同じ事を言っている。

「被告人、名前は？」

ジェームズは深い吐息を付くと何か呟いたが、全然声になつていなかった。

「もう一度。もっとはつきり！」との判事の促しで、やっと「ジェームズ・クライブ・エドワーズ」と幾分トーンを上げたものの、その声はしゃがれ、そして上ずっていた。耳を澄まさないで聞こえないような小声だ。

判事は諦め、大急ぎでこの分かりきつた裁判をやり過ごそうと考えた。そして今晚のスウォンシーの自宅での夕食の事や、彼の愛する家族のことやらを思い、それからやつと頭を切り替えた。

「被告人、ジェームズ・クライブ・エドワーズ。あなたは、6月2日曜日の夕刻、ドーセットの大通りで、小学校元校長、ジョン・アルバート・オーウェン氏を待ち伏せし、そして“殺意を持って”オーウェル氏に杖で殴りかかり、瀕死の重傷を負わせたものなり。以上、宜しいですね？」

この告訴状はかなり間違っていたが、フラフラと揺れながら立っているジェームズの口から、「イエス」という短い言葉が漏れた。

判事は満足そうに頷いたが、突然聴衆のどこから、

「嘘だ！ 待ち伏せじゃない。それに最初に“殺意を持って”襲い掛かったのは、オーウェル氏の方だぜ！」という罵声が飛んだので、ざわめきが益々激しくなった。

判事はそれが誰だか分からず、又ドリューも首を巡らした。新たな商人が出たのだろうか！？ けれどもその声が再び出ることは無かった。

判事は木槌で叩いて叫んだ。

「誰ですか？ もしも目撃証人が居るのなら、ここへ出頭して下さい。証言を認めます」

チツという署長の声がサムの耳に届いた。けれども超満員の傍聴人の中から、その声の主が現れる事はなかった。

「だから、ウェールズ人は腰抜けなんだよ」

署長の口から誰に言ってもない言葉が出、口元には冷笑が浮かんでいた。

小さな法廷内は、ざわめきやら囁き声やら溜息やらで、坩堝のように混沌となつてしまった。その中をジェームズだけは無表情でただ一点だけに視線を向けている。

ドリユーには直感的に分かった。

「あいつ……目が見えないんだ」

「えっ、なに？」と隣のニッキーが振り返る。

「あいつは……」

ドリユーが続けようとした時、判事が我慢できないようにヒステリックに木槌を叩きながら、大声を張り上げた。

「ではもう一度被告に尋ねます。最初に、殺意を持って打ちかけたのは、オーウェル氏ではなくあなたですね！？」

ジェームズは数秒間の沈黙のあと、聞き取りにくいぐもった声で「イエス」と答えた。今度は誰も発言しなかったので、判事は心なしホッとした。

「よろしい。ではもう一つ。あなたは社会主義者かそのシンパですか？ 国家を転覆しようと言う企てに賛同していたのですね？」

「異議あり。それは誘導尋問です」

初めて存在感の薄い初老の弁護士が異議を唱えた。パチパチとまばらな拍手が起こったが、ドリユーからは血の気が引いた。

「それでは、もう一度伺います。あなたは社会主義者ですね？ 女王陛下に対する反動者、非国民ですか？」

「もっと酷い」と誰かが小声で独り言を言った。「この質問にイエ

スと答えたら、間違いなく、謀反人として死刑だな……」

ドリューは凍りつき、冷や汗が流れ、居たたまれなくなってきた。思わず顔を引つ込めたが、もとより盲目で、そして意識も朦朧としているだろうジェームズには何も見えないはずなのだが。

場内が少しずつシーンとしてきた。人々はオーウェル校長を殴った事よりも、こちらのほうがもっと重要な事に気付いたからだ。二ヶ月前、それで二人の前途ある大学生が処刑された記憶がまだ新しい。

ジェームズは長い間（と言っても、実際は10秒ぐらいだったかもしれないが）黙っていたが、やがて血の気の無い口元を開き、ほとんど消える寸前と言った声の響きで述べた。

「そうです……」

「これは茶番だー！」と今度はさつきとは別の方角から図太い声がした。人々は一斉にその声の方を見つめた。

一人の中年の男が立ち上がり、腕を振り回していた。

あいつは誰だろう？ とドリューは考えた。けれども空っぽの頭脳には何も思い当たらない。

「あの人、誰？」と後ろの女性がドリューを代弁するかのように、隣に囁きかけている。

「さあ、この辺では見たことないねえ」ともう一人も首を傾げているようだ。

「判事！ これは茶番です！」とその男は尚も叫んだ。

「どこが茶番なのですか？」

判事もムツとしてやり返す。けれども判事はこういう事態には場慣れしていた。

「この裁判には、被告の弁明が一つありません。それに証人も誰一人居らず、ただ被告人の自白だけが根拠になっています。まあ、



チンケな弁護人は居ますがね」

「けれども、被告人は今ここで明らかに自分の非を認めていますよ」

「嘘だ！ 被告人はただそう言うように強制されているだけです。」

そしてその内容すら分かつてはいないようだ。被告人をご覧下さい。つい一ヶ月前はこうではなかった。被告人は健康でした。それがこんな有様に……。被告人は脅かされ、拷問されたんです！」

この見知らぬ男の理路整然とした語りに、期せずして歓声が沸いた。拍手も、まばらだが、あった。けれども判事の決定的な言葉。

「この意見に賛同なさる方々は、今ここで出廷して宣誓して下さい。お名前も忘れずに」

途端に、皆の意気が下がって行くのが感じられた。ざわめきも静まり返り、いつの間にかその勇氣在る男も、座り込んでどこに居るのやら分からなくなった。

ドリユーは、もう耐えられないほど苦しくなっていた。

「ドリユー、お前大丈夫かよ？」

ハアハアと苦しげに息を付くドリユーに、心配したニツキーが覗き込む。

判事は一人ほくそ笑んでいた。このような場面をいやと言うほど経験してきたのだ。そしてウェールズ人が、ここぞと言うときに扇動にも乗らず、結局は何も出来ないのだと言う事も、よく承知していたのだ。

この若者を救う気がある者は、結局は誰も居ない。そして判事は木槌を叩くと、満足げに頷いた。

暫く法廷でのやりとりの後、判事は極めて義務的に言い渡した。「判決を下します。被告、ジェームズ・クライブ・エドワーズは傷害と国家転覆罪で死刑。執行は明日の日の出、ここドーセットに於いて。恵み深き神の慈悲が被告にあらんことを。以上」

その途端、法廷の人々の間からは叫び声とも悲鳴ともつかぬものが口から出て、場内は騒然となった。ドリューは我慢が出来ずに外に飛び出すと、食べた物を全て吐いた。

「ジエームズが明日の早朝、処刑されるって」

と夕食の支度をしながら、フィオーナがマーガレットに告げた。

「あんた、見に行く？」とさも意地悪げにだめを押した。

「まさか……」

マーガレットは精一杯虚勢を張って答えた。「行くわけが無いでしょ」

「そう？ あんたを捨てて、あのイングリッシュの小娘に走った憎い男の最期を見たいのかも、と思っただけどさ」

「余計なお世話よ！」とマーガレットはヒステリックに喚いた。「あんな奴、こうなつて当然なんだから！」

「そう、それならいいんだけどね」とフィオーナは、皿を並べながらさり気なく続けた。

「ボート・ハウスの事知っていたのは、あんただけじゃないんだ」  
マーガレットは雷にでも打たれたような衝撃を受けた。

「わたしだつてとうに知っていたさ、それくらい。でもジエームズを“売る”ことはしなかったわよ。そんな恥知らずで下劣な事は。あたしはねえ、ウェールズ人をイングリッシュに売ったりはしない、あんたみたいにはね」

それからフィオーナは蒼白なマーガレットを見つめながら、穏やかに言った。

「残念だわ」

マーガレットは口を塞ぎ、大声で喚きたいのを必死で堪えていた。けれども、ものの数秒もしない内に、彼女は両手で顔を被ってその

場に泣き崩れた。フィオーナはそんなマーガレットを冷ややかに見下ろし、そして呟いた。

「いくら泣いても、もう何もかも遅いわ……」

\*ゝ\*ゝ\*ゝ\*ゝ\*ゝ\*ゝ\*

その日の夜も更けた頃、もう一人の牢番のリックに向かって、手酷く酔っ払ったドリユーがしつこく絡んでいた。

「あいつに会わせてくれ！ あいつに！」

「もういいじゃないか、ドリユー」

側に付き添っているニッキーもすっかり困り果てていた。大男のドリユーはそれでも牢の入口でバタバタと駄々っ子のように喚いては、迷惑そうなりックにしがみつき、それから地面に転がると右手で土を叩いた。

騒動に、サムが中から出て来た。

「一体なんだ！？ このザマは」

「あ、あの…… ジェームズに…… 会わせろって」

ニッキーは首をすくめながら言い、リックも困惑の態をしていた。サムは素っ気無くドリユーに告げた。

「あいつに会いたきゃ、明朝早く刑場に来な」

「それじゃ遅いんだよゝ！」とドリユーは吠えた。「遅いんだ……」

……

「今更会ってどうする、ドリユー？」

「あいつに赦しを請いたい。サム、サム、お願いだよ」

「愚か者が何を言う！ 赦しだって！？」

さすがのサムも怒り出した。けれどもドリユーは何を言われてももう気にしなかった。

「サムゝ！ お願いだよゝ」

ドリューは泣き出した。まるで母親を見失った幼い子供のように。事実、ドリューは孤児で、親が居なかったのだ。

サムは最初は怒ったものの、泣き喚くドリューが哀れに感じた。サムはドリューの元にしゃがみ込み、耳元に寄せた。

「もう無理だよ、ドリュー。あのな……あいつはもう死にかかっているんだ。裁判で見ただろう、どんな有様だったかを。明朝までもつかどうか、というところなんだ。だが、その方があいつにとっていいんじゃないのかな」

「な、なぜ？」

ドリューは丸太のような太い腕で、サムの二の腕を掴んだ。

「もう、意識が無いんだ。奴は……病気だった。いや、実際はオーウエルの旦那に打たれたときから、調子が悪かったんだ。傷害の罪はオーウエルの旦那の方にある。誰もそれを言わないだけだ。」

その上、署長から手酷く扱われもしたし、陵辱もされた。今日の判決の後、奴は倒れ、そのままずっと意識が無い」

「目も見えてなかった……」

「そうだ。もう何にも見えなかった、感じなかった。だからもうこのままの方がいいんだ。俺が今晚ずっとあいつの側に居てやるよ、お前の代わりにな」

「ありがとう」とドリューは塩辛い涙を飲み込みながら、謝意を述べた。「お、俺は何にもしてやらなかった。面会にも来なかったし」

「いや、ドリュー。あのお嬢さんは来てくれたよ」

「え？ サラが……？」

「そう、サラ・オーウエルがね」

ドリューは信じられないように、その大きな目を見開いた。

「そ、それじゃあ……」

「あの二人は本物だったな」とサムはポツンと言った。「二人で数分だけだが、楽しい時を持ったんだ。とても嬉しそうだった。二人

とも微笑んでいた。そして何か、約束していた。綺麗だったぜ、あの二人……」

サムの脳裏にジェームズとサラが語らっている姿が、ふと浮かんだ。

「そうか……本物だったんだ、ジェームズの愛は」

「お嬢さんが帰って以来、もうあいつは何一つ口に出来なくなった。本当だ。公判に出られたのが、まるで奇跡のような感じで。だがあいつは処刑の恐怖も知らずに逝くだろう。どっちにせよ、仕方ないな。こういう運命だと言うほか無い」

ドリュウは泣いた。というよりも野獣のように吠えた。

「諦めろよ、ドリュウ」とニッキーが呟いた。「諦めろ。けど俺、父さんに頼んで、ジェームズの遺骸を引き取ってもらうよ。あいつをカラスの餌にはしたくない。だからさあ」

“うすのろ”ニッキーは照れたようにドリュウに笑いかけた。ドリュウはニッキーにしがみつき、涙が枯れ、そしてその夜更けにニッキーの腕の中で寝込むまで、ずっと泣いていた。

＊～＊～＊～＊～＊

☞

1889年

6月29日

### 親愛なるメアリー

コーンウォールでの生活にはもう慣れましたか？

実は悲しいお知らせです。5日前の月曜日、あなたのお兄様はドーセットで処刑されました。その直後、余りの痛ましさに暴動が起こり、騒ぎになりましたが、程なくして鎮圧されたそうです。

お兄様の罪と裁判の事はあなたには黙っていました。コーンウォール

ールでのあなたの家庭教師の就職にひびくと考えての事ですが、今では後悔しています。もっと早く本当のことをあなたに告げるべきでした。

メアリー、あなたがお兄様から送られたお金を使いたくないと言いきり、受け取りを拒否した気持ちも分かりますが、けれども今ではそれがお兄様のたった一つの遺品になってしまったのをご存知ですか？　ここに同封してあるお金がそれです。

いつの日か、あなたの怒りが溶けた頃、ドーセットのドリュー・シーモアという石工を訪ねればいいでしょう。彼がお兄様の墓標を彫ってくださった方です。

怒りが永遠に収まらないなら、それはそれでいいとします。けれども今は、お兄様の魂が、天上において主のみもとで安からん事を祈ってあげましょう。わたしと共に。

世俗に返ったあなたですが、いつでも歓迎しますよ。又、会いに来て下さいね。

シスター・ルース  
『

## サラの選択―テムズ河での誓い― 1

サラの選択―テムズ川での誓い―

1

夜明けの光の中、二人の刑事が一人の囚人を台に引きずりあげようとしている。囚人は足元もおぼつかなく、何度も階段で蹴躓いた。刑事達は早く事を成そうと焦っていた。囚人は蒼白な顔で冷や汗に包まれ、短く喘いでいる。

閉じていた目をカッと見開き、「サラ！」と叫ぶ。「サラ―！  
今どこに居るんだ！」

ハツとしてサラは目覚めた。汗びつしよりなのに、窓が開き早朝のひんやりとした風が入って来ていた……。

「また、あの夢だわ」

サラは窓を閉じようとして起き上がり、余り良くは見えない目で夜明けのロンドンを見渡した。ぼんやりとした街のシルエットと、アメジスト色の空が際立っている。

「彼の瞳の色ね……」

サラはもう一度ロンドンの空気を吸い込み、それからホテルの窓を閉めた。

\*ゝ\*ゝ\*ゝ\*ゝ\*ゝ\*

このホテルに落ち着いて、ちょうど一週間経つ。ジェームズの処刑がとうの昔に終わったのは知っていた。

姉のトレイシーが新聞を読んでいた顔を曇らせ、サラに近寄るとそっとサラの手を取り、

「残念だけど、昨日ジェームズは処刑されたそうよ」と痛ましげに



告げたとき、あれだけ覚悟を決めていたにもかかわらず、激しい衝撃を受けて立つてはいられなくなった。

それでもサラは不思議と涙も見せず、トレイシーに言わせれば「とても気丈な素振り」を見せた。

オーウェル夫人は、トレイシーにロンドン滞在費を余分に与えていた。苦労続きのトレイシーと、辛い月日を過したサラに、僅かな休暇を与えるつもりだと、トレイシーは母の優しい気持ちを思い測った。

お母様、ありがとう。直ぐにレスターに行く前に、わたし達にしばしの休息を下さったのね。

その上、トレイシーはサラに新しい眼鏡を新調する事にした。ロンドンでも有名な眼鏡店に連れて行き、少しでもモダンな眼鏡をあたえたのだ。サラはロンドンに来て、幾分元気になったようだった。そして決して失われた時の話はせず、恋人の処刑を聞いたときにも、サラは落着いて受け止めていたように見えた。

「もういいのよ」とだけサラは言った。「もういいの」

「残念だわ、サラ」

「お姉様、わたし、大丈夫だから……」

手を離すと、サラは静かにソファに座った。その姿は、もう完全に諦めた人間の姿だと、トレイシーは感じた。

その後のアジテーターから扇動された暴動と鎮圧、社会主義団体からの非難声明についての新聞の論説記事も、サラはおとなしく聞いている。

ほどなくして、ウェールズ人達もその事件については忘れ果ててしまっただろう。人生とはそういうものだからだ。

人生には耐えられないほどの辛い事が多い、と17才の少女は知った。けれども彼女はそれを持ち越えて行く勇気を持っていた。それは、愛する人との約束だったからだ。愛するジェームズと、神々の前で誓った事は、神聖なのだ。それは一生、抱えて行かなければならないほどに。

＊＼＊＼＊＼＊＼＊＼＊

やがてアメジスト色の靄は晴れ、明るい初夏のブルーが空に染み渡って行く。

「あら？ サラ、もう起きていたの？」

やや寝不足気味のトレイシーが欠伸を噛み殺しながら、隣室のサラの部屋に入ってきた。

「そうよ。今日でロンドンも最後ですもの」

「そうね。わたしの久しぶりの休暇も終わり」

「昨晚のオペラは良かったわね。見えなかったけれど、音楽、そして歌声……それだけで、わたしは感動してしまっただ。お姉様は？」

「ステキ！ 最高！ それしか言えないわ」

二人は久しぶりに昔の仲の良い姉妹に戻って、色々お喋りしたのだ。そして楽しいひと時を持った。

「今日は出来上がった眼鏡を貰いに行きましょう。そうすれば、再びあなたもちゃんと見えるようになるわ。再出発なのよ」

「ええ」と明るくサラは答えた。

「準備はいいわよ。いつでも……」

＊＼＊＼＊＼＊＼＊＼＊

少し遅い朝食のあと、姉妹は付き添いのエレーンと共に、馬車に乗り込んだ。ロンドンとは人と馬車であふれ、活気付いている大都会

なのだ。

「テムズ川よ！ ほら！」とトレイシーははしゃいだ。もう何度も  
見ているのに、この川はトレイシーを喜ばせるのだ。

「お店はテムズ川の向こう岸だったわね」

「ええ」

「もう直ぐ、ちゃんと見えるようになるわよ、このテムズ川も」

「そうね」とサラは短く答えた。

「本当にステキな川なの。こんな川は、ウェールズにもレスターに  
も無かったわね。ロンドンは大きくて、素晴らしい都会！ 早くあ  
なたに見せたいわ」

やがて、眼鏡店でサラは新しい眼鏡を掛けた。全てがはつきりと  
明確に見え、逆に全てが矮小に感じる。

けれども帰途でのテムズ川は確かに雄大で優雅で、トレイシーが  
賞賛したように素晴らしかった。

「ここで止めて！ あのお店、ステキね」

「傘屋ね。何か欲しい？」

「ええ、少しだけ。エレーンと一緒に入りたいわ」

「いいのですか？ お嬢様？」

「いいんじゃない？ わたしここで待っているから」  
とウキウキとトレイシーは言った。

エレーンとサラは外に出た。トレイシーは随分長い間待っていた  
が、ふと得体の知れない不安が心をよぎった。と見ると、エレーン  
が小走りに駆けつけて来るではないか。サラは居ない。

「サラは、エレーン！？」

「見失ったんです。お店で！」

「えっ！？」

「すみません、お嬢様！」

エレーンの顔は涙と後悔と心配の余り、歪んでいた。その時、ト  
レイシーは自分の愚かさにも衝撃を受けていた。

「サラお嬢様は、裏口からお出になったそうです。わたしも直ぐそちらに向かったのですが、何しろわたしロンドンは初めてで。それに入り組んでいて、道が多くて分かりにくく……」

エレーンの言い訳声は小刻みに震えている。

「どうしましょう!? わたしのせいですわ。どうしたら……」

突然トレイシーの中で、何かが弾けた。

「ああ! なんて馬鹿なわたしなの!」

「どうなさいました?」

「あの子、あの子、もしかして死ぬつもりじゃあ……」

「えええ〜っ!?」

エレーンの声は悲鳴に近かった。

「あの子は上辺は平静でいたけど、あれは嘘だったんだわ! あの子の悲しみはそう簡単には癒せるはずが無い。その事に気付かなかっただなんて!」

トレイシーは我が身を後悔で苛んでいた。そして手を揉みながら、「どうしよう……どうしよう」とうろたえたように言うばかりだ。

「何とかして二人で探し出しましょう、トレイシー様!」

「そう、そうね。落ち着かねば」

トレイシーは馬車を降り、近くに居た警官に妹を探してくれるように頼み込んだ。

「妹は、年の頃17〜8。小柄で華奢で、髪は赤毛。そして眼鏡を掛けているんです。是非探し出して下さい!」

頼み込むトレイシーの目に、銀色のテムズ川が写った。

「テムズよ!!」

それから二人は慌てて馬車を、テムズ川の方に駆けだした。

＊＼＊＼＊＼＊＼＊

テムズ川に掛かる橋の一つの側で、屋台を開いている男が居た。彼は馴染みの老人客と何かお喋りをしながらも、手だけは忙しくサンドイッチや他の物を作って行く。少年が一人やって来て注文しようとして口を開いたが、その視線はどこか遠くへ向いていた。

「ねえ、あの人ちよつと変じゃない？」

少年客の言葉に、店のオヤジと老人は振り返ってそちらを向いた。橋のたもとに、ボンネットを被った眼鏡の女性が佇んでいる。

「何が？ あのお嬢さんが？」

「だって……さっきからじつと川面を見下ろしているよ。ほら、身を取り出して……」

「何だって!？」

確かに、一人の若い女性が、欄干から身を取り出すようにして、テムズ川を覗いている。

「まさか!？」とオヤジが言った。

「行こうよ！　もしかしたら」と少年も不安に駆られて言い継いだ。

「わしが行くよ」と老人。

「僕も!」と少年も叫ぶ。少年と老人は、同時に駆け出した。

ちょうど向こう側では、息を切らしたトレイシーとエレーンが大声で叫んでいたが、行き交う馬車の騒々しい音で、その悲鳴も消えて行く。

「あの子を！　あの子を止めて!」

トレイシーは気も狂わんばかりだった。珍しく霧も晴れた大気の

中、反対側から駆けつける男二人と、こちら側の女二人の視線が合った。

トレイシーは言葉のない叫び声をあげた。少年がサラを抱きとめる。

「ああ、良かった！」とトレイシーは安堵の声を出した。

トレイシーが駆けつけると、サラは少し迷惑そうに、少年の腕を振りほどこうとしていた。

「サラ――！」

「何なの、お姉様？　こんな大声を出して。それに、この人ったら……」

「サラ――！」

そう言つと、トレイシーはサラを抱き締めた。

「身投げするんじゃないのかと……」

「まあ、馬鹿馬鹿しい」とサラは素っ気無く言った。

「何だ。身投げじゃなかったのか」とぼやく少年に、トレイシーはペコペコと頭を下げて謝っていた。

「ここは、よく身投げする人が居るんだよ」

「そう。自殺の名所なんじゃ。驚かせるなよ、お嬢さん」

「ごめんなさい」とサラは簡潔に謝った。「そんな気は全然」

「ならいいんだがね」

少年と老人二人は、再び向こう岸に戻って行く。その姿を見つめながら、サラはトレイシーに言った。

「お姉様、ごめんなさいね。ただテムズ川が見たかっただけなの。この深い広い、深遠な川面を」

そう言つサラの言葉には、どこか胡散臭さが潜んでいる事にトレイシーは気付いたが、それでも彼女は決して妹を責めることは出来なかった。むしろ、平気そうに装うサラの中の、心の痛手の深さに、

改めて慄然としたのだった。

サラは、実際の所大声で泣き叫んだ方が、よほど気が楽になるのかも知れないのに、とトレイシーは感じていた。けれどもサラはニコリと微笑むと、ゆっくり歩き始めた。一步一步を踏みしめるように。

やがて半泣きのエレーンの待つ橋のたもとに辿り着くと、サラはこちらを振り返りながらしっかりと言った。

「わたしは決して身投げなんかしないわ。だってジエームズに誓ったんですもの。それに、もうわたし一人の命じゃないんです」

「え？」

「わたし……妊娠しているの。彼の子を宿しているんです！」



### 3 エピローグ

#### 3 エピローグ

レスター行き列車が、ロンドンを出発した。エレーンがハンカチを振りつつ、名残惜しそうに見送った。

その姿がやがて見えなくなると、トレイシーはほっとして腰を下した。コンパートメントには、サラとトレイシーの他、今はまだ誰も乗ってはいない。

昨日トレイシーはサラを有名な産婦人科医に連れて行ったのだ。結果はやはり妊娠しており、既に三ヶ月目に入っているという。その医者言葉を、サラは落ち着いて聞いていた。けれどもトレイシーもサラも、あとは何も言わなかった。

トレイシーはサラがその胎内の子供を産む気であることを承知していたが、その頃私生児を生む独身の女性の先行きは厳しく、険しいもので、トレイシーはサラにとってどの道が最善なのかを考えていたのだ。

けれども翌日、無慈悲にも汽車は発車し、姉妹は何も言わぬまま、レスターに向かっていた。もちろん、このことはエレーンには内緒だったが、けれどもいずれ遅かれ早かれ分かるものだ。

トレイシーはやきもきしていたが、隣のサラは静かに座って、外に飛んで行く景色を眺めているだけだ。

トレイシーはサラと自分の分の荷物を置くと、やっと自席に座り込んだ。

「何か食べる？」

「いいえ、いいわ」とサラは答えた。

「ねえ、サラ」とトレイシーはおもむろに切り出した。

「え？」

「あのねえ……あなた、本当にその子を産むつもりなの？」

信じられないような表情が、サラの顔に浮かんだ。

「まさか……わたしに堕ろせ、と言っんじゃないでしょうね？」

「ええ……でも……」

「そんなこと、死んだって出来ない！」とサラはキツパリと、そして激しく答えた。誰にも否定できないほどの情熱を込めて。

「出来るわけが無い。だって、わたし達、約束したのよ！ あの最後の晩、牢の中で」

「でもね、一人で育てるのは、とても……」

「分かっていますわ、お姉様。でもわたしは、“約束”したの。そしてテムズ川で誓ったの。本当はあの時、テムズに身を投げようかとも思ってたわ……」

「えっ!？」とトレイシーは腰を浮かせた。

「でも、そんなこと出来っこない。ジェームズが悲しむもの」

サラは静かに続ける。既に、ジェームズと住もうと願っていたロンドンの町並みから外れ、平穏な田舎の景色が見えてきていた。

「あの牢の中……既にジェームズは半分死んでいた。わたしを認識するのが精一杯だったわ。でも、わたしが妊娠の事を告げると、あの人が微笑んだ。そして言ったの。」

『そうか……それじゃ、その子は俺なんだ……いや、俺だと思ってくれよ、サラ。俺の命が無駄ではなかったという証しを、この世に残したい。それだけを約束してくれ。その子を育ててくれると。愛情を持って、もう俺のような生き方をしないように、平安の中で慎ましくとも、ちゃんと育ててくれ……』

もうそれ以上、ジェームズは何も言えなかったわ。わたしは約束したの、彼に！ 必ず産んで育てるって！」

「苦労は分かっているのね？」とトレイシーは無駄だと知りながらも、念を押すように言った。

「ええ、もちろん」とサラも短く答えた。「わたし、勉強して盲学校の先生になるわ。実は、ロンドンのホテルで、学校のパンフレットを見つけたのよ。ロンドンカリバプールに、その学校はあるみたい。わたしのような者でも入学できる学校が」

暫く沈黙があった。

「分かったわ」とトレイシーは簡潔に答えた。「所詮子供は何人居ようとも変らないものかもしれない。お下がりでもいいのなら、わたしの子供達の服をあげるし……あなたがいいのなら、わたしがその間面倒見てもいいわ」

サラは姉を振り返った。トレイシーはふくよかな顎を頷かせると、微笑みを浮かべた。

「そんな……お姉さまに、そこまでの助力は……」

「子供は何人居ても同じって、今言っただじゃないの!？」

トレイシーはパンパンとサラの膝を叩いた。

「いいのよ。家庭では、わたしは結構ボスなの。夫とは歳が離れているけれど、わたしの言う事には従う人でね」

トレイシーはふふふつと笑った。

「いい人なのね、ご主人は」

「普通よ。ただ、恐妻家なだけ」

サラとトレイシーはお互いに顔を見合わせると、姉妹にしか分からない共犯者のような笑みを口元に浮かべた。

「わたし、勇気ある人には助力を惜しまないのよ」

そうウインクしながら、トレイシーは昔別れた牛乳配達の若者の姿をチラッと脳裏に浮かべていた。

「わたし、もう怖くない。これからの不安も偏見も、両親の驚きも、貧乏も」とサラは小声で言った。「あの人も、そう言っていたわ……」

「だからねえ、サラ。もりもり食べて元氣にならなくちゃ。だってあなた……お母さんのよ！」

「わたしが母親！？ そうね、わたしって、お母さんなんだわね、もう直ぐ」

サラはそつと自分のお腹に手を当てた。

聞いた、ジェームズ？ あなたが言っていた通り、きっと誰かが助けてくれるわ。この子はあなたなのね、そしてあなたの子でもあるのね！

わたしはもう盲目じゃない。すっかり前を見て歩いて行くわ！  
そしてあなたとの愛が偽物ではなかったと、皆に分かってもらったのよ。何よりも、この子に分かってもらいたい。そしていつか言うわ  
お母さんはあなたのお父さんを愛していた。それは本物だった  
て。それは盲目の愛じゃなく、本物だったって……！

ふと見ると、トレイシーは外を見ている振りをしながら、そつと目頭を拭っていた。

汽車は走る。どこかに……そこは終わりの無い茨の道かもしれない。けれどもそれは自らの愛を証明する道でもある。

サラは唇をしっかりと結ぶと、しっかりと目を見開き、前方を見つめた。もう後ろは振り向かないと。

END

### 3 エピローグ（後書き）

これで本編は終了しました。この地味な物語を最後まで読んで下さった方々、どうもありがとうございました。

実は番外編が3編ございますので、次からはそれを順次発表しようと思います。ですから、これで最後ではありません。今しばらく、おつきあい下さいませ。

【番外編】 壱 永遠の完結〜八年後のメアリーとドリュ〜（前書き）

番外編、遅くなりました（- -；  
主人公ジエームズの妹メアリーと、友達ドリュの二人の愛の物語  
です。

【番外編】 壱 永遠の完結〜八年後のメアリーとドリユー〜

【番外編】 壱

永遠の完結〜八年後のメアリーとドリユー〜

1

リトルウッドは南北に細長い町で、やや小高い丘の上に家々が点在していた。

その土地の南の外れに、二年前から『シーモア石材店』が開き、そして約一年程前から年若い徒弟を一人雇って、年中ほぼ休み無く店は開いていた。

主人は働き者で真つ正直な人間だと言う噂が広がり、周辺の受けもよく、順調に売り上げを伸ばしていた。彼は隣町のドーセットで石工として長年修行を積み、一人立ちしてここに越して来たと言う。

あの忌まわしい事件と暴動から、もう八年が過ぎ去った。あの1889年の騒動は、今でもこの辺りでは語り草となっている。若者が処刑され、それは後で無実だと分かり、怒り狂った人々がイングランド人の家を焼き討ちしたり、物を盗んだりして散々暴れ狂ったのだった。

けれどもそれも直ぐに鎮圧され、何人もの人達が逮捕されて拷問を受け、やがて町は再びおとなしくなった。けれどもこの周辺の人々は、その事件の事を未だに覚えていて、決して忘れなかった。

ドリユー・シーモアがそのドーセットから離れて、仕事場で御影石に鋸を入れている時、徒弟兼雑用係のアンドリユーが石粉だらけ

の手で、ドリユーに手紙を手渡した。

「はい、親方」

ドリユーは見覚えのある字をさつと一瞥すると、「それじゃ、ちよつと休もう」と言つて、側のストウールに腰掛けた。

「お茶を持って来てくれ、アンドリユー」

「へーい」とアンドリユーは間延びした声を出した。

ドリユーは粉を払うと、そのごつい手で華奢な手紙を開けた。

□

1897年7月6日

親愛なるドリユー

如何お過ごしですか？ 随分長い間、お便りを出していませんが、お許し下さい。このところ、色々忙しかったのものですから。

わたしの仕事はやつと軌道に乗っています。リバプールでの盲学校の教鞭は、恐る恐るですが何とかなっています。学生達は、皆夫々に勉強に励み、わたしは仕事が終わると、息子シヨーンの待つ下宿へと慌てて帰る日々です。毎日クタクタですが、とても充実しています。

シヨーンはもうすぐ八歳になり、益々あの人に似てきました。どことなく腺病質なのが気がかりですが、それでも重い病にも掛からず、親子二人何とか暮らしてられる事は、何という幸せな事なのでしょう！

シヨーンは小学校では、とても優秀ですが、時折よそ見をする事があるそうです。あの人と同じ茶褐色の髪、けれどもあの瞳のような色ではなく、綺麗な薄いブルーです。あの人をもう少し丸くしたような顔立ち。でも近所でも愛らしいと言つて下さる方が多く、皆からとても可愛がられております。



時々シヨーンを見ていると、昔の事が懐かしく思い出されますが、けれどもそんな感慨に耽っている暇が無いほど多忙で、近所の人に預けているシヨーンの瞳に後ろ髪を引かれる思いで、毎日学校へと向かっております。

ドリユー、あなたにはいつも感謝しています。あの人の為に……ジエームズの為に、立派な墓石を彫って下さっていたのですね。最近ある方からその事を聞きました。そして隣には、親友のロバート（ボブ）・ハーシーのお墓もあるのですね。きっと二人はいつも語らっているでしょう。

わたしもいつか、息子のシヨーンと共にそちらに参りたいものですが、けれども悲しい思い出が、未だにわたしをドーセットへと行くのを躊躇わせています。

父も母も、わたしとシヨーンを赦す事は無く、シヨーンは一度も祖父母には会っておりません。シヨーンには罪は無いと言うのに……。けれどもきつといつか、立派なシヨーンを見て、幾ばくかの怒りを解いてくださる物と信じたい。そうでないと、女手一人で育てる勇氣は出ないでしょう。

写真を同封しております。

ドリユー、いつかきつとあなたに会いに行きます。その時まで、あの人のお墓を守ってあげて下さいね。

それでは又。余り仕事をし過ぎないでね。身体を大切に。

あなたの友

サラ  
□

中からヒラリと一枚の写真が床に落ちた。拾い上げると、眼鏡を掛け、きりつとした表情の女性の膝に乗るように、一人の可愛らし

い男の子の姿があった。

「ジエームズ！ …… そんなはずは無いよな…… けど確かによく似ているぜ、シヨーン」

ドリューはそつとその写真の男の子に、呼びかけた。

「早く大きくなれよ、シヨーン」

その時、アンドリューが慌ててやって来た。来客があると言うのだ。ドリューは立ち上がった。

「誰だつて！？」

「さあ、この辺りじゃ見かけない顔なんです。でも、そのう…… すごい美人ですよ、親方あ！ あんな綺麗な人は、この辺りじゃ見たこと無いです」

とおませな14才の少年は、もじもじしながら答えた。ドリューは首を傾げて一瞬考えたものの、すぐに鋸を放棄して表に出ることにした。

玄関の外に、夏の光に照らされて、一人の若いが成熟した背の高い女性が立っていた。

場違いな殺風景な石材店の店先に立つ若い女性は、最初はドリューに気付かず、物珍しげにあちこち見回している。革靴を履き、少しだけ足首を出している今風のこげ茶の服を着、地面には古くて大きな布製のカバンを二つ置き、どうやら旅人らしい。

その旅する女性の顔は、初夏の遅い午後の光に照らされて輝いて見えた。ドリューはなぜかボーッとして、その見知らぬ女性を見つめていたが、やっと声を発した。

「何か御用でしょうか、お嬢さん？」

中から出てきたドリューを見ると娘は振り返った。その時ドリューは、彼女の中に言い知れない懐かしさと、ドキドキするような興奮との両方を覚えた。なぜなのだろう……。

「あなたが、ドリュー・シーモアさん？」

とその女性は快活に問いかける。キビキビした挑むような眼差しだ。少し丸みを帯びた顔を縁取る、ボンネットからもれる金色の後れ毛と、見事な宝石のようなブルーの瞳。彼女はドリューの記憶には全く無いものの、どこかで会った事があるような気さえする雰囲気を持っていた。

「ええ、そうですが。何か……？」

「ああ、済みません」と娘は微笑んだ。「自己紹介を忘れてしまつて。わたしはメアリー・エドワーズ。お初にお目にかかりますわ」

その途端、ドリューの頭は真っ白になった。そうして暫く言葉さえ出てこないのだ。そんな有様の彼を見ると、メアリーはばつが悪そうに微妙な微笑を返した。

「ごめんなさい。あなたを驚かせてしまったようですわね。もっともですけど」

そう言うと、メアリーは自分から片手を差し出したので、ドリュ―はおずおずとその手を握った。

「あ、会えて嬉しいです。ミ、ミス・エドワーズ」

何を今更、などという無粋な問いかけは今のドリュ―には無かった。長い間、兄の墓参りにすら来なかつたくせに、などと言う非難は、今この瞬間にどこかへ飛んで行ってしまったからだ。

「何か付いています？」とメアリーはいつまでも自分を凝視しているドリュ―に向かって、臆せずに問う。

「あつ、い、いいえ。いいえ。……ただ、余りびっくりしたもので」「そうでしょうね」

メアリーは手を離れた。彼女は今始めて、何かの呵責を感じたようだ。

「兄に似ています？」

「そう……似ている様な、似ていない様な」とドリュ―は正直に答えた。

「突然、何の前触れも無く来訪して御免なさいね、ミスター・シーモア。でも実はコーンウォールからロンドンに行くつもりだったんです。けれども船でコーンウォールからウェールズに渡つて、かつてお世話になつた修道院に行き、シスターにお会いしてから、それからドーセットに参りましたの。」

ここからロンドンに出向いても遅くは無いと思ひまして……」

メアリーは悪びれずハキハキ喋った。けれども、その言質には言い訳がましいところや、どこか恥じているような微妙な雰囲気漂わせていた。そして、又彼女はやや疲れているようにも見えた。無理も無い。コーンウォールからここまででは、かなり遠い。

「ここまで大変だったでしょう？」

「いいえ、ドーセットは知っている場所だったし……リトルウッドも馬車で来ましたから」

「お茶でもどうです？　ちょうどその用意をしている所でした」

「ええ、でも……」

「中に入りませんか？　少し休みを取らなければならないようですよ、ミス・エドワーズ」

「それじゃ」とメアリーはホッとしたように承諾した。

ドリューはメアリーの重いカバンを二つ楽々と持ち上げると、中に入りアンドリューにお茶を二人分と何かお菓子が無いか、と頼んだ。

アンドリューは「へーい！」と答えながらも、親方の頬が赤くなっているのに気付いて、ニヤニヤしていた。

＊～＊～＊～＊～＊

ドリューの質素な居間のテーブルに腰掛すると、メアリーはホッと溜息を付いた。背をしゃんとはしているが、警戒しているような目つきと、良心の呵責の両方で、未だに身体を硬くしていた。

反対にドリューは、まるで夢遊病者のように、かつての親友の妹をじっと見つめていた。

メアリーは両手を組んだり解いたりしてもじもじしていたが、やっと言葉を選びながら話し始めた。

「あれから、もう八年にもなりますね。一度はお伺いして、あなたにお礼をしなければと思っていましたのです。でも、兄のことを……つまり……兄を赦すのに随分時間を費やしてしまって……。その上なかなかお暇を頂けなくて、こんなにも経ってしまったんです」

メアリーはうつむいた。長い金色の睫毛が、頬に影を落している。

「それではやっと気持ちの整理が付いたのですね？」

「ええ！ やつとね」とメアリーは顔を上げた。「それどころか、わたしは以前よりもずーっと兄を理解出来るんです。兄がやったこと、そして兄が書いたことは、一部では正しかったと。

わたしもコーンウォールでは、兄のような目に何度も合いかけたし、その度にわたし、兄の気持ちを痛いほど感じ取りました。けれどもそこまで行くには随分時間が必要だったわ。わたし自身が、世間知らずの大馬鹿者だったしね」

メアリーは自虐的に言ったが、ドリュウは黙ったままだった。

アンドリュウがお茶と、少し焦げたスコーンを持って居間に入ってきた。

「親方あ。こんなもんしかなかったんですけど」

「ありがとう」とメアリーはハッキリと礼を述べた。「美味しそうですよ」

「そうですかあ？ それじゃあ、ごゆつくりと。へへへ」

「何だ、その笑い方は！？」

ドリュウが叱ると、メアリーがたしなめた。

「まあいいじゃないの。快活な少年だし」

メアリーは少しだけ笑った。

「綺麗だ……」とドリュウは憑かれたようにつぶやく。

「ああ、この服？ これは兄から、兄が亡くなる少し前に貰ったお金で新調しましたの。やつとそんな気持ちになって。きちんと出来ていて、わたしもとても気にいっていますわ」

「いえ、服じゃない！」

「え？」

「あなた自身のことを言ってるんですよ、ミス・エドワーズ」

メアリーは照れたように俯いた。その頬が少し紅くなっているのを、ドリューは愛しそうに見つめていた。

メアリーは改めて、目の前の口ひげを蓄え、赤褐色のもつれたやや長い髪の逞しい大男を見上げた。石工という労働が陰しく刻まれ、本当はまだ30そこそこだというのに、すでに老成したような趣のドリューは、じつと見返した。

二人とも同じことを考えていたのだが、それについては敢えて何も語らなかった。

ドリューは気まずい思いを打ち切るかのように、咳払いを言った。

「ロンドンへ行くというത്？」

「そう、コーンウォールでの家庭教師を辞めました。もう教える事は何も無いほど、お嬢様やお坊ちゃま方も大きくなれたし、もうお一人のお坊ちゃまは秋からパブリック・スクールへ行かれるのですわ。」

それにわたしの人生も変化していい時ですもの。もう、すっかり年を取って、若い娘とは言えせんものね！」

そう言うのと、メアリーは笑った。彼女は、死んだジェームズよりもっと率直な性格のように見える。けれどもふとした仕草や眼差しに、ジェームズの面影が宿っていた。

ドリューは、8年前のジェームズ……処刑された時の様子を生々しく思い出して、慄然とした。

＊＼＊＼＊＼＊＼＊＼＊＼＊



あの時……

処刑台に引つ張り上げられたジェームズは、確かに牢番のサムの述べたとおり、もう意識は無かった。ぐにやりとしてほとんど死人のような囚人の痛ましい様子に、見物人達から轟々の非難が飛んだ。そして、処刑の後、裁判に居た例のアジターターの扇動で、人々は煽られ、ドーセットとその近辺で、乱暴狼藉の限りが尽くされたのだ。警察署は投石され、市長の家にも嫌がらせと見られる放火があった。何軒かの商店は暴徒に荒らされた。

もちろんすぐさまその騒動は鎮圧されたものの、その暴動はリトルウッドやスウォンシーと言った近辺へと飛び火していったのだ。

『死人を辱め、処刑までした』圧制者に対する、今まで燻っていた民衆の怒りが吹き上がったのだろうか。けれどもそれも、今は昔だ……。徹底的に弾圧された民衆は、今では嘘のようにおとなしくなっていた。

言わばただの見せしめのような処刑の後、約束通り、幾らか小金持ちのニッキーの親父さんは、ジェームズの遺骸を引き取り、そしてドリユーがその墓石を彫ったのだった。

\*~\*~\*~\*~\*~\*

ドリユーのカップを持つ手が、ブルブルと震えて、カチカチと音をたてた。

「どうなさいました、シーモアさん？」とメアリーが心配そうに覗き込んだ。

「いえ……つまり……あなたを見てみると、ジェームズを思い出してしまつて。それと、自分の青春時代をもね。今じゃすっかり石材店のオヤジだけど、8年前はまだ血気盛んなガキだったとね」

メアリーは微笑むと、辺りを見回した。

「それはそうと……シーモア夫人はどちらに？」

「ああ、いや。俺はまだ独身なんですよ。けれども、二年前に独立して、ここに居を構えました」

そう言いつつ、ドリユーの本心は、実はドーセットから出たかったということだったのだが。

「だからなのね、ドーセットには居なかったのは」とメアリーは得心して頷く。

「ご足労をお掛けしましたね」

「いいんですよ。直ぐ隣町ですもの。あの……ニッキーって方が教えて下さったんです。兄のお友達だったんですってね」

「あいつは今では二児の父」

ドリユーはぷつと吹き出した。

「あいつのような奴でも、ちゃんと子供は居るってわけだ」

「まあ、そんなこと仰らないで！ 人の良さそうな素朴な方でしたもの。赤ちゃんにも会いました。とても可愛くて……」

メアリーの煌く瞳が少し翳り、彼女はぐつとお茶を飲み干した。

「あなたにもお会いして良かったわ、シーモアさん」

「ドリユー、と呼んで下さい」

メアリーはその言葉を反芻するかのように、じつとドリユーを見つめた。

「では、ドリユー。あなたにお会いして、長年の胸の痞えが下りた思いです。これから又生きて行く勇気がわいて来ましたわ。兄は良い友達を持っていたのね……知らなかった」

メアリーは暫く黙り込んだが、再び明るい微笑を浮かべた。

「やっぱり、寄り道してよかったわ」

勝気そうなメアリーの瞳が潤んでいるのが、ドリューには分かった。

「それじゃ、これで。兄の墓はどこですか？」

「え！？ これから行かれるのですか？ それはちよつとなあ。お若いお嬢さんには、少し無理ですよ。分かりにくい所だし、日が暮れてしまいます」

「それじゃあ……明日にしようかしら？」

「それがいい」

「宿はどこでしょう？」

「宿？ ここに泊まれば良いです」

ドリューは言ってしまうてから、我ながら大胆だと思った。日頃シャイだと言われている“シーモア親方”の言う言葉ではないのに、メアリーの前ではスラスラ言えるのはなぜだろう？

けれどもびつくりしたのは、メアリーの方だったかも知れない。

「あ、でも……」

「いいんですよ。二階には客間があるんです。滅多に使わないんですが、ちゃんと鍵付きのね」

それからドリューはもう一度、今度はゆつくりと念を押しながら言った。

「あなたと一緒に夕食でも……取ればいいなと思って。一泊くらいいいでしょう？ 色々お話もしたいし。明日は俺があなたをジェームズの墓に案内しますよ」

メアリーはドリューの真剣な目を見た。

「ええ……そうしますわ」

立ち上がりかけたメアリーは、再び座りなおした。

どこからか小鳥の鳴き声がする昼下がり、ドリユーとメアリーは未だにお茶という口実で座り続けていた。

「何だか……ここに居ると落ち着きますわね。今まで、お屋敷の中で様々な人達やご家族にいつも見張られているような生活でしたもの。だからかしら……。それじゃ、今晚はこちらで一泊させて頂きますわ」

「有難う！ 有難う、ミス・エドワーズ！」

とドリユーは心から嬉しそうに言った。

「いいえ、メアリーと呼んでくださいな」

「それじゃ……メアリー、夕食までまだ間がありますから、ちよつと休まれたらどうですか？ 二階にその部屋があるし、徒弟に荷物を運ばせますよ」

「そうね、そうします。本当は少し疲れていたんです、わたし」

メアリーはいつものように自意識が薄れると、ホツとしてつい本音を出した。

ドリユーはアンドリユーに、メアリーのカバンを持たせ、客間に案内するように命じた。メアリーを案内し終わって、戻って来たアンドリユーは、へらへら笑いながら、再び石工用の前掛けを掛けながら言った。

「ほらあ、美人だって言ったでしょう、親方。ねえ、あの人誰ですか？ 洗練されてて、香水の匂いがほのかに香り、うゝん、たまんねえなあ！ 親方も隅に置けないよなあ。あんな人を知っていたなんて。だから今まで嫁さんをとらなかつたんでしょ？」

「るせえ！」とドリユーは怒鳴った。けれどもその顔は、声とは反

対ににやけている。

「お前がまだチビだった時の、俺の友達の妹さんなんだ。コーンウォールに暫く居たらしい。いいか！ 失礼な事はするなよ！」

「合点！」とアンドリユーはウインクした。「で、夕食はどうします？」

「そうさな。肉屋に行つて、今日一番のローストビーフを買つて来い！ それとパンと一級のワインも」

「へえ、ワイン！？ 久しぶりですね、親方」

「つべこべ言わずに、早く行け！」

言い付かったアンドリユーはへらへら笑いながらも、楽しそうにすつ飛んで行つた。

ドリユーは徒弟の背中を目で追いながら、そつと二階を見上げた。

ジェームズ……お前の妹さんって、あんな人だったのか。道理で宝物のように囲っていたんだな。悪いやつめ！ けど、お前が生きて居たらな……あの妹さんを、見ることが出来て、多分喜んだだらうに。

微笑んだドリユーの頬に一粒の涙がこぼれ落ちた。

\*ゝ\*ゝ\*ゝ\*ゝ\*ゝ\*ゝ\*

メアリーは質素だが清潔な客間のベッドにごろんと横になった。

革靴を脱ぐと、足首が少し痛い。足を揉みながら、将来の不安に幾らかめげてはいたが、今日始めて会つたドリユー・シーモアに好ましい印象を覚えていた。

生前の兄は、ドリユーの事を少しだけメアリーに書いていた。今ではメアリーはその兄の手紙を破り捨ててしまったことを、深く後悔していた。文面は余り覚えては居ない。

けれどもその中に、ドリューという信頼できる人物が居るから頼るように……ということは確かにあったようだ。

同封されていたかなりの大金は、怪訝な顔をしたままのシスター・ルースに叩きつける様に預けて来た。そして兄の死後、そのシスターから送られたお金を、何かの缶に入れたまま、8年間放りっぱなしにしていたのだ。

けれどもコーンウォールのお屋敷を去る少し前、メアリーは封印されていたお金を引き出した。クシャクシャになった札を手に取り、と、なぜか生前の兄の面影が目に見えるように浮かび、号泣したのをついこの間のように思い出した。

なぜ今まで素直になれなかったのか、それは今更反省すら出来ないが、せめて兄の思いを、そして遺した物の思いを推し量るべきだったのだ。

その時、メアリーは兄に対する怨念を、涙と共に洗い流した。恨みつらみは、苦い涙となって、何処かへ消えた。そして初めて、メアリーは新しい一步を踏み出そうと決心したのだ。

\*~\*~\*~\*~\*~\*

その数日前、メアリーはその家の次男であるマイケルから、自分の愛人にならないか、と提案されたのだ。町に一軒の家と、そして不自由しないだけの額のお金を毎月与えるというのだ。

けれども、数ヶ月前、レイプ同然に犯された自分に対するそのような扱いは、到底愛から出ているとは思えなかった。

マイケルは「愛している。妻を娶っても、いつまでも側に居て欲しい」とまで言ったが、メアリーの誇り高い心は傷つきこそすれ、少しも嬉しくはなかった。

「それは、ニセモノの愛だわ！」とメアリーは叫んだ。「わたし、ここを出て行きます。もうここに居る理由も何も無いんですもの！」  
「僕を愛してはいないのか、メアリー!?」とマイケルは両腕でメアリーの肩を掴んだ。

「ええ……わたし、あなたを愛してはいませんもの」

「そうか」

そう苦々しく言うマイケルは腕を放した。

「それじゃ、勝手にどこかに出て行きたまえ！ たった一人の娘っ  
こが、それも死刑囚の妹がどこでどう生きていけるのか……それを  
知りたいものだな！」

＊～＊～＊～＊～＊～＊

マイケルのお情けにすがらなくて良かった……と今更ながらメアリーは思う。

ベッドに寝転がっていると、少し開け放たれた窓から小鳥達の声が、涼やかに聞こえて来る。メアリーは言い知れない悔しさに涙で枕を濡らしながら、その内にうとうとと転寝うつたねをしてしまった。けれどもそれは、初めて感じるほど心地良い感触であり、その中にいつまでも漂っていた。

その日の夕食は、いつも粗食のドリユーに似合わず久しぶりのご馳走だった。

まだ14歳の徒弟は、隣室の台所の隅でガツガツとおこぼれのご馳走を喰らいながら、時折メアリーと親方の様子をチラチラと盗み見ていた。

晚餐に現れたメアリーはこげ茶の旅行用スーツではなく、恐らく持ち物の中で一番の一張羅だと思われる、薄い白いモスリンに同色のボイルのレースの付いたブラウスを着ており、そこだけが妙に華やいで輝くばかりに見えた。貧しい徒弟には眩しくてじつとは見てられないほどだ。

メアリーとドリユーは時折ちよつと笑ったり、食べる手を休めて熱心に話し込んだりしていた。

「それで？ 兄はハンサムでしたでしょう？ 少なくともわたしの知っている兄はそうでしたわ」

メアリーはほとんど皿を空にしなが、腕を頬に当てて尋ねた。少し傾げた顔が、ワインの酔いのせいかほんのりとピンク色で、ドリユーは暫くボーッとしていた。

「母に似ていたんです。髪とか肌の色とか、口元もそうだったわ。わたしの幼い記憶の中の“母”そのものだったの。ただ、あの目の色だけは違っていたけど。でも今はもう臃で」

「ああ……お兄さん……ジエームズは、町中の女が振り返っていたと言っても他言は無いでしょう。色々な女からは、愛されたいとまでね」



「サラも、そうだったのかしら？」  
初めてメアリーは禁句を口走った。

「そう、サラ・オーウェルもまた……そうだったのかも知れませんが、けれどもただそれだけではないでしょう。彼女は今一人息子育てるのに必死だし、それは俺にも分かります」

「その子は……本当に兄の子なの？」

上目遣いにメアリーは聞いた。ドリュウの目に当惑と、怒りに近い表情が浮かんだのを、メアリーは見逃さない。

「もちろんです、メアリー！ 彼はショーンと言って、そっくりなんですよ、ジェームズに」

「ショーン！？ それはケルトの名前ね。イングリッシュのサラは、その子にそんな名前をつけたのね」

「ああ、そうだ！ あなたに見せたいものがあるんですよ」

ドリュウは巨体に似合わず素早く立ち上がると、隅の引き出しをぐそぐそした。そして今朝来たばかりのサラからの手紙と写真を差し出した。

メアリーはサラとショーンの写真を見ると、片手を口元に持って行った。そして暫くはものも言わずに、じっと見入っていた。

「兄さん……思い出すわ、遠い昔の事を。幸せだった頃を……」

ドリュウを見上げたメアリーの瞳は潤んでいた。

「ほんと……ショーンは兄にそっくりね。そして、サラ……聡明そうな人。兄が愛した人は、この人だったのね」

「そうだよ、メアリー。ジェームズが命がけで愛した人だ」

メアリーはそつとその写真をドリュウに返した。

「誤解していたのよ、わたし。でも、そうではなかった。わたし、何だかホッとしているの。兄が愛した人と、そして子供を、あ……」

わたしの甥ね……甥のションを見て、初めて納得したわ」

「それは良かった」とドリユーは微笑んだ。「サラはとてもいい人で、頑張り屋なんだ。いつか会うこともあるだろう」

「ええ！ わたしも会いたいわ、ドリユー」

二人は暫く黙り込んだ。哀しい思い、そしてなぜか近しい思いが二人をもっと結び付けていた。

ドリユーは空になったワイングラスを弄びながら、やや小声で言い始めた。

「ジェームズはこの町では目だっていた。いや、目立ち過ぎていたのかもしれない。

最初の間、俺達グループでさえ、奴の事を毛嫌いし、悪口雑言を浴びせていて。一部は、嫉妬も在ったんだと思います。けれどもいつの間にか、ジェームズは俺達の仲間になり、リーダー格にもなつて行つた」

「如何にも兄らしいわ。仕切り屋さんだったから」

ドリユーはなおも目を上げずに言い続ける。

「昔はね、メアリー、俺達散々悪戯やもつと悪いこともした。だから、あの徒弟が」

とドリユーは一瞬声をひそめた。「少々の悪戯や怠けをしても、大目に見ているんです。表向きは、怒鳴つてはいますがね」

メアリーはチラツと視線を隅で喰らい付いている若いアンドロイドに向けて、口元をほころばせた。

「あなたって優しいのね」

「いいえ！ そんな……。そうではなく、とにかく俺達、兄弟も同然だったんですよ。俺って家族が居ないから、ジェームズはまるで俺の兄のようだった」

「家族が……？」

「そう。俺、孤児だったんです。捨てられてて」

「わたし達も、両親に死なれたから分かりますわ」

メアリーはドリューのごつい手の上に、自分の掌を載せた。ドリューは目を上げると、はにかんだ。

「それで……兄は本当に社会主義者だったのかしら？」

「いいえ、そうだとは思えない。あれは、あれは多分濡れ衣だと……」

ドリューの胸に鋭い棘が突き刺さった。心がふいに閉ざされたような気がして、メアリーをまともに見ることが出来なくなった。この快活で綺麗な妹から兄を奪ったのは自分なのだと、長い間ドリューは苦しんできたし、今もその思いから逃れることが出来なかった。贖罪はまだ済んではないのだ。

メアリーとドリュウの間には、どこか気まずい思いが支配していた。

「ジエームズは法廷では、イエスと言ったけれど、あれは違う。彼はもうほとんど自分が何を喋っているか分かっていなかった。意識も朦朧としていたし。けれども、奴らは無理やりジエームズをそう仕立て上げたし、俺だって……」

メアリーは目の前の大男が、今にも泣き出しそうに顔を歪めたのを見て取って、話題を変えようとした。彼女にとっても、法廷での兄の姿を想像する事は、哀しい事だったからだ。

その時突然ドアがノックされた。アンドリュウが戸口に立って、何か説明していた。

「来客があると言ったのに」というアンドリュウのぼやきをよそに、一人の初老の女が遠慮なくズカズカと入って来たのだ。

彼女はけれども入っては来たものの、テーブルで食事をしている、見かけない若いきりつとした娘を見て、驚きの声を小さく上げた。

「まあまあ、これは失礼を！」

ドリュウは分からないように舌打ちすると、椅子を引いて立ち上がった。

「ああ、ミセス・オニール。今晚はちょっとやめて頂きたいのです  
が」

「そうでしょうとも！」とミセス・オニールは作り笑いをした。「でも、紹介ぐらいさせて下さいな」

ドリュウは溜息を付いたが、気分を仕切りなおした。

「この方は、俺の旧友の妹さんで……」

「もついいわ。分かっていきますとも！」とミセス・オニールは頷いたが、実は何も分かつてはいなかったのだ。

「それで？ ……ミス・ベアトリクス・ジョーンズさんのことは？」

再びドリユーは舌打ちした。

「言っただでしょう？ 俺は誰とも結婚する気はないって」

「もちろん、そうでしょうね」とミセス・オニールは意味ありげに微笑んで見せた。

「この方が、ずっとお美しいもの」

「それに聡明そうですね」とおませな徒弟が相槌を打った。

「んま！」

ミセス・オニールはかなり気分を害すると、早々に出て行こうとする。

「それじゃ、この辺で。邪魔しましたわね」

「どうもいつも済みません」

そう言いながら、ドリユーはドアをきつちりと閉めた。

「勘違いされちゃった」と真っ赤になって苦笑いするドリユーを、メアリーは面白そうに眺めており、くっくつと笑い出した。

「そのベアトリス何とかさんって方が、未来の花嫁候補？」

「とんでもない！ あんな娘っこ」とドリユーが椅子に座りなおしながら、手を振った。

「でもね、ドリユー。ずっと独身でいるのも変よ。このお店だってあるんだし。そうでしょう？」

身を乗り出して聞くメアリーに、ドリユーは鸚鵡返しに言った。

「君がまだ独身でいるのも、変だと思うけどな」

言い返されたメアリーは困惑の表情を浮かべた。ドリユーはしま

った、と思ったが、再び俯き加減に語り始める。

「メアリー……この8年、訳の分からない内に過ぎてしまったんだよ。つまり俺はさ、ジエームズを失って暫くは仕事も手につかないほど落ちこんでしまつて、自分でもどうしようもなかったんだ。

深酒を飲んで暴れたり、ジエームズとボブの墓の前で泣き喚いたりとか……そんな日々で。その内に、仕事に没頭する事で、全てを忘れようとした。何年も何年も同じ事の繰り返しだったし、ただ我武者羅に働いて、やっと自分の店を持つて。そうこうしている内に、8年の月日が流れて行つて……。気付いたら、もうこんなオジサンになつていた」

二人の間に沈黙が流れた。けれどもその重苦しい沈黙を破つたのは、メアリーだった。

「わたしももういつの間にか、26になつてしまつていたの。もうすっかり年増よね。

で、コーンウォールの家庭教師のお館を去る時、その次男から愛人にならないか、と申し出があつたわ」

ドリユーは初めてチラと顔を上げた。

「でもわたしは……断つた。一生誰かの日陰者として生きるのは嫌だったから。たとえ、お金には困らなくてもね。生まれてくる子供も、一生『私生児』と言われ続けるでしょう。あの、シヨーンもいずれその事に傷つく事になるわね。わたしはもうそんな生き方を止めようとしたし、それがそこを去るきっかけにもなつた。

その時始めて、わたしは兄が残してくれたお金を使おうという気になつたの。

兄が生前言つていたように、世の中は甘くはなかったわ。修道院の生活は窮屈だったけれど、ある意味では世俗の汚れもなく、護られていたのよ。わたしはただお祈りをしているだけでよかったの。

でもコーンウォールでの生活は、別世界だった。ご主人様ご夫婦、子供達、そして使用人達に散々翻弄され続け、わたしは唯一人その中に何も知らずに放り出されてしまった。

8年も持ったのは、わたしにもプライドや意地があったからなの。彼らに心からへつらった事は無いわ。ただの一度もね」

「ジエームズにそっくりだね、そういう所は」

ポツンとドリユーが言った。

「そうかもしれない。それがわたし達一族の持つ頑固な所よ。でもだからこそ、今はもうこの世には居ない兄に共感し、再び絆を覚えたいわ。兄は以前わたしのこと、“清纯”だと言ったの。でも、今のわたしはもうそうではないのよ。」

ドリユー、わたしは決して清らかな女じゃない！ 清纯だけでは、正直だけでは生きていけなかった！」

メアリーは両手をぎゅっと握り締めると、拳骨でテーブルを叩いた。

目の前の勝気そうなメアリーの青い目の奥に、拭いきれない焦燥と後悔を痛々しく感じたドリユーは、一言だけ言った。

「分かるよ」

「本当に？ 本当にあなたに分かるの？ この惨めな気持ち」

「分かる。それは俺の気持ちと同質だからさ」とドリユーはぼそつと言った。「俺自身、まるでユダのようなことをしたんだ。ジェームズに全ての罪を被せた……。俺、まじで本気で死のうとしたよ。だが結局できなかつた。今はただ……ただ生きているだけさ」

メアリーは顔を上げ、その潤んだ瞳をドリユーに向けた。

「ただ、生きているだけ？ わたしはそうは思わないわ」とメアリーはやっときっぱりと言いつつ切った。

「わたし達、生かされて来たのよ、きつと。そうだわ。そうでしょう？ そう考えないと、生きて行くことそのものが、無意味に思わない？」

「つまり……ジェームズやボブが後押しをしている、と言いたいのか？ 俺達やサラや、残されたショーンをも」

メアリーはその大きな瞳を見開き、うなずいた。

「そう。今まで、様々な苦勞をしてきたけれど、今ここに目には見えないけれど彼らの魂が導いてくれたんじゃないのかしら？ 護ってくれていたんじゃないのかしら。そうは考えられない、ドリユー？」

メアリーは初めて淋しげに微笑んだ。その時ドリユーは、メアリーを抱き締めたいという、清らかな心根から来る欲望を感じて、た



じろいだ。一人孤独なのは、自分だけではない。この目の前の若いメアリーを自分の太い腕で抱きとめてあげたい。そして彼女の持っている苦悩や憂いを少しでも暖めてあげたい……そう感じたのだ。

ドリユーがメアリーの目を見つめると、メアリーもしっかりドリユーを見つめ返した。

「明日、兄とその親友のボブのお墓に連れて行ってくださる？」

「もちろんさ」とドリユーは我に返って答えた。「案外いい場所なんだ。明日は仕事を休むかな、久しぶりにね」

「ありがとう」とメアリーは短く謝辞を述べた。「もう、寝ないと」「疲れたんだろう、メアリー。今晚はぐっすりとお休み。俺が下で見張っているからね」

「まあ、何から見張っているの？」とメアリーは面白そうに尋ねた。

「あらゆるものから」

ドリユーは真面目に答えた。

「あらゆる艱難や、辛苦や、悲しみから、君を護ってあげる」

「あ・り・が・と」

メアリーの声は擦れていた。この晚餐の間に、メアリーとドリユーの心は急速に近付いて行ったのだった。それはなぜか、2人にも分からなかった……。

\*~\*~\*~\*~\*~\*

翌日は、朝までの雨が上がり、素晴らしい日和になった。メアリーとドリユーは、一応パンとワインだけを持って、午前中に出かけることにした。

徒弟のアンドリユーは、

「どうか、ごゆっくり。客は俺が追い返しますから」と生意気にもそう背後で呼びかけると、へへへと口元で笑った。

2人がリトルウッドの街中を馬車で通っていると、道行く村人達の好奇の視線を、完璧に感じてしまった。

ドリュールは一々挨拶しながらも、道端でひそひそと耳打ちしている女達を見ては苛々していた。

「わたし達、見物されているわね」とメアリーは囁いた。

「ちつ。まあ仕方ないな。そうさせておけばいいさ。何しろ、皆ここでは退屈し切っているんだから」

2人は思わず目を見交わすと、クスツと微笑んだ。

ジェームズがサラと会っていた時には、こんなに大っぴらではなくもつと秘かにだったのだろうか、と今更ながらドリュールは思っていた。

少なくとも自分達2人はどちらもウエルズ人だし、命懸けではないのだ。そしてメアリーは自分の目と鼻の先に座っており、手を伸ばせば直ぐにも触れ合える距離に居る。

けれどもドリュールは、メアリーに親しげに話しかけるのが怖かった。30にもなって、少年のように頬を染める自分が許せなかった。昨晚、メアリーが客間に姿を消した後、ドリュールは唯一人居間のソファに座り、メアリーがこのまま去って行く生活と、共に居る生活の落差を感じ、ぞつとして眠れなくなったのだ。

今座っているソファに、そしてテーブルに、殺風景な石工の家にメアリーが居るという事。それはまるで薔薇の花が咲いたような、匂うような素晴らしい空間になって行くだろう。

けれどもメアリーが去って行ったとしたら、再びこの家は、セピア色の写真のように色あせ、そして何もない日々が過ぎて行くだけだ。

ドリューは自分の赤褐色の髪の毛を両手で挟むと、初めと思えるほどの哀切さに身をよじったのだ。

メアリーをこのまま離したくはなかった。以前ジェームズが自分にメアリーを託したい、と言ってくれた意味が、今始めて実感となつて、身と心を苛んでいた。

ジェームズ、俺に勇気をくれ！　メアリー、どうか俺の元から去らないで……。

ドリューはハツとして顔を上げた。その時始めて、ドリューはジェームズがサラに抱いていたような苦悩を共有し、激しい後悔に涙したのだった。

メアリーとドリユーを乗せた馬車は、ゴトゴトとゆっくり走り、  
 どうやらやっと町を抜け出る事が出来た。

「やっと、町を抜け出せたわね」とメアリーは、ドリユーの方に向  
 かって微笑みかけた。ドリユーの表情は緊張の余り、まだ硬くなっ  
 ている。

けれどもメアリーの朗らかな呼びかけで、ドリユーは夢想から目  
 覚めて、チラツと横を向いた。直ぐ近くに、メアリーの蒼い瞳が瞬  
 いている。空の青さを反映して、キラキラと輝く瞳だ。

「ああ、そうだね。墓地はドーセットとリトルウッドの中間地点に  
 あるんだ。まあ何と言うか……ちゃんとした墓地では無いんだが」  
 ドリユーは言いよどむ。

「いいのよ、承知しているから。兄は刑死したんですもの」  
 メアリーは声音には、わざとらしい明るさがあった。

「ドリユー、教えて。ねえ、最後まで兄は毅然としていた？」

ドリユーの心臓はドキリと波打った。がドリユーはごく自然に聞  
 こえるように、答えた。

「もちろん、そうだよ」

ドリユーは一言言ったものの、以後は無言だった。メアリーは察  
 して、やはり黙り込んだ。

ドリユーは、ぐったりとしてまるでボロ人形のように引きずられ  
 ていたジェームズの姿をメアリーには語ることは一生無いだろうと  
 心に誓った。メアリーの心の中では、兄ジェームズは世界一男前で、

毅然とした素敵な存在であつて欲しかったのだ。

＊＼＊＼＊＼＊＼＊＼＊＼＊＼＊

墓場はドリユーの言つた通り、二つの町のちょうど中間の丘と丘に囲まれた窪地にあつた。ここがちゃんとした墓地ではない証拠に、木で出来ただけの十字架が長年の歳月に曝されて朽ち果てていたり、倒れたりしており、周囲の道や街道からは全く見えないような場所だつたからだ。

そこには、行き倒れて身元も分からなかつたような旅人や、刑死した囚人達、そして自殺者……その他、諸々の理由でちゃんとは葬れなかつた人々の永遠の安息の場所だつた。

その中であつて、ジェームズとボブの墓標だけは木ではなく、ちゃんとした御影石であり、その二つの石の上にはドリユーが丁寧に彫つた字があつた。石材も実は彼自身の実費だつたのだ。よつて、この二つの墓だけは、妙に目立っている。

メアリーは馬車からそつと降りた。途中で摘んでいた野の花を持ち、ゆつくりと墓石に近付く。一步一步近付く度に、こみ上げるものが押し寄せ、彼女の歩みを遅らせた。けれども彼女は左の兄ジェームズの墓の側まで来るとしゃがみ込み、持っていた白い花束をそつと置いた。

「長かつた……」とメアリーは呟いていた。「ごめんなさい、お兄様。でも今やつと……」

『ジェームズ・クライブ・エドワーズ』

1865～1889

ここに眠る

』

墓標が涙で霞んで見えなくなった。8年間の、いや生まれてから今までの複雑な感情が渦を巻き、メアリーはしばらくその場を動く事ができなかった。

随分長い間しゃがみ込んでいるメアリーの直ぐ後ろには、ドリユーが両手に帽子を持ったまま、じっと待っていた。微笑が風と共にドリユーを包む。けれどもその微笑の中には、苦い涙と贖罪の思いがあるのだ。

こうして何分も経ち、やっとメアリーは立ち上がって顔を上げると、ドリユーの方を振り返った。

「ありがとう……ドリユー」

か細い声でメアリーは謝意を述べた。そしてそつと掌で、頬にかかる涙の筋を拭った。

「感謝しているわ、立派な御影石で。兄は、親友のボブの隣で淋しくはないわね。わたしはもっと荒れ果てた無残な墓を想像していたの。それを見るのが怖かったのかもしれない。でも、あなたのおかげよ……こんな静謐な場所にくれたのは」

メアリーの声は震え、今まで我慢していたものがどつと面に噴出してきたようだった。

「これでやっと……やっと心の整理が付いたわ。長い間、澱のように溜っていたものから開放される」

メアリーは瞑目した。長い金色の睫毛が揺れている。ドリユーは思わずメアリーの肩を抱くように、その太い腕を置いた。今のドリユーにはもう言葉など出てはこない。

メアリーは暫くドリユーの手の下でじっとしていたが、やがて目を開いた。

「これからロンドンに行くの。やっとその勇気が出て来たわ。ロン

ドンで一步を踏み出す勇氣が。もうやるべきことは全てやったんですもの」

「ロンドン？」とぼんやりとドリユーは鸚鵡返しに言った。「ロンドンで、何を？」

そしてドリユーは、余りの恐怖にパニックになりそうになった。メアリーをロンドンに行かせることは……結局メアリーを失う事なのだと言ったその衝撃は、ここ8年来最も辛い現実なんだと。

「あたらしい仕事を探すの。当面のお金はあるし」

「し、しかし、若い女が一人で暮らす所じゃないよ、あそこは」

とドリユーはどもりながら言った。自分でも何を喋っているのか、気付かないほど、ドリユーは取り乱していた。

「君みたいな綺麗な女は、襲われたり、誰かに利用されたりするかも……」

その時、メアリーはキツとした目付きでドリユーを見上げた。

「何が言いたいのか、ドリユー？　わたしが娼婦にでもなると思っているのか？」

「そ、そんなことは、言っていないさ！」

ドリユーは目を見開きながら、大声を出した。

「そんなことは……」

けれどもメアリーの鋭い目付きは、ドリユーを通り越して、その彼方をじっと見つめているだけだった。

「いいえ、ドリユー。わたしはもう娼婦と同じなのよ！」

「メアリー！」とドリユーは思わず怒鳴ってしまった。娼婦と同じなど、何という事を言うのだらう。

「メアリー、落ち着けよ。君は……」

「いいえ、わたしはもう」

メアリーはドリユーからさつと離れ、背をくると向けた。ドリユーはメアリーの静かな気迫に気圧されて、ただメアリーの背中を見つめているだけだった。その肩は心なしか、震えているようにも見える。

「きつとあなたに軽蔑されるけれど、本当のことを言うわ。

わたしがコーンウォールで家庭教師をやっている間、大勢の男達が擦り寄って来た」

「それは、君が綺麗だったからだよ」

「違うわ！ わたしの弱みに付け込んだのよ！」

メアリーは血を吐く様に叫んだ。それはほとんど慟哭か悲鳴に近かった。

「でも、わたしは何とかやり過ごそうとした。何人かは成功したけど……でも、そうでない時もあったの。強制的に、と言うよりも、暴力的に、わたしは、わたしは……犯されて……」

メアリーの肩がそれと分かるほど、震えだした。そしてうな垂れたメアリーは、片手を口に当てて、まるで呻くように泣き出した。ドリユーは片手を差し出したが、けれども決してメアリーには触れずに、そのままにしておいた。



「その時……わたし、兄のことを思ったわ。兄もまた、状況と場所こそ違え、同じような目に合ったに違いないと。兄は男性だったから、もっと過酷だったはずよね。殴られ、貶められ、石を投げつけられたでしょう……。全ての罪を押し付けられたとしても、決して反論も反抗も出来なかったはずだと。」

やっと分かったなんて、わたしも大馬鹿者よね。あの修道院でぬくぬくと育ったせいで、世の中の事を何一つ知りもせず……。わたし、墮胎もしたのよ」

メアリーはしゃくり上げていた。

「可哀想な……わたしの赤ちゃん！ それなのに、義姉のサラは、兄の子をちゃんと育てているという。恥ずかしいわ、わたし、本当に顔向けなんて出来ないのよ！」

「メアリー……」とドリユー小声で言い掛けたが、果たしてその声がメアリーに届いたかどうかすら分からないほど、メアリーは泣いていた。

「兄がわたしの手紙に返事を書かなかった、いえ、書けなかった理由が始めて理解できたの。わたしを引き取って、惨めな兄妹にしかくはなかったのよ。自分で道を切り開いて欲しかったのよ。でも、それも無駄だった！！」

今のわたしは、もう穢れきった女でしかない。男達のオモチャになり、そして子供まで殺してしまった。ここまで生きて来られたのが不思議なくらいよ。多分、自分自身も冷酷になって行ったのね。人間性を失っていたのだわ。

今では兄のことを非難する資格なんて、これっぽっちもない。わたしは、わたしは最低な女なんですもの！」

ドリユーは近寄り、思い切って彼女の肩を抱こうとした。けれどもその前に、メアリーは振り返り、もう一度キツパリと断言した。

「わたしは、サ・イ・テ・イの女なの！」

「違うよ」とドリユーはゆつくりと、そして素朴にてらいもなく答えた。「違うよ、メアリー。君はただ翻弄されただけ。そして逃げられなかっただけだ」

ドリユーを見つめるメアリーの顔が歪み、そしてよろけた。ドリユーはさつとメアリーを抱き止めた。次の瞬間、メアリーはドリユーの分厚い胸にすっぽりと収まると、大声で泣き続けた。その泣き声はなかなか収まらないほど、激しいものだった。ドリユーはただメアリーの背中を静かに優しく撫でているだけだった。

「かわいそうに……苦しんでいたんだね、メアリー。たった一人で孤軍奮闘していたんだね。泣くがいいよ、思い切り泣くがいい。今まで一人で突っ張ってきたんだろう？俺でよければ、いつまでも泣いて泣いて泣き続けていいんだよ」

ドリユーの胸の中で、次第次第にメアリーの嗚咽も収まってきた。

「わたしを軽蔑してない？」

「軽蔑？それなら、俺の方がもっと酷いことをした。俺はユダだった……」

ドリユーはぎゅっとメアリーを抱き締めた。

「軽蔑するどころか、俺は、俺は君をロンドンなんかには行かせたくないんだ！」

「ドリユー……？今、何て？」

泣き濡れた瞳を、メアリーはやっと上げると、目の前の無骨な大男を見上げた。

「ああ、俺は君にここに居て欲しい。永久にここに居て欲しい、俺の側に」

メアリーの顔に微かな微笑が浮かんだような気がした。

「本気？」

「本気だとも！」とドリユーは語気を強めた。「俺……俺……君が好きだ、いや、愛しちまっている、狂うほどね」

ドリユーは、寡黙な自分がこうまでスラスラと本心を打ち明けてしまった事に対して、我ながら驚いていた。多分背後からジェームズが後押ししたのかもしれない。ドリユーの一世一代の“告白”だった。

メアリーは涙で潤んだそのキラキラと輝く蒼い瞳を、じっとドリユーに注いでいた。ドリユーは、メアリーが何と答えるか、それが怖かったのだが、一方では妙に冷静な自分が居たのだ。

「本気なのね」とメアリーは言った。彼女はドリユーが嘘を言っていないことを、確信していた。

「わたしがここに、ずっと居てもいいの？」

「もちろんさ！」とドリユーは舞い上がりばかりに答えた。「マジなんだよ、メアリー。俺、君を愛しているんだ。本当は……以前ジェームズから頼まれていた。でも、そんなことじゃない！俺、君を一目見た時から……君が誰だか知らないときから……愛していたんだ」

「兄が!？」とメアリーは、目を丸くしながら尋ねた。「わたしにも、以前そんなことを書いていたわ」

「ジェームズはこうなることに気付いていたのかもしれない」

「と言うよりも、こうなって欲しかったのね。如何にも兄らしいわ。でも、わたしは自分で決めたの。ここに居るって！」

「メアリー……！」

ドリユーは、再びギュツと力一杯にメアリーを抱き締めた。

宝石を手に入れたよ、ジェームズ。君の大切にしていた宝石を。君の果たせなかった夢を、俺はきつと果たしてやるぞ。俺はメアリ

ーと一生大切に添い遂げる。誓う！ 幸せにしてみせる……。

「ドリユー？ 誰か居るの？」

強く抱き締められたメアリーは、自分が窒息する前に、遙かな彼方を見つめているドリユーを、怪訝そうに見上げた。ドリユーは愛しげに、メアリーを見下ろした。大切な大切な宝石を。

「いや、誰も居ないさ、俺の、俺の愛するメアリー」

ドリユーは軽々とメアリーを振り回し、そして恭しくもどかしくキスをした。メアリーは、例えようもないほどの幸福と安寧の中に漂っていた。そして2人はしっかりと手を握り合った。

その時、風もないのに、墓に供えた白い花が揺れた。

END

## 9（後書き）

これで番外編Ⅰは終わりました。少なくとも、この二人には幸せになつて欲しい、という願いを込めて書いたものです。

あと二編残っていますので、順次、載せて行くつもりです。よろしければ、又お付き合い下さいませ。

【番外編】 弐 レクイエム 1（前書き）

番外編2です。本編から約11年後、サラと息子シヨーンのその後です。

遅れまして、申し訳ありません。

## 【番外編】式 レクイエム 1

レクイエム

1

リバプールの聖公会のカテドラル、『セント・マーク教会』から、ガブリエル・フォーレの『レクイエム』の中の『ピエ・イエズ』のボーイ・ソプラノが響き渡った。

この『レクイエム』は昨年1900年のパリでの万国博覧会で演奏され、絶賛された曲だった。もっと前から演奏されはしていたが、万博で演奏されて以来、この曲は遥かに有名になっていたのだ。

特に『ピエ・イエズ』の曲は最も有名であり、ソリストがソプラノかボーイ・ソプラノかで、意見が分かれていた。（注：現代は、ほとんどボーイ・ソプラノが歌うようです）

今歌っているのは、栗色の髪に透き通った碧い瞳を持つ、とびっきりの美声の少年で、年頃は10歳か11歳ぐらいだった。美声だけではなく、その白い聖歌隊の制服を着て歌うその少年は、はっと人目を引く美少年でもあった。

指揮をする司祭の顔も、満足げに輝いている。少年は全部歌い終わると、ほーっと一息ついた。

「ブラボー、シヨーン！」と司祭は叫ぶと、パチパチと手を叩いた。「素晴らしかった！ ソプラノが歌うよりも、遥かにフォーレの意になっっていると思うね。すなわち、『永遠の安らぎの中にある』と表記されている通りのレクイエムだよ」

最前列のその少年、シヨーン・オーウェルは、にっこりと微笑んだ。

この司祭、チャンドラーは、9歳で母親に連れて来られたシヨン・オーウエルの事を思い出していた。ひ弱そうで、神経質で繊細、というのが最初の印象だったが、けれどもシヨーンの歌の才能を一番最初に見抜いたのも、チャンドラー司祭本人だった。

母親と言うのは、アメリカ・モリソン盲学校の教師で、眼鏡を掛けた理知的な女性だったが、どこかいつもシヨーンを見てハラハラしているような態度が見て取れた。

その理由は後で分かったのだったが、シヨーン・オーウエルには父親が無く、そして口さがない噂では、ウェールズのとある町で処刑された謀反人の忘れ形見であるというのが、もっぱらだったのだ。

けれども、チャンドラー司祭にとっては、神の与え賜うた才能を発見したという興奮の前では、そんなことはどうでも良かった。シヨン・オーウエルはまごうかた無き“天才的な”ボーイ・ソプラノで、恐らくこのセント・マーク教会、いや、ここリバプールと言っても正解かもしれない。

そして歌っている時のシヨーンは、日頃の脆弱な所など微塵も感じさせない堂々とした態度と、そして幸福感を表していたのだ。

「6月のコンサートでは、シヨーンのボーイ・ソプラノで『レクイエム』をやるう。女声は必要ない。バツクは、ここの聖歌隊だ」

司祭のこの声に、少年達がざわついた。聖歌隊の少年達は、シヨーンの実力を認め、そしてチャンドラー司祭が、我が子のように大事にしているのを知ってはいたのだが、ある“悪い噂”を、年かさの子ほどよく聞いていたせい、奇妙な嫉妬のようなものを持っていた。反して、幼い子達は、皆単純に喜んでいた。

「市長主催の毎年行われるコンサート、今年は新世紀（\*20世紀）初めての年だから、大いに盛り上げなくてはね」と司祭は、子



供達の複雑な溜息を物ともせず、にこやかに言った。そしてさり気なくシヨーンに目配せする。

シヨーンは、この司祭様が大好きだった。父親が居ないシヨーンにとって、一番信頼できる大人と言えば、この司祭だったからだ。

シヨーンは、なぜ自分に父親が居ないのか、と言う事を最近になって気にするようになった。幼いときには、母のサラから「あなたの父は、いい人だったわ」と言う言葉だけで満足していたのだが、次第次第に、他の友達にはあつて、自分には居ない“父親”がどういう人だったのか……。それが聞きたかった。

けれどもそれを問い詰めると、母のサラは、途端に何とも言えない哀しそうな表情をするので、それ以上シヨーンは問い詰める事が出来なかったのだ。

シヨーンは、細やかな気配りのある子供だった。見かけはサラよりも、父であるジェームズに似ていた。けれども、性格は少し違う。そしてサラともジェームズとも違う“何か”を持っていた。

そして、自分にはレスターに祖父母が居るという事を知ってはいたが、その祖父母と会った事は、今までに一度も無かった。

聖歌隊は解散し、シヨーンはウキウキした心で、外に出た。一番仲の良いベンと一緒に帰路に付いていたが、やがてベンとは道が違うので、バイバイと別れた。

そして、シヨーンは直ぐに後ろから付けて来る、ヒタヒタという足音を聞いたのだ。振り返ると、同じ聖歌隊の中でも、少し年上の子達が数人、両手をポケットに突っ込んで坂道を上がっていた。その目は、獲物を追う目付きで、シヨーンは逃げても無駄な事に直ぐに気が付いた。その中には、市長の甥のクラレンスも居る。彼は12歳で、第二ソリストだった。そしてクラレンスのダチ達が、数人彼を囲んでいる。

シヨーンは無駄だと知りつつも、坂道を駆け上がった。けれども彼らも又走り出し、息を切らせながら、シヨーンの前に走りこんで前方を塞いだ。そこはどこかうら淋しい場所で、粗末な家々が建っている地区だ。

「シヨーン、おい、待てよ！」

「何か用？」とシヨーンは獅子っ鼻のクラレンスに、上目遣いで尋ねる。

「お前、父親の事知っているかい？ 知らねえよな、多分」

シヨーンは俯いて黙り込んだ。

「父親の名前を名乗っていないんだものな、それはなぜか知ってるか？」

「知らない……」とシヨーンは小さな声で答えた。

「それはな、お前がバスタード（＊私生児）だからだよ、シヨーン！ お前の父親は罪人だったそうだぜ」

「そんなこと、嘘だ！」

シヨーンは叫んだ。

「嘘だよ！」

「何なら、母親に聞いてみなよ。罪人の子供が、『レクイエム』を、リバプールの市のお偉方や、貴族達の前で歌えるのかってさ。おまけに、私生児の子が」

シヨーンは真っ青になり、それ以上聞く気も起こらず、一目散に駆け出した。

「バスタード！」と言う蔑みの罵り声が、背後から聞こえた。そしてバラバラと小石が飛んで来た。

その時、シヨーンは幼い子供から少年へと、一遍に飛躍してしまったのだ。駆けながら、シヨーンの瞳には涙がジワリと浮かんでいた。



ガッチャーンと言う音で、又サマンサが暴れているのを、サラ・オーウエルは察して急いでその教室に走りこんだ。

案の定、9歳になるサマンサ・レッドフォードが、自分の皿とコップを所構わず投げつけている所だった。あとの数人の生徒達は、恐れをなして固まっている。

サラは、サマンサを後ろから抱き止めた。けれども9歳と言っても、サマンサの力は物凄く、小柄なサラは飛ばされそうになった。そこへ、もう1人の若い教師、ウィル・ドノバンが慌てて駆け込んできて、暴れているサマンサを羽交い絞めにした。サマンサは散々暴れ果てていたが、けれども若いドノバン先生の腕力には叶わず、やがて諦めたのか疲れたのか、ぐったりとしておとなしくなった。

「オーウエル先生、大丈夫ですか？」と年下のウィル・ドノバンは、気遣わしそうにサラに言いかける。サラは、何とかして落ち着こうと深呼吸していた。

「サマンサ……何が不満だったの!？」

サラは、幼い盲目のサマンサに向かって、優しく尋ねたが、その声は明らかに震えていた。

「先生のバカ!」とサマンサは叫び声を上げた。「オーウエル先生なんて、大っ嫌い!」

「いいんですよ、先生。サマンサは僕が別室に連れて行きますから、後片付けでもして下さい」とのドノバンの声に、サラは「ええ」と消え入りそうな声で答えるばかりだった。

サマンサ・レッドフォードは、この町の有力者であり、議員もしているレッドフォード伯爵の一人娘で、全盲だった。以前はもつと金持ちの行く施設に通っていたのだが、そこでも問題児で、とうとうこの下町のアメリカ・モリソン盲学校にやって来たのだ。

そしてここでも、サマンサは、極めつけの問題児になった。サラは何とかして、この我が儘放題に育ったサマンサに対して、点字や指文字などを教え込もうとしたが、サマンサは直ぐに癇癪を起こして暴れだし、他の生徒も怯えるようになっていた。

だから、サマンサはいつも孤独だった。サラは胸が締め付けられるような思いでサマンサを見守っているだけで、心身ともに疲れてしまっていたのだ。

ウィル・ドノバン先生がサマンサを抱かかえる様にして別室に連れて行くと、サラはパンパンと手を叩いて、他の生徒を促した。「さあ、みんな！ 大丈夫だから、食べ終わったら積み木で何かを作りましたよね！」

その声で、他の生徒達はやっと自分のテーブルに付き、残りを食べ始めた。

サラはしゃがんで、サマンサが投げつけて欠けてしまった皿や割れたコップの破片を片付け始めていた。パンが教室の隅に飛び、林檎の破片があちこちに散っている。

それらを拾い上げながら、サラはふとどうしようもなく哀しくなった。これは教師の宿命だろうか？ 自分ではかなり有能な教師だと自負していた今までの教育方針が、サマンサと言う問題児にはさっぱり通用しないのだ。サラは自信を失いかけていた。

ひそやかな足音で、耳の良いサラはそれが一人息子のシヨーンだと気付き、いつものように入口を振り返った。

そこに、案の定ショーンが立っていたが、その普通よりも少し小柄のショーンの姿が、いつもよりもっと小さく感じられ、ハッとしてエプロンを掛けたまま近寄った。

ショーンはうな垂れていた。

「どうしたの!？」とサラは、ついさっきのサマンサの事も忘れて、言いかけた。ショーンが今どういう気持ちで、どういう状態にいるか、母であるサラは直感的に感じる事ができるのだ。それは、目の悪いサラの勘の鋭さかもしれないが。

毎日、聖歌隊の練習が終わると、ショーンは母親のサラの勤めている盲学校に来て、そして一緒にアパートに帰るのが日課になっていたのだが、今日のショーンはいつもとは違っていた。

「何かあった!？ あら、血が!」

サラはそう叫ぶと、ショーンの豊かな栗色の髪の毛に血の塊が付いているのを発見して、呆然となった。

「何があったの、ショーン? 教えて! 何があった!？」

サラがショーンの両腕を掴んで詰問しようとした時、ドノバン先生が入って来た。ショーンはこの好青年を、チラリと信頼の眼差しで見つめた。ショーンはこの分厚い眼鏡を掛けた、少し小太りの若いドノバン先生が大好きだったのだ。そしてドノバン先生も、毎日やって来るショーンのことをいつも気に掛けてくれていた。

「どうしたんだい、ショーン!」

ドノバン先生も、血が付いた髪に蒼白な顔色のショーンを見て、驚いて言った。

「何でもない」とショーンは、気難しく答えた。「転んだんだ」

「転んだ、だなんて……本当なの? とてもそうは思えないけれど」とサラは息子の嘘を直ぐに見抜いたが、その反面、息子の頑固さを

知ってもいた。

「なら、転んだ事にしよう」とドノバン先生は優しく言ってくれた。

「それはそうと、サマンサの様子はどうです？」

サラが聞くと、ドノバン先生の顔に苦渋が走った。

「サマンサはやっと泣き止んだのですが、自分の髪をくしゃくしゃにしていますよ。今、レッドフォード家に電話した所です。今日はこれでお返ししましょう」

「そう……」とサラは淋しく答えた。その間、シヨーンは母親とドノバン先生をじっと見つめていた。

「オーウェル先生。お疲れでしょう、毎日、あの子の為に散々努力しても、何も報われずに」

「いいんです、わたしの教授方法が悪いのですわ。もう少し、何か考えなければ……」

「まあ、しょうがないな。あの子は札付きのトラブル・メーカーだから。それはそうと……」と突然ドノバン先生は口調をガラリと変えた。「オーウェル先生。一度、ご一緒に夕食でも如何ですか？」

「えー？」

サラは余り突然の申し出に、ややびっくりしながら聞き返した。

「でも……わたし、この子と……」

「ああ、もちろん、シヨーンも一緒ですよ。たまには、レストランでの食事も、気晴らしになっていいのではないですか？」

ドノバン先生の頬は真っ赤になっていた。彼が如何に勇気をふるって申し出たか、シヨーンにはぴんと来た。そして、なぜか嬉しくなった。

けれども次の瞬間、戸口に立つ物音で、何もかもが消し飛んでい

ったのだ。

「先生！ お客様が！」と、盲学校の小使いがオドオドした声音で言った。その声で振り返った二人の先生は「あっ！」と声にならない声を出した。

入口には、背の高いレッドフォード伯爵の、苦虫を噛み潰したような姿があつたからだ！



サラとウィル・ドノバン先生は、顔を見合わせた。まずいことになった、と二人とも考える事は同じだ。

いつもはサマンサを迎えに来るのは、サマンサの中年の侍女か乳母と決まっていた。今まで一度だって、父親であるレッドフォード伯爵自身が来たことはないのだ。それが今日に限って……と言うことは……。

3

直ぐ後ろには、校長が蒼くなつて立ちすくんでいた。

「サマンサの先生は、どちらですか？」

レッドフォード伯爵の慇懃無礼な声が響く。と見るや、校長は卑屈なほど、ペコペコし、サラを指差しながら言った。

「あの眼鏡を掛けた、若い女性です、サー・レッドフォード」

レッドフォード伯爵は、下々のように舌打ちはしなかった。けれども、内心ではそうしていたに違いない。サラはどう見ても、経験の浅い、小柄でひ弱そうな女性にしか見えなかったからだ。

「失礼ですが、あなたが先生ですか？」

「サラ・オーウェルです。サー・レッドフォード、何か御用でしょうか？」

とサラは臆せずに応えた。直ぐ側のドノバン先生はハラハラしていたが、シヨーンは堂々としている母親に対して、なぜか尊敬の気持ちを持った。

「一度、お話をお伺いしたかったです」

その声は見掛けに似合わず、若々しかった。案外年は若いのかも知れない。

「お嬢さんの事でしょうか」とサラは尋ねた。「それでしたら……別室で」

「いや。ここではつきりと言って頂きたい。娘は果たしてまともになるのか、ならないのかを」

サラは黙り込んだ。側の校長は、ハンカチで額の汗を拭いている。

「お嬢さんは……伯爵、普通の娘さんですわ。まともかそうではないか、だなんてことは仰らないで下さい」

「けれども、娘はここでも厄介者のようですからな」

「いいえ！ 伯爵、勘違いしていらっしやいますわ！」

とサラは情熱を込めて叫んだ。

「サマンサは“厄介者”なんかではありません。可愛くて、天使のようで、そして頭がいい娘さんです。でも……」

「でも？」

「甘やかされています」

サラはキツパリと言った。

「なるほど……。それでしたら、ここに入れても意味は無い、と言うわけですね」

伯爵の声は、冷厳としていた。

「いいえ！ もう少しお時間を下されば、わたしが精一杯のことをしてさし上げますわ。何が彼女をそうさせているのか、もっと知りたいのですもの」

「必要ないみたいですな、もう」

「いいえ、どうか、どうか、もう少しお時間を下さい！ サマンサは本当は素晴らしい子供なのです。甘えが消えれば、きっと何もかも上達します。サマンサのご将来のことをお考えになって下さい！

このままでは、だめなんです。ですから……」

「もう結構！」と伯爵は語気を強めた。「あなたは言うばかりで、何一つ成功していない」

「仰るとおりです……言い訳は致しません」

サラはうな垂れた。

「わたしは今無力ですわ。でも、きつとわたしの愛情は通じるはずです。わたしはあの子を何とかしたい、その事ばかりなのですから！」

「オーウェル先生！」と見かねてドノバン先生が、言いかけた。

「もうその辺でよろしいでしょう。サー・レッドフォードは……」

「いいえ！ 伯爵様にも、是非とも協力して頂きたいのです。でしたら、きつと上手く行きますわ。サマンサの将来を駄目にしないで下さいませ。このままでは……」

「このままでは？」

伯爵の問いかけに、サラは黙り込んだ。が直ぐに顔を上げて、キツパリと言った。

「誰にも愛されず、誰をも愛せない人になってしまいます」

伯爵の頬がピクピクした。彼は暫くサラを睨んでいたが、ステッキを持ち直すと、

「失敬する。サマンサを連れて帰ります」と一言言つて、去って行くとした。3人の教師が呆然と見送る中、突然シヨーンの、

「でも、サマンサは歌が上手いんです！」と言つ、まだ大人に成り切っていない甲高い声が響いた。

レッドフォード伯爵はびっくりして少しか振り返った。今まで、怒りで気付かなかったのだが、そう言えばサラの側に、小柄な男の子の姿があつたのだ……。

「なんだって!？」

「サマンサは、とても綺麗な声をしていて、音程も確かですよ、伯爵」

シヨーンはもう一度、今度ははっきりと言った。伯爵は、その男の子のハツとする美しさに、今頃気付いていた。そう言えば、横に立つサラに、何となく似ているような気もする。子供なのに、どこか大人びた憂いを秘めた目付きの子供だ。

「済みません」と今度はサラがうつたえながら釈明した。「この子は、『セント・マーク教会』の聖歌隊で歌っているもんですから…」

「ソ、ソリストなんです」と嬉しそうにドノバン先生が助け舟を出した。

「ソリスト？　ボーイ・ソプラノの？」

「そうです。確かに、この子の言う通り、サマンサは歌の才能もお在りですわ。素晴らしい所を一杯持っている子なんです、本来は「歌ね。それが？」

そう冷淡に言い残すと、伯爵はドアの向こうに消えた。サラはドツと脱力感に襲われ、深い溜息を付いた。

「どうするんですか、オーウェル先生！？　あの方を怒らせると、為になりますよ。あの方は、ここにも多大な寄付をして頂いているし、先生の罷免権もお持ちのお方なんですから！」

校長はホツとしながらも、このオーウェル先生の出すぎたマネを憂慮していた。

「仕事を無くされると、あなただつて困るでしょう？」

「え、ええ」

サラは少し前の勇ましさをやや反省していた。確かに、サラにとって何より大切なのは、シヨーンの将来であつて、サマンサではないのだ。



まるでひよつこのような若い教師に意見されて憤慨しつつ、レッドフォード伯爵はサマンサと共に、自分の馬車に乗り込んだ。

サマンサの髪の毛はクシャクシャだったが、その金色に輝く髪は、亡き妻リンドと同じだった。サマンサは滅多に来てくれない父が向かえに来てくれたものではやぎ、馬車の中でお喋りを始めた。

レッドフォード伯爵は、娘の身体を自分に引き寄せた。目の中に入れても痛くない娘。全盲の哀れな娘。こんなに可愛いのに、神は何故サマンサの目を盲いにし、そしてその母親であり愛しい妻を、自分から奪い去ってしまったのだろうか。

「サマンサ、その服は泥だらけだよ」

「だって、トムと喧嘩したんだもの」

「トムって子が、お前に悪戯をしようとしたのか!？」

「違うわ。トムって、臭うの。臭いのよ。着替えていないんでしょ。だから、『臭いわ』って言ってやったの。そしたらトムが怒ってわたしの髪を引っ張ったので、ナイフで頭を叩いたの。トムはわたしを突き飛ばしたのよ！ 自分の方が、少し見えるから。嫌な子だわ！」

「確かにトムって子は嫌な子のようにだが、臭いって他人に言うものではないよ、サマンサ」

「なぜよ？ その子、着替えが少ないって言ってたわ。ちゃんと洗濯もしていないのよ」

「あの施設に居る子達は、お前ほど服を持っていないのかもしれないよ」

伯爵は何か考え込みながら、そう答えた。

「おやつだって、いつも不味いマフィンしか出ないのよ。だから、まずいわって、あのオーウェル先生に言ったら、『黙って食べなさい』って。それで、その皿をひっくり返したの。そしたら、あの先生ったら、物凄く怒るのよ」

「皿をひっくり返すのは、レディとは言えないよ、サマンサ」

「だって、本当に不味いんだもの。お父様も、一度口にしたら、ペツと吐くような代物なんだから」

伯爵は黙り込んだ。着替えも満足に無い、そして食事も大したことはない、下町の盲学校だから、それ相当のものしか無いとは覚悟していた。けれども、サマンサには、それが大いに不服なのだろうが、しかし……。伯爵は、何かが納得できなかった。聞いていると、サマンサのやっている事も、とても誉められたものではないのではないか……。そんな気さえしてくるのだ。

「ねえ、お父様。こんど、オルゴール買って〜！」

とサマンサは甘えたような声でおねだりする。

「ああ、いいよ」

そう答えながらも、伯爵の心は複雑に揺れていた。

「そして、あの先生を辞めさせてちょうだい」

愛娘の憎悪のこもった言葉に、伯爵は初めて目を大きく見開いた。

＊～＊～＊～＊～＊

サラとショーンは、ドノバン先生と一緒に、街中の小奇麗なレストランで、夕食を取っていた。ショーンは母親のサラとドノバン先生を、交互に見つめていたが、ふと口を差し挟んだ。前々から言いたかった事なのだ。

「あのう、僕、選ばれたんだ」

「え？ なに？」とサラは楽しそうな顔つきで、振り向く。「何なの？」

「レクイエムの中の、ソリストに」

「『ピエ・イエズ』の！？」とドノバン先生が驚いたように言いかけた。

「うん」

「そりゃあ、凄い！」

ドノバン先生はパーンと手を叩くと、シヨーンの肩を抱いた。

「ねえ、そんなに凄い事？」とサラ。

「そうですね、オーウェル先生！ 今度六月にある市長主催の音楽会『新世紀コンサート』の目玉が、その『レクイエム』なんです。去年、パリ万博で、フランス人のフォーレ氏が演奏して、大いに評判になった曲ですよ。世界中の人々が感激したと新聞にありました！」

とドノバン先生は、興奮を隠しきれない。「そのなかでも、『ピエ・イエズ』は、とても……何と言うか、清らかな曲でして、それをボーイ・ソプラノのソロで歌うなんて、こんなに素晴らしいことはないですよ！ な、シヨーン！」

「そんなにステキな歌？」

「そう、難しいし高音が多くて。はあ、シヨーン、君はなんて素晴らしいボーイ・ソプラノなんだ。先生は嬉しいよ！ 誰に似たのかな？」

シヨーンは照れて下を向いた。サラは何と言っていいか分からなかった。

「この子の父親が、歌が大好きでしたの。そう言えば、歌うのが上手かったし……でも」

そこまで言うと、サラはジェームズを思い出して、言葉を詰らせた。



「済みません、オーウェル先生。こんな事、言ってしまった」

「いえ、いいんです。もう昔の事ですわ。もう遙か昔の……」

「シヨーンのお父さんは、歌が上手なウェールズ人だったんですよ」

「そう」とサラは淋しげに答えた。「きっと、彼の遺伝ね。わたしは、歌はからきし駄目だから」

「乾杯しましょう」とドノバン先生は慌てて気を取り直して、明るく言った。「シヨーンの歌に！　そしてフォーレ氏に！」

「チャンドラー司祭様にもね」とシヨーンは付け足した。

「そうだったね、あの司祭様がシヨーンの才能を開花させたんだから」

「才能？」と怪訝そうにサラが問う。

「そうですね！　知らなかったんですか？　シヨーンがこの町一

番のボーイ・ソプラノだったってことを」

「え！？」とサラは改めて聞きなおした。

「評判ですよ、オーウェル先生」

「そんなに？」

「何だ。知らぬは、母親だけとはね」とドノバン先生は、やや呆れて言った。サラは如何に自分がシヨーンについて何も知らなかったかを、今更ながら恥じ、俯いた。

「わたしって、馬鹿な母親ね」

「それだけ、仕事熱心ってことですよ。ね、シヨーン」

シヨーンは幸福そうに頷いた。自分を幾らか知らないからといって、決して人を恨んだりしないのが、シヨーンの生まれつきの性格だった。そしてそこだけは、決定的に父のジエームズとは違う点なのだ。

幸福な夕餉は終わり、サラとシヨーンはドノバン先生と別れて手

を繋ぎながら帰路に付いた。月が明るい夜道だった。

「ねえ、ママ……僕のお父さんってどんな人だったの？」

これから寝ようと言うその時に、パジャマ姿のショーンが突然言い出したので、サラは欠伸を引つ込めた。と言うか、欠伸もどこかにすっ飛んで行ったのだ。

とうとうきたか……そんな気持ちだった。

ショーンはジェームズを知らない。そして、知らなくてもいい振りをずっとしてきていたのを、サラは感付いていた。

けれども今晚は余程の事があったのか、それともショーンがそれだけ成長してしまったのか、この11歳の息子は真剣な目付きで母であるサラをじっと瞬きもせず見つめているのだ。

「どうして、急に……そんなこと聞くの、ショーン？ 今日何かあったのね。頭の怪我の事だって、その事と関係があるんでしょう？」  
ショーンは黙ったまま、俯く。そして意を決したように、頭を上げた。

「ママ、バスタード（私生児）って何？ リチャードもお父さんが居ないけれど、でもバスタードなんて言われないよ。そう言われるのは僕だけなんだ」

「リチャードのお父さんは、病気で亡くなったからよ。でも……」  
サラは言葉に詰って、ソファに座り込んだ。

「それに僕はどうしてお父さんの姓を名乗れないの？ ママ、お父さん嫌い？」

「まさか！ 大好きだったわ！ だからあなたが生まれたんじゃないな

いの。それにその声も、きつとお父さんから頂いた賜物なのよ」

「じゃ、なぜ？」

「それはね」

そう言うのと、サラは覚悟をきめ、シヨーンを手招いた。母のサラから見ても、本当に可愛い少年だ。ジェームズには無かった穏やかな眼差しが、夜の闇にも負けずに輝いている。サラの宝物、そしてサラの命なのだ。

シヨーンはおとなしくサラの横に座った。サラはゆっくりと、噛んで含めるように述べた。

「お父さんと、そしてわたしは、正式には、結婚していなかったからよ、シヨーン」

「正式には……？」

「分かる？ お父さんとわたしが結婚する事を、あなたのお祖母さんやお祖父さんは許さなかったの」

「なぜ？ お父さんは、罪人だって言うの、ほんとなの？」

「会った時には罪人ではなかったわ。でもその後色々な事が起こってしまった、わたし達は……」

ふいにジェームズの独特の瞳の色と、そして微笑が脳裏に浮かんだ。今でも恋しい！ 側に居てくれたら、と切に思う。けれどもそれは到底叶えられない夢に過ぎないのだ。

「余りに複雑なので、何と言っていいのか……」

「お父さんってどういう姿だったの？ 僕に似ている？」

「写真一枚撮る暇もなかったわ。でも、実は絵を持っているのよ。デッサンだけど、お父さんのお友達のニッキーって言う人が、数年前思い出しながら描いてくれたものを、わたしに送ってきて下さった。ニッキーって、あんなに絵が上手だったなんて」

「どうして黙っていたの！？」とシヨーンは叫んだ。

「だって、あなたはまだ小さかったんですもの！」

「見せて！　ねえ、見せてよ、ママ！」とシヨーンはサラを揺らした。「僕、見たいんだよ。僕のパパになる人だったんだもの。絶対に見たい！」

サラは黙って立ち上がると、鍵を掛けてあつた引き出しを開け、そこから幾重にも折り畳まれた粗末な紙片を差し出した。

「ごめんなさいね、シヨーン。これがあなたのお父様……ジェームズ・クライブ・エドワーズの絵姿」

シヨーンはおずおずとその紙片を開けてみた。鉛筆で描かれた一人の若い男の半身……それがシヨーンの父、ジェームズの似顔絵だった。その顔は半分横向きでこちらを向き、大きな瞳を見開いて、じつとシヨーンを見つめている。

「これが、パパ……」

「そう、あなたのお父様」

「こんな風だった？」

「よく似ているわよ。上手く描けている。これを見る度に、想い出すわ……」

「パパって、とってもハンサムだ」

「ええ、そうよ。そして、わたしを愛してくれた。その為に、死んだような気がするの」

「罪人じゃないよね」

「もちろんよ！　無実の罪だったの。そしてあなたが生まれるのを期待していた。喜んでいたのよ」

シヨーンは黙ってその紙片を大切そうに折り畳んだ。

「分かったよ。愛していたけど、ちゃんと結婚できなかった。そして生まれた子供を、私生児って言うんだね」

「そう」

サラの胸に、錐で突かれた様な痛みが走った。

そうだったのか！ ショーンは苛められていたのだ。自分が知らぬ間に、「私生児」と言いはやされていたのだ。そして傷まで付けられた。けれども母親を心配させないために、今まで黙っていたのだ。

「ステキなお父さんでよかったよ、僕」とショーンの快活な声がした。「そしてこの声をくれた人なんだね。今度の『レクイエム』はお父さんに捧げるよ。頑張って歌うから、見に来てね、ママ」

そう言くと、ショーンは頬に涙を落としているサラの首に、両手を廻して抱きついた。そして「お休み」と言くと、自室のベッドに向かった。

その背中、歩き方がジエームズに益々似て来たのを察したサラは、これ以上泣かない為に唇を噛んだ。そしてもう一度、ジエームズの絵を見つめて、静かに言いかけた。

「今でも愛しているわ、ジエームズ。そしていい子をくれて有難う。あの子はわたしとあなたの誇りなのよ！」

サラが朝の授業の準備に取り掛かっていると、校長が慌てふためいてやって来た。

「オーウェル先生……ちょっと」

サラは校長の声が震えているのを察して、緊張して振り返った。手には何冊かの重い点字の本を抱えているので、それほど身動きが取れない。

「え？ 何でしょうか？ お急ぎで無いなら、この授業が終わってからに……」

校長はエヘンと咳をした。

「それが急なのでね。サマンサ・レッドフォードがこの二日間出席していないのは、知つとるでしょうが」

「ええ、残念ですけど」とサラはシュンとなった。例の日以来、サマンサはずっと欠席しているのだ。「でも、それが」

「レッドフォード伯爵から電話があつたのだよ」

「……」

サラは沈黙したままだった。

「もしも1人の教師を辞めさせないと、娘は出席させない、と」

「それは、わたしのことですね、校長先生」

とサラは奇妙なほど静かに尋ねた。校長はハンカチを取り出して額の汗を拭きながら、首を縦に振った。

「それで？ 先生はどういうご返事を？」

「オーウェル先生と相談する、と答えたよ。だがね、そんなことでわたしはあなたをクビには出来ないし……かと言って、サマンサ

を辞めさせると言うことは、当てにしていた莫大な寄付がすつ飛んでしまうことにもなる……寄付はこのアメリカ・モリソン盲学校にとっては、死活問題でね」

サラは視線を落すと、持っていた重い点字本を机に置きなおした。

「わたし達親子にとつても、死活問題なのです……」

「何もクビにする、とは言っていないよ、わたしは」

「ええ。でも……でも、そう聞こえてしまうのは何故でしょうかしら？」

とサラは皮肉っぽく言った。

やはりそうなのか、とサラは今まで抱いていた不安を改めて反芻していた。巨大な権力の前では、自分達は所詮無力な存在に過ぎないのだ……。夫になるはずだったジェームズもそれを身をもって知っていたし、結局その権力によって押し潰されてしまった者の1人なのだった。そして、今度は自分達も……。

サラは、体内から急に力が抜けて行くような気がした。けれども気丈な彼女は涙は他人には見せたくないと誓っていた。そう、ショーンの為にも。

けれども無情な校長の声が背後で響いた。

「実はね、もう一つあるんですよ、問題が。ショーンの事なんだが……」

校長はなるべく感情を交えないように、述べた。

「何ですって!？」

サラは蒼白になりながら、振り返った。

「それだけは……あんまりです! それじゃ、ショーンが可哀想だわ! かわいそう……」

サラは片手で自分の口元を押さえた。けれども、こらえきれない嗚咽が漏れていた。



\*ゝ\*ゝ\*ゝ\*ゝ\*

Pie Jesu Domine

ピエ イエズ ドミネ

(清廉な主なるイエスよ)

Dona eis Requiem

Dona eis Requiem

ドナ イエス レクイエム

ドナ イエス レクイエム

(彼らに平安を与えたまえ)

Sempiternam Requiem

センピテルナム レクイエム

(永遠に続く 平安を)

『ピエ・イエズ』の曲が終わり、ショーンの清らかな声がピアノ  
ツシモで消えて行くと、チャンドラー司祭は、余りの感動に目に涙  
を浮かべた。

「ブラボー！ ショーン、最高だ！ 本番もこの調子で行ってくれ  
たまえ」

「ええ、司祭様」とショーンはニツコリはにかみながら笑うと、頷  
いた。ショーンを嫌っている者でも、ショーンの歌の上手さにな  
う者は居ない事を知っていた。悔しいが、それだけは認めなければ  
ならない。

「君の声を後世に残したいくらいだよ。レコードにしてもね」  
チャンドラー司祭はそう言ったが、当時はまだシリンダー方式の  
レコードが主で、円盤式レコードは数少なかった。けれども数年後

は、次第に円筒形のシリンドラー型は姿を消して行くことになるのだ。ショーンの声は、その過渡期にあり、レコードはまだまだ一般的ではない時代だった。

「チャンドラー司祭様！」と教会の寺男が呼びかけた。

「何だね？」

「写真屋が来ています。パンフレット用のね」

「そうか！ それじゃみんな、並んで写真に撮ろう。そしてショーン、君だけ1人の物もね」

「えっ、そんな。いいんですか？ 僕1人だけ？」

「そうだよ、ショーン。ソリストには、その名誉が与えられるんだ」

ショーンは天にも昇る心地がした。

「司祭様！ この曲は、僕のお父さんに捧げるんです。いいですよね」

「いいよ。だがそれだけではなく、他の人々全ての人の為にも、歌うこと！」

「はい、分かりました」

ショーンの笑みは美しかった。けれどもその笑みが凍りつく事になろうとは……。

サラは、広大なレッドフォード伯爵邸の一階の客間に待たされていた。生徒の家に訪問した事は多々あるが、いずれも粗末な家かアパートで、このような場違いな場所に來たのは、正直言つて初めてだった。

レッドフォード邸は、リバプールの郊外で、かなり離れた所にある。毎日通うのが如何に大変か、サラは身を持って味わつた。

今ちようど薔薇の咲き誇るイギリス式庭園を抜けると、ひっそりとしてはいるが、顔を上げなければ全部は見渡せないほど広い屋敷が、サラの目の前に現れたのだった。

執事は最初、粗末で地味な服装に眼鏡の小柄な女性を見て、やや驚いた素振りだったが、その女性が盲学校の教師だと名乗ると、慙無礼に中に招き入れた。

サラは中に入っても、その高い天井や古臭い家具に囲まれた壮大な広間に、まずびっくりして足を止めたが、姿勢を正して客間のソファの端っこに座つた。

直ぐ来ると言つた執事の言葉とは裏腹に、伯爵はなかなか現れなかった。

ざつと二時間は待つただろうか。

サラはようやく、待たされているのではなく、暗黙の内に『お帰り下さい』という意味だと悟つたが、ここで引き下がるわけには行かない。紅茶もビスケットも出ないというのに、彼女はひたすら待ち続けていたのだ。

＊　　＊　　＊　　＊　　＊

やがて何人かの人の足音が聞こえ、隣の廊下で話す会話が聞こえてきた。

「それじゃ、アルバート。お待ちしていますわ」

と囁くように甘えたように言う、尊大な婦人の声がした。

「ええ、エリザベス。では今度のパーティには必ず参りますよ」

この声は、多分レッドフォード卿なのだろう。数日前に聞いた奇立つた声音とは違い、男性的で綺麗な響きを持つ。官能的と言つてもいい程だ。

「伯爵様、実はお客様がお見えになって……」

執事の声がする。

「誰？」と伯爵は、その婦人をドアの向こうに返してから、聞いた。

「盲学校の教師で、確かミス・オーウェルとか」

「オーウェル!？」

明らかにうるたえた声がした。と見るや、カツカツと言う足音が、ようやく客間に近付いて来たので、サラは益々緊張して身構えた。

「おやおや、やはり、あなたか!」

と言う伯爵を見ると、サラは立ち上がって、優雅に礼をした。

「済みません、サー・レッドフォード。お忙しいとは思いましたが、是非お話があつて参りました非礼を、お許し下さいませ」

「いいですよ、少しなら」と伯爵は両手を顎に当てながら答えると、目で執事に出て行くように促した。そして自分も向いの椅子に座つた。

「さて、何でしょうかな?」

「あの……お分かりだとは思いますが……サマンサの欠席と、そしてわたしの進退の事です。それから……ショーンの事」

「ああ、あれね」と伯爵は何でも無さそうに、無機的に答えたが、その実その声に動揺があるのを、サラは敏感に感じ取った。

「最初に、あの……お許し下さい、わたしの教授のやり方のまずかったことを。心から反省しておりますわ」

「ええと、オーウェル先生。ここで、どれくらいお待ちを？」

「え？ ああ、あの、二時間ほどでしょうか」

「二時間も！」

伯爵はちよつと驚いた風だった。

「それくらいと言うことはありませんわ。わたしの事のみならず、息子の事ですもの。少しぐらい待ったって……」

「ちよつとお待ちを」と伯爵は身を乗り出した。「息子！？ では、『レクイエム』のソリストと言うのは、あなたの息子、と言うわけですか？」

「ええ、もちろん！ ご存じなかったのですか？」

サラは奇妙な気がした。てつきり、伯爵はシヨーンに対しても、腹を立てていると思い込んでいたからだ。

「わたしはあなたが……わたしのみならず、息子に対しても、お怒りだと思いましたので、それでこうやって……」

「それでは、あなたはご自分の進退の事だけではなく？」

「進退は……覚悟しています」とサラはキツパリと言った。「でも、息子にまで、その矛先を向けて欲しくはないんですの」

「そんな気はありませんでしたかね」と伯爵は、やや訝しげに言った。

そして伯爵は、シガレット入れから葉巻を取り出すと、忙しなく火を付けた。

「実は……市長ご本人から、セント・マーク教会のソリストを外し

てほしい、という要請がありました。その子は、私生児で罪人の子で、成績が悪く、姑息で卑しいと。司祭に取り入り、あまつさえ、市長の甥を苛めたからだ」と

「そんなことを……」

サラは絶句した。

「そんなデタラメを……お信じになったのですね？」

サラは悔しさの余り、それから暫く声が出ず、俯いた。涙が今にも溢れそうだったが、何とかこらえることが出来た。けれども、両手は自然に握りこぶしを作って、膝の上で震えていた。

「わたしは、職を無くしてもいいんです、伯爵。でも、息子だけは、あの子の才能だけはないがしろにはしたくない。もしもそうなら、わたしの夫の二の舞です。夫と同じ目に合ってしまいます！ そんなことだけは、させたくありません！」

サラは伯爵と目を合わせずに、そう断言した。

ジェームズの顔が浮かぶ。ジェームズもまた、優秀な成績を否定されたのだ。そしてそれから、彼の人生は狂って行った……。父子揃ってそんな目には合わせたくない。サラは必死だった。

「わたしはどうなってもいいんです。自業自得ですから、教師としての才能が無いのも承知しています。でも、シヨーンはホンモノなんです！ 一度あの子の声を聞いてやって下さい！ そうすれば、あの子がどんなに素晴らしい声を持っているか……」

「お帰り下さい」と伯爵は冷たく言って、煙をふーっと吐いた。

サラはぼんやりと立ち上がった。バッグを持ったのも何も覚えていない。サラは絶望の中にあつた。シヨーンの事を考えると、胸が張り裂けそうだった。

「失礼致しました……」

そう礼をすると、サラは館を出た。アパートに戻るまで、満天の

星空の下、どこをどう歩いたのか、覚えていなかった。

サラが出て行った後、レッドフォード伯爵はしばらく葉巻も吸わずに、ぼんやりしていた。

「失礼致しました」と挨拶した時のサラの瞳は、何処をも見ず、その顔には何の表情も無かったからだ。不思議な事に、自分を責めている目付きでもなかった。その顔には、運命には抗えないと言う、諦観が支配していたように伯爵には感じられたのだ。

燃えるような赤毛に、度の強い眼鏡。けれども、そこにはどこか艶かしさを奥に潜ませているように、多くの女性と交わった伯爵には、そう思われた。秘めたる情熱と意志の強さ……そう表現するしかない“何か”を持っている。

けれども伯爵は葉巻の火をもみ消すと、意を決したように立ち上がって、二階に上がって行った。後味の悪い思い……。それが彼を追い駆けて行く。

その時、綺麗だが幼い歌声が聞こえてきた。イギリスの古い民謡だ。多分乳母が教えたのだろうか、それを歌っているのは、娘のサマンサだった。

伯爵は廊下に立ち止まって、その歌声を聴いていた。

『サマンサは歌が上手いんです！』

1人の少年、サラの息子のショーン・オーウェルが叫んだ言葉を、ふと思い返した。キラキラと瞬くような蒼い瞳の聡明そうな美少年……彼があのだ。ソリストだったとは！ それを知らずに、自分は迂闊にも返事をしてしまったのだ。



『そういう少年ならば、ソリストの資格は無いな。別の少年に変えなさい』と……。

なぜか後悔のようなものが、伯爵を襲った。そして彼は、サマンサの部屋に入った。サマンサは、人形を持ちながら、やはり何かを口ずさんでいた。

「あつ、パパ！」と足音で聞き分けて、サマンサは叫んだ。

「何を歌っていたんだね？」

「さあ、知らない。あの学校で習ったの」

伯爵は愛しげに愛娘を抱き上げた。

「サマンサ。例の先生は居なくなるから、もう学校には戻るだろう？」

「え……そう？」

サマンサの声はやや小声になった。

「でも、嫌だな、わたし」

「なぜ？ 学校へは行かなくちゃならないよ、サマンサ」

「どうして学校へ行かなくちゃならないの！？」とサマンサはヒステリックに言い返した。

「わたし、ここにずっと居たいのに」

「だが、ここに居ても、お友達は出来ないし、それに本も読めないだろう？」

「でも、パパが居るじゃない」

「パパはね……パパだって仕事もあるし、それにいつかは居なくなるんだよ。年も取るしね。だから、その前に、お前は何かも1人で出来なくちゃならないんだ」

「いつか、居なくなる？ ママみたいに？」

「そう。いつかはね」

「嫌だ……わたし、そんなこと嫌っ！ パパまで居なくなるなんて！」

サマンサは恐怖に伯爵にしがみついた。

「今直ぐではないから、安心おし。だけど、その内にお前は独り立ちをしなければならんだよ」

「嫌よ〜!」

「駄目だよ、サマンサ!」

思わず伯爵は声を荒げた。

「誰が自分を護れるんだ!? 誰も居ないんだぞ! お前は1人で生きて行かなくちゃならない。その為に学校へ行くんだよ、サマンサ!」

サマンサは人形を放り投げると、足をバタバタさせて泣き喚いた。「学校なんて、行きたく無いもん!」

伯爵は、手を離れた。そして愛娘が泣き喚いている様が如何に醜いかを、今この時悟った。こんな風では、とても将来レディになることはできないだろう……。誰かの言っていた事は、当たっていたのだ……。

この子をこんなに甘やかしたのは……このわたしだったというわけなのか……。

ああ、アイリーン! 君は何故、すぐに死んだんだ!? この子を遺して……。

\*~\*~\*~\*~\*

「先生! オーウェル先生じゃないですか!? 危ない!!」  
そう呼びかけられるまで、サラは自分がどこを歩いているか分からなかった。

「気をつけるい!」と怒鳴る馬車の御者の声が、夜の石畳の大通りに響く。サラの直ぐ横を、乗合馬車がガラガラと通り過ぎていった。

サラはやつと我に帰って、声の方向を見た。蒼白な顔で、ウィル・ドノバン先生が道の端に立って、こちらを呆然として見つめていた。「あ……ドノバン先生……」

「どうしたんです！？　もう少しで馬車に轢かれるところでしたよ。それに、こんなに夜遅く？　シヨーンを家に残したままで？」

「ああ、ええ、そうでしたわね。早く、家に帰らないと。あの子、お腹を空かせて待っているわ」

サラの声は、それでもまだ虚ろだった。

「あの、ひょっとして、伯爵の所にお行きになったんですか？」

とドノバン先生が控えめに尋ねた。サラは、ハツとしてその勘の鋭い若い同僚を見つめると、無言で頷いた。

「やつぱり……」

「でも、馬鹿でした、わたし」とサラは言った。「何にもならないところか、かえって伯爵の心象を悪くしてしまいましたわ。もう、駄目！　シヨーンに何と言って、詫びたらいいのか、わたし……」

グラツと倒れ掛かったサラを、ドノバン先生はしっかりと支えた。「気を確かに！　でも、あなたの仕事の事は、校長も何とか考えているようですし」

「ええ。でも、難しいでしょうね」とサラは淋しく微笑んだ。

「でも、僕が何とかしますよ。だって、僕は……」

ドノバン先生は、言葉を切った。本当はその後、『あなたを愛しているんですから』と言いたかったのだが、シャイな彼にはその言葉は重すぎた。

「え？」

「いえ……僕はオーウェル先生を、尊敬していますから」

「ありがと」とサラは謝意を述べた。「でも、わたしも次の仕事

を探さなくてはならないわね。皆さんを心配させてしまつて。なによりも、シヨーンを失望させてしまいましたわ」

サラは身を離した。

「さあ、もう大丈夫よ」

「僕がお送り致しますよ」

「いいの。本当に大丈夫だから」

サラはドノバン先生に笑みを返した。笑った時のサラは、先生の衣を捨て、やはりまだ30前の婦人らしく、どこか可愛い。

ちよつとだけ手を振ると、サラはやつとシャンとして、自分の帰るべきアパートに向かって、歩き出した。ドノバン先生は、その後姿が見えなくなるまで、じつと見つめていた。

サラが慌ててアパートに戻ると、机の前で息子のショーンが座って待っていた。大人でも拭いきれないほどのシヨックを受けていると言っのに、ショーンは上辺はいつもと同じ様子で、母のサラを迎えた。

「お帰りなさい。ママ、トレイシー伯母さんから手紙が来ていたよ」  
ショーンは普段のままの表情で、サラに手紙を差し出した。

「それから、パンを焼いていたから。あとはスープだけでもいいよ」  
「ごめんね。今晚は、それだけで我慢して。明日はちゃんとするか」  
ら

サラは姉のトレイシーからの久々の手紙を受け取った。ショーンは、黙ってお皿を出している。机には、計算帳と鉛筆が置かれてあった。サラが居ない間、宿題をしていたらしい。

サラは改めて思う。ショーンは自分ともジェームズとも違う、別の側面を持っている。自分だったら、ソリストを外されたら大泣きするだろう。そしてジェームズなら、自分を外した人々の欺瞞に対して憤慨するに違いない。

けれども息子のショーンは、何が起ってもいつも淡々としていた。今度の事でも、内心では泣きたいほど悔しいに決まっているのに、どこか淋しげな微笑を浮かべているだけで、表面的には今までと変わらない。とても計算などできないと言っ心境なのに、ちゃんとするべき事はする……そういう性格だった。

この落ち着きと諦観は、一体誰からの遺伝だろうか？ サラはト

レイシーからの手紙を手にとってハツとした。ショーンはどこかトレイシーに似ているのだ。

サラが盲学校で勉強している間、幼いショーンは姉のトレイシーの元で育てられた。トレイシーは、又ショーンの名付け親でもある彼女が昔実らない慕情を抱いていた相手が、ショーンと言ったのだ。（注：本編『悲劇』捕えられて』の8話参照）

トレイシーは、サラの生んだ子供に“ショーン”と言う名前を付けてくれ、と頼み込んだ。サラは一つ返事で賛同した。

ショーンは、英語のジョンだ。イアンもヨアンも、ジョンの意味だが、ショーンが一番耳に心地良い響きを持つ。

ショーンは、トレイシーの家で義理の兄弟姉妹達と、仲良く暮らしていた……様に見えた。けれども、久しぶりにサラが迎えに来ると、ワツと泣き出してはサラのスカートにしがみついていた。

今思い出すと、あの時ショーンは小さな胸で、義理の兄弟姉妹達と仲良くしようと、努力をしていたのかもしれない。人並みの我が儘も言えず、じつと自分を抑え、そして遠慮をして過していたのだろう。幾ら伯母に当たるトレイシーや義理の兄弟姉妹達が、ショーンを愛し慈しんでいたとしても。

それを知るとサラはショーンがいじらしく、夏休みなどにはとにかくショーンとはベタベタして暮らした。けれどもショーンは一人っ子なので、どこか兄弟の多い子供とは違い、成熟していたのだろう。

ショーンは段々サラの顔色を伺うだけで、サラの心境の変化を敏感に感じ取って行くような子供に育った。それは時には繊細にもなり、ある時には諦観にもなっていたと思われるような子供に。そして今11歳の少年に育ったショーンは、運命が惨いものであることを、身をもって知っていたのだ。

＊＼＊＼＊＼＊＼＊

あの時……シヨーンが1人で写真屋のカメラに収まった時、幸福の絶頂にあった時、急にチャンドラー司祭に市長から電話が入った。そして戻って来た時には、司祭の顔は驚くほど蒼白だった。

「クラレンス！ クラレンス・ダンパー、こっちへ来なさい」

そう呼ぶ司祭の声は震えていた。それはショックの余りなのか、それとも怒りの余りなのか、どっちともなのか当の本人すら自覚できないほどの声音だった。

「はい！」とクラレンスは返事をして、得意げに一步前に出た。

「クラレンス……写真を撮ってもらいなさい」

「ええっ！？」「なんで？」「だって……」

と様々なざわつきが聖歌隊の少年達の間で起こった。

「実はな……『ピエ・イエズ』のソリストは、急遽クラレンス・ダンパーに代わったのだよ」

その時シヨーンは、底のない奈落へと落ちて行くような気がした。全身から血が引き、力が抜ける。けれどもシヨーンは「何故なんです！？」という抗議はしなかった。

目の前を通るクラレンスの為に、道を開け、そして自分は聖歌隊の中に埋没した。

「こんなの、変だよ！」と横のベンがシヨーンに言った。「おかしいよ！ 君のほうが、断トツ上手いのにさ！」

「いいんだよ」とシヨーンは深い溜息を吐くと、憤るベンに言いかけた。

「きつと何かあるんだ」とベンは尚も納得できないように、囁く。

「あいつ、ずるいよ」

「もういいんだ！」

初めてショーンは鋭い声でベンを制した。ベンがショーンを伺うと、ショーンの宝石のようなブルーの瞳には、涙が溢れそうになっていた。ベンは黙り込んだ。そしてベンもまた、大人の社会の醜さを悟ったのだ。

「僕も悔しいよ、ショーン」  
「ただベンは言った。  
「ありがとう」

消え入るような声で、ショーンは謝意を述べた。けれどもショーンは、決して納得していたわけではない。何よりも、亡き父ジェームズに捧げるという約束を果たせない自分が、口惜しかったのだ。本当はショーンは誰も居なければ、大泣きしていただろう。けれども彼はじっとして立ち尽くしていた。



コンサートの方が整い始めていた。けれどもある日、チャンドラー司祭は、自分の心を偽ることを辞めた。そして彼は談判の為にレッドフォード伯爵の門を叩いたのだ。

さすが司祭を待たせることは出来なかったのだが、その日伯爵は実の母と言い争いをしていたのだった。

伯爵の実母ヘレンは、早く息子が再婚をして欲しいと願っていたのだ。いつまでも病死した先妻のアイリーンを想い続けている息子がいじらしくもあり、そして腹が立つてもいた。

息子のアルバートはまだ40歳そこそこだ。見た目も若く、ハンサムで立派な紳士にしか見えない。望めば幾らでも後妻は来るはずなのに、アルバートは頑なに拒み続けていたのだ。

「昨晚のパーティはどうでしたこと？ エリザベスとのお話は随分弾んでいるようでしたね。あの方は美しいし、子爵令嬢で言うことなんでしょう？ ま、幾らかとうはたっているけれど」

「話は色々しました。けれども……」

そこで、レッドフォード伯爵の言葉はピタリと止ってしまったのだ。昨晚の、エリザベスとの会話が今でも耳に響いている。

＊～＊～＊～＊～＊

昨晚の男爵家のパーティは華やかで、そして大勢の貴族やブルジョア階級の人々が来て賑わっていた。

エリザベス・フリンは、明るい山吹色のレースで覆われた素晴らしく美しい衣装を身にまとっていた。

伯爵はエリザベスをエスコートしながら、奥のソファに誘った。もう既にアイリーンが死んで3年になる。6歳だったサマンサは、今や9歳になった。けれども、アイリーンの面影が廃ることはないのだった。たとえ、華やかなエリザベス嬢と共に居ても……。

「どこかの令嬢がショパンを弾くそうですわ」とエリザベスは言った。

「いや、疲れたからここに居ましょう」

「そうね、アルバート」

エリザベスも従った。

「わたし達、二人の将来についてお話しませんか？」

「ああ」と伯爵は曖昧に答えた。

「わたくし、いい妻になりますわ。そしていい母にも」

「それはありがたいが……けれども……」

「アルバート、あなたのアイリーンに対する思いは理解しているつもりです」

とエリザベスは艶然と微笑んだ。「だからわたくし、それ以上の愛情を求めているのではないのですわ。あなたを縛りたくないのです。

でもいつか、長い年月があなたをして、わたしに向けられる事を期待しているだけです」

「ありがとう」

そう言うつと、伯爵はエリザベスの掌を恭しく取って、そつと口付けをした。

「ロンドンに、盲目の生徒の為の、施設があるのをご存知？」

とエリザベスは、伯爵のキスに満足そうに言いかけた。

「とても素晴らしい施設ですよ。今の、あの、何と言ったかしら

……」

「アメリカ・モリソン盲学校」と伯爵は答えた。

「そう、その粗末な学校よりもずっと立派で、先生達も良い先生ばかり。そこにサマンサを……」

「ちよ、ちよっと待って下さい！ エリザベス、そこはロンドンではないですか」

「ええ、そうですね。だから、ちゃんとした寮の施設があるんですよ。サマンサをそこにに入れて教育すれば、数年後にはとても素晴らしい“レディ”になりますわよ」

伯爵は手を引つ込めると、じつとエリザベスを凝視した。

「と言うことは……僕は娘とは会えない……ってことですかね」

「一緒に居てもいいことは一つありませんわ！」とエリザベスは熱弁をふるった。「あなただつて、お仕事がありだし、休暇も取らなくてはなりませんもの。時々ロンドンに行つて、オペラや芝居を見るついでに、サマンサに会えますわよ、アルバート」

伯爵は急に立ち上がった。

「失礼。思い出した用事があるもので……」

「え？ あの、わたくし……」

「済みません、エリザベス。今宵は楽しかったけれど、もうここまです。わたしは帰らないと」

啞然としているエリザベス・フリンをあとに、伯爵はさつさと暇乞いをして出て行つた。サマンサをどこかにやってしまつて、世話などをしたくない、という子爵令嬢の意図は明らかだった。その事に対して、伯爵は我慢がならなかったのだ。サマンサを邪魔者だと言っている様なものではないか！

＊＼＊＼＊＼＊＼＊

「どうしたの、アルバート？」と訝しげに、母のヘレンが息子の顔を覗き込んだ。「何か不服でも？」

「お母さん、その話は少し置いておきましょう」と伯爵はキツパリと言った。

ちょうどその時、チャンドラー司祭が訪ねて来た、という報告が執事からあり、伯爵はホツとして立ち上がった。

「今行くよ」と彼は執事に言った。執事は礼をして下がった。

「それじゃ、わたしはこれで。司祭を待たせてはいけませんのでね」

呆気にとられている母親を残して、伯爵は身軽に階段を降りて行った。

客間には司祭が私服で座っていたが、伯爵が来ると立ち上がり礼をした。けれどもその顔には、明らかなる憤怒が漂っている事に、

伯爵は直ぐに気付いたのだった。

チャンドラー司祭は、既に銀髪になった髪の毛をやや薄く撫で付けていたが、余りかまわない人柄そのままに、風に吹かれて少々乱れていた。

彼はレッドフォード伯爵を見ると、丁寧に礼をした。けれども、直ぐに知らず内に伯爵を睨みつけていたようだ。伯爵の表情がやや曇ったのを感じ取って、チャンドラー司祭は神に仕える仕事の人間にありがちの、硬いがけれども柔和な笑みを浮かべた。けれどもその表情も、司祭の目に宿る憤怒を消し去る事はできなかった。

「やあ、お待たせ致しました。母と少々話していたものですからね」と伯爵は上流階級独特の綺麗な英語で言い始めた。

「いや、それはどうでもいいのです。実は内々にお話があつて、伺いました」

とチャンドラー司祭は率直に語った。

「話と言つのは、例の6月の音楽会のソリストの件でして……」

「ああ……あのことですか」と伯爵は、内心で舌打ちしながら答えた。「市長から頼まれましたのでね」

「何を言われたのかわたしは知りませんが、わたしは一つの才能をこの世から消し去る事は、大変な罪に当たる、と言いに来たのです。シヨーン・オーウェルは……あ、この子が最初のソリストのはずでしたが、そのシヨーンは類稀なる才能を持っている子供なのです。例え市長がどう讒言したことであれ、天から与えられた才能を否定する事はわたしには承服出来ません」

「司祭様は、熱血漢なんですネ」と伯爵はやや呆れながらそうつぶやいた。

「あなたは誤解していらつしやる！」と司祭は怒鳴るように言ってしまった。「わたしは、熱血漢でも何でも無い。ただ、一介の司祭そして音楽という聖なるものの僕にすぎません」

「市長は、ご自分の甥がその子に苛められ、怪我をしたと言っていましたよ」

「何と!？」

「それから、彼の生い立ちや色々……」と伯爵は気まずそうに、葉巻を取りながら言った。

「シヨーンが“私生児”だとまで言いはしなかったでしょうな！」と司祭は追い討ちをかけた。「彼の生い立ちは、才能とは何の関係もないし、むしろ苛められていたのは、シヨーンの方だという事をご存知でしたか？ 彼は頭に疵を負っていました。何も言わないが、ベンという子の話だと、市長の甥、クラレンス・ダンパーの仕業だという事でしたよ」

「司祭様。わたしは、シヨーン・オーウェルの母親がここに来た事を言っていないかったようですね」

「え？ シヨーンの母がここに？」

さすがに司祭は驚きながら、腰を下ろした。

「あの先生はわたしの娘の盲学校の先生でもあるが……随分と厚かましい女性でもありますね。ソリストの事では、やはり同じような事を述べていましたよ。まあ、母親としては、口惜しいのは分かりますが」

伯爵の口元に皮肉な笑みが浮かんだので、司祭は黙り込んでしまった。

「あの先生は、確かにちゃんと婚姻せずして、シヨーンを産んだようですな。その勇氣には感服しても、もう決定されてしまった事を覆す事は、わたしには出来ませんよ」

「ショーンの母親が……」

司祭はうな垂れた。余計な事をしてしまって！ 何と言う母親だろう。これでは、ショーンをソリストに戻すなど、もう絶望的だ。

「ボーイ・ソプラノの寿命は短い。せいぜい4、5年でしょう。その間に、歌えないとなると、大いなる損失ですよ、芸術の神ミューズに対して。けれども、仕方ありませんな。わたしが合唱の指導をし出して25年。初めてとっていい程の才能だったのですが……もう、このことは無いものと致しましょう。残念です」

司祭は立ち上がった。そして最後に言った。

「あなたが狭量な偏見と讒言で、ソリストを外したとしたら、それは心外です。が、あなたも伯爵と言う貴い身分の御方だ。そんなことはなさらないでしょう。わたしはそう信じたい。」

ただ、一度でいいから、ショーンの歌う声を聞いてから決断しても宜しかったのではないか、とそう残念に思う次第なのです。わたしはわたしの生徒が外された時から、覚悟していました。わたしも又、今度のコンサートの指揮者を降ろさせて頂きます。生徒にだけ、無念さを押し付ける気持ちはありません。それでは」

司祭は目礼してから、背を向けるとさっと執事から帽子を受け取ると、あとも見ずに出て行った。

「司祭という神職の者は、変人が多いな」と伯爵はつぶやいた。そして、自分も階段を上ろうとしたが、ふとショーンの悲しげな大きなブルーの瞳を思い出した。

ショーンという少年は、どのような類の男の、息子なんだろう？ あの小柄な教師の心を、それ程までに決心させたものとは一体何なのだろう？ 熱き情熱か？ それとも、愛情？

伯爵は頭を振ると、再び我に返った。そして母親とのどうにも食

い違う思考を、思案し始めた。少なくとも、レディ・エリザベス・フリンは、サマンサの母になる資格などないのだ！ それだけは絶対に確実だった。

＊～＊～＊～＊～＊

レッドフォード伯爵は、母との長く無意味な会話に疲れ果てていた。結局、母とは物別れに終わってしまったのだ。そして、司祭が指揮をおりるというのを思いとどまる様に、翌日『セント・マーク教会』に、出かけた。

司祭は少し外出しているというので、伯爵はカテドラルの中で待つことにした。中はシンとし、数人の信徒が、チラホラひっそりと座っているだけで、聖公会特有のステンドグラスから、薄暗い淡い光が辺りをほの暗く照らしているだけだった。

1人の老婆が腰を屈めて、俯きながら出て行った。その老婆の疲れた横顔を見つめていると、入れ違いに1人の小柄な影がゆっくりと中に入ってきて来た。その影が近づくにつれ、横顔がはっきりと伯爵にも見えた。

その隣とした口元、サラサラした栗色の髪、薄暗がりでは黒く見えるキラキラ光る大きな瞳の少年……それは、シヨーンだったのだ。一際目立つ美形の、そして天使のような純な横顔のシヨーンは、真っ直ぐ、祭壇に近寄って行く。

伯爵は、まるで自分が罪人のように身をかがめてしまっているのに気付くと、苦い笑いを浮かべながら、シヨーンの様子を凝視していた。





『セント・マーク教会』の薄暗いカテドラルには、数人の祈りを捧げる信者達が、あちらこちらに座っていた。レッドフォード伯爵は、目立たないように後方の一番右端に座っており、俯いていたので、シヨーンには誰がその場に居るのか分からなかったし、又知るつもりもなかった。シヨーンの蒼い瞳は、ただ真っ直ぐに祭壇に向けられていたのだから。

シヨーンは祭壇の前に来ると、跪いて十字を切った。そして小さい掌をしっかりと合わせ、顔をあげた。シヨーンはその祭壇のどこも見てはいず、そして遙か自分の知らない過去を見つめていたのだ。長い睫毛が、シヨーンの横顔に影を落す。

「イエス・キリストの父なる神様、僕の願いをお聞き届け下さい」  
そう祈るシヨーンの声は、小声ながらよく通り、一部の人は聞き耳を立てていた。そして伯爵もまた、シヨーンの祈りを耳をそばだてて聞いていた。伯爵からは、シヨーンの小さい後ろ姿しか見えな  
いのだが。

「僕は、僕に命を与えてくれて亡くなった父に、ソロで歌をプレゼントしようとしたのです。フォーレ氏の『レクイエム』の中の『ピエ・イエズ』でした。けれども、それは叶いそうありません。

僕は正直がっかりしました。でも、いいのです。僕は主なるあなたを恨んだりしていません。けれども……母の方がよりガツクリ来  
ています。母は、僕の父を心から愛していたから……だから、僕の  
ソロを楽しみにしていたのです」

伯爵の胸が動機を打ち、キリキリと痛んできた。伯爵は席を立とうとしたが、今立てば自分を見知っているシヨーンに見つかるかもしれない。彼はそのまま留まっていざるを得なかった。

「僕は、レクイエムの意味が、亡くなった死者の永遠の平安を祈る曲である事を知りました。僕が父の為に歌いたい、と言うと、司祭様はこう仰いました。

『君のお父さんだけではなく、亡くなった全ての人達のために、心を込めて祈りを持って歌うんだよ』と。だから僕はそうするつもりでした。……でも、それは、今は、今は……」

シヨーンの声が止まった。そして暫くして、やっと続け始めた。

「今はもう出来ないけれど、でも来年はきつと……きつと……」

再びシヨーンの甲高い声が止まった。そして、そのまま彼は俯き、それからそつと涙を拭っているような仕草をした。

“亡くなった全ての人達の為……”

この言葉は、思いもかけず伯爵の胸の奥に沁みこんで行く。そして、胸が悲しみに打ち震えるのだった。

ああ、アイリーン！君もまた、鎮魂の歌を捧げられるはずだったのか……。わたしは、あの子に何をしてしまったのだろう……。

その時、1人の婦人の声が静かに聞こえてきた。

「坊や、もし良かったら、ここでそれを歌ってちょうだいな」

前から二段目に座っていた50代位の婦人だったが、シヨーンは少し驚いたように振り返った。

「まあ、可愛い坊やね」

「マダム……でも、ここでは……」

「いいえ、いいのよ。いつもクリスマスには、ここで礼拝と音楽会

をするでしょう？ 夫はとても楽しみにしていたのよ、毎年。でも、今年のクリスマスは……もう無理なの」

「マダム……」とシヨーンは小声で呼びかけた。「それじゃ、あの」「ええ、もう夫はこの世には居ないわ。だからあなたが、亡き人達の為の平安を歌って欲しいの。夫はきつと聞いていてくれるだろうから」

シヨーンは頷き、口元をキツと結んだようだった。

「それじゃ、小声で。ア・カペラですが」

そう言つと、シヨーンは真正面を向き、もう一度十字を切つて、きりつと立ち上がった。

\*ゝ\*ゝ\*ゝ\*ゝ\*

ピエ・イエズ ドミネ（聖なる主イエスよ）

ピエ・イエズ ドミネ（聖なる主イエスよ）

ドナ エイス レクイエム（彼らに平安を与えたまえ）

シヨーンの声は、小声だと言つのにカテドラルに響き渡ると、思わずレッドフォード伯爵は身を乗り出していた。今までに聴いた事のない、清らかに澄んだ美声だ！ それは伯爵だけではなく、その場に居る少数の人達もそう感じたかのように、座っている人々に微かな揺らぎがあつた。感嘆の溜息が音も無く口元から出て、それはカテドラル中に満ち溢れて行く。

まるで本物の天使が舞い降りたかのように、シヨーンの声は辺りを神聖に静謐にして行くのだった。

歌を頼んだ婦人は、感激の余り、泣いているようだった。

あのご婦人も又愛する人を失つたのか……と伯爵は思った。そし

て何よりもハツとしたのは、あの眼鏡を掛けた小柄なサラもまた、自分と同じようにシヨーンの父である愛する伴侶を失っていたのだ、と言う驚きと共感だった。

例え法的には結婚して居なくとも、シヨーンの父親でそしてサラの夫になるはずだった人物……。シヨーンはその父のため、そして母のため、そして目の前の未亡人のため、ひいては自分のためにも歌っているのだ。愛するアイリーンの鎮魂を……。

ドナ エイス ドナ エイス（彼らに与えたまえ 彼らに与えたまえ）

セピテルナム レクイエム（永遠に続く 平安を）  
セピテルナム レクイエム（永遠に続く 平安を）

シヨーンの最後のフレーズが消えて行くと、この世のものとも思えない静けさが一瞬訪れた。

「ありがとう！ 本当に天使のような声なのね、坊や。夫もきっと喜んでいるわ。本当にありがとう！」

手を取られたシヨーンは、はにかんだ様に微笑んだ。伯爵の目には、久しく浮かばなかった涙が溢れそうになる。

アイリーン！ アイリーン！ 君も聴いていてくれるのだろうか？ そうだとしたら、わたしは何と言う事をしてしまったのだろう！ 他の人の悲しみを知らず、何事も共有する事も無く、ただ利己的に生きていたとは！

何よりも、あの少年の未来をズタズタにしてしまった。あれだけの才能が在るというのに、わたしはそれを抹殺しようとしていた。何と罪深いことをしてしまったのだ……。

歌が終わった後、シヨーンはくると振り返ると、出口の方に向かって歩み始めた。けれども、出口近くに突っ立っている伯爵を見

てぎよつとして立ち止まった。シヨーンが口を開けようとしたその時、伯爵はシヨーンの目の前に来ると、ちょうどシヨーンと目の高さが同じになるようにしゃがみ込んだ。

「シヨーン」と伯爵はシヨーンの両手を取ると、そう呼びかけた。

「あ……あの時の」とシヨーンが怯えながら言うつと、伯爵は答えた。

「赦してくれ、シヨーン。わたしが間違っていた。赦してくれ給え！」

季節は6月。爽やかな風が、『アメリカ・モリソン盲学校』の粗末な職員室の机の上にも、吹き抜けて行く。

その中を、サラは名残惜しい自分の机を整理していた。この学校に居たのは、僅かに三年。こういう形でこの学校を去るのは、気が重かった。

サラの次の就職は決まっていなかった。けれどもサラは、レスターに居て、いつも自分達を護ってくれ、心配してしてくれる姉のトレイシーの元へ、暫く身を寄せるつもりでいた。トレイシーだけがいつもサラ親子の味方だった。そしてトレイシーしか、味方は居ないのだ。他の兄弟達も、そして両親も、誰もサラ親子のゆくすえなど、気にも留めていない……。そう思うと、サラの胸は塞ぎがちになった。

ただ一つの良いことと言えば、息子のショーンが、なぜかソリストに復活したという事だけだったが、少なくとも良い事は一つあるわけだ。サラは来週に迫った『20世紀祝賀コンサート』へ出演するショーンのソロを見終えた後に、ここリバプールを後にする事になっていた。

パンフレットには、ショーンの1人だけの写真もあった。それを一部、サラはトレイシーと両親に送ったのだが、トレイシーからは感激の返事が来たものの、両親からは何の音沙汰も無かった。

けれども、サラは既に諦観に達していた。両親は未だにサラと、そしとサラを“誘惑した”と思っっているジェームズを赦してはいな

いのだ。

父親のオーウェル氏は、校長の退職金で小さな家を買ひ、ジェームズから受けた頭の傷がもとで半身不随になつてからは、ずっと車椅子の生活だつた。それを支える母の苦勞も押してしるべしだつたので、サラはもう何も両親には期待していなかつたが、時折、ジェームズを實質狀殺したのは、父親のオーウェル氏の杖の殴打のせいではないか……という懷疑からは逃れることが出来ないでいた。

淋しいがこれが現實だつた。サラがジェームズと、そしてショーンを産むことを決意して以來、両親との間柄を捨てなければならぬ。これは難しい選択だつたが、ある意味ではサラにとっては、正直な選択でもある。

サラは今でも決して後悔などはしていない。ただ少し、胸がチクチクと痛む事がある程度だ。

人を赦す事は難しい……。例えそれが両親であつたとしても。いや、両親だからこそ、尚更複雑な思いが交差して行くからだ。

サラは溜息を一つ付くと、我に返り、残っているものはないかどうか、もう一度引き出しを開け閉めしていた。

窓から見ると、この三年間見慣れた町並みが見渡せた。遙か遠くには、リバプールの港が微かに見える。

「オーウェル先生」

突然呼びかけられて、サラは振り返つた。逆光の中に、ウィルドノバン先生が立っていた。そのずんぐりした体つき、愛嬌のある丸い目と眼鏡、ピツタリ撫で付けた髪の毛。思わずサラは微笑んでいた。

「まあ、驚いたわ！　まだここに残っていらつしやつたの？　今学



期はもう終了したというのに」

ドノバン先生は、その問いには答えず、妙にしゃちほこばって近付いて来た。よく見つめると、ドノバン先生の顔が微かに歪んでいるようだ。

「あの……オーウェル先生」

「え？」

「先生は、これからシヨンとどこへ行かれるのです？」

「ああ……そのこと？ 暫くレスターの姉の所に居候して、何か職を見つけますわ……何とかしてね」

「済みません」

そう言うドノバン先生は、ほとんど泣いているような声音だった。

「なんで、あなたがそんなこと仰るの？」

「僕は……僕は、オーウェル先生の何の役にもたたなかつた」

「そんなことは無いわよ。あなたはよくして下さったもの。シヨンも、あなたを慕っていますし、わたし達本当に心からドノバン先生には感謝しているんです」

サラは自分から手を差し出すと、ドノバン先生の両手を握り締めたので、若いドノバン先生は、ギクリとして身を引いた。

「僕は本当は……。いえ！ 僕の薄給では、とても……叶わぬと……」

「何が叶わないと言うの？」とサラは微笑ましく感じながら、この好青年を見つめた。

『あなたにプロポーズすることが、ですよ、サラ！』とドノバン先生は、心の中で告白した。けれども外見は真面目くさった風で、手を額に当てた。

「いえ……なんでもありません。もっと、もっと先生と一緒に働きたかった」

「そうね」とサラは淋しげに、けれども決して取り乱さずに言った。  
「でも、これも運命ですわ」

「あなたをこんなにしたのは……あの、レッドフォード伯爵……あいつなんだ！」

「いいえ、人を恨むのはやめて、ドノバン先生」

「でも、サマンサは結局あれ以来出席しないし、校長は怖気づいて後任の先生を直ぐに見つけてくるし……皆のやったことは最低だ！僕は悔しいんです、オーウェル先生」

ドノバン先生は本当に泣き出した。彼の丸い頬を伝う涙は、サラにとつてもつとも貴いものと思われたのだ。

「ありがとう……ドノバン先生。でも、ショーンは最後に良い思い出を作れますわ」

「ああ、『レクイエム』のソロ復活ですね。それだけが、今の僕の慰めです」

ドノバン先生は顔を挙げた。けれども、サラの視線はドノバン先生の遥か頭上にあつた。誰かを見つめている。誰か……怖れを感じるものを……。

ドノバン先生が振り返ると、入口に立つ背の高い人影があつた。その人物はゆつくりと、帽子を取った。

「あ！ は、伯爵！？」

しゃっくりでも起こしそうなドノバン先生とは反対に、サラは冷静な視線を伯爵に向け、そして言った。

「何か御用でしょうか、サー・レッドフォード」

「オーウェル先生……お帰りは馬車でお送り致します」

「いいえ、結構です。わたし、歩いて帰りますから」

「では、わたしも歩きます」と伯爵はキツパリと言いつつ切った。ドノバン先生だけが、二人を交互に恐る恐る見つめていた。



## 14 最終章

### 14（終章）

サラは早足で、通りを歩く。その直ぐ隣をレッドフォード伯爵が、ゆっくりと大股で歩いていた。二人の身長差は、20cmはゆうにあっただろうか？

サラは何人かの好奇の視線を感じながら、頑なに前だけを見て歩いていた。けれども、大人気ないと思われるがいやで、チラッと視線を伯爵の方に向けた。ちょうど伯爵もサラの方に目を落としたところだった。サラの頬がなぜかほんのりと染まったので、サラは内心少しうろたえてしまう。

「サー・レッドフォード……わたし、あなたにお詫びしなければなりませんわ」

「なにがです？」

「不躰にも、お宅に押しかけてしまったことです。わたし……愚かでした。とんでもない親馬鹿でした……」

サラは恥じ入って顔を俯けたが、それでも歩調だけは相変わらず早足だった。

「親馬鹿はあなただけではありませんよ、オーウェル先生」

「え？」

「わたしもでした」と伯爵ははつきりとした口調で述べた。「わたしも、とんでもない親馬鹿だったのですよ。愛娘とは言え、サマンサをあそこまで甘やかしていたとは！ あの後も、サマンサはもう学校には行かないと喚き散らしているばかりです。全くお恥ずかしい限りで」

「え……ええ……でも、あの……」とサラは言葉に詰って、ついでに足元も止まってしまった。「サマンサのお母様、つまりあなたの奥様も早くお亡くなりになっていたのですね。わたし、そのことに気付かず、サマンサを頭ごなしに叱りつけていた様な気がします。自分にも息子が居るのに、仕事となると盲目になってしまふのですわ。」

今から考えると、もっとサマンサの目線に立って話しかければ良かった……そう反省しています」

暫く二人の間には沈黙があつた。

「どうでしょうか？ あそこの公園に入りませんか？ 歩くよりもベンチで座った方が、もっとじっくりお話し合いが出来ると思うのですがね」

こう切り出した伯爵の申し出に、サラはどうしても逆らえないものを感じ、素直にうなずいた。

「ええ、そうしましょう。何だか疲れてしまったし」

二人は黙ったまま公園に入り、木立の中の静かな木のベンチに座った。夕暮れの風が心地良い。西の空が少しずつ茜色に染まって行く。

「あなたはさつき、サマンサの目線に立って、と言いましたが、サマンサが全盲なのは知っていますでしょう？ あらゆる手を尽くし、イギリス中の名医に見せましたが、結局サマンサの目は今の医学では治らないという事でしたが」

「それは違いますわ」とサラは情熱的に言い張った。  
「違う？」

「ええ、そうです。以前はわたしも全盲でした。でも気配で人がどこに立っているか、どういう様子なのか、目の見えない者にも分かるんです。見える人達よりもっと敏感に出来ているんです。それこそ、神様の恩寵ですわね。ご存知でした？」

伯爵はふとサラを見つめた。サラの丸い眼鏡の中の瞳をじかに覗いて見たいという奇妙な欲求を感じたのだ。けれども伯爵は少しだけ咳払いをして言った。

「結局わたし達はどこか似たもの同志なんですね」

「え、なぜ？」

「どちらも、“親馬鹿者”だから」

これを聞き、サラは初めて少しだがふき出した。

「面白いことを仰る方なんですネ、あなた様は」

「実際の僕はこういう者ですよ。僕はそんなに強面ですか？　オーウェル先生？」

「まさか！　あなたは品がよく、そして……とてもハンサムな方です。ご理解もあって、おかげでショーンはソロに立てます。わたし達、いい思い出を持ってリバプールをあとに出来ますわ」

サラはなぜかスラスラと答える自分を、不思議に感じるのだ。今までジェームズ以外には異性に対してこういう思いを感じたことはなかったというのに……。

「それは……わたし自身がショーンの生の声を聴いたからですよ。まさにあの声は天才でしか出せない響きを持っていました。あの声は……そう、そこに居た全ての人々の心を浄化していったんですよ」  
サラは振り返ると、まともに伯爵の目を見つめた。

「一体何のことを仰っているんです！？　ショーンの声を聴いた、ですって！？」

「驚いたな！　ショーンはあなたに何も言っていないんですか？」  
今度は伯爵が驚く番だった。

「ええ、何も。何も聞いていませんわ」  
「そうか……」

そう言うと、伯爵は微笑んだ。

「息子さんは思慮深い子供さんなんですね。そうか、そういう心を持った素晴らしいお子さんを持って、あなたは幸せな母親だな」

伯爵はいよいよ自分の決断が間違っていない事を悟った。例えば母のヘレンが何を言おうと、伯爵は自分の判断のままに従う事にした。もうヘレンの自分に対する子ども扱いにはつくづくうんざりだ！

「実はお話があつて、こうしてあなたと居るわけです」

いよいよ来たな、とサラは身を硬くした。伯爵から何を言われても、サラはもう覚悟は出来ていたからだ。

「あなたは仕事を失った。そしてわたしは、家庭教師を必要としている。特に全盲の子供に配慮のある家庭教師を。……この意味が分かりでしょうね？」

サラは数秒間だけ頭を巡らしていたが、直ぐに伯爵に向き直った。

「あの……それは、もしかや？」

「そうです。ミス・サラ・オーウェル」

サラは俯き、そして自分の頬をつねりたいとまで思った。

「じゃあ、あのアパートにまだ住めるんですね？」

「いやそれは違う」

「え！？」

「住み込みで来て頂きたいのです」

「住み込み！？」

さすがのサラも驚愕した。

「四階の使用人部屋が幾つか空いています。あなた達には、二つ続きの部屋を使用していただきたいのです。ただし、一年だけです」  
サラはもう一度伯爵の目を覗き込むと、ハツと手を口に当てた。

「そこまでして頂いて、宜しいのでしょうか？」

「あなたはシヨーンの才能は惜しくはないのですか？ シヨーンにも、もつともつと教育を受けさせたいのでは？」

「それこそ、わたしの、そして亡くなった“彼”の夢でもありました。でも……そんなにあなた様に甘えて宜しいのでしょうか？」

「これはあなたの仕事でしょう、オーウェル先生」

と伯爵は笑みを浮かべながら続けた。「何とかしてサマンサを素晴らしいレディにしたい。例え全盲でも。それが亡きアイリーンに報いる事なのです」

「アイリーン……？ 奥様ですね」

伯爵は無言でうなずいた。

「承知して頂きますか？」

目の前のサラの顔が、薄暮の中に浮かび上がっていた。その顔には躊躇いと喜びと、そして思いもかけない色香が漂っている事に、伯爵の中の“男の性”<sup>さが</sup>がなぜか騒ぐ。

可愛い人だ……。その切ない瞳と唇が……。

サラは何も気付かず、ただただどうしようかと思いつらしていたが、ショーンの将来という言葉が、サラの心を決定付けた。

「分かりました」とサラは簡潔に答えた。「努力致しますわ、サー・レッドフォード」

突然伯爵は身をかがめてサラの腕を取ると、その小さな掌に羽根のように軽い接吻をした。けれどもそれは熱い接吻でもあった。

「ありがとう、オーウェル先生」と伯爵は既に暮れてしまった大気の中で言った。「『レクイエム』は必ず聴きに行きますよ。そしてそのあと、あなた達お二人は、引越しの準備をしないと駄目でしょうね、わたしの館に来る為の」

「ええ」とサラも微笑んだ。「ありがとうと言いたいのは、わたしの方ですわ、サー・レッドフォード」



＊＼＊＼＊＼＊

シティホールはほぼ満席だった。オーケストラやオペレッタのあと、フォーレの『レクイエム』が、セント・マーク教会付属少年合唱団付で演奏された。テノールやバリトンとの合唱の後、『ピエ・イエズ』の番が来たのを、サラは緊張しながら見守っていた。

シヨーンが少し前に出て、そして歌い出した途端、満席の聴衆から声無き溜息が出るのをサラは感じ取って、誇らしく我が子を見つめた。そして歌が進むにつれ、その目には大粒の涙が光り、そして頬をこぼれ落ちて行く。

ジェームズ、聴いている？ あなたの為に、あなたの息子シヨーンは歌っているのよ！ でもそれだけじゃない。シヨーンはあらゆる人々の為にも歌っているの。シヨーンをわたしに与えてくれて有難う、ジェームズ。これからも又わたし、勇気を持って生きていけるわ！

アイリーン、聴いているかい？ わたしのやった事を君はきつと天上で誉めてくれていただろうね。わたしの愛が今でも君の中に宿っているのを、君の魂はきつと感じてくれている。そう信じたい。

曲が終わった後、一瞬沈黙があり、そして万来の拍手が起こった。歌い終わったシヨーンは少し誇らしげに、美しい微笑を浮かべた。

僕のお父さん、どうか永遠の平和の中に安らかに……。

<番外編式 終わり>

## 14 最終章（後書き）

この番外編2、終了しました。今まで拙作をお読みくださった方々には感謝申し上げます。けれども近いうちに、番外編3もUPする予定です、どうかお待ち下さいませ。

【番外編】参 鳩の翼 1（前書き）

お待たせ致しました。番外編3です。今回は、番外編2の後、サラが伯爵との仲に懊悩する内容です。

【番外編】参 鳩の翼 1

鳩の翼

）「BLIND+LOVE」番外編参

1

秋の風が、古色蒼然かつ広大なレッドフォード伯爵邸の中庭に吹き付けて行き、その風と共に美しい調べが微かに流れて、サラの耳に届いた。

サラは読書中だったが、本から顔を上げ、思わず微笑んだ。聞こえてきている声は、息子のショーンと、そしてレッドフォード家の幼い令嬢サマンサの重唱だったのだ。綺麗な透明な響きを持つ声は、今年11歳のショーン。そしてやや拙いながらも、可愛いまるやかな声が9歳のサマンサだ。

O F O R T H E W I N G S O F A D O V E  
F A R A W A Y , F A R A W A Y W O U L D R O V E ,  
I N T H E W I L D E R N E S S B U I L T M E A N  
E S T ,  
A N D R E M A I N T H E R E F O R E V E R A T R  
E S T

（おお、鳩の翼で

どこか遠い 遠い所に さすらい

荒野の中に わたしに作られた 巣で

そして とこしえに そこで 休まん）

「いい曲だわ……」とサラは呟いた。「メンデルスゾーン氏は、いつもいい歌を作るのね」

「鳩の翼」と題されたその曲は、今度の11月の聖歌隊のコンサート曲の一つでもあり、そしてもちろんソロ・パートはショーンが歌う予定だった。

その少し前にサマンサの10歳の誕生日があり、そのパーティーでもショーンとサマンサがその曲を重唱するのだった。

全盲のサマンサは、わがまま一杯に育ったものの、歌に関しては非常にいい音感と声を持ち、今ではショーンがサマンサの音楽の先生であり、そして兄のような存在になっていた。立場こそ違い、ショーンもそしてサマンサも一人っ子同士。お互いにどこか魂が似通っているのかも知れない。

「でも、わたしは駄目ね、まだ……」

サラは微かに頭を振った。

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

サラがショーンを連れてレッドフォード家に家庭教師としてやって来たのは、今から約5カ月前だった。三階建の立派なお屋敷の、屋根裏部分に当たる四階の2つの部屋があてがわれ、親子はそこに住むことになった。

ショーンはそこから小学校に通い、サラは月曜日から金曜日までの毎日5時間余り、サマンサの家庭教師となつて、教室としての一室で一から教え始めたのだった。

それはサマンサの父であり、レッドフォード家の当主であるアルバート・レッドフォード伯爵の言いつけだったが、今ではサラは幾分後悔していた。

どの盲学校にも馴染まず、どこに行っても暴れただけ暴れ、我を通すわがまま娘のサマンサの目となって教え込もうと、この5カ月努力に努力を重ねてきたが、サマンサは不貞腐れたように何とか勉強はするものの、決して心を開こうとはしなかった。

今ではサマンサはかなり点字が読めるようになり、算数にも能力を発揮し始めたが、その態度は不遜で、サラを心底軽蔑しているのは明らかだった。

夏の間、3週間だけレッドフォード伯爵とサマンサ、そして祖母に当たるヘレンの3人が南フランスにバカンスに行った時だけ、サラはほっと一息ついたのだった。

その間、サラは亡き恋人でショーンの父であるジェームズの妹、メアリー・シーモアからの誘いの手紙も、レスターに居る姉のトレイシーの誘いも断り、聖歌隊の練習に明け暮れるショーンと二人だけで、この広いお屋敷で過したのだった。それは久し振りに味わう憩いの一時だった。

サラは孤独を愛していたし、それに慣れても居た。けれども、ある時その孤独が自分を蝕んでいることに気付いたことがある。

ある夏の夕暮れ……サラはレッドフォード邸の裏庭に立ち尽くし、ふとショーンが育つて独り立ちして行く未来を描いたのだ。その時、ゾツとする風が体内を吹き抜けて行った。

その時ショーンは振り返ると、母親であるサラをじっと見上げた。その父親似の美しい顔が、何かを察して曇ったのをサラは感じた。

わたしは、息子の重荷になつてはいけないんだわ。いつかは息子も成長して、ここから離れて行く。その時、わたしは……どうするの？ 息子に迫いずがることも出来ないし、又新たな仕事を見つけないではならないのかしら？

思い出だけで生きていくことは出来ないのよ！ わたしもいつかは、歳を取って行くわ……。人生って、結局そういうことなのね。

独身の目の悪い女が将来どう生きていけるか、サラは急に不安に駆られたのだ。

「どうしたの、ママ？」とショーンが首を傾げながら聞く。

「別に。なんとも無いの。ただ、何だか淋しいわね、この裏庭は」「僕がいつも居るじゃないか」とショーンは、少し大人っぽく言った。

「僕だって今度の11月で、12歳だ。夏休みが終わると、最上級生になるんだよ。ちよつとは、僕を見直して欲しいなあ」

「あ、そう、そうだったわね」

サラはスカートにまつわりつく夏草を手で払うと、ニツコリと微笑み返した。

「ショーン、愛してるわ。いつまでも、愛してる」

そう言うのと、サラは衝動的に愛しい息子を抱きしめた。

「うん、僕も」とショーンも素直に答えた。けれども、もう随分少年らしくなったショーンは直ぐに手を解いた。

「どうしたの、ママ。今日のママ、少し変だよ」

「そんなことないわよ」

「あつ、そうだ。伯爵様や、サマンサが居ないから、やっぱり淋しいんだね。明日、帰って来るよ。そうしたら、又賑やかになるなあ」

「ショーン。あなた、どうしてサマンサと仲が良いの？ ママ、それが羨ましい。何か秘けつでもある？」

「別に」とショーンは遅咲きの白い薔薇の匂いを嗅ぎながら言った。「ただ、あの子の気持ちが分かるだけ。あの子が次に何をしたいか、とか、何を欲しているのとか、何となく想像が付くんだ」

そこまで言うとは、シヨーンはクルリと振り向いた。

「あ、そうだ。今度ね、秋にコンサートがあるの。全てメンデルスゾーン氏の曲ばかりでね、バイオリン協奏曲とか色々。その時、我が『セント・マーク教会聖歌隊』も出演するんだよ。それでね、『鳩の翼』と言う宗教曲を歌うんだ。ソロは……」

「もちろん、シヨーン、あなたでしょ？」とサラは笑うと、シヨーンの形の良い鼻を摘んだ。6月のコンサートで『ピエ・イエズ』を歌って以来、シヨーンのボーイ・ソプラノはこの町ではすっかり有名になっていたのだ。

サラは幾分気分が良くなった。

そして次の日、午後過ぎに馬車の音が聞こえてきた時も、気持ちは落ち着いていた……はずだった。

けれども、急いで階下に降りて、召使い達が総出でレッドフォード伯爵一家のお戻りを迎える為に居並んでいた最後尾に立ち、聞き覚えのある足音を耳にしたとき、サラの心臓が不自然に波打ち顔が火照ったのには、我ながら驚いたのだった。

「やあ！」と言う明るいレッドフォード伯爵の声がし、「お帰りなさいませ」と一斉に言う召使い達の中で、サラは唯一人俯いたままだった。

おずおずと顔を上げると、背の高い伯爵の端正な笑みが飛び込んできた。そしてサラは、伯爵の隣に、まるで梃子でも動かないかのようにしがみついている、エリザベス・フリン子爵令嬢を見つけたのだった。

サラは凍りついた。そして激烈に、そして衝撃的に悟ったのだった。

もしか……わたしは、伯爵様を……愛している？ まさか……



そんなこと、あり得ないわ……。それに、絶対に不可能なことを思い描いているなんて……。

「サマンサ！」と叫びかける、シヨーンの甲高い声がして、サラは我に返った。サマンサは、見えない手を伸ばしてシヨーンの手を取り、伯爵はにこやかにサラに言いかけた。

「やあ、オーウェル先生。留守番ご苦労様でしたね」

「い……いいえ……」

サラの口からは、まるで機械仕掛けの人形のような声が出ただけだった。

「どうしました？」

「いえ……。お戻り、嬉しゅうございます。旅のお疲れ……。お察し致しますわ」

「途中で、エリザベス・フリン令嬢もいらして、それは大層賑やかでしたのよ」

と、サマンサの祖母のヘレン・レッドフォード夫人が大仰に言って促した、少し訝しげに小首を傾げていたレッドフォード伯爵も、スタスタと中に入って行った。

サラは、自分の気持ちが汚れている様な気がしたまま、一番最後までその場に立ち尽くしていたのだった。

そしてもう秋……。あの日から、サラは自分でも心乱れたまま過していたのだった。

「オーウェル先生？ オーウェル先生じゃないですか！」

懐かしい呼び声がして、リバプールの目抜き通りの店のショーウィンドーで立ち止まっていたサラは、ゆっくり振り返った。

目の前には、以前奉職していた『アメリカ・モリソン盲学校』の同僚だったウィル・ドノバン先生が、その丸い身体と同じように丸い眼鏡の奥の目を輝かしながら立っていた。

「あら！？ こんなところでお目にかかるとは！ お久しぶりですね、ドノバン先生」

サラは何かから目覚めたように、心から嬉しくなってそう言った。サラの言葉が嘘偽りでは無いことを、このずんぐりむっくりの童顔だがどこか真摯で好感の持てる年下の青年は悟った。そして、彼もまた嬉しくなっていた。

「暫くお会いしませんでしたね。例の……伯爵家は、この辺りでは無いですし。けれどもオーウェル先生が、お元気そうでホッとした」

サラはこの素朴で正直なドノバン先生の言葉に、珍しく表情を輝かせた。こういったことは、この所絶えてなかったのだ。

「ええ、なんとか……」

「ショーンはどうですか？ 彼の噂は物凄いですよ。今度のコンサートにも、何かソロを歌うそうですね。楽しみだなあ」

「ええ、オール・メンデルスゾーン・コンサートですが。でもその前に、お屋敷で開かれるサマンサの誕生パーティで、その歌を披露するんですよ。二人で、ですけど」

「へえ？」とドノバン先生は、小首を傾げた。「あの我が儘な生徒が、歌を歌う？」

「ええ、サマンサはとても音楽の才がありますの。それもこれも、シヨーンのおかげですが。サマンサはシヨーンにだけは、心を開くんです。でも、わたしには……」

サラの言葉が止った。

「わたし、今でも駄目な教師なんです」

サラは俯いた。その気弱げな横顔を、ドノバン先生は愛しそうに眺めていたのだが、もとよりサラには分からない。サラはレッドフオード伯爵の事で、心を千々に乱していたからだ。

「いつまで経っても、サマンサの閉ざされた心の窓を開けることが出来ない。本当に無能な教師ですわね」

「けれども、サマンサは歌も歌うようになったし、幾らか学業も進歩したのでは？」

「確かに」とサラはまだ俯きながら、答えた。「点字を覚え始めましたし、わたしには敵愾心丸出しでも、最近はそれを押さえるようにはなつて来ています。彼女は本当は頭の良いお嬢さんなの。でも、それを上手く伸ばす事ができないんです」

「オーウェル先生」とドノバン先生は、いつも通り優しく言いかけた。

「教育に焦りは禁物です。それに……女の子の気持ちと言うのは、得てして正反対の事があるんですよ！」

「でも、サマンサがわたしを好きになつてくれることがあるなんて……。そんなこと、信じられないわ」

思わずサラはそう言葉少なに、叫んでいた。

「済みません、つい興奮してしまって」とサラは恥ずかしそうに、この年下のドノバン先生を見つめた。「今日は、サマンサの誕生日

に何をあげようかなと思って、町に出て来たというのに！ 本当に嫌な女ね、わたしって。愚痴ってばかりで」

ドノバン先生は、サラの肩を抱き、そして包み込んであげたいという衝動を何気なさそうに抑えながら、

「そうですねえ」と言い継いだ。

「リボンは？ お菓子もいいかも？ チョコレートとか。あ、本などもどうです？ ベアトリクス・ポター女史の『湖水地方の旅』や動物の本などの点字の本がありますよ。そこにはかわいい兎も出てくるんです」

「そうねえ」と始めてサラは微笑んだ。「あのお転婆ちゃんには、何がいいかしら？ 手で触れる何かが良いでしょうね」

「そこに、陶器の店がありますよ。可愛いワンコや馬や羊などの、陶器の動物は？」

「サマンサは、意外に動物が好きなの。ポター女史のようにね。でも、彼女は未だに学会では認められていないのね……女だからかしら？」

そう呟きながらも、サラはドノバン先生と共に陶器の店に入り、可愛らしいリボンを付けた猫の陶器の置物を買った。サラの給料では少し高かったが、けれどもサラに迷いはなかった。

サマンサへのプレゼントは、実はサマンサの父親でもあるレッドフォード伯爵への感謝の意もあつたからだ。

忙しい伯爵とは、館の内外でもそんなに会わなかったが、会えば必ず伯爵はサラに対して、尊敬の念で接し、

「ここでの生活は如何ですか？」「不自由はして居ませんか？」「シヨーンは最近どうですか？」などの短い会話ながら、必ず何か一言二言語りかけてくれるのだ。

それは使用人に対する接し方としては当然だったのだろうが、サラはその都度顔を赤らめ、動揺を隠すのに苦労していた。

「ええ、わたし何もかも満足致しておりますわ」

そうサラが答えると、伯爵は頷くと上品に微笑み、颯爽と去って行くのだ。

ただそれだけだった。けれども、伯爵に会って少し話すだけで、サラは幸せな気分になる。

けれどもそれは時々、“罪の意識”となつて、サラを苦しめてもいたのだが……。

〓〓〓〓〓〓

ドノバン先生と別れたサラは、幾分気が晴れてレッドフォード邸に裏口から入り、使用人達がいる台所を通つた。

「あつ、先生！ お手紙が来ておりますよ」と執事のジャックスが、サラに一通の手紙を差し出した。

「ありがとう」

言いつつ、差出人を見ると、『ミセス・メアリー・シーモア』の名があつた。少し重たいのは、何かが入っているのかも知れない。

屋根裏部屋の四階までの階段はきつかったが、やっと自室に戻つていそいそとその手紙の封を切ると、中からハラリと一枚の写真が出て来た。

裏には、“シーモア一家　メアリー&ドリュウ、そして小さなマイラより”とある。しげしげと見つめてみると、かつてのジェームズの友達、髭を生やした無骨そうなドリュウと、三歳くらいの女の子を抱いたメアリーの座姿があつた。

メアリーはやはりジェームズに幾らか似ていたが、もつとふつくらし健康そうに見える。その小さな女の子マイラは、ショーンの従妹に当たるのだが、どちらかと言うとドリュウの方に似ている。

どちらにせよ、微笑ましく実直な石工一家の姿だった。

□

1891年10月20日

親愛なるお姉様、サラへ

わたし達はいつも通り、平穩に暮らしております。そして今わたしは、二番目の子供を妊娠中です。

この夏にはお目にかかれませんでした。が、ショーンと共にでも、いつか必ずこちらにおいで下さい。わたし達、大歓迎です。

もちろん、お姉様がこちらに来たくない理由も、わたしには理解出来ませんが……。お氣が変わったら、必ず訪問して下さいね。ドリー共々、お待ちしております。

かしこ

メアリー

□

この短い文面を読んだサラは、思わず微笑んでいた。けれどもその次の瞬間、ジェームズの顔が脳裏に浮かび、そしてそのジェームズと愛を育みそして永遠に別れた忌まわしい場所であるドーセットへは、やはり行く自信の無い自分を深く恥じたのだった。

「ごめんなさい、メアリーとドリー。いつかお会いしたいけれど、今のわたしにはまだその自信も勇氣も無いんです……」。

サラはそつとその手紙を折り返すと、写真共々引き出しにしまいこみ、それからテーブルに飾ってある、ニッキーが鉛筆で描いた、色あせる事の無い美しさをたたえ憂いを含んだジェームズの肖像画を、じつと見つめていた。



広大なレッドフォード伯爵家では、今しも一人娘サマンサの10歳の誕生パーティが開かれようとしていた。祖母に当たるヘレンに手を引かれ、白いレースのドレス姿のサマンサが現れると、その場で待っていた家族や客からは拍手がわいた。

サマンサは本来は美しい娘なのだ、とその場に居る誰もがそう思っただろう。そしてどちらかと言うと、父親であるレッドフォード伯爵よりも亡くなった母親似であるような気がしたのも確かだった。

サラは一番後ろの端に立ち、自分の教え子を眼鏡越しに見つめていた。持っている中でも一番上等の白いブラウスを着、灰色のモスリンのスカートをはいて、なるべく目立たないように佇んでいた。けれどもその瞳は否応無く、サマンサ本人ではなく、レッドフォード伯爵に注がれていたのだ。

伯爵は愛娘に近寄ると頬ずりして抱き上げた。

「サマンサ、誕生日おめでとう！」

「あ、パパ！」とサマンサは真から嬉しそうに、ニッコリ笑った。

その瞳に生気が無く、何も見えていないのだという事実が、この場に居る誰でも知ってはいたが、知らん振りをするのも客の努めなのだ。

直ぐ後ろから、麗々しく着飾り過ぎるほど飾り立てたミス・エリザベス・フリンが、レッドフォード伯爵に寄り添うように近付いた時には、サラの心が凍りついた。

「まあ、綺麗よ、サマンサ！」とエリザベスがお世辞を言い掛ける



と、サマンサの顔はさつと曇ったのだが、呆然としていたサラにはサマンサの変化が読み取れない。

「ママ！ ママ〜！」と言う甲高い声で、サラはハッと我に返る。

そこには、紺色の制服を着たショーンが立っていた。少し背が伸びたものの、相変わらず美しく、まだまだ子供の面影を残しているショーンだ。そして彼はサラの宝物……。

「何だか、ぼんやりしていたね、ママ」

「あら、そう？」とサラは取り繕う。「多分……この雰囲気は苦手なせいよ」

「あのね、良い話があるんだけど」

とショーンが囁いたので、サラは身を屈めた。

「なに？」

「あとで言うよ。もう直ぐ出番だから」

「『鳩の翼』ね」とサラも微笑む。サマンサと何度も練習していた歌声を聴いていたからだ。

「うん」とショーンは無邪気に頷くと、サマンサの近くに寄った。ショーンは今ではサマンサの手となって、彼女を導く事に喜びを感じているようだった。

いや、ショーンは誰に対しても優しく接し、その穏やかな振る舞いで周囲の人達を和ませるのだった。

学校でもクラスの誰からも好かれていた。

「これで成績がトップなら、問題なく奨学金が取れるのですがね」とショーンの学校の先生、ミスター・フレッチャーも以前サラに述べていた。

「そうしたら、学費も免除されるでしょうに」

「いいんです。わたし、それ位の稼ぎはありますわ」とサラは答えた。

「そうですか……。そうそう、あなたはレッドフォードのお嬢さん

の家庭教師をなさっているんでしたね」

「ええ」

そう答えながらも、サラは恋人ジェームズが、結局奨学金をもらえなかった為に中等学校に行けず、ぐれてしまったのを哀しく思い起こしていた。

それだからこそ、サラはなおさら、我が息子にはちゃんとした教育を受けさせようと決心していたし、その為には自分の労などいわないつもりでいたのだ。

パンパンという手を叩く音で、サラははっと我に返る。

レッドフォード伯爵が、サマンサとショーンを並べて立たせ、口上を述べている所だった。

「我が娘サマンサ・レッドフォードが、この町の誇りである類稀なるボーイ・ソプラノのショーン・オーウェルと二人で、歌を歌います。皆さん、拝聴して下さい！ メンデルスゾーン氏の宗教曲『鳩の翼』です！」

伴奏者の老婦人がピアノの椅子に座ると、二人の子供達は緊張し大人びた顔になった。

最初の節をサマンサが歌いだすと、観客の間から微かに「おおっ」という溜息が聞こえた。確かにサマンサの歌声は素人にしては澄み渡り、音程も確かだったのだ。

O F O R T H E W I N G S O F A D O V E  
F A R A W A Y , F A R A W A Y W O U L D R O V E ,

そこまで歌うと、今度はショーンが歌い始める。ショーンは誰もが認める美少年だったし、その歌声に途端に観客はシーンとなった。

IN THE WILDERNESS BUILT MEAN  
EST,  
AND REMAIN THERE FOR EVER AT R  
EST

最高音のショーンの響きは神々しいほど美しく、この場に居る人々はショーンの声を聴く歓喜に打ち震えていた。坐っていたかなり歳をとった老婦人は、思わず目頭を押さえているのが後方のサラにも見て取れ、サラはショーンを息子に持ったという喜びに浸されていた。

中間部の二人の掛け合いのハーモニーは、例えようも無く素晴らしく、曲が終わった時には、しばらく沈黙があつたほどだ。それから割れるような拍手喝采が起つた。

「本当に素晴らしいわ！ あの少年がお上手だという事は、噂には聞いていたけれど、こんなにもステキだとは！」

「それに、とても可愛いお子さんね」

「サマンサお嬢様も、こんなにいいお声をお持ちだとは！」

そこかしこから聞こえて来る賛辞の嵐に、サラはショーンを誇らしく感じ微笑んだ。

けれどもエリザベスが拍手しながらサマンサに近寄つて、何かを手渡しながら言いかけた姿を見たとき、サラは下を向いた。

それからエリザベスはレッドフォード伯爵の方に振り向くと、馴れ馴れしくウインクした。何かを促すかのように。

レッドフォード伯爵は、皆を静まらせてから語り始めた。

「皆さん！ ありがとうございます。どうもありがとうございます！ 実はもう一つ告げなくてはならないことがあるのです！ お聞き下さい！」  
やっと皆が静まった。

「実は……ええつと……実は、わたしとエリザベス・フリン嬢は、先頃正式に婚約致しました！」

ええ〜っという驚きの声やし、数秒後にはもっとう激しい拍手が沸き起こった。

サラは全身の血が下がって行くのを感じ、それからやつとのことですその部屋からそつと退いていった。けれども何も見えず、何も聞こえない。サラはただ、暗黒の空間に、一人ポツンと佇んでいるような気がしただけだった。

後ろに隠し持っていた陶器の猫の人形の包みを落とし、その音がしたのも気付かずに。

やっぱり、わたしは馬鹿だった……。愚かな身の程知らずの女だったのね。

サラは呆然と立ちすくみ、それから慌てて欠片を拾おうとしゃがみ込んだ。猫の陶器の人形の破片が、紙を破って一部出ていた。それをサラは片付けようとして、よほど慌てていたのか指の先を切り、そこから血が滴った。

けれどもサラはその指をぼうつと見ているだけだったが、「ママ」と言うショーンの声で、やっと我に返った。

「どうしたの！？ あ、血が……」

驚くショーンの声に対して、

「大丈夫よ。ママって、ドジね」

とサラは落ち着いた振りをした。けれども敏感なショーンには、何かが母親に起こったのを感じた。

「でも、この包みは一体何？ 壊したの？」

「ええ……実はこれはサマンサに贈ろうとしたの。でも、肝心な時に落しちゃって。本当に間抜けな母親だわ、そしてドジな教師。結局何もあげなかった」

「そんなことないよ！ サマンサは分かってくれる」  
とショーンは言い張った。

「ショーン！」とサラは叫ぶと、思わずショーンを強く抱きしめた。もう自分にはショーンしか居ないのだと、これ程強く感じたことは無い。そしてこれ程ショーンを愛しいと思ったことも無い。

哀しくて寂しかった。

「ねえ、ママ」と堪りかねたショーンが身をよじりながら離れた。

「僕、話があるって言ったでしょう？」

「ああ、そうだったわね。話ってなに？」

「実はさあ」とじらすようにショーンは言い始める。「再来週から、1週間ほど演奏旅行に出かけるんだって！ 幾つかの都市を廻って、最終日はロンドンで！ すごいだろう？」

「まあ、ステキ！」とサラは思わず小さく叫んだ。

「でさあ」とショーンはまだ何か言い足りないようだ。

「で？」

「うん、途中だけど、レスターで一泊するの。そこでも夜、コンサートをするんだよ！」

「レスター！？」

サラは懐かしい響きに、我を忘れた。そこには愛する姉、トレイシーが居る。サラとショーンを有形無形に援助し、護ってきた優しく強い姉が。そして、未だ自分とショーンを許さない両親も住んでいる場所……。

「それじゃ、トレイシー伯母さんにも会ってくるの？」

「会えたらいいなあ。それから従兄妹達にも」

「そうね！ じゃあ、手紙を書いておくわ」

サラは立ち上がった。

「ねえ、ママ」とショーンの躊躇いがちな問いかけがあった。

「え？」

「僕の……お祖父さんとお祖母さんには会えないの？」

サラは絶句した。喜びが半減して行くようだ。

「え、ああ、そうねえ。多分、無理かも」

「ちえっ！ いつもそうなんだから」

ショーンは拗ねたような声を上げた。けれども直ぐ、  
「ま、いいや。いつか、お祖父さん達、僕に会ってくれるかな」  
と前向きに言くと、ニツコリ微笑んで手を離し、賑やかなパーティ  
の中に溶け込んで行つた。その後姿を、サラは複雑な思いで見つめ  
ていたが、壊れた置物の欠片を片付け始めた。

目の前に黒い靴が近寄る。

「あ、先生！　こんな所にいらしたんですか。急に居なくなったの  
で、どこにおられるのかと心配していたんですよ」

その声を聞くと、又しても心臓の鼓動が早くなる。黒い靴の側に、  
可愛いピンクの小靴があつた。サラは顔をあげた。心配そうな伯爵  
の端正な顔があつた。

「済みません。ちょっと気分がすぐれなくなつて」

「いけませんなあ。少しはお休みになつているのですか」

「ええ、もう大丈夫ですわ」

「あれ。指に怪我でも？」

レッドフォード伯爵は、目ざとくサラの指に付く血の跡を見つけ  
た。

「あ？　ええ。ほんと、わたしってドジですよ。せっかくサマン  
サに贈ろうと思って買った陶器の人形を落として、壊してしまつて

……」

「先生のバカっ！」と突然サマンサの声がした。片手を父伯爵の手  
とつないでいる。

「ごめんなさいね、サマンサ。いつもこんな調子で」  
「バカバカっ！」

「いい加減にしない、サマンサ！」と伯爵は叱り付けた。

「いいんです。本当にわたし、いつもちゃんと出来ないのですから。  
サマンサ、ごめんね」

「サマンサには、可愛い高価な人形をあげましてよ」

と、伯爵の背後からエリザベスが口を差し挟んだ。伯爵に気を取られて気付かなかったサラは、少しびっくりした目でエリザベスを見つめた。

よく見ると、サマンサのもう片方の手には、レースで着飾りボンネットを被った人形があつたというのに。

「あら、ほんと」

「ね、とてもいい人形でしょう？ わざわざパリから取り寄せましたのよ。サマンサ、いいでしょう、これ？」

「ええ、ミス・フリン」

そうサマンサは答えたが、その声は幾らか沈んでいた。

けれどもサラには自分のことしか見えず、早くその場を去りたいと願っていたので、礼をして直ぐに引き下がった。これ以上、仲睦まじい伯爵とエリザベスを見なくなかったのだ。

けれども去ろうとしたその時、背後で叫び声がしたのでサラは振り返った。口を真一文字に結んだサマンサが、黙ったままその人形の手や足を千切り始めたのだ。狼狽した伯爵の制御も物ともせず、サマンサはありったけの力で人形を引き千切る。

「何をするんだ、サマンサ！？ やめなさい！」

エリザベスは両手で口元を塞ぎ、わなわなと震えているばかり。叫び声で他の客やショーンも駆け寄って来た。

サラは踵を返すと、サマンサの元に駆け寄り、しっかりとサマンサを抱きしめた。というより、何とかしてその暴挙をやめさせようと試みたのだ。

「サマンサ！ やめて！ やめて〜！」

けれどもやめないサマンサの頬を、サラは思わず引つ叩いた。まあ〜っと言う叫び声があちこちからしてくる。



「アルバート！ とんだ教師ね、この方は。ちゃんとサマンサにレディとしての教育も出来ないなんて！」

誇りを傷つけられたエリザベスは、そう言い放つとツンとその場を離れて行った。その後を、慌てて伯爵が追いかける。

火がついたように泣き叫ぶサマンサの前に、サラはもうどうしていいか分からなかった。

けれどもその時ショーンが近寄ると、サマンサの腕を取った。サマンサはやっと力を抜いた。

「サマンサ、やめてよ！ もういいから。気が済んだだろう？」と優しく言うショーンの胸で、サマンサは泣き喚き続けた。

サラは全てにおいて、自信を喪失していた。そして先行きに対する不安で、頭が一杯一杯になっていた。

けれどももつとサラを落ち込ませたのは、伯爵とエリザベスとの婚約という拭いがたい事実であり、それを知りながら何気なく振舞うという事が次第次第に苦痛になって行ったことだったのだ。

ヒステリーを起こした挙句に、サラから平手打ちをくらったサマソンサは、しばらく授業を休み、その間サラは身の置き所も無く自室でぼんやり暮らしていた。自責の念が押し寄せ、教師としての自分の才覚に自己嫌悪すら覚えていた。

その頃、二通の手紙がサラの元に来た。一通はレスターのトレイシーからで、もう一通はドノバン先生からだった。

トレイシーの手紙には、案の定サラの両親は頑なに孫のショーンに会うことを拒否した、という旨が書かれていた。けれどもそのあとには、トレイシーの暖かい言葉が連なっていた。

『……サラ、ショーンの聖歌隊は、レスターでも一番大きなカテドラルで演奏するそうです。わたしは必ず行きます。例え両親が行かなくても、わたしはショーンの従兄妹達と共にショーンの評判の歌声を聴きに行き、そしてショーンを誇りに思うでしょう。それはわたしの子供達も皆同じ思いです。

ですから、決して気を落さないでね……』

「トレイシー姉さん……」

サラはその手紙を自分の胸に当てた。

「ありがとう。いつもいつもわたし達を励ましてくれて、本当に感謝しているわ」

けれどももう一通のドノバン先生の手紙は、サラにとっては意外だった。残念なことに、伯爵を秘かに愛してしまったサラには、ドノバン先生の気持ちが全く分かっていなかった。その点、サラは自らの視力以上に盲目だったのだ。

ドノバン先生は、例のサマンサの事件を聞きつけたらしく、一度夕食でも一緒にしませんか、そこで教育等について話し合いますよ、と如何にも気配りで優しいドノバン先生らしい文言が綴られてあった。

本来ならサラはその申し出を断つただろう。けれども今のサラは、何かにすがりたいと言う思いが強く、例え年下のドノバン先生にでも、自分の気持ちを吐露せざるを得ない状況だった。

『喜んでお会い致したいと思います。そしてドノバン先生からのアドバイスも頂きたいのです……お願い致します』

〓 〓 〓

ドノバン先生は朝から何度も鏡の前で自分の丸顔を見ては、髪を当時流行のピツタリと撫でつけた髪型が崩れていないか、ポマードの臭いがきつすぎないか、ネクタイが歪んでいないか確かめていた。サラとの約束の六時までまだ間があると言うのに、早々と自分のアパートを出立し、ブラブラとガス灯の灯る通りをぶらつき、それから花屋では白い清楚な花束を買った。それから意を決すると懐中時計に目を通し、急いで目抜き通りのレストラン『ラ・ブルーロゼ』に向ったのだった。

サラは既に席に付いていた。彼女はぼんやり外を見つめていたの  
で、ドノバン先生が入って来るのには気付いていなかった。その横  
顔が余りにも痛々しいので、ドノバン先生は一瞬入口で立ち止まっ  
たほどだ。

けれども気配にサラはドノバン先生を見つけ、小さく右手を振っ  
て合図する。

「ここですわ、ドノバン先生！」

ドノバン先生も上着を入口で預けながら、少しだけ手を振った。  
心臓が飛び出しそうにドキドキする……。

「ああ、遅くなって」

そう言い訳しながら席に着くや否や、ドノバン先生は白い花束を  
差し出した。

「まあ！ ステキね！」とサラは、嬉しい驚きに目を丸くしてしま  
う。けれども直ぐに、ドノバン先生にすがりつくような声音で言い  
始めた。

「済みません、一緒にお食事なんかしていいのかしら、わたしのよ  
うな年増女と？」

「何を仰るんです！ オーウェル先生はまだ若いですよ」

「いいえ、そんなこと。もう12歳になる息子の母親よ」

「そうか……シヨーンはもう12歳になるんですね」

「あと少しでね」とサラは嬉しそうに、それでいてちよっぴり淋し  
げに答えた。

「ところで、オーウェル先生。どうしたのです？ あなたが手を上  
げるなんて、よっぽどの事があったんですか？ ま、確かにサマン  
サ令嬢は、手に負えない生徒でしたがね。言いたかないが」

「ほんとに……わたしって、一体何をしているんでしょう。でもわ  
たしには、もうサマンサの心が全く分らないんです、ドノバン先  
生。人の前で、頂いたプレゼントのお人形をめっちゃめっちゃにしてし

まうなんて……。そんなことまでする子だとは思いませんでしたわ。だから、思わず……。

理性とか自制心とか、すっかり無くしてしまつて。お恥ずかしい限りです。教師失格ね」

サラは自嘲気味に嗤つた。

「それで……伯爵は何と？」

「何も仰いません。わたし、それが辛いんです。せめて、何かお叱りでもあれば、と何度思ったことか！ けれども伯爵様は、じつとわたしの顔を哀しげに見つめているだけで……以来、一言も言われないのです」

「そうですか」

「もうクビだ、と仰れば、わたしはすぐさま出て行きます。でも何も言われないとなると」

「何を言うんです！ あそこを出て行けば、もう行くところは無いではないですか！ だから、伯爵はあなたを叱責する事はしない……僕はそう思いますね」

そこまで話すと、ドノバン先生はふと何かに気付いた。

「それとも、伯爵は……」

「え？ なに？」

「い、いえ、別に」とドノバン先生は、言いよどんだ。「さあ、何か食べましょう。注文していいですね」

ドノバン先生は、サラにメニューを渡した。けれどもその手は微かに震えていた。

伯爵は……もしや、伯爵はサラに……オーウェル先生に何らかの感情を抱いているのでは……？ いいや！ まさか！？ だつたら、なぜエリザベス・フリン嬢と婚約なんかするんだ？ ああ、僕は考え過ぎなんだ、きっと。

「どうしたのですか、ドノバン先生？」とサラが心配そうに、虚ろな目のドノバン先生を促した。

「わたし、なんでも宜しいですね。先生が決めて下されば、それでいいのですから」

「そうですか……それじゃ。あ？ 僕ですか？ ああ、なんでもありませんよ、何でも」

そう言うと、ドノバン先生はサラを見つめながら、手を上げた。

「ウェイター！」

ショーンの演奏旅行の出立の朝、サラは玄関でショーンをひしと抱きしめてから送り出した。ほんの一週間の旅行だというのに、サラは不安で心配でたまらなかったのだ。

けれどもショーンは、可愛がってくれたトレイシー叔母さんと従兄妹達に会うのが楽しみで、そして仲間達と始めて旅行するという興奮で、母親サラの心根を察するには幼さな過ぎた。

「それじゃ行ってくるね、ママ」

そう短く言うと、ショーンは少しだけ振り返り、通りを走り去ってしまったのだ。虚脱感に浸されたサラは、玄関口でぼんやり立ち尽くしていた。けれどもやがて彼女は、玄関の大扉から静かな朝を迎えている邸内に入った。

背の高い人影が、螺旋階段から降りて来る。

「あ、伯爵様」

サラは一步引き下がると、お辞儀をした。伯爵は階段の途中で立ち止まると、奇妙な視線をサラに与えていたが、やおら言い始めた。「今日から又サマンサに教授して下さい、オーウェル先生」

「え？ あ、はい、分かりました。けれどもサマンサお嬢様の具合は如何なのでしょう……」

伯爵は溜息を付いたように見えた。

「困った娘だ。自分の子ながら、わたしはサマンサが理解出来なくなってしまった」

「わたしのせいかも知れませんか」とサラはつぶやく。

「いや、先生、あなたのせいではない！」

思いがけず伯爵は語気を強めて、遮った。

「わたしの育て方が悪かったようだ。あなたのせいではない」

「でもわたしは……サマンサを平手打ちしてしまって……情けない限りですわ」

サラは下を向いた。とてもしかとは伯爵を見ることが出来ない。

「いつものお部屋ですのね。あ……それではそこへ参ります。失礼します、伯爵様」

「オーウェル先生！」と伯爵は声をかけた。サラは顔を上げる。  
「何でしょう？」

「いちど、サマンサの事などでじっくりお話したいのですが」

「ええ、分かりました。いつでも」

「それじゃあ、今日はわたしは仕事なので……明日でも如何ですか？」

「はい」

「じゃあ、明日授業が済んだあと、お茶の時間に北の庭にあるベンチで」

「庭の？」

サラは幾分不思議な気がしたが、けれども頷いた。

「分かりました。それでは」

「先生！」ともう一度伯爵は言いかける。

「え？」

伯爵は何段か下に降りた。

「シヨーンはもう出発しましたか？」

「ええ。とても嬉しそうにして！ 親の頸木から逃れて、自由な空気を吸いたいのでしょう。もう、子供ではないのですね。独立したいでしょう。何だか嬉しいような淋しいような気がしますわ」

思わずサラは、伯爵が聞いてもない事まで喋っていた。

「いい子だ、シヨーンは」



「ええ、自慢の息子です」

「そのシヨーンの事でも、明日……」

「えっ!？」

サラの胸はドキリと騒いだが、深く呼吸するとサラは急いで家庭教師の部屋へと歩みをすすめた。階段の途中で伯爵とすれ違ったが、サラは俯いたまま視線を合わせず、会釈して通り過ぎた。

〓 〓 〓 〓

サマンサに教えるのは恐怖だったが、けれどもサマンサはむっつりしているものの、妙に素直だった。サラもまた、例の事件の事は蒸し返さない事にした。

いつも通り、授業は進み、午前中に終わった。けれども言い知れない疲れがサラを襲い、サラは昼食も食べずに自室に上ると、ベッドに倒れるように横になった。

誰も居ない部屋は虚しく、サラはこの間ドノバン先生に言われた事を思い返していた。

〓 〓 〓

あの時、ドノバン先生は言った。食事も終わりがかっている頃だった。

「あの……オーウェル先生。これから、サラと呼んで宜しいでしょうか？ あ、お嫌ならいいんです、お嫌ならば」

「まあ！」とサラはフォークを置いて、改めてドノバン先生を見つめたが、今まで自分のことで精一杯の余り鈍感になっていたサラにも、やっとドノバン先生の気持ちを悟ったのだった。

「嫌ではありませんわ。でも……ドノバン先生は……」

「ウィルと呼んで下さい、これからは」とドノバン先生は、勇気を振り起こしながら言った。サラは目を見開いた。

「ええ……わかりましたわ……ウィル」

ドノバン先生の丸顔に、笑顔が広がって行くのが分かった。

ドノバン先生。いや、ウィル……あなたは、もしかして？  
でも、駄目よ。そんなこと！

サラは戸惑い、どうしていいか分からなくなってしまった。ドノバン先生は好きだ、けれども愛してはいない。好ましい人なのだが、彼に抱く感情は愛ではない。けれども、やがて一人になるだろう自分を愛してくれる人が居て、その人がドノバン先生だったら、その好意を受けるのが当たり前ではないのだろうか？ この厳しい世の中では。

「サラ。僕は焦りません！ ゆっくり考えていいのです。ただ僕は、僕はあなたを愛しています！ それは事実です。神にかけて……事実なのです。あなたを幸せにしたい。ただそれだけなのですから！」

サラは両手をテーブルに置くと、目を逸らせて答えた。

「ええ。もう少し待って下さいませんか。お願い致します……ウィル」

「済みません。あなたは、まだショーンの父親である人を忘れられないのでしょうか。それは当然です。でもだからこそ、僕はそういうあなたが好きなんです」

「ありがとう」

サラはつぶやくように、謝意を表した。

「わたしのような者を、愛して下さいるなんて……」

サラは北の庭に急いでいた。そこには静かな庵があり、レッドフォード家の個人的なクリケット場がある所だ。そんな場所で会いたいという伯爵の気持ちが分ならず、サラは思わず歩む足を緩めた。おかげで時間に少し遅れたようだ。

既にレッドフォード伯爵はその場に居り、召使いが一人丸テーブルにレースのカバーをして、お茶の支度をしていた。テーブル上には、いつものマフィンが少し盛ってある。伯爵はコップを膝に置き、今にもお茶を飲もうとしていたところだった。

「伯爵様。遅れまして申し訳ありません」  
そう駆け寄りつつ謝りながら、サラはすぐ近くに寄った。召使いがジロリとサラを見上げたが、直ぐに礼をして去って行った。

誰も居なくなると伯爵はチラとサラに一瞥を与え、  
「どうぞお掛け下さい」と丁寧に言った。サラは少し躊躇った後、スカートの皺を気にしながら坐った。  
「お話とは……？」とまずサラが問いかけると、伯爵は何も言わずに紅茶をすすってから、遠くを眺めつつ、やおら喋りだした。目は合わない。

「実は先生……。サマンサの事ですが……寄宿舎付きの盲学校に行かせようかな、と考えていましたね」  
「……!？」

サラの心臓は飛び出しそうになり、声にならない驚愕の叫びが出た。

「なぜですか？ お氣が変わりました？」

「サマンサはあいう子です。せっかくオーウェル先生が来て下さって、手取り足取り指導しているというのに……全く情けない娘だ。最初は寄宿舍には反対しました。けれどもこのような有様では、とても良家のレディにはなれそうもない。サマンサには勉強よりも、良きマナーを身に付けて欲しいのですよ、わたしは」

サラは一言も言えずに黙り込んだ。全て自分のせい……そのセンチンスがリフレインする。

「オーウェル先生には、直ぐに去ってくれとは言いません。それは出来ない。あなたを路頭にさまよわせる事など……わたしには出来ない。例えエリザベスが反対したとしても」

「でも」とサラはやつと声を絞り出した。「もうわたしには用は無いのでしょう？ サマンサお嬢様が寄宿舍へ行ってしまうば」

「わたしも気が進まないんです、オーウェル先生」

そう言いながら、初めて伯爵は顔をこちらに向けた。氣弱そうな氣配が、その端正な顔立ちに漂う。サラは愛しさで胸が詰ったが、けれども何気ない顔をした。

「どれが最善の方法なんでしょうね……」

「わたしが至らないばかりに」とサラは声を詰らせながら言った。

「いや、それは違う」

「いいえ、わたしの至らなさのせいです！ なぜならわたし、サマンサお嬢様を寄宿舍にはやりたくないのですもの。それは自分の仕事が無くなる、とか言ったことではなく……今のままサマンサお嬢様を寄宿舍にやるなど、余りにも無謀だからですわ。淋し過ぎます」

「反対ですか、先生は？」

そう問われて、サラは黙り込んだ。

「いずれにせよ、お決めになるのは伯爵様です」  
「そうですか」

伯爵は又お茶をすすった。けれどもその碧い瞳は、じつとサラに注がれている。サラは居心地が悪くなった。

「では、わたしはこの辺で……」

立ち上がりかけたサラに、伯爵は慌てて言いかけた。

「もう一つあります。それはあなたの息子、シヨーンの事です」

「ああ……そうでした。息子が何か？」

「シヨーンをパブリックスクールに入れる気はありませんか？」

サラは真から驚いた。それはサマンサのことよりも、もっと……。  
「パブリックスクールに……」

丸い眼鏡を掛けなおしながら、サラはオウムのように繰り返した。  
「そんなこと、無理ですわ！」

「なぜです？」

「お金がありませんもの。それに、それに……」

「それに？」

「シヨーンは、たった一人のわたしの宝物なのですもの！」

「お金なら、わたしが出しますよ、先生。彼のパトロンになります」  
「は！？」

「シヨーンの才能は惜しい。それはかけがえの無いものです。わたしは少しでもお手伝いがしたいのです。貧しい子供を、少しでも上の階層に引き上げる為に。お金を出すのは、投資のようなものです」

貧しい子供……少しでも上の階層に……お金を出すのは、投資のようなもの……。

サラはショックを受けて、凍り付いていた。

「お断り致します！」とサラはキツパリと告げた。「わたし、ここ  
まで落ちてはおりません。自分の息子は何とか致しますわ、この手  
で何とか……。まさか伯爵様の御口からそのような言葉が飛び出  
すとは、今の今まで思いもしませんでした」

サラは燃え盛る炎のようだった。それは憤怒の為だ。

「そうか……そうだと思っていました」

伯爵はつい先ほどの傲慢なまでの威厳を消し果て、肩を落とした。  
その瞳には、もっと別のものがあつた。

「あなたは強い人だ。実は、今のはわたしの考えではないんです。  
全てエリザベスの気持ちでした。あなたを傷つけて申し訳ない」

伯爵は目を伏せた。

「わたしはもう彼女のコントロールのままになってしまったんだな」

「伯爵様……」

サラは打って変って気弱な伯爵を、奇妙な目で見つめた。

「どうして、そこまで」

「サラ！」

と突然名前を呼ばれて、サラは椅子から落ちそうなほどびっくりし  
てしまう。

「済まない。わたしは弱い人間だ」

「何を仰っているんです!？」

「サラ、いや……オーウェル先生。わたしはエリザベスを愛してい  
ない」

「何ですって!？ それじゃ、なぜ？」

意を決したように、伯爵は早口で述べた。

「わたしはエリザベスと関係を持ってしまったんです！ あの時、  
フランスでのバカンスの時に！」

サラの頭は真っ白になった。全てがグルグルと廻りだし、立って居られなくなるほどの衝撃を受けて。

サラはいつの間にか、その場から足早に去っていた。溢れる涙を拭おうともせず、彼女は旅支度もそこそこに、いつの間にか汽車に飛び乗っていた。永久に伯爵邸から消え去ってしまいたいと望みながら。

外は冷たい雨の夕方。

かなりお腹が大きくなったメアリー・シーモアは台所に居て料理を作り、そして夫のドリユーは三歳の娘マイラを膝に抱いて、一緒に戯れていた。

平凡な夜、平凡な時間……それら全てが、ドリユーにとっては何よりも貴重なのだ。ドリユーにとっては、家族が全てだった。家族を知らずに育ったドリユーは、これらの日々を何よりも大切にしていたからだ。

「はい、ドリユー、マイラ。やっと出来たわ」

とメアリーは大きなお腹を抱えながら、シチュー鍋を運んだ。徒弟のアンドリユーは、今日は実家に戻って居ないのだ。

ドリユーはマイラを下ろすと、愛妻の危なっかしい手元を見て、慌ててメアリーのもとに近付く。

「駄目じゃないか！ 余り無理するなよ、メアリー」

「これくらい、へっちゃらよ。ねえ、マイラ。パパって心配性よね」

メアリーは以前より少し太っていたものの、輝くような笑顔は相変わらずだった。夫のドリユーは、「美人の奥さんを持ちやがって」という周囲のやかみも豪快に笑い飛ばしながら、心の中ではメアリーに感謝していた。

この平凡な幸福がずっと続いて欲しい……。ドリユーの願いはただそれだけだった。そして妊娠しているメアリーが、無事に第二子を産んでくれたら、もう言う事は無いと。



その時、ドアをノックする音がした。躊躇いがちだが、どこか切羽詰ったノックの音。

「今頃誰かしら？ この雨でもう暗いのに」

「客ではない様だな」

そう言いつつ、ドリューはメアリーを制すると、そっとドアに近寄った。

「どなたです？」

「わたし……わたしは、サラ……サラ・オーウェルです……」

「え！？ 義姉さん！？ まさか！」とメアリーは鍋をテーブルに置くと、急いでドアに向った。

ドリューがドアを開けると、目の前に雨に打たれびしょ濡れになった一人の華奢で小柄な、眼鏡を掛けた女性が佇んでいた。

青白い肌と、震えている身体……。赤毛が額に張り付き、ボンネツトは濡れ、形も変形している。

「済みません……急に、こんなお時間に伺って……」

「まあ！ 早く中へ！ お義姉様<sup>ねえ</sup>」

メアリーはまるでサラを抱くようにして、室内に導いた。サラはガタガタ震えながら、俯き加減におずおずと中に入った。目の前のドリューは、啞然としてサラを見つめているばかりだ。

「早く暖炉の側へ！ まあ、こんなにびしょ濡れで」

初対面だというのに、メアリーはサラに対して長年の知己のように接した。そしてそれがごくごく自然体なのだから不思議だ。

「ごめんなさい」とサラは消え入りそうな声で謝った。「でも、行くところが無くて……本当にごめんなさいね」

「行くところが無い！？ そ、それはどういう意味ですか？」

とやつとドリユーは言葉を発した。サラはチラとドリユーを見上げたが、唇を噛んだまま黙っていた。

「ああ、お義姉様、彼はドリユー、わたしの夫です。……ご存知だったとは思いますが……」

「え、ええ」とサラは答えたが、実際にドリユーと面と向かって話したことは無いのだった。

「ドリユー・シーモアさん。済みません。急に押しかけてしまって……」

「いや、いいんです。ちょうど食事時だったし。けれど……なぜ？」  
「ドリユー！」とメアリーは厳しく言った。「今はそのことはやめて。義姉さんを、暖かくさせるのが一番よ。きっと何かご事情があるんだわ！」

「ごめんなさい！」

そう血を吐くように言うと、サラは両手で顔を覆ってワッと泣き出した。マイラが驚いて、母メアリーのスカートにしがみついた。

「気にしないで下さいね、お義姉様。事情はあとで伺いますわ。それよりも、ここまで訪ねて下さって、ありがとうございます。お約束でしたものね。でも、シヨーンは？」

「シ、シヨーンは……今……演奏旅行で……」

サラは、途切れ途切れに答えたが、メアリーに促されてやっと椅子に座った。濡れたボンネットと地味なコートを脱ぎ、少し落ち着いていたようだ。

メアリーはそんなサラに、暖かいスープを差し出した。

「あ、ありがとう、メアリー。そうね……お初にお目にかかりますわ。ほんと！ ジェームズに似ていらっしゃるのね」

ジェームズの名前を聞いて、ドリユーは苦い思い出をぐっと飲み込んだ。

「ショーンのことは、写真や手紙で聞いています。とても歌が上手いとか」

とメアリーは優しく義姉のサラの背中を撫でながら、言いかけた。

「ええ、とても」とサラは涙を飲み込みながら答える。「きつと、あなたのお兄さんに似たのね。わたしは音楽駄目なもの」

「そうね……兄は子供の頃、歌が上手でした。けれども、いつの日か全く歌わなくなってしまつて。けれども、ショーンがその代わりに歌ってくれているのね。有名なボーイ・ソプラノ歌手ですつてね」

「ありがとう、メアリー。少し落ち着いたから、どこかの宿を探しますわ」

「お義姉様」とメアリーははつきりと言つた。「兄のお墓を見にいらしたの？ それとも、別の理由が……？」

サラはしばらく無言だったが、やがてポツンと答えた。

「両方かも知れないわ……」

「宿を探すのは無理ですよ。水臭いな。ここはあなたの義妹の家じゃないですか！ それにこのマイラだって、あなたの姪です。今晚はここに泊まつて下さい」

と突然ドリユーが訥々と言つたので、サラはやつと小さな女の子に気付いた。

「可愛いのね……。マイラ、あなた、ショーンの従妹だったのね」

サラは少し怯えているマイラを見つめた。どちらかと言うと、メアリーよりもドリユーの方に似てはいる。けれども写真では分からなかったが、その瞳の色はアメジスト……。始めてジェームズと出会った時の、衝撃的な瞳の色と全く同じだったのだ。

「そうよ。わたし、何かからここに逃げてきたのかも知れない。そ

して、多分ジェームズが呼んだんだわ……」

サラはそう呟いていた。誰に言っても無く。

「逃げて……来た!？」とメアリーはそう小さく叫ぶと、今のサラの気持ちは、以前ここに来た時の自分の気持ちと同じなのだと思い付いたのだった。

「伯爵様！ ミス・オーウェルはどこにもいらっしやいません！」  
 屋敷のあちこちを探し回っていた執事が、息を切らしながらレツ  
 ドフォード伯爵に告げた。ソファに坐っていた伯爵は、夜更けの暗  
 い空を窓越しに見上げて嘆息した。外は嵐と言ってもいい荒れた天  
 気で、ひっきりなしに雨脚がガラスを叩く。

サラが居なくなったのに気付いたのは、夕食にサラが現れなかつ  
 たからだ。どこかに言っているのだろうとたかをくくっていたもの  
 の、夜10時になっても、サラは戻って来なかった。

やがて、サラが小さなカバンを一つ持っただけで、玄関ではなく  
 裏口の門から出て行ったのを、小間使いが見ていたことが判明した。

「あの……オーウェル先生は、俯いたまま急ぎ足で出て行きました  
 わ。わたしが、『あ、先生、どちらへ？』と言い掛けたのですが、  
 先生は耳に入らなかったようでした。それ程、つまり……心ここに  
 在らず、と言う感じで」

「なぜ、早く言わない！？」と思わず伯爵は怒鳴ったが、その哀れ  
 な小間使いは、すくむばかりで何も答えない。

直ぐに伯爵は自分が言いすぎたのを反省した。

「いいよ、ジェーン。もう行きなさい」

「はい、す、済みません」

小間使いは少しお辞儀して、慌てて去って行く。

伯爵は呆然とその後姿を追っていた。

なぜサラが突然出て行ったのか、伯爵には分かっていた。自分が不用意な事を言ってしまったからだ。そうでなくとも、サラの心は粉々になっていたに違いないと言うのに、更に追い討ちをかけてしまったようだ。

そして、同時に、伯爵にはサラの本当の気持ちを知ってしまった。サラもまた、自分に心を寄せていたのだと……。

けれども一体どこへ行ってしまったのか、伯爵には分からなかった。

サラは実の両親とは仲違いしている。だから両親の元では無いだろう。けれども仲の良い姉がレスターに居ると言っていた。行くのなら、多分そこかも知れない。

がしかし、サラには教師の恋人が居るのでは、と言う噂もあった。それに、もしかすると、息子ショーンの父親である男の故郷かも知れない……？ けれどもそこは、サラにとっては辛い場所のはずだ。伯爵は窓に近寄り、冷たい雨の暗闇を見つめた。

「サラ……君はこの寒空の中、どこに居るんだ……？」  
遂に時計は夜中の0時を打った。

|| || || ||

翌朝になつても、サラは戻って来なかった。

伯爵が苦い朝食を取っていると、母親のヘレンが眠そうに現れた。  
「あら、アルバート。今朝は早いね。ちゃんと寝たの？ 目が腫れぼったいわよ」

「ああ、お母さん」

「あのオーウェル先生の事？ ほんとにあの先生って、トラブル・メーカーなのね！ 今度はよりによって、黙って出奔するだなんて！ オトコでも出来たのかしら」

「母さん！」と伯爵は怒気を含んだ声で遮った。

「あら？ わたし、何か言ったかしら？」

「出奔した、などとなぜそう決め付けるんです」

「だって、少なくともどこかへ出かけるときには、誰かに言伝いづつでも言うべきじゃないですか！ 先生ですよ、それにいい大人の。

サマンサがかわいそう！ やっぱり、サマンサはエリザベスの言うように、ちゃんとした寄宿舎に入れるべきだったのかも知れないわね」

「もう結構！」

そう叩きつける様に言うと、伯爵はナプキンを取り払って、足音高くダイニングから出て行った。

「あの先生は、クビね。最初からそうすれば良かったわ」と老婦人は呟いた。

|| || ||

伯爵はどうしていいか分からず、今日の仕事にも支障が出るのが分かっていたので、とりあえず家で待機する事にした。

コツコツと言う伯爵の苛立たしい足音が響く居間に、サマンサが入って来たのはもうお昼近くだった。

「パパ……」

「あ、サマンサ！ 一人で来たのか！ 危ないだろう！？」

急いで近寄る伯爵に、サマンサは見えない瞳を向けて、片手で遮る。

「来ないで！ 一人でも大丈夫よ。家の中のことは、もう分かっているから」

「そうか」と伯爵は少し心を落ち着けた。「サマンサも成長したね」

「オーウェル先生は？」

「ああ、そのことか……。先生は少しお出かけだ。だから今日は休みで……」

「嘘付かないで！」とサマンサは叫んだ。

「いや……それは」

「先生、出て行ったんでしょ！？ そうでしょ」

伯爵は少し躊躇ったものの、正直に告げた。

「ああ、そうのようだね」

サマンサは暫くそのままだったが、突然ワツと泣き出した。

「先生が居ないと……居ないと……わたし……」

「サマンサ……」

「先生が居なくなるなんて、いやっ！ 先生が居ないと、わたし……どうしていいか分からない……」

「サマンサ。お前は先生を嫌っていたらう？ 違うのか……」

「パパ……！」

とサマンサは両手を広げた。伯爵は愛娘を抱きしめる。

「わたし、わたし、先生のこと、好きだったの。大好きだった……」

「え！？ それじゃ、どうして……」

「だって、わたしも今気付いたんだもん」

と泣きながらサマンサは、途切れ途切れに言った。

「パパ！ 先生に帰ってきてもらって！ わたし、寄宿舎はいや。

先生からもつともつと教えてもらうの！ お願いよ、パパ！ わたし、いい子になるから。いい子になるから……」

「分かった。分かったよ、サマンサ」

伯爵はぐつとサマンサを抱き締めた。この事実を、必ずサラに伝えたい。伝えるんだ……。





小鳥の可憐な鳴き声で、サラは目が覚めた。既に小窓から日が差している。枕はまだ涙で少し濡れていた。

けれども起き上がったサラは、幾分理性が戻ってきていた。彼女はサイドテーブル上の眼鏡を慌てて掛けると、ぼんやりとこの客室を見渡した。

清潔なシーツと毛布のベッドに、小花柄の可愛いカーテン。質素だがここかしこに華やきが漂っているのは、やはりここの主婦であるメアリーの趣味なのだろうか。

メアリー……愛した恋人ジェームズの実の妹……。

昨晚始めて会ったが、写真よりもずっと精気に満ちた美人だった。鄙だから少し田舎っぽいところがあるにせよ、この辺りでは評判の女性に違いない。友人だったドリユーが自慢するだけの事はある。

けれども、妙な縁<sup>えにし</sup>だった。ジェームズと愛し合っていた間は、メアリーの話題も余り出なかったし、何よりサラにとって、メアリーは遠い存在だった。

けれども今はそうではない。ショーンと血の繋がる従妹であるマイラの母であり、ショーンの叔母でもあるのだから、当たり前と言えそうだが。

なぜここに来てしまったのだろうか？ 衝動的とは言え、駅に行くまでどこに向うのか全く決めていなかった。それなのに、是非ドーセットに行きたいとあんなに願ったのはなぜなのだろうか？

叶わぬ愛から逃れる為？ それとも、ショーンの父でもあり恋人

でもあったジエームズに対する罪の呵責に苛まれたから……？ それとも、単に行く所が無かったから、出任せでそう決めたのだろうか？

もうサラは自分では分からなかった。ただこれだけは言える。

この客間に通された時、始めて激しく泣きじやくったという事だけは。今まで物理的にも亡きジエームズと離れていようとしていた自分が、罪深かった。もっと早く来るべきだったのかもしれない。

一人ではなく、堂々とショーンを連れて。それなのに、こんなに卑劣なやり方でしか来られなかったとは！

後ろめたい思いが、サラの胸を塞いだ。けれどもサラはクシャミをしてしまい、やっと自分が少し風邪気味なのを察した。

カーテンをそつと開ける。外は昨日とは違って、晴れ渡っている。向かいのドリュウの仕事場では、既に火が起こされ煙が立っていた。

ああ、ジエームズ。わたし、やっと来たわ……。長い月日だった。

サラはクシャクシャの赤毛をそつとかき上げた。

「あら、お目覚めでしたの、お姉様？」

と言う声で、サラはハツとして現実を引き戻された。

ドアの側に、身重のメアリーがトレイを持って立っていたのだ。その瞳は昨晚よりも輝いて見え、素朴な幸福に包まれている。

「ええ、メアリー、ごめんなさいね。昨晚は急に来てしまって」

「何を言っんです！？ ここはわたしの甥ショーンの“叔母さんの家”ですよ。ま、大した邸宅じゃありませんけど」

そう言いつつ、メアリーは朗らかに笑う。「まあ、お姉様。今日は昨晚と違って、血の気が通っていますわね。あの……朝御飯は、こ

こでいいでしょうか？」

サラは始めて自分の役割を感じ、身重のメアリーから急いでトレイを受け取った。自分の目線よりも少し上にメアリーのブルーの瞳があり、自分の身長の高さを改めて感じたのだが。

「ごめんなさい！ あなた、こんなこととしてはいけないわ。後少しで臨月でしょ。気をつけなければ駄目よ。わたしの為にこんなことしちゃいけないのよ。」

ああ、もっと早起きして下に降りれば良かったわね。ごめんなさいね」

けれどもサラはまたしてもクシャミをしてしまった。トレイが少し揺れる。

「あら、ごめんなさい！ わたしつたら、せつかくトレイを受け取ったのに！ どこに置きましようか」

メアリーはそう明るく振舞いながら喋る義姉の横顔を、じっと見つめていた。メアリーにとっても、実物のサラと会うのは初めてだったのだ。

兄ジェームズが命をかけて愛した人は、どういう人なのか……。メアリーはそれを知りたかった。

けれども、それは今何となく感じた。昨晚の取り乱したサラからは感じなかった何かを、メアリーはひしひしと感じ取っていた。

それは知性、運命に対する真摯な挑戦、サラの貧弱な容姿とは想像も付かない秘めたる情熱、とても言うのだろうか？ どこか他人を引き付けるものを、サラは持っていたのだ。

例えばサラがイングリッシュであったとしても、同じ人間として同じ女性として、メアリーは素直にサラに引きつけられていた。

兄が愛した人は、愛するに値する人だったんだわ！ とってつ

けたような鼻に掛かるお世辞や、反対に傲慢さからも無縁な、純粋な人。それでいて、ただそれだけではなく、人生の荒波をそつとかくくれるような人……。

そして、弱みを見せるのを恥としない人……。

メアリーの気持ちに気付かず、サラはトレイを小さなテーブルに置いた。

「まあ、美味しそう！　ありがとう、メアリー」

「そう？　ええ、まあドリューもわたしの料理は上手だって言うのよ」

「もちろんよ！　ステキな奥さんですもの！　そして……ジエームズに似てる。綺麗な人ね、あなたはやっぱり」

「姉さん……」

そう言い掛けると、途中でメアリーは声が詰った。椅子に腰掛けようとしたサラはそつとメアリーに近寄ると、その背中を撫でようとした。その途端、メアリーは感極まって義姉のサラをしつかりと抱いた。そして少ししゃくりあげながら、耳元に囁いた。

「よくきて下さったわ。お会いしたかった。けれども、少し怖かったの……わたし、姉さんのことが、少し怖くて……。でも、良かったわ。一つの謎が解けたんですもの！」

「わたしも怖かった……本当はね。でも、来て良かったのね、本当に良かったのだと今確信したわ」

二人の義理の姉妹は、互いの過去の傷や辛さを語らずとも理解し合い、そしてやっと心を一つにすることが出来たのだった。

ここに來た動機は、卑怯にも伯爵様から逃げる事だった。けれども、その感情が無かったら、ここには來れなかった。

伯爵様を愛することも、ジェームズを愛した事も、それは事実。  
もう逃げる事なんてできない。

そして例え伯爵様がどなたと結婚しようとも、わたしの心は偽れない。その現実を受け止める事しかできないのよ。

愛が成就しなくても、わたしにはまだショーンが居る。そしてメアリー達が居るじゃない!? 困難な立場から目を背けてはいけな  
いんだわ……。

「メアリー」とサラはまだ泣きじゃくるメアリーに言いかけた。

「午後、あなたのお兄様のお墓に連れて行ってくれるかしら?」

「ええ! もちろんですとも」

そう答えると、再びメアリーはキラキラした瞳で微笑んだ。

ウィル・ドノバン先生は、授業中だというのに押しつけてきたその客の名前を聞いて、飛び上がった。そして生徒達にしばらく自習しているようにと言いつけて、慌てて校長室へと向った。

客とは、なんとレッドフォード伯爵なのだ。サラに何かあったのでは、という怖れで、ドノバン先生の心臓はドキドキと激しく打ち、冷や汗が流れ出た。彼は廊下で一度、ハンカチで額の汗を拭いた。そして深呼吸すると、校長室のドアをゆっくりと開けた。

レッドフォード伯爵の背の高い背中が見え、それから難しい顔をした校長の視線がホツとした様にドノバン先生を捕らえる。

「あ、やっと来ました。それではわたしはこれで」と校長は言つと、立ち上がる。

「え？」とドノバン先生は訝しげに立ち止まった。「校長先生が、ご一緒では？」

「いやね、君だけに話があるらしいのだ。それではごゆっくりと、伯爵」

校長はサツサとドアの陰に消え、あとにはドノバン先生と伯爵だけが取り残された。不吉な胸騒ぎがして、ドノバン先生は暫くその場に凍りついたままだ。

「ドノバン先生……」とこちらを向いた伯爵が、静かに言いかけた。「お邪魔でしたでしょうね。まあ、こちらにお掛け下さい」  
「あ……はい」

ドノバン先生は居心地が悪そうに、椅子に腰掛けた。

「それで、わたしに何か？」

「サラの……いや、オーウェル先生の居所をご存知かと思ひまして」

「えー？」とドノバン先生は息を飲んだ。「オ、オーウェル先生が

……どこかへ、でも？」

「そうです」と伯爵は簡潔に答えた。「その様子では、ご存じないようですね」

失望が伯爵を暗くした。

「どうしたのです？ オーウェル先生は……いらっしやらないのですか？」

「わたしの責任です」

伯爵はきつぱりとそう答えた。

「言い訳はしません」

「な、何のことだか、僕には……さっぱり」

「オーウェル先生は、突然何処かへ出奔しました。どこへ行ったのか、実は分からないのです。お力を貸して頂きたい」

「出奔した！？」

ドノバン先生は驚愕の余り、眼鏡を落しそうになった。

「なぜ？」

「わたしが、そうさせてしまったようです」

そう答えると、伯爵は目を背けた。その横顔を見つめるドノバン先生の心に、怒りの炎が渦巻いた。

「そうさせてしまった、ですって！？ サラは、サラは一体どこに！？」

「サラ！？ それでは……」

「サラに求婚しました。まだ確約は出来ませんが、サラは僕の許婚なんですよ！」

ドノバン先生の声は、今にも泣き出しそうに上ずっていた。



レッドフォード伯爵は、自分の“恋敵”をじつと見つめた。

「けれども、オーウェル先生はあなたにも内緒でどこかに行った……」

「確かにそうです」と、ドノバン先生は激情を何とかして抑えようと努力しながら答えた。

「サラは黙って、一人でどこかへ行っただんですね……」

「分かりますか？ それがどこか」

「多分……あそこだ」とドノバン先生は静かに答えた。

「どこです？」

「もとの恋人の所でしょう。ショーンの父親の……亡くなった場所、ウェールズのドーセット」

「やはり……」

二人の男達は黙り込んだまま、じつとその場に坐っていた。

「サラはまだ忘れられないんです、昔の恋人を」

とドノバン先生は言った。「それに気付くべきでした」

「それ程愛していたということか……」

「命を賭けていたのでしょうか。それにショーンの父親ですから」

「けれども」と伯爵は口を挟んだ。「第二の人生を模索すべきなのです、オーウェル先生は。もつと幸せになるべきなのに！」

「あなたがそんな言葉をお吐きになるとは！」

と、ややイラついたドノバン先生は、この身分の高い恋敵に向って言い放った。

「あなたには、所詮許婚が居られるはずで、気位の高い金持ちのね」

「誤った選択でした」と伯爵も負けずに率直に言って、ドノバン先生を見返す。

「それを今悔いています。けれどもまだ遅くは無い！」

「選択は、サラに任せましょう」

ドノバン先生は、やっと落ち着いて言う事が出来た。

「けれども、僕は彼女を誰にも負けないほど愛しているんです！」

この言葉は、ドノバン先生の意地だった。

「きっと彼女は戻って来ます。僕は待ちます！　きっと戻って来るってね」

12

12

「久し振りの晴れの日だわ！」

「いそいそしながら、メアリーはバスケットにサンドイッチと小さな青いリンゴを二個入れた。」

側にはドリュウがマイラを抱き上げながら、心配そうな顔付きで立っていた。何か言いたいのだが、けれども言葉は出て来ない。

「大丈夫よ、ドリュウ」とメアリーは顔を上げもせず、毅然と言った。「あなたの心配は分かっているつもりだけど……でもサラの気が変わるのが嫌なの。わたし、もう何年もこの日を待っていたんですもの。もうお腹も安定期に入っているし、お天気も素晴らしいし！　ね、心配しないで、あなた……」

「あ……うん」とドリュウは躊躇いがちに答えた。「気を付けてな」「ええ、大丈夫！　それよりもマイラ、ちょっとだけパパと一緒に居てね」

メアリーは幼い娘の頬にチュツとキスをした。

「すぐ戻ってくるから良い子にしてるのよ」

「うん、ママ」とマイラはつぶらな瞳で答えた。その燦としたような紫色の瞳が、陽光にキラキラ反射する。

ツカツカという小さな靴音がして、二階からサラが降りて来た。昨日の服が乾いていないので、義妹メアリーの服を着ているが少し大きいのかブカブカしていた。けれどもそれは思いがけなく似合っていた。

サラは降りて来るとドリュウの前に立ち、もじもじと両手を合わ

せたり閉じたりした。

「ごめんなさい、ドリュー。少しだけ愛する奥様をお借りしますわ」  
「ついでにわたしの服もお貸ししているけどね」

とメアリーは快活に微笑んだ。「でも、案外合っているのね、不思議な事に」

「行つて来て下さい。粗末だから驚かれるといけませんが、あれが精一杯で」

「いえ、いいのよ、ドリュー」とサラは静かに遮った。「お墓があるだけでも、わたしは救われますの」

「この人の石工の腕前は、この辺りじゃ評判なのよ」  
とメアリーは愛する夫の腕を取った。

「そうね、きつと……きつと立派なのだわ」

そう言ったものの、サラの胸は詰っていた。行つていいのかどうか、今この瞬間にも躊躇していたのだ。けれども、今度いつここに来られるのかすら怪しい。勇気を振るわなければならない時が来たのだ……。

「じゃあ、出かけてきます！ さ、サラ、行きましょ」

「え、ええ」

メアリーの一声でサラは身をしゃんとして、外套を羽織ると、メアリーと共に1頭立ての馬車に乗り込んだ。

メアリーは少しだけ家族に手を振った。妻が夫にするさり気ないその仕草も、サラには許されない仕草なのだろうか……。嫉妬に近い感情が湧き出でた。

けれどもサラはそういう自分の気持ちを封じ込めると、  
「ごめんなさいね、メアリー。でもありがたいわ」と礼を言った。  
メアリーは黙って微笑むと、手馴れたように手綱を引く。

馬車はガラガラと、けれども至極ゆつくりと田舎道を走り出した。

〓 〓 〓

「本当は……少し怖いの」と暫くしてサラは正直にポツンと言った。  
「わたしもよ、お義姉様」とメアリーは振り向かずに、真っ直ぐ前方を見つめながら答える。

「え？」

「途中、ドーセットを通るの。それがいつも辛くて、わたし達も滅多に行かないのよ、本当は。だからお義姉様も……お辛いでしょ？」

「懐かしいけど、でもやつぱり」

そこまで言くと、サラは黙り込んだ。

「秋だから花も無いわね」

しばしの沈黙のあと、やっとサラは言った。

「わたし……明日は帰ります。息子のショーンも戻って来るし、運命を避けることなどできないのよ。嫌でも立ち向かわなければ」

「ところで、ショーンはボーイソプラノですってね。何を歌うの？」

「色々よ」とサラはショーンの話になると、少し心が晴れて微笑んだ。「今は、メンデルスゾーン氏の『鳩の翼』っていうの。ご存知？」

「ごめんなさい、よく知らないのよ」

「ステキな歌なのよ」

「少しだけ歌って下さる？」

「あら……わたし、歌は下手なの。でも、こんな感じがしら？」

O F O R T H E W I N G S O F A D O V E  
F A R A W A Y , F A R A W A Y W O U L D R O V E ,

IN THE WILDERNESS BUILT MEAN  
EST,  
AND REMAIN THERE FOR EVER AT R  
EST

（おお、鳩の翼で

どこか遠い 遠い所に さすらい

荒野の中に わたしに作られた 巣で

そして とこしえに そこで 休まん）

ごめんなさい。ここまでしか、覚えていないわ」

「ステキな曲ね。宗教曲？」

「ええ、多分。詩篇から取られているみたいなの」

「その箇所なら、わたし知ってる」

とメアリーは思いがけないことを言った。

「詩篇55編なのよ」

「そう……なの？」

「ええ。こういう意味。彷徨っている自分のために、神様が荒野の中に巣を作られたの。そして鳩の翼でそこまで導かれ、そこでとこしえに休ませて下さいって、そういう意味なのよ。昔、家庭教師をしていた頃、その子供達に説教したことがあるわ」

彷徨っている自分を、鳩の翼で連れて行ってくれる……。鳩の翼で……。

ああ、そうだったの！ これは何かの啓示ね！ そうだったのね！

サラはやつと納得した。そして改めて力と光を与えられた事を感じ

じた。

もう何も怖くない。ここに導かれたのは自分の意志ではなく、神様の導きだったのだ……。そう思うと心が軽くなった。

サラは微笑んだ。

あなたの所に来たのは、わたしの意志だけではなかったのだわ……。　

「もう直ぐよ、お義姉様」

そう言つと、メアリーはサラにキラキラ輝く視線を向けた。

その場所はひっそりした窪地に在った。

馬車を止めたメアリーに促されて、やっとサラはそこに足を下ろした。その途端、この長い12年間の空白が一瞬にして過ぎ去り、やっと見つけた聖なる場所に來たかのように感じた。12年前の若い自分の、瑞々しい思いが、そして愛が胸から溢れ落ちて来る。

けれども不思議な事に、こみ上げてくるような悲しみは感じなかった。既に愛した人はこの世には居ず、この墓の下に骸があるにしても、その魂は天上に昇っている……そう感じたのかも知れない。自分達の愛は本物で、それは永遠の誓いだった。けれどもそれももう過去のこと、過ぎ去った時間は無常だ。

ジェームズの思い出は、永遠に若いままで色あせない。けれども自分は、既に一児の母であり、教師であり、そして何より他者から愛され、そして他者を愛する30近い女なのだ……。

むしろサラは、ジェームズに対して、色恋とは別のもっと崇高な“永遠の愛”を感じた。それはもう男女の仲を超えた、生と死をも超えた愛なのだった。

サラはジェームズの墓に跪いた。

ジェームズ……わたしの不在を許して。でもあなたはいつもわたしの側に居た。そしてわたしと息子ショーンを守ってくれたわ。今はそう心から信じることが出来る。

そしてショーンには類稀な歌の才能を、そしてわたしにはちゃん



とした職をくれた。それをあなたは見ていたのね。

でも、わたしは新たな出発をしたい。そしてあなたがそれを許してくれることを、わたしは信じることができるの。だってあなたはわたしが幸せで居るのを望んでいたのだから。わたしが自棄<sup>やけ</sup>を起こしたり、自分に自信が無くなったりしたら、あなたの息子が悲しむと知っているからよ。

あなたはそういう人だった。だからわたし達、愛し合ったの、そしてわたしは決して後悔しなかったわ……。だからわたしも、これからは後悔しない生き方を選びたい。そうすれば、辛い試練にもきつと耐えて行くことが出来るのね。

「お義姉様」

メアリーの声がした。

「え」

「随分長い間、しゃがんでらしたのね」

「え、そう!？」

時は一瞬のように感じたが、もう日はかなり西のほうに傾いている。

「きつと今までの思いがおりになったのだね。だからずっとこんなに長く……」

「そうなの？」

「兄と話しているみたいだった。でももう時間が」

「そうね」

サラは立ち上がった。涙は無い。どこか清々しい気分だ。

「もう充分話したわ、お兄さんと」

「死者は一時なの。だってわたし達、いずれ又どこかで会うんですもの、この世では会えなくとも」

「そう……」

「帰りましょう?」

「ええ」

サラはメアリーの方を向くと、深く頷いた。

「途中で市場に寄るの。今晚はごちそうよ!」

「そう? でもいいのよ、そんなことは」

「まあっ! わたし、こう見えて結構頑健なんだから」

とメアリーは屈託無く笑う。けれどもその陰にひそむ哀しみをサラは感じた。

サラは微笑み返すと、馬車の方に向った。

ふいに悲しみが押し寄せた。それはどうしようもなく、押し留める事ができない、予定していなかった悲しみだった。

もうジエームズに、あの美しい微笑みに出会うことが出来ない、そう悟ったのかも知れない。もうこの世では、二度と……。

サラはその場に立ち止まった。そして流れ落ちる涙をハンカチで拭った。メアリーは少し離れて、義姉の姿をじっと見つめていた。サラは真実兄を愛していたのだ、と確信した瞬間だった。

それはメアリーにとって、大いなる慰めでもあり救いだったのかもしれない。メアリーはそつと義姉を抱くと、サラはメアリーの肩に顔を埋めた。

「泣かないと思ったのに……やっぱり、だめ」

「それでいいのよ、お義姉様」

兄がなぜこのイングリッシュのサラを愛したのか、メアリーには完全に理解した。そしてサラは、今度は誰かを愛し、そして愛されなければならぬのだ、と聡いメアリーは気づく。

「神様は愛の中に居るの。憎しみの中には決していらっやらないわ」

「そうね……」

メアリーはサラを抱きながら馬車に誘った。もっとサラが好きになっっていく。

「さあ、戻りましょう。きっと家族がお腹すかせて待っているから」  
「ええ」

「サラ！ 彼らは……あなたの家族でもあるのよ」

サラは顔を上げ、ゆつくりと歩み去った。ジエームズとの愛の過去を確認し、そして新たな愛に生きようと誓いつつ。

サラと妻のメアリーが戻って来たその晩は、ご馳走が並んだ。

サラはメアリーの料理の支度を手伝い、共に色々お喋りをして行くうちに、まるで本当の姉妹のように打ち解け、心を通わすことができた。

サラはふと、実の姉のトレイシーを思い出した。常に自分の味方になり支えてくれた姉。幼いショーンを我が子と同じように扱ってくれた優しくも強い精神力の姉……。

不仲になり、音信不通となった両親の様子を時々知らせてくれ、何とかしてもう一度よりを戻そうと努力してくれている姉。そして今は多分、ショーンはレスターのトレイシーの所に行っていることだろう。

けれどもサラは又一人、かけがえの無い妹を持ったのだった。一番下の妹として育ち、その下には妹は居なかったが、この短い間にもサラとメアリーは本当の姉妹のようになったのだ。

それも、ショーンの歌った『鳩の翼』のおかげかも知れない。見えない糸が自分をここに引き寄せ、ジエームズの思い出が自分を導いたように。

「さ、お祈りして食べましょう」

敬けんなカトリック教徒のメアリーは、食前の祈りを唱えると、全員がテーブルを囲んで食べ始めた。今晚だけは、徒弟のアンドリユーも一緒に夕餉を取った。

明日はリバプールに戻るといので、話は弾んだ。すっかり打ち解けたマイラを膝に抱き、サラは小さな幸せに浸っていたその時だ

った、コツコツとドアを叩く音がしたのは。

「今頃どなたかしら？ お客様にしては遅いしね」

「俺が行く」

ドリユーがさつと立ち上がり、戸口の方に向った。何か物音がし、小声だが叫び声が聞こえた。少し言い争っているような会話も、途切れ途切れに聞こえて来る。

「だれ？」とサラが不安そうにつぶやく。

「そうね、どなたなのかしら？」

「俺、行きましょうか？」とすっかり成長して青年らしくなったアンドリユーが立ち上がりかけた頃、その訪問者の足音がツカツカとダイニングの方に近付いて来た。

「ちょっと待つて下さい！」と叫ぶドリユーの声もものともせず、その人物が中に入って来た。

「あつ！ あなたは……！？」とサラが叫ぶ。

「オーウェル先生……やっぱここに……」

サラは立ち上がった。目の前には、レッドフォード伯爵が立っていたのだ！

伯爵はその湖の底のような青い瞳で、サラをじつと見つめた。サラは心の中を覗かれているような、そして又見つめられているという歡びを、何とか隠そうとしながら佇んでいた。

「君を……迎えに来たよ……サラ」

「伯爵様……」とサラはそれだけしか言えないのだ。事情を知っているメアリーは、じつとサラと伯爵を見つめていた。

伯爵はもう40がらみだし、兄のジェームズとは少なくとも外見上は違う。けれどもその情熱を秘めた瞳だけは、似ているかもしれないと感じた。そうでなければ、わざわざここまでやっては来ない

だろう……。

ドリューだけは、少しばかりの怒りをまだ持ちつつ、伯爵を睨んでいた。

「どうして、ここを？」

「ドノバン先生が、見当を付けてくれたんです。多分、ここだと。そしてそれは当たっていた！」

「ドノバン先生が……？」

サラはもう一人の人物を思い出した。自分を心から慕い、真摯な眼差しを持った誠実な若者を。

その二人が協力して、自分を見つけ出してくれたのだ。

けれども、どちらが今のサラにとって『鳩の翼』で運ばれる憩いの巢（nest）なのか、判断が付きかねていた。共通しているのは、どちらも自分のことを心配し、そして何とかして探し出そうとしてくれたことだ。

それはサラにとって、心強く又生きる場所を見出してくれる愛する人達だった。そして自分を必要としてくれる場所を、喜んで惜しみなく提供してくれる。

「先生、サマンサは先生が居なくなっただ後、わたしに言いました。本当は先生が大好きだったんだと。そしてそれが、甘えや我がままとしてしか表現できなかったんだと、わたしは今頃気付いたというわけです。

是非戻ってきて頂きたい！ サマンサの為にも、そしてわたしの為にも」

「サマンサが、そう言ったのですか！？」

サラは予想もしていなかった事実に驚いた。

「わたしはてっきりサマンサが、わたしのことを嫌っているのだとばかり」

「いや、娘が嫌っていたのは、実は婚約者のエリザベスだったので。だからああいうことをしてしまったという次第で」

「あの人形を……壊してしまった……？」

「そう」と伯爵は率直に答えた。

「伯爵様、どうかこちらへ。お茶でも差し上げますわ」

このメアリーの声で、伯爵は我に返り、控えめに立ってはいるが、このような鄙には稀な美貌の持ち主のメアリーを見つめた。

この女性が、サラの愛する亡き恋人の妹なのだと、伯爵は気づいた。

「失礼致しました。突然お伺い致しまして。けれどもわたしは、ドーセットに宿を取っておりますので、今晚はこれで失礼致します。オーウェル先生が無事だったというだけで、ここに来たかいがあったというものですから」

「誠実な方なのですね、あなた様は」とメアリーはお世辞ではなくそう言った。

「いや……それは……」

伯爵は口ごもる。

「ありがとうございます」とサラは静かに答えた。「わたしも明日戻る所でした」

「それでは、わたしはこれで」と伯爵は乱れた髪に、帽子を被ると一礼した。

「あ、わたし、お見送りに行きますわ」  
サラの申し出に、皆一様に驚いた。

〓 〓 〓

「どうなんだろうね、メアリー。彼らの行く末は？」

サラと伯爵が闇に消えた後、ドリュールがボソツと呟いた。

「さあ」とメアリーも曖昧に答える。「それは神様が決めて下さるわ。でも、あの方なら、兄も喜んでいると思うの。位は高いけれど、真心をお持ちだから」

「そうかな？ 俺は信用できない、ああいう種族はね。所詮、手の届かない相手じゃないかな、と思うんだよ」

ドリュールはフーッと溜息をつく。

「けど、サラは幸せになるべきなんだ。そうであって欲しい。心からね」

＝  
＝  
＝

日が翳るのが遅い薄暗がりの中を、サラと伯爵は何も話さずに歩いていた。

「サラ……もう暗いからこの辺で」

と伯爵は立ち止まると、振り向いた。「突然で済まない」

「いいえ。わたし……とても嬉しかったんです。でも、言葉が出てこなくて」

「サラ！」と伯爵は激情に駆られて言うと、サラをぐっと抱き寄せた。そしてサラが何かをする暇もなく、サラの唇を奪った。

長い間貪るように伯爵はキスをし続け、そしてようやく離れた。けれどもその腕はサラの細い腰をがっしりと掴んだままだ。

サラは押し寄せて来る愛欲に、っただけ喘いでいた。身体が伯爵を欲するが、心はどこか拒んでいる。そんな複雑な気持ちのまま、伯爵の胸に身を預けた。

「サラ……実はエリザベスとの婚約は破棄してきた」

「え！？」

「結婚してくれ」



「……………」

サラは余りの驚愕に、我を忘れて伯爵の暗い目を覗き込んでいた。  
「でも……………」

「数々の障害があるのは承知している」と伯爵は穏やかに微笑む。

「けれども、自分を偽ることなど、もう出来ない」

「わたし……………幸福です。でも！」とサラは顔を毅然と上げた。

「もう少し待って下さいませ」

「いつまでも待つよ」と伯爵は答えた。「君が本当に、イエスと言  
うまで」

「あなたを愛してはいるんです。でも愛だけでは乗り越えられない  
ものがあることを、以前嫌と言うほど知ったので……………それで……………」  
「分かっている」

そう言うつと、伯爵はサラの眼鏡を外し、「サラ。君は可愛い人だ  
ね」と囁くなり、再び激しい口付けをした。サラもまた、情熱の赴  
くままに応えた。

「そしてこれだけは信じて欲しい。わたしもまた、君を愛している  
と！」

「ええ……………信じていますわ」

サラの目から一筋の涙が、宝石のようにこぼれ落ちた。

サラは、愛を成就させるのには、再び異なつた困難が目の前に立  
ち塞がっているのを知っていた。けれども、サラはもう一度運命に  
挑戦しようと誓ったのだ。

それはかつて愛したジエームズとの誓いを秘めつつも、新たな  
愛に生きる為に。どこかに“憩いの場所”があるのを信じて。

終わり



## 14（後書き）

長く続けてきたこの物語を、これで終えるつもりです。今まで読んでくださった方々には、深く御礼申し上げます。ありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4013f/>

---

BLIND + LOVE

2010年10月10日04時59分発行